

佐久市

KOYAMANOKAMI

小山の神B遺跡

TAKAO

高尾A遺跡

TAKAOKOFUNGUNGOGOFUN

高尾古墳群5号墳

ODARE

尾垂遺跡

ODAREKOFUN

尾垂古墳

DOGEN

洞源遺跡

ARAJOSEKI

荒城跡

GETUMEISAWAIWAKAGE

月明沢岩陰遺跡群

中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7

—佐久市内7—

2019. 9

国土交通省関東地方整備局
長野県埋蔵文化財センター



尾垂古墳出土 直刀

例 言

- 1 本書は、長野県佐久市に所在する以下の8遺跡にかかわる発掘調査報告書である。

小山の神B遺跡	長野県佐久市小宮山字布替戸 647 ほか
高尾A遺跡	長野県佐久市前山字高尾 893-1 ほか
高尾古墳群 5号墳	長野県佐久市前山字高尾 905-2 ほか
尾垂遺跡	長野県佐久市前山字尾垂 1241-2 ほか
尾垂古墳	長野県佐久市前山字尾垂 1242-2
洞源遺跡	長野県佐久市前山字洞源 1368-1 ほか
荒城跡	長野県佐久市前山字鷲林 1456-1 ほか
月明沢岩陰遺跡群	長野県佐久市前山字鷲林 1456-1 ほか
- 2 発掘調査は、中部横断自動車道建設工事に伴う記録保存調査として、一般財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。委託契約等については第1章を参照願いたい。
- 3 調査の概要は、長野県埋蔵文化財センター刊行の『長野県埋蔵文化財センター年報』26～35ほかで紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。
- 4 本書で使用した地図は、国土地理院発行の地形図（1：25,000、1：50,000）、佐久市基本図（1：2,500）をもとに作成した。
- 5 本書で扱っている国土座標は、国土地理院の定める平面直角座標系第Ⅷ系の原点を基準点としている。座標値は日本測地系を用いている。
- 6 発掘調査・整理作業にあたっては、以下の機関・諸氏に業務委託もしくは御指導を得た。（敬称略）

○業務委託

火山灰分析	パリノ・サーヴェイ株式会社（2011年度：小山の神B遺跡、高尾A遺跡）
黒曜石産地推定	望月明彦（2012年度：高尾A遺跡）
樹種同定	パリノ・サーヴェイ株式会社（2014年度：洞源遺跡）
年代測定	株式会社加速器分析研究所（2011年度：小山の神B遺跡、2013年度：小山の神B遺跡、高尾A遺跡、高尾古墳群5号墳 2014年度：洞源遺跡、2016年度：尾垂遺跡）
石器展開写真	株式会社アルカ（2012年度：高尾A遺跡）
石器実測・トレース	株式会社アルカ（2018年度：小山の神B遺跡、高尾A遺跡、尾垂遺跡、洞源遺跡）
遺物写真撮影	信毎書籍印刷株式会社（2018年度：小山の神B遺跡、高尾A遺跡、高尾古墳群5号墳、尾垂遺跡、尾垂古墳、洞源遺跡）

○調査指導

- 中世遺物・遺構調査指導 時枝 務 立正大学教授（2016年度：尾垂遺跡）
仏教関連遺物調査指導 時枝 務 立正大学教授（2017年度：尾垂遺跡）
製鉄関連遺物・遺構調査指導 村上恭通 愛媛大学教授（2017年度：洞源遺跡）
人骨・動物骨調査指導・鑑定 茂原信生 京都大学名誉教授
本郷一美 総合研究大学院大学准教授
櫻井秀雄 獨協医科大学技術職員
（2014年度：高尾古墳群5号墳、2016・28・19年度：高尾古墳群5号墳、尾垂遺跡、尾垂古墳）
地質調査指導 寺尾真純 岩村田高等学校教諭（2011年度：小山の神B遺跡）

- 7 発掘調査および報告書刊行にあたり、以下の方々・機関に御指導、御協力いただいた。氏名を記して感謝の意を表す。（敬称略）

富沢一明 佐久市教育委員会 佐久考古学会 長野県立歴史館
長野県遺跡調査指導委員会

（戸沢充則・会田 進・小野 昭・桐原 健・工楽善通・笹澤 浩・高橋龍三郎・丸山徹一郎）

長野県文化財保護審議会 史跡・考古資料部会

（会田 進・市澤英利・小野 昭・笹澤 浩・高橋龍三郎）

- 8 発掘作業・整理作業の担当者等は第1章第4節に記載した。

- 9 本書全体の編集は贅田明が行い、綿田弘実・岡村秀雄が校閲し、平林彰が総括した。

執筆分担は下記のとおりである。

平林 彰：第1章

岡村秀雄：第2章、第9章

上田 真：第4章第3節3、第6章第2節3（2）・第6節（古代）

若林 卓：第5章第3節・第6節（高尾古墳群5号墳）、第6章第2節3（3）・（4）・第3節・第6節
（尾垂古墳・中世）

綿田弘実：第6章第2節2・3（1）、第7章第2節3（3）

谷 和隆：第5章第2節2・第6節（旧石器）

贅田 明：上記以外

なお、第5章第5節、第6章第4節は茂原信生氏、本郷一美氏、櫻井秀雄氏より玉稿を賜った。

- 10 本書に添付したDVDには、以下の内容を収録した。

自然科学分析報告書、遺物観察表、その他。

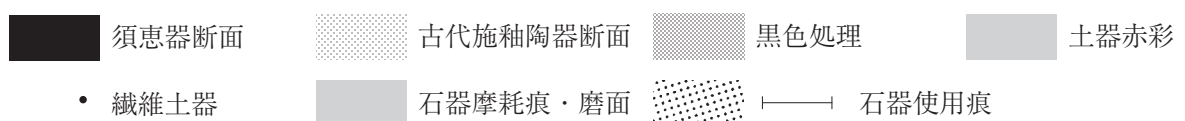
凡 例

- 1 遺構番号は、遺構種ごとに付番してある。発掘作業で欠番にしたもの、整理作業において遺構と認定しなかったため欠番としたものがある。
- 2 遺物番号は、主に材質に基づく分類による遺物種ごと、図版ごとに付番してある。遺物番号は、本報告の本文・図表・写真に共通する。
- 3 本書に掲載した実測図および遺物写真の縮尺は、原則として下記のとおりである。
 - (1) 遺構実測図
竪穴建物跡、掘立柱建物跡 1：80 土坑、被熱部 1：40、1：60
溝跡 1：40、1：80 遺構内部施設・遺物微細 1：40
 - (2) 遺物実測図
土器・土器拓影・陶磁器 1：3、1：4、1：6 土製品 2：3、1：4
石鏃等小形石器・装身具 2：3 石斧・磨石・敲石・凹石・砥石など 1：3
石皿 1：4、1：6 金属製品 2：3、1：2
 - (3) 遺物写真
原則として遺物実測図と概ね共通であるが、任意縮尺にしているものがある。
- 4 遺物の器種名については細分せず、長野県埋蔵文化財センターが発行した過去の報告書を参考にして一般的な名称を用いた。
- 5 遺物観察表の法量は、() が残存値、〈 〉 が復元値、括弧なしが完存値を示している。
- 6 基本層序および遺構埋土の色調は「新版 標準土色帖 2007 年度版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）」による。
- 7 実測図中のアミカケ等の凡例は以下のとおりである。これら以外の場合は図中に例示した。

(1) 遺構図



(2) 遺物図



目 次

口 絵	
例 言	i
凡 例	iii
目 次	iv
挿図目次	vii
挿表目次	ix
写真目次	ix
第1章 発掘調査の経過	1～14
第1節 調査に至る経過	1～9
1 事業計画の概要	1
2 分布・試掘調査と保護措置の調整	1
3 行政手続の経過	2
4 発掘作業と整理等作業の体制	8
第2節 発掘調査の経過	9～14
1 発掘作業	9
2 整理等作業	11
3 普及啓発活動	11
4 作業日誌抄録	12
第2章 遺跡の位置と環境	15～21
第1節 地理的環境	15
第2節 歴史的環境	15
第3章 発掘調査の方法	22～27
第1節 発掘作業	22～25
第2節 整理等作業	26～27
1 遺物の整理	26
2 記録類の整理	26
3 報告書作成と資料収納	26
第4章 小山の神B遺跡	28～102
第1節 遺跡の概観と調査の概要	28～33
1 遺跡の概観	28
2 調査の経過	28
3 基本層序	30
第2節 縄文～弥生時代の遺構と遺物	34～77
1 概観	34
2 遺構	34

3	遺物	52
第3節	平安時代以降の遺構と遺物	78～96
1	概観	78
2	遺構	78
3	遺物	91
第4節	自然科学分析	97～101
1	炭化種実・種実圧痕同定分析	97
2	放射性炭素年代測定	98
3	火山灰分析	101
第5節	小結	101～102
第5章	高尾A遺跡 高尾古墳群5号墳	103～152
第1節	遺跡の概観と調査の概要	103～108
1	遺跡の概観	103
2	調査の経過	103
3	基本層序	107
第2節	高尾A遺跡	109～133
1	概観	109
2	旧石器時代の遺構と遺物	109
3	縄文～弥生時代の遺構と遺物	122
4	その他の時代および時期不明の遺構と遺物	133
第3節	高尾古墳群5号墳	134～145
1	概観	134
2	発掘の方法と経過	134
3	墳丘と周溝	135
4	石室	138
5	遺物	143
6	年代と火葬骨について	144
第4節	自然科学分析	146～148
1	放射性炭素年代測定	146
2	黒曜石産地同定分析	146
3	火山灰分析	147
第5節	高尾古墳群5号墳出土の人骨	149～151
第6節	小結	152
第6章	尾垂遺跡 尾垂古墳	153～226
第1節	遺跡の概観と調査の概要	153～156
1	遺跡の概観	153
2	調査の概要と経過	153
3	基本層序	156
第2節	尾垂遺跡	157～202
1	概観	157

2	縄文～弥生時代の遺物	157
3	平安時代以降および時期不明の遺構と遺物	164
第3節	尾垂古墳	203～219
1	概観	203
2	発掘の方法と経過	203
3	墳丘と周溝	204
4	石室	204
5	遺物	211
6	尾垂古墳の年代	218
第4節	尾垂遺跡・尾垂古墳出土の人骨	220～224
第5節	自然科学分析	225
第6節	小結	226
第7章	洞源遺跡	227～246
第1節	遺跡の概観と調査の概要	227～231
1	遺跡の概観	227
2	調査の概要と経過	227
3	基本層序	227
第2節	遺構と遺物	232～243
1	概観	232
2	遺構	232
3	遺物	239
第3節	自然科学分析	244～245
1	樹種同定分析	244
2	放射性炭素年代測定	244
第4節	小結	246
第8章	荒城跡 月明沢岩陰遺跡群	247～249
第1節	荒城跡	247
第2節	月明沢岩陰遺跡群	248～249
第9章	総括	250

写真図版
抄録

挿図目次

- 第1図 中部横断自動車道と調査対象遺跡
第2図 中部横断自動車道と本書所収遺跡
第3図 周辺遺跡分布図（1）
第4図 周辺遺跡分布図（2）
第5図 周辺遺跡分布図（3）
第6図 調査グリッドの呼称
第7図 遺跡範囲・位置図
第8図 トレンチ・調査区配置図
第9図 土層柱状図
第10図 遺構全体図
第11図 1区 遺構分布図
第12図 S B 01・02・03 遺構図
第13図 S B 04・05・06 遺構図
第14図 S B 07・08・09 遺構図
第15図 S B 10・11・12・13・14 遺構図
第16図 S K 05・06・09・12・26・28・31・33・
34・38 遺構図
第17図 S K 39・46・48・51・54・72・74 遺
構図
第18図 S K 75・76・81・82・83・85・86 遺
構図
第19図 S K 96・97・98・104・105・107・108・
113・114・130 遺構図
第20図 S K 121・129・131・132、S F 01 遺
構図
第21図 縄文土器（1）
第22図 縄文土器（2）
第23図 縄文土器（3）
第24図 縄文土器（4）、弥生土器
第25図 縄文時代の石器（1）
第26図 縄文時代の石器（2）
第27図 縄文時代の石器（3）
第28図 縄文時代の石器（4）
第29図 縄文時代の石器（5）
第30図 縄文時代の石器（6）
第31図 縄文時代の石器（7）
第32図 縄文時代の石器（8）
第33図 3・4区 遺構分布図
第34図 S B 15 遺構図
第35図 S B 16・17・18 遺構図
第36図 S B 19 遺構図
第37図 S B 20・21 遺構図
第38図 S B 22・23、S F 02・04・05・06 遺
構図
第39図 S D 01・05 遺構図
第40図 S D 06・07 遺構図
第41図 古代土器（1）
第42図 古代土器（2）、石製品、金属製品・銭
貨
第43図 遺跡範囲・位置図
第44図 トレンチ・調査区配置図
第45図 土層柱状図
第46図 1区 遺構分布図
第47図 中央拡張区・テストピット配置図およ
び土壌サンプル採取地点
第48図 旧石器時代遺物分布図（1）
第49図 旧石器時代遺物分布図（2）
第50図 旧石器時代遺物分布図（3）
第51図 旧石器時代の石器（1）
第52図 旧石器時代の石器（2）
第53図 旧石器時代の石器（3）
第54図 旧石器時代の石器（4）
第55図 旧石器時代の石器（5）
第56図 旧石器時代の石器（6）
第57図 S B 01 遺構図
第58図 S B 01 出土土器
第59図 遺構外出土土器および縄文時代の石器
（1）
第60図 縄文時代の石器（2）
第61図 縄文時代の石器（3）・金属製品
第62図 S D 01 遺構図
第63図 墳丘平面図

- 第 64 図 墳丘断面図
- 第 65 図 石室平面図
- 第 66 図 石室立面図・断面図
- 第 67 図 石室掘方平面図
- 第 68 図 遺物出土状況図
- 第 69 図 出土遺物
- 第 70 図 高尾古墳群 5 号墳出土人骨の歯
- 第 71 図 遺跡範囲・位置図
- 第 72 図 トレンチ・調査区配置図
- 第 73 図 土層柱状図
- 第 74 図 縄文土器・弥生土器
- 第 75 図 石器 (1)
- 第 76 図 石器 (2)
- 第 77 図 石器 (3)
- 第 78 図 遺構全体図
- 第 79 図 遺構分布図 (1)
- 第 80 図 遺構分布図 (2)
- 第 81 図 S B 01・03 遺構図
- 第 82 図 S B 02 遺構図
- 第 83 図 S B 04・07・08 遺構図
- 第 84 図 S B 05・06 遺構図
- 第 85 図 S B 09・10 遺構図
- 第 86 図 S B 12・13・14 遺構図
- 第 87 図 S B 15・16・17 遺構図
- 第 88 図 S D 01・02・03 遺構図
- 第 89 図 S F 03～17 遺構図
- 第 90 図 S K 01・03・14・15・23・30 遺構図
- 第 91 図 S K 99・127・152、S F 18 遺構図
- 第 92 図 S K 153 遺構図
- 第 93 図 S T 01 遺構図
- 第 94 図 古代土器 (1)
- 第 95 図 古代土器 (2)
- 第 96 図 古代土器 (3)
- 第 97 図 古代土器 (4)
- 第 98 図 土製品、中世土器・陶磁器
- 第 99 図 金属製品 (1)
- 第 100 図 金属製品 (2)
- 第 101 図 製鉄関連遺物 (1)
- 第 102 図 製鉄関連遺物 (2)
- 第 103 図 石器・石製品
- 第 104 図 平面図 (第 1 面)
- 第 105 図 平面図 (第 2 面)
- 第 106 図 墳丘断面図
- 第 107 図 石室平面図
- 第 108 図 石室立面図
- 第 109 図 石室掘方平面図
- 第 110 図 玄室内遺物出土状況図
- 第 111 図 土器 (1)
- 第 112 図 土器 (2)
- 第 113 図 金属製品 (1)
- 第 114 図 金属製品 (2)
- 第 115 図 ガラス小玉
- 第 116 図 尾垂遺跡・尾垂古墳出土人骨
- 第 117 図 遺跡範囲・位置図
- 第 118 図 トレンチ・調査区配置図
- 第 119 図 土層柱状図
- 第 120 図 遺構分布図
- 第 121 図 S F 02・06 遺構図
- 第 122 図 S F 01・03・05・07、S K 03、S X 02
遺構図
- 第 123 図 S K 02、S X 01 遺構図
- 第 124 図 製鉄関連遺物出土位置図
- 第 125 図 古墳時代と古代の土器
- 第 126 図 製鉄関連遺物
- 第 127 図 その他の時代の遺物
- 第 128 図 荒城跡と月明沢岩陰遺跡群の位置
- 第 129 図 テストピット配置図

挿表目次

第1表	土木工事のための発掘にかかわる行政手続 (文化財保護法第94条関係)	第18表	S B 01 土器観察表
第2表	調査のための発掘にかかわる行政手続 (文化財保護法第92条関係)	第19表	遺構外出土土器観察表
第3表	埋蔵物の発見にかかわる行政手続(文化財保護法第102・105・108条関係)	第20表	石器観察表
第4表	受委託契約等の経過	第21表	石器の器種と出土点数
第5表	周辺遺跡一覧	第22表	石器の器種別の石材(全体)
第6表	土坑一覧表	第23表	石器の器種別の石材(S B 01)
第7表	縄文土器・弥生土器観察表	第24表	分析試料と測定年代
第8表	石器の器種と出土点数	第25表	時代別黒曜石産地組成
第9表	石器の器種別の石材	第26表	高尾古墳群5号墳出土の人骨同定リスト
第10表	石器観察表	第27表	高尾古墳群5号墳出土人骨の歯の大きさ
第11表	平安時代以降の土坑一覧表	第28表	縄文土器・弥生土器観察表
第12表	平安時代以降の被熱部一覧表	第29表	石器観察表
第13表	古代土器観察表	第30表	尾垂遺跡・尾垂古墳出土の人骨同定リスト
第14表	炭化種実・種実圧痕同定分析結果	第31表	放射性炭素年代測定結果
第15表	多量の種実を含む土器の県内事例	第32表	羽口観察表
第16表	分析試料と測定年代	第33表	鉄塊系遺物観察表
第17表	石器観察表	第34表	鉄滓観察表
		第35表	樹種同定結果
		第36表	分析試料と測定年代

写真目次

P L 1	小山の神B遺跡	P L 11	高尾A遺跡
P L 2	小山の神B遺跡	P L 12	高尾A遺跡
P L 3	小山の神B遺跡	P L 13	高尾A遺跡
P L 4	小山の神B遺跡	P L 14	高尾古墳群5号墳
P L 5	小山の神B遺跡	P L 15	高尾古墳群5号墳
P L 6	小山の神B遺跡	P L 16	尾垂遺跡
P L 7	小山の神B遺跡	P L 17	尾垂遺跡
P L 8	小山の神B遺跡	P L 18	尾垂遺跡
P L 9	小山の神B遺跡	P L 19	尾垂遺跡
P L 10	小山の神B遺跡	P L 20	尾垂遺跡

P L 21 尾垂遺跡
P L 22 尾垂遺跡
P L 23 尾垂遺跡
P L 24 尾垂遺跡
P L 25 尾垂古墳
P L 26 尾垂古墳

P L 27 尾垂古墳
P L 28 尾垂古墳
P L 29 尾垂古墳
P L 30 洞源遺跡
P L 31 洞源遺跡・荒城跡・月明沢岩陰遺跡群
P L 32 洞源遺跡

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至る経過

1 事業計画の概要

中部横断自動車道（以下「中部横断道」という。）は、静岡県清水市の新東名道新清水ジャンクション（以下「JCT」という。）を起点に、山梨県甲斐市の双葉JCTと北杜市の長坂JCTの間で中央自動車道に合流し、長坂JCTより分岐北上したのち小諸市で上信越道佐久小諸JCTに連絡する、総延長約132kmの高規格幹線道路である。

この道路は、太平洋側と日本海側を結ぶ広域的な高速ネットワークを形成するとともに、佐久地域においては国道141号を補完して地域間交流や地域開発を促進させ、救急医療体制への支援や物流の効率化を図る目的で、1991（平成3）年に佐久小諸JCTと八千穂高原インターチェンジ（以下「IC」という。）間を基本計画路線として決定した。1998年4月、日本道路公団に施工命令が下され、佐久小諸JCTと佐久南IC間の工事を進めてきたが、2003年12月には、中部横断道佐久南ICと八千穂高原ICの延長14.6km区間について国土交通省の新直轄方式による事業化が決定し、佐久白田トンネルの掘削を皮切りに本体工事が本格化した。その後、本線脇13か所に調整池の設置、佐久白田ICと佐久穂ICの設置等が追加され、2018年4月28日に供用を開始した。

2 分布・試掘調査と保護措置の調整

1991（平成3）年の基本計画路線決定を受けて、長野県教育委員会（以下「県教委」という。）は、当該区間の南北予想ルート幅1kmに所在する埋蔵文化財包蔵地の存否等を確認するため、1994年度に地元教育委員会の協力を得て踏査を実施した（県教委1997）。その後、事業計画が進行し、佐久南ICと八千穂高原IC間のルートがほぼ確定したことを受けて、1998～2000年度に分布調査を実施し、保護措置を講ずべき埋蔵文化財包蔵地や試掘調査の対象とすべき箇所を選定を行った（県教委2000・2003）。佐久南IC以南については、2004年度に改めて対象地の現況調査を実施するとともに、2012年度にかけて順次試掘調査を実施し、埋蔵文化財包蔵地の範囲と内容の確認を行った（県教委2007・2010・2013）。

本報告書にかかわる佐久市小宮山・前山地区の本線ルート上は、1998年度と2000年度の分布調査および2004年度の現況調査で小山の神B遺跡、高尾A遺跡、尾垂遺跡、洞源遺跡の4か所を確認し、小山の神B遺跡の隣接地と高尾A遺跡の間および高尾A遺跡と尾垂遺跡の間は、試掘調査による遺跡の有無確認が必要となった。

2009年から10年にかけて県教委は、小山の神B遺跡の隣接地と高尾A遺跡の間、小山の神B遺跡と高尾A遺跡の間および高尾A遺跡と尾垂遺跡の間を相次いで試掘調査し、小山の神B遺跡については周知の埋蔵文化財包蔵地の北側から遺構・遺物を確認したため範囲を広げることになった。一方、小山の神Bと高尾A遺跡の間および高尾A遺跡と尾垂遺跡の間は、新たな埋蔵文化財は存在しないことを確認している。

一方、佐久市教育委員会（以下「市教委」という。）は、平成の合併に伴う市内全域の埋蔵文化財包蔵地について悉皆調査を行い、2007年に結果を公表した。これにより、前山地区の荒城跡が中部横断道の建

設に影響することが明らかになった。さらに、2011年県教委と市教委は、1971年に「弥生式土器と共伴し、数体の人骨片と、人歯牙を加工した装飾品が発見された」（西沢・小松 1978）月明沢遺跡にかかる踏査を行い、同年5月「月明沢岩陰遺跡群」として範囲を確定した。

以上の結果、本線建設に関わり、小山の神B遺跡、高尾A遺跡、尾垂遺跡、洞源遺跡、荒城跡、月明沢岩陰遺跡群の6か所が保護対象となった（第1・2図）。

県教委は、市教委や事業主体である国土交通省関東地方整備局長野国道事務所（以下「長野国道」という。）と調整会議を重ね、荒城跡は当面破壊を免れるが、本線の工事等によって破壊される恐れのある5つの埋蔵文化財包蔵地について、本発掘調査による記録保存を図ることを決定した。荒城跡はその後、施工方法の変更により埋蔵文化財の保護に影響が出ることが判明し、記録作成のための発掘調査を行うよう保護措置が変更された。

また、今回の開発事業が広域の市町村にまたがり、かつ大規模であるため、佐久小諸JCTと佐久南IC間に引き続き、国土交通省関東地方整備局（以下「関東地整」という。）が県教委および（一財）長野県文化振興事業団（以下「事業団」という。）と埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書を締結した上で、関東地整が事業団に本発掘調査を委託し、長野県埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という。）が実施する旨の合意を得た。

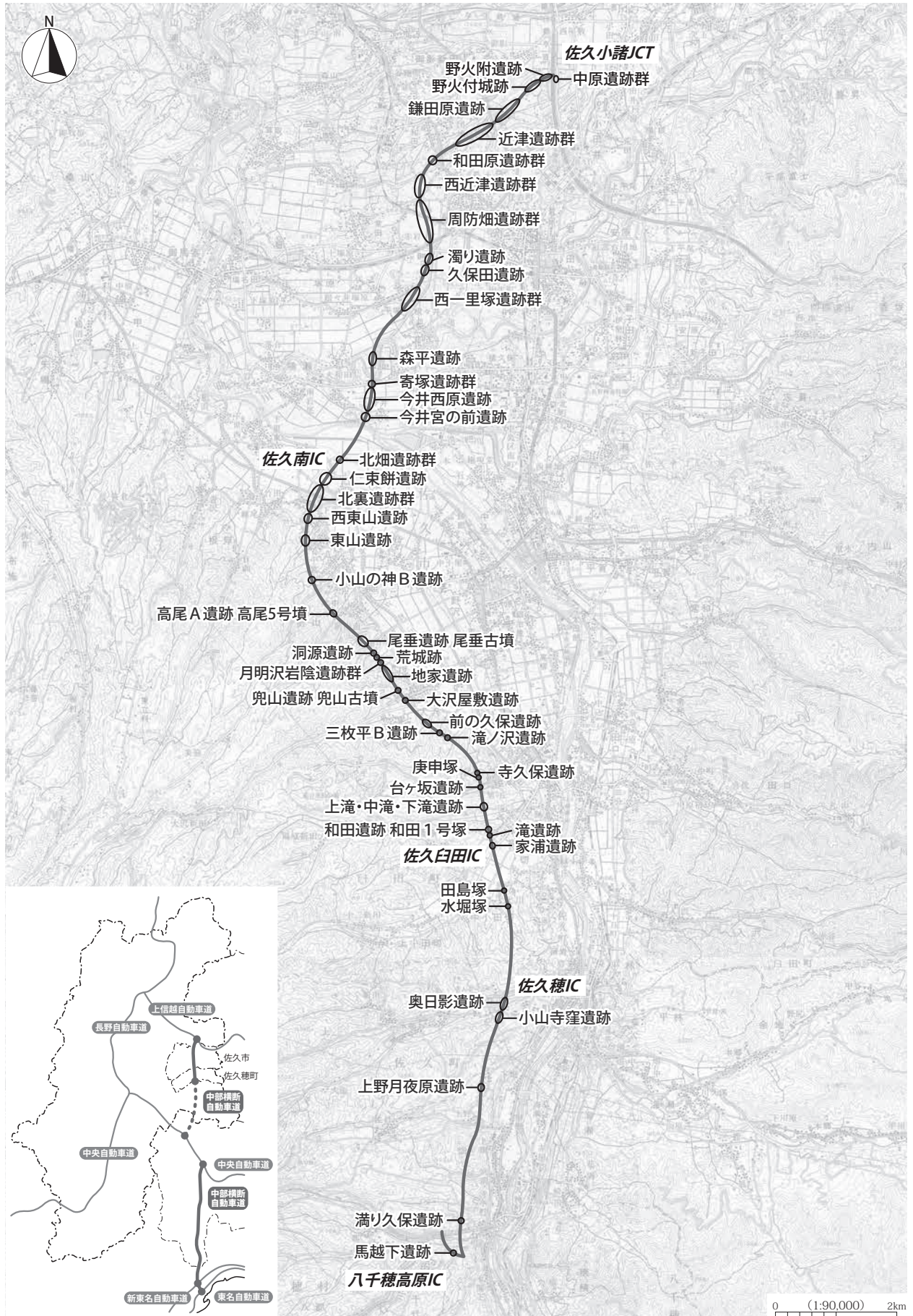
なお、発掘調査事業の実施中、2012年度には洞源遺跡、2013年度は高尾A遺跡の付帯工事箇所について、県教委、市教委、長野国道および埋文センターの四者で保護協議が行われ、本発掘調査の結果や工事内容から判断して、いずれも埋文センターが工事立会を行うことで合意を得ている。

3 行政手続の経過

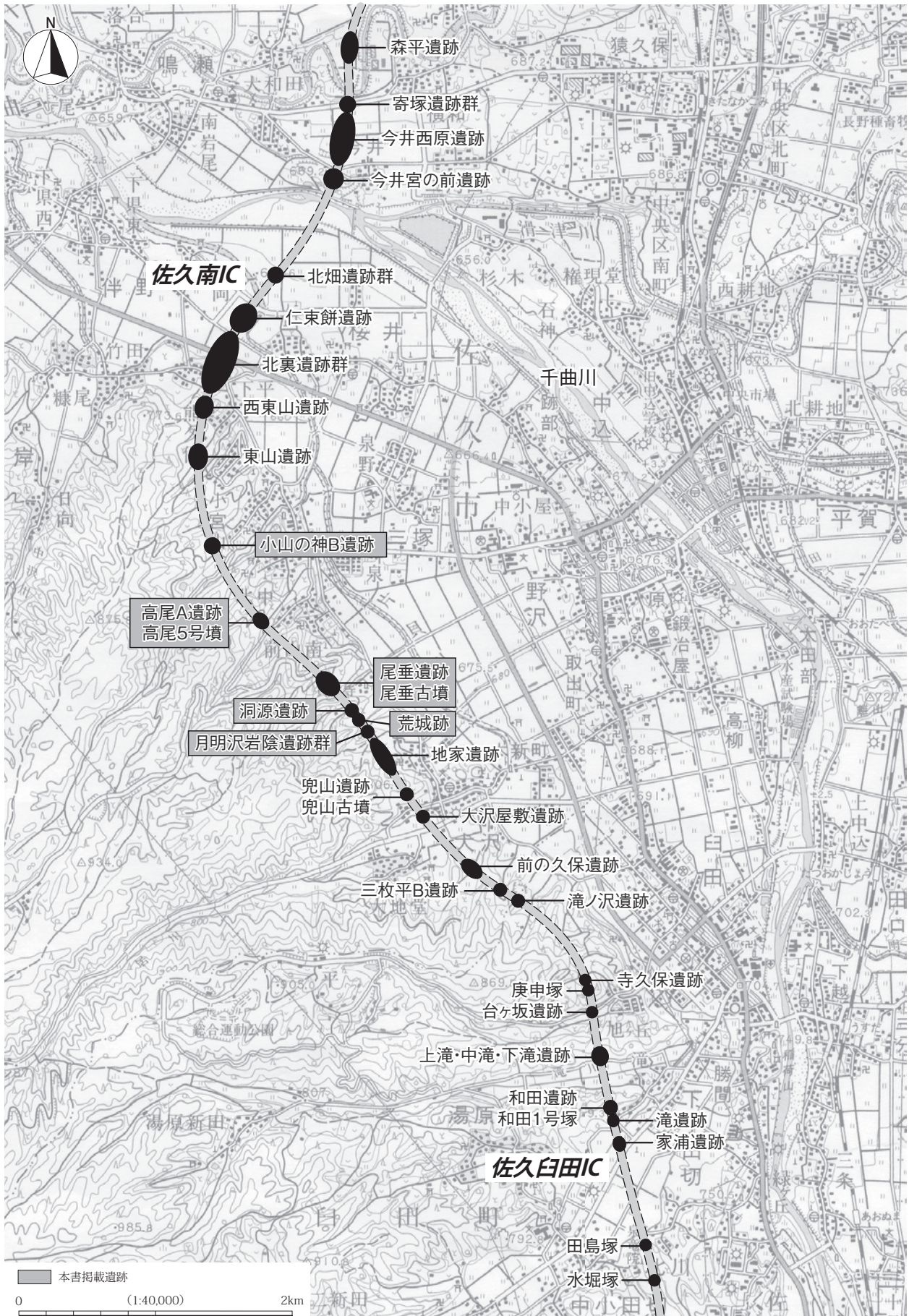
本報告書掲載遺跡の発掘調査にかかわる行政手続については第1表から第3表のとおりである。

第1表 土木工事のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第94条関係）

年月日	文書番号	施行者	文 書 名	あて先	備 考
2006. 4. 5	18 長国調第 14 号	長野国道	土木工事に伴う埋蔵文化財発掘通知	県教委	小山の神B・高尾A・尾垂・洞源での土木工事を通知
2006. 6. 8	18 教文第 18-33 号	県教委	周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について	長野国道 埋文センター	埋文センターが上記遺跡の発掘調査を受託するよう通知
2012. 7. 3	24 国関整長国管二第 42 号	長野国道	土木工事に伴う埋蔵文化財発掘通知	県教委	洞源遺跡での付帯工事を通知
2012. 7.10	24 教文第 8-73 号	県教委	周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について	長野国道 埋文センター	埋文センターが上記遺跡で工事立会を行うよう通知
2012. 7. 3	24 国関整長国管二第 42 号	長野国道	土木工事に伴う埋蔵文化財発掘通知	県教委	荒城跡での土木工事を通知
2012. 7.10	24 教文第 8-74 号	県教委	周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について	長野国道 埋文センター	埋文センターが上記遺跡で工事立会を行うよう通知
2013. 7.18	24 国関整長国工第 69 号	長野国道	土木工事に伴う埋蔵文化財発掘通知	県教委	高尾A遺跡での付帯工事を通知
2013. 8. 1	25 教文第 8-108 号	県教委	周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について	長野国道 埋文センター	埋文センターが上記遺跡で工事立会を行うよう通知



第1図 中部横断自動車道と調査対象遺跡



第2図 中部横断自動車道と本書所収遺跡

第2-1表 調査のための発掘にかかわる行政手続(1)(文化財保護法第92条関係)

年月日	文書番号	施行者	文 書 名	あて先	備 考
2009. 3.26	20 長埋第 1-18 号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	高尾A遺跡
2009. 4. 9	21 教文第 6-1 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2009. 8. 7	21 長埋第 4-4 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	高尾A遺跡 7,170㎡
2010. 2. 5	21 長埋第 1-11 号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	月明沢岩陰遺跡群
2010. 2.16	21 教文第 6-14 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2010. 3.31	21 長埋第 4-17 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	月明沢岩陰遺跡群 520㎡
2010. 7.14	22 長埋第 1-4 号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	小山の神B遺跡
2010. 8.10	22 教文第 6-7 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2011. 1. 7	22 長埋第 4-10 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	小山の神B遺跡 250㎡
2011. 3. 1	22 長埋第 1-14 号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	高尾A遺跡
2011. 3.22	22 教文第 6-18 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2012. 2.16	23 長埋第 6-6 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	高尾A遺跡 1,500㎡
2011. 4.25	23 長埋第 3-2 号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	小山の神B遺跡
2011. 5.13	23 教文第 6-3 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2011.12.21	23 長埋第 6-14 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	小山の神B遺跡 2,900㎡
2013. 3.11	24 長埋第 1-15 号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	尾垂遺跡
2013. 3.26	24 教文第 6-21 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2013. 8.26	25 長埋第 4-4 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	尾垂遺跡 3,640㎡
2013. 4.12	25 長埋第 1-1 号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	高尾A遺跡
2013. 5.10	25 教文第 6-1 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2013. 9.18	25 長埋第 4-5 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	高尾A遺跡 5,280㎡
2013. 5.28	25 長埋第 1-2 号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	小山の神B遺跡
2013. 6. 7	25 教文第 6-2 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2013.12.27	25 長埋第 4-13 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	小山の神B遺跡 6,250㎡
2013. 8.23	25 長埋第 1-5 号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	洞源遺跡
2013. 9. 4	25 教文第 6-8 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2013.12.27	25 長埋第 4-14 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	洞源遺跡 1,600㎡
2014. 4. 8	26 長埋第 14-1 号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	高尾A遺跡

第1章 発掘調査の経過

第2-2表 調査のための発掘にかかわる行政手続(2)(文化財保護法第92条関係)

年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2014. 4.25	26 教文第 6-1 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2014. 7. 1	26 長埋第 17-4 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	高尾A遺跡 440㎡
2014. 6.23	26 長埋第 14-6 号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	洞源遺跡
2014. 7. 4	26 教文第 6-6 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2014.11. 6	26 長埋第 17-9 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	洞源遺跡 3,800㎡
2014.10.15	26 長埋第 14-9 号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	尾垂遺跡
2014.11. 4	26 教文第 6-12 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2014.12.12	26 長埋第 17-14 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	尾垂遺跡 2,140㎡
2015. 1.16	26 長埋第 14-10 号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	尾垂遺跡
2015. 1.28	26 教文第 6-13 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2015.12.17	27 長埋第 4-10 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	尾垂遺跡 4,000㎡
2015.10.16	27 長埋第 1-6 号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	尾垂遺跡
2015.11. 9	27 教文第 6-8 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2015.12.17	27 長埋第 4-11 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	尾垂遺跡 1,000㎡
2015.10.16	27 長埋第 1-7 号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	荒城跡
2015.11. 9	27 教文第 6-9 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2015.12.18	27 長埋第 4-9 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	荒城跡 1,270㎡

第3-1表 埋蔵物の発見にかかわる行政手続(文化財保護法第102・105・108条関係)

年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2009. 8. 7	21 長埋第 2-4 号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	高尾A遺跡 土器・石器 1箱
2009. 8.19	21 教文第 20-45 号	県教委	埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属通知	埋文センター	高尾A遺跡
2011. 8.29	23 長埋第 4-6 号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	高尾A遺跡 土器・石器 3箱
2011. 9.21	23 教文第 20-74 号	県教委	埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属通知	埋文センター	高尾A遺跡
2011.12.21	23 長埋第 4-13 号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	小山の神B遺跡 土器 10箱・石器 18箱ほか
2012. 1. 6	23 教文第 20-121 号	県教委	埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属通知	埋文センター	小山の神B遺跡
2013. 9. 4	25 長埋第 2-4 号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	高尾A遺跡 土器・石器・石製品 3箱

第3-2表 埋蔵物の発見にかかわる行政手続（文化財保護法第102・105・108条関係）

年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2013.10.3	25教文第20-61号	県教委	埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属通知	埋文センター	高尾A遺跡
2013.12.20	25長埋第2-11号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	洞源遺跡 土器1箱
2014.1.16	25教文第20-97号	県教委	埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属通知	埋文センター	洞源遺跡
2013.12.16	25長埋第2-8号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	小山の神B遺跡 土器・石器12箱ほか
2014.1.16	25教文第20-96号	県教委	埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属通知	埋文センター	小山の神B遺跡
2014.7.1	26長埋第15-4号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	高尾A遺跡 土器・石器1箱
2014.7.17	26教文第20-38号	県教委	埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属通知	埋文センター	高尾A遺跡
2014.11.6	26長埋第15-8号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	洞源遺跡 土器・石器・鉄滓6箱
2014.11.17	26教文第20-70号	県教委	埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属通知	埋文センター	洞源遺跡
2014.12.12	26長埋第15-13号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	尾垂遺跡 土器・石器1箱
2014.12.25	26教文第20-87号	県教委	埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属通知	埋文センター	尾垂遺跡
2015.12.17	27長埋第2-9号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	尾垂遺跡 土器・石器等36箱
2016.1.12	27教文第20-84号	県教委	埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属通知	埋文センター	尾垂遺跡

中部横断道の建設に伴う発掘調査は、複数の市町村にまたがる大規模な開発事業である。したがって、調査が複数年度にまたがるとともに調査経費も相当要することから、事業を円滑に推進するため、県教委は関東地整および事業団と協定書を締結することとした。なお、協定書は、発掘調査事業の進ちょくに伴って、2010（平成22）年3月、2016年2月、2018年4月、2019年5月の都合4回変更を行っている¹。

事業団は、協定書の第7条第1項の規定により、年度毎に関東地整と契約を締結し、年度末には第8条第2項の規定により、業務実績報告書を提出してきた。本報告書に掲載した遺跡にかかわる予算は第4表のとおりである。

第4表 受委託契約等の経過

年度	予算	遺跡	備考
2009	381,700,120円	高尾A遺跡、月明沢岩陰遺跡群他18遺跡	発掘作業63,800㎡ 整理作業（佐久南IC以北）
2010	408,924,000円	小山の神B他17遺跡	発掘作業62,947㎡ 整理作業（佐久南IC以北）
2011	367,330,000円	小山の神B遺跡、高尾A遺跡他24遺跡	発掘作業25,688㎡ 整理作業（佐久南IC以北）
2013	233,268,000円	小山の神B遺跡、高尾A遺跡、尾垂遺跡 洞源遺跡他28遺跡	発掘作業33,870㎡ 整理作業（佐久南IC以北）
2014	175,530,000円	洞源遺跡他25遺跡	発掘作業11,751㎡ 整理作業（佐久南IC以北）

1 協定書及び協定締結の経過は埋文センター発掘調査報告121第1章に掲載した。

年度	予 算	遺 跡	備 考
2015	112,850,000 円	尾垂遺跡、荒城跡他 12 遺跡	発掘作業 6,565㎡
2016	77,110,000 円	小山の神B遺跡他 30 遺跡	整理作業
2018	126,991,800 円 うち 51,977,000 円を 2019 年度に繰越	小山の神B遺跡他 30 遺跡	整理作業 報告書刊行

4 発掘作業と整理等作業の体制

本報告書に掲載した遺跡の発掘調査にかかわる作業体制（作業員を含む）は以下のとおりである。

2009（平成 21）年度 発掘作業（高尾A遺跡、月明沢岩陰遺跡群）

所 長： 仁科松男 副 所 長： 阿部精一 調査部長： 平林 彰 担当課長： 大竹憲昭
 調査担当： 藤原直人 中野亮一 （高尾A遺跡）
 廣瀬昭弘 （月明沢岩陰遺跡群）

2010 年度 発掘作業（小山の神B遺跡）

所 長： 窪田久雄 副 所 長： 阿部精一 調査部長： 大竹憲昭 担当課長： 岡村秀雄
 調査担当： 藤原直人 清水梨代

2011 年度 発掘作業（小山の神B遺跡、高尾A遺跡）

所 長： 窪田久雄 副 所 長： 阿部精一 調査部長： 大竹憲昭 担当課長： 岡村秀雄
 調査担当： 黒岩 隆 長谷川桂子 内堀 団 （小山の神B遺跡）
 谷 和隆 長谷川桂子 太田 潤 （高尾A遺跡）
 作 業 員： 川上淳子 高見澤千代 高見澤泰明 高橋三好 緑川うめ子 赤尾香苗 奥平 潔
 神津良太郎 鈴木佳明 秦 茂夫 細萱和美 佐藤由美子 工藤 厚 岩下秀一
 植松和則 柏木貞夫 佐藤 剛 原 綾 原 廣子 木内正幸

2013 年度 発掘作業（小山の神B遺跡、高尾A遺跡、尾垂遺跡、洞源遺跡）

所 長： 窪田久雄 副 所 長： 会津敏男 調査部長： 大竹憲昭 担当課長： 岡村秀雄
 調査担当： 若林 卓 伊藤友久 栗林幸治 （小山の神B遺跡、洞源遺跡）
 若林 卓 伊藤友久 栗林幸治 宮村誠二 （高尾A遺跡、尾垂遺跡）
 作 業 員： 川上淳子 木内正幸 鈴木佳明 高岡清子 高岡義敏 緑川うめ子 山越常夫
 植松和則 熊谷大輔 日向武夫 宮崎未枝子 山口茂弥 渡辺稔秋 佐藤明美
 黒沢俊男 高橋弓子 小倉栄子 横山道子

2014 年度 発掘作業（高尾A遺跡、尾垂遺跡、洞源遺跡）

所 長： 会津敏男 副 所 長： 多城 哲 調査部長： 大竹憲昭 担当課長： 岡村秀雄
 調査担当： 藤原直人 栗林幸治
 作 業 員： 熊谷大輔 高岡清子 高岡義敏 宮崎未枝子 山口茂弥 渡辺稔秋 川上淳子
 佐藤明美 緑川うめ子 小倉栄子 植松和則 鈴木佳明 日向武夫

2015 年度 発掘作業（尾垂遺跡、荒城跡）

所 長： 会津敏男 副 所 長： 多城 哲 調査部長： 平林 彰 担当課長： 岡村秀雄
 調査担当： 藤原直人 上田 真 寺内貴美子 （尾垂遺跡）
 上田 真 岡村秀雄 （荒城跡）
 作 業 員： 赤尾香苗 植松和則 小倉栄子 川上淳子 熊谷大輔 佐藤明美 鈴木春彦
 鈴木佳明 高岡義敏 高岡清子 日向武夫 緑川うめ子 宮崎未枝子 山口茂弥
 高橋弓子

2016年度 整理等作業（小山の神B遺跡他5遺跡）

所 長： 会津敏男 副所長： 竹内 誠 調査部長： 平林 彰 担当課長： 岡村秀雄
 調査担当： 若林 卓 上田 真 水澤教子 伊藤友久
 作業員： 赤川雅俊 伊藤由美 猪俣万里子 岩原英治 柄澤登紀子 窪田 順 小林秀樹
 清水栄子 清水 潔 祖山克彦 高松美法 中島裕子 待井 聖 峯村知佳
 柳原澄子

2017年度 整理等作業（小山の神B遺跡他5遺跡）

所 長： 会津敏男 副所長： 関崎修二 調査部長： 平林 彰 担当課長： 岡村秀雄
 調査担当： 若林 卓 水澤教子
 作業員： 赤川雅俊 荒井君江 岩原英治 窪田 順 祖山克彦 西村はるみ 平林昌子
 堀内慎一 待井 聖 石田和子

2018年度 整理等作業（小山の神B遺跡他5遺跡）

所 長： 会津敏男 副所長： 関崎修二 調査部長： 平林 彰 担当課長： 岡村秀雄
 調査担当： 若林 卓 上田 真 藤原直人 贅田 明
 作業員： 赤川雅俊 荒井君江 伊藤由美 岩原英治 窪田 順 祖山克彦

2019年度 整理等作業（小山の神B遺跡他5遺跡）

所 長： 原田秀一 副所長： 関崎修二 調査部長： 平林 彰 担当課長： 岡村秀雄
 調査担当： 綿田弘実 （課長補佐）上田 真 若林 卓 贅田 明
 作業員： 石田和子 西村はるみ

第2節 発掘調査の経過

1 発掘作業

本報告書にかかわる佐久市小宮山・前山地区の本線ルート上は、県教委による分布調査および現況調査で、小山の神B遺跡、高尾A遺跡、尾垂遺跡、洞源遺跡の4か所が確認された。その後の試掘調査および市教委による埋蔵文化財包蔵地地図の整備により、小山の神B遺跡の範囲が北側に広がり、新たに月明沢岩陰遺跡群や荒城跡も開発によって影響が及ぶ範囲に含まれることとなった。

（1）小山の神B遺跡

小山の神B遺跡は、市教委によって、縄文時代および古代の遺物散布地として登録された遺跡である。当初は、東方向にのびる丘陵の南東斜面から裾部にかけて調査範囲としていたが、2010（平成22）年に実施された県教委の試掘調査の結果、範囲が丘陵頂部まで広がることになった。また、同年に調査範囲の東隣で行われた市教委の発掘調査では、縄文時代前期と中世の遺物が出土している。

2010年は、裾部にあった墓の移転に伴う立会調査を実施したが、遺構・遺物はなかった。2011年は、南東側へ緩やかに傾斜した部分を中心に本格的な調査を実施し、縄文時代前期の竪穴建物跡や土坑群を検出した。土坑に含まれる火山灰分析も実施した。さらに2013年は、丘陵頂部で竪穴建物跡に伴う土坑を検出し、斜面中腹から裾部にかけては平安時代の竪穴建物跡なども見つかった。竪穴建物跡などから出土した炭化物の年代測定を実施した。

(2) 高尾A遺跡

高尾A遺跡は、市教委によって、弥生時代から平安時代に至る遺物散布地として登録された遺跡である。今回の調査範囲は、南西から北東方向にのびる丘陵を直交し、丘陵の頂部、南斜面部、裾部と大きく三つの地形に分かれている。

2009年度の確認調査では、地形に沿う方向にトレンチを入れ、南斜面で旧石器時代の石器群が出土したため、次年度以降の発掘は、同時代の遺物分布と遺構を把握することが主眼となった。また、斜面上部では、縄文時代の遺物が出土した。2011年度の本発掘調査では、南斜面中腹で始良丹沢火山灰降下以前に特徴的な石器群のブロックを検出した。一方、2009年の調査で縄文時代の遺物が出土した斜面上部一帯では、竪穴建物跡を検出した。竪穴建物跡の検出面では縄文時代前期前葉の土器が出土している。周辺に未買取箇所があるため、この地区の本格的な調査は、次年度以降に見送った。なお、丘陵頂部には目立った遺構は見つからなかった。また、火山灰について同定分析を行っている。2013年度の本発掘調査は、前年度までに確認していた斜面上部の遺構調査を中心に行い、縄文時代前期前葉の竪穴建物跡を完掘するとともに、未周知の古墳を確認した。周辺は市教委によって高尾古墳群1～4号墳が登録されているため、新発見の古墳を高尾古墳群5号墳とした。なお、竪穴建物跡の柱穴内および古墳の周溝内から出土した炭化物は、放射性炭素年代測定を実施した。発掘作業の最終年度となる2014年度は、残る丘陵裾部を対象としたが、遺構・遺物とも見つからなかった。

(3) 尾垂遺跡

尾垂遺跡は、北東方向にのびる丘陵の頂部付近の傾斜地とその南側裾部の段丘面状の平坦地に分かれて立地する。2000年に市教委が行った発掘調査では、今回の調査範囲にあたる裾部平坦地の東隣で、中世から近世にかけてのかわらけや陶器が出土し、礎石とも考えられる石が点在していたという。市教委は、伝承に残る龍覚寺の可能性を指摘している。

埋文センターは、2013年にまず丘陵頂部の確認調査を実施したが、遺構・遺物はなかった。続く2014年度は、裾部平坦地を対象に確認調査を実施し、古代の竪穴建物跡や土坑などを検出した。2015年度は、遺構を確認した裾部平坦面を中心に本発掘調査を行った。西側平坦面では竪穴建物跡と土坑、溝で構成される古代の集落跡が広がり、東側平坦面からは、中世以降の礎石建物跡も見つかっている。さらに、東側斜面裾部では未周知の古墳を発見し、尾垂古墳とした。

(4) 洞源遺跡

洞源遺跡は、北東方向にのびる丘陵の南斜面に広がり、市教委によって、縄文時代および古代の遺物散布地として登録された遺跡である。遺跡の南側には小河川を挟んで地家遺跡がある。

2013年度は調査範囲の西側、翌年度は東側の確認調査を実施し、一部トレンチで焼土跡や炭化物を伴う土坑などを検出した。2014年度は、遺構が集中する箇所の本発掘調査を実施し、平安時代の製鉄炉、被熱部、土坑、火床を伴う竪穴状遺構や炭化材が分布する範囲を検出した。製鉄炉からは鉄滓や羽口が、竪穴状遺構からは日常雑器が出土した。製鉄炉跡、竪穴状遺構および炭化材分布地から採集した炭化物は年代測定と樹種同定を行った。

(5) 荒城跡

荒城跡は、佐久市大字前山の山頂にあった中世城館で、伴野氏の城であったと推定されている。調査範囲は、主郭があった山頂から北東側に下った急斜面で、市教委により、小規模の郭が斜面上に存在する可能性が指摘されていた。

2015年の調査では、人工的な地形改変の有無を確かめるため、傾斜が最も緩やかと思われる地点を選んで2m四方の試掘坑を設け、人力で掘下げを行った。その結果、地表から25～55cmで地山の岩盤に達

し、人工的な平坦面や堀切などの遺構は確認できず、出土遺物もなかった。

(6) 月明沢岩陰遺跡群

月明沢岩陰遺跡群は、荒城跡の東端で南面する崖にあり、2009年度に市教委、県教委および埋文センターの踏査で、1971年の調査箇所を再確認した弥生時代の岩陰遺跡である。

2009年度は、遺跡の状況確認を目的として、岩陰部やその周辺に15か所のテストピットを掘削した。調査の結果、周辺を含めて遺構・遺物はなかった。1971年の発掘で岩陰内すべての調査を完了していたものと判断した。

2 整理等作業

(1) 基礎整理作業

発掘作業中および発掘年度の冬期間は、遺跡ごとに記録類の点検や写真整理、遺物洗浄とナンバリングなどの基礎整理作業を実施した。

(2) 本格整理作業

小宮山・前山地区6遺跡の本格整理作業は、2015（平成27）年度に着手し、まずは記録類や遺物の全体量とその内容把握を行った。次に、発掘作業で作成した図面・写真・台帳等は点検・照合し、台帳の不備を整えるとともに、遺構図や土層図等の必要な図面修正を施した。遺物については、保管状況を確認し、種類別に仕分け直し、その上で遺物台帳等の整備を行ったほか、小型石器の注記を行った。

2016年度は、報告書刊行を2018年度末に設定し、先に刊行を予定している大沢地区および白田地区の整理作業を優先した。本報告書掲載遺跡に関しては、尾垂古墳出土の金属製品について応急保存処理を実施し、時枝務氏の鑑定指導を得た。また、出土人骨は茂原信生氏に鑑定指導いただいた。2018年は、編集会議で報告書作成にかかる統一的な方針を固めた上で、遺物について報告書掲載資料の抽出、土器の接合と復元、石器の器種分類と計測、写真撮影、遺構については図面修正とデジタルトレース、仮版組を行い、原稿や遺物観察表等の作成を行った。なお、2017・2018年度の事業予算の関係で、報告書の刊行および収納は2019年度に繰り越した。

3 普及啓発活動

(1) 遺跡見学会および発掘体験等

2011. 6.26	高尾A遺跡見学会		125名
2011.11. 3	小山の神B遺跡見学会		110名
2013. 8. 3	高尾A遺跡、高尾古墳群5号墳見学会		57名
2013.11.13~15	小山の神B遺跡見学会		36名
2014.10. 4	洞源遺跡見学会		98名
2016.11. 7	尾垂遺跡見学会		77名

(2) 展示会および講演会等

2012. 3.17~5.13	小山の神B遺跡 高尾A遺跡	長野県立歴史館	10,659名
	速報展「長野県の遺跡発掘2012」		
2012. 3.24	報告会 小山の神B遺跡	長野県立歴史館	107名
2012. 7.26~8.19	小山の神B遺跡 高尾A遺跡	長野県伊那文化会館	1,438名
	速報展「長野県の遺跡発掘2012」		
2014. 3.21~6. 1	小山の神B遺跡 高尾A遺跡 高尾5号墳	長野県立歴史館	13,547名

第1章 発掘調査の経過

	速報展「長野県の遺跡発掘 2014」		
2014. 7.19～8.24	小山の神B遺跡 高尾A遺跡 高尾5号墳	長野県伊那文化会館	1,602名
	速報展「長野県の遺跡発掘 2014」		
2015. 1.23～2.20	洞源遺跡	長野県埋蔵文化財センター	453名
	速報展「掘るしん in しなのい」		
2015. 5.30～7.12	洞源遺跡	長野県立歴史館	8,281名
	速報展「長野県の遺跡発掘 2015」		
2015. 7.25～8.23	洞源遺跡	長野県伊那文化会館	1,388名
	速報展「長野県の遺跡発掘 2015」		
2015. 9.19～10.18	洞源遺跡	安曇野市立豊科郷土博物館	1,595名
	速報展「長野県の遺跡発掘 2015」		
2017. 2.18～24	尾垂遺跡	長野県埋蔵文化財センター	199名
	速報展「掘るしん in しなのい」		

(3) 調査情報誌等の発行

2011. 3.31	「発掘調査の概要 小山の神B遺跡」『年報』27
2012. 3.31	「発掘調査の概要 小山の神B遺跡 高尾A遺跡」『年報』28
2013. 3.31	「整理作業の概要 高尾A遺跡」『年報』29
2014. 3.31	「発掘調査の概要 小山の神B遺跡 高尾A遺跡 高尾古墳群5号墳」『年報』30
2015. 2.20	「最新調査成果から 洞源遺跡(佐久市)」『信州の遺跡』第6号
2015. 3.31	「発掘作業の概要 尾垂遺跡 洞源遺跡」『年報』31
2016. 3.18	「発掘作業の概要 尾垂遺跡」『年報』32
2017. 7.19	「磬 佐久市尾垂遺跡出土の仏教遺物」
2019. 3.22	「整理等作業の概要 小山の神B遺跡の炭化種実・種実圧痕同定」『年報』35

(4) その他

埋文センター公式ホームページに調査情報を掲載

4 作業日誌抄録

2009(平成21)年度

5月21日	高尾A	確認調査開始	12月7日	高尾A	基礎整理作業開始
5月27日	高尾A	2区4トレからナイフ形石器出土	3月16日	月明沢	確認調査開始
	高尾A	1区8トレから縄文の繊維土器出土	3月29日	月明沢	確認調査終了
7月14日	高尾A	確認調査終了	3月31日	高尾A	基礎整理作業終了

2010年度

9月6日	小山の神B	確認調査開始	12月17日	小山の神B	基礎整理作業開始
9月10日	小山の神B	西側地区確認調査終了	3月31日	小山の神B	基礎整理作業終了
12月13日	小山の神B	東側地区確認調査開始・終了			

2011年度

4月12日	高尾A	2区表土剥ぎ	6月22日	高尾A	2区中央拡張区から台形石器出土 石器群が約3万年前と判明
4月15日	高尾A	3区確認調査開始	6月26日	高尾A	遺跡現地見学会開催
4月20日	高尾A	2区遺構検出開始	7月7日	高尾A	1区確認調査開始
4月26日	高尾A	佐久市立泉小学校6年生発掘体験	7月27日	高尾A	1区竪穴状遺構および柱穴状遺構検出
4月27日	高尾A	2区貝殻状刃器出土			検出面から縄文早期末の土器片出土
5月16日	高尾A	3区遺構がないことを確認し終了	8月2日	高尾A	1区確認調査終了
6月1日	高尾A	2区中央拡張区で旧石器のブロック確認			

8月9日	小山の神B	遺構確認調査開始	12月1日	小山の神B	丘陵裾部の表土剥ぎ
8月22日	小山の神B	市教委須藤隆司氏調査指導	12月7日	小山の神B	丘陵裾部の堅穴建物跡の発掘開始
10月12日	小山の神B	堅穴建物跡の発掘開始	12月21日	小山の神B	発掘作業終了
10月26日	小山の神B	フラスコ状土坑の発掘開始	12月5日	高尾A	基礎整理作業開始
11月3日	小山の神B	遺跡説明会開催	12月22日	小山の神B	基礎整理作業開始
11月21日	小山の神B	丘陵頂部の調査	3月30日	高尾A、小山の神B	基礎整理作業終了

2013年度

5月27日	高尾A	調査開始	8月30日	小山の神B	表土剥ぎ開始
6月20日	高尾A	未周知の古墳を検出	9月2日	小山の神B	遺構検出作業開始
6月25日	尾垂	確認調査開始	9月4日	高尾A	発掘作業終了
7月1日	高尾A	古墳石室がほぼ南北であることを確認 墳丘を巡る三段以上の石列を検出し精査	9月13日	小山の神B	古代の堅穴建物跡検出
7月4日	高尾A	古墳石室の形状を胴張りタイプと推定 床から5cmほど浮いて骨が出土	10月24日	小山の神B	S B 15のカマド2で大きさのそろった土器小片が30点以上出土
7月9日	高尾A	古墳石室の礎床および框石を検出	11月13日	小山の神B	遺跡公開(～15日)
7月11日	高尾A	古墳周溝から須恵器高台坏片出土	12月6日	洞源	確認調査開始
7月18日	高尾A	S B 01 から尖底土器片出土	12月9日	洞源	焼土址を検出
7月22日	高尾A	古墳石室から平安時代の土師器坏が出土 石室再利用の可能性	12月10日	洞源	炭化物が詰まった土坑を検出
8月3日	高尾A	遺跡見学会	12月16日	小山の神B	発掘作業終了
8月5日	高尾A	古墳石室・外護列石平面測量	12月20日	洞源	確認調査終了
8月19日	高尾A	古墳石室壁体立面測量	12月16日	尾垂	基礎整理開始
8月23日	尾垂	遺構がないことを確認し調査終了	12月18日	高尾A	新発見の古墳を高尾5号墳とする
			12月20日	小山の神B、高尾A、洞源	基礎整理開始
			3月31日	小山の神B、高尾A、尾垂、洞源	基礎整理終了

2014年度

5月28日	高尾A	確認調査開始	10月27日	洞源	堅穴状遺構の火床下から貯蔵穴状の土坑 を検出
7月1日	高尾A	遺構がないことを確認し終了	10月31日	洞源	面調査終了
8月5日	洞源	確認調査開始	11月27日	尾垂	確認調査開始
8月18日	洞源	確認調査終了	11月28日	尾垂	小型丸底土器を伴う堅穴建物跡を検出
8月19日	洞源	面調査開始	12月11日	尾垂	確認調査終了
8月22日	洞源	焼土跡(製鉄炉跡)検出	12月15日	高尾A、尾垂、洞源	基礎整理作業開始
9月4日	洞源	焼土跡付近でフイゴの羽口と平安時代の 土師器坏が出土	2月18日	尾垂	表土剥ぎ開始
9月19日	洞源	堅穴状遺構の火床周辺から内黒坏、長胴 甕、小型甕などの日常雑器が出土	3月25日	尾垂	表土剥ぎ完了
10月4日	洞源	遺跡見学会	3月31日	高尾A、尾垂、洞源	基礎整理作業終了
10月10日	洞源	焼土跡(S F 06)最下層から灰釉陶器 出土			

2015年度

4月6日	小宮山・前山地区遺跡の記録類や遺物の全体量と 内容の把握を開始	10月20日	尾垂古墳	外護列石と裏込石の検出	
4月13日	尾垂1区	調査開始	10月21日	尾垂古墳	玄室から骨出土
5月12日	尾垂1区	遺構精査開始	10月28日	小宮山・前山地区遺跡出土の小型石器注記開始	
5月26日	尾垂1区	堅穴建物跡(S B 05)北壁際床近く からほぼ完形の灰釉椀出土	11月7日	尾垂	遺跡見学会
7月30日	尾垂2区	調査開始	11月10日	尾垂古墳	玄室から直刀出土
8月20日	尾垂2区	未周知の古墳発見	11月12日	尾垂古墳	玄室から鉄鏃出土
9月11日	尾垂古墳	葺石の検出作業	11月20日	尾垂古墳	玄室から新たに人骨出土
9月28日	尾垂1区	調査終了	12月4日	荒城跡	確認調査開始
9月29日	尾垂2区	礎石を検出	12月8日	荒城跡	遺構ないことを確認し終了
10月1日	尾垂2区	礎石の精査	12月10日	尾垂	古墳空測
10月5日	尾垂古墳	周溝掘下げ	12月11日	尾垂	2区調査終了
10月8日	尾垂古墳	玄室の精査	12月14日	尾垂、荒城跡	基礎整理作業開始
10月14日	尾垂古墳	羨道の精査	1月14日	尾垂	炭化物年代測定委託
			2月26日	尾垂	炭化物年代測定結果納品
			3月31日		基礎整理作業終了

2016年度

4月1日	本格整理作業開始	7月11日	高尾5号墳・尾垂古墳出土人骨のクリーニング
4月12日	尾垂遺跡・尾垂古墳出土金属製品の応急保存処理 開始	7月13日	高尾5号墳・尾垂古墳出土人骨の鑑定指導
6月29日	尾垂遺跡の遺構・遺物指導	9月8日	尾垂古墳出土人骨の鑑定指導
		12月23日	尾垂古墳ほかの金属製品の応急保存処理終了

第1章 発掘調査の経過

3月13日	尾垂古墳出土金属製品の鑑定指導	3月31日	本格整理作業終了
2017年度			
4月1日	本格整理作業開始	1月24日	高尾5号墳のデジタルトレース
7月18日	小山の神B出土土器種実圧痕観察	2月26日	尾垂遺跡の遺構図デジタルトレース
7月25日	洞源出土鉄滓の鑑定指導（愛媛大村上恭通氏）	3月31日	本格整理作業終了
12月11日	尾垂古墳のデジタルトレース		
2018年度			
4月1日	本格整理作業開始	10月24日	尾垂古墳出土人骨の鑑定指導
4月4日	遺構図確認・修正・デジタルトレース	10月29日	尾垂古墳ガラス小玉計測
4月5日	尾垂古墳石室内土壌の整理／水洗選別によりガラス小玉、耳環が出土	12月3日	土器実測・拓本
5月7日	土器接合・分類・抽出	12月12日	遺物実測・トレース委託3
5月8日	編集会議	1月9日	遺物写真委託撮影
7月24日	土器復元・補強	1月16日	高尾5号墳、尾垂古墳出土人骨の鑑定指導
9月4日	小山の神B出土土器の炭化種実・圧痕レプリカの鑑定委託	1月31日	遺物実測・トレース委託2納品
9月18日	遺物観察表作成	3月4日	委託撮影写真納品
10月11日	遺物実測・トレース委託2	3月22日	遺物実測・トレース委託3納品
10月15日	所見類の整理	3月26日	編集会議
		3月29日	本格整理作業終了
2019年度			
4月1日	本格整理作業開始	7月31日	発掘調査報告書印刷・製本契約
5月30日	編集会議	9月30日	発掘調査報告書刊行

引用・参考文献

- 西沢寿晃・小松虔 1978 「長野県佐久市月明沢遺跡」発掘資料について—一人歯牙加工品の出土—『長野県考古学会誌』31 長野県考古学会
- 長野県教育委員会 1997 『大規模開発事業地内遺跡—遺跡詳細分布調査報告書—』
- 長野県教育委員会 2000 『大規模開発事業地内遺跡—遺跡詳細分布調査—』 2
- 長野県教育委員会 2003 『大規模開発事業地内遺跡—遺跡詳細分布調査—』 3
- 長野県教育委員会 2007 『大規模開発事業地内遺跡—遺跡詳細分布調査—』 4
- 長野県教育委員会 2010 『県内遺跡発掘調査報告書—遺跡詳細分布調査—』 5
- 長野県教育委員会 2013 『県内遺跡発掘調査報告書—遺跡詳細分布調査—』 6

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

佐久盆地は長野県の東に位置し、東と南を秩父山地、西を八ヶ岳連峰、北を浅間連山に囲まれている。盆地の中央には秩父山地の甲武信ヶ岳を源流とする千曲川が北流し、左（西）岸域は八ヶ岳連峰から下る小河川が開析谷や扇状地を形成し、河岸段丘や氾濫原を分断して千曲川に注ぐ。

中部横断道は、八千穂高原 IC から佐久南 IC までの間、八ヶ岳連峰から東ないし北東方向に延びる開析谷と尾根とを南北方向に横切るため、今回調査した遺跡の多くは、尾根の頂部や斜面部、麓の小河川に面した平坦部に立地している。したがって、規模は小さいが、地理的な環境を活かした個性的な遺跡がある。例えば、尾根の頂部に築かれた田島塚・水堀塚、和田1号塚、傾斜面を利用した奥日影遺跡の窯跡、三方を尾根によって閉塞された空間に中世墓地を営んだ地家遺跡のごとくである。また、佐久南 IC 周辺は千曲川の段丘と低湿地からなり、段丘上には比較的規模の大きな北裏遺跡群が形成され、低湿地には北畑遺跡群や仁束餅遺跡のように水田域が広がる。

第2節 歴史的環境

今回調査した遺跡では、旧石器時代から中・近世の遺構と遺物を発見した。本節では、各遺跡の所在する佐久市から佐久穂町における周辺の遺跡を、時代別に紹介する。

旧石器時代

遺跡数は少なく、今回調査した佐久市高尾A遺跡（No.410）、佐久穂町満り久保遺跡（No.B54）、満り久保東遺跡（No.B57）がある。とくに高尾A遺跡で発見した石器群は、佐久市立科F遺跡、八風山遺跡群八風山Ⅱ遺跡、香坂山遺跡と同様の古い段階と考えている。

縄文時代

調査例は少ないが、遺物は採取されている。今回取り上げた遺跡の半分弱が縄文時代の遺跡である。

草創期は、佐久市井上遺跡（No.691）、佐久穂町崎田原遺跡（No.B1）で神子柴型石斧が採取されている。早期は、片貝川周辺の佐久市堂浦遺跡（No.640）、大門地遺跡（No.641）で押型文・貝殻条痕文系土器、佐久穂町反り峯遺跡（No.B36）で当該期の土器が採取されているが、いずれも遺構は確認されていない。なお、千曲川右岸の佐久穂町後平遺跡では早期後半の竪穴建物跡3軒が調査されている。前期は、佐久穂町上ノ原遺跡（No.A19）、清水上遺跡（No.A59）などで前葉、佐久市後澤遺跡（No.400）で中葉の集落跡が調査されている。佐久市井上遺跡（No.691）では、遺構外から羽状縄文系土器が出土している。また、佐久穂町細久保遺跡（No.B10）、千ヶ日向遺跡（No.B11）で後葉の土器が採取されている。中期は各所で遺物が採取され、遺跡数も多い。佐久穂町佐久西小学校裏遺跡（No.A10）、崎田原遺跡（No.B1）で集落跡を調査している。

後・晩期の遺跡数は少ない。佐久穂町宮の本遺跡（No.A29）では敷石住居跡が調査され、佐久穂町竹の下遺跡（No.B6）では浮線文系土器が見ついている。今回の調査で、佐久市小山の神B遺跡（No.402）や高尾A遺跡（No.410）、上滝・中滝・下滝遺跡（No.620）で前期の竪穴建物跡を、佐久市北裏遺跡群（No.318）や地家遺跡（No.480）ほかで早期から晩期の資料を報告した。

弥生時代

大規模な遺跡は、佐久盆地北部の千曲川に沿いにある自然堤防や段丘、比較的平坦な丘陵台地にあり、山間部にはほとんどない。前期から中期前半は、佐久穂町中原遺跡（No.A18）、佐久市井上遺跡（No.691）、丸山遺跡（No.610）で遺物が採取されている。中期後半から後期は、片貝川流域で佐久市勝間原遺跡（No.611）、丸山遺跡（No.610）で竪穴建物跡が調査され、一帯となって大規模な集落跡になり、佐久市域における該期の集落跡の南限と推測されている。段丘や丘陵上では、佐久市北裏遺跡群（No.318）、西裏遺跡群（No.317）、後澤遺跡（No.400）などが拠点集落とされる。一方、佐久穂町では宮の本遺跡（No.A29）で土器の出土例があるが、この地域の遺跡は少ない。今回、佐久市北裏遺跡群（No.318）、西東山遺跡（No.319）、和田遺跡（No.616）などで集落跡を、佐久地域の山間部にある岩陰遺跡として月明沢岩陰遺跡群（No.1162）を調査した。

古墳時代

佐久地域では前期の遺跡数は減少し、集落の規模も小さいとされ、中期以降、その数が増してくる。

周辺には、中期の佐久市離山遺跡（No.658）や中期から後期の井上遺跡（No.691）などの集落遺跡がある。一方、古墳は6世紀後半以降に築造された佐久市三河田大塚古墳（No.244）を除いて、周辺は7世紀から8世紀に築造された後期から終末期の古墳で占められる。7世紀以降の古墳は左岸には少なく、佐久穂町塚畑古墳（No.A1）が南限と考えられている。今回、佐久市上滝・中滝・下滝遺跡（No.620）、和田遺跡（No.616）、滝遺跡（No.615）で前期の小規模な集落跡を調査した。また、新発見の古墳として、兜山古墳（No.1163）、尾垂古墳（No.1164）、高尾5号墳（No.556）を報告した。

古代

千曲川左岸では、佐久市勝間原遺跡（No.611）・丸山遺跡（No.610）・美里在家遺跡（No.598）・蛇塚遺跡（No.597）などがある。佐久穂町では佐久西小学校裏遺跡（No.A10）で集落が調査され、勝見沢遺跡（No.B13）では八稜鏡が出土している。今回、佐久市小山の神B遺跡（No.402）、上滝・中滝・下滝遺跡（No.620）、地家遺跡（No.480）、寺久保遺跡（No.603）、佐久穂町小山寺窪遺跡（No.A30）、馬越下遺跡（No.B56）などで集落跡を調査した。こうした古代の集落跡は、水田耕作には不向きな山間（麓）部に分布が広がる。その近隣の佐久市洞源遺跡（No.473）では製鉄炉を、佐久穂町奥日影遺跡（No.A60）では須恵器の窯跡を発見しており、山間（麓）部に暮らす人々の生活基盤（生業）を検討するうえで、貴重な調査例となった。

中世以降

周辺遺跡のうちほぼ半数が城跡・砦・狼火台で、今回調査した荒城跡（No.478）もその一つである。一方、佐久市地家遺跡（No.480）・尾垂遺跡（No.472）は寺院関連遺跡、佐久市北裏遺跡群（No.318）・佐久穂町奥日影遺跡（No.A60）・小山寺窪遺跡（No.A30）などは集落遺跡として報告した。尾根の頂部に築かれた佐久市和田1号塚（No.791）などは地域史を考える上で、新たな発見といえる。

引用・参考文献

佐久市 1995『佐久市志』 歴史編（一） 原始古代

佐久市・臼田町誌刊行会 2007『臼田町誌』 第三巻 考古古代・中世編

佐久町誌刊行会 2004『佐久町誌』 歴史編一 原始・古代・中世

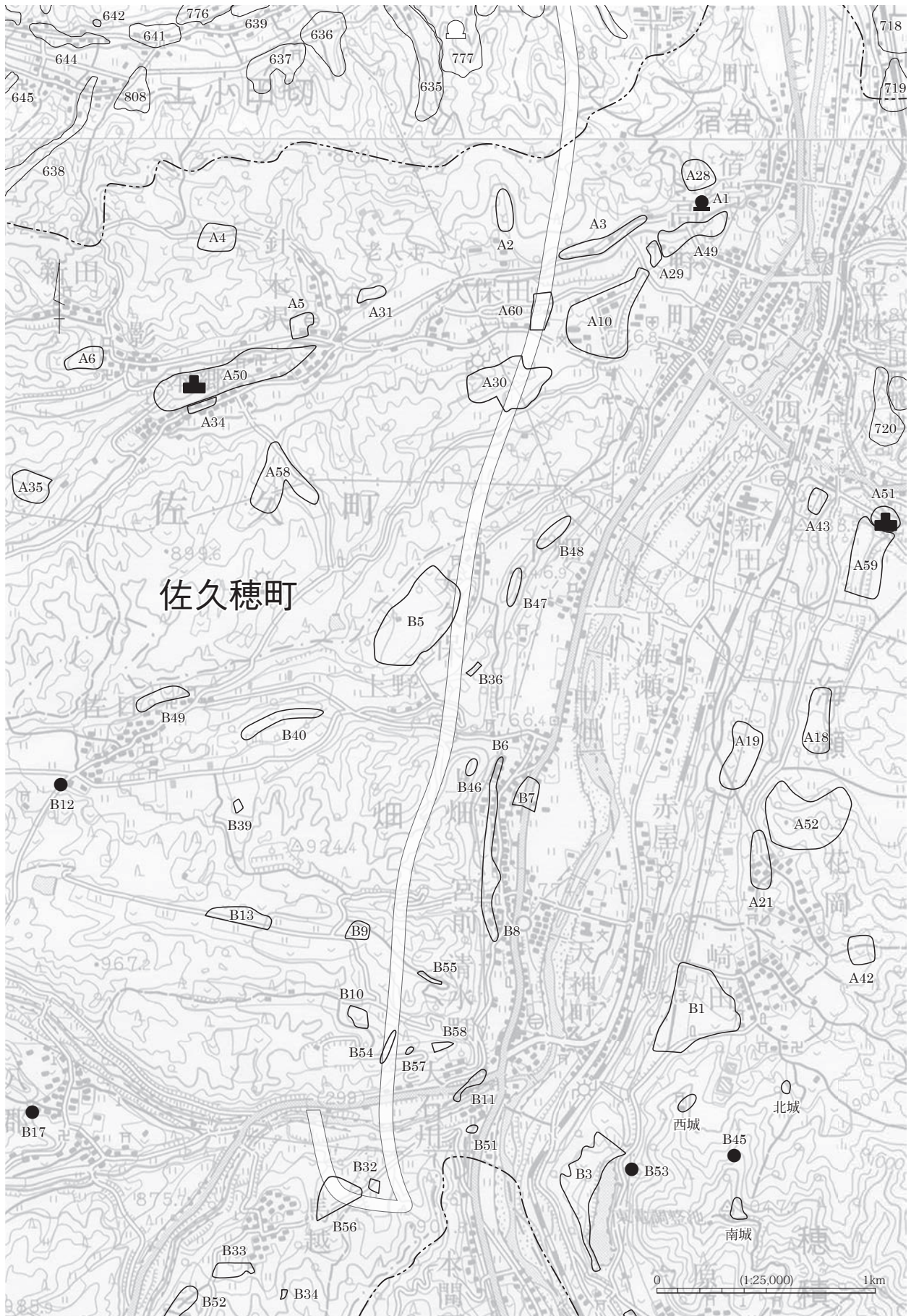
八千穂村誌刊行会 2003『八千穂村誌』 第四巻 歴史編



第3図 周辺遺跡分布図(1)



第4図 周辺遺跡分布図(2)



第5図 周辺遺跡分布図(3)

第5表 周辺遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代						
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世
105	上野B遺跡								
221	下県屋敷遺跡群	伴野		○	○	○	○		
235	今井宮の前遺跡	今井					○	○	
236	今井城跡	今井						○	
241	中原遺跡群	今井		○	○	○	○	○	
244	三河田大塚古墳	三河田				○			
245	蟹ヶ沢古墳	中込				○			
249	大塚遺跡群	中込			○		○		
251	梨の木遺跡 I	中込						○	
312	西村中遺跡	根岸		○		○			
313	水操遺跡群	根岸					○		
317	西裏遺跡群	伴野		○	○		○	○	
318	北裏遺跡群	伴野		○	○	○	○	○	
319	西東山遺跡	伴野		○	○		○		
320	東山遺跡	伴野		○		○	○	○	
321	北畑遺跡群	桜井		○	○	○	○		
322	宮浦遺跡群	桜井			○	○	○	○	
323	上北谷遺跡群	桜井				○			
324	平馬塚遺跡群	桜井		○		○	○		
325	仁東餅遺跡	伴野		○			○		
326	虚空蔵山狼火台	根岸						○	
327	平馬塚古墳	桜井				○			
328	西東山古墳群	伴野				○			
328	1号墳	伴野				○			
328	2号墳	伴野				○			
329	跡部儘田遺跡群	跡部				○	○		
330	高日影古墳	根岸				○			
331	町田遺跡群	三塚				○	○	○	
396	遊石遺跡	小宮山		○					
400	後澤遺跡	小宮山		○	○	○	○		
401	小山の神A遺跡	小宮山		○					
402	小山の神B遺跡	小宮山		○	○		○	○	
403	長ヶ窪遺跡	小宮山		○		○	○		
404	西の張遺跡	小宮山		○	○	○			
405	上の山遺跡	小宮山		○					
406	町後遺跡	前山					○	○	
407	居屋敷遺跡	前山					○		
408	瀧の下遺跡	前山		○	○		○		
409	象ヶ岡遺跡	前山		○			○		
410	高尾A遺跡	前山	○	○	○	○	○		
411	倉澤遺跡	前山					○		
412	中道遺跡群	前山			○		○		
413	杓町田遺跡	三塚							
414	三塚鶴田遺跡	三塚					○		
415	小宮山砦	小宮山						○	
416	前山城跡	小宮山					○	○	
417	三千束遺跡群	三塚			○				
421	長明塚遺跡	野沢			○	○			
422	金山遺跡	跡部				○	○		
423	東五里田遺跡	野沢					○		
424	儘田遺跡	野沢				○	○		
425	野沢城跡	野沢					○	○	
469	蛸原遺跡	小宮山		○					
470	免ヶつ原遺跡	前山		○		○	○		
471	上野遺跡	前山				○			
472	尾垂遺跡	前山		○	○	○	○	○	
473	洞源遺跡	前山		○			○		
474	一丁田遺跡	大沢		○			○		
475	大柵遺跡	大沢				○	○	○	
476	高尾B遺跡	前山		○					
477	前山古城跡	前山						○	
478	荒城跡	前山						○	
479	一丁田古墳群	大沢				○			

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代						
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世
479	1号墳	大沢				○			
479	2号墳	大沢				○			
480	地家遺跡	大沢		○	○	○	○	○	
481	兜山遺跡	大沢		○		○	○		
482	城山遺跡	大沢		○	○	○	○	○	
483	大沢屋敷遺跡	大沢		○		○	○		
484	大中沢遺跡	大沢				○	○		
485	蔵下遺跡	大沢		○					
486	大門下遺跡	前山			○	○			
487	大堀遺跡	前山		○					
488	御嶽遺跡	大沢				○			
489	高畑遺跡	本新町				○			
490	大沢前田遺跡	本新町				○			
491	西裏遺跡群	本新町		○		○	○		
492	下町屋遺跡	大沢					○	○	
493	原遺跡	大沢				○			
494	白拍子遺跡群	取手					○		
495	伊勢道遺跡	取手					○		
496	城山古墳	大沢				○			
497	向畑遺跡	鍛冶屋					○		
498	前堀遺跡	高柳					○		
518	日向小坂遺跡	大沢				○	○		
519	日向崩岩遺跡	大沢				○	○		
520	山田遺跡	大沢					○		
521	金山久保A遺跡	大沢			○	○	○		
522	金山久保B遺跡	大沢			○				
523	前の久保遺跡	大沢				○	○	○	
524	三枚平A遺跡	大沢		○		○	○		
525	三枚平B遺跡	大沢		○	○	○	○		
546	宝生寺山砦	伴野						○	
548	泉屋敷跡	桜井						○	
549	水操古墳	根岸				○			
550	川越石窯址	前山						○	
553	荒山城跡	大沢						○	
557	薊澤遺跡	野沢					○		
561	山の神古墳	伴野				○			
564	清来寺古墳	小宮山				○			
565	鱗溪古墳	前山				○			
566	高尾古墳群	前山				○			
566	1号墳					○			
566	2号墳					○			
566	3号墳					○			
566	4号墳					○			
566	5号墳					○			
567	洞源古墳群	前山				○			
567	1号墳					○			
567	2号墳					○			
567	3号墳					○			
568	鷺林古墳	前山				○			
571	三枚平古墳群	大沢				○			
571	1号墳					○			
571	2号墳					○			
596	原田遺跡	白田				○	○		
597	蛇塚遺跡	白田		○	○	○	○		
598	美里在家遺跡	白田		○	○	○	○		
599	瀧ノ沢入口遺跡	白田					○		
600	荒谷遺跡	白田		○			○		
601	七曲り下遺跡	白田			○	○	○	○	
602	平遺跡	白田		○			○		
603	寺久保遺跡	白田		○		○	○		
604	下ノ城遺跡	白田		○	○	○	○		
605	台ヶ坂遺跡	白田		○		○	○		
606	反田遺跡	白田		○					

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代						
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世
607	城下遺跡	白田		○					
608	城山遺跡	白田		○		○	○		
609	小山崎遺跡群	白田		○	○	○	○	○	
610	丸山遺跡	下小田切		○	○	○	○		
611	勝間原遺跡	下小田切		○	○	○	○		
612	栗ノ木遺跡	下小田切		○	○	○	○		
613	日影遺跡	下小田切				○	○		
614	家浦遺跡	下小田切		○		○	○	○	○
615	滝遺跡	湯原				○	○		
616	和田遺跡	湯原		○	○	○	○	○	
617	北側遺跡	湯原		○		○	○		
618	中島遺跡	湯原				○	○		
619	向城遺跡	中小田切		○		○	○		
620	上滝・中滝・下滝遺跡	湯原		○	○	○	○		
621	児玉・大平遺跡	湯原					○		
622	ジンジロ遺跡	湯原					○		
623	山の神遺跡	湯原		○					
624	梨子久保遺跡	湯原		○					
625	五里久保遺跡	湯原		○			○		
629	北川勝間遺跡	北川				○	○		
630	千曲台団地遺跡	北川				○	○		
631	広沢遺跡	北川		○	○	○	○		
632	田島久保遺跡	北川		○		○	○		
633	城影遺跡	中小田切		○		○	○		
634	札幌吉原遺跡	中小田切		○		○	○		
635	南久保・居村遺跡	中小田切		○		○	○		
636	前久保遺跡	上小田切		○		○	○		
637	広久保・桃の久保遺跡	上小田切					○		
639	家裏遺跡	上小田切		○		○	○		
640	堂浦遺跡	上小田切		○		○	○		
641	大門地遺跡	十二新田		○			○		
642	岩下洞窟遺跡	十二新田					○		
643	日向遺跡	十二新田		○					
644	岩下遺跡	十二新田		○			○		
645	十二新田寺久保遺跡	十二新田		○		○	○	○	
658	離山遺跡	上中込		○	○	○	○	○	
659	中反田遺跡群	大奈良				○	○		
690	戸井口遺跡	三分		○		○	○		
691	井上遺跡	三分		○	○	○	○		
716	観正田遺跡	三条					○	○	
717	南裏遺跡	三条					○		
718	東荒谷遺跡	十日町		○			○		
719	十日町遺跡	十日町						○	
720	唐松A遺跡	岩水		○					
722	境塚古墳	白田				○			
724	滝ノ沢古墳	白田				○			
725	滝ノ沢経塚古墳	白田						○	
727	離山2号古墳	上中込				○			
728	離山3号古墳	上中込				○			
772	医王寺城跡	白田						○	
773	稲荷山城跡	白田						○	
774	湯原城跡	湯原						○	
775	向城跡	中小田切						○	
776	上小田切城跡	上小田切						○	
777	雁峰城跡	中小田切						○	
785	上ノ城跡	白田						○	
787	滝ノ沢遺跡	白田		○		○	○	○	
788	山神久保遺跡	白田		○	○	○	○		
789	田島遺跡	白田		○	○				
790	下滝遺跡	白田						○	
791	和田1号塚	湯原							○
792	田島塚	北川							○
793	水堀塚	小田切							○

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代						
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世	近世
794	法印塚古墳	法印塚					○		
795	荒谷古墳	荒谷					○		
796	庚申塚	庚申							○
802	北側1号墳	北側						○	
808	冷久保遺跡	冷久保						○	
1162	月明沢岩陰遺跡群	前山				○			
1163	兜山古墳	大沢					○		
1164	尾垂古墳	前山					○		
A1	塚畑古墳	高野町					○	○	
A2	雁明遺跡	高野町					○	○	
A3	北沢遺跡	高野町		○	○				
A4	たつま久保遺跡	上		○				○	
A5	下影遺跡	上		○				○	
A6	影遺跡	上		○				○	
A10	佐久西小学校裏遺跡	高野町		○	○	○	○		
A18	中原遺跡	海瀨		○	○				
A19	上ノ原遺跡	海瀨		○				○	
A21	中山遺跡	海瀨		○				○	○
A28	粟窪遺跡	高野町						○	
A29	宮の本遺跡	高野町		○	○	○	○	○	
A30	小山寺窪遺跡	高野町		○	○			○	○
A31	施餓鬼畑遺跡	上		○				○	
A34	本郷遺跡	上		○					
A35	寺久保遺跡	上		○				○	○
A42	家山遺跡	海瀨		○					
A43	下原遺跡	海瀨		○					
A49	高野城跡	高野町							○
A50	福田城跡	上							○
A51	海瀨城跡	海瀨							○
A52	花岡城跡	海瀨							○
A58	舟ノ窪遺跡	上							○
A59	清水上遺跡	海瀨		○					
A60	奥日影遺跡	高野町		○				○	○
B1	崎田原遺跡	穂積		○	○				
B3	関谷遺跡	穂積	○					○	
B5	上野月夜原遺跡	畑		○				○	
B6	竹の下遺跡	畑		○				○	
B7	封地遺跡	畑		○				○	○
B8	ムジナ沢遺跡	畑		○	○			○	
B9	宮の入遺跡	畑		○				○	
B10	細久保遺跡	畑		○					
B11	千ヶ日向遺跡	畑		○					
B12	佐口遺跡	畑		○					
B13	勝見沢遺跡	畑		○				○	
B32	中原遺跡	千代里		○					
B33	古屋敷遺跡	千代里		○					
B34	向窪遺跡	千代里		○					
B36	反り峯遺跡	畑		○					
B39	南平遺跡	畑		○				○	
B40	馬込遺跡	畑		○				○	
B45	蟻城跡	穂積							○
B46	権現山砦跡	畑							○
B47	下畑城跡	畑							○
B48	下畑下の城跡	畑							○
B49	佐口城跡	畑							○
B51	大石川烽火台跡	千代里							○
B52	馬越城跡	千代里							○
B53	関谷東遺跡	穂積		○				○	
B54	満り久保遺跡	畑	○	○				○	○
B55	畑寺久保遺跡	畑		○					
B56	馬越下遺跡	千代里		○				○	○
B57	満り久保東遺跡	畑	○						
B58	千ヶ日向団地上遺跡	畑		○					

第3章 発掘調査の方法

第1節 発掘作業

当センターでは、県教委の「記録保存を目的とする発掘調査の標準および積算基準」と、当センター作成の「遺跡調査の方針と手順」に即して発掘調査を実施している。

(1) 遺跡名称と遺跡記号

本書で報告する遺跡の名称と遺跡記号は下記のとおりである。遺跡記号は調査記録の便宜を図るため、遺跡名をアルファベット3文字で表した記号である。1文字目は長野県を10分割した地区記号で、北佐久郡・南佐久郡・小諸市・佐久市を示す「D」、2文字目と3文字目は遺跡名のローマ字表記から2文字を選択したものである。各種記録類や遺物注記に遺跡記号を利用している。

小山の神B遺跡 (KOYAMANOKAMI B)	: DKK
高尾A遺跡 (TAKAO A)	: DTA
高尾古墳群5号墳 (TAKAOKOFUNGUNGOGOFUN)	: DTF
尾垂遺跡 (ODARE)	: DOD
尾垂古墳 (ODAREKOFUN)	: DOF
洞源遺跡 (DOGEN)	: DDG
荒城跡 (ARAJOSEKI)	: DAJ
月明沢岩陰遺跡群 (GETUMEISAWAIWAKAGEISEKIGUN)	: DGI

(2) 遺構名称と遺構記号

遺構についても遺跡記号と同様に、記録の便宜を図るため記号を用いた。遺構名称は調査時に決定するため、遺構の種類・性格に適合しない場合もあるが、主に遺構の形状や特徴で区分した。遺構番号は、時代などに関わらず種類ごと、検出順に付けた。混乱を避けるため、一旦記号・番号を付したものは原則として変更していない。調査の結果、遺構でないことが判明したものについては欠番とした。また、調査段階で遺構番号が付いていなかったものについては、整理段階で新たに付与した。

今回の調査で用いた遺跡記号には、以下の種類がある。

SB : 概ね一辺2mを超える方形、長方形、円形、楕円形の掘込み【**堅穴建物跡、堅穴状遺構**】

SK : 単独もしくは他の掘込みとの関係がないSBよりも小さな掘込み【**土坑、井戸**】

ST : SBよりも小さな掘込みや石が一定間隔で方形、長方形、円形に配置しているもの【**掘立柱建物跡、平地式建物跡**】

SD : 溝状の掘込み【**溝跡、自然流路跡**】

SF : 単独で存在し、火を焚いた跡が面的に広がるものおよび炭化物の集中範囲

SM : 方形、円形、もしくはそれらが組み合わさった形の盛上がり【**古墳、墳墓、周溝墓、土坑墓、木棺墓もここに含める**】

SQ : 遺物が集中する箇所

SX : その他、性格不明遺構

なお、S B内の柱穴・貯蔵穴などや、S Tを構成する個々の掘込みにはピット（記述・図を問わず個別に番号を付す場合「P」）を付した。

（3）調査区（グリッド）の設定と略称（第6図）

荒城跡と月明沢岩陰遺跡群では調査区の設定を行っていないが、それ以外の遺跡では、以下の方法で調査区を設定した。

国土地理院の平面直角座標系第Ⅷ系の原点（ $X = 0.0000$ 、 $Y = 0.0000$ ）を基準に、200の倍数値を選んで東西方向・南北方向の測量基準線を設けた。これをもとに、調査対象範囲全体をカバーするように調査グリッドを設定し、「大々地区」「大地区」「中地区」「小地区」に区画した（第6図）。

大々地区は、 200×200 mの区画で、北西から南東へⅠ・Ⅱ・Ⅲ……のローマ数字番号を与えた。

大地区は、大々地区を 40×40 mの25区画に分割したもので、北西から南東へA～Yのアルファベット番号を与えた。

中地区は、大地区を 8×8 mの25区画に分割したもので、北西から南東へ1～25のアラビア数字を与えた。遺構測量の基準・単位としたのが、この中地区である。

小地区は、中地区を 2×2 mの16区画に分割したもので、北西から南東方向へ01～16の算用数字番号を与えた。中地区番号との間にはハイフンを挿入した。

グリッド名の実際の表記においては、読取りやすさを考え、大々～中地区番号の間にも適宜ハイフンを挿入することがあり、本書の図中でもそうした表記になっている場合がある。グリッド杭の設定は、表土掘削が終了し、遺構検出をほぼ終えた段階で業務委託により実施した。座標値については、発掘調査期間が日本測地系から世界測地系への変換の時期と重なっており、統一性を保つため日本測地系の座標値で統一している。

なお、上記の調査グリッドとは別に、地形や土地区画の状況、調査の進ちょく状況に合わせて調査範囲を任意に分割し、「1区、2区……」等と呼称した遺跡がある。

（4）表土掘削と遺構の検出

荒城跡、月明沢遺跡群を除く6遺跡では、本格的調査に入る前段階に、遺跡の性格を把握するための確認調査として重機によるトレンチ掘削を実施し、遺構が検出された地点を主体に調査区を拡張した。

トレンチの掘削は重機を使用し、トレンチ調査の所見に基づき、範囲や遺構検出面などを決定した。面的調査を実施した小山の神B遺跡、尾垂遺跡、洞源遺跡の遺構検出面は1面、高尾A遺跡の遺構検出面は2面である。表土を含む遺構検出面までの堆積層は重機により掘削し、表土掘削が終了した部分から、手作業で掘削面の清掃を行い、遺構を検出した。遺物は上記の地区・グリッド名、出土層位、遺構に関連するものは帰属遺構名をポリ袋に記入して取り上げた。

高尾古墳群5号墳と尾垂古墳は未周知の古墳で、本格的調査に入る前段階の確認調査で初めて検出した。墳丘と周溝全体を検出した後、石室内や周溝の調査を行ない、最終的には墳丘と石室の解体調査を実施した。

荒城跡と月明沢遺跡群は、本格的調査に入る前段階の確認調査で本調査不要と判断されたので、本調査は実施していない。

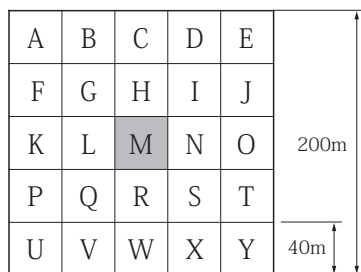
（5）遺構の発掘

竪穴建物跡は、埋土観察用のベルトに沿った先行トレンチで床面を確認するとともに、埋土の堆積状況を把握・記録して、層位ごとに埋土を床面まで掘り下げ、柱穴、炉、カマド、周溝などの建物内施設の精査・記録を行った。建物内施設を完掘した後は、完掘状態を記録し、その後に床面下（掘方）の状況を確認した。

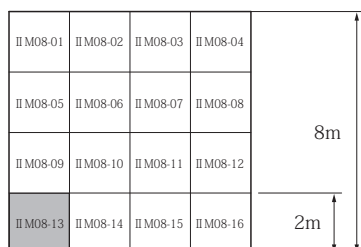


大々地区(200×200m グリッド)：Ⅰ・Ⅱ ■ 小山の神B遺跡 調査対象地

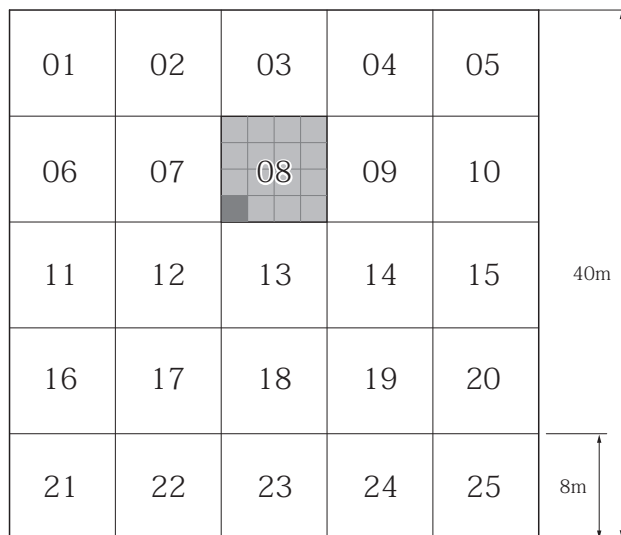
例：ⅡM08-13グリッドの座標位置



大地区(40×40m グリッド)：ⅡA…ⅡY



小地区(2×2mグリッド)：
ⅡM08-01…ⅡM08-13…ⅡM08-16



中地区(8×8mグリッド)：ⅡM01・ⅡM02…ⅡM08…ⅡM25

第6図 調査グリッドの呼称

土坑は埋土を半截し、埋土の堆積状況を観察・記録した後に完掘した。埋土から出土する遺物の状況によっては、埋土上位を段下げ、出土状況を記録してから埋土下位の掘下げへと進んだ。

掘立柱建物跡の柱穴は、掘方全体を段下げして柱痕跡を確認し、柱痕跡が断面にかかるように埋土を半截した。埋土の堆積状況を観察・記録した後に完掘した。

溝跡および自然流路跡は、全体のプランを検出した後、延長方向に直交するベルトを複数箇所設定し、それぞれの埋土堆積状況を観察しながら掘り下げた。

出土遺物については、出土状況に特徴のあるものなどは、付番して出土状況図の作成、写真撮影を行い取り上げた。

高尾古墳群5号墳、尾垂古墳についてはトレンチ調査で把握したマウンド構造をさらに精査し、出土遺物の記録・取上げを行いつつ盛土全体を掘り下げ、基底面（構築開始面）の状況を確認・記録した。

（6）記録作成

遺構図・土層図は、センター職員およびその指導のもとに発掘作業員が作成した。測量基準杭を基準とする簡易遺方測量を基本としたが、遺構実測支援システム（ソフトウェア遺構くん Cubic）を用いた測量も一部実施した。遺構図は中地区（8m×8m）単位に区切った割付図や、建物跡などの個別図を作成した。縮尺は1：20を基本とし、必要に応じて1：10図、1：40図を作成した。調査区・トレンチ配置図、地形図の作成は、業務委託を基本としたが、一部、遺構実測支援システムを用いてセンター職員および発掘作業員が行った。

写真撮影は、6×7フィルムカメラ（マミヤRB／ペンタックス）、35mmフィルムカメラ（ニコンFM2）または35mm相当の一眼レフデジタルカメラ（ペンタックスK-7）を併用して行った。フィルムは、モノクロネガフィルム（フジネオパン100）とカラーリバーサルフィルム（フジクローム100）を使用した。撮影はすべてセンター職員が行い、現像と焼付けは業務委託とした。荒城跡および月明沢遺跡群を除く各遺跡では、業務委託により遺跡全景の空中撮影を実施した。

（7）自然科学分析

業務委託により炭化種実・種実圧痕同定、樹種同定、放射性炭素年代測定、黒曜石産地同定、火山灰分析を実施した。

炭化種実・種実圧痕同定は、小山の神B遺跡において出土した、縄文時代前期後葉土器1個体に含まれていた炭化種実・種実圧痕の数をカウントし、その種類を同定することを目的に実施した。

樹種同定は、洞源遺跡において製鉄炉跡や竪穴状遺構から出土した炭化材を対象とし、薪炭材などの種類を同定することを目的に実施した。

放射性炭素年代測定は小山の神B遺跡、高尾A遺跡、尾垂遺跡、洞源遺跡において、遺構のより明確な年代推定を行うための資料を得ることを目的として、遺構出土の炭化物を対象に実施した。小山の神B遺跡では、遺構出土の炭化物のほか、土器に付着した炭化物についても実施した。

黒曜石産地同定は、高尾A遺跡から出土した旧石器時代と縄文時代の石器を対象に実施した。

火山灰分析は、小山の神B遺跡と高尾A遺跡において、テフラ分析と重軽鉱物分析を実施した。小山の神B遺跡では、土坑を対象とし、テフラの産状を確認することにより、土坑に係る年代資料を得ることを目的とした。高尾A遺跡では、旧石器時代の石器を包含する土層の堆積年代を探ることを目的とした。

第2節 整理等作業

1 遺物の整理

遺物は取上げ単位ごとに台帳登録し、洗浄・クリーニングと注記を行い、材質別に土器・土製品・陶磁器、石器・石製品、金属製品に大別して整理作業を進めた。

土器・土製品・陶磁器は接合を行いながら、観察と分類、破片数と重量の計測を進め、遺構・遺跡の時期や特徴を示すために報告書への掲載が必要な遺物を抽出し、必要に応じて補強と復元を行った。石器・石製品は観察・分類を行いつつ、大きさと重量の計測を行い、報告書掲載遺物を抽出した。金属製品は観察・計測を行って、報告書掲載遺物を抽出した。抽出した遺物は遺跡ごと、材質ごとに管理番号を付して遺物管理台帳に登録した。

実測は手実測により、1：1縮尺で埋文センター規格の実測用紙に鉛筆で図化した。縄文土器や須恵器、銭貨は拓本を行った。トレースは、石器・石製品と金属製品は埋文センターにおいて製図ペンを用いた手トレースを行ったが、土器・土製品・陶磁器については業務委託による描画ソフトIllustratorを用いたデジタルトレースを実施した。手トレースした遺物図はデジタルスキャンし、デジタルトレースした遺物図と合わせて、Illustratorを用いてデジタル図版データを作成した。

2 記録類の整理

(1) 遺構図類の整理

遺構図面類は原図を台帳に登録するとともに、記載内容を点検・修正しながら整理し、竪穴建物跡など一部の個別図についてはトレースのための2次原図を作成した。修正図や2次原図をもとに、Illustratorを用いてデジタルトレースを行い、個別遺構図、土層図、遺構分布図（全体図）などのデジタル図版データを作成した。

(2) 写真記録の整理

発掘作業で撮影したフィルム写真およびデジタル写真は、遺跡別に写真台帳を作成し、発掘年度、撮影日、撮影方向、内容を記載した。フィルム写真は遺跡別ごと、撮影順にアルバムに収納した。モノクロフィルムはベタ焼きを貼付し、カラーリバーサルフィルムは、35mmはマウントを付け、6×7はマウントを付けずに収納した。デジタル写真はJPEGおよびRAWデータを遺跡ごと、撮影順にハードディスクに記録した。

遺物写真撮影は業務委託により実施した。撮影には一眼レフデジタルカメラを使用した。

3 報告書作成と資料収納

(1) 報告書作成

報告書の本格的な編集作業は、2018（平成30）年度に着手した。第1章から第3章に8遺跡全体を通した調査経緯、地理的・歴史的環境、基本的調査方法についてまとめ、第4章から第8章で各遺跡の報告を行い、第9章に総括を掲載した。第4章から第8章は、遺跡の特徴を理解しやすいよう工夫し、章末に小結を設けた。第5章の高尾A遺跡と高尾古墳群5号墳、第6章の尾垂遺跡と尾垂古墳、第8章の荒城跡と月明沢岩陰遺跡群については、近接する地点において一連の工程で行った調査であるため、それぞれ2遺跡を同一章にまとめて報告した。また、近接する地点の遺跡であるとともに、本調査を実施せずに調査を

終了した荒城跡と月明沢岩陰遺跡群については、第8章にまとめて報告した。

報告書作成にあたり、2019年3月26日、翌年5月30日の2回、編集会議を行った。会議で指摘を受けた事項について検討を行い、報告書の内容を整備した。

(2) 資料の収納

遺物は遺跡ごと、材質・種別ごとに報告書掲載遺物と非掲載遺物に分けたうえで、出土遺構・グリッド等の地点別にテンバコに収納するとともに、遺物収納台帳に登録した。

実測図類は手実測遺構図・委託測量図、手実測遺物図、委託実測遺物図に通し番号（図面番号）を付けて図面収納台帳に登録し、図面ファイル等に収納した。

写真は発掘作業で撮影した遺構関係写真と、整理作業で撮影した遺物写真とに分け、写真収納台帳に登録し、アルバム（ファイル）に収納した。

デジタルデータについては、センターで作成したデータはハードディスクに記録した。業務委託によるデータは納入時点でCDないしDVDに記録済みである。

第4章 小山の神B遺跡

第1節 遺跡の概観と調査の概要

1 遺跡の概観

小山の神B遺跡は佐久市小宮山地籍に所在し、八ヶ岳北麓から北東に延びる丘陵先端付近の尾根頂部から南東斜面部に立地する。遺跡範囲は東西約230m、南北約230mで、標高は704～739mを測る。丘陵裾から南側は、段丘面状の緩やかな傾斜地を成して小宮山川に至る。小宮山川は北東へ流れ、佐久盆地の南西縁を北流する片貝川に合する。遺跡は片貝川沿いの低地部から約1km上流に位置する（第7図）。

近隣遺跡の状況は、丘陵南側に広がる段丘面状緩傾斜地の北側に、縄文・古墳・奈良・平安時代の遺物散布地である長ヶ窪遺跡が西隣し、下流側に縄文・弥生・古墳時代の西の張遺跡と縄文時代の上の山遺跡が東隣する。北方に約600m離れたひとつ北側の丘陵先端部には、縄文時代前期中葉および弥生時代中・後期の集落跡が調査された後沢遺跡がある。小宮山川を挟んだ対岸の丘陵上には、中世山城の前山城跡が存在する（佐久市1995）。さらに、2.5km北西に位置する榛名平遺跡では、約52,000㎡という広大な面積の発掘調査がなされ、旧石器時代から中・近世に至る多量かつ多彩な内容の遺物や遺構群が明らかにされている（市教委2001）。

2 調査の経過

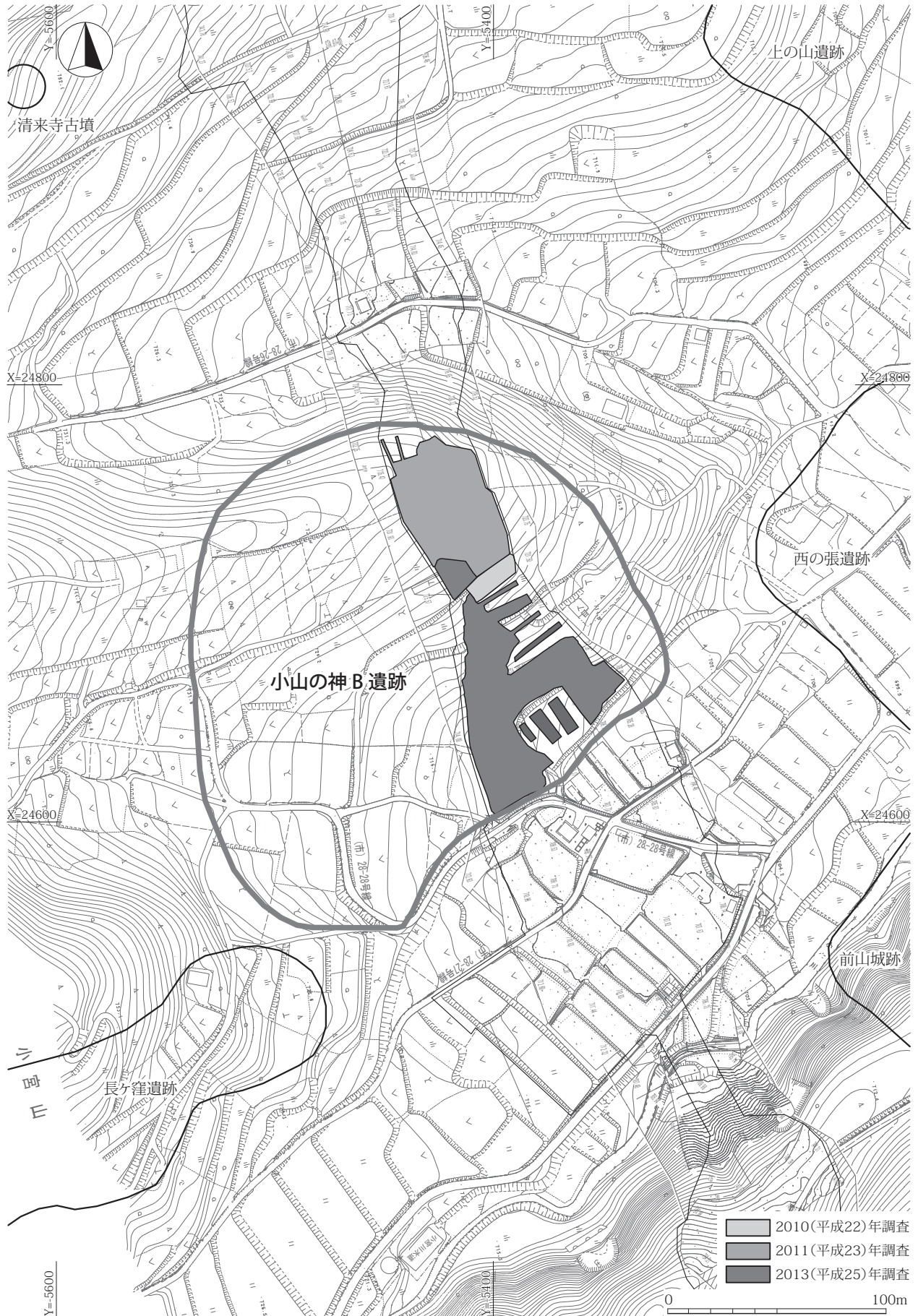
小山の神B遺跡は従来、縄文・奈良・平安時代の遺物散布地とされていたが、内容は不明確で、遺跡範囲も丘陵斜面下部に限定され、北側の斜面上部～頂部と南側の段丘面状緩傾斜地は範囲外であった。

2009（平成21）年、県教委が遺跡の南側隣接地にあたる丘陵裾部から段丘面状緩傾斜地で試掘調査を実施したが、遺構は確認されず、遺跡範囲の変更もなかった（県教委2010）。

2010年、中部横断道敷地内の斜面中腹部にある墓地移転に伴い、遺骨収集のための墓地内掘削が行われた。その際の立会調査でも、削平やかく拌が著しく遺構・遺物は検出されなかった。しかし、移転先の東側隣接地で市教委が実施した試掘調査では、縄文時代前期土器・石器、中世かわらけ・陶磁器が出土した（市教委2012）。さらに、北側隣接地にあたる丘陵頂部では、県教委が試掘調査を行い、遺構の可能性のある石積みや黒曜石を検出した。この結果を受けて、市教委と県教委は協議を行い、遺跡範囲を現在の範囲に拡大するとともに、中部横断道敷地内は発掘調査を実施することが決定された（県教委2013）。

発掘調査は、埋文センターが2011・13年に実施した。調査対象地は遺跡範囲の東部にあたり、丘陵を南北に横断する長さ180m、幅35～90mの範囲で、調査総面積は9,150㎡である。地形は標高735mの北西端が最も高く、そこから南側へ下る斜面となる。斜面は標高722m付近を境に、上部は緩やかで、下部は傾斜度を増して裾部に至る。裾部には、東側へと下る浅い谷状地形が入り込む。対象地の西部は、谷状地形の南側が若干高まる平坦地を形成した後、再び斜面となり、小宮山川左岸の段丘面へと続く。調査前の地目は尾根頂部～斜面上部は山林、斜面下部～裾部は畑地・荒地で、斜面下部は切盛りによる畑地等の区画造成が数段にわたり成されていた（第8図）。

2011年度は丘陵頂部から斜面上部の1区で、トレンチ調査と面的調査を行った。調査地は佐久市小宮



第7図 遺跡範囲・位置図

山字布替戸 647 ほか、調査面積は 2,900m²である。トレンチ調査は遺構・遺物の内容を把握することを目的とし、等高線に直交する 8 本のトレンチ（1～8 T）を掘削した（第 8 図）。その結果、各トレンチで縄文時代前期土器、石器、黒曜石剥片が出土し、7 トレンチでは竪穴建物跡を検出した。これにより、トレンチ設定範囲はほぼ全域で面的調査を実施することになった。面的調査では縄文時代前期初頭、前期後葉、前期末葉の竪穴建物跡や土坑を検出し、丘陵頂部から斜面上部にかけては当該期の集落が存在したことが明らかになった。

2013 年度は、丘陵上部から裾部までの 1～5 区でトレンチ調査と面的調査を行った。調査地は佐久市小宮山字小山の神 665 ほか、調査面積は 6,250m²である。

斜面上部の 1 区は、2011 年度調査区に隣接する地点で、遺構の広がりや予想されたため、当初から面的調査を行い縄文時代前期の土坑などを検出した。斜面下部については、状況が不明であったので、初めにトレンチ調査を実施した。段造成がなされている東側の切土部分は、遺構や遺物包含層が消失していると予想し、谷側盛土部分の平坦面へ等高線に平行する 6 本のトレンチ（9～14 T）を掘削した。その結果、9～11 トレンチで溝跡、13・14 トレンチで平安時代の竪穴建物跡を検出し、その範囲を中心に拡張して面的調査を行った。一方、西側は等高線に直行する 3 本のトレンチ（15～17 T）を掘削した結果、17 トレンチで平安時代の竪穴建物跡、15～17 トレンチでは浅い谷状地形を検出したことから、拡張して面的調査を行った。トレンチと面的調査の範囲は最終的に繋がり、13・14 トレンチ拡張部を 4 区、その他の範囲を 3 区と呼称することとした。3・4 区では、丘陵南東斜面下部に 9 軒の竪穴建物跡が 2～4 m の標高差をもち、上・中・下の三列に分かれて分布する平安時代の集落跡が明らかとなった。

丘陵裾部では、南東端の 2 区と南西端の 5 区で当初から面的調査を実施した。2 区は 3 区南部から谷状地形が続き、埋積する黒色土には平安時代の遺物が包含されていたことから、遺構が存在する可能性を考え面的調査を実施したが、遺構は確認できなかった。谷状地形の調査は 3 区では全面的に、2～3 区間ではトレンチを掘削し（18～20 T）、2 区では西壁に沿った深掘部で基盤まで掘削したが、遺構はなかった。谷状地形の南側にあたる 5 区は、谷状地形より若干高い平坦部となる。その地形状況から、遺構の存在が推測されたので面的調査を行ったが、遺構は検出できなかった。

3 基本層序

基本層序は第 I～IV 層に大別できる（第 9 図）。第 I 層は耕作土、造成土、かく乱を含む調査区全体の表土を一括する。第 II 層は丘陵頂部～上部の 1 区のみ存在する灰黄褐色土で、IV 層由来の黄褐色土ブロックと古代以降の遺物を含み、最頂部を除くほぼ全域に広がる。1 区の遺構検出面は第 II 層直下の第 IV 層上面で、遺構は第 II 層中には立ち上がらない。第 III 層は丘陵裾部を西から東へ延びる谷状地形を埋積する黒色～黒褐色土層で、3 区南部から 2 区にかけて広がる。上流側の 3 区では 2 細分、下流側の 2 区では 5 細分したが、細分層の層界は不明瞭である。縄文～平安時代の遺物を含むが、包含は上部にはほぼ限られる。第 IV 層は遺跡全体の基盤を成す黄褐色土である。3～5 区の谷状地形を除く部分では、第 I 層直下が第 IV 層となる。遺構検出面は、第 IV 層上面である。

引用・参考文献

佐久市 1995 『佐久市志 歴史編（一） 原始・古代』

市教委 2001 『榛名平遺跡 第 I～IV 分冊』

市教委 2012 『市内遺跡発掘調査報告書 2010』

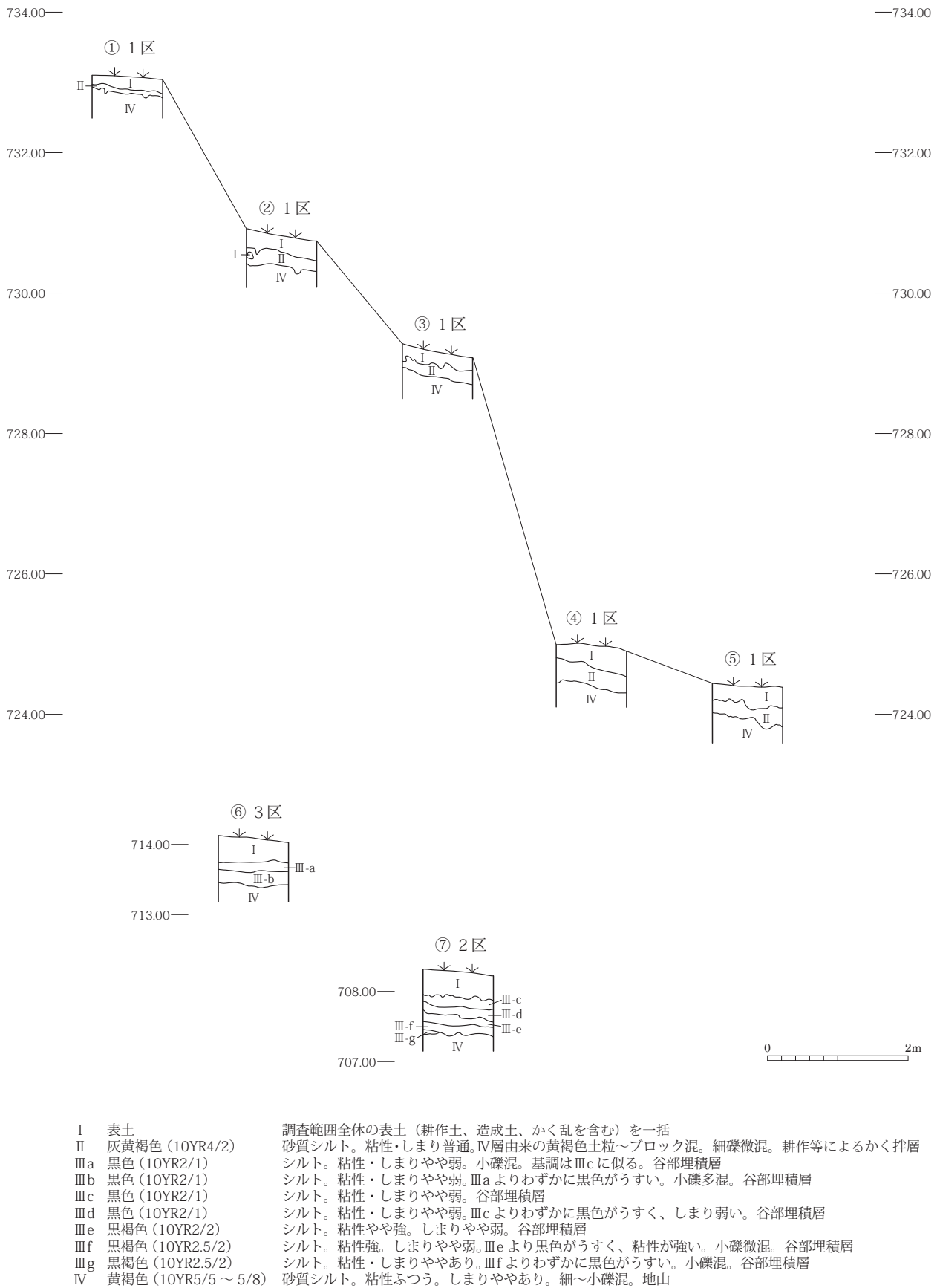
県教委 2010 『県内遺跡発掘調査報告書—遺跡詳細分布調査—』 5

県教委 2013 『県内遺跡発掘調査報告書—遺跡詳細分布調査—』 6

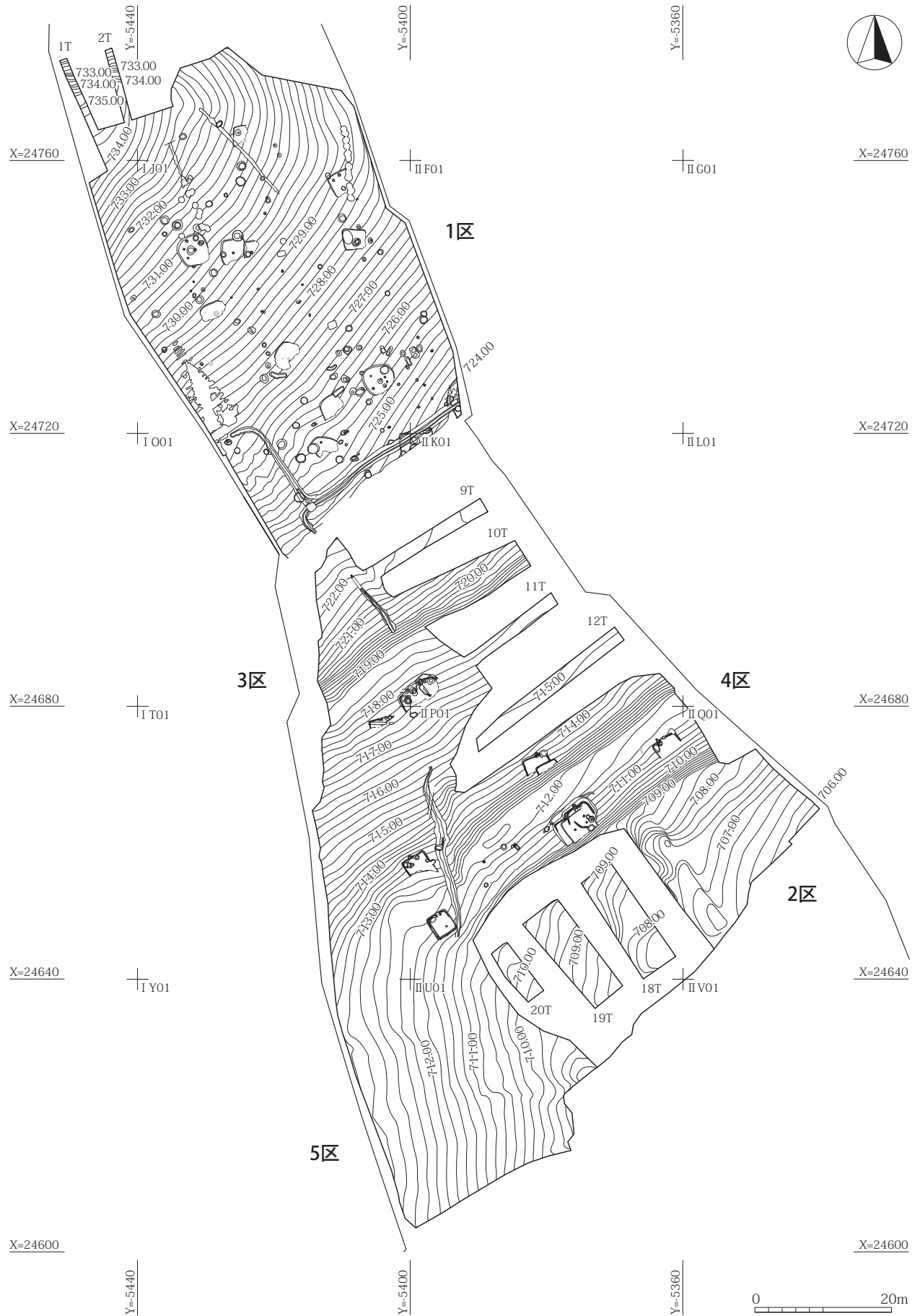


第8図 トレンチ・調査区配置図

第4章 小山の神B遺跡



第9図 土層柱状図



第10図 遺構全体図

第2節 縄文～弥生時代の遺構と遺物

1 概観

1区で縄文時代前期初頭、前期後葉、前期末葉および弥生時代前期の遺構を検出した(第11図)。1区の地形は北西端部から南東方向へ下る緩やかな斜面で、標高は724～735 mを測る。調査区の北側は崖面を形成し、南側は3区との境界付近が地形の変換点となり、隣接する3区で斜面の傾斜度が増す。

遺構は北側の崖面から約10 mの間は存在せず、南側は3区で当該期の遺構を検出していないことから、1区の範囲が遺構分布の北限・南限に当たると考えられる。それに対して東西方向は、調査区が尾根を横断するため、遺構分布の詳細は不明である。ただし、西側は1区の境界に向かって遺構数が減少する傾向にあり、多数の遺構が調査区外へと広がる可能性は低いと見られる。検出した遺構は竪穴建物跡が14軒、土坑が101基、焼土跡が1基で、遺物は1区で遺構と同じ時期の土器と石器が出土したほか、2～4区の遺構外から縄文時代中期後葉の土器と石器、弥生時代前～中期の土器が出土した。

2 遺構

(1) 竪穴建物跡(第12～15図、PL1・2)

SB01(第12図、PL1)

位置：1区、IJ20・25グリッド。検出：7トレンチ掘削時に当該遺構を確認した。精査の結果、基本層序第IV層上面でプランを検出した。南東部の床と壁は削平され残存しない。重複関係：SK118を切る。埋土：4層が堆積する。壁際に断面三角形の4層黄褐色砂混じり粘質シルトが堆積後、3・2層褐色砂混じり粘質シルトが床面を覆い、4～2層の上部を1層褐色砂混じり粘質シルトが埋積する。形状・規模：平面形は不整形円形と考える。規模は北東・南西方向4.7 m、北西・南東方向の残存部4.2 mを測る。床・壁：竪穴の掘方を平坦に整え床面とする。硬化面や貼床は確認できなかった。壁は残存部の最大が38cmで、斜めに立ち上がる。柱穴：P1～3・5の4基を検出した。平面形は円形で、規模は長軸24～38cm、短軸22～34cm、深さ6～30cmと差がある。周溝：なし。炉：中央付近で検出した、径70cmの範囲に広がる焼土粒子を地床炉と考える。明確な掘込みや被熱面は確認できなかった。その他の施設等：P6は断面形が袋状を呈し、貯蔵穴と推測する。平面形は円形で直径110cm、袋部径120cm、底径100cm、深さ60cmを測る。また、性格不明だが直径50cm、深さ15cmを測るP4から、石皿が斜めの状態で出土した(第32図79、PL1)。遺物：埋土から縄文時代前期初頭と前期後葉の土器と石器(石鏃、石錐、石槍、微細な剝離がある剝片、二次加工がある剝片、石匙、両極石器、礫器、石核、凹石・磨石・敲石、石皿・台石、剝片)が出土した。土器は小破片で、前期後葉が主体となる。また、上記のとおりP4で石皿が出土した。時期：不明確だが、埋土で出土した土器の主体となる時期をもって、縄文時代前期後葉と推測する。

SB02(第12図)

位置：1区、IJ24グリッド。検出：基本層序第IV層上面で、北西部壁コーナー付近のプランを検出した。ほかには削平され残存しない。重複関係：SK38に切られる。埋土：2層が堆積する。壁際に断面三角形の2層褐色砂混じり粘質シルトが堆積後、上部を1層褐色砂混じり粘質シルトが埋積する。形状・規模：平面形は不明だが、残存する北西部コーナーが隅丸方形を呈することから、隅丸方形もしくは隅丸長方形の可能性はある。残存部の規模は北東・南西方向で3.4 m、北西・南東方向で2.7 mを測る。床・

壁：竪穴の掘方を平坦に整え床面とする。硬化面や貼床は確認されなかった。壁は残存部の最大が15cmで、斜めに立ち上がる。柱穴：検出できなかった。周溝：なし。炉：検出できなかった。その他の施設：なし。遺物：1層を主体に、縄文時代前期初頭の土器と石器（石鏃、微細な剝離がある剝片、二次加工がある剝片、石匙、両極石器、石核、原石、凹石・磨石・敲石、剝片）が出土した。土器は全て小破片である。時期：不明確だが、埋土で出土した土器の時期をもって、縄文時代前期初頭と推測する。

S B 03 (第12図)

位置：1区、I J 18グリッド。検出：基本層序第IV層上面で北～西壁にかけての一部のプランを検出した。ほかの部分は削平され残存しない。重複関係：なし。埋土：単層で、にぶい黄褐色シルトが堆積する。形状・規模：平面形は不明だが、北西部コーナーが隅丸方形を呈することから隅丸方形もしくは隅丸長方形の可能性がある。残存部の規模は北東・南西方向で4.1 m、北西・南東方向で3.1 mを測る。床・壁：竪穴の掘方を平坦に整え床面とする。硬化面や貼床は確認できなかった。壁は残存部の最大が8 cmで、斜めに立ち上がる。柱穴：検出できなかった。周溝：なし。炉：中央付近に広がる被熱面を地床炉と考える。その他の施設：なし。遺物：1層から縄文時代前期初頭の土器と石器（磨製石斧、凹石・磨石・敲石、剝片）が出土した。土器は全て小破片である。時期：不明確だが、埋土で出土した土器の時期をもって、縄文時代前期初頭と推測する。

S B 04 (第13図)

位置：1区、I J 12グリッド。検出：基本層序第IV層上面で北西壁付近のプランを検出した。ほかの部分は削平され残存しない。重複関係：なし。埋土：単層で、にぶい黄褐色シルトが堆積する。形状・規模：平面形は不明だが、残存する壁が直線的であることから隅丸方形もしくは隅丸長方形の可能性がある。残存部の規模は北東・南西方向で3.9 m、北西・南東方向で2.5 mを測る。床・壁：竪穴の掘方を平坦に整え床面とする。硬化面や貼床は確認できなかった。壁は残存部の最大が10cmで、斜めに立ち上がる。柱穴：検出できなかった。周溝：なし。炉：中央付近で検出した径1 mの被熱面を、地床炉と考える。明確な掘込みはない。その他の施設：なし。遺物：埋土から縄文時代前期初頭の土器と石器（剝片）が出土した。土器は全て小破片である。時期：不明確だが、埋土で出土した土器の時期をもって、縄文時代前期初頭と推測する。

S B 05 (第13図)

位置：1区、I J 07グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。東～南壁付近は削平され残存しない。重複関係：S K 33に切られる。埋土：基本的には単層で、褐色砂混じり粘質シルトが堆積する。東西方向の断面は、炭化物粒と礫の量やしまりの違いから2層堆積となる。形状・規模：平面形は不明確だが、残存部から推測すると隅丸方形もしくは隅丸長方形の可能性がある。残存部の規模は、北西・南東方向で3.6 m、北東・南西方向で4.0 mを測る。床・壁：竪穴の掘方を平坦に整え床面とする。硬化面や貼床は確認できなかった。壁は残存部の最大が25cmで斜めに立ち上がる。柱穴：検出できなかった。周溝：なし。炉：中央付近で検出した径40cm、深さ3 cmの窪みに広がる被熱面を地床炉と考える。その他の施設：性格不明だが、西壁際で長軸85cm、短軸70cm、深さ24cmの楕円形土坑P1を検出した。遺物：埋土から縄文時代前期初頭の土器と石器（原石、剝片）が出土した。土器は全て小破片である。時期：不明確だが、埋土から出土した土器の時期をもって、縄文時代前期初頭と推測する。

S B 06 (第13図、P L 1)

位置：1区、I J 06・07・11・12グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。南東壁コーナー付近は削平され残存しない。重複関係：S K 121を切る。埋土：4層が堆積する。壁際に断面三角形の4層褐色礫混じり砂質シルトが堆積後、3～2層の暗褐色・褐色礫混じり砂質シルトが床面を覆い、その上

部を1層褐色砂質シルトが埋積する。**形状・規模**：平面形は残存部から見て隅丸方形と考える。規模は北西・南東方向、北東・南西方向ともに4.5mを測る。**床・壁**：堅穴の掘方を平坦に整え床面とする。重複関係にあるSK121上部のみ、SK121を覆うように貼床（5層褐色粘質シルト）を施していた。壁は残存部の最大が45cmで斜めに立ち上がる。**柱穴**：P2～6の5基を、位置や形状などから柱穴と考えた。東壁際のP2は深さ75cm、南壁際のP3は深さ70cmだが、P4～6は深さ約10cmと浅い。P2はP3～6よりも掘方が極めて大きい。**周溝**：なし。**炉**：中央付近で検出した径40cm、深さ6cmの窪みに広がる被熱面を、地床炉と考える。**その他の施設**：性格は不明だが、北東コーナー付近で長軸90cm、短軸80cm、深さ24cmを測る円形土坑P1を検出。**遺物**：埋土3層の床面付近を中心に、拳大から人頭大の礫とともに、縄文時代前期初頭と前期後葉の土器と石器（石鏃、石鏃未製品、石槍、微細な剝離がある剝片、打製石斧、石核、原石、凹石・磨石・敲石、石皿・台石、剝片）が出土した。土器の主体は前期後葉で、P6の南側と地床炉の南側では完形に近い個体が各1個出土した（第22図42、PL4）。P6の南側で出土した個体（PL4）は、種実圧痕土器である。床面付近において潰れた状態で出土したが、ほかの土器と出土状況などに違いはない。**時期**：不明確だが、埋土で出土した土器の主体となる時期をもって、縄文時代前期後葉と推測する。

SB07（第14図）

位置：1区、IE22グリッド。**検出**：基本層序第IV層上面で検出した。北西壁コーナー付近以外は削平され残存しない。**重複関係**：なし。**埋土**：単層で、褐色砂質シルトが堆積する。**形状・規模**：平面形は不明だが、北西壁コーナーが隅丸方形を呈する点から、隅丸方形もしくは隅丸長方形の可能性もある。残存部の規模は南北方向で3.1m、東西方向で2.2mを測る。**床・壁**：堅穴の掘方を平坦に整え床面とする。貼床や硬化面は確認できなかった。壁は残存部の最大が18cmで斜めに立ち上がる。**柱穴**：検出できなかった。**周溝**：なし。**炉**：中央付近で検出した長軸68cm、短軸62cmを測る被熱面を地床炉と考える。**その他の施設**：性格不明だが、北西壁コーナー付近で長軸86cm、短軸84cm、深さ45cmの隅丸長方形を呈する土坑P1を検出した。P1では3層下面に被熱面が広がり、底面付近の5層では石皿が出土した。**遺物**：埋土から縄文時代前期初頭の土器と石器（微細な剝離がある剝片、石皿・台石、剝片）が出土した。土器は全て小破片である。また、上記のとおりP1では石皿が出土した。**時期**：不明確だが、埋土から出土した土器の時期をもって、縄文時代前期初頭と推測する。

SB08（第14図、PL2）

位置：1区、IJ04グリッド。**検出**：基本層序第IV層上面で検出した。北西～南西壁付近以外は削平され残存しない。**重複関係**：SK71に切られる。**埋土**：2層が堆積する。壁際に断面三角形の2層褐色粘質シルトが堆積し、その上部を1層褐色砂混じり粘質シルトが埋積する。**形状・規模**：平面形は不明だが北西壁コーナーが隅丸方形で、壁のプランが直線的であることから、隅丸方形もしくは隅丸長方形の可能性もある。残存部の規模は、北西・南東方向で3.4m、北東・南西方向で3.1mを測る。**床・壁**：堅穴の掘方を平坦に整え床面とする。貼床や硬化面は確認できなかった。壁は残存部の最大が22cmで、斜めに立ち上がる。**柱穴**：P1・2の2基を位置や規模などから柱穴と考えた。円形を呈し径は40～50cm、深さは25cmを測る。また、規模はやや小さいが、P1・2とほぼ同一の深さで、褐色粘質シルトが堆積するP3を本堅穴建物跡に伴う柱穴と考えた。P2では、掘方をふさぐような状態で、使用面を下位にして石皿が出土した（第32図82、PL2）。P2が柱穴であれば、堅穴建物の廃絶時に柱を抜き、石皿を置いた可能性もある。**周溝**：なし。**炉**：中央付近で検出した、径60cmの範囲に広がる被熱面を地床炉と考える。**その他の施設**：なし。**遺物**：埋土から縄文時代前期初頭と前期後葉以降の土器と石器（スクレイパー、微細な剝離がある剝片、石核、凹石・磨石・敲石、石皿・台石、剝片）が出土した。土器の主体は前期初頭で、全て小破片である。**時期**：不明確だが、埋土で出土した土器の主体となる時期をもって、縄文時代

前期初頭と推測する。

S B 09 (第14図)

位置：1区、I J 09・10グリッド。**検出**：基本層序第IV層上面で検出した。東～南壁付近は削平され残存しない。**重複関係**：S K 122を切る。**埋土**：基本的には、にぶい黄褐色シルトの単層だが、床面付近に黄褐色シルトが堆積する部分がある。**形状・規模**：平面形は隅丸長方形を呈する。残存部の規模は南北方向で3.1 m、東西方向で3.5 mを測る。**床・壁**：竪穴の掘方を平坦に整え床面とする。貼床や硬化面は確認できなかつた。壁は残存部の最大が40cmで斜めに立ち上がる。**柱穴**：検出できなかつた。**周溝**：なし。**炉**：中央より南側へ寄った位置で検出した被熱面を、地床炉と考える。**その他の施設**：なし。**遺物**：埋土から縄文時代前期末葉の土器と石器（微細な剝離がある剝片、打製石斧、石核、凹石・磨石・敲石、剝片）が出土した。土器は全て小破片である。**時期**：不明確だが、埋土から出土した土器の時期をもって、縄文時代前期末葉と推測する。

S B 10 (第15図)

位置：1区、I J 07・08グリッド。**検出**：基本層序第IV層上面で検出した。北西壁コーナー付近以外は削平され残存しない。**重複関係**：S B 05、S K 141に切られる。**埋土**：単層で、褐色粘質シルトが堆積する。**形状・規模**：平面形は不明だが、北西部コーナーが隅丸方形を呈することから、隅丸方形もしくは隅丸長方形の可能性はある。残存部の規模は南北方向で2.6 m、東西方向で2.3 mを測る。**床・壁**：竪穴の掘方を平坦に整え床面とする。貼床や硬化面は確認できなかつた。壁は残存部の最大が12cmで、斜めに立ち上がる。**柱穴**：検出できなかつた。**周溝**：なし。**炉**：南側で検出した長軸90cm、短軸70cmの被熱面を地床炉と考える。**その他の施設**：なし。**遺物**：埋土から縄文時代前期初頭の土器と石器（スクレイパー、二次加工がある剝片、石核、凹石・磨石・敲石、剝片）が出土した。土器は全て小破片である。**時期**：不明確だが、縄文時代前期初頭のS B 05に切られる点と、埋土から出土した土器の時期から、縄文時代前期初頭と推測する。

S B 11 (第15図)

位置：1区、I O 04グリッド。**検出**：基本層序第IV層上面で検出した。北西壁コーナー付近以外は削平され残存しない。**重複関係**：S K 76に切られる。**埋土**：2層が堆積する。壁際に断面三角形の2層褐色砂混じり粘質シルトが堆積し、その上部を1層褐色砂混じり粘質シルトが埋積する。**形状・規模**：平面形は不明だが、北西壁コーナーが開く点から不整形などの可能性がある。残存部の規模は北西・南東方向で3.7 m、北東・南西方向で3.4 mを測る。**床・壁**：竪穴の掘方を平坦に整え床面とする。貼床や硬化面は確認できなかつた。壁は残存部の最大が30cmでほぼ垂直に立ち上がる。**柱穴**：楕円形で深さ8 cmを測るP 1を柱穴と考える。**周溝**：なし。**炉**：検出できなかつた。**その他の施設**：なし。**遺物**：埋土から縄文時代前期初頭と前期末葉の土器と石器（石匙、剝片）が出土した。土器は全て小破片である。**時期**：不明確だが、埋土から出土した土器の時期をもって縄文時代前期初頭もしくは縄文時代前期末葉と推測する。

S B 12・14 (第15図)

位置：1区、II F 21グリッド。**検出**：基本層序第IV層上面でS B 12を検出した。先行トレンチにより、S B 12の床面（硬化面）を掘り込む別のプランを検出し、これをS B 14とした。先行トレンチ断面（C-D）で、S B 12の埋土と床面（硬化面）を切るS B 14の立ち上がり、と、S B 12よりも深いレベルでS B 14の床面を確認した。**重複関係**：S B 12はS B 14・S D 05・S K 127に切られる。S B 14はS B 12を切り、S D 05に切られる。**埋土**：S B 12は5層が堆積する。床面に5層極暗褐色砂質シルトが薄く堆積後、壁際に断面三角形の3層褐色砂質シルト、4層褐色粘質シルトが堆積し、その上部を2層暗褐色砂質シルトと1層褐色砂質シルトが埋積する。S B 14は3層が堆積する。壁際に断面三角形

の10層暗褐色砂質シルトが堆積し、その上部を8・9層暗褐色砂質シルトが埋積する。形状・規模：S B 12・14ともに調査区外へと延び不明確だが、S B 12は壁に明確なコーナーが認められないことから不整形の可能性がある。S B 14は北西壁コーナーが隅丸方形を呈することから、隅丸方形もしくは隅丸長方形の可能性がある。床・壁：S B 12・14ともに堅穴の掘方を平坦に整え床面とする。S B 12では、硬化面を確認した。壁は残存部の最大がS B 12で48cm、S B 14で58cmを測り、斜めに立ち上がる。柱穴：検出できなかった。周溝：なし。炉：検出できなかった。その他の施設：性格不明だが、S B 12では長軸82cm、短軸68cm、深さ50cmで楕円形を呈する土坑P1を検出した。S B 14では径86cm、深さ30cmで円形を呈する土坑P1と、長軸66cm、短軸40cm、深さ18cmで楕円形と推測する土坑P2を検出した。遺物：S B 12では縄文時代前期初頭の土器と石器（石鏃、スクレイパー、剥片）が出土した。土器は全て小破片である。S B 14では縄文時代前期初頭と前期後葉・末葉の土器と石器（石鏃未製品、石錐、スクレイパー、微細な剥離がある剥片、石核、凹石・磨石・敲石、石皿・台石、剥片）が出土した。土器の主体は前期後葉と末葉だが、全て小破片である。時期：不明確だが、S B 12は縄文時代前期後葉もしくは末葉と推測するS B 14に切られ、出土した土器が前期初頭であることから縄文時代前期初頭、S B 14は出土した土器の主体となる時期をもって、縄文時代前期後葉もしくは末葉と推測する。

S B 13 (第15図)

位置：1区、I J 25、I O 05、II F 21、II K 01 グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。1/2以上の範囲が調査区外へ延びる。重複関係：S D 05、S K 123・126に切られる。埋土：単層で、暗褐色粘質シルトが堆積する。形状・規模：不明確だが、北西壁コーナーが隅丸方形を呈し壁が直線的であることから、隅丸方形もしくは隅丸長方形の可能性が高い。床・壁：堅穴の掘方を平坦に整え床面とする。貼床や硬化面は確認できなかった。壁は残存部の最大が15cmで斜めに立ち上がる。柱穴：検出できなかった。周溝：なし。炉：検出できなかった。その他の施設：性格不明だが中央付近で長軸126cm、短軸112cm以上、深さ30cmの楕円形もしくは円形と推測する土坑P1を検出した。遺物：埋土から縄文時代前期初頭の土器と石器（石核、剥片）が出土した。土器は全て小破片である。時期：不明確だが、埋土から出土した土器の時期をもって、縄文時代前期初頭と推測する。

(2) 土坑 (第16～20図、第6表、P L 2)

検出した当該期の土坑は合計101基を数える。検出時に遺構記号(S K)を付したが、調査の結果かく乱と判断したものがあり、欠番が生じている。検出面は、堅穴建物跡と同じ基本層序第IV層上面である。各土坑の属性については第6表に示した。個別遺構図については、特徴的なものを抽出して掲載した(第16～20図)。それ以外の土坑は、第11図の1区遺構分布図を参照されたい。

①時期

土坑の時期決定は困難だが、遺構の重複関係から判断したものと出土した土器で判断したものがある。新旧の土器が出土している場合は、主体となる土器の時期、もしくは新しい土器の時期をもって土坑の時期を決めた。確認できた土坑の時期は、堅穴建物跡と同じ縄文時代前期初頭、前期後葉、前期末葉で、そのほか堅穴建物跡には存在しない弥生時代前期のものが認められた。

②平面形状と断面形状

平面形状は開口部の長軸長と短軸長の比により、以下のように分類した。一定の形状を示さないものについては不整形とした。

・円形・方形 : 長軸長/短軸長 = 1.2 未満のもの

・楕円形・長方形 : 長軸長/短軸長 = 1.2 以上のもの

断面形状は底部と壁の状態から、以下のように分類した。

- ・逆台形：底部が平坦で壁が斜めに立ち上がるもの
- ・タライ形：底部が平坦で壁が垂直ないし垂直近くに立ち上がるもの
- ・U字形：底部が丸みを帯び、壁が垂直もしくは斜めに立ち上がるもの
- ・播鉢形：小さく丸い底部から壁が斜めに立ち上がるもの
- ・袋状：開口部より外側に底部が広がり、壁がオーバーハングするもの
- ・二段掘状：底部に有段状の凹部をもつもの
- ・円筒状：小型で直径と比較して深さがあり、壁が垂直ないし垂直に近い角度で立ち上がるもの

第6表 土坑一覧表

S K 番号	図版 番号	P L 番号	グリッド	時 期	形 状		規 模 (cm)			出土遺物		重複 関係
					平面形	断面形	長軸	短軸	深さ	土器	石器	
05	16		I-E-21	縄文前期初頭	円形	逆台形	109	95	40	縄文前期初頭		
06	16		I-J-06	縄文前期後葉	円形	逆台形	140	133	68	縄文前期初頭 縄文前期後葉	黒曜石剥片	
08			I-J-17		楕円形	U字	56	42	13		凹石	
09	16		I-J-02		円形	逆台形	62	54	14		石皿?	
10			I-J-10		楕円形	逆台形	98	62	32			
11			I-J-15	縄文前期初頭	方形	逆台形	92	78	37	縄文前期初頭	黒曜石剥片	
12	16		I-J-11	縄文前期初頭	楕円形	逆台形	170	110	24	縄文前期初頭	黒曜石剥片	
24			I-J-12		楕円形	すり鉢	32	26	34			
25			I-J-11		楕円形	タライ	36	24	12			
26	16		I-J-12	縄文前期後葉	円形	U字	60	56	23	縄文前期後葉		
27			I-J-16		円形	二段掘	86	78	42			
28	16		I-J-02		楕円形	タライ	104	86	56			
31	16		I-O-02	縄文前期初頭	楕円形	二段掘	114	82	42	縄文前期初頭	黒曜石・泥岩 剥片	
32			I-O-03			タライ		(110)	70			
33	16		I-J-07	縄文前期末葉	円形	U字	160	160	87	縄文前期初頭 縄文前期末葉	石鏃、黒曜石 ・泥岩剥片	SB05 を切る
34	16		I-J-07 I-J-12	縄文前期後葉	円形	逆台形	126	117	36	縄文前期後葉	石匙、黒曜石 剥片	
37			I-J-06	縄文前期末葉	円形	U字	76	70	38	縄文前期末葉		
38	16		I-J-24		長方形	逆台形	194	84	26		凹石	
39	17		I-J-12		円形	逆台形	121	112	38			
45			I-J-12		楕円形	逆台形	115	86	28			
46	17		I-J-18	縄文前期後葉	不整 円形	逆台形	116	104	44	縄文前期初頭 縄文前期後葉	黒曜石剥片	
47			I-J-13	縄文前期初頭	不整形	すり鉢	63	36	16	縄文前期初頭	黒曜石剥片	
48	17		I-O-04	弥生前期	円形	タライ	120	106	66	弥生前期	打製石斧、安 山岩剥片	
49			I-O-04 I-O-05	縄文前期初頭	不整形	すり鉢	126	88	33	縄文前期初頭	黒曜石剥片	
50			I-O-05	縄文前期末葉	円形	すり鉢	38	36	30	縄文前期末葉		
51	17	2	I-J-02	縄文前期末葉	楕円形	袋	106	86	106	縄文前期初頭 縄文前期末葉	打製石斧?、 凹石、石核、 黒曜石・チ ャート・泥岩 剥片	
52			I-J-18	縄文前期末葉?	円形	逆台形	73	66	30	縄文前期末葉?		
53			I-J-18		円形	逆台形	66	59	30			
54	17		I-J-18 I-J-23	縄文前期初頭	不整形	U字	136	123	44	縄文前期初頭		
55			I-J-13		楕円形	すり鉢	73	46	28			
57			I-J-25	縄文前期末葉?	円形	タライ	44	39	14	縄文前期末葉?		

第4章 小山の神B遺跡

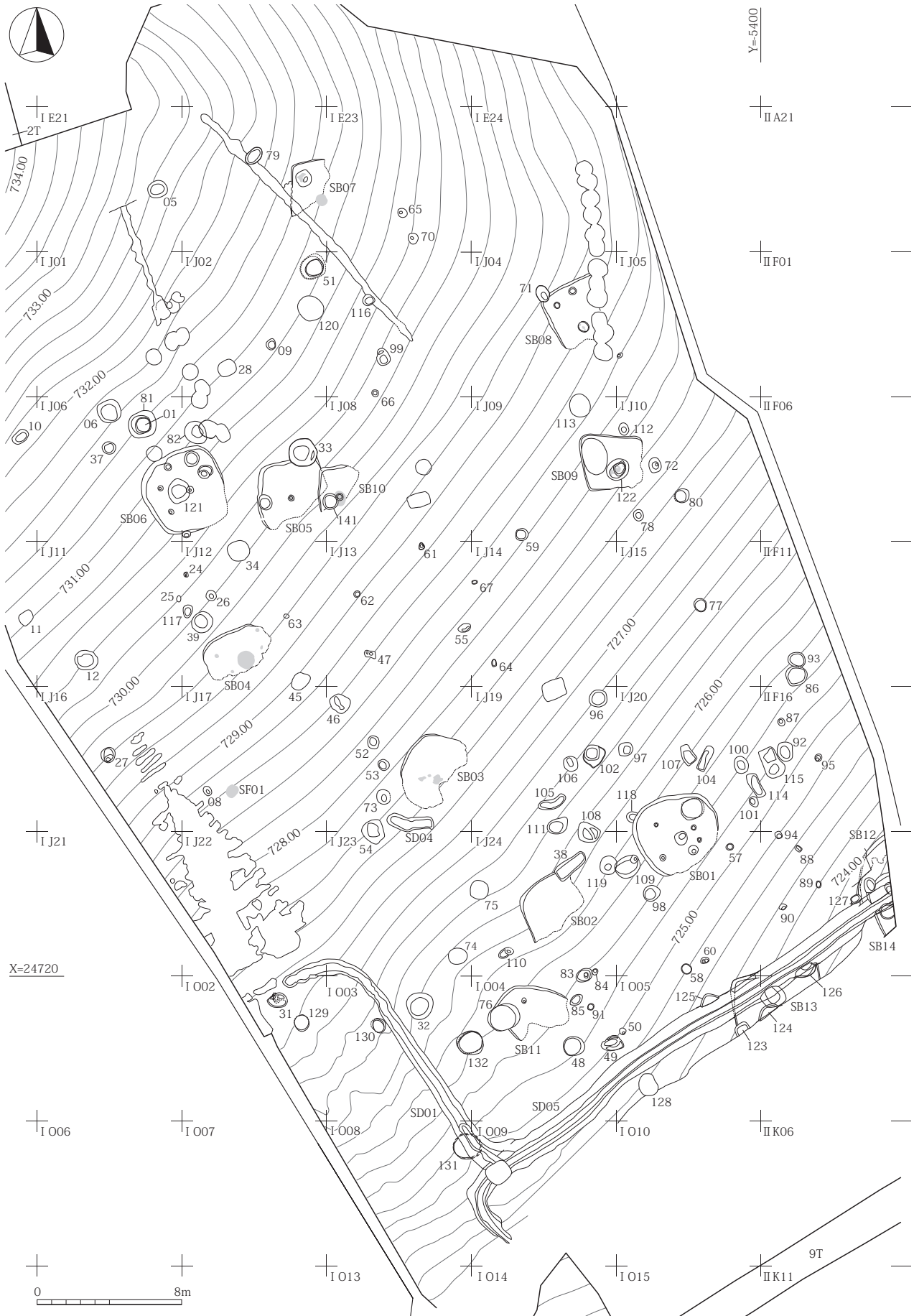
S K 番号	図版 番号	P L 番号	グリッド	時 期	形 状		規 模 (cm)			出土遺物		重複 関係
					平面形	断面形	長軸	短軸	深さ	土器	石器	
59			I-J-09	縄文前期末葉	円形	タライ	72	68	48	縄文前期末葉	黒曜石剥片	
60			I-J-25		楕円形	二段掘	48	34	28		チャート剥片	
61			I-J-13		楕円形	二段掘	40	33	17			
62			I-J-13		円形	円筒	41	36	35			
63			I-J-12		楕円形	逆台形	30	24	18			
64			I-J-14		楕円形	二段掘	41	26	32			
65			I-E-23		円形	U字	56	48	48			
66			I-J-03		円形	逆台形	41	38	23			
67			I-J-14		楕円形	逆台形	30	23	7			
70			I-E-23		円形	U字	63	55	31			
71			I-J-04		不整形	U字	96	68	40			SB08 を切る
72	17		I-J-10		楕円形	U字	82	67	59		黒曜石・チャート剥片	
73			I-J-18		円形	U字	80	74	64			
74	17		I-J-23		円形	タライ	104	90	62			
75	18		I-J-23 I-J-24	弥生前期?	円形	タライ	109	106	49	弥生前期?		
76	18		I-O-04	縄文前期末葉	楕円形	タライ	180	142	64	縄文前期初頭 縄文前期中葉 縄文前期末葉	石 鋳、黒曜石・チャート剥片	SB11 を切る
77			I-J-15		円形	タライ	78	68	17		安山岩剥片	
78			I-J-10		円形	U字	63	54	27		黒曜石剥片	
79			I-E-22		楕円形	U字	110	70	47		黒曜石剥片	
80			I-J-10	縄文前期後葉以降	円形	タライ	82	77	52	縄文前期初頭 縄文前期後葉以降	黒曜石剥片	
81	18		I-J-07		円形	タライ	168	156	88		二次加工剥片、黒曜石原石	
82	18		I-J-07	縄文前期初頭	楕円形	逆台形	176	115	116	縄文前期初頭		
83	18		I-J-24 I-O-04	縄文前期末葉	楕円形	二段掘	97	71	65	縄文前期末葉		
84			I-J-24		円形	U字	36	31	22		黒曜石剥片	
85	18		I-O-04	縄文前期末葉	楕円形	タライ	80	53	30	縄文前期初頭 縄文前期末葉	黒曜石剥片	
86	18		I-F-11	縄文前期初頭	楕円形	タライ	98	(80)	42	縄文前期初頭	黒曜石・チャート剥片	
87			II-F-16		円形	タライ	44	38	21			
88			II-F-21		楕円形	逆台形	41	28	18			
89			II-F-21	縄文前期初頭	楕円形	U字	42	28	20	縄文前期初頭		
90			II-F-21		菱形	U字	45	36	48		黒曜石剥片	
91			I-O-04	縄文前期後葉	円形	タライ	40	34	26	縄文前期後葉		
92			II-F-16	縄文前期末葉	楕円形	二段掘	108	84	26	縄文前期初頭 縄文前期末葉	泥岩剥片	
93			I-F-11		円形	タライ	120	(116)	28			
94			II-F-16 II-F-21		方形	タライ	42	38	21		チャート剥片	
95			II-F-16	縄文前期後葉	円形	U字	44	38	25	縄文前期後葉		
96	19		I-J-19	縄文前期後葉	円形	逆台形	104	96	46	縄文前期初頭 縄文前期後葉		
97	19		I-J-20	縄文前期末葉	不整形	逆台形	88	79	26	縄文前期初頭 縄文前期末葉	黒曜石剥片	
98	19		I-J-25	縄文前期後葉	円形	タライ	97	86	42	縄文前期初頭 縄文前期後葉		
99			I-J-03	弥生前期	不整形	U字	95	74	29	弥生前期	黒曜石剥片	
101			I-J-20		楕円形	すり鉢	60	48	32			

S K 番号	図版 番号	P L 番号	グリッド	時 期	形 状		規 模 (cm)			出土遺物		重複 関係
					平面形	断面形	長軸	短軸	深さ	土器	石器	
102			I-J-19		不整形	二段掘	128	124	24			
104	19		I-J-20	縄文前期末葉	長方形	すり鉢	147	52	25	縄文前期初頭 縄文前期末葉	チャート剥片	
105	19		I-J-19	縄文前期後葉以降	不整形	U字	162	54	33	縄文前期後葉以降	打製石斧、チャート剥片	
106			I-J-19		円形	U字	84	77	38			
107	19		I-J-20	縄文前期末葉	不整形	二段掘	120	77	27	縄文前期初頭 縄文前期末葉	凹石、黒曜石剥片	
108	19		I-J-19	縄文前期初頭	不整形	二段掘	130	106	44	縄文前期初頭		
109			I-J-24 I-J-25	縄文前期初頭	楕円形	逆台形	144	118	31	縄文前期初頭	スクレイパー、黒曜石剥片	
110			I-J-24		不整形	二段掘	88	48	36			
111			I-J-19 I-J-24		不整形	タライ	124	85	33			
112			I-J-10		楕円形	U字	70	54	34			
113	19		I-J-04 I-J-09	縄文前期末葉	円形	タライ	128	114	90	縄文前期末葉		
114	19		I-J-20	縄文前期末葉	長方形	逆台形	146	64	38	縄文前期末葉	黒曜石剥片	
115			II-F-16		長方形	二段掘	130	112	46			
116			I-J-03		円形	U字	68	62	28			
117			I-J-12		長方形	二段掘	72	52	33			
118			I-J-20		—	—	—	(60)	22		黒曜石剥片	
119			I-J-24	縄文前期後葉以降	円形	すり鉢	104	91	41	縄文前期後葉以降	黒曜石剥片	
120			I-J-02	縄文前期初頭	円形	タライ	146	130	37	縄文前期初頭	黒曜石剥片	
121	20		I-J-06 I-J-07	縄文前期後葉	円形	U字	138	118	75	縄文前期後葉	石核、凹石、黒曜石剥片	SB06に切られる
122			I-J-09 I-J-10	縄文前期初頭	円形	逆台形	122	110	32	縄文前期初頭		SB09に切られる
123			I-J-05	縄文前期初頭	—	U字	—	—	23	縄文前期初頭	打製石斧	
124			II-K-01	縄文前期初頭	—	タライ	—	—	18	縄文前期初頭	黒曜石・チャート剥片	
125			I-O-05	縄文前期後葉	—	(逆台形)	—	—	(16)	縄文前期初頭 縄文前期後葉		
126			II-F-21	縄文前期後葉	—	(逆台形)	—	—	(35)	縄文前期初頭 縄文前期後葉	チャート剥片	
127			II-F-21		楕円形	円筒	60	48	44			
129	20		I-O-02	弥生前期?	円形	タライ	94	82	48		石鋏	
130	19		I-O-03		楕円形	タライ	84	70	40			
131	20	2	I-O-08 I-O-09	弥生前期?	円形	タライ	152	144	80		石鋏、石核、黒曜石剥片	
132	20		I-O-03 I-O-04		円形	袋	149	140	62		黒曜石剥片	
141			I-J-08		円形	タライ	86	84	14			SB10を切る

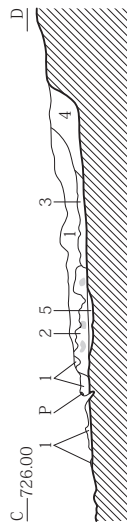
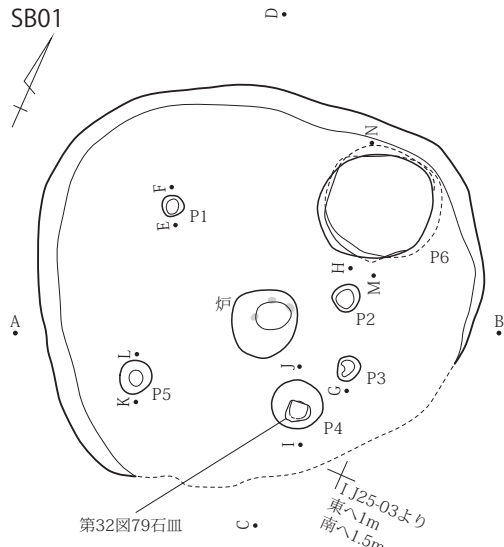
(3) 焼土跡

S F 01 (第20図)

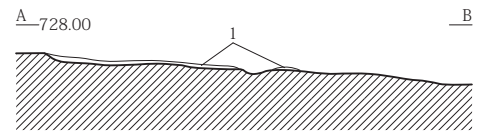
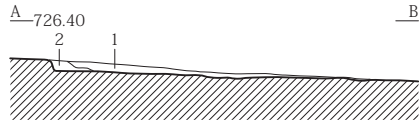
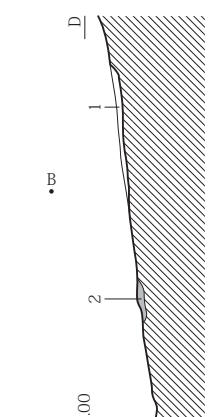
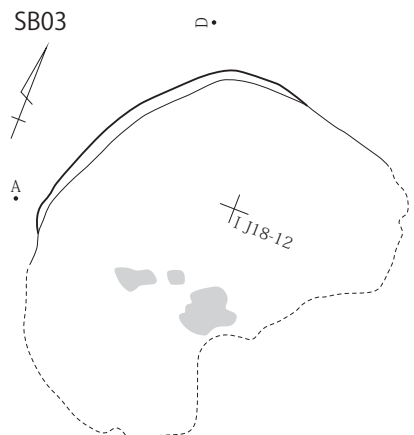
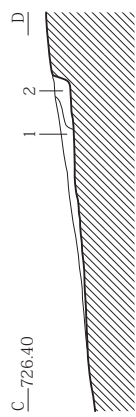
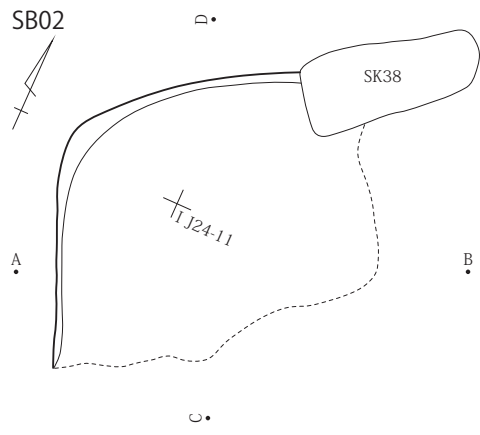
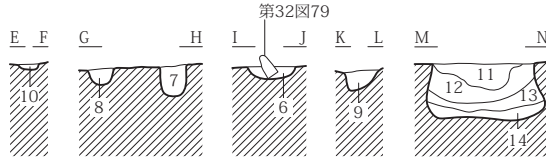
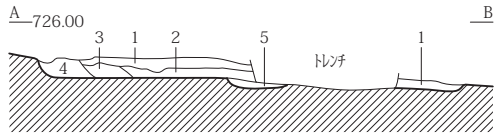
I J 17 グリッドで検出した長軸 72cm、短軸 64cmの範囲に広がる被熱面である。竪穴建物跡に付属する地床炉の可能性もあるが、周辺に柱穴など、竪穴建物跡に伴う施設がない点から、単独遺構ととらえておく。時期は、伴出した遺物や遺構の重複関係がなく不明だが、基本層序第IV層上面で検出している点から、ほかの遺構と同じ縄文時代前期初頭、前期後葉、前期末葉あるいは弥生時代前期のいずれかに該当する可能性がある。



第11図 1区 遺構分布図



- 1 褐色(10YR4/4)
砂混じり粘質シルト。粘性ややあり。しまり普通
1~2mm炭化物粒1%・5mm明黄褐色シルトブロック5%混
- 2 褐色(10YR4/4)
砂混じり粘質シルト。粘性1層よりあり。しまり普通
5~10mm焼土ブロック混
- 3 褐色(10YR4/6)
砂混じり粘質シルト。1層より粘性あり。しまり普通
20~30mm黄褐色シルトブロック30~40%混
- 4 黄褐色(10YR5/6)
砂混じり粘質シルト。粘性・しまりややあり
- 5 褐色(7.5YR4/4)
砂混じり粘質シルト。しまり弱。5~20mm焼土粒20~30%混
- 6 褐色(10YR4/4)
砂質シルト。しまりややあり
- 7 暗褐色(10YR3/4)
砂混じり粘質シルト。しまり普通
10mm黄褐色シルトブロック10%・5mm炭化物粒1%混
- 8 褐色(10YR4/4)
砂混じり粘質シルト。しまり普通
20mm黄褐色シルトブロック20%混
- 9 暗褐色(10YR3/4)
砂混じり粘質シルト。しまり普通
20~40mm黄褐色シルトブロック20%・5~10mm炭化物粒1%混
- 10 赤褐色(5YR4/6)
砂質シルト。しまりあり
10~20mm焼土粒・黄褐色シルトブロック30%混
- 11 にぶい黄橙色(10YR6/4)
砂混じり粘質シルト。しまり普通。2~3mm炭化物粒2%混
- 12 にぶい黄褐色(10YR6/4)
砂混じり粘質シルト。しまり普通。黄褐色シルトブロック層状に混
- 13 暗褐色(10YR3/4)
砂混じり粘質シルト。しまり普通
黄褐色シルトブロック30~40%混。3~5mm炭化物粒1%混
- 14 暗褐色(10YR3/4)
砂混じり粘質シルト。しまりあり
黄褐色シルトブロック10~20%混



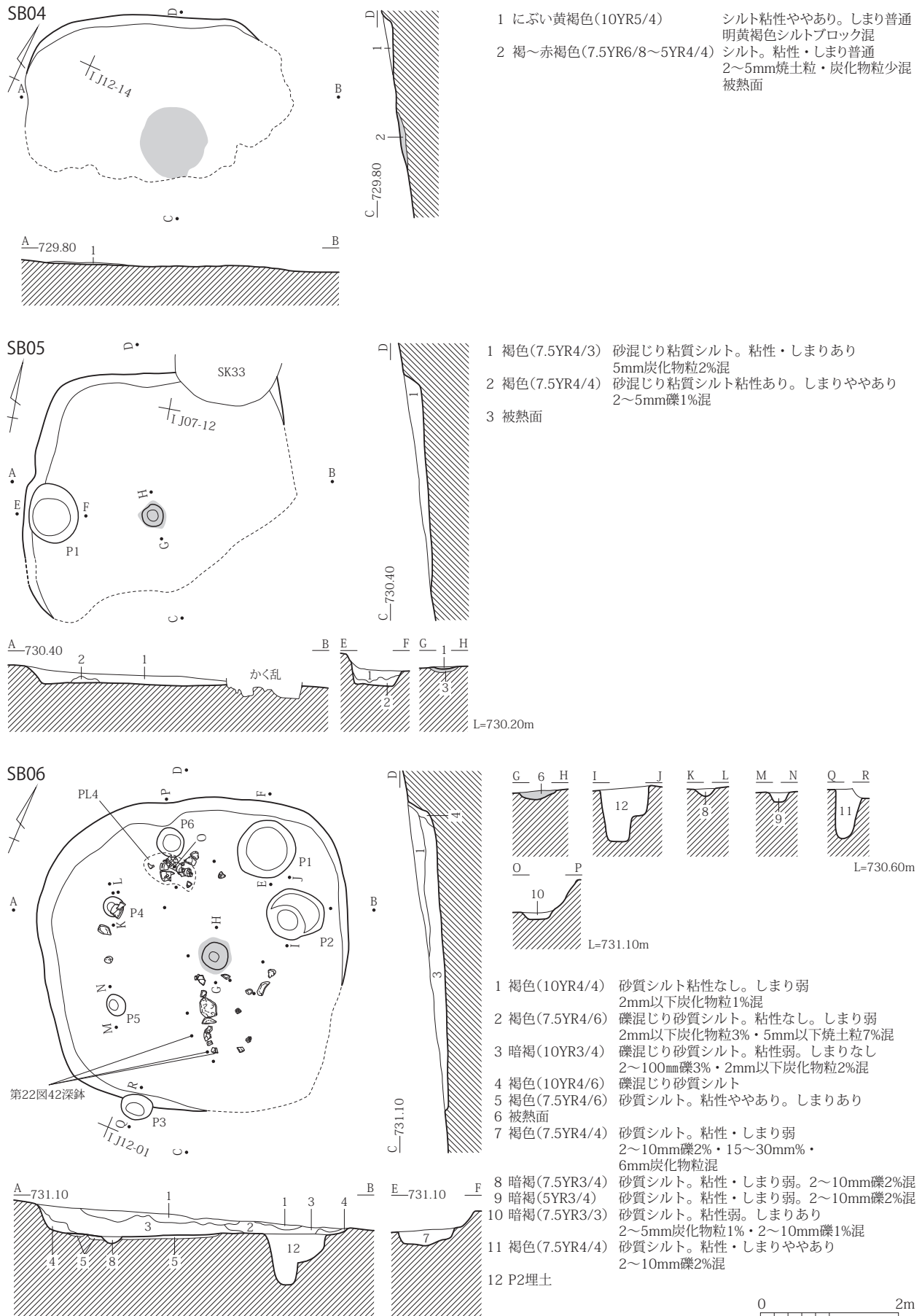
- 1 褐色(7.5YR4/4) 砂混じり粘質シルト。粘性ややあり。しまりあり
地山褐色土ブロック30~40mm混
- 2 褐色(7.5YR4/6) 砂混じり粘質シルト。粘性ややあり。しまり強
地山褐色土ブロック5~10mm混

- 1 にぶい黄褐色(10YR5/4) シルト。粘性ややあり。しまり普通
- 2 被表面



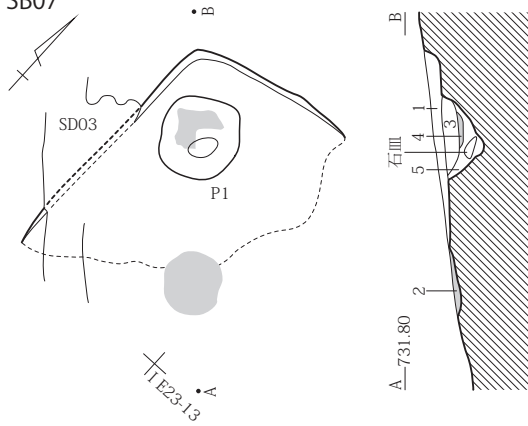
第12図 S B 01・02・03 遺構図

第4章 小山の神B遺跡



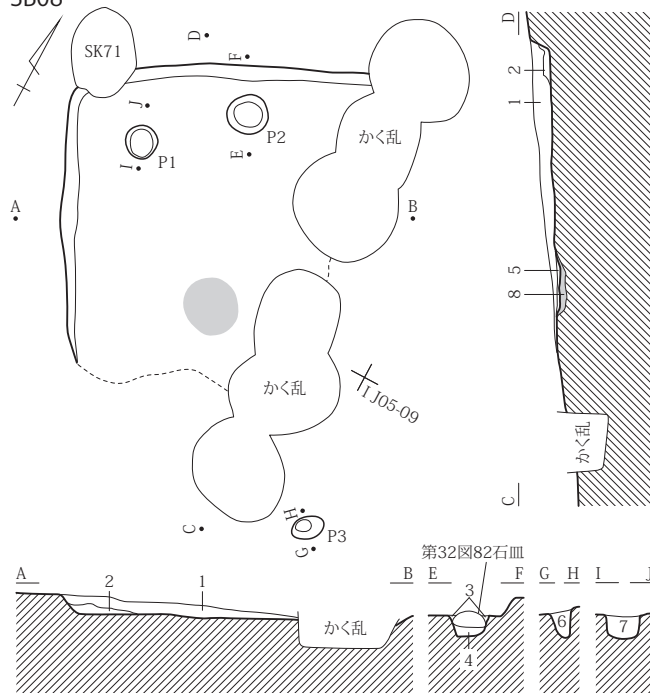
第13図 SB04・05・06 遺構図

SB07



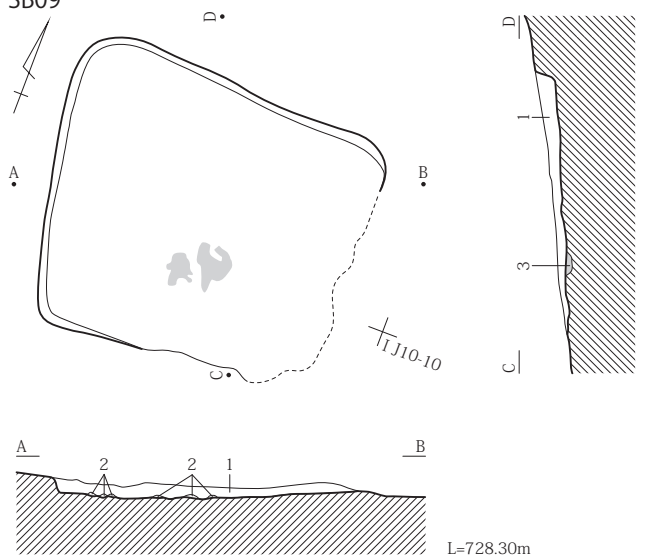
- 1 褐色(7.5YR4/4) 砂質シルト。粘性ややあり。しまりあり
20mm以下礫・2mm以下炭化物粒2%混
- 2 明褐色(10YR5/8) 砂質シルト。被熱面
- 3 褐色(7.5YR4/4) 砂質シルト。粘性・しまりややあり
10mm以下礫・2mm以下炭化物粒2%混
- 4 被熱面
- 5 褐色(10YR4/6) 砂質シルト。2mm以下炭化物粒1%混

SB08



- 1 褐色(7.5YR4/4) 砂混じり粘質シルト。粘性あり。しまりややあり
2mm炭化物粒3%・2~15mm炭化物粒1%・
2mm以下焼土粒1%混
- 2 褐色(7.5YR4/6) 粘質シルト。粘性・しまりあり
2mm以下炭化物粒1%混
- 3 褐色(7.5YR4/6) 粘質シルト。粘性あり。しまり弱
10mm以下焼土粒3%・2mm以下炭化物粒2%混
- 4 褐色(7.5YR4/4) 砂混じり粘質シルト。粘性あり。しまり弱
2mm以下炭化物粒1%混。掘り方
- 5 褐色(7.5YR4/6) 粘質シルト。粘性・しまりあり
2mm以下炭化物粒1%混
- 6 褐色(7.5YR4/4) 粘質シルト。粘性あり。しまり弱
2mm以下炭化物粒混
- 7 褐色(7.5YR4/4) 粘質シルト。粘性あり。しまり弱
2mm以下炭化物粒混
- 8 被熱面

SB09

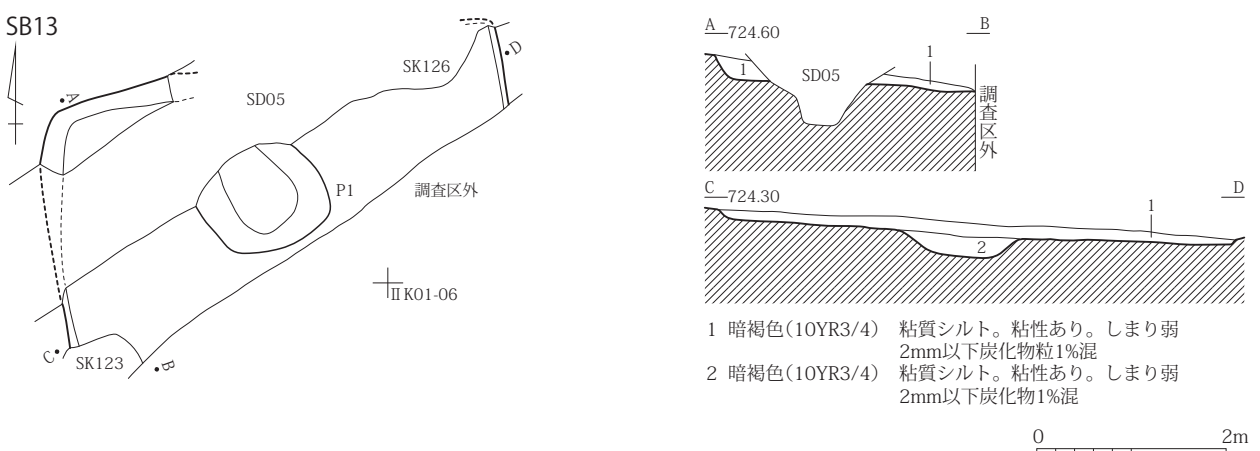
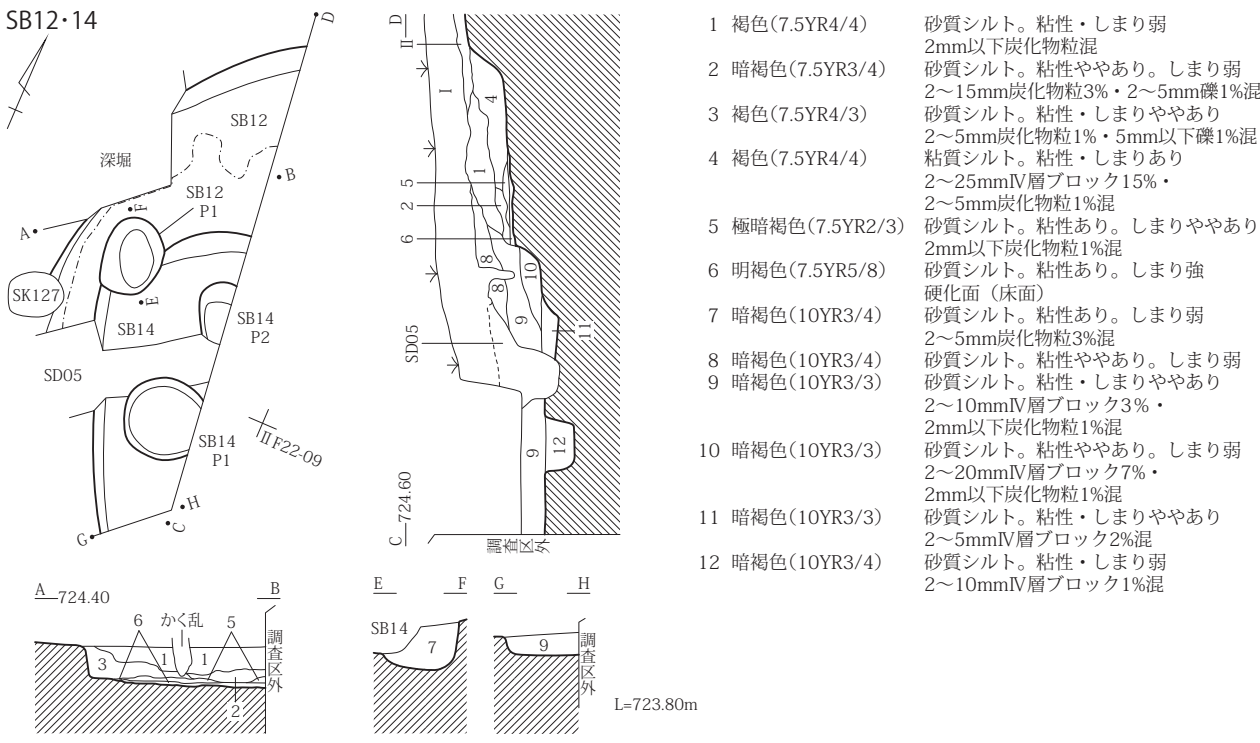
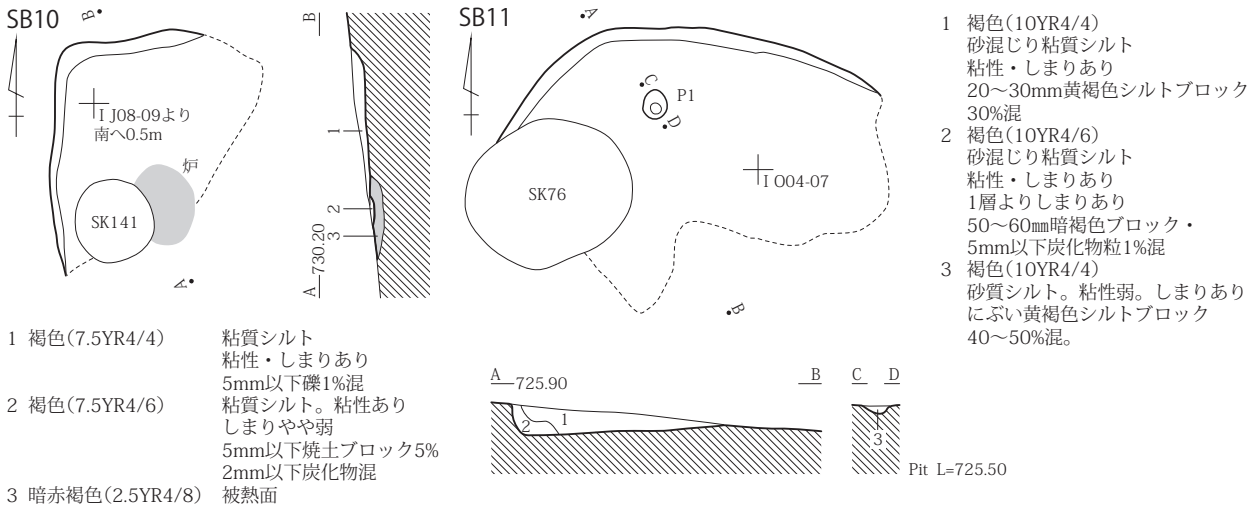


- 1 にぶい黄褐色(10YR4/3) シルト。粘性・しまり普通
- 2 黄褐色(10YR7/8) シルト。粘性普通。しまり強
- 3 被熱面

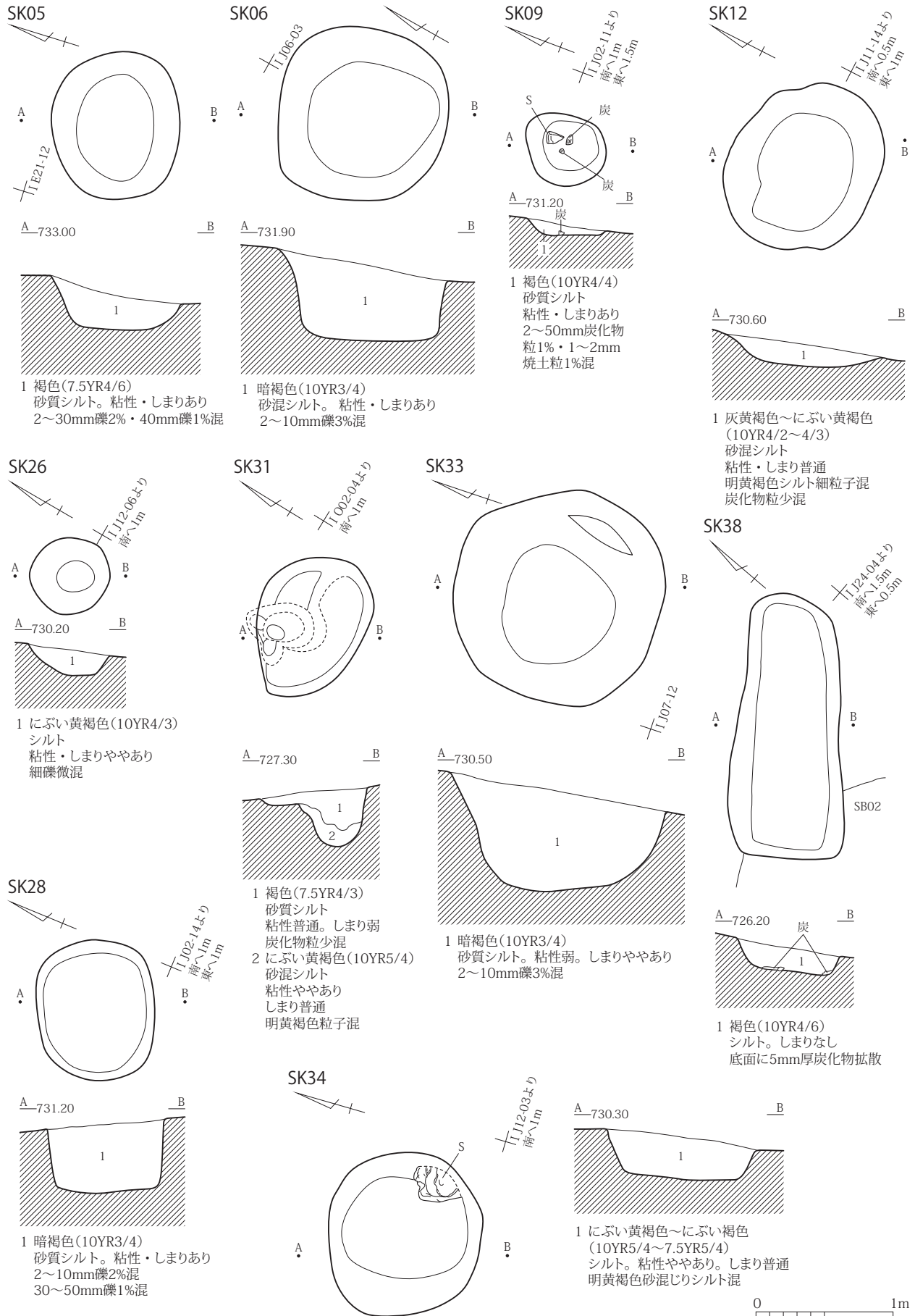


第14図 S B 07・08・09 遺構図

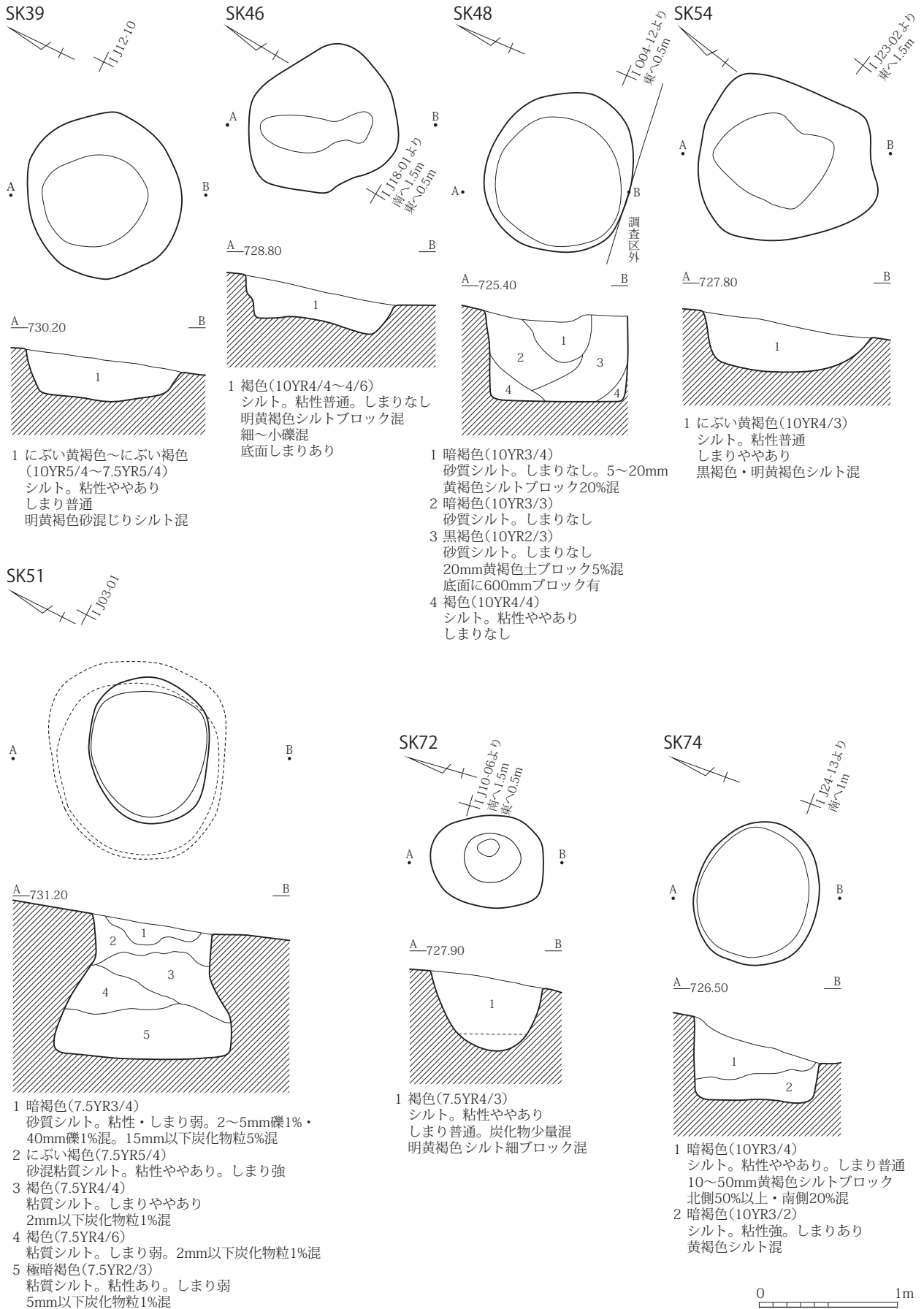
第4章 小山の神B遺跡



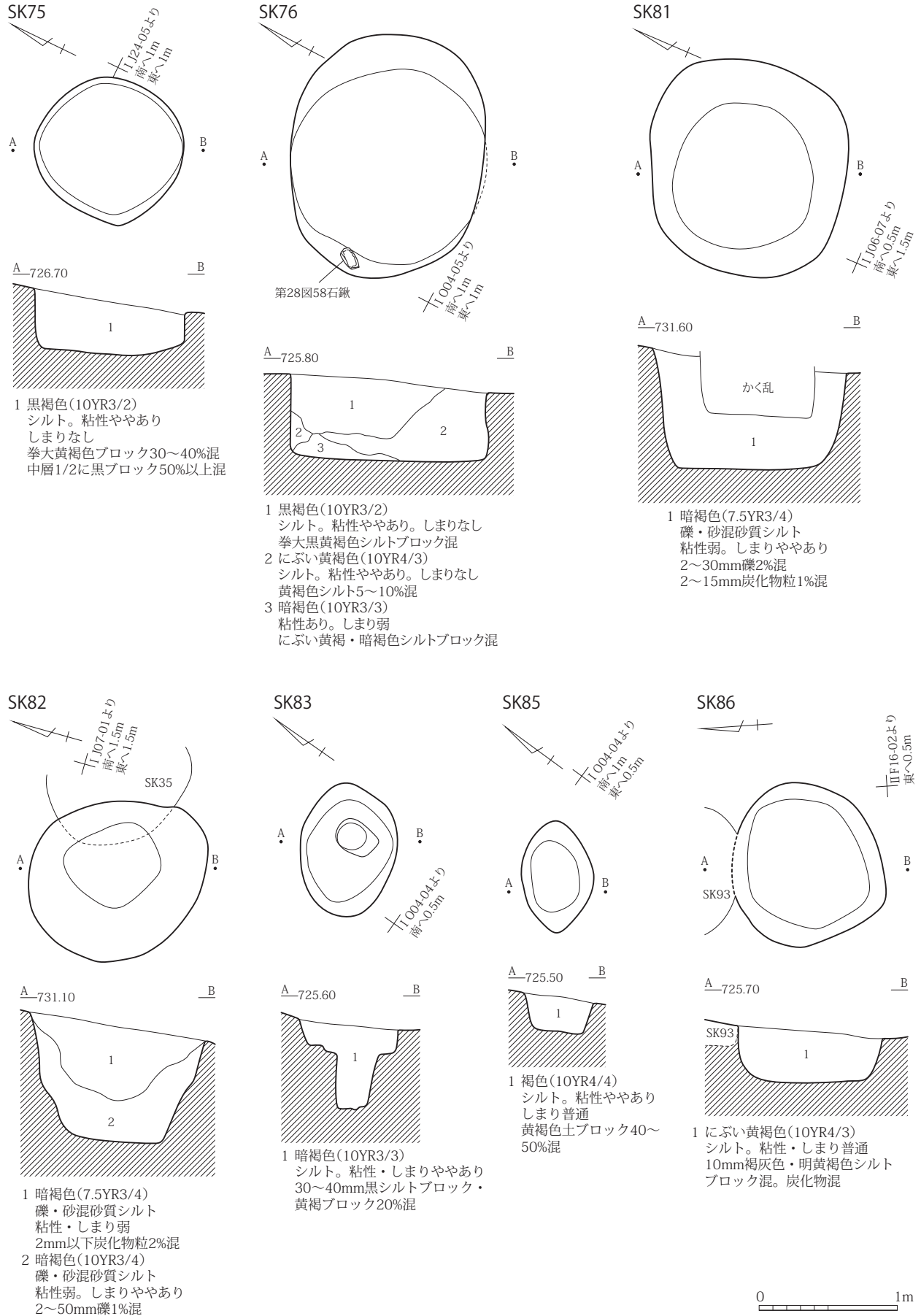
第15図 SB10・11・12・13・14 遺構図



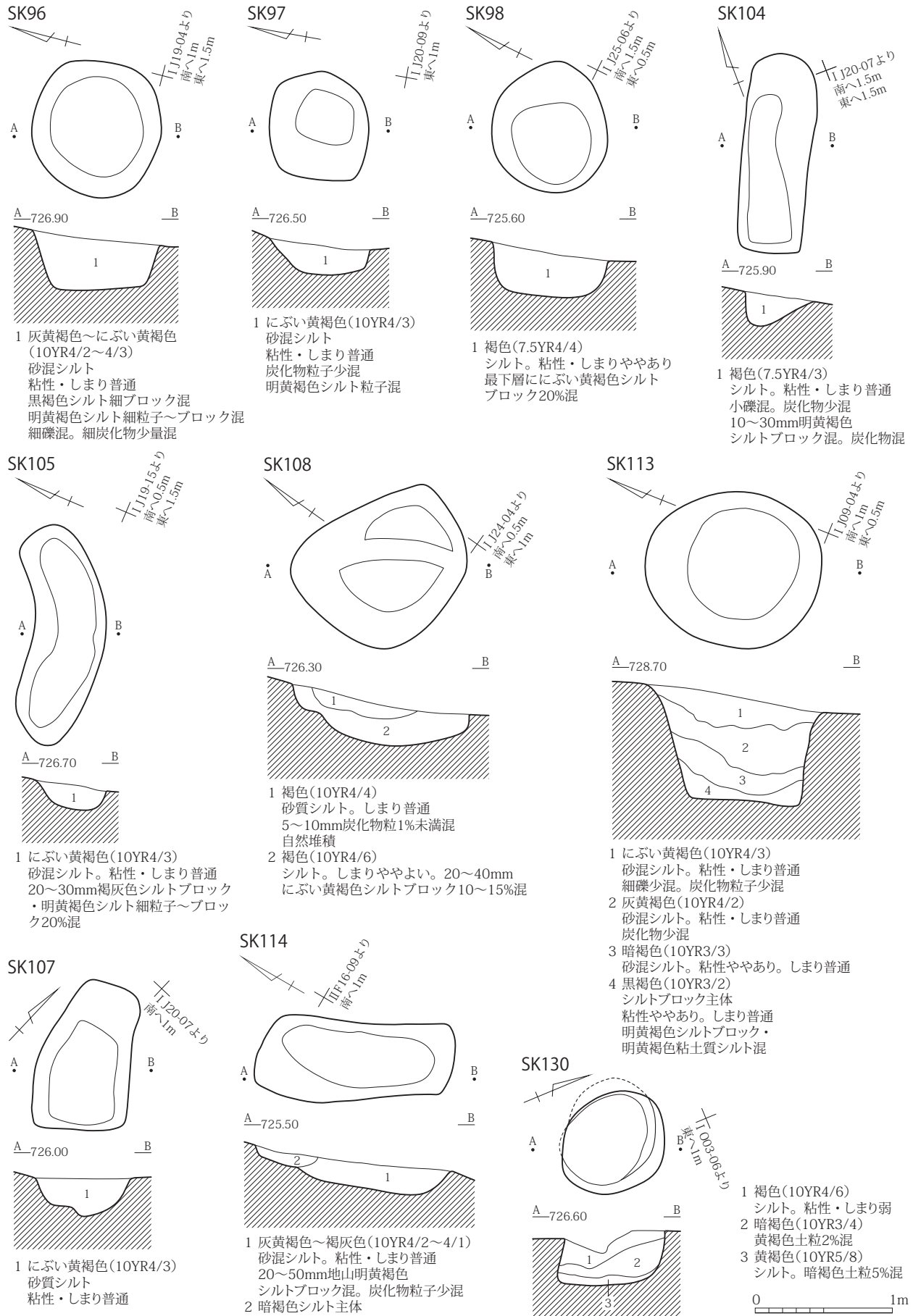
第16図 SK05・06・09・12・26・28・31・33・34・38 遺構図



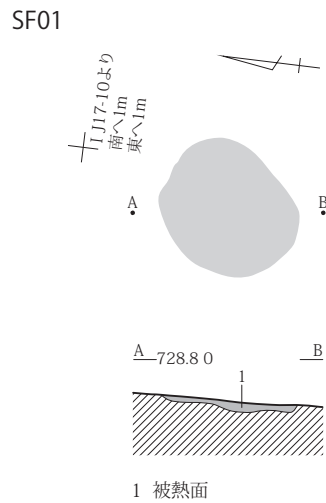
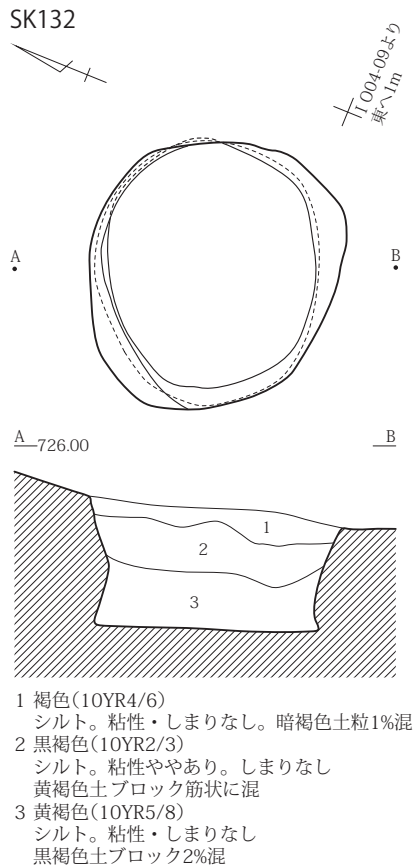
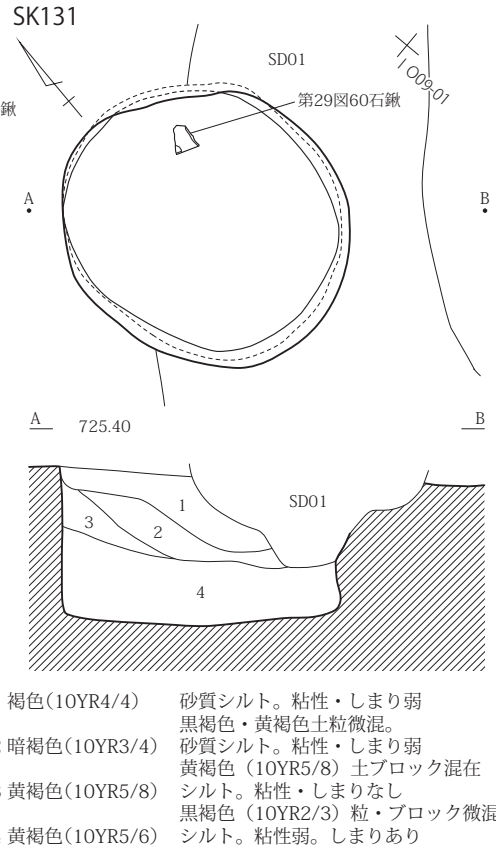
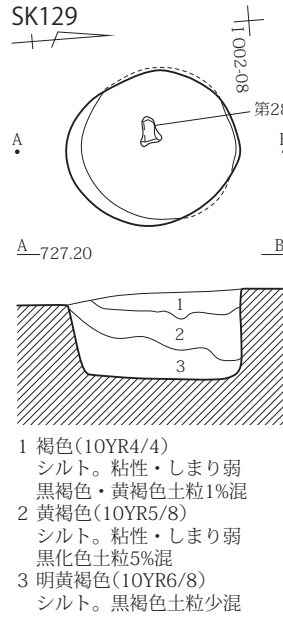
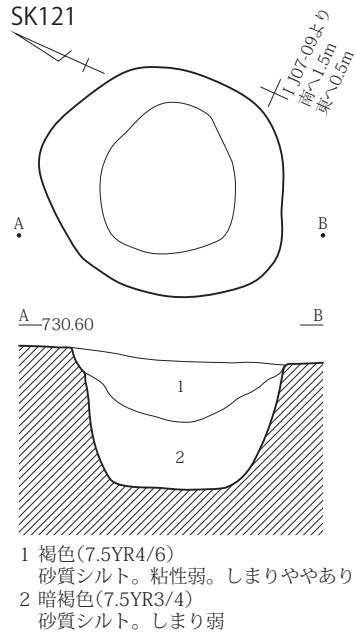
第17図 SK 39・46・48・51・54・72・74 遺構図



第18図 SK 75・76・81・82・83・85・86 遺構図



第19図 SK 96・97・98・104・105・107・108・113・114・130 遺構図



0 1m

第20図 SK 121・129・131・132、SF 01 遺構図

3 遺物

(1) 土器

遺構出土土器（第21～24図、第7表、P L 3～6）

S B 01 出土土器（第21図1～22、P L 3）

1～4は縄文時代前期初頭の土器である。1は塚田式で波状口縁を呈し、1条の水平隆帯を貼付する。隆帯の上部は不鮮明だが、鋸歯状の文様を構成している可能性がある。隆帯の下部は、単節原体により横位羽状構成の縄文を施文する。2～4は胴部で、単節原体による横位斜構成・羽状構成の縄文を施文する。3・4は原体の末端部に結節が認められる。

5～22は縄文時代前期後葉の土器である。5～10は下島式で沈線を地文とし、結節浮線文で主文様を構成する。5～8は同一個体の可能性が高い。11～22は諸磯c式である。11～17は平行沈線で主文様を構成し、11・12・14にはボタン状貼付文がある。12・13と16・17はそれぞれ同一個体の可能性が高い。18は半隆起線とボタン状貼付文で文様を構成する。19～21は単節原体による横位斜構成の縄文と、ボタン状貼付文で文様を構成する。19・20は同一個体で、19は口唇部直下が肥厚する。21は口唇部直下に穿孔がある。22は特殊浅鉢で、口縁部が垂直に近い角度で短く立ち上がる。無文だが、赤色塗彩の有無は不明である。外面全体と口縁部内面に丁寧なミガキを施し、内面の胴部以下はナデにより整形する。なお、口縁部と胴下部の各1点は遺構外のI J 25グリッドで出土したものだが、胎土・器面調整・色調・器厚などの特徴から同一個体と判断して当該土器に含めた。

S B 02 出土土器（第21図23～25、P L 3）

23～25は縄文時代前期初頭土器の胴部である。23は塚田式で、単節原体により縦条の縄文を施文する。24は器面が荒れて不明確だが無節原体、25は単節原体で横位羽状構成の縄文を施文する。

S B 03 出土土器（第21図26、P L 3）

26は縄文時代前期初頭土器の胴部で、単節原体により横位羽状構成の縄文を施文する。

S B 04 出土土器（第21図27～29、P L 3）

27～29は縄文時代前期初頭の土器である。27は塚田式の口縁部で平縁を呈し、1条の水平隆帯を貼付する。隆帯の上部は幅狭の無文部を形成し、隆帯の下部は単節原体により横位斜構成・羽状構成の縄文を施文する。28・29は胴部である。28は塚田式で、同一の単節原体を横位・縦位と施文方向を変えることで羽状を構成する。29は単節原体により、横位斜構成・羽状構成の縄文を施文する。

S B 05 出土土器（第21図30～36、P L 3）

30～36は縄文時代前期初頭の土器である。30は塚田式の口縁部で平縁を呈し、1条の水平隆帯を貼付する。隆帯の上部は幅狭の無文部を形成し、口唇部には縄文原体によると思われる鋸歯状の刻みがある。隆帯以下は、単節原体により横位斜構成・羽状構成の縄文を施文する。31～35は胴部である。31～34は単節原体により横位羽状構成の縄文を、35はRとLを組み合わせた2本揃えの撚糸文を施文する。36は底部で、単節原体による横位斜構成の縄文を施文する。

S B 06 出土土器（第22図37～57、P L 3～5）

37は縄文時代前期初頭の中道式で肥厚口縁を呈し、単節原体による横位羽状構成の縄文を施文する。

38～57とP L 4は、縄文時代前期後葉の土器である。38～45とP L 4は諸磯c式で、平行沈線により主文様を描き、38・39には貼付文が加わる。42は口縁部から胴下部までの器形が復元できた平縁の土器で、口径は推定で25.6cm、残存器高は推定で28.0cmを測る。口縁部には横位方向の、胴部には横位・斜位方向の平行沈線を描き、貼付文が加わる。P L 4は、ササゲ属アズキ亜属種子を含む91点の種実圧痕が確認された土器である（種実圧痕の詳細は第4節1を参照されたい）。当該土器は脆弱であることに加え、断

面に種実圧痕が多く残り、接合・復元を行うと種実圧痕の観察が困難になるとの判断から、接合・復元、実測・拓本は控えた。器高は推定約35cmで、胴上部から底部にかけて全周の約3分の1が残存し、口縁部は完全に欠損する。文様は、胴部から底部に密接する横位方向の平行沈線を描き、胴部には細い波状隆帯をほぼ等間隔で貼付する。46～57は下島式で、46～51は平行沈線の地文上に結節浮線文で、52は矢羽状沈線の地文上に結節沈線文とボタン状貼付文で、53は平行沈線で、54～57は櫛歯状工具による結節凹線とボタン状貼付文で、それぞれ文様を構成する。47～51、54～57は同一個体と考える。

SB 07 出土土器 (第22図 58～60、P L 5)

58～60は縄文時代前期初頭の土器である。58は塚田式の口縁部で平縁を呈し、1条の水平隆帯を貼付する。口唇部直下からは、単節原体による横位斜構成の縄文を施文する。59・60は胴部で、59は単節原体による横位羽状構成の縄文を、60はRとLを組み合わせた2本揃えの撚糸文を施文する。

SB 08 出土土器 (第22図 61～65、P L 5)

61～64は縄文時代前期初頭の土器である。61・62は塚田式の口縁部で平縁を呈し、1条の水平隆帯を貼付する。61は口唇部直下から、単節原体による横位羽状構成の縄文を施文する。62は器面状態が悪く、縄文原体や施文構成などは不明である。63・64は胴部で、単節原体による横位羽状構成の縄文を施文する。

65は縄文時代前期末葉の土器と考えられ、単節原体による横位斜構成の縄文を地文とし、半隆起線で文様を描く。

SB 09 出土土器 (第23図 66・67、P L 5)

66・67は縄文時代前期末葉の土器である。66は口縁部で、横位・斜位方向の半隆起線で文様を描く。67は胴部で単節原体による横位斜構成の縄文を地文とし、横位方向の半隆起線を描く。

SB 10 出土土器 (第23図 68、P L 5)

68は縄文時代前期初頭土器の胴部で、単節原体による横位羽状構成の縄文を施文する。原体の末端部には結節が認められる。

SB 11 出土土器 (第23図 69～72、P L 5)

69・70は縄文時代前期初頭の土器である。69は中道式の肥厚口縁、70は胴部で、単節原体による横位羽状構成の縄文を施文する。70は原体の末端部に結節が認められる。

71・72は縄文時代前期末葉の土器である。71は単節原体による縦位方向の縄文を地文とし、半隆起線で縦位・鋸歯状の文様を描く。72は胴部で、単節原体による横位斜構成の縄文を施文する。

SB 12 出土土器 (第23図 73・74、P L 5)

73・74は縄文時代前期初頭土器の胴部で、73はR 2本を組み合わせた2本揃えの撚糸文を、74は単節原体による横位斜構成・羽状構成の縄文を施文する。

SB 13 出土土器 (第23図 75・76、P L 5)

75・76は縄文時代前期初頭の土器である。75は中道式の肥厚口縁で、単節原体による横位斜構成・羽状構成の縄文を施文する。76は胴部で、単節原体による横位羽状構成の縄文を施文する。

SB 14 出土土器 (第23図 77～81、P L 5)

77～81は縄文時代前期初頭の土器である。77は塚田式の口縁部で平縁を呈し、1条の水平隆帯を貼付する。隆帯の上部は幅狭の無文部を形成し、隆帯の下部は単節原体による横位羽状構成の縄文を施文する。78～81は胴部で、78・79は単節原体による横位羽状構成の縄文を、80・81はRとLを組み合わせた2本揃えの撚糸文を施文する。

82～86は縄文時代前期後葉の土器である。諸磯c式の口縁部と胴部で、平行沈線と貼付文により文様を構成する。83～85は同一個体と考える。

87～90は前期末葉の土器と考えられる。87は口縁部で、単節原体による横位斜構成の縄文を地文とし、半隆起緯線で文様を構成する。88～90は胴部である。88は、半隆起線と隆帯状を呈する太い貼付文で文様を構成する。89は単節原体による横位斜構成の縄文を地文とし、横位・鋸歯状の文様を半隆起線で描く。90は横位区画内部を、斜位方向の半隆起線と単沈線で斜格子目状の文様を構成する。

SK 33 (第23図91～93、PL5)

91～93は同一個体とみられる縄文時代前期末葉土器の胴部で、単節原体による横位斜構成の縄文を地文とし、横位・鋸歯状・縦位方向の半隆起線で文様を構成する。縦位方向の半隆起線には、斜位方向の単沈線が加わる。

SK 37 (第23図94、PL5)

94は縄文時代前期末葉土器の口縁部で、単節原体による横位斜構成の縄文を地文とし、半隆起線で横位・縦位・弧状の文様を描く。

SK 48 (第24図100、PL5)

100は縄文時代晩期末葉か弥生時代前期の壺底部で、横位方向の粗い条痕を施し、底面に網代痕が残る。

SK 51 (第24図95～99、PL6)

95～99は縄文時代前期末葉の土器である。95の各破片は接合しないが、同一個体と判断した。口縁部は、口唇部直下の肥厚部に2列の円形刺突を施し、無文部を挟んで横位・斜位方向の半隆起線を描く。斜位方向の半隆起線には単沈線が加わり、斜格子目状の文様を構成する。胴部以下は単節原体による横位斜構成の縄文を地文とし、横位・鋸歯状・Y字状の文様を半隆起線で描く。96～98は同一個体の可能性が高く、単節原体による横位斜構成の縄文を地文とし、半隆起線で文様を描く。口唇部には円形突起を、97の頸部とみられる括れ部には横位方向の隆帯を貼付する。99は単節原体による横位斜構成の縄文を地文とし、陰刻と半隆起線で雲形文を構成する。

SK 75 (第24図101、PL5)

101は縄文時代晩期末葉か弥生時代前期の壺の口縁部で、口唇部直下が肥厚する。無文で外面は肥厚部から括れ部にかけて横位方向のナデを、それ以下は縦位方向のケズリを施す。内面は粗いナデを施す。

SK 99 (第24図102、PL6)

102は弥生時代前期の小形甕で、氷Ⅱ式と考える。口縁部に平行沈線を描き、頸部の無文部を挟み胴部には横位・斜位方向の粗い条痕を施す。内面は口縁部に横位方向の粗いミガキを、胴部には雑なナデ調整を施す。また、口縁部外面と胴部内面には炭化物が付着する。

SK 113 (第24図103)

103は縄文時代前期末葉土器の胴部で、区画内部に斜位方向の半隆起線と単沈線で斜格子目文を描き、区画間には陰刻を施す。

遺構外出土土器 (第24図104～108、第7表、PL6)

104は縄文時代前期後葉の諸磯a式で、単節原体による横位斜構成の縄文を地文とし、円形刺突や半截竹管状工具による爪形文と平行沈線で文様を構成する。105は縄文時代中期後葉の郷土式で、口縁部には隆帯による渦巻文と楕円区画を配し、胴部は沈線で縦位区画と斜位方向の沈線を描く。

106～108は縄文時代晩期末葉～弥生時代中期の土器である。106は弥生時代中期の人面付土器の可能性があり、沈線で文様を描き、耳部表現と思われる縦位の突起を前面に傾斜させて貼付する。突起下部には穿孔を施す。壺形土器に人面を表現していることから、「人形土器」(櫻井2015)が出現する以前のものであろう。107は弥生時代前～中期の甕胴部と考えられ、斜位方向の粗い条痕を施す。108は甕で口唇部に刻みを施し、器面内外にナデ調整を施す。弥生時代前期の氷Ⅱ式と考える。

引用・参考文献

櫻井秀雄 2015「人形土器の研究—弥生時代の顔面表現—」『金沢大学考古学紀要』第36号 金沢大学人文学類考古学研究室

第7表 縄文土器・弥生土器観察表

図版 番号	P L 番号	管理 番号	出土位置	時 期	器種	部位	文 様 等	色 調		備 考
								外面	内面	
21-1	3	002	SB01 No.7	縄文前期初頭	深鉢	口縁	波状口縁、隆帯、単節 (横位斜・羽状構成)	7.5YR 5/6	10YR 5/4	塚田式
-2	3	017	SB01 北西	縄文前期初頭	深鉢	胴	単節 (横位羽状構成)	7.5YR 5/6	10YR 4/3	
-3	3	013	SB01 北東	縄文前期初頭	深鉢	胴	単節 (横位羽状構成)、 結節	10YR 6/6	10YR 6/6	
-4	3	020	SB01 北西1層	縄文前期初頭	深鉢	胴	単節 (横位羽状構成)、 結節	7.5YR 5/6	10YR 6/6	
-5	3	019	SB01 北西	縄文前期後葉	深鉢	口縁	結節浮線文、沈線地文	7.5YR 6/8	10YR 6/6	6～8と同一個 体、下鳥式
-6	3	019	SB01 北西	縄文前期後葉	深鉢	口縁	結節浮線文、沈線地文	7.5YR 6/8	10YR 6/6	下鳥式
-7	3	019	SB01 北西	縄文前期後葉	深鉢	口縁	結節浮線文、沈線地文	7.5YR 6/8	10YR 6/6	下鳥式
-8	3	019	SB01 北西	縄文前期後葉	深鉢	口縁	結節浮線文、沈線地文	7.5YR 6/8	10YR 6/6	下鳥式
-9	3	004	SB01 No.9	縄文前期後葉	深鉢	口縁	結節浮線文、沈線地文	10YR 4/3	10YR 6/4	下鳥式
-10	3	007	SB01 No.18	縄文前期後葉	深鉢	口縁	結節浮線文、沈線地文	10YR 4/6	10YR 5/4	下鳥式
-11	3	016	SB01 北東	縄文前期後葉	深鉢	口縁	平行沈線、貼付文	7.5YR 4/6	7.5YR 5/4	諸磯c式
-12	3	008	SB01 Pit 1	縄文前期後葉	深鉢	口縁	平行沈線、貼付文	10YR 2/1	10YR 3/2	13と同一個 体か?、諸磯c式
-13	3	013	SB01 No.14	縄文前期後葉	深鉢	胴	平行沈線	10YR 2/1	10YR 3/2	諸磯c式
-14	3	005	SB01 No.12	縄文前期後葉	深鉢	胴	平行沈線、貼付文	10YR 4/3	10YR 4/3	諸磯c式
-15	3	001	SB01 No.6	縄文前期後葉	深鉢	胴	平行沈線	10YR 4/4	10YR 4/3	諸磯c式
-16	3	015	SB01 北東	縄文前期後葉	深鉢	胴	平行沈線	10YR 4/2	10YR 5/3	17と同一個 体、諸磯c式
-17	3	003	SB01 No.9	縄文前期後葉	深鉢	胴	平行沈線	10YR 5/3	10YR 5/3	諸磯c式
-18	3	014	SB01 北東	縄文前期後葉	深鉢	胴	半隆起線、貼付文、 単節地文 (横位斜構成)?	7.5YR 6/6	7.5YR 6/6	諸磯c式
-19	3	021	SB01 2層	縄文前期後葉	深鉢	口縁	単節 (横位斜構成)、貼 付文	10YR 2/3	10YR 4/3	20と同一個 体、諸磯c式
-20	3	022	SB01 2層	縄文前期後葉	深鉢	胴	単節 (横位斜構成)	10YR 2/3	10YR 4/3	諸磯c式
-21		018	SB01 北西	縄文前期後葉	深鉢	口縁	単節 (横位斜構成)、貼 付文	7.5YR 5/6	7.5YR 5/6	穿孔有、諸磯c 式
-22	3	023 024 114 115	SB01 2層、 北西 (IJ25、8T)	縄文前期後葉	浅鉢	口縁 胴	無文 (外面:ミガキ、内 面:口縁部ミガキ、胴部 ナデ)	7.5YR 4/6	7.5YR 4/4	諸磯c式
-23	3	025	SB02 北西床	縄文前期初頭	深鉢	胴	単節 (縦条の縄文)	10YR 3/2	10YR 6/2	塚田式
-24	3	026	SB02 北東	縄文前期初頭	深鉢	胴	無節 (横位羽状構成)?	7.5YR 5/6	10YR 4/3	
-25	3	027	SB02 北東床下	縄文前期初頭	深鉢	胴	単節 (横位羽状構成)	10YR 5/4	10YR 6/4	
-26	3	029	SB03 床下	縄文前期初頭	深鉢	胴	単節 (横位羽状構成)	7.5YR 6/6	10YR 6/4	
-27	3	030	SB04 No.5	縄文前期初頭	深鉢	口縁	隆帯、単節 (横位斜・羽状構成)	2.5YR 3/1	2.5YR 3/3	塚田式
-28	3	031	SB04 No.2	縄文前期初頭	深鉢	胴	単節 (同一原体による 縦・横位施文、羽状構 成)	2.5YR 3/2	10YR 5/3	塚田式
-29	3	032	SB04 北西床下	縄文前期初頭	深鉢	胴	単節 (横位斜・羽状構 成)	10YR 6/3	10YR 6/3	
-30	3	039	SB05 北西	縄文前期初頭	深鉢	口縁	口唇部鋸歯状刻み?、隆 帯、単節 (横位斜・羽状 構成)	10YR 6/6	10YR 6/4	塚田式
-31	3	037	SB05 No.6	縄文前期初頭	深鉢	胴	単節 (横位羽状構成)	10YR 6/4	10YR 5/3	

第4章 小山の神B遺跡

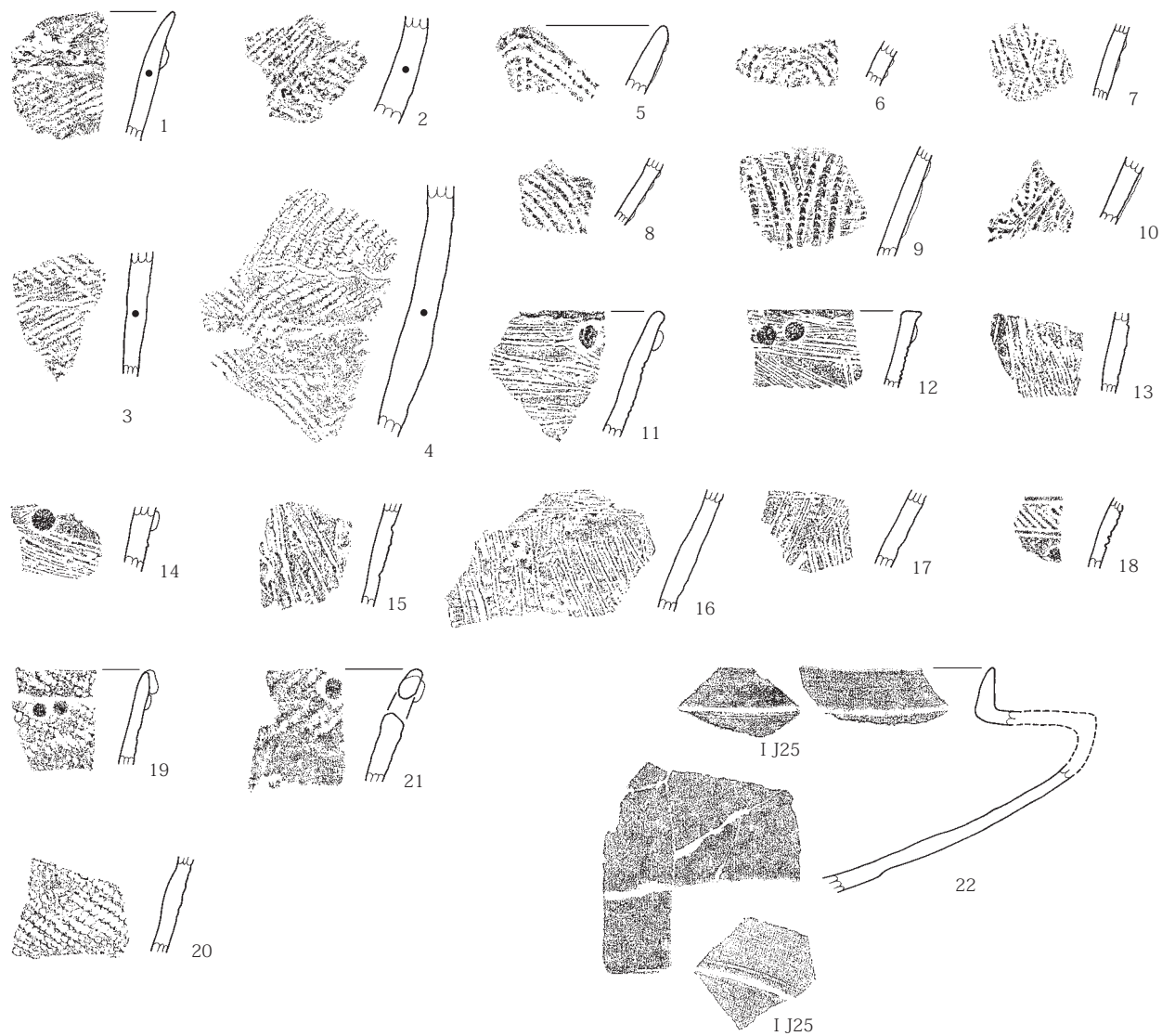
図版 番号	P L 番号	管理 番号	出土位置	時 期	器種	部位	文 様 等	色 調		備 考
								外面	内面	
21-32	3	035	SB05 No.4	縄文前期初頭	深鉢	胴	単節（横位羽状構成）	7.5YR 5/6	7.5YR 4/4	
-33	3	038	SB05 北東	縄文前期初頭	深鉢	胴	単節（横位羽状構成）	5YR 4/8	10YR 6/4	
-34	3	034	SB05 No.3	縄文前期初頭	深鉢	胴	単節（横位羽状構成）	2.5YR 4/2	2.5YR 3/2	
-35	3	033	SB05 No.2	縄文前期初頭	深鉢	胴	2本揃えの撚糸文	5YR 4/8	10YR 7/4	
-36	3	036	SB05 No.5	縄文前期初頭	深鉢	底	単節（横位斜構成）	5YR 4/8	10YR 3/1	
22-37	3	059	SB06 南西	縄文前期初頭	深鉢	口縁	肥厚口縁、単節（横位羽状構成）	10YR 6/6	10YR 7/4	中道式
-38	3	043	SB06 No.9	縄文前期後葉	深鉢	胴	平行沈線、貼付文	10YR 3/1	10YR 6/4	諸磯c式
-39	3	044	SB06 北西床	縄文前期後葉	深鉢	胴	平行沈線、貼付文	10YR 4/2	10YR 5/2	諸磯c式
-40	3	046	SB06 No.23	縄文前期後葉	深鉢	胴	平行沈線	10YR 6/6	10YR 7/4	諸磯c式
-41		058	SB06 南東床	縄文前期後葉	深鉢	胴	平行沈線	5YR 5/6	7.5YR 3/1	諸磯c式
-42	5	040	SB06 床面	縄文前期後葉	深鉢	口縁 胴	平行沈線、貼付文	5YR 5/6	7.5YR 3/1	推定口径：25.8cm、残存器高：28.0cm、諸磯c式
	4	041	SB06 No.2	縄文前期後葉	深鉢	口縁 胴 底	平行沈線、波状隆帯、炭化種実・種実圧痕土器	5YR 5/6	7.5YR 3/1	残存器高：35.0cm、諸磯c式（実測図非掲載）
-43		048	SB06 南東	縄文前期後葉	深鉢	胴	平行沈線	7.5YR 6/3	10YR 4/2	44・45と同一個体、諸磯c式年代測定
-44	3	049	SB06 No.4、北西	縄文前期後葉	深鉢	胴	平行沈線	7.5YR 6/3	10YR 4/2	諸磯c式
-45	3	050	SB06 北東	縄文前期後葉	深鉢	胴	平行沈線	7.5YR 6/3	10YR 4/2	諸磯c式
-46	3	052	SB06 北東	縄文前期後葉	深鉢	胴	結節浮線文、沈線地文	2.5YR 3/2	10YR 5/3	下鳥式
-47	3	054	SB06 南西、南東床 I J7、5T	縄文前期後葉	深鉢	口縁	結節浮線文、沈線地文	2.5YR 3/2	10YR 5/3	48~51と同一個体、下鳥式
-48	3	054	SB06 南西、南東床 I J7、5T	縄文前期後葉	深鉢	口縁	結節浮線文、沈線地文	2.5YR 3/2	10YR 5/3	下鳥式
-49	3	054	SB06 南西、南東床 I J7、5T	縄文前期後葉	深鉢	口縁	結節浮線文、沈線地文	2.5YR 3/2	10YR 5/3	下鳥式
-50		054	SB06 南西、南東床 I J7、5T	縄文前期後葉	深鉢	胴	結節浮線文、沈線地文	2.5YR 3/2	10YR 5/3	下鳥式
-51		054	SB06 南西、南東床 I J7、5T	縄文前期後葉	深鉢	底	結節浮線文、沈線地文	2.5YR 3/2	10YR 5/3	下鳥式
-52	3	051	SB06 No.20	縄文前期後葉	深鉢	胴	結節沈線文、貼付文、矢羽状沈線地文	10YR 6/4	10YR 5/4	下鳥式
-53	3	053	SB06 No.21・23	縄文前期後葉	深鉢	口縁	平行沈線	10YR 6/6	10YR 7/4	下鳥式
-54	3	056	SB06 南東床	縄文前期後葉	深鉢	口縁	結節凹線	7.5YR 5/3	7.5YR 6/4	下鳥式
-55	3	056	SB06 南東床	縄文前期後葉	深鉢	口縁	結節凹線	7.5YR 5/3	7.5YR 6/4	下鳥式、55~57と同一個体
-56		056	SB06 南東床	縄文前期後葉	深鉢	口縁	結節凹線	7.5YR 5/3	7.5YR 6/4	下鳥式
-57	3	057	SB06 南東床、南西床	縄文前期後葉	深鉢	胴	結節凹線、条線、貼付文	7.5YR 5/3	7.5YR 6/4	下鳥式
-58	5	060	SB07 No.1	縄文前期初頭	深鉢	口縁	隆帯、単節（横位斜構成）	10YR 5/6	10YR 5/4	塚田式
-59	5	062	SB07 南西床下	縄文前期初頭	深鉢	胴	単節（横位羽状構成）	7.5YR 6/6	10YR 5/4	
-60	5	061	SB07 南東	縄文前期初頭	深鉢	胴	2本揃えの撚糸文	10YR 4/2	10YR 6/4	
-61	5	063	SB08 No.1	縄文前期初頭	深鉢	口縁	隆帯、単節（横位羽状構成）	7.5YR 5/6	5YR 5/6	塚田式
-62	5	064	SB08 Pit 2 No.2、北西床	縄文前期初頭	深鉢	口縁	隆帯、原体・施文構成等不明	10YR 5/8	10YR 6/3	塚田式
-63	5	065	SB08 南東	縄文前期初頭	深鉢	胴	単節（横位羽状構成）、結節	10YR 6/4	10YR 6/4	

図版 番号	P L 番号	管理 番号	出土位置	時 期	器種	部位	文 様 等	色 調		備 考
								外面	内面	
22-64	5	065	SB08 南東	縄文前期初頭	深鉢	胴	単節（横位羽状構成）	10YR 5/4	7.5YR 5/4	
-65	5	067	SB08 南東	縄文前期末葉	深鉢	胴	半隆起線、単節地文（横位斜構成）	7.5YR 5/4	10YR 5/3	
23-66	5	069	SB09 No.13、2層	縄文前期末葉	深鉢	口縁	半隆起線	7.5YR 5/6	7.5YR 5/6	
-67	5	068	SB09 No.7	縄文前期末葉	深鉢	胴	半隆起線、単節地文（横位斜構成）	7.5YR 4/3	7.5YR 6/6	
-68	5	070	SB10 Pit 2	縄文前期初頭	深鉢	胴	単節（横位羽状構成）、結節	10YR 6/6	7.5YR 6/6	
-69	5	074	SB11 南西床下	縄文前期初頭	深鉢	口縁	肥厚口縁、単節（横位羽状構成）	2.5YR 5/3	10YR 6/6	中道式
-70	5	071	SB11 No.1・2、 南西床下	縄文前期初頭	深鉢	胴	単節（横位羽状構成）、結節	10YR 6/6	10YR 6/2	
-71	5	073	SB11 東	縄文前期末葉	深鉢	底	半隆起線、単節地文（縦位施文）	7.5YR 5/6	7.5YR 3/2	
-72	5	072	SB11 東1層	縄文前期末葉	深鉢	胴	単節（横位斜構成）	10YR 6/6	7.5YR 5/6	
-73	5	075	SB12	縄文前期初頭	深鉢	胴	2本揃えの撚糸文	7.5YR 6/6	7.5YR 3/1	
-74	5	076	SB12	縄文前期初頭	深鉢	胴	単節（横位斜・羽状構成）	2.5YR 4/2	2.5YR 4/2	
-75	5	078	SB13 南西	縄文前期初頭	深鉢	口縁	単節（横位斜構成?）	10YR 6/6	10YR 6/6	
-76	5	077	SB13 北東	縄文前期初頭	深鉢	胴	単節（横位羽状構成）	10YR 3/2	7.5YR 5/6	
-77	5	079	SB14 北	縄文前期初頭	深鉢	口縁	隆帯、単節（横位羽状構成）	10YR 6/6	7.5YR 6/8	塚田式
-78		081	SB14 北	縄文前期初頭	深鉢	胴	単節（横位羽状構成）	10YR 6/6	10YR 6/4	
-79	5	045	SB14 北	縄文前期初頭	深鉢	胴	単節（横位羽状構成）	7.5YR 6/6	10YR 4/2	
-80	5	084	SB14 北	縄文前期初頭	深鉢	胴	2本揃えの撚糸文	7.5YR 5/6	10YR 6/6	
-81	5	080	SB14 北	縄文前期初頭	深鉢	胴	2本揃えの撚糸文	7.5YR 6/6	7.5YR 4/2	
-82	5	089	SB14 北	縄文前期後葉	深鉢	口縁	平行沈線、貼付文	7.5YR 6/6	7.5YR 6/6	諸磯c式
-83	5	082	SB14 北	縄文前期後葉	深鉢	口縁	平行沈線、貼付文	5YR 6/8	5YR 7/8	84～86と同一個体、諸磯c式
-84	5	083	SB14 北	縄文前期後葉	深鉢	胴	平行沈線、貼付文	5YR 5/8	5YR 6/8	諸磯c式
-85	5	083	SB14 北	縄文前期後葉	深鉢	胴	平行沈線、貼付文	5YR 5/8	5YR 6/8	諸磯c式
-86		090	SB14 北	縄文前期後葉	深鉢	胴	平行沈線、貼付文	7.5YR 6/6	5YR 6/8	諸磯c式
-87	5	086	SB14 北	縄文前期末葉?	深鉢	口縁	半隆起線、単節地文（横位斜構成）	7.5YR 5/4	7.5YR 5/4	
-88		088	SB14 北	縄文前期末葉?	深鉢	胴	隆帯、半隆起線	10YR 4/6	7.5YR 5/6	
-89	5	085	SB14 北	縄文前期末葉	深鉢	胴	半隆起線、単節地文（横位斜構成）	7.5YR 5/6	7.5YR 5/6	
-90	5	092	SB14 北	縄文前期末葉	深鉢	胴	半隆起線、単沈線	7.5YR 4/4	7.5YR 3/2	
-91	5	093	SK33	縄文前期末葉	深鉢	胴	半隆起線、単沈線、単節地文（横位斜構成）	7.5YR 4/4	5YR 5/6	92・93と同一個体
-92	5	093	SK33	縄文前期末葉	深鉢	胴	半隆起線、単沈線、単節地文（横位斜構成）	7.5YR 4/4	5YR 5/6	
-93	5	094	SK33	縄文前期末葉	深鉢	胴	半隆起線、単沈線、単節地文（横位斜構成）	5YR 5/6	5YR 5/6	
-94	5	095	SK37	縄文前期末葉	深鉢	口縁	半隆起線、単節地文（横位斜構成）	10YR 6/6	7.5YR 6/6	
24-95	6	097	SK51	縄文前期末葉	深鉢	口縁 胴部	波状口縁、円形刺突、半隆起線、単沈線、単節地文（横位斜構成）	7.5YR 6/6	10YR 6/6	
-96	6	098	SK51	縄文前期末葉	深鉢	口縁	円形突起、半隆起線、単節地文（横位斜構成）	10YR 4/3	10YR 4/3	97・98と同一個体
-97	6	098	SK51	縄文前期末葉	深鉢	胴	隆帯、半隆起線、単節地文（横位斜構成）	10YR 4/3	10YR 4/3	
-98	6	098	SK51	縄文前期末葉	深鉢	胴	半隆起線、単節地文（横位斜構成）	10YR 4/3	10YR 4/3	
-99	6	099	SK51	縄文前期末葉	深鉢	胴	半隆起線、陰刻、単節地文（横位斜構成）	10YR 7/4	10YR 7/4	

第4章 小山の神B遺跡

図版 番号	P L 番号	管理 番号	出土位置	時 期	器種	部位	文 様 等	色 調		備 考
								外面	内面	
24-100	5	096	SK48	縄文晩期末葉～ 弥生前期	壺	底	条痕、網代痕	10YR 5/4	10YR 5/4	
-101	5	100	SK75 下層	縄文晩期末葉～ 弥生前期	壺	口縁	無文（外面：口唇部 肥厚、口縁部 ナデ、頸部 ケズリ、内面：ナデ）	10YR7/6	10YR 7/6	
-102	6	104	SK99 No.1・2	弥生前期	小形甕	口縁 胴部	平行沈線、条痕	10YR 4/2	10YR 4/2	氷Ⅱ式、炭化物 付着、推定口 径：16.8cm、残存 器高：12.8cm
-103		108	SK113	縄文前期末葉	深鉢	胴	半隆起線、単沈線、陰刻	10YR 4/3	7.5YR 5/4	
-104		113	Ⅱ F11	縄文前期後葉	深鉢	口縁	平行沈線、爪形文、円形 刺突、単節地文（横位斜 構成）	10YR 5/4	7.5YR 5/4	諸磯 a 式
-105	6	126	Ⅱ P16 Ⅱ層下部	縄文中期後葉	深鉢	口縁胴	隆帯、沈線、楕円区画、 渦巻文	10YR 4/6	10YR 4/3	郷土式 推定口径：39.8 cm、残存器高： 33.1cm
-106		187	2区 南壁Ⅱ層	弥生中期	壺	口縁	単沈線、円形刺突、耳状 突起（下部穿孔）	7.5YR 5/4	5YR 5/6	人面表現？
-107		121	SD05	縄文晩期末葉～ 弥生前期	甕	胴	条痕	10YR 4/3	7.5YR 5/6	
-108	6	127	2区 南部検出面	弥生前期	甕	口縁胴	口唇部刻み、無文	7.5YR 6/6	10YR 6/6	氷Ⅱ式 推定口径：29.6 cm、残存器高： 30.2cm

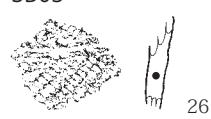
SB01



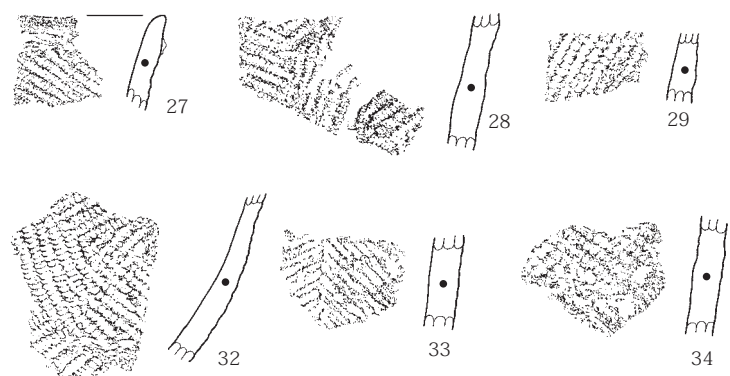
SB02



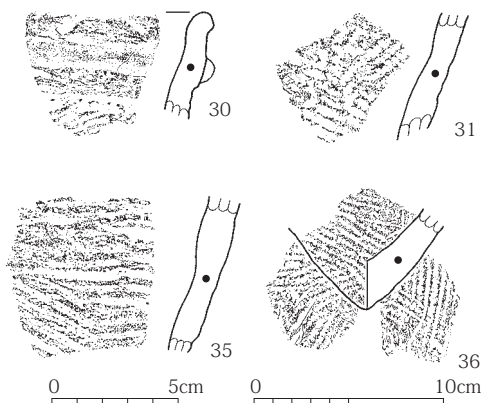
SB03



SB04

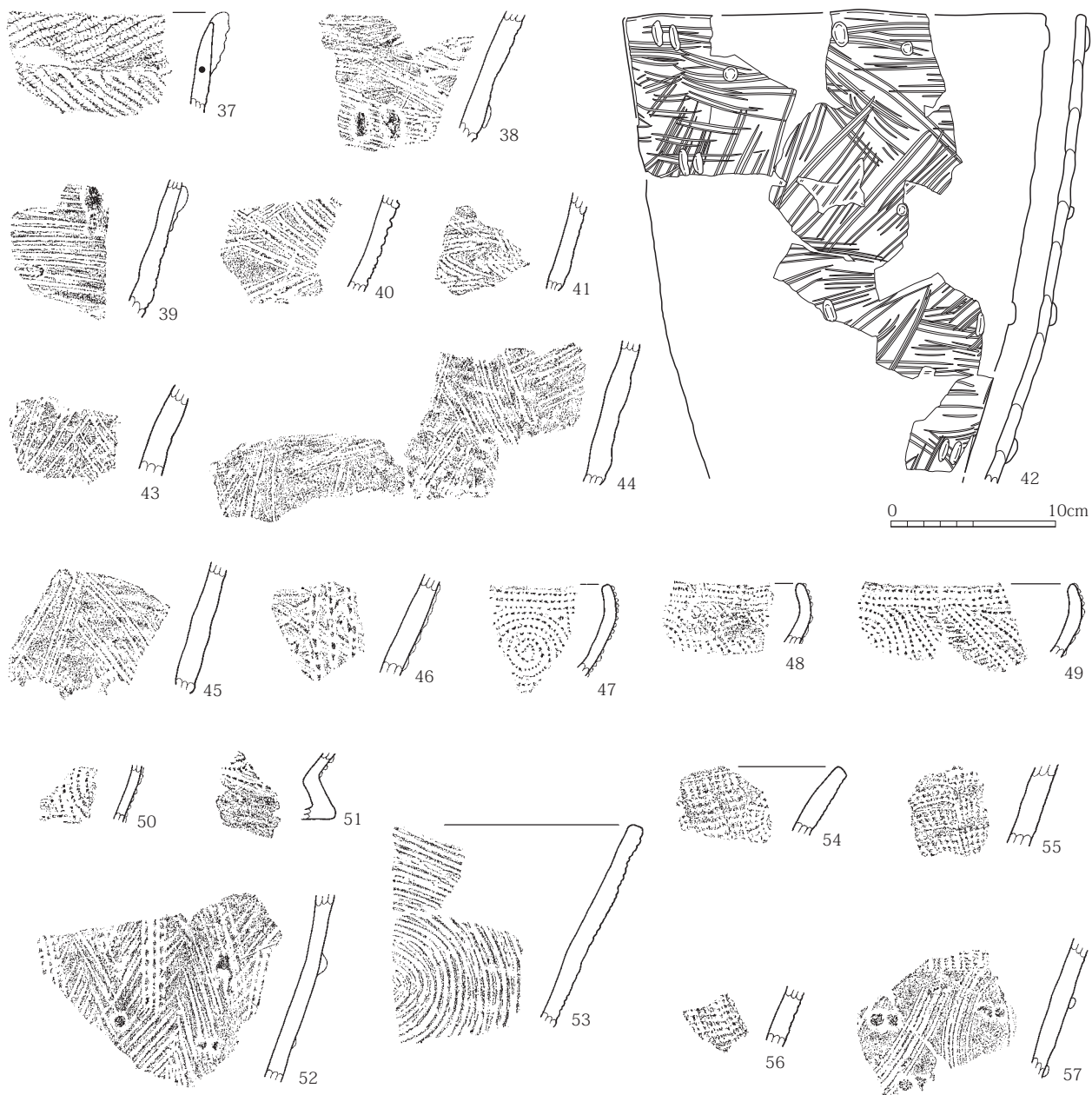


SB05

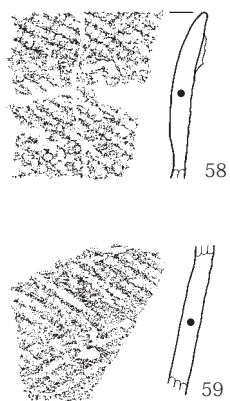


第21図 縄文土器(1)

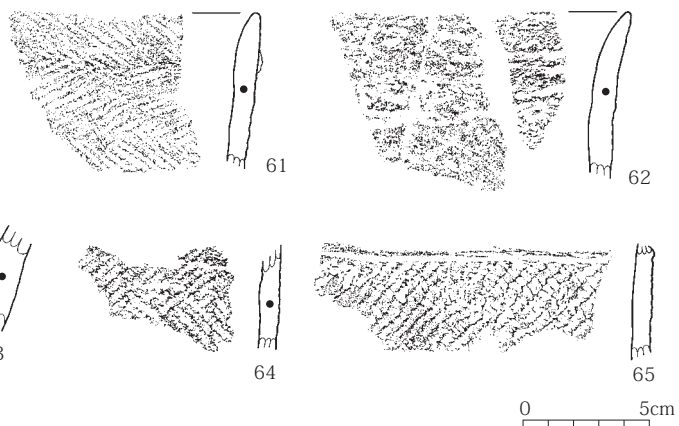
SB06



SB07

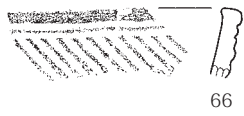


SB08



第22図 縄文土器(2)

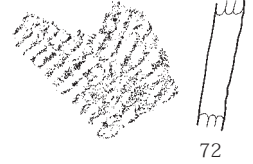
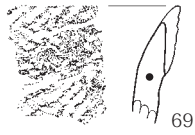
SB09



SB10



SB11



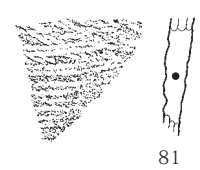
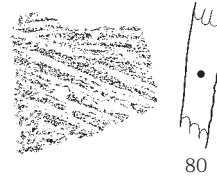
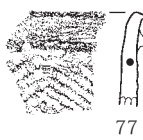
SB12



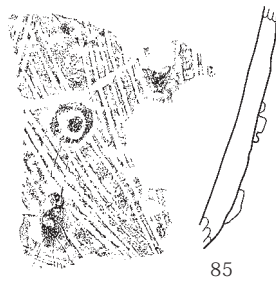
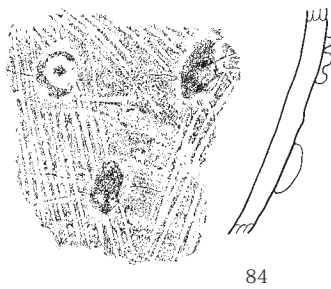
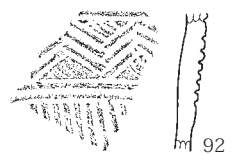
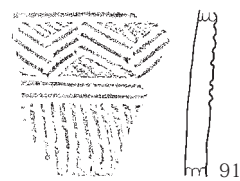
SB13



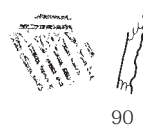
SB14



SK33



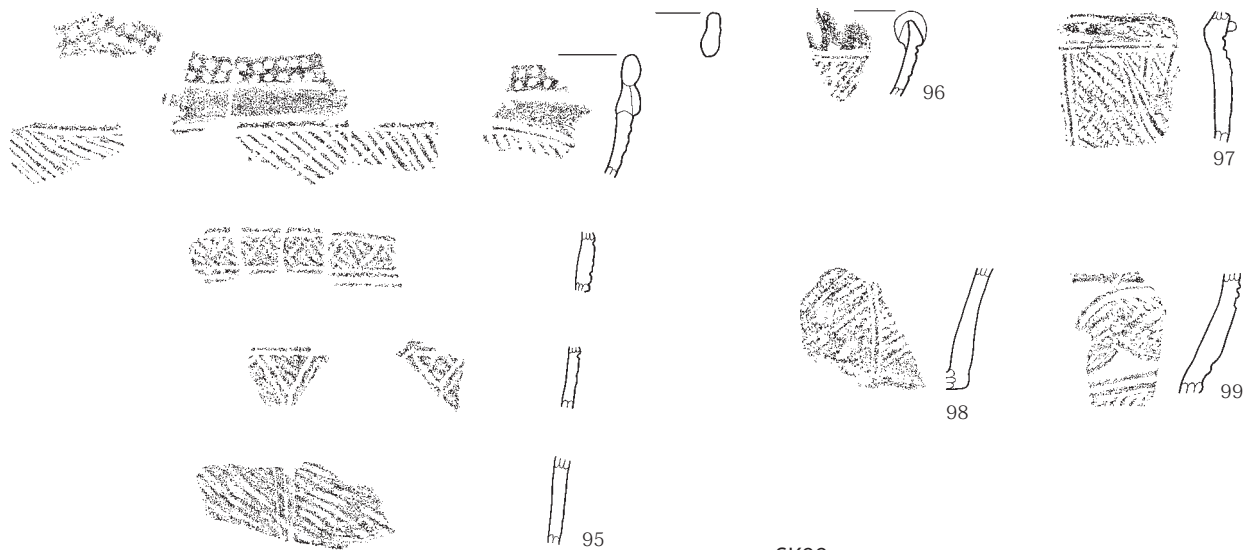
SK37



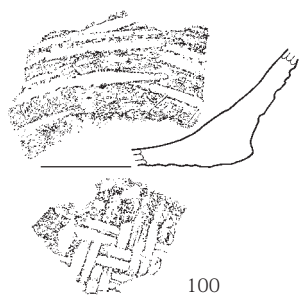
0 5cm

第23図 縄文土器(3)

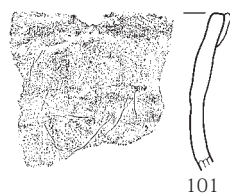
SK51



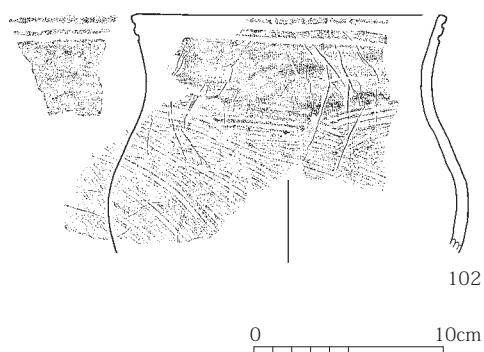
SK48



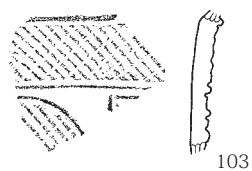
SK75



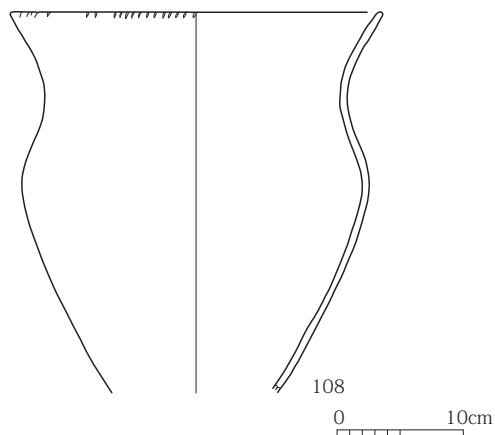
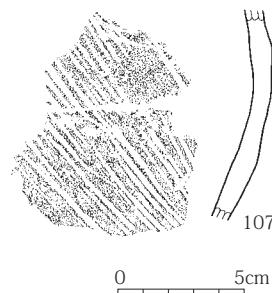
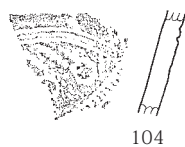
SK99



SK113



遺構外



第24図 縄文土器(4)、弥生土器

(2) 石器

遺構から 899 点、遺構外から 1382 点、合計 2281 点が出土した（第 8 表）。遺構の石器は主に竪穴建物跡と土坑から出土し、伴出した土器により縄文時代前期初頭・後葉・末葉、弥生時代前期に所属するものが存在すると考える。遺構外の石器は遺構の時期に加え、縄文時代中期後葉の土器が出土していることからその時期の石器を含むと考える。

小山の神 B 遺跡から出土した石器は石鏃・石鏃未製品、石錐、スクレイパー、微細な剝離がある剝片、二次加工がある剝片、石匙、石槍、両極石器、打製石斧、石鋏、磨製石斧、礫器、用途不明品、石核、原石、凹石・磨石・敲石、石皿・台石、剝片で、各器種の出土位置・点数・石材、掲載遺物の観察表を第 8～10 表に示した。竪穴建物跡出土の石器総数は数点から 200 点を超える例があり、出土点数に幅があるが、削平を受けた竪穴建物跡が多く、出土総数の差は竪穴建物跡の残存状態を考慮する必要がある。また、竪穴建物跡で出土した土器は、複数の時期が混在する例があることから、石器も同様に複数の時期が混在している可能性が高い。

本稿では石器を器種単位で一括し、実測図の掲載については遺構出土のものを主体に、各器種の完形品もしくは器種の特徴を備えているものを抽出した。また、様々な事情から実測図および写真図版を掲載していない器種もある。器種分類は、『川路大明神原遺跡』（鶴田ほか 2010）を参考に行った。

石鏃・石鏃未製品（第 25 図 1～22、P L 6）

石鏃は遺構から 12 点、遺構外から 28 点が出土し 20 点を掲載した。非掲載を含めて全て無茎の石鏃で、基部を抉込む深度と側縁部の形状に違いがある。石材は黒曜石が 29 点、チャートが 8 点、無斑晶質安山岩が 3 点である。

石鏃未製品は遺構から 4 点、遺構外から 10 点が出土し 2 点を掲載した。21・22 は、製品よりも加工剝離が粗く厚手で、先端部や基部の作りが完全ではない。粗い加工を施し、形状を整えている段階と推測する。石材は黒曜石が 10 点、チャートが 4 点である。

石錐（第 25 図 23～30、P L 6）

遺構から 3 点、遺構外から 9 点が出土し 8 点を掲載した。23・29 は明確なつまみ部がないもので、主に剝片の周縁部に加工を施し形状を整え、先端部に錐部を作出する。24～28 はつまみ部を持つもので、つまみ部から徐々に細くなり錐部を作出する 25・26 と、つまみ部と錐部の差が明確な 24・27・28 が存在する。30 は棒状の両端に錐部を作出する。そのほかの 4 点は、明確なつまみ部がないものが 2 点、つまみ部と棒状の錐部の差が明確なものが 2 点ある。石材は黒曜石が 7 点、チャートが 5 点である。

スクレイパー（第 25・26 図 31～34・37・41、P L 7）

搔器状の刃部を形成するものと、削器状の刃部を形成するものがある。搔器状のものは遺構から 4 点、遺構外から 6 点出土し 5 点を掲載した。31～34・37 は、様々な形状の剝片に細かな加工剝離を施し、搔器状の刃部を作出する。石材は黒曜石が 7 点、チャートが 3 点である。削器状のものは遺構内外から各 1 点が出土し、1 点を掲載した。41 は縁辺部に連続する加工剝離を施し、削器状の刃部を作出する。石材は黒曜石、砂岩が各 1 点である。

微細な剝離がある剝片（第 26 図 35・36・38～40、P L 7）

遺構から 24 点、遺構外から 22 点が出土し 5 点を掲載した。35・36・38～40 は様々な形状を呈する剝片の鋭利な縁辺部に、使用痕と推測する微細な剝離が連続し、39 はさらに摩耗痕（実測図トーン部分）が残る。石材は黒曜石が 31 点、チャートが 4 点、無斑晶質安山岩が 3 点、砂岩が 1 点、安山岩が 3 点、泥岩が 3 点、片麻岩が 1 点である。

二次加工がある剥片

遺構から5点、遺構外から16点が出土した。実測図と写真図版は掲載していない。特定の形状を作り出さず、様々な部位に様々な形態の二次加工を施す剥片を一括しており、石材は黒曜石が17点、チャートが1点、泥岩が3点である。

石匙 (第27図42~46、PL7)

遺構から5点、遺構外から2点が出土し、5点を掲載した。横形で両面からの加工でつまみ部を作出し、1辺に刃部をもつ42~45と、縦形で両面からの加工でつまみ部を作出し、2辺に刃部をもつ46が存在する。このほか、実測図を掲載していないが、片面からの加工でつまみ部を作出し、素材剥片の鋭利な縁辺をそのまま刃部とするものが出土している。刃部には、使用痕の可能性が高い微細な剝離がある。石材は3点が黒曜石、4点がチャートである。

石槍 (第27図47、PL7)

S B 01 の P 1 から1点が出土した。47は石槍の先端部で、両面に加工を施すが片面には多くの自然面が残る。石材は結晶片岩である。

両極石器

遺構から2点、遺構外から1点が出土した。実測図および写真図版は掲載していない。両極打法による剝離が両端部にある。石材は全て黒曜石である。

打製石斧 (第27図48~56、PL7)

遺構から7点、遺構外から11点が出土し、9点を掲載した。大形剥片を素材とし、縁辺部に階段状の剝離を連続的に施す。52・56は片面に自然面が多く残るが、礫素材となるかは不明である。形状は48~51など、欠損部がないものについては撥形を呈する。49・50・51・56は、表・裏面の基部や先端部に使用痕の可能性が高い摩耗痕がある(実測図トーン部分)。石材は泥岩が16点、凝灰岩が2点である。

石鍬 (第28・29図57~60、PL8)

遺構から3点、遺構外から6点が出土し、4点を掲載した。打製石斧と同様に、大形剥片の縁辺部へ階段状の剝離を連続的に施すが長さ14cm以上、幅8~10cmと打製石斧よりも大形である。欠損のため全体形状は不明確だが、基部よりも先端部の方が幅広で、57はそれが顕著である。58・59の先端部には、使用痕の可能性が高い摩耗痕がある(実測図トーン部分)。石材は全て安山岩である。

磨製石斧 (第29図61、PL7)

遺構から1点、遺構外から3点が出土し、1点を掲載した。61は断面形状が偏平で、全体に研磨調整を施し仕上げている。このほかに乳棒状石斧が1点、小破片が2点ある。石材は乳棒状石斧が緑色岩で、そのほかは不明である。

礫器 (第29図62・63、PL7)

遺構から2点が出土し、2点を掲載した。62・63は礫素材もしくは大形剥片に、粗い加工剝離を施す。礫器として分類したが石核の可能性もある。石材は泥岩である。

用途不明品 (第29図64、PL8)

用途の推定が困難なものを一括した。遺構外から3点が出土し、1点を掲載した。64は縁辺部に連続的な剝離を施し、上下両端には敲打・研磨調整により刃部的な稜を作出する。石材は泥岩である。

石核

遺構から33点、遺構外から39点が出土した。実測図と写真図版は掲載していない。石材は黒曜石が57点、チャートが8点、泥岩が4点、珪質頁岩、砂岩、無斑晶質安山岩が各1点である。

原石（第29図65、PL7）

遺構から6点、遺構外から12点が出土し、1点を掲載した。石材は黒曜石が14点、チャートが4点である。詳細な分析は行っていないが、黒曜石の原石には塊状のものと板状のものがあ、長さ20.9～53.7mm、幅22.0～31.9mm、重さ6.0～35.7gの範囲のものが11点、それよりも大形で長さ59.4～62.5mm、幅30.3～43.2mm、重さ43.2～62.0gの範囲のものが3点存在する。65は、後者に属する塊状の原石である。チャートの原石は全て塊状で、長さ23.4～39.5mm、幅11.2～37.7mm、重さ3.5～31.4gの範囲に収まり、黒曜石よりも小形である。

凹石・磨石・敲石（第30～32図66～78、PL8）

遺構から22点、遺構外から12点が出土し、13点を掲載した。素材となる円形状・楕円形状もしくは棒状を呈する礫に凹痕・磨面・敲打痕があるもので、1個体中に凹痕・磨面・敲打痕を併せ持つものが多い。66は楕円形状の礫が素材で両面に磨面、先端部と一側縁部に敲打痕が残る。67は棒状の礫、68は楕円形状の礫が素材で、両端部および片面に敲打痕が残る。69は円形状の礫、70は楕円形状の礫が素材で、片面のみに磨面が残る。71～78は円形状・楕円形状の礫が素材で、片面あるいは両面に凹痕、側縁部・両端部に敲打痕が残る。71～73・76・77は、片面もしくは両面に磨面をもつ。石材は安山岩が32点、砂岩が2点である。

石皿・台石（第32図79～82、PL9）

大形偏平礫の表面に使用痕と考えられる摩耗痕もしくは敲打痕が残るもので、摩耗痕が顕著なものを石皿、敲打痕が顕著なものを台石とした。石皿は遺構から12点、遺構外から8点出土し、3点を掲載した。79～81は機能面の摩耗部が皿状に窪み縁を有するもので、81は裏面に敲打痕が残る。82は摩耗部が窪まず、平坦面を形成する。石皿はこのほかに、摩耗部が皿状に窪み縁を有するものが7点、摩耗部が窪まず平坦面を形成するものが9点ある。石材は結晶片岩が1点で、ほかは全て安山岩である。台石は実測図・写真図版ともに掲載していないが、遺構外から3点が出土した。石材は全て安山岩である。

器種と石材の関係（第9表）

小山の神B遺跡で出土した石器には、11種類の石材が認められる。石鏃・石鏃未製品、石錐、スクレイパー、微細な剝離がある剝片、二次加工がある剝片、石匙、両極石器の小形石器には黒曜石が多く、石錐と石匙以外は65%を超える。それに次ぐのはチャートで、石錐と石匙はほかの小形石器よりもチャートの比率が高い傾向を示す。小形石器はこのほかに、無斑晶質安山岩、砂岩、泥岩があり、微細な剝離がある剝片にはさらに安山岩、片麻岩が加わる。

打製石斧、礫器、石鋏は泥岩、凝灰岩、黒色安山岩で作られ、打製石斧と礫器は圧倒的に泥岩の比率が高い。凝灰岩は、打製石斧のみの石材である。石鋏は全てが黒色安山岩である。

石核・原石は黒曜石が最も多く、全体の77%を超える。それに続くのはチャートだが、その比率は石核で11%、原石で22%と少ない。石核にはさらに無斑晶質安山岩、砂岩、泥岩、珪質頁岩がある。

凹石・磨石・敲石と石皿・台石は安山岩が圧倒的に主体で、そのほかに凹石・磨石・敲石には砂岩が、石皿・台石には結晶片岩が使われる。

剝片は黒曜石が最も多く全体の82%を占め、以下、チャートが11%、泥岩が5%などである。黒曜石とチャートの関係は石核・原石と類似し、剝片および石核・原石は、黒曜石とチャートが多い小形石器の製作等に関わるものであると推測する。

引用・参考文献

鶴田典昭ほか 2010『川路大明神原遺跡』長野県埋蔵文化財センター

	石 鎌	石 鎌未製品	石 錐	スクレイパー	微細剥離剥片	二次加工剥片	石 匙	石 槍	両極石器	打製石斧	石 鋏	磨製石斧	礫 器	用途不明品	石 核	原 石	凹石・磨石・敲石	石皿・台石	剥 片	合 計
SK119																			1	1
SK120																			1	1
SK121													1				1		1	3
SK122		1																	2	3
SK123										1										1
SK124																			4	4
SK126																			1	1
SK128																			1	1
SK129											1									1
SK131											1				1				5	7
SK132																			1	1
遺構内小計	12	4	3	5	24	5	5	1	2	7	3	1	2	0	33	6	22	13	751	899
SB15	2		1		2					1					2				34	42
SB16	1																	1	3	5
SB17																			1	1
SB18			1		1												1		2	5
SB19																	3		15	18
SB20																			1	1
SB21													1	2					4	7
SB22														1					4	5
SD01																1			10	11
SD03																			1	1
SD04																			1	1
SD05	3	2	1			2				1				7	1	1	6	89	113	
SD06																			1	1
SD07					1					1						2	1		68	73
SD08																			5	5
SF05																			1	1
II P16																			1	1
II P17										1					1	1			6	9
H23区				1											2				6	9
11T																			3	3
12T																			1	1
13T		1																		1
14T																			1	1
1区	21	4	6	6	18	12	2		1	9	1	2		2	18	6	6	3	834	951
2区											1				2				9	12
3区		3				2				1	1				3				80	90
4区	1											1			1	1			5	9
5区																			1	1
Z																			4	4
遺構外小計	28	10	9	7	22	16	2	0	1	11	6	3	0	3	39	12	12	10	1191	1382
合 計	40	14	12	12	46	21	7	1	3	18	9	4	2	3	72	18	34	23	1942	2281

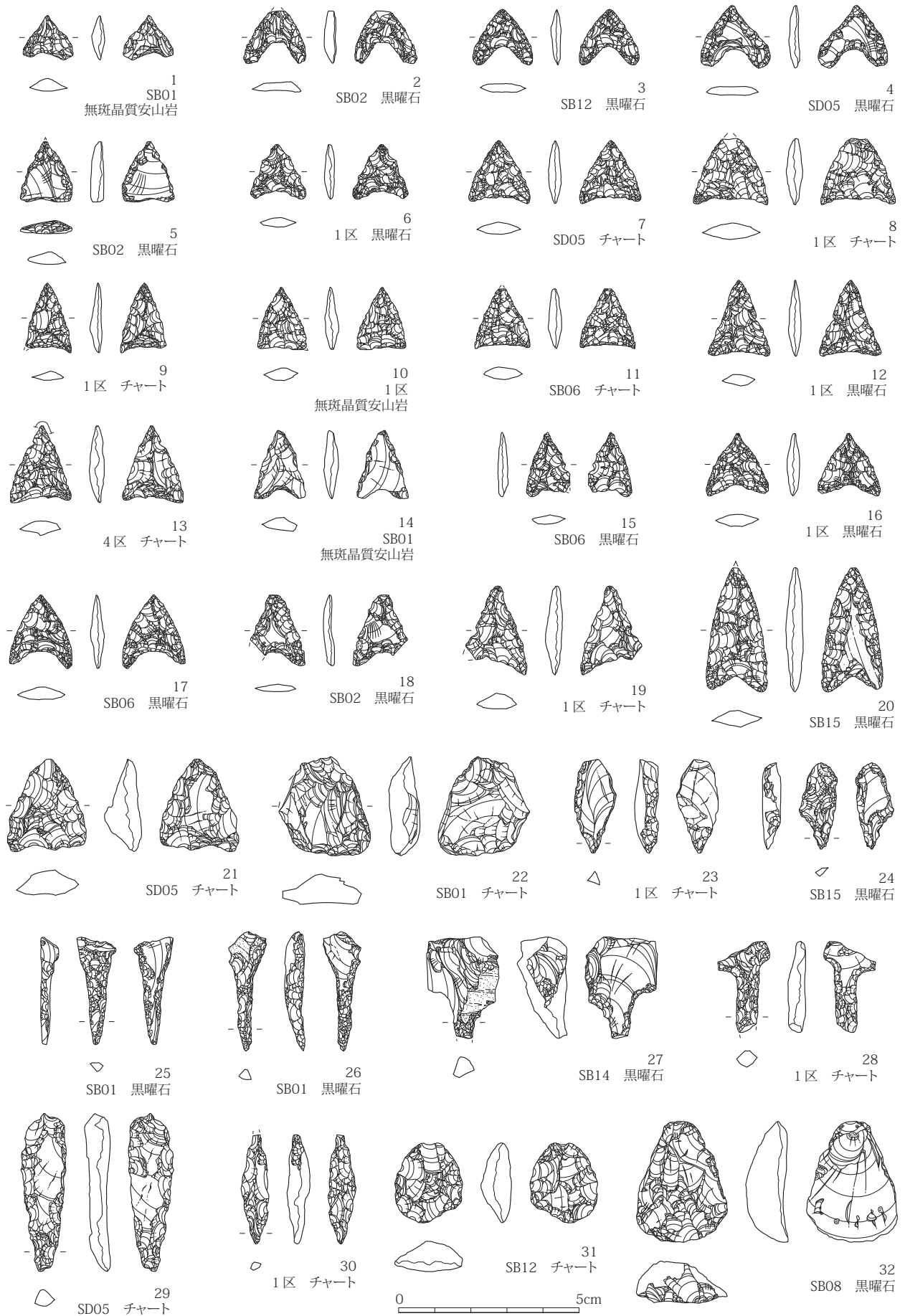
第9表 石器の器種別の石材

	石 鎌	石 鎌未製品	石 錐	スクレイパー	微細剥離剥片	二次加工剥片	石 匙	石 槍	両極石器	打製石斧	石 鋏	磨製石斧	礫 器	用途不明品	石 核	原 石	凹石・磨石・敲石	石皿・台石	剥 片	合 計
黒 曜 石	29	10	7	8	31	17	3		3						57	14			1584	1763
チャート	8	4	5	3	4	1	4								8	4			210	251
無斑晶質安山岩	3				3										1				3	10
砂 岩				1	1										1		2		3	8
安 山 岩																	32	22		54
黒色安山岩					3						9								19	31
泥 岩					3	3				16			2	1	4				94	123
片 麻 岩					1															1
結 晶 片 岩								1										1		2
凝 灰 岩										2									1	3
緑 色 岩												1								1
珪 質 頁 岩															1				28	29
不 明												3		2						5
合 計	40	14	12	12	46	21	7	1	3	18	9	4	2	3	72	18	34	23	1942	2281

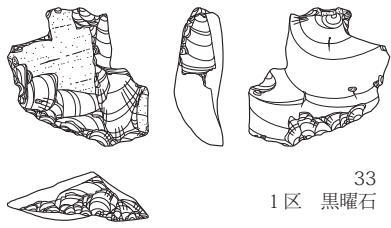
第10表 石器観察表

図版 番号	P L 番号	管理 番号	出土位置	器 種	石 材	法量 (cm、g)				備 考
						長さ	幅	厚さ	重さ	
25-1	6	1001	SB01 No.1	石鏃	無斑晶質安山岩	12.7	14.0	3.7	0.4	無茎
-2	6	1038	SB02 No.11	石鏃	黒曜石	(14.5)	17.4	3.2	(0.5)	無茎
-3	6	1108	SB12 北半	石鏃	黒曜石	15.4	16.7	2.9	0.5	無茎
-4	6	1175	SD05 一括	石鏃	黒曜石	17.8	19.3	2.7	0.7	無茎
-5	6	1056	SB02 北西床下	石鏃	黒曜石	(17.1)	14.7	3.7	(0.8)	無茎
-6	6	1320	1区 I O04	石鏃	黒曜石	15.2	15.5	2.8	0.5	無茎
-7	6	1186	SD05 II F 21	石鏃	チャート	17.4	17.2	3.4	0.8	無茎
-8	6	1263	1区 I J 05 Z	石鏃	チャート	(18.4)	20.7	4.6	(1.4)	無茎
-9	6	1319	1区 I O04	石鏃	チャート	19.7	13.2	3.4	0.5	無茎
-10	6	1299	1区 I J 15	石鏃	無斑晶質安山岩	17.8	13.7	3.9	0.7	無茎
-11	6	1070	SB06 南東床	石鏃	チャート	(16.7)	15.3	3.9	(16.0)	無茎
-12	6	1295	1区 I J 02	石鏃	黒曜石	21.2	17.3	3.7	0.8	無茎
-13	6	1226	4区 II P 13	石鏃	チャート	21.2	17.0	3.4	1.1	無茎
-14	6	1004	SB01 No.17	石鏃	無斑晶質安山岩	19.2	14.3	3.7	0.8	無茎
-15	6	1079	SB06 南西	石鏃	黒曜石	18.1	(12.9)	3.1	(0.5)	無茎
-16	6	1311	1区 I J 20	石鏃	黒曜石	17.2	17.4	3.6	0.7	無茎
-17	6	1078	SB06 南東床	石鏃	黒曜石	19.5	17.5	4.0	0.8	無茎
-18		1041	SB02 北西床	石鏃	黒曜石	(20.6)	(15.2)	2.3	(0.5)	無茎
-19		1287	1区 I J 20	石鏃	チャート	24.5	(17.5)	4.4	(1.3)	無茎
-20	6	1130	SB15 検出面	石鏃	黒曜石	(34.2)	17.1	4.6	2.2	無茎
-21	6	1188	SD05	石鏃未製品	チャート	25.4	22.0	9.9	4.2	
-22	6	1011	SB01 Pit 1	石鏃未製品	チャート	27.5	25.3	8.3	6.0	
-23	6	1309	1区 I J 20	石錐	チャート	26.0	11.3	6.3	2.0	
-24	6	1126	SB15 南	石錐	黒曜石	24.1	9.9	5.1	1.2	
-25	6	1012	SB01 南東	石錐	黒曜石	29.8	10.5	4.8	0.8	
-26	6	1015	SB01 北西	石錐	黒曜石	33.3	10.8	5.0	1.1	
-27	6	1116	SB14 北	石錐	黒曜石	(28.4)	21.4	11.6	(5.0)	
-28	6	1249	1区 I J 19	石錐	チャート	(25.5)	14.9	4.7	(1.1)	
-29	6	1181	SD05	石錐	チャート	44.1	12.4	7.1	3.6	
-30	6	1314	1区 I J 24	石錐	チャート	(30.2)	7.5	6.7	(1.1)	
-31	7	1109	SB12	スクレイパー	チャート	22.8	19.5	8.7	3.4	搔器
-32	7	1087	SB08 No.4	スクレイパー	黒曜石	33.7	25.3	10.0	7.8	搔器
26-33	7	1283	1区 I J 03	スクレイパー	黒曜石	24.8	32.3	9.5	5.5	搔器
-34	7	1164	SK109	スクレイパー	チャート	22.3	35.2	8.5	8.6	搔器
-35	7	1099	SB09 No.4	微細剝離剥片	無斑晶質安山岩	47.3	66.2	10.1	31.7	
-36	7	1093	SB08 南東	微細剝離剥片	安山岩	35.3	68.0	9.8	26.4	
-37	7	1106	SB10 北西	スクレイパー	チャート	53.0	38.9	14.5	32.0	搔器
-38	7	1021	SB01 北西	微細剝離剥片	泥岩	31.4	35.7	15.2	18.7	
-39	7	1066	SB06 No.8	微細剝離剥片	無斑晶質安山岩	60.2	54.6	6.2	23.3	光沢痕有
-40	7	1343	SB06 南西床	微細剝離剥片	片麻岩	(38.0)	(36.2)	2.9	(4.9)	
-41	7	1119	SB14 南	スクレイパー	黒曜石	109.8	38.0	20.7	77.1	削器
27-42	7	1003	SB01 No.16	石匙	チャート	28.3	36.2	7.2	6.7	
-43	7	1151	SK034	石匙	黒曜石	22.9	37.4	7.1	4.2	
-44	7	1148	SK018	石匙	チャート	23.3	37.4	6.4	4.5	
-45	7	1033	SB02 No.2	石匙	チャート	(23.4)	(31.4)	(7.4)	(4.9)	
-46	7	1273	1区 I J 15	石匙	黒曜石	50.8	21.2	9.5	8.8	
-47	7	1007	SB01 Pit 1 No.1	石槍	結晶片岩	(39.5)	(30.1)	(12.9)	(13.0)	
-48	7	1167	SK123	打製石斧	泥岩	73.8	45.8	10.8	42.3	

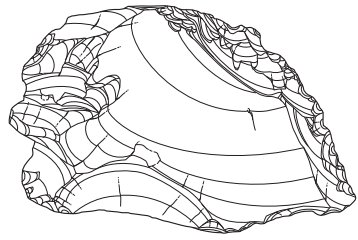
図版 番号	P L 番号	管理 番号	出土位置	器 種	石 材	法量 (cm、g)				備 考
						長さ	幅	厚さ	重さ	
27-49	7	1149	SK022	打製石斧	泥岩	83.9	54.0	11.1	55.7	
-50	7	1330	1区	打製石斧	泥岩	(73.5)	39.7	16.8	(53.7)	
-51	7	1153	SK048 1層	打製石斧	泥岩	97.5	52.2	13.3	70.7	
-52	7	1097	SB09 No.1	打製石斧	泥岩	(91.8)	40.6	10.4	(42.8)	
-53		1132	SB15 No.26	打製石斧	泥岩	(84.1)	58.8	11.0	(58.8)	
-54	7	1236	1区 I J 6	打製石斧	凝灰岩	(92.5)	50.5	19.2	(101.4)	
-55	7	1162	SK105	打製石斧	凝灰岩?	(92.2)	42.0	12.2	(65.5)	
-56	7	1339	1区	打製石斧	泥岩	77.1	37.3	18.3	62.4	
28-57	8	1169	SK129 No.1	石鋏	黒色安山岩	145.0	113.7	29.5	489.9	
-58	8	1159	SK076 No.1	石鋏	黒色安山岩	(152.0)	98.6	18.9	(406.4)	
-59	8	1201	SD07 II P 16 検出面	石鋏	黒色安山岩	(190.0)	113.0	24.8	(538.8)	
29-60	8	1171	SK131 4層	石鋏	黒色安山岩	(141.4)	(121.2)	16.9	(405.1)	
-61	7	1057	SB03 No.1	磨製石斧	不明	51.0	30.5	9.9	25.8	
-62	7	1026	SB01 北西1層	礫器	泥岩	84.9	69.5	34.6	244.8	
-63	7	1166	SK121	礫器	泥岩	60.8	87.2	35.2	250.4	
-64	8	1284	1区 I J 14	不明石製品	泥岩	69.2	42.0	18.8	93.5	
-65	7	1157	SK051 5層	原石	黒曜石	62.5	30.3	19.9	43.2	
30-66		1154	SK051 No.5	凹石・磨石・敲石	安山岩	154.3	85.0	55.3	1028.5	
-67	8	1058	SB03 No.4	凹石・磨石・敲石	安山岩	14.5	5.5	3.6	402.4	
-68	8	1138	SB19 西3層	凹石・磨石・敲石	安山岩	57.4	48.8	37.9	130.2	
-69		1139	SB19 西3層	凹石・磨石・敲石	安山岩	77.2	73.2	60.1	480.1	
-70	8	1059	SB03 北西	凹石・磨石・敲石	安山岩	41.3	30.1	12.3	27.0	
-71	8	1136	SB18 No.9	凹石・磨石・敲石	安山岩	124.0	91.7	56.4	893.3	
-72	8	1101	SB09 No.10	凹石・磨石・敲石	安山岩	102.3	86.6	45.2	494.2	
-73	8	1118	SB14 南	凹石・磨石・敲石	安山岩	91.1	80.0	52.0	509.2	
-74	8	1092	SB08 南東	凹石・磨石・敲石	安山岩	93.8	82.4	48.2	511.3	
31-75	8	1192	SD05	凹石・磨石・敲石	安山岩	121.8	102.6	50.3	730.5	
-76	8	1146	SK008 No.1	凹石・磨石・敲石	安山岩	99.1	88.7	34.4	399.3	
-77	8	1156	SK051 中層	凹石・磨石・敲石	安山岩	105.0	75.1	54.6	644.5	
32-78	8	1165	SK121	凹石・磨石・敲石	安山岩	93.5	76.4	45.6	440.9	
-79	9	1031	SB01 No.23	石皿	安山岩	(308.0)	243.0	142.0	(132.0)	窪み部有
-80	9	1067	SB06 No.18・24	石皿	結晶片岩	236.0	162.0	4.0	1432.0	窪み部有
-81	9	1134	SB16 No.13	石皿	安山岩	26.6	19.3	6.9	4200.0	窪み部有
-82	9	1096	SB08 Pit 2 No.2	石皿	安山岩	37.6	34.6	15.8	24400.0	窪み部無



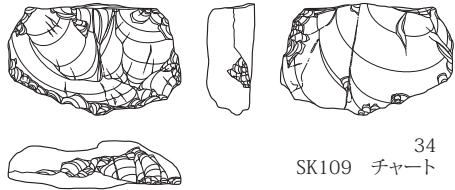
第25図 縄文時代の石器(1)



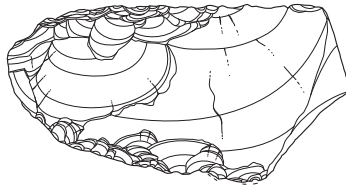
33
1区 黒曜石



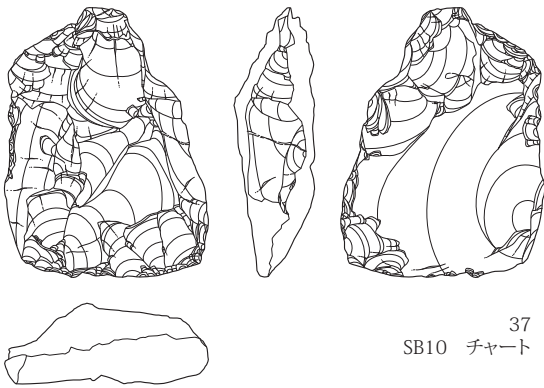
35
SB09 無斑晶質安山岩



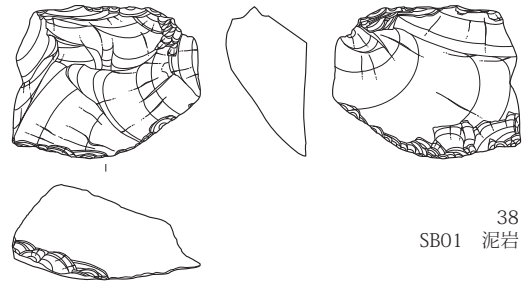
34
SK109 チャート



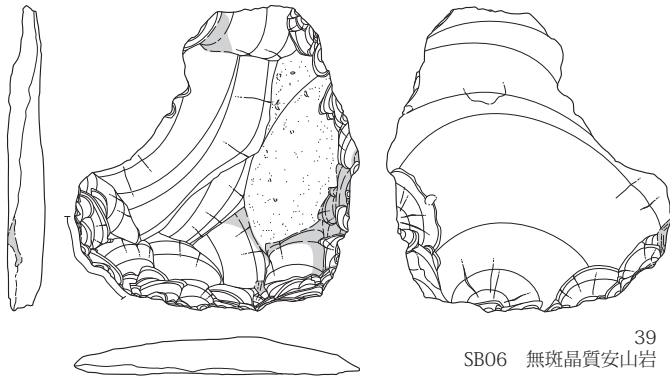
36
SB08 安山岩



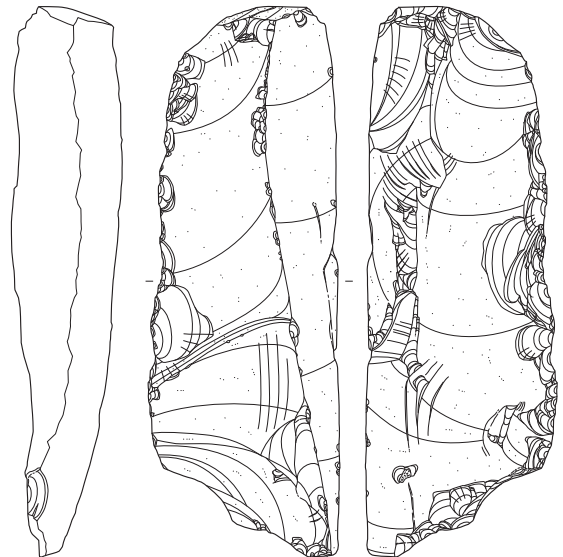
37
SB10 チャート



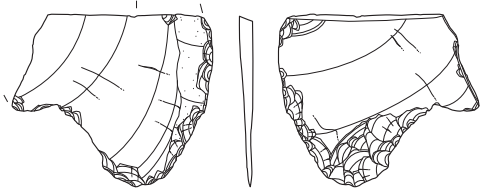
38
SB01 泥岩



39
SB06 無斑晶質安山岩



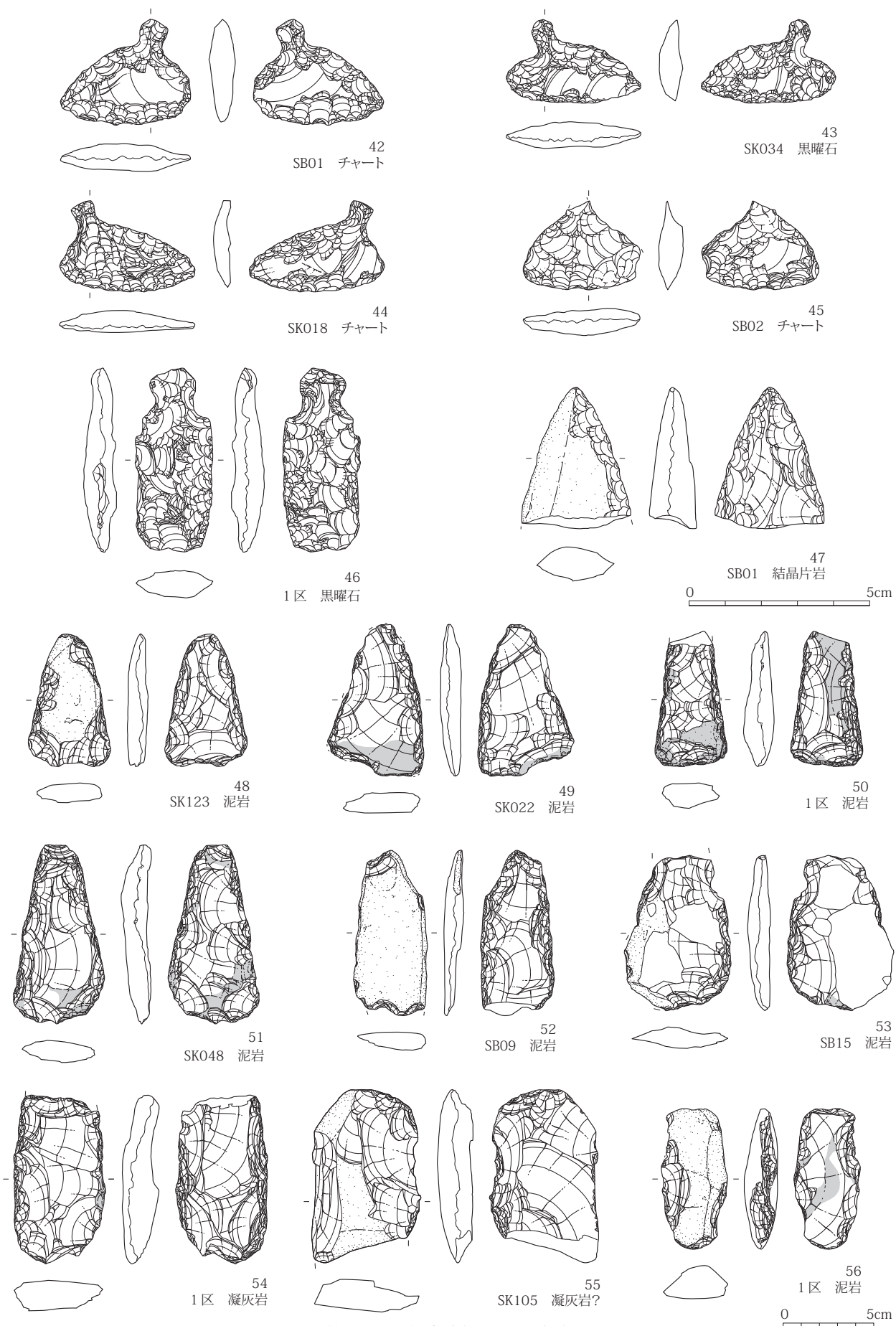
41
SB14 黒曜石



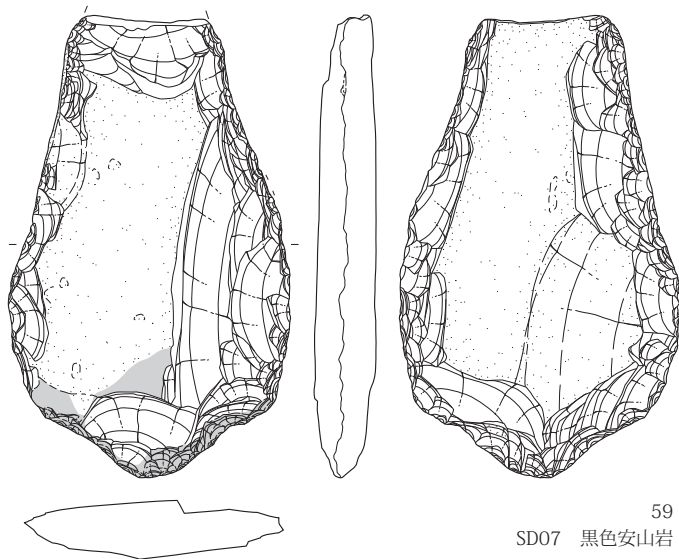
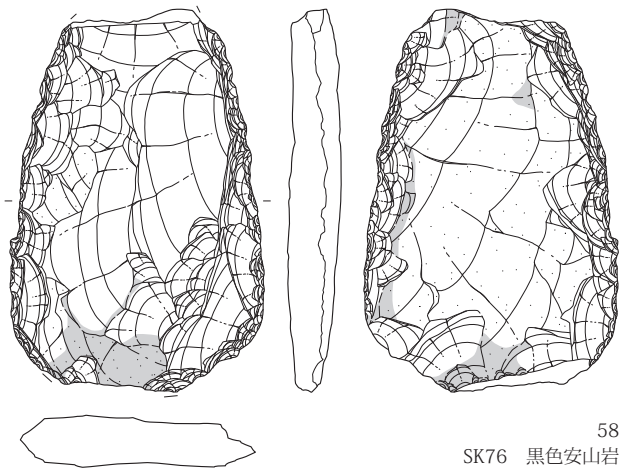
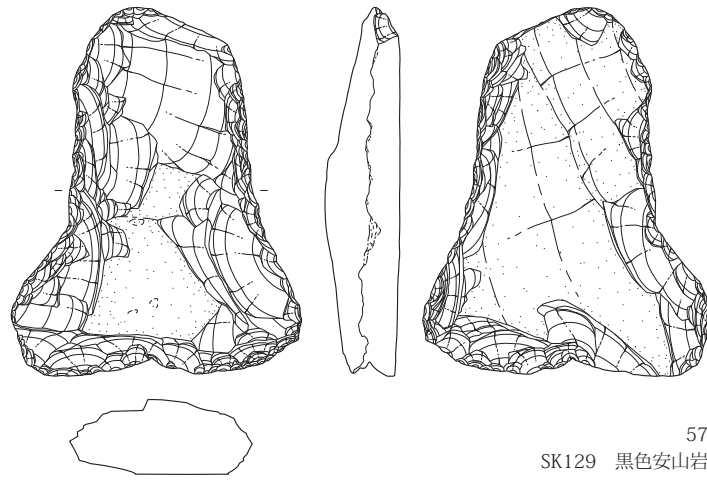
40
SB06 片麻岩



第26図 縄文時代の石器(2)

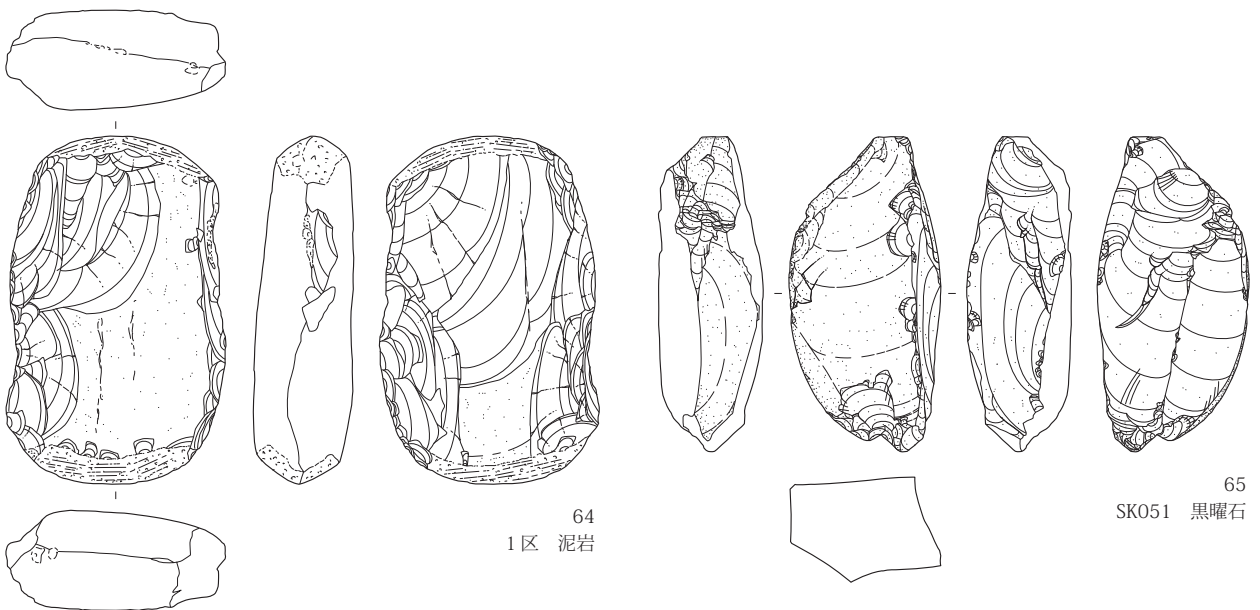
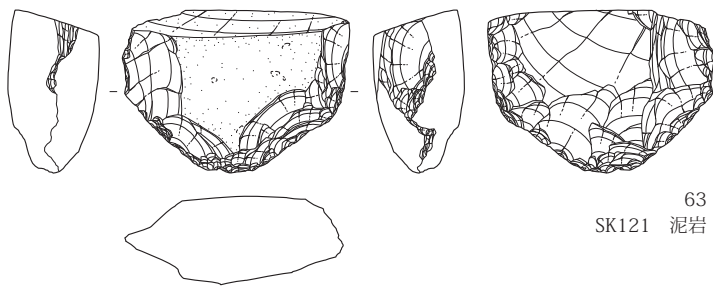
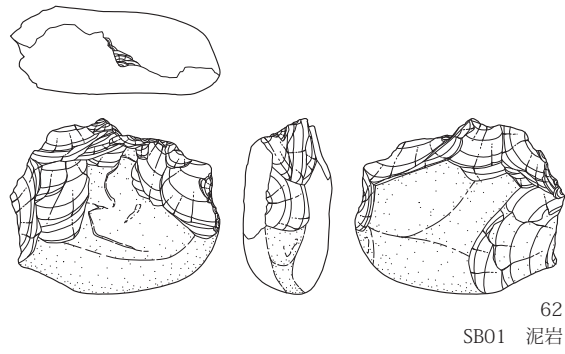
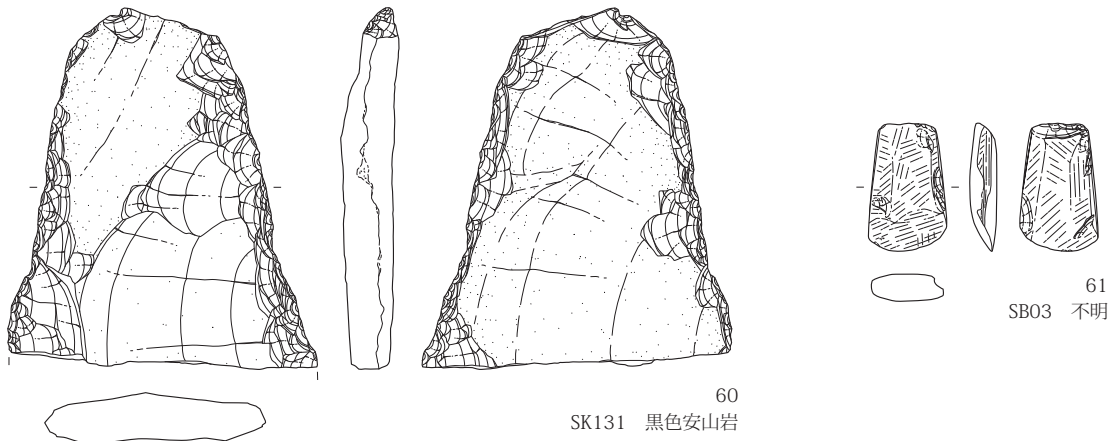


第27図 縄文時代の石器(3)



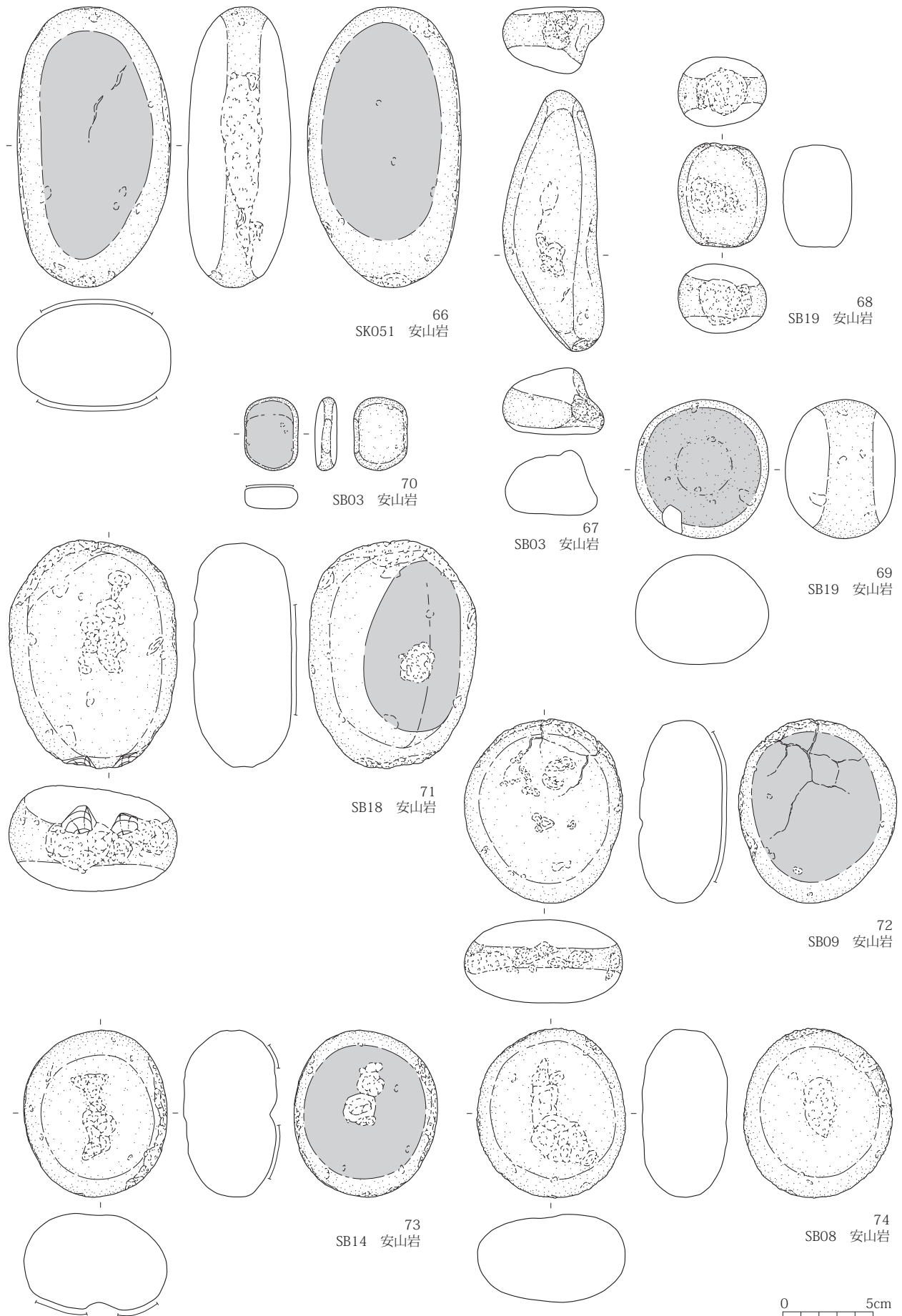
0 5cm

第28図 縄文時代の石器（4）

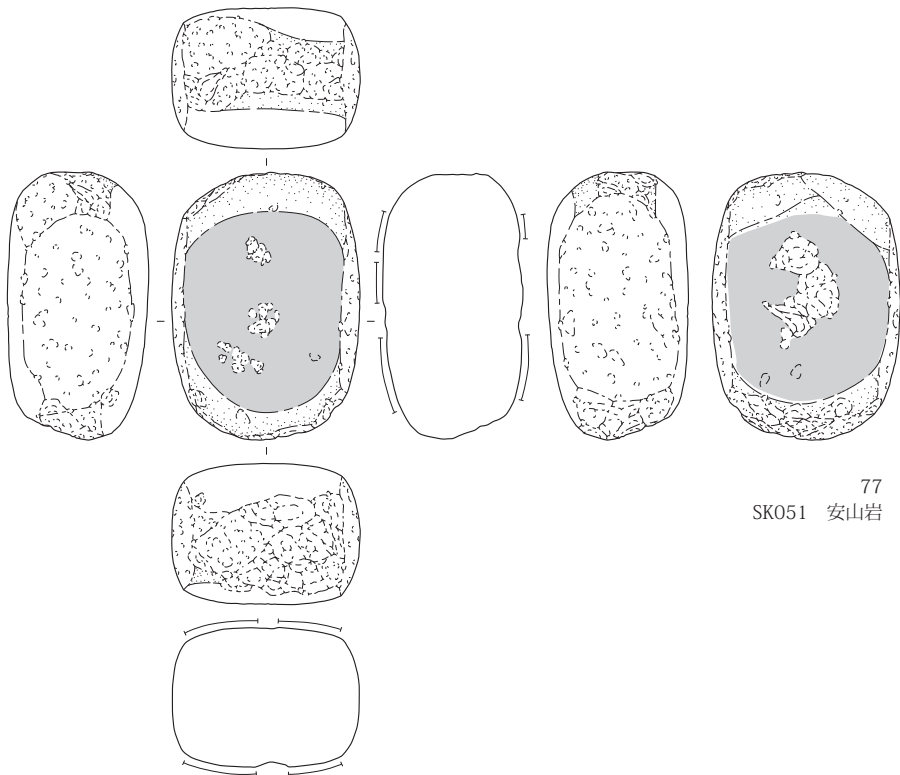
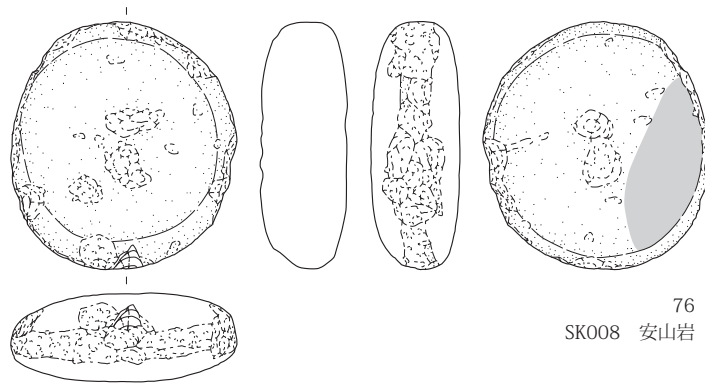
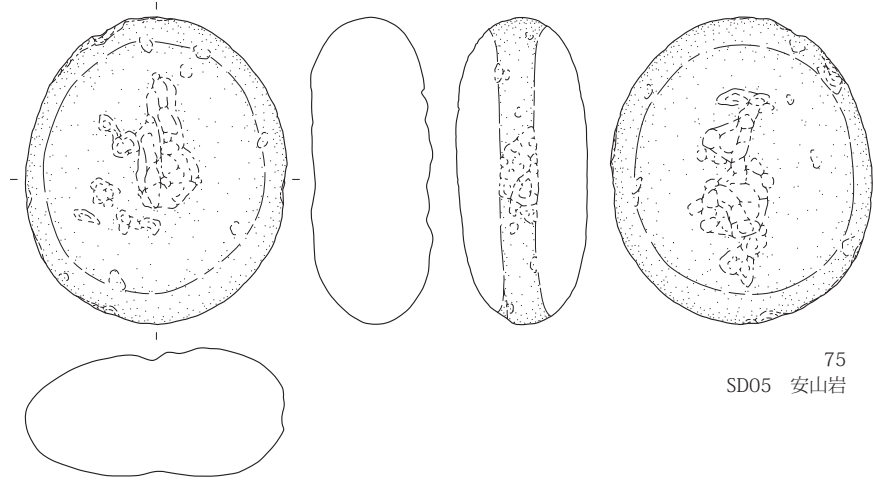


0 5cm

第29図 縄文時代の石器(5)

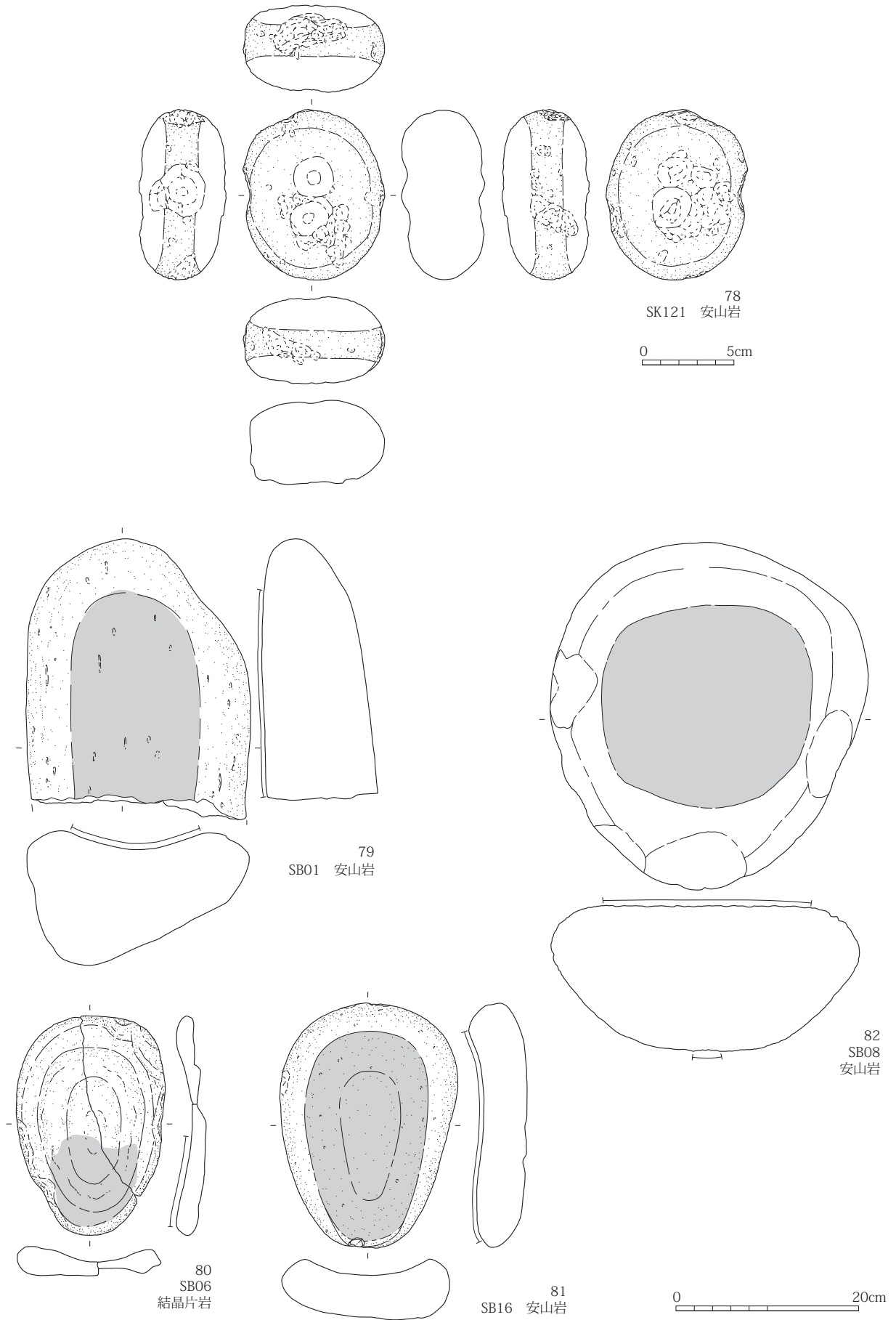


第30図 縄文時代の石器(6)



0 5cm

第31図 縄文時代の石器(7)



第32図 縄文時代の石器(8)

第3節 平安時代以降の遺構と遺物

1 概観

当該期の遺構は1・3・4区において竪穴建物跡9軒、溝跡4条、土坑8基、被熱部4基を検出した(第10・33図)。溝跡以外の遺構は3・4区の緩やかな斜面の、標高710~718mの範囲に分布する。標高710mよりも南側の2区は谷状地形が入り込み、遺構は存在しない。それに対して溝跡は、1区南側から2区の谷状地形までと広い範囲におよぶ。時期は、竪穴建物跡は出土した土器から平安時代と考えるが、そのほかは不明のことが多い。しかし、土坑と被熱部は竪穴建物跡と同じ範囲に分布し、溝跡と土坑には平安時代の遺物が出土したものが存在することなどから、平安時代に該当するものが多いと推測する。

2 遺構

(1) 竪穴建物跡(第34~38図、PL2)

SB15(第34図)

位置：3区、IO25、IT05、IK21、IP01グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：調査所見では1軒だが、建て替えもしくは2軒の重複の可能性がある。埋土：2層が堆積する。2層褐色砂質土が床面を覆い、その上部を1層黒褐色砂質シルトが埋積する。形状・規模：平面形は残存部からみて方形と考える。規模は南西・北東方向が7.0m、北西・南東方向は残存部で4.3mを測る。床・壁：床面は貼床がある。ただし、平坦ではなく、P2付近を境に北東側は南西側よりも15~20cm高い。壁は残存部で高さ30~40cmを測り、斜め~垂直に近い角度で立ち上がる。柱穴：検出できなかった。周溝：南西壁から西壁コーナー付近の壁際で幅10~15cm、深さ5cm程度の周溝を検出した。また、北壁コーナーおよびP1付近で幅10cm、深さ1cm程度の周溝を検出した。カマド：北壁に2基を検出した。カマド1は北西壁中央より北側へ寄った位置にある。残骸の状態、火床の左右には袖石残痕の礫と、袖石の抜き取り痕と推測する凹みを検出した。また、北西壁に接する若干の張出しが煙道と推測する。カマド2は北西壁中央付近に位置し、火床と袖部の残痕、袖石を検出した。煙道は残存していない。その他の施設：性格不明だが北側壁コーナー付近でP1、西側壁コーナー付近でP3・6を検出した。平面形は楕円形または不整楕円形でP1は長軸110cm、短軸84cm、深さ20cm、P3は長軸120cm、短軸96cm、深さ20cm、P6は長軸150cm、短軸100cm、深さ20cmを測る。3基は平面規模に若干の差はあるが、深さが共通する。P3・6には重複関係があり、P3がP6を切る。また、カマド2の東側で、カマド1の正面から南側に延びる溝状のP2を検出した。P2は長軸206cm、短軸30~80cmで深さは10cm程度である。遺物：カマド2の内部とその周辺から黒色土器坏、土師器坏・鉢・甕、灰釉陶器碗・長頸瓶、須恵器甕が出土した。調査所見：発掘時の所見で、本竪穴建物跡は1軒としているが、カマドが2基存在する点、P2を境に東側の床面が西側よりも15~20cm高い点、P3・6に重複関係が認められる点などから、2軒の重複や建替えが行われた可能性が高い。その場合は、新しい竪穴建物跡にカマド2とP3が伴い、P2は新しい竪穴建物跡の周溝となり、周溝際に古い竪穴建物跡の床面を掘込む壁の立上がりがあったと見ることができる。なお、古い竪穴建物跡にはカマド1とP6が伴うと推測する。遺物はカマド2周辺に多いため、新しい竪穴建物跡に伴うものであろう。時期：出土した土器の時期から、10世紀と考える。

SB16(第35図、PL2)

位置：4区、IP08グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：SB17を貼る。SK

133に切られる。埋土：基本的には黒褐色シルトの単層だが、東壁・西壁際には部分的に炭化物粒が混じる2・4層黒褐色シルトが堆積する。形状・規模：平面形は、残存部からみて方形と推測する。規模は南西・北東方向で4m、北西・南東方向は残存部で2.5mを測る。床・壁：床面は部分的に貼床を施し、重複関係にあるSB17の埋土上部に及ぶ。壁は南西壁と北東壁の残存部で14~20cm、北西壁の残存部で44cmを測り、斜めに立ち上がる。柱穴：検出できなかった。周溝：北西壁・北東壁・南西壁際に幅15~30cm、深さ4cmの周溝が途切れなく巡る。カマド：北西壁中央から北側に寄った位置で、石組みカマド1基と煙道の一部を検出した。支脚石は失われていたが、カマド内部の中央付近に抜取り痕と推測する凹みを検出した。また、右側の袖部周辺に炭が広がっていた。その他の施設：検出できなかった。遺物：カマドの南側付近で土師器甕などが出土した。小破片が多い。また、床面中央付近と南西壁の立上がり部で、刀子各1点が出土した。時期：出土した土器は9~10世紀の土師器甕で、さらに10世紀後半と推測するSB17を切る点から、10世紀後半以降と考える。

SB 17 (第35図、PL2)

位置：4区、II P 08グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：SB16に貼られる。埋土：3層が堆積する。7層暗褐色シルトが壁際から床面を覆う。その上部に堆積する6層暗褐色シルトには黄褐色シルトブロックを多く含み、5層は本竪穴建物跡を貼るSB16の床直下に該当することから、5・6層は人為的埋没の可能性があると推測する。形状・規模：平面形は、残存部からみて方形と推測する。規模は南西・北東方向で3.4m、北西・南東方向の残存部で1.2mを測る。床・壁：掘方を平坦に整え床面とする。貼床はない。壁は残存部で13~16cmを測り、斜めに立ち上がる。柱穴：検出できなかった。周溝：残存部の壁際に幅7~13cm、深さ2cmを測る周溝が途切れなく巡る。カマド：検出できなかった。その他の施設：なし。遺物：床面から土師器高台付塚・甕・羽釜などが出土した。小破片が多い。時期：出土した土器の時期から、10世紀後半と考える。

SB 18 (第35図)

位置：4区、II P 15グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：なし。埋土：基本的には2層堆積で、2層暗褐色シルトが壁際から床面を覆い、その上部に1層黒褐色が部分的に堆積する。北西壁際の一部に、断面三角形の3層黒褐色シルトが堆積する。形状・規模：平面形は、残存部からみて方形と推測する。規模は南西・北東方向で4m、北西・南東方向の残存部で2.2mを測る。床・壁：掘方を平坦に整え床面とする。貼床はない。壁は残存部で13~15cmを測り、斜めに立ち上がる。柱穴：検出できなかった。周溝：北東壁から北西壁にあるカマドの東側までの壁際に幅12cm、深さ3cmを測る周溝を検出した。北西壁の周溝はP1と連結する。カマド：北西壁の中央からやや左側に寄った位置で煙道、火床、袖石、支脚石の抜取り痕を検出した。その他の施設：性格不明だが、カマドの右側でP1、カマドの左側から北壁コーナー付近でP2を検出した。P1は楕円形の土坑で長軸74cm、短軸42cm、深さ10cmを測る。周溝と連結するのでそれに関わる施設であろう。P2は楕円形で長軸1.3m、短軸80cm、深さ15cmを測る。遺物：カマド内部とその周辺から黒色土器坏・高台付塚、黒色土器B類塚、土師器甕、須恵器甕が出土した。時期：出土した土器の時期から、9世紀と考える。

SB 19 (第36図、PL2)

位置：4区、II P 08・09・13・14グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：なし。埋土：基本的には3層堆積で、3層黒褐色シルトが壁際から床面を覆い、1・2層の黒色シルト、黒褐色シルトがその上部を埋積する。東壁の一部に黄褐色微細ブロックを含む4層黒褐色シルトが、断面三角状に堆積する。形状・規模：平面形は、方形が重複するような形状を呈する。規模は南西・北東方向で7m、北西・南東方向の残存部で4.8mを測る。床・壁：掘方を整え床面とする。南西壁から幅1.2mの範

囲はテラス状を呈し、床面がほかよりも20～25cm高い。全体的に貼床はない。壁は北東壁の残存部で40cm、南西壁の残存部で27cm、北西壁の残存部で95cmを測り、斜めに立ち上がる。柱穴：検出できなかった。周溝および溝：北西壁・北東壁で幅15～30cm、深さ2～8cmの周溝を検出した。北西壁・北東壁の周溝は壁際を途切れなく巡る。北西壁の周溝は2条が重複しており、1条はカマド本体下部を通過する。床面中央付近の溝はP4と連結する。カマド：北壁中央から北側へ寄った位置で、石組みカマド1基と煙道の一部を検出した。カマドの内部には、支脚石の抜取り痕が残っていた。煙道は両側に礫を立て、上部を3点の天井石で塞いでいた。その他の施設：性格不明だが、北西壁から外側へ40cm（北西側のテラス部からは外側へ90cm）離れた位置に、本竪穴建物跡全体を囲むような段切りを検出した。竪穴建物跡の内部では、性格不明の土坑7基を検出した。P1はカマドの右側にある楕円形の土坑で、周溝と連結し長軸47cm、短軸36cm（深さは不明）を測る。P2～4は、南東壁付近にまとまる。P2は長軸60cm、短軸55cm、深さ10cmを測る楕円形の土坑でP3と接する。P3は円形の土坑で直径95cm、深さ40cmを測る。P4は楕円形の土坑で長軸107cm、短軸83cm、深さ25cmを測り床面中央付近の溝と連結する。そのほか直径30～37cm、深さ4～6cmを測る円形の小形土坑P5～7を検出したが、位置などに規則性はない。遺物：埋土から黒色土器坏、土師器高台付壺・甕・羽釜、須恵器甕が出土した。本竪穴建物跡とSB16から出土した灰釉陶器が接合する。また、刀子1点と用途不明の板状鉄製品が出土した。調査所見：本竪穴建物跡は、南西・北東方向、北西・南東方向の埋土が全体に連続して堆積する点、南西側テラス部を境に床面の高さが異なるもののそこに壁の立ち上がりがない点、カマドが1基である点、北西壁の外側に全体を囲むような段切りを検出した点などから、重複はなく1軒と判断した。北西壁の周溝が重複し、壁の平面プランが方形を重複させたような形状を呈するのは、1軒の竪穴建物跡で複数回の拡張を行ったものと推測する。時期：出土した土器から、10世紀後半と考える。

SB 20 (第37図)

位置：3区、IT05グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：残存部では確認できなかった。埋土：削平を受け残存していない。第I層直下で本竪穴建物跡が露出した。形状・規模：削平された範囲が広く不明だが、周溝が直線的であることから平面形は方形の可能性が高い。規模は南西・北東方向の残存部で3.6m、北西・南東方向の残存部で1.2mを測る。床・壁：掘方を整え床面とする。貼床は確認できなかった。壁は残存していない。柱穴：検出できなかった。周溝：北西壁際から南西壁際を巡ると推測する幅10～18cm、深さ4cmの周溝を検出した。カマド：北西壁中央よりやや北側へ寄った位置で、火床と袖石の抜取り痕を検出した。その他の施設：性格不明だが、カマド左側で直径24cm、深さ20cmのP1・2を検出した。P1は北西壁の周溝と連結する。遺物：床面精査時に土師器甕、須恵器蓋の小破片が出土した。時期：出土した土器の時期から平安時代と考えるが、詳細は不明である。

SB 21 (第37図)

位置：3区、IT15・20、IIP11・16グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：なし。埋土：単層で、暗褐色シルトが堆積する。形状・規模：平面形は、残存部から見て方形と推測する。規模は南西・北東方向で3.8m、北西・南東方向の残存部で4mを測る。床・壁：掘方を整え床面とする。貼床は確認できなかった。壁は残存部で40cmを測る。柱穴：検出できなかった。周溝：西壁コーナーから南西壁際に幅16cm、深さ2～5cmを測る周溝を検出した。また、北壁コーナーから北東壁際に幅20～28cm、深さ2～4cmを測る周溝を検出した。この周溝は、北西壁に接するP1と連結する。カマド：2基を検出した。カマド1は石組みカマドで、左右両側の袖石と天井石が残存していた。支脚石は天井石よりも手前で、左側の袖石に若干寄った位置に立ち、この延長線上の天井石下部から煙道が立ち上がる。カマド2は北東壁にあり、本体が北東壁から突出する。残痕で、袖石の抜取り痕と火床を確認したのみである。

ことから、カマド2からカマド1へと造り替えが行われたものとする。その他の施設：性格不明だが、土坑4基を検出した。P1はカマド1の右側にある楕円形の土坑で長軸82cm、短軸68cm、深さ16cmを測る。P2はカマド2の左側にある楕円形の土坑で直径52cm、深さ35cmを測る。P3・4はカマド1の左側から西壁コーナー付近にある不整形の土坑で、P3は長軸82cm、68cm、深さ10cm、P4は長軸・短軸ともに90cmで、掘方は段掘り状を呈する。深さは、段掘りの浅い部分で5～10cm、深い部分で15cmを測る。遺物：カマド1の前面から左側のP3にかけて黒色土器坏、土師器甕、灰釉陶器碗が出土した。時期：出土した土器の時期から、9世紀前半と考える。

SB 22 (第38図)

位置：3区、II P 16・21 グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：なし。埋土：4層が堆積する。北壁際に3・4層黒褐色シルトが堆積し、その上部全体を2層黒褐色シルトが覆い、2～4層全体を1層黒褐色シルトが埋積する。形状・規模：平面形は方形を呈する。規模は南西・北東方向で3.6m、北西・南東方向で3.4mを測る。床・壁：掘方を平坦に整え床面とする。P1上面のみ、P1を塞ぐような貼床を確認した。壁は残存部で20cmを測り、斜めに立ち上がる。柱穴：検出できなかった。周溝：北東壁の一部を除いて、壁際全体に幅25～30cm、深さ10cmの周溝が巡る。周溝を検出できなかった北東壁の部分は、床面が黒色土中に作られ、周溝埋土との違いがわからず検出できなかった可能性がある。カマド：北西壁中央よりやや北側へ寄った位置で、袖部の残痕と火床および火床の左右両側で袖石の抜き取り痕を検出した。支脚石は存在せず、抜き取り痕も確認できなかった。その他の施設：性格不明の土坑2基を検出した。P1はカマドの左側で、西壁コーナーとの間にある楕円形の土坑で長径90cm、短径65cm、深さ10cmを測る。上面は、土坑を塞ぐように貼床が施されていた点から、土坑としての役割を終え、埋め戻された可能性が高い。P2は、南東側へ寄った位置にある小形の円形土坑で直径26cm、深さ10cm程度を測る。遺物：埋土から須恵器坏、黒色土器坏、土師器甕・甑などが出土した。時期：出土した土器の時期から、9世紀後半と考える。

SB 23 (第38図)

位置：4区、II P 12・13 グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。削平を受け、カマドのみ残存する。重複関係：なし。埋土：削平され残存しない。形状・規模：床・壁：床・壁ともに残存せず、形状・規模ともに不明である。柱穴：検出できなかった。周溝：検出できなかった。カマド：北西壁に付設されていたカマドの袖部残痕、火床、支脚石を検出した。その他の施設：性格不明だが、カマドの左側で直径40cm、深さ15cm程度の円形を呈するP1を検出した。遺物：カマド火床で須恵器坏の破片が出土した。時期：火床で出土した須恵器の破片から平安時代と考えるが、詳細は不明である。

(2) 溝跡 (第10・11・39・40図)

SD 01 (第11・39図)

位置：1区、I J 22・23、I O 03・08・09 グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：SK 131を切る。埋土：3層堆積だが、I J 22グリッドでは単層である。形状・規模：平面形はI O 08・09グリッドからI O 03グリッドにかけては、等高線に対して直行する方向で直線的に伸び、I J 23グリッドで等高線と平行する方向に近い角度で西側に短く曲がる。I O 09グリッドでSD 05と連結する。断面形はU字形である。規模はI O 08・09グリッドからI O 03グリッドまでは長さ14m、幅70～150cm、深さ20cm、I J 23グリッドでは長さ2.8m、幅72～104cm、深さ20cmを測る。遺物：埋土上部で土師器と須恵器の小破片、器種不明の鉄製品が出土した。時期：不明だが、埋土の遺物から平安時代以降と推測する。

SD 05 (第11・39図)

位置：1区、I O 04・05・09、II K 01、II F 21 グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複

関係：S B 12～14、S K 125・126 を切る。埋土：3～4層堆積だが、I O 09 グリッドでは2層堆積である。形状・規模：I O 04・05 グリッドからII F 21 グリッドにかけては、等高線と平行に近い方向で直線的に伸び、調査区外へ至る。I O 09 グリッドで、等高線に対して直行する角度で南東側に短く曲がる。I O 09 グリッドでS D 01 と連結する。断面形は段掘り状を呈する。規模はI O 04・05 グリッドからII F 21 グリッドまでは長さ27 m、幅1.3 m、深さ65～80cm、I O 09 グリッドでは長さ3.8 m、幅80～90 cm、深さ30cmを測る。遺物：埋土から土師器、黒色土器の小破片が出土した。時期：不明だが、S D 01 に連結する点と、埋土の遺物から平安時代以降と推測する。

S D 06 (第10・33・40図)

位置：3区、I O 14・15・20 グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：なし。埋土：2層に堆積する。形状・規模：等高線に対して直行する方向で、直線的に伸びる。断面形はU字もしくはV字状を呈する。規模は長さ10.5 m、幅1 m、深さ30～40cmを測る。本溝跡から北西側の延長上にS D 05 が位置し、S D 05 と係る溝跡の可能性もある(第10図)。遺物：埋土1・2層より須恵器の小破片が出土した。時期：不明だが、埋土の遺物から平安時代以降と推測する。

S D 07 (第33・40図)

位置：3区、II P 06・11・16・21 グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：S K 135 に切られる。埋土：単層もしくは2層に堆積する。形状・規模：等高線に直行する方向で、やや蛇行しながら伸びる。断面形はU字もしくはV字状を呈する。規模は長さ25 m、幅40cm、深さ20～40cmで、溝跡中央付近は幅が広く最大で1.9 mを測る。本溝跡から北側延長上にS D 06 が位置し、S D 06 と関わる溝跡の可能性もあるが、溝跡が伸びる方向に若干の違いがある。遺物：埋土から黒色土器、土師器、灰釉陶器、須恵器の小破片が出土した。また、底面より8 cmほど高い位置で刀子1点出土した。時期：平安時代の遺物が出土したS K 135 に切られる点と、埋土の遺物から平安時代と推測する。

(3) 土坑 (第33図)

土坑8基の一覧表を以下に示す。検出面は、全て基本層序第IV層上面である。

第11表 平安時代以降の土坑一覧表

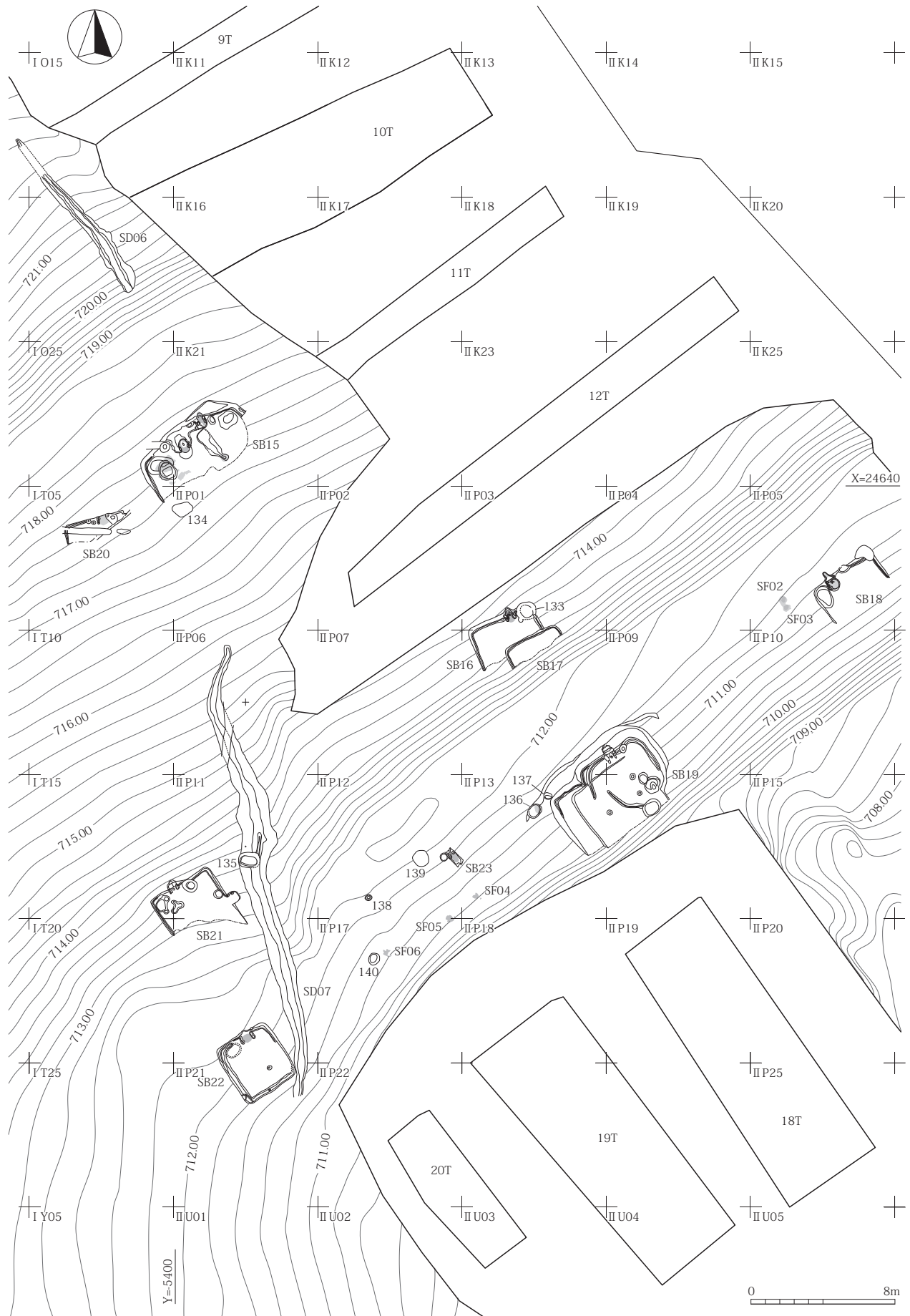
S K 番号	図版番号	P L 番号	グリッド	時期	形状		規模 (cm)			出土遺物	備考
					平面形	断面形	長軸	短軸	深さ		
133	33	—	II P 03	平安以降	円形	逆台形	113	102	42	黒色土器、土師器、須恵器	SB16 を切る
134	33	—	I T 05 II P 01	平安以降	不整形	タライ	115	80	32		
135	33	—	II P 11	平安以降	楕円形	逆台形	119	89	40	土師器	SD07 を切る
136	33	—	II P 13	平安以降	楕円形	U字	86	67	28	土師器	SB19 を囲む 段切を切る
137	33	—	II P 13	平安以降	楕円形	逆台形	48	36	8		SB19 を囲む 段切を切る
138	33	—	II P 12	平安以降	円形	U字	40	34	20	土師器	
139	33	—	II P 12	平安以降	円形	U字	92	85	54	土師器	
140	33	—	II P 17	平安以降	円形	逆台形	69	60	32	土師器	

(4) 被熱部 (第38図)

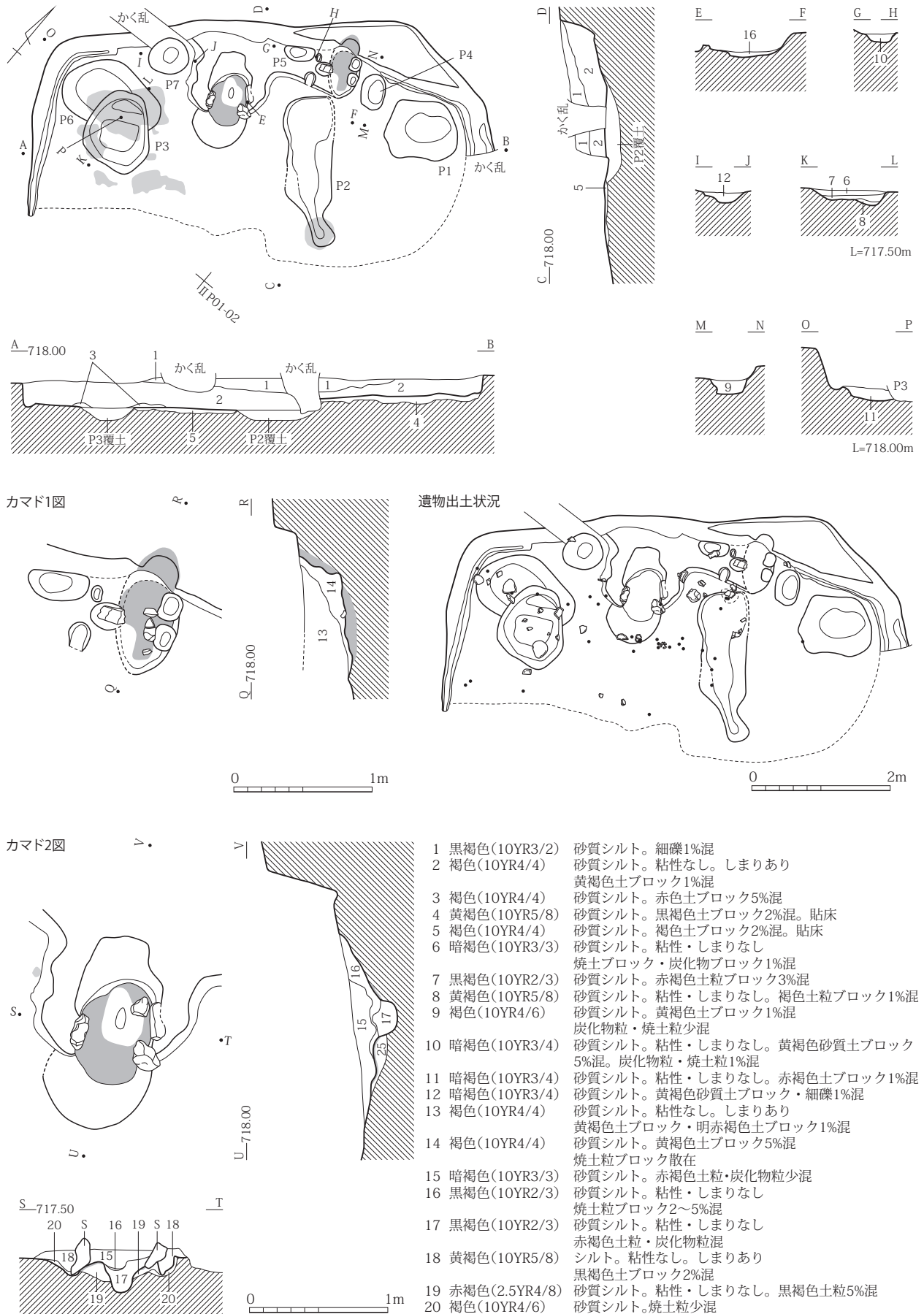
被熱部4基の一覧表を以下に示す。検出面は、全て基本層序第IV層上面である。

第12表 平安時代以降の被熱部一覧表

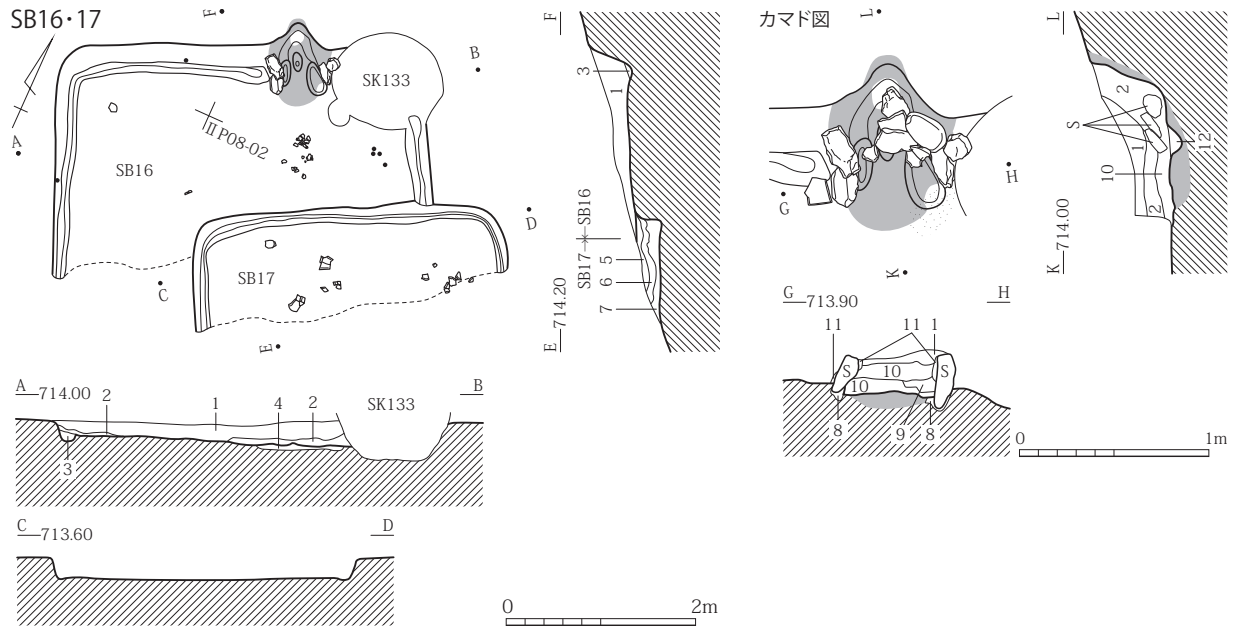
S F 番号	図版番号	P L 番号	グリッド	時期	平面形	規模 (cm)			出土遺物	備考
						長軸	短軸	被熱厚		
02	38	—	II P 05	平安以降	不整形	33	24	4	被熱した拳大の礫有	同一焼土下で被熱面2か所を検出
					楕円形	35	26	7		
04	38	—	II P 13	平安以降	不整形	35	33	5	黒色土器、土師器小破片	
05	38	—	II P 17	平安以降	不整形	50	40	5	黒色土器、土師器小破片	
06	38	—	II P 17	平安以降	不整形	40	30	4	土師器小破片	



第33図 3・4区 遺構分布図

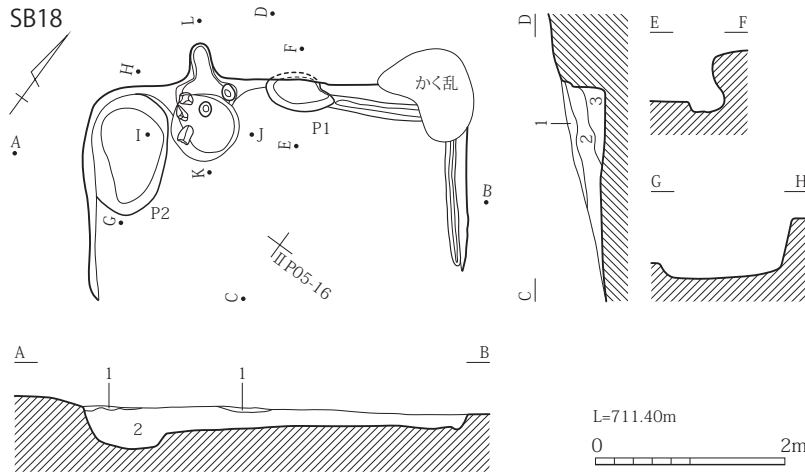


第34図 S B 15 遺構図

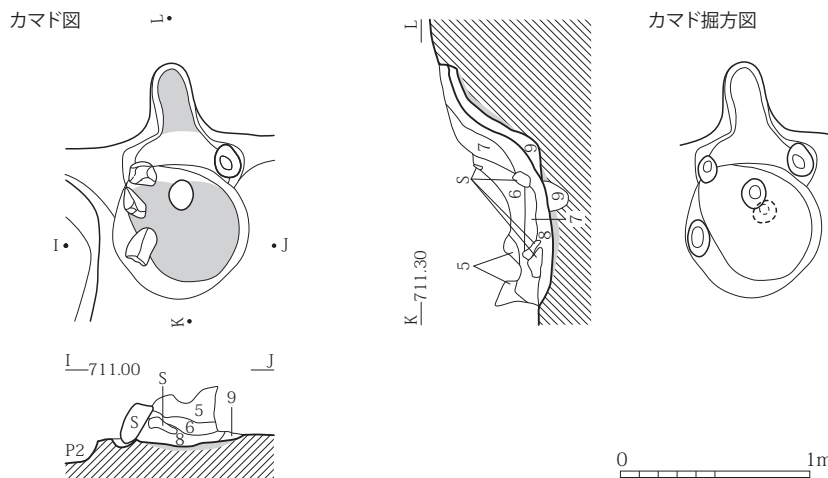


- 1 黒褐色(10YR2/3)シルト。粘性・しまりややあり。赤色土粒1%混
- 2 黒褐色(10YR2/2)シルト。粘性・しまりややあり。炭化物粒混
- 3 黒褐色(10YR2/2)シルト。粘性・しまりなし。周溝埋土
- 4 黒褐色(10YR3/2)シルト。粘性・しまりややあり
- 5 暗褐色(10YR3/3)シルト。粘性ややあり。しまりなし
- 6 暗褐色(10YR3/4)シルト。粘性ややあり。しまりなし
黄褐色土ブロック混

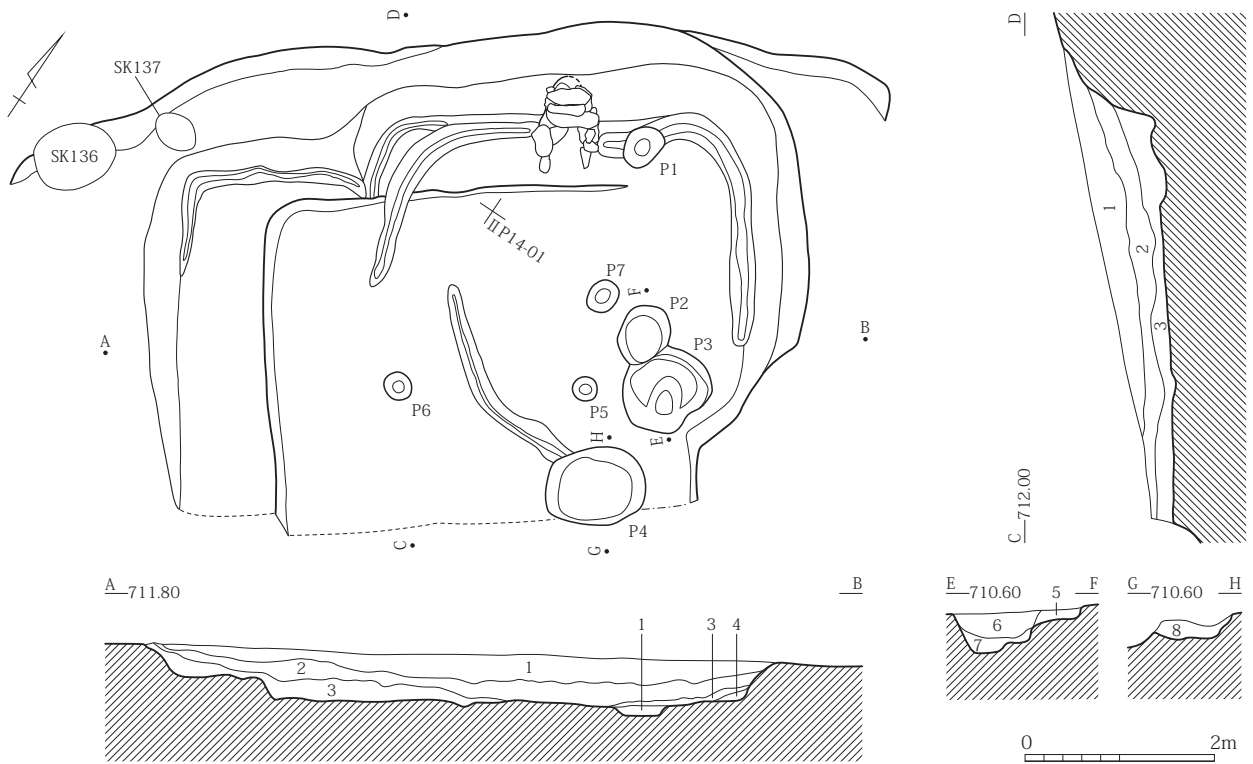
- 7 暗褐色(10YR3/3)シルト。粘性ややあり。しまりなし
- 8 暗褐色(10YR2/3)粘質シルト。粘性・しまりあり
- 9 黒褐色(10YR3/2)シルト。粘性・しまりなし
- 10 にぶい赤褐色(5YR4/3)シルト。粘性・しまりなし
- 11 暗褐色(10YR3/3)粘質シルト。しまりあり
- 12 黒褐色(7.5YR3/2)シルト。粘性普通。しまりなし。焼土粒少混
支脚石の拔取り痕



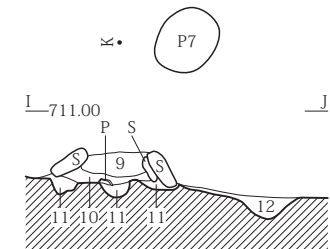
- 1 黒褐色(10YR3/2)シルト。粘性ややあり。しまりなし
- 2 暗褐色(10YR3/3)シルト。粘性ややあり。しまりなし
10mm褐色土粒少混
- 3 黒褐色(10YR3/2)シルト。粘性ややあり。しまりなし
- 4 黒褐色(10YR3/2)シルト。粘性ややあり。しまりなし
にぶい黄褐色土粒混
- 5 黒褐色(10YR3/2)シルト。粘性1より強。しまり1より弱
黄褐色土粒20%混。焼土粒・炭化物粒若干混
- 6 黒褐色(10YR2/2)シルト。粘性1より強。しまり1より弱
焼土粒・炭化物粒少混
- 7 褐色(7.5YR4/3)シルト。粘性なし。しまりなし。炭化物粒少混
- 8 黒褐色(10YR2/3)シルト。粘性ややあり。しまりなし
赤色・褐色・にぶい黄褐色土粒多混
- 9 暗赤褐色(5YR3/3)シルト。粘性ややあり。しまりなし。焼土少混



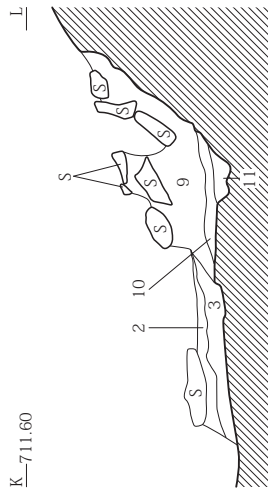
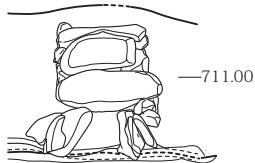
第35図 S B 16・17・18 遺構図



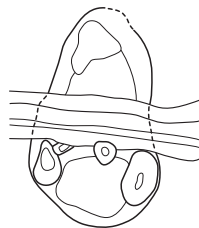
カマド図



カマド立面図

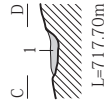
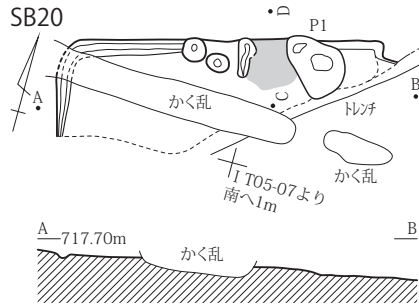


カマド掘方図

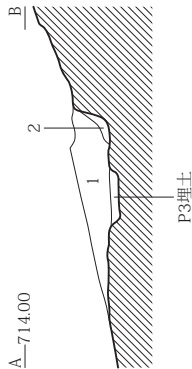
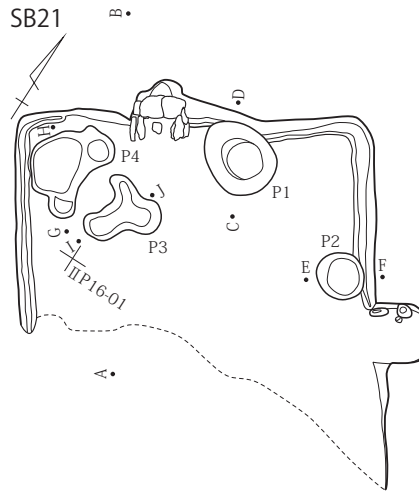


- 1 黒色(10YR2/1.5)
シルト。粘性あり。しまり普通。黄褐色土細ブロック少混
- 2 黒褐色(10YR2/2.5~3/2.5)
シルト。粘性ややあり。しまり普通
1~2mm黄褐色土ブロック10~15%混
- 3 黒褐色(10YR2/2~2/2.5)
シルト。粘性ややあり。しまり弱。10~20mm黄褐色土ブロック混
- 4 黒褐色(10YR3/2)
シルト。粘性ややあり。しまり弱。黄褐色土微細ブロック30%混
- 5 暗褐色(10YR3/4)
シルト。粘性なし。しまりあり。20mm礫7%混
- 6 暗褐色(10YR3/3)
シルト。粘性ややあり。しまりあり
赤色・白色・にぶい黄褐色土粒少混
- 7 暗褐色(10YR3/3)
シルト。粘性ややあり。しまりあり
赤色・白色・にぶい黄褐色土粒混
- 8 黒褐色(10YR2/3)
シルト。粘性やや弱。しまりややあり
30mm以下黄褐色土ブロック10%混
- 9 暗褐色(10YR3/3)
シルト。粘性ややあり。しまりあり
赤色・白色・にぶい黄褐色土粒少混
20~30mm礫1%混
- 10 暗褐色(10YR3/3)
シルト。粘性ややあり。しまりあり
赤色・白色・にぶい黄褐色土粒混。4層に類似
- 11 極暗褐色(7.5YR2/3)
カマド袖石・支脚石掘方埋土。
粘性ややあり。しまりあり。焼土粒少混。周溝埋土
- 12 暗褐色(10YR3/3)
シルト。粘性ややあり。しまりあり
赤色・白色・にぶい黄褐色土粒少混。20mm礫2%混

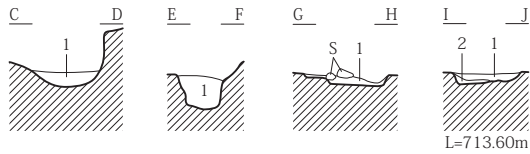
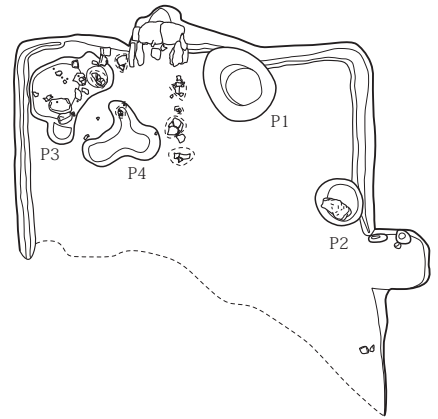
第36図 S B 19 遺構図



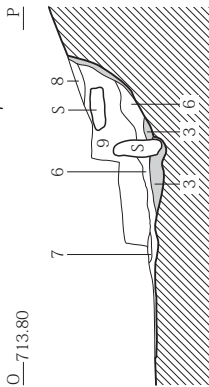
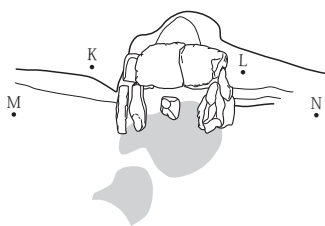
1 赤褐色 (2.5YR4/8)
焼土層



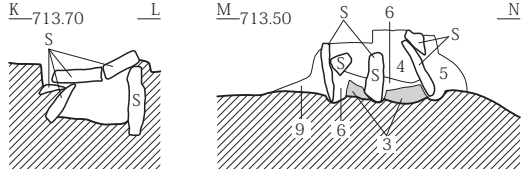
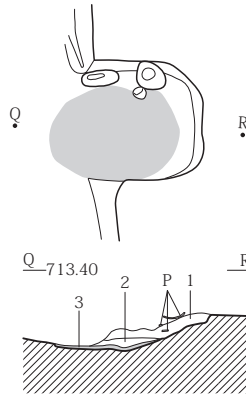
遺物出土状況



カマド1図



カマド2図



- 1 暗褐色(10YR3/4)
- 2 黄褐色(10YR5/8)
- 3 被熱面
- 4 黒褐色(10YR2/3)
- 5 黄褐色(10YR5/8)
- 6 黒色(10YR2/1~3/1)
- 7 黒色(10YR2/1~3/1)
- 8 褐色(10YR4/4)
- 9 赤褐色(2.5YR4/6)

シルト。黄褐色土粒1%未満混
カマド袖盛土。細礫混

シルト。粘性あり。しまりややあり。にぶい黄褐色土粒
細礫混

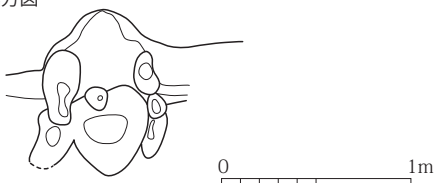
シルト。粘性強。しまり弱。5mm以下炭化物粒主体
焼土粒20%混

シルト。黄褐色土粒・細ブロック多混

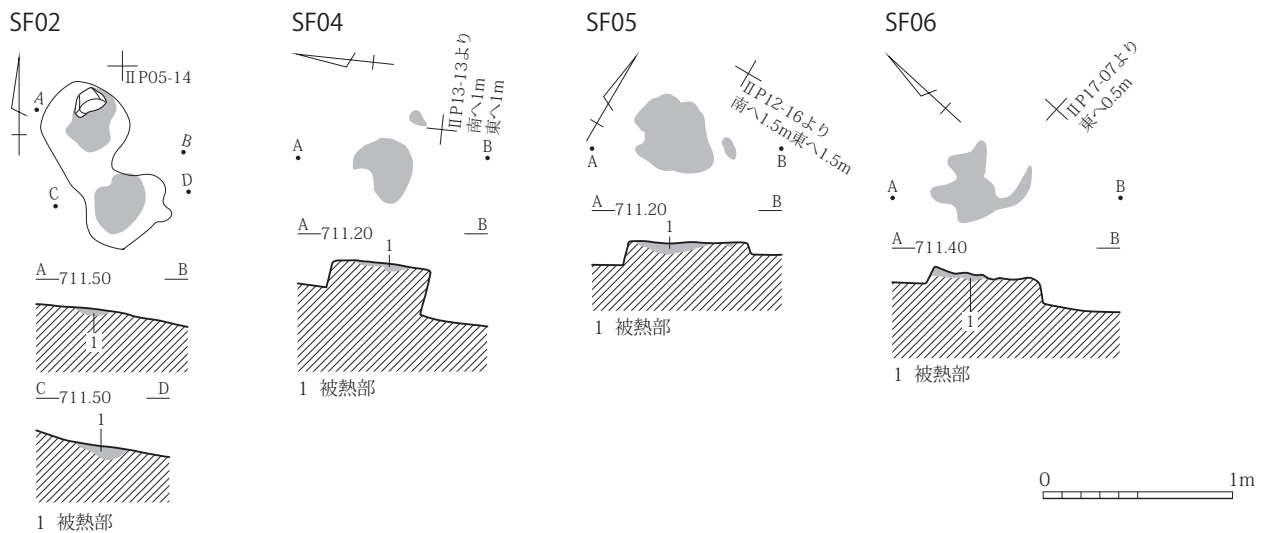
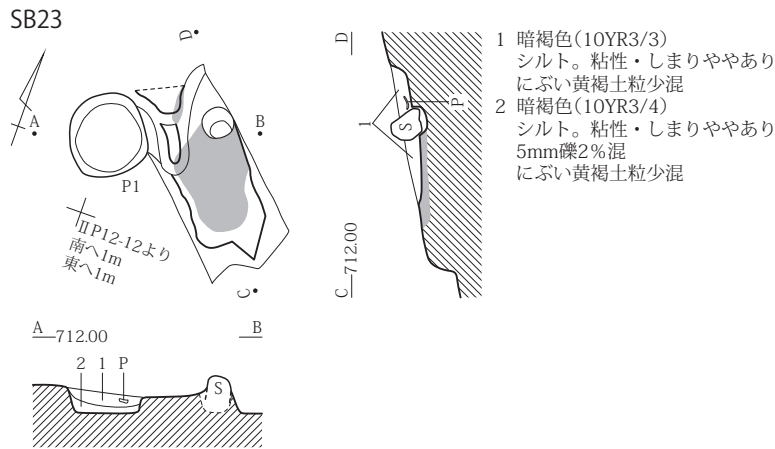
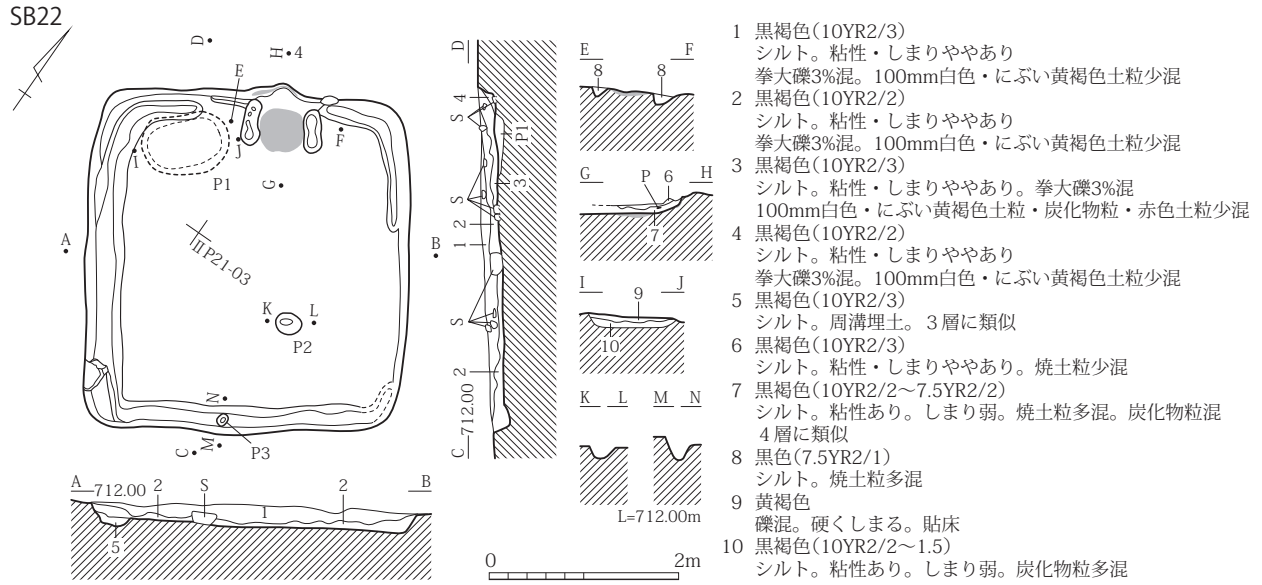
砂質シルト。赤褐色焼土粒10%混

砂質シルト。粘性なし。しまり弱。焼土粒混

カマド1掘方図

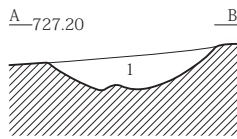


第37図 SB20・21 遺構図

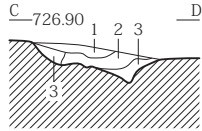


第38図 S B 22・23、S F 02・04・05・06 遺構図

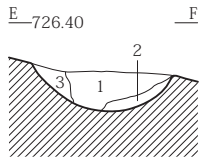
SD01



1 灰黄褐色(10YR4/2)
砂混じりシルト。粘性・しまり普通
地山明黄褐色シルト細粒子・ブロック混。細・小礫混

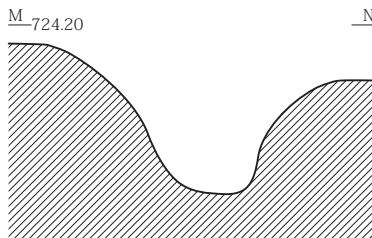
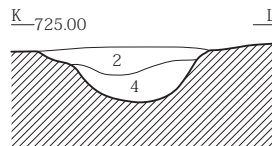
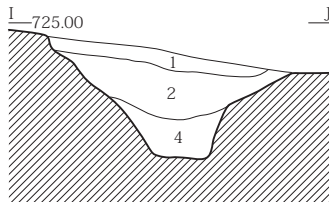
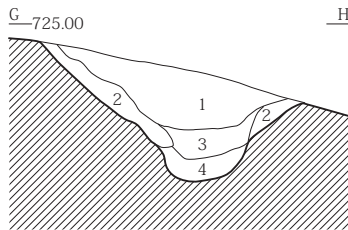


1 灰黄褐色(10YR4/2)
砂混じりシルト。明黄褐色シルト細粒子混
2 灰黄褐色(10YR4/2)
砂混じりシルト。地山明黄褐色粒子多混
3 灰黄褐色(10YR4/2)
砂混じりシルト

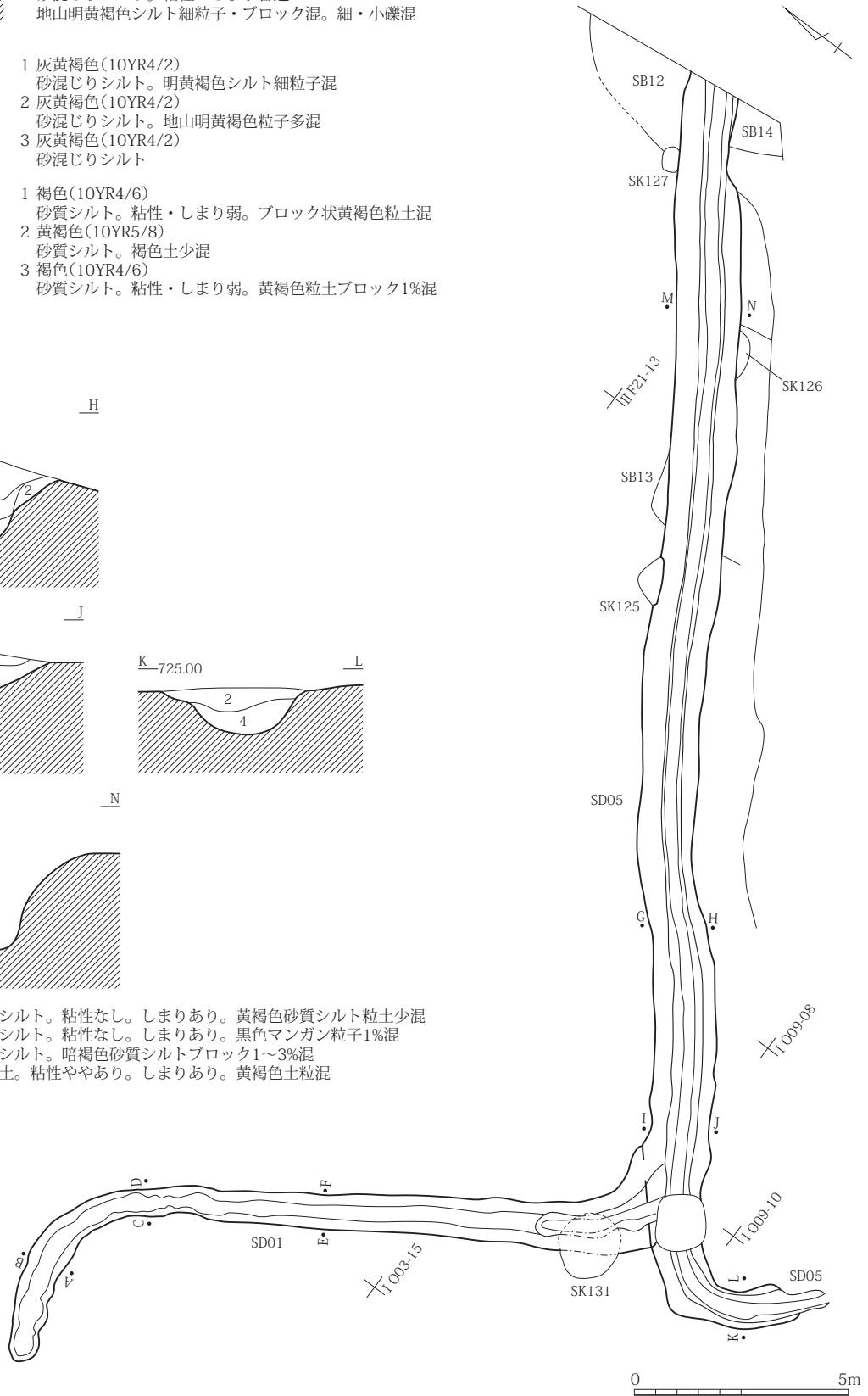


1 褐色(10YR4/6)
砂質シルト。粘性・しまり弱。ブロック状黄褐色粒土混
2 黄褐色(10YR5/8)
砂質シルト。褐色土少混
3 褐色(10YR4/6)
砂質シルト。粘性・しまり弱。黄褐色粒土ブロック1%混

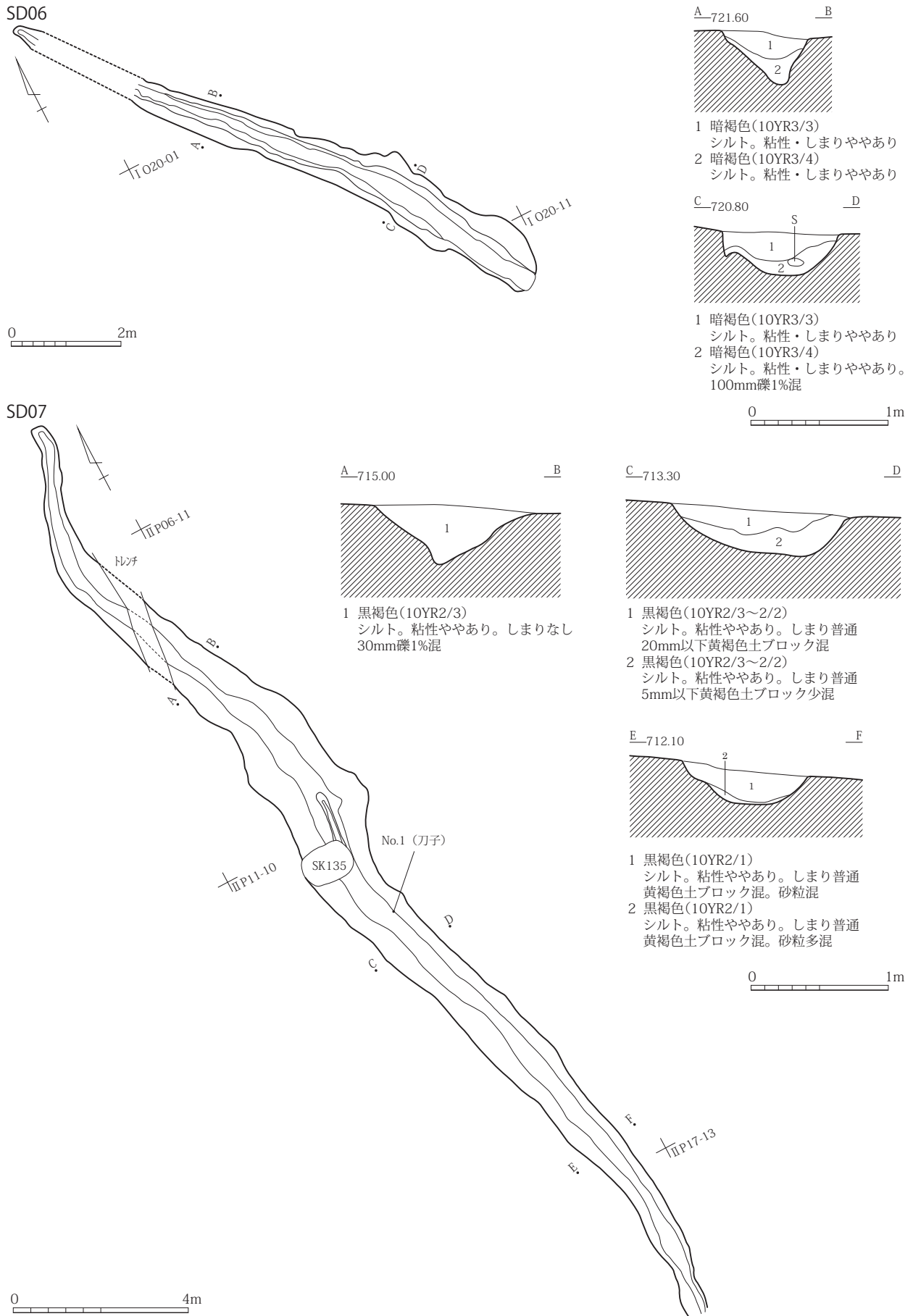
SD05



1 褐色(10YR4/4) 砂質シルト。粘性なし。しまりあり。黄褐色砂質シルト粒土少混
2 暗褐色(10YR3/4) 砂質シルト。粘性なし。しまりあり。黒色マンガン粒子1%混
3 黄褐色(10YR5/8) 砂質シルト。暗褐色砂質シルトブロック1~3%混
4 褐色(10YR4/4) 砂質土。粘性ややあり。しまりあり。黄褐色土粒混



第39図 SD01・05 遺構図



第40図 SD06・07 遺構図

3 遺物

(1) 土器 (第41・42図、第13表)

S B 15 (第41図1～7)

供膳形態は1の黒色土器坏、2の土師器坏、3の灰釉陶器碗などで占められる。4は土師器鉢で、口縁部がわずかに屈曲し、最大径が口縁部にある横ナデ調整のものである。5の土師器甕は、回転ナデ調整である。6の灰釉陶器長頸瓶は口縁が大きく開き、端部が「T」字状になる。7の須恵器甕は中型で外面は平行叩き、内面はナデにより消される。時期は、10世紀代と推測する。

S B 16 (第41図8、P L 9)

8は土師器甕で、口縁部～胴部を回転ナデ調整した後、胴下部をヘラで削る。時期は、9～10世紀と推測する。

S B 17 (第41図9～11、P L 9)

9の高足高台の土師器碗は、内外面の磨滅が著しい。10の土師器甕は、口縁部が浅く折れ曲がり、端部に回転ヘラ削りを施し、胴部は回転ナデの後、内面にヘラナデを施す。11の土師器羽釜は、口縁部が内湾し、鋸部はやや波打つ。時期は、10世紀後半と推測する。

S B 18 (第41図12～16、P L 9)

12の黒色土器坏、13の高台付碗、14の黒色土器B類碗は底面が回転糸切り、体部が回転ナデで、内面は放射状のミガキを施し、13は高台端部に斜めの回転ヘラ削りを施す。15の土師器甕は底部が回転糸切り、体部が回転ナデ調整で、下端部にヘラ削りを施す。16の須恵器甕も体部は回転ナデ調整であるが、底部にはヘラ削りを施す。時期は、9世紀と推測する。

S B 19 (第41図17～24)

供膳形態は18の黒色土器坏、17の土師器坏、19・20の土師器高台付碗、煮炊形態は21の土師器甕と22・23の羽釜が共存する。17～20は体部が回転ナデで、17は内面にミガキを施す。21は横ナデ調整を施し、内面はヘラ状工具による凹線が見られる。22・23は体部に縦方向のヘラ削りを施すが、口縁部は22が横ナデ、23は指頭押さえである。24の須恵器甕は小片だが、頸部の推定径が40cmを超える大型の甕である。時期は、10世紀後半と推測する。

S B 21 (第41図25～31、P L 9)

供膳形態は25～28の黒色土器坏と高台付碗が主体で、煮炊形態は30・31の土師器甕である。黒色土器坏の25～27は底面回転糸切り、体部は回転ナデ後内面に放射状のミガキを施すもので底径が口径の1/2前後と大きめである。29の灰釉陶器碗は、灰釉がハケ塗りで高台が三日月状を呈す。30・31の土師器甕には、回転ナデ調整の長胴の30と球胴状の31がある。時期は、9世紀後半と推測する。

S B 22 (第42図32～37、P L 10)

32の坏は酸化焰焼成で、内面にミガキが見られるが、焼きは硬質で還元気味の部分もあり、ロクロ目が強いなど須恵器の特徴をもつことから、須恵器に分類した。33・34の黒色土器坏は底面が回転糸切り、体部が回転ナデで、内面に放射状のミガキを施す。36の土師器甕は一穴で、体部外面はヘラ削り、内面はヘラナデを施す。37の土師器甕は回転ナデ調整で、体部下端はヘラ削りを施す。時期は、9世紀後半と推測する。

S K 133 (第42図38・39、P L 10)

38の土師器高台付碗、39の黒色土器高台付碗は底面回転糸切りで、体部は回転ナデ後内面にミガキを施す。時期は、9世紀後半と推測する。

遺構外（第42図40～46、P L 10）

40の黒色土器碗は、底面を手持ちヘラ削りする。41～43の黒色土器碗の身部は底径が大きく、底面を回転糸切り、体部を回転ナデ後内面にミガキを施す。44の灰釉陶器皿、45の灰釉陶器碗は底面に回転ヘラ削りを施すが、44は一部糸切り痕が消え残る。46の土師器甕は胴部外面にヘラ削り、内面にナデを施す。

第13表 古代土器観察表 ※法量の項における〈 〉は復元値、()は残存値を示す

図版番号	出土遺構	出土位置 層位 取上No	器種	口径 cm	底径 cm	器高 cm	重量 g	底面	外面	内面	底部内面
41-1	SB15	No.56	黒色土器碗	(14.7)	—	現高 3.5	17	—	回転ナデ	回転ナデ後ミガキ、黒色処理	—
2			土師器碗	(13.9)	—	現高 3.6	30	—	回転ナデ	回転ナデ、端部の一部ヘラ削り	—
3		北カクラン	灰釉陶器碗	—	(7.2)	現高 2.0	20	回転ヘラ削り	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ
4		No.25	土師器鉢	(24.5)	—	現高 9.4	163	—	横ナデ、端部の一部ヘラ削り	横ナデ、頸部の一部ヘラ削り	—
5		No.23・39・42・46	土師器甕	—	(15.6)	9.8	63		回転ナデ	回転ナデ	
6		西	灰釉陶器長頸瓶	15.9	—	現高 5.7	38	—	回転ナデ	回転ナデ	—
7		No.23・39・42・46	須恵器甕	—	(15.6)	9.8	525	ナデ	横ナデ後平行叩き、下端ヘラ削り	横ナデ、一部ヘラ削り	ナデ
8	SB16	西・東	土師器甕	(12.5)	6.9	13.5	380	ナデ	回転ナデ後下半ヘラ削り	回転ナデ	ナデ
9	SB17	西2層	土師器高台付碗	—	(6.6)	現高 3.6	65	磨滅	回転ナデ後磨滅	磨滅	磨滅
10		No.2・3	土師器甕	—	(22.8)	現高 12.4	315	—	回転ナデ、端部回転ヘラ削り	回転ナデ	—
11		No.5	土師器羽釜	(24.0)	—	現高 7.2	77	—	横ナデ、端部の一部ヘラ削り	横ナデ	—
12	SB18	No.28	黒色土器碗	(12.6)	(4.2)	3.9	65	右回転糸切り後磨滅	回転ナデ	回転ナデ後、放射状ミガキ、黒色処理	回転ナデ後放射状ミガキ、黒色処理
13		No.1	土師器高台付碗	—	高台径 7.0	現高 3.2	100	右回転糸切り後、高台貼り付け、高台部周辺回転ナデ	回転ナデ、高台端部回転ヘラ削り	回転ナデ後放射状ミガキ、黒色処理	回転ナデ後縦横のミガキ、黒色処理
14		No.13	黒色土器B類碗	—	高台径 7.5	現高 2.4	35	回転糸切り後高台貼り付け、ナデ、黒色処理	—	—	回転ナデ後放射状ミガキ、黒色処理
15		No.2	土師器甕	—	6.2	現高 3.4	120	右回転糸切り	回転ナデ後下端手持ちヘラ削り	回転ナデ	回転ナデ後一部ヘラナデ
16		No.26	須恵器甕	—	(13.8)	現高 4.3	70	ヘラ削り	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ
17	SB19	東	土師器碗	(12.6)	—	現高 3.8	30	—	回転ナデ	回転ナデ後放射状ミガキ	—
18		中北3層	黒色土器碗	(12.6)	(4.4)	4.3	25	粗めの回転糸切り後磨滅	回転ナデ後磨滅	回転ナデ、ミガキ、黒色処理後磨滅	回転ナデ、ミガキ、黒色処理後磨滅
19		カマド1層	土師器高台付碗	(13.3)	7.0	5.5	83	回転糸切り、回転ナデ後磨滅	回転ナデ後磨滅	回転ナデ後焼けはじけ	回転ナデ後焼けはじけ
20			土師器高台付碗	—	(6.8)	現高 4.2	45	付着物により不明	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ
21		中北3層	土師器甕	(22.8)	—	現高 8.8	190	—	横ナデ	横ナデ	—
22		西	土師器羽釜	(24.3)	—	現高 10.5	125	—	横ナデ後胴部縦ヘラ削り	回転ナデ	—

図版番号	出土遺構	出土位置・層位・取上No	器種	口径	底径	器高	重量g	底面	外面	内面	底部内面
41-23	SB19	pit 3 1層	土師器羽釜	(25.0)	—	11.1	228	—	口縁部指頭押さえ、鏝部横ナデ、胴部縦ヘラケズリ	横ナデ	—
24		東南2層	須恵器甕	—	—	現高9.8	300	—	頸部回転ナデ	横ナデ	—
25	SB21	No. 24、pit 1、pit 3	黒色土器坏	(12.2)	6.4	3.2	70	右回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ後黒色処理	回転ナデ、ミガキ後黒色処理
26		カマド1層	黒色土器坏	(13.4)	6.0	4.5	110	磨滅	回転ナデ	回転ナデ、放射状ミガキ後黒色処理	回転ナデ、ミガキ後黒色処理
27		西1層	黒色土器坏	(13.1)	(7.0)	3.5	53	回転糸切り	回転ナデ後磨滅	回転ナデ、放射状ミガキ、黒色処理後磨滅	回転ナデ、放射状ミガキ、黒色処理後磨滅
28		pit 2	黒色土器高台付塊	(14.8)	高台径(7.0)	5.2	46	高台貼付後ナデ	回転ナデ	回転ナデ、放射状ミガキ後黒色処理	回転ナデ、ミガキ後黒色処理
29		No. 4	灰釉陶器碗	—	高台径6.6	現高2.2	90	回転ヘラ削り	回転ナデ後下端回転ヘラ削り	回転ナデ後灰釉ハケ塗り	回転ナデ後灰釉ハケ塗り
30		No. 15	土師器甕	(21.6)	—	現高10.5	88	—	回転ナデ	回転ナデ	—
31		No. 3、東1層	土師器甕	(20.0)	—	11.5	166	—	磨滅	磨滅	—
42-32		SB22	No. 5	須恵器坏	12.0	4.2	4.0	115	右回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ後放射状ミガキ
33	No. 6		黒色土器坏	12.2	4.3	3.7	85	右回転糸切り後磨滅	回転ナデ後磨滅	回転ナデ、放射状ミガキ後黒色処理	回転ナデ、放射状ミガキ後黒色処理
34	No. 4		黒色土器坏	12.1	4.1	3.7	115	右回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ、放射状ミガキ、黒色処理後磨滅	回転ナデ、放射状ミガキ、黒色処理後磨滅
35	北東・床		土師器坏	(11.8)	(4.6)	3.5	53	回転糸切り後一部手持ちヘラケズリ	回転ナデ後一部回転ヘラ削り	磨滅	磨滅
36	南西部1層		土師器甕	—	5.1	4.6	115	ナデ	縦ヘラ削り、下端部ナデ後一部横ヘラ削り	ヘラナデ	ヘラナデ
37	No. 7		土師器甕	(9.6)	5.1	10.9	178	ナデ後周辺部手持ちヘラ削り	回転ナデ後下端斜めヘラ削り	回転ナデ	ナデ
38	SK133		No. 2・3	土師器高台付塊	—	高台径7.0	現高2.7	85	右回転糸切り	回転ナデ後磨滅	回転ナデ、ミガキ後磨滅
39		No. 7	黒色土器高台付塊	—	高台径7.1	現高2.8	82	磨滅	回転ナデ後磨滅	回転ナデ、ミガキ、黒色処理後磨滅	回転ナデ、ミガキ、黒色処理後磨滅
40	SF04		黒色土器塊	—	(7.0)	現高2.7	40	手持ちヘラ削り	回転ナデ	回転ナデ、ミガキ、黒色処理後磨滅	回転ナデ、ミガキ、黒色処理後磨滅
41	遺構外	II P 17 No. 24・25	黒色土器高台付塊	14.5	高台径8.0	5.1	170	右回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ、ミガキ、黒色処理	回転ナデ、ミガキ、黒色処理
42		II P 17 No. 1、検出面	黒色土器高台付塊	(15.7)	高台径7.5	5.4	147	右回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ、ミガキ、黒色処理	回転ナデ、ミガキ、黒色処理
43		II P 17 No. 2	黒色土器高台付塊	15.5	高台径7.1	5.3	214	右回転糸切り	回転ナデ	回転ナデ、ミガキ、黒色処理	回転ナデ、ミガキ、黒色処理
44		II P 13	灰釉陶器皿	(14.2)	高台径(7.0)	現高2.6	30	回転ヘラ削り	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ
45		検出面	灰釉陶器塊	—	高台径(7.0)	現高1.8	40	回転糸切り後回転ヘラ削り	回転ナデ、下端回転ヘラ削り	回転ナデ	回転ナデ
46		II P 17 No. 5	土師器甕	(13.6)	—	現高14.5	115	—	口縁部横ナデ、肩部横・胴部縦ヘラ削り	横ナデ	—

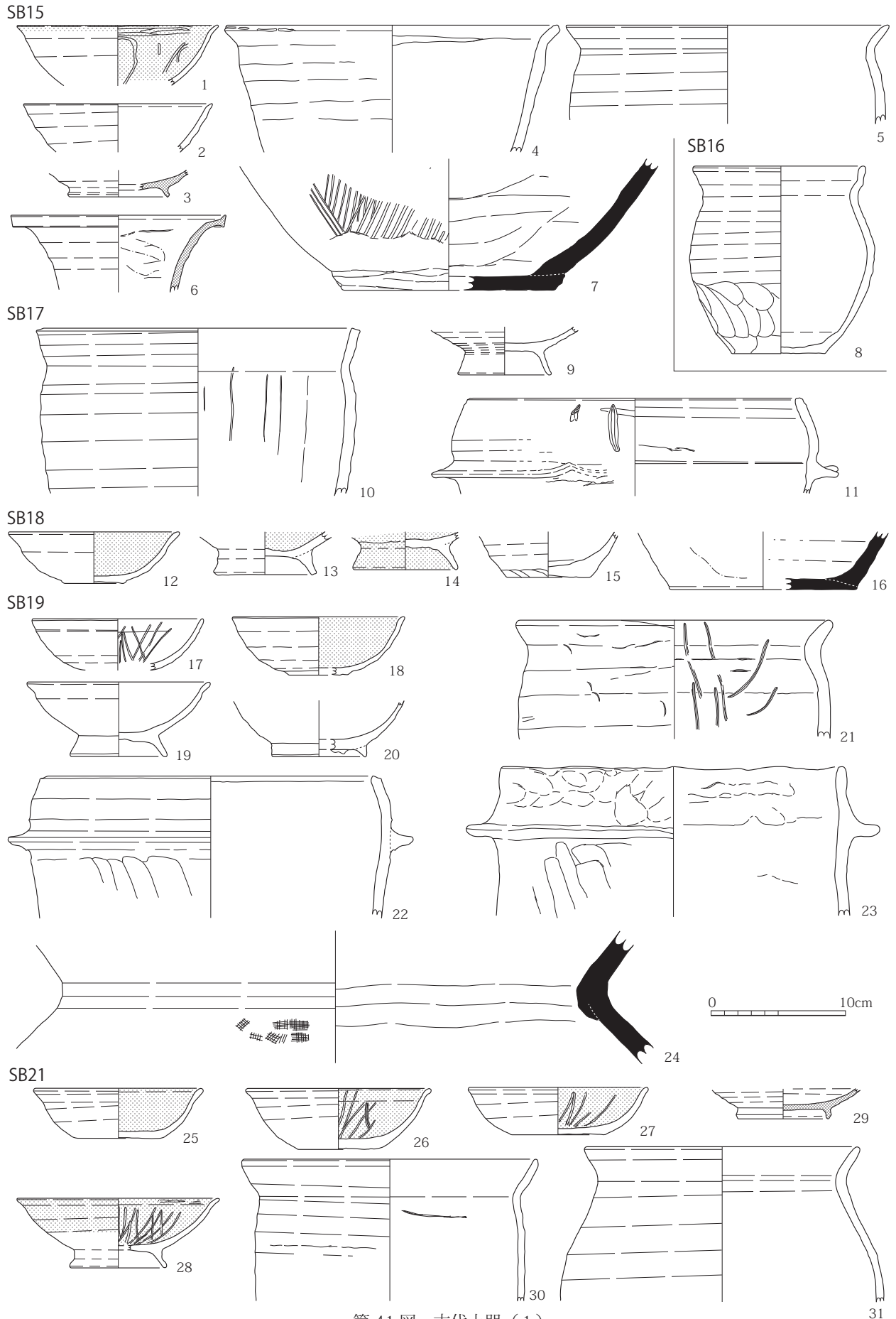
(2) 石製品 (第42図)

1は巡方の一部で、留め具痕が残存する。3区ⅡP 16グリッドから出土した。2は砥石で、4面に使用痕が残る。1区ⅠJ 22グリッドからの出土で、石材は砂岩である。このほか、図示していないが、五輪塔の水輪が1点出土した。

(3) 金属製品・銭貨 (第42図、P L 10)

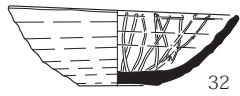
1～4は刀子で、刀身切先および茎尻、あるいは刀身を欠損する。1は残存部で長さ16.6cm、幅1.5cm、背幅4mmを測る。錆びのため直接観察できないが、関部は撫関と判断する。2は残存部で長さ8.8cm、幅1.6cm、背幅3.2mmを測る。関部は撫関である。3は残存部で長さ5.4cm、幅1.1cm、背幅2.8mmを測る。関部は欠損のため不明。4は残存部で長さ4.7cm、幅1.0cm、背幅2.5mmを測る。茎部であろうか。5は形状が剣菱形に近いが、用途不明の板状製品である。表裏面は緩い曲面を成す。長さ9.2cm、幅7.5cm、厚さ8mmを測る。

6～10は銭貨を一括した。6～8は北宋銭で、6は初鑄1078年の元豊通宝、7は初鑄1111年の政和通宝、8は初鑄1101年の聖宋元寶である。9・10は寛永通宝で、新寛永とされるものである。

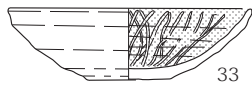


第41図 古代土器(1)

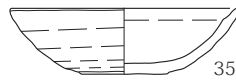
SB22



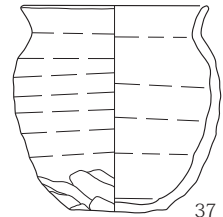
32



33



35



37

SK133



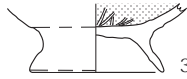
38



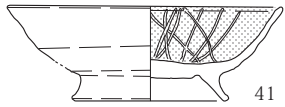
34



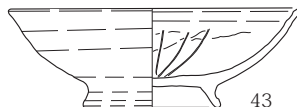
36



39

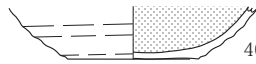


41

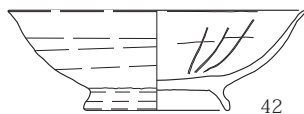


43

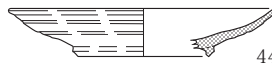
遺構外



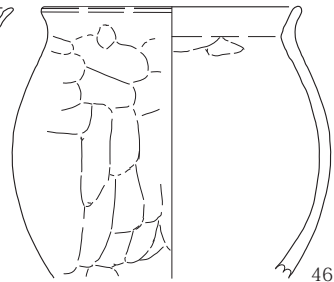
40



42



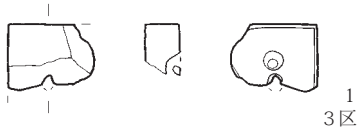
44



46

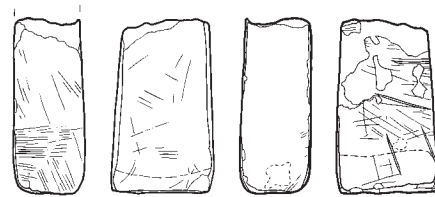


石製品



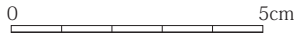
1

3区

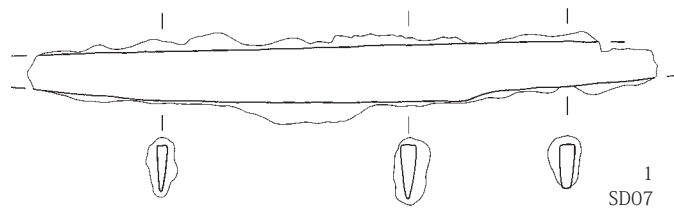


2

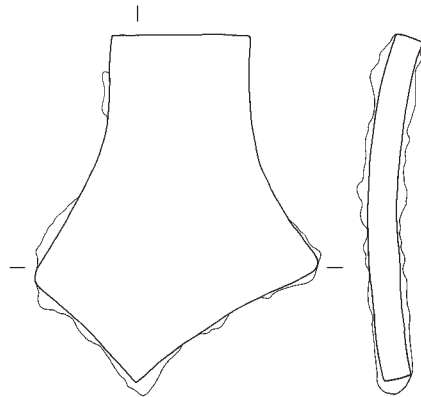
1区



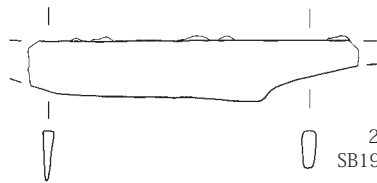
金属製品・銭貨



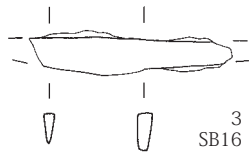
1
SD07



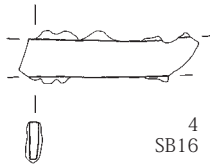
5
SB19



2
SB19



3
SB16



4
SB16



6
1区



7
3区



8
1区



9
1区



10
1区



第42図 古代土器(2)、石製品、金属製品・銭貨

第4節 自然科学分析

小山の神B遺跡では自然科学分析として、炭化種実・種実圧痕同定分析、放射性炭素年代測定、火山灰分析を委託で実施しており、以下にその概要を報告する。なお、各分析の詳細についてはDVDに収録した。

1 炭化種実・種実圧痕同定分析

(1) 分析の内容

整理作業の過程で、縄文時代前期後葉に属する諸磯c式の深鉢形土器1個体(PL4)に炭化種実と種実圧痕を確認したことから、株式会社パレオ・ラボに委託し、X線透過撮影および炭化種実と種実圧痕同定を実施した。

(2) 分析試料と目的

分析試料の諸磯c式土器は、竪穴建物跡SB06の床面付近において、潰れた状態で出土したものである(52頁、PL4)。胴上部から底部にかけて、全周の約3分の1が残存し、口縁部は完全に欠損する。残存部の器高は推定で約35cmを測る。文様は、底面を除く器面全体に密接する横位平行沈線を描き、胴部には細い波状隆帯をほぼ等間隔で貼付する。

炭化種実と種実圧痕は、肉眼観察により胴部から底部にかけての内外面と断面で確認した。さらに、肉眼では観察しきれない炭化種実や潜在圧痕が存在すると予測したので、圧痕の位置と数を確認するためX線透過撮影(リガク製ラジオフレックス200EGM2)を行った。

種実同定は炭化種実4点、表出圧痕6点、合計10点について実施した。炭化種実は土器から脱落したものを試料としたので、付着していた元の位置は不明である。表出圧痕の同定は、シリコーン樹脂で作成したレプリカを走査型電子顕微鏡(KEYENCE社製超深度マルチアングルレンズVHX-D500/D510)で観察する圧痕レプリカ法で行った。全ての表出圧痕を同定するのは不可能なため、圧痕の大きさや形態などを考慮し、胴部から6点を選出した(PL4No.1~6)。

なお、分析した諸磯c式土器は断面の種実圧痕を保護し、将来の再調査に備える目的で、接合・復元作業は行わずテンバコに破片の状態で収納している。

(3) 分析結果

X線透過撮影では種実の表出圧痕(炭化種実を含む)27点、潜在圧痕54点、合計81点を確認した(PL4)。このほか、81点とは別に種実の可能性はあるが不明確とされた圧痕が17点ある。圧痕は胴部から底部までの全体に確認でき、胴上部に比較的多い傾向がある。一方、種実同定結果は種実圧痕5点と炭化種実2点が長さ4.1~5.8mm、幅2.5~4.0mmのササゲ属アズキ亜属種子、種実圧痕1点が径2mm未満のシソ属果実、炭化種実2点がマメ科炭化種子の可能性はあるが不明であった(第14表)。また、同定を実施していないほかの種実圧痕も、大きさや形態からササゲ属アズキ亜属種子の可能性が高いと推測された。

今回の分析では、諸磯c式土器1個体からササゲ属アズキ亜属種子およびその可能性が高い種実圧痕を合計80点以上と、シソ属果実1点を確認した。ササゲ属アズキ亜属種子とその可能性が高い種実圧痕は、土器の断面で観察できるものがあり、さらに多くの潜在圧痕が存在する点を考慮すれば、土器製作時の粘土に含まれていたものと推測できる。一方、シソ属果実は表出圧痕の1点にとどまり、特殊な位置で検出したものではないことから、偶然付着した可能性もある。粘土に多量の種実が含まれるに至った経緯は不

第14表 炭化種実・種実圧痕同定分析結果

No.	種類	同定結果		大きさ (mm)			簡易楕円体 堆積 (mm)
		分類群	部位	長さ	幅	厚さ	
1	圧痕レプリカ	ササゲ属アズキ亜属	種子	5.5	3.8	3.1	34.2
2	圧痕レプリカ	ササゲ属アズキ亜属	種子	4.9	3.4	(2.4)	(20.6)
3	圧痕レプリカ	ササゲ属アズキ亜属	種子	5.0	3.5	3.0	27.2
4	圧痕レプリカ	ササゲ属アズキ亜属	種子	5.8	3.1	3.5	32.5
5	圧痕レプリカ	ササゲ属アズキ亜属	種子	3.9	4.0	(2.5)	(20.8)
6	圧痕レプリカ	シソ属	果実	1.8	2.0	1.6	—
7	炭化種実	ササゲ属アズキ亜属	炭化種実	4.2	2.5	2.6	14.6
8	炭化種実	ササゲ属アズキ亜属	炭化種実	4.1	2.5	2.5	13.0
9	炭化種実	不明A	炭化種実	3.8	1.8	2.1	—
10	炭化種実	不明B	炭化種実	4.3	2.9	(1.1)	—

第15表 多量の種実を含む土器の県内事例

No.	時期	市町村	遺跡名	出土位置	器種	残存率	種実	検出点数
1	前期後葉	佐久市	小山の神B	S B 06	深鉢形	胴上部から底部 の全周の1/3	シソ属果実 ササゲ属アズキ亜属	1点 80点 (推計)
2	中期初頭	茅野市	頭殿沢	遺構外	深鉢形	小破片	シソ属果実 (エゴマ) マメ科種子	31点 1点
3	中期後葉	岡谷市	目切	遺構外	深鉢形	1/8 個体	ササゲ属アズキ亜属	39点 (推計)
4	中期後葉	岡谷市	梨久保	55号住居跡	浅鉢形	1/2 個体	シソ属果実 (エゴマ)	1514点 (推計)
5	中期後葉	茅野市	茅野和田	34号住居跡	深鉢形	不明	ミズキ核	100点 (推計)
6	中期後葉	豊丘村	伴野原	33号住居跡	深鉢形 (埋甕)	口端部と胴下部 の一部が欠損	ササゲ属アズキ亜属 ダイズ等	151点 3点 160点 (合計)
7	中期後葉	朝日村	山鳥場	S B 7	深鉢形	底部欠損	シソ属果実 (エゴマ)	891点

(埋文センター 2019) を一部改変

明だが、当該土器の製作場所近隣に、ササゲ属アズキ亜属やシソ属果実などの有用植物が存在した可能性は極めて高い。

能城修一・佐々木由香両氏は、中部地方では縄文時代前期以降ダイズ属とアズキ型、エゴマがどの遺跡からも出土し、「エゴマ—マメ類利用文化圏」が成立していた可能性を指摘する(能城・佐々木 2014)。さらに、中山誠二氏は山梨県内の豊富な分析データから、シソ属とマメ科植物は縄文時代前～中期の検出率が高く、中部高地では前期後葉には野生種のアズキ亜属が広範囲に利用され(中山ほか 2017)、中期前半段階には野生種よりも大形化した栽培アズキと、人的栽培が不可欠なエゴマが出現していた可能性が高いと指摘する(中山 2014)。小山の神B遺跡で検出したササゲ属アズキ亜属は、大きさから野生種に相当するものであり、シソ属果実もエゴマより小形であった。この分析結果は、中山氏らの指摘に沿うものであり、中部地方における縄文時代の植物利用を検討するうえで良好な類例の一つとなった。

今回分析した土器のように、1個体に多量の種実を含む土器の出土事例を第15表に示した。会田進氏らによると長野県では岡谷市梨久保遺跡・目切遺跡、茅野市頭殿沢遺跡・茅野和田遺跡、豊丘村伴野原遺跡で出土しており(会田ほか 2017)、埋文センターでは朝日村山鳥場遺跡で確認している(埋文センター 2019)。ただし、いずれも縄文時代中期初頭～後葉の例で、前期後葉の県内事例としては今回が初めてである。こうした土器は、小山の神B遺跡では1個体しか存在せず、その意義や背景などを検討していくのが今後の課題となろう。

2 放射性炭素年代測定

(1) 分析の内容

遺構から出土した炭化物と土器に付着していた炭化物について、株式会社加速器分析研究所に委託し、放射性炭素年代測定(AMS測定)を実施した。

(2) 分析試料と目的

分析試料は竪穴建物跡（S B 01・06・08・12）、土坑（S K 09・33・51・117・120）、溝跡（S D 05・07）から出土した炭化物 19 点と、土器に付着していた炭化物 2 点（S B 06、I J 15 グリッド出土）の、合計 21 点である（第 16 表）。分析の目的は、縄文時代前期初頭・後葉・末葉および平安時代以降の遺構から出土した炭化物の年代値と土器型式を比較するとともに、遺物による時期推定が困難な遺構について年代の手掛かりを得ることにある。

化学処理工程を経た分析試料は、加速器をベースとした ^{14}C -AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）、 ^{14}C 濃度（ $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）の測定を行った。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOX II）を標準試料とし、標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施した。

(3) 分析結果

分析結果は、第 16 表に示したとおりである。これをもとに資料 1～21 の分析結果を整理してみる。

試料 No. 1・2 は、縄文時代前期後葉の S B 01 の P 1 から採取したものだが、両者の年代値には大きな差がある。前期後葉としては No. 2 が概ね整合する。No. 1 は、加速器分析研究所の報告によると、通常の炭化物とは異なる可能性が指摘されているが、「通常の炭化物」とどこかどのように異なるのか、その意味するところは不明である。

No. 3 は、縄文時代前期後葉の S B 06 埋土 4 層から採取し、年代値は出土土器型式と概ね整合する。

No. 4 は、縄文時代前期初頭の塚田式が出土した S B 08 埋土 1 層から採取した。年代値は出土土器型式と整合する。

No. 5 は、縄文時代前期初頭の S B 12 埋土 2 層と認識していた土層から採取したものである。年代値は前期後葉から末葉に相当するため、この試料は、S B 12 を切る S B 14 の埋土を、S B 12 と誤認して採取した可能性がある。

No. 6・7 は、出土土器がないため時期不明の S K 09 埋土から採取し、縄文時代晩期後半から弥生時代への移行期の年代値を得た。

No. 8・9 は、縄文時代前期末葉の S K 33 埋土から採取したものだが、年代値は出土土器型式と整合しない。特に、No. 9 は前期初頭の No. 4 や 14 と近い年代値である。S K 33 は、前期初頭の土器が出土している S B 05 を切るため、それに関係する炭化物が S K 33 の埋土に混入した可能性がある。

No. 10～12 は、縄文時代前期末葉の土器が出土した S K 51 の、それぞれ埋土 1 層、3 層、5 層下部から底面付近で採取したものである。No. 10 は明らかに新しい年代値で、No. 11・12 は前期後葉の No. 2・3 に近い年代値が出ているため、出土土器型式とは整合しない。

No. 13 は、出土土器がないため時期不明の S K 117 埋土から採取し、縄文時代後期中葉頃の年代値を得た。小山の神 B 遺跡では、後期中葉の遺構・遺物は見つかっていないため、整合的な結果ではない。

No. 14 は、縄文時代前期初頭の S K 120 埋土で採取した。年代値は出土土器型式と整合する。

No. 15～18 は、平安時代以降と推測する S D 05 底面で採取したものだが、年代値は No. 15～17 が縄文時代晩期前葉、No. 18 は縄文時代後期中葉から後葉頃で、遺構の年代と整合しない。遺構が埋没する過程で古い炭化物が混入したものと考えられる。

No. 19 は S B 06 の縄文時代前期後葉、No. 20 は前期初頭の土器内面に付着していた炭化物で、両者ともに土器型式と整合する年代値を得た。

No. 21 は、平安時代以降と推測する S D 07 埋土下部から採取した。年代値は平安時代末から中世初頭に相当するため、遺構の年代と整合する。

第16表 分析試料と測定年代

No.	試料名	種類	採取位置	暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
1	1	炭化物	SB01 Pit 1 検出面 (中央)	6,496 \pm 31	5490calBC-5466calBC (37.8%) 5441calBC-5423calBC (10.9%) 5406calBC-5384calBC (19.5%)	5520calBC-5460calBC (51.3%) 5454calBC-5374calBC (44.1%)
2	2	炭化物	SB01 Pit 1	4,796 \pm 26	3639calBC-3631calBC (10.6%) 3579calBC-3535calBC (57.6%)	3645calBC-3624calBC (17.3%) 3602calBC-3524calBC (78.1%)
3	3	炭化物	SB06 4層	4,767 \pm 27	3634calBC-3625calBC (7.5%) 3600calBC-3552calBC (45.8%) 3541calBC-3525calBC (14.9%)	3640calBC-3517calBC (93.6%) 3396calBC-3386calBC (1.8%)
4	4	炭化物	SB08 1層	6,210 \pm 31	5221calBC-5203calBC (11.2%) 5172calBC-5073calBC (57.0%)	5296calBC-5241calBC (12.2%) 5213calBC-5191calBC (17.4%) 5184calBC-5057calBC (65.8%)
5	5	炭化物	SB12 2層	4,660 \pm 28	3508calBC-3484calBC (17.6%) 3476calBC-3427calBC (42.2%) 3381calBC-3370calBC (8.4%)	3519calBC-3366calBC (95.4%)
6	6	炭化物	SK09 埋土	2,473 \pm 26	752calBC-686calBC (27.3%) 667calBC-636calBC (13.6%) 623calBC-614calBC (3.3%) 595calBC-538calBC (24.0%)	764calBC-680calBC (30.3%) 674calBC-501calBC (58.9%) 495calBC-486calBC (0.9%) 463calBC-449calBC (1.7%) 443calBC-417calBC (3.5%)
7	7	炭化物	SK09 埋土	2,495 \pm 27	750calBC-687calBC (26.0%) 666calBC-642calBC (9.5%) 592calBC-509calBC (28.4%) 437calBC-421calBC (4.3%)	744calBC-684calBC (27.6%) 669calBC-607calBC (17.2%) 601calBC-413calBC (50.7%)
8	8	炭化物	SK33 埋土 (炭サンプル1)	5,053 \pm 29	3941calBC-3857calBC (54.9%) 3818calBC-3797calBC (13.3%)	3952calBC-3783calBC (95.4%)
9	9	炭化物	SK33 埋土 (炭サンプル2)	6,168 \pm 29	5207calBC-5197calBC (6.0%) 5180calBC-5089calBC (50.6%) 5083calBC-5063calBC (11.7%)	5215calBC-5031calBC (95.4%)
10	10	炭化物	SK51 1層	3,874 \pm 24	2456calBC-2419calBC (19.6%) 2407calBC-2376calBC (17.7%) 2351calBC-2297calBC (31.0%)	2465calBC-2286calBC (94.9%) 2247calBC-2243calBC (0.5%)
11	11	炭化物	SK51 3層	4,719 \pm 29	3627calBC-3596calBC (21.9%) 3527calBC-3506calBC (13.5%) 3428calBC-3381calBC (32.8%)	3633calBC-3559calBC (33.8%) 3537calBC-3469calBC (20.5%) 3460calBC-3376calBC (41.1%)
12	12	炭化物	SK51 5層下部~ 底面付近	4,851 \pm 28	3692calBC-3688calBC (2.8%) 3661calBC-3643calBC (63.5%) 3548calBC-3545calBC (2.0%)	3702calBC-3631calBC (83.4%) 3561calBC-3537calBC (12.0%)
13	13	炭化物	SK117 埋土	3,366 \pm 25	1689calBC-1625calBC (68.2%)	1741calBC-1608calBC (93.8%) 1570calBC-1561calBC (1.1%) 1546calBC-1541calBC (0.5%)
14	14	炭化物	SK120 埋土	6,179 \pm 29	5208calBC-5203calBC (3.0%) 5175calBC-5071calBC (65.2%)	5219calBC-5042calBC (95.4%)
15	15	炭化物	SD05 底面付近	2,947 \pm 25	1252calBC-1242calBC (5.1%) 1213calBC-1124calBC (63.1%)	1261calBC-1055calBC (95.4%)
16	16	炭化物	SD05 底面付近	2,952 \pm 28	1256calBC-1238calBC (9.8%) 1215calBC-1125calBC (58.4%)	1266calBC-1053calBC (95.4%)
17	17	炭化物	SD05 底面付近	2,934 \pm 25	1211calBC-1112calBC (59.6%) 1101calBC-1086calBC (6.4%) 1064calBC-1058calBC (2.2%)	1260calBC-1228calBC (7.9%) 1220calBC-1047calBC (87.5%)
18	18	炭化物	SD05 検出面	3,157 \pm 25	1453calBC-1411calBC (68.2%)	1495calBC-1397calBC (95.4%)
19	19	土器付着 炭化物	SB06 埋土	4,728 \pm 28	3629calBC-3583calBC (31.9%) 3532calBC-3512calBC (12.1%) 3425calBC-3383calBC (24.2%)	3635calBC-3554calBC (43.3%) 3540calBC-3497calBC (20.5%) 3451calBC-3377calBC (31.5%)
20	22	土器付着 炭化物	I-J-15 検出面	6,088 \pm 28	5041calBC-4960calBC (68.2%)	5202calBC-5176calBC (4.4%) 5070calBC-4932calBC (89.8%) 4924calBC-4910calBC (1.2%)
21	No.5 台帳 No.炭 1-9	炭化物	SD07 埋土下部	890 \pm 20	1052calBC-1081calAD (27.3%) 1152calBC-1190calAD (39.0%) 1199calBC-1202calAD (1.9%)	1045calAD-1095calAD (33.9%) 1119calAD-1214calAD (61.5%)

3 火山灰分析

(1) 分析の内容

縄文時代前期末葉の貯蔵穴と推測される S K 51 から採取した埋土を対象に、パリノ・サーヴェイ株式会社へ委託し、テフラの検出同定分析と重鉍物分析を実施した。また、テフラの同定精度を高めるため、併せて火山ガラスまたは重鉍物の屈折率測定を実施した。

(2) 分析試料と目的

分析試料は S K 51 埋土から採取した土壌 5 点で、1～5 層の各層から 1 点ずつ採取した。分析目的は、埋土のテフラの産状を確認することにより、S K 51 に係る年代資料を得ることにある。

(3) 分析結果

S K 51 の埋土から、鹿児島県始良カルデラを給源とする始良 Tn 火山灰 (A T) 由来の火山ガラスと、浅間火山を給源とする浅間火山の 15,800 年前の火山灰由来、もしくは浅間板鼻褐色テフラ由来の火山ガラスが検出された。埋土最下部の 5 層では、A T 由来の火山ガラスはほとんど含まれず、浅間火山のテフラに由来する火山ガラスが多く含まれ、4 層から上層ほど A T 由来の火山灰ガラスが多く含まれるという傾向がある。この状況は、S K 51 の埋没過程における周辺土壌の流れ込みや、土坑壁面からの崩落による結果を反映していることが考えられる。

また、九州南方の鬼界カルデラを給源とする鬼界アカホヤ火山灰 (K - A h) は全く検出されていない。以上の結果から、今回の分析では S K 51 に係る年代資料を得ることはできなかった。

引用・参考文献

- 会田進・酒井幸則・佐々木由香・山田武文・那須浩郎・中沢道彦 2017「アズキ亜属種子が多量に混入する縄文土器と種実が多量に混入する意味」『環境資源と人類』第7号
- 中山誠二 2014「日韓における栽培植物の起源と農耕の展開」『日韓における穀物農耕の起源』山梨県立博物館
- 中山誠二・西願麻以・赤司千恵・前川優 2017「山梨県花鳥山遺跡における縄文時代前期後葉の植物圧痕」『研究紀要』33 山梨県立考古博物館 山梨県埋蔵文化財センター
- 埋文センター 2019『山鳥場遺跡』
- 能城修一・佐々木由香 2014「遺跡出土植物遺体からみた縄文時代の森林資源利用」『国立歴史民俗博物館研究報告』187 国立歴史民俗博物館

第5節 小結

小山の神 B 遺跡では、1 区で縄文時代前期初頭・後葉・末葉の集落跡と弥生時代前期の土坑群を、3・4 区では平安時代の集落跡を検出した。

縄文時代前期初頭の集落跡は、竪穴建物跡 9 軒 (S B 02~05、07・08・10・12・13) と土坑 16 基以上 (S K 05・11・12・31・47・49・54・82・86・89・108・109・120・122~124 など) で構成される。このほかに、前期初頭もしくは前期末葉の可能性のある竪穴建物跡 1 軒 (S B 11) が存在する。竪穴建物跡は概ね 3.5~13 m の距離を置き、1 区の北西から南東に向かって緩やかな弧状を描くように位置していた。S B 12 のように、1 区東側の調査区外へと続く竪穴建物跡が見られる点から、東側にも数軒の存在が考えられる。

仮にそうした場合、全体として10数軒程度の竪穴建物跡が、緩やかな環状を描くように建てられている。土坑は竪穴建物跡と同じ場所、あるいはやや外側に位置する。竪穴建物跡に囲まれる内側には、当該期と推測される土坑は抽出できなかった。内側には時期不明の土坑があり、それを考慮しても外側に多い傾向がある。集落の時期は、SB 05とSB 10に重複関係が認められる点、出土土器が塚田式と中道式である点を考慮すれば、少なくとも2段階以上の変遷が想定される。

当該期の集落跡は、浅間山麓の御代田町下弥堂遺跡（御代田町教育委員会 1994）と塚田遺跡（同 1994）に類例がある。下弥堂遺跡は竪穴建物跡14軒と土坑13基、塚田遺跡は竪穴建物跡12軒と土坑24基で構成され、ともに「住居にゆるやかに取り囲まれた広場に土坑が配置されていた」とする集落景観が描かれている。集落の時期は遺構の重複関係や出土した土器の時期、石器の接合関係から2段階以上の変遷があったとされている。小山の神B遺跡とは、集落の立地環境・規模、竪穴建物跡の位置、時期など類似点も多く、当該期における集落の1つの在り方を示している可能性がある。その一方で、竪穴建物跡と土坑の位置関係など、小山の神B遺跡と塚田遺跡・下弥堂遺跡には違いもあり、今後はより細かな視点で分析を加えていくことが必要である。

前期後葉は竪穴建物跡2軒（SB 01・06）と土坑11基以上（SK 06・26・34・46・91・95・96・98・121・125・126など）で構成される。また、竪穴建物跡1軒（SB 14）が前期後葉、もしくは前期末葉の可能性はある。竪穴建物跡と土坑は1区の北西部と南東部に位置し、土坑は竪穴建物跡の比較的近隣に位置する。竪穴建物跡間の距離は、SB 01・06間で27mと前期初頭よりも長い、SB 14が当該期であればSB 01・14間では10mである。集落の広がりには不明だがSB 14が当該期の場合、1区東側へと広がる可能性もある。

前期末葉は竪穴建物跡1軒（SB 09）と土坑15基以上（SK 33・37・50～52・59・76・83・85・92・97・104・107・113・114など）で構成される。また、竪穴建物跡1軒（SB 14）が前期後葉もしくは前期末葉、1軒（SB 11）が前期初頭もしくは前期末葉の可能性はある。竪穴建物跡は1区の東半に位置する。SB 11が当該期であればSB 09・11間の距離は28m、SB 14が当該期であれば、SB 11・14間の距離は17m以下となる。土坑は1区のほぼ全体に広がるが、その中に断面形が袋状で貯蔵穴と推測される土坑SK 51がIJ 02グリッドに、SK 76がIO 04グリッドに位置する。SK 76は、出土した土器の時期から前期末葉と推測したが、SB 11を切るのので当該期よりも新しい可能性はある。さらに、時期不明だが、SK 76の西側には断面形が袋状のSK 132があり、SK 76と関連させることができるかもしれない。集落の広がりには不明だが、SB 14が当該期であれば、1区東側へと広がる可能性もある。

弥生時代前期は土坑5基以上（SK 48・75・99・129・131など）で構成され、IJ 03グリッドに位置するSK 99以外は1区の南側にまとまる。隣接する3・4区も含めて、当該期の竪穴建物跡は検出されていない。IO 08・09グリッドに位置するSK 131は、断面形は袋状ではないが、袋状土坑のような大形の土坑である。埋土から石鍬が出土したので当該期としたが、縄文時代前期末葉で触れたSK 76・132と近接するので、当該期ではなくその2基と関わりがある土坑の可能性もある。

平安時代では、9～10世紀の竪穴建物跡9軒が2～4mの標高差をもち、上・中・下の三列に分かれて分布していた。中・下列では9世紀代と10世紀代の竪穴建物跡があり、北東・南西方向の両側に9世紀代（SB 18・21・22）、中央に10世紀代（SB 16・17・19）の竪穴建物跡が位置していた。上列は10世紀代の竪穴建物跡1軒（SB 15）が存在するが、前述のとおり重複の可能性が高く、10世紀よりも古い竪穴建物跡が存在した可能性も考えられる。そのほかの2軒（SB 20・23）は、時期を決定できない。

引用・参考文献

御代田町教育委員会 1994『下弥堂遺跡』

御代田町教育委員会 1994『塚田遺跡』

第5章 高尾A遺跡 高尾古墳群5号墳

第1節 遺跡の概観と調査の概要

1 遺跡の概観

高尾A遺跡は、八ヶ岳から北東に連なる丘陵の縁辺付近に位置する（第43図）。北東方向に伸びる尾根の南西斜面から鞍部にかけての範囲が遺跡とされ、標高は約725～765mを測る。過去の調査履歴はなく、遺跡の詳細は不明であった。現況は畑地と山林だが、山林には桑畑として利用されていた当時の造成の跡が見られる。遺跡の南東には倉沢川が北東に向かって流れ、約1km下流で片貝川に合流し、北北西に約3.5km下流で千曲川に合流する。

隣接する遺跡の状況は、倉沢川の上流約500mの左岸に縄文時代の散布地とされる高尾B遺跡がある。200m上流の対岸には、近世の生産遺跡である川越石窯址が位置する。高尾A遺跡の北約100mの丘陵裾部には縄文～弥生時代、古代の集落跡とされる瀧の下遺跡が位置する。これらの遺跡は、瀧の下遺跡に工事立会い事例がある以外に調査履歴はなく、各遺跡の詳細は不明である。また、今回調査地点の南西にあたる丘陵尾根稜線には高尾古墳群が存在する。1～4号墳が登録されているが、調査履歴はなく古墳の詳細は不明である。今回調査した5号墳は未周知であったため、市教委により高尾古墳群5号墳として登録の手続きが取られた。

2 調査の経過

高尾A遺跡の発掘調査は2009・11・13・14年の4か年に及び、調査面積は14,160㎡に上る。以下、年度ごとに調査の概要と経過を述べる。

(1) 2009年度調査の概要

1区3,200㎡、2区3,200㎡、3区1,670㎡の確認調査を実施した。掘削トレンチは1区で22か所（1-1～22）、2区で10か所（2-1～10）、3区で11か所（3-1～11）となる（第44図）。1区は1-11・16・17トレンチから縄文土器と時期不明の土坑、溝1条を検出し、その周辺400㎡は本調査が必要と判断した。また、遺構は西側に隣接する未確認の調査区へ広がると予想した。1区東側の2,800㎡では遺構・遺物はなく、本調査は不要と判断した。2区は、2-4トレンチの暗褐色土から黒曜石の剥片が平面的に集中する状態で出土した。層位と剥片の特徴から旧石器時代のブロックの存在が想定されたため、トレンチ周辺の500㎡は本調査が必要と判断した。2区南西側の2,700㎡では、縄文時代と平安時代の遺物が少量出土したが、遺物を包含する暗褐色土が削平され、遺構もなかったため、本調査は不要と判断した。3区は、中央を縦断する道路と市道29-54号線からなるT字路東側角部付近で、地表に露出する石積を確認した。石積は時期が近世以前に遡る可能性があり、その周辺200㎡は本調査が必要と判断した。ほかのトレンチでは、時期不明の土器が数点出土したが、摩耗が著しく混入と考えられ、遺構もなかったことから、石積を除く1,470㎡は本調査不要と判断した。

(2) 2011年度調査の概要

2・3区の本調査と1・2区の確認調査を並行して実施した。確認調査の面積は1区1,800㎡、2区

600㎡である。1区では、2009年度のトレンチ1-13~17付近(第44図)で確認した遺構の広がりをとらえるための遺構検出を行い、縄文時代前期の竪穴建物跡1軒と時期不明の土坑5基を検出した。遺物は単点測量後に取り上げ、遺構は埋め戻して次年度以降の本調査に備えた。1区の1-23~31トレンチと2区の2-11~13トレンチ(第44図)では、少量の遺物が出土したものの、遺構面は削平され残存しないことから周辺の本調査は不要と判断した。一方、本調査は2009年度に2区で確認した旧石器時代の遺物分布地区650㎡と、3区の石積部分200㎡、3区東端付近の400㎡で行った。3区の石積は、石積下部からビニール袋が出土したので現代以降と判断、写真記録のみで調査を終えた。3区東端は3-12・13トレンチ(第44図)を掘削し、少量の摩耗した土器が出土したが、遺構面は削平されていたので層序の実測と写真記録で調査を終了した。2区の旧石器時代遺物分布地区では、石器を検出した地点周辺16m×18mの範囲を中央拡張区とし、その周辺に2m×2mのテストピット12か所を設定し人力で掘削した。テストピットでは、旧石器時代の遺物包含層下位の基本層序第V層まで掘削し層序を記録した。出土遺物は柱状に残し、出土状況写真と座標の記録を行った。中央拡張区では、遺物と礫を残しながら基本層序第V層上面まで人力で掘削した。出土状況の写真撮影(空中写真撮影を含む)と、出土位置の座標測量を行いながら遺物を取り上げた。中央拡張区の外側は重機で基本層序第V層下面まで掘削し、旧石器時代の地形を復元して、中央拡張区と合わせて写真撮影・地形測量を行った。最後に、旧石器時代ブロックとその周辺の基本層序第V層以下を10cm程度掘削し、遺物が出土しなくなることを確認のうえ調査は終了した。

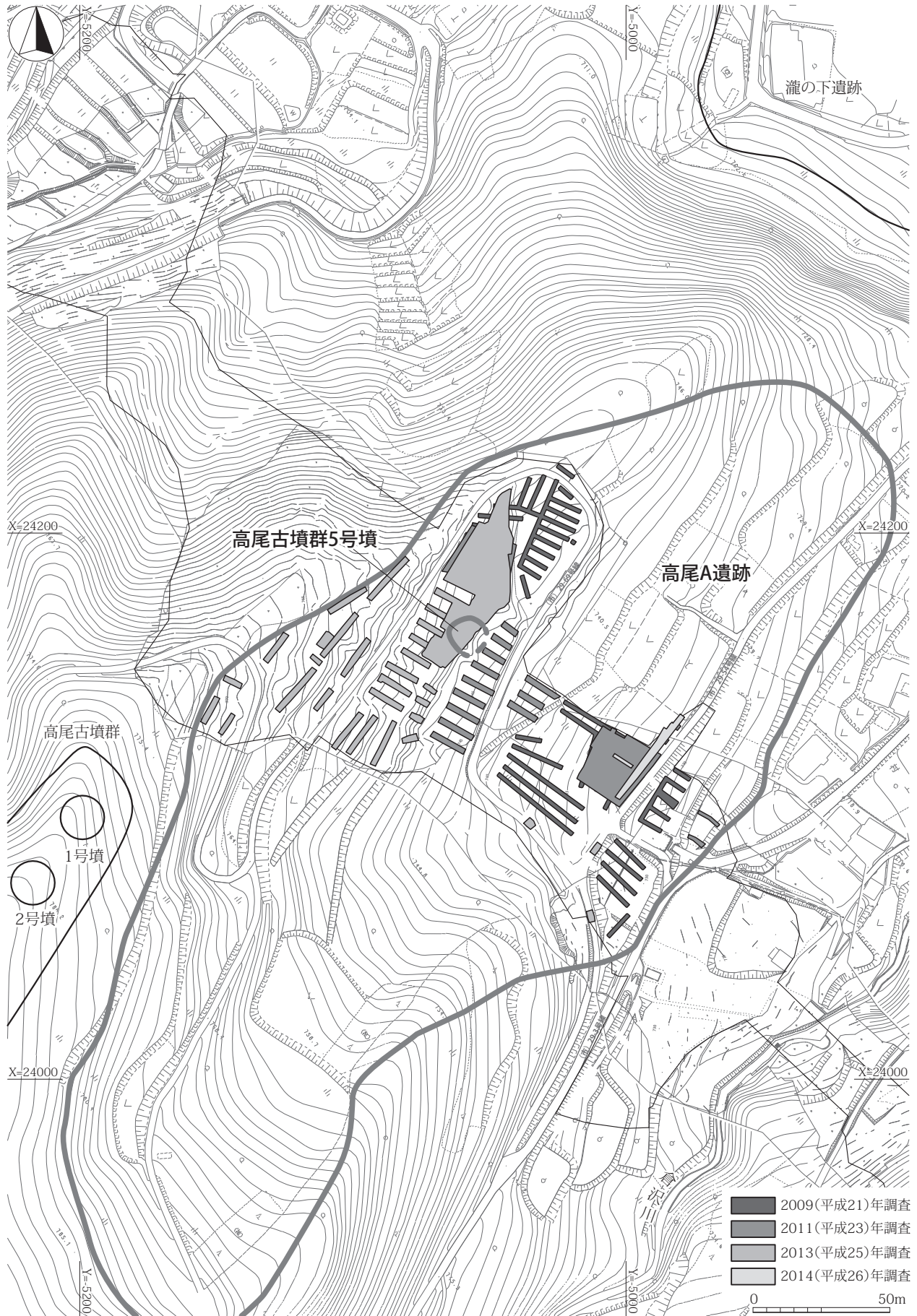
(3) 2013年度調査の概要

1区の本調査と、1・2・4区の確認調査を並行して実施した。1区では、2011年度に竪穴建物跡と溝跡を検出した1a区の遺構調査を行った。竪穴建物跡(SB01)は、南東側が削平されていたが、縄文時代前期前葉の土器と石器、玦状耳飾が出土した。溝跡(SD01)は丘陵斜面の傾斜に沿って等高線に直交する方向で直線的に延び、長さ15.0mにわたり検出した。埋土から奈良~平安時代の須恵器坏と器種不明の土師器が出土したが、小破片で流込みの可能性が高く、遺構の重複も認められず、時期を明らかにすることはできなかった。一方、1b区の確認調査では、古墳周溝の可能性のある落込みを検出したのでその周辺を拡張し精査した結果、横穴式石室をもつ古墳(SM01)の存在が明らかになった。古墳は南東側の大部分が破壊され、石室も上部と羨道が大きく損ねられていたが、墳丘の復元直径約8.0mの円墳で、墳丘の周囲を列石と周溝が巡っていた。石室内部からは人骨・歯が、周溝からは須恵器高台付坏と坏蓋の破片が出土した。この古墳は未周知であったため、調査終了後に市教委が高尾古墳群5号墳として登録の手続きを行った。1区のほかの地点と2・4区は確認調査を実施したが、2・4区は遺構・遺物ともなく本調査は不要と判断した。

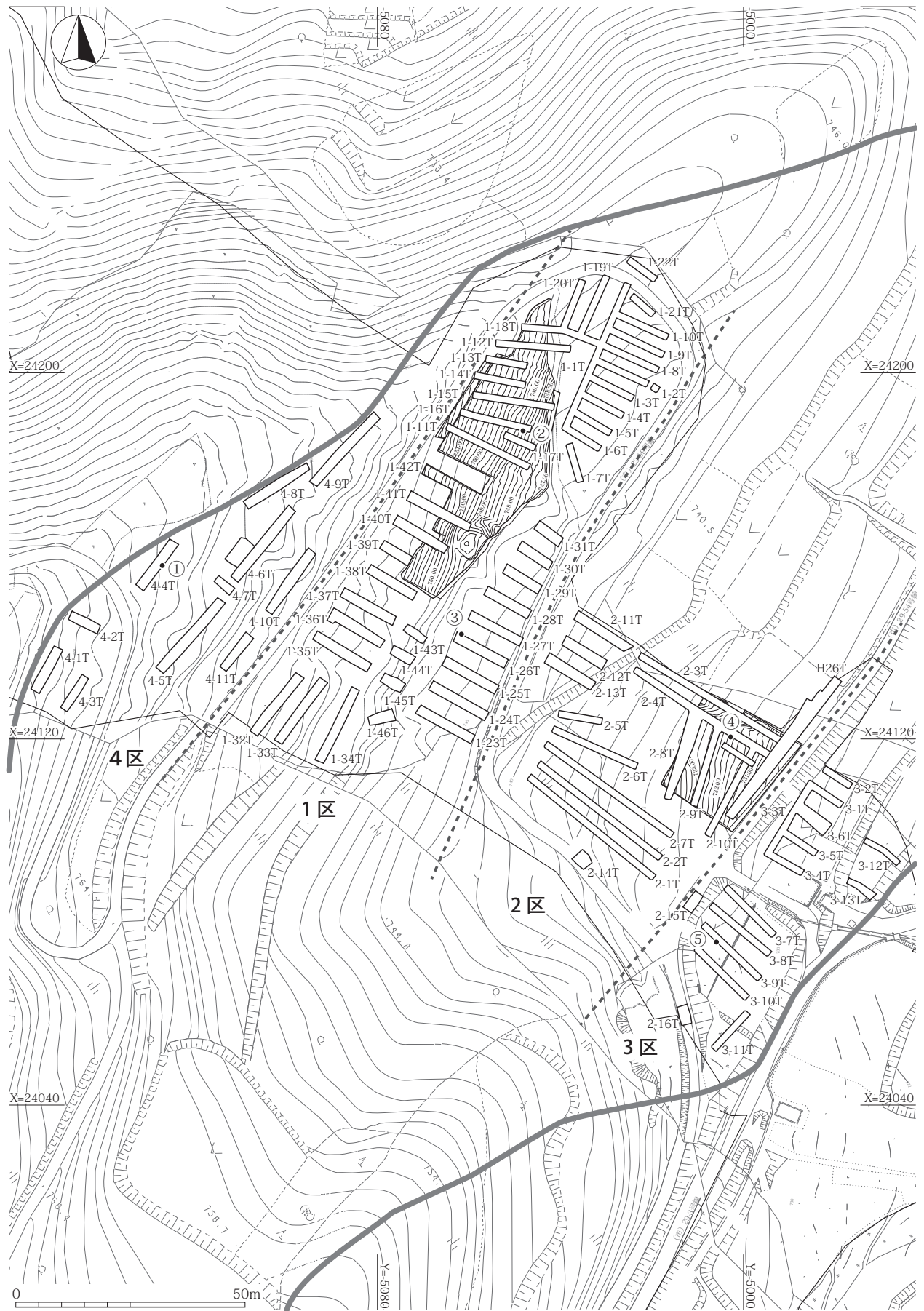
なお、周辺住民をはじめ広く一般市民に調査成果を公開するため、8月3日に現地説明会を開催し遺跡を公開した。57名の見学者があった。

(4) 2014年度調査の概要

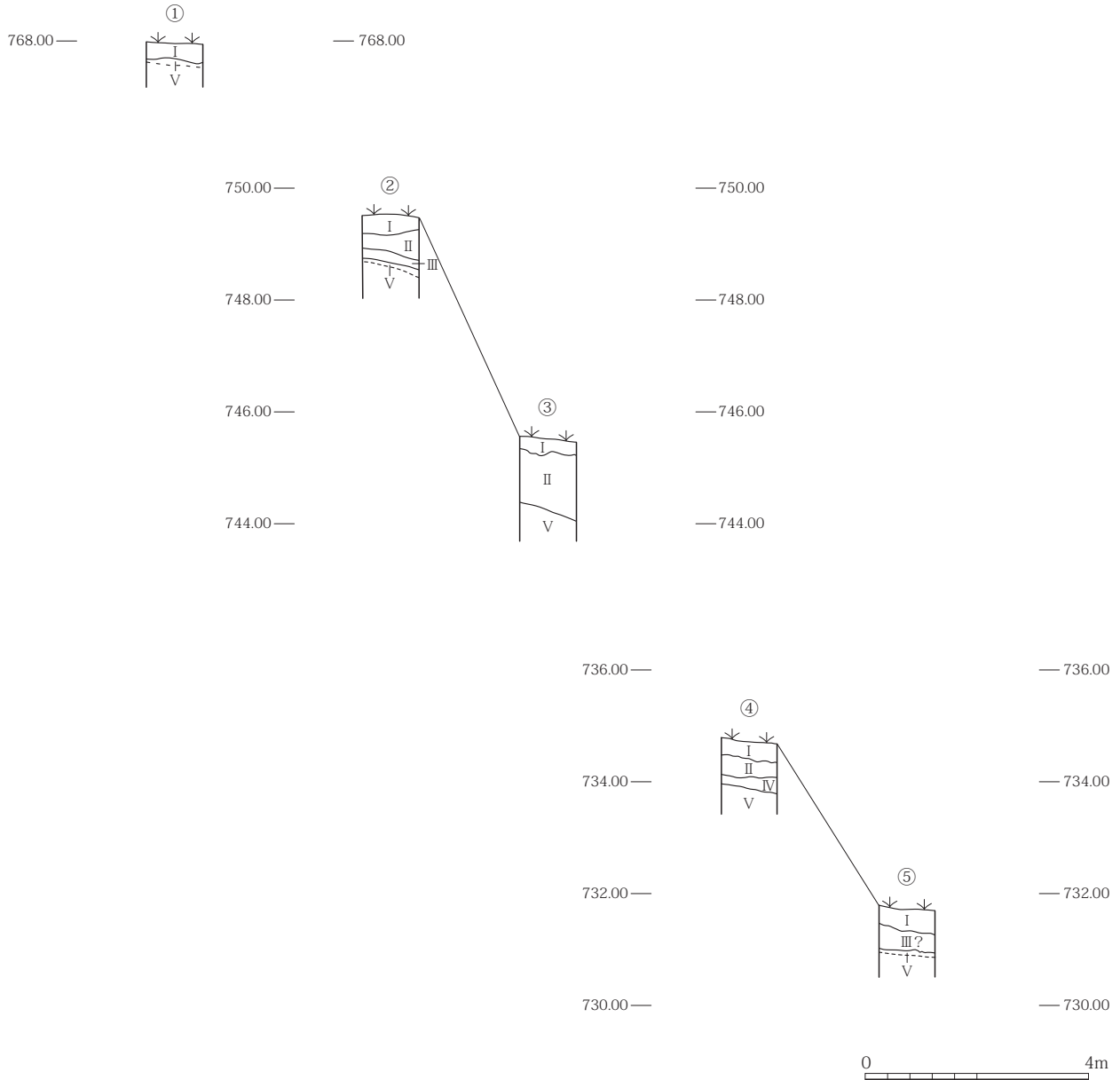
2区の市道部分および2c区と、旧石器時代の石器群を検出した地点の南側に隣接する2b区(第44図)で確認調査を実施した。2c区ではトレンチ掘削の結果、基盤層までが掘削され、遺構面は残存していないことを確認した。2b区では、旧石器時代の石器群が検出される可能性を考え人力で精査したが、石器群が出土する第IV層自体が認められず、石器群は2b区には及んでいないことが判明した。なお、基本層序第IV層よりも上部では、縄文土器と土師器の小破片および黒曜石が出土した。



第 43 図 遺跡範囲・位置図



第44図 トレンチ・調査区配置図

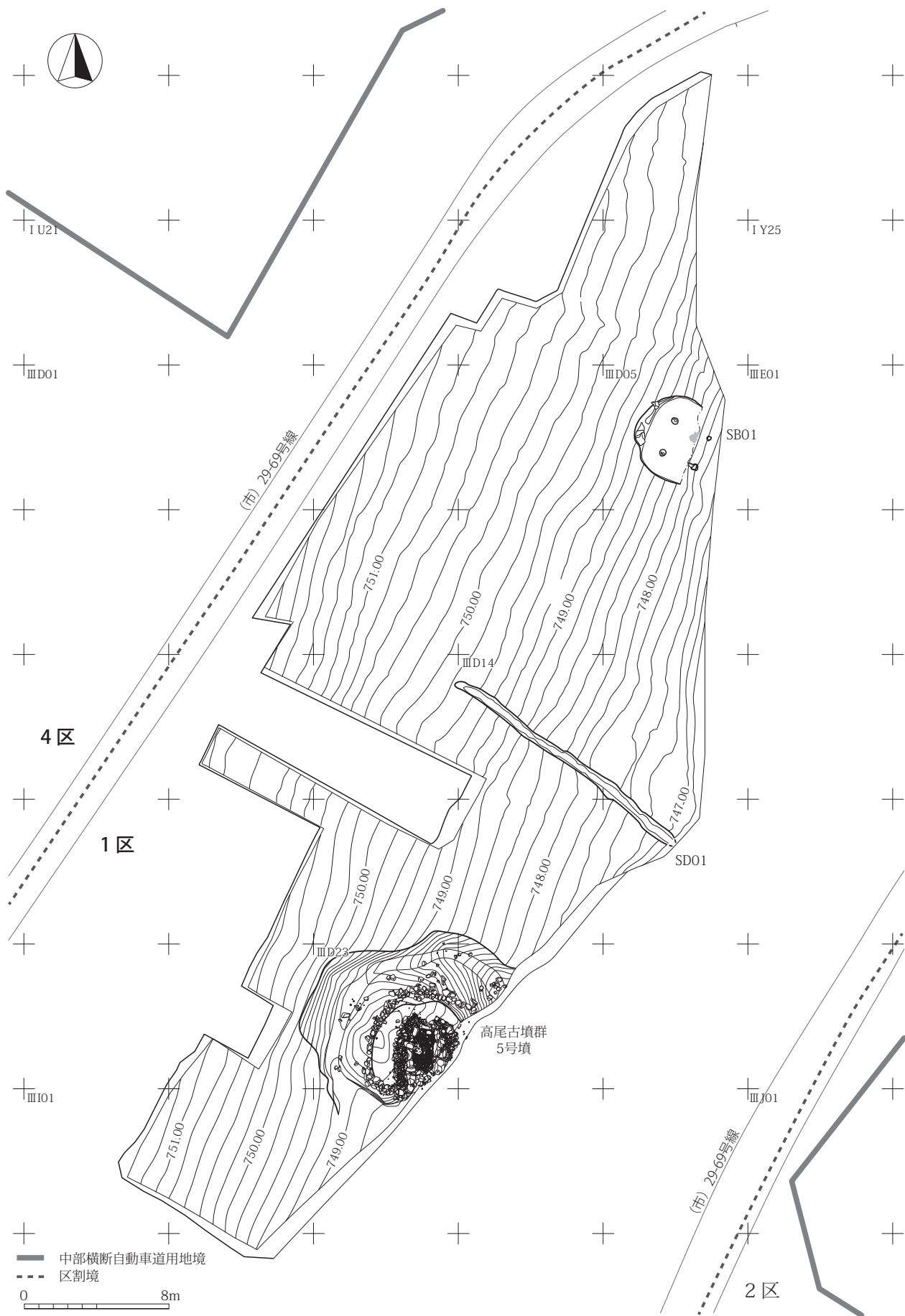


- | | |
|-------------------|--|
| I 表土 | 調査範囲全体の表土（耕作土、造成土、かく乱を含む）を一括 |
| II 褐色(10YR4/4) | シルト。粘性なし。しまり強。10~30mm礫3%混 |
| III 黒褐色(10YR3/1) | シルト。粘性なし。しまり強。10~100mm礫5%混。人頭大以上礫微混 |
| IV 暗褐色(10YR3/3) | シルト。粘性なし。しまり強。10~100mm礫10%混。旧石器包含層 |
| V にぶい黄褐色(10YR4/3) | シルト。粘性なし。しまり強。ローム主体。10~50mm礫5%
下部は縞状に暗褐色(10YR3/3)砂質シルト混 |

第45図 土層柱状図

3 基本層序

基本層序は第I～V層に大別できる（第45図）。第I層は調査区全体の表土を一括する。第II層は1・2区に認められる褐色シルト。第III層は1・3区と2区の部分的に認められる黒褐色シルト。1区では、第III層を除去し、第V層上面で竪穴建物跡を検出した。竪穴建物跡の壁の立ち上がりが第III層に続くのかわ不明。第IV層は2区の谷部周辺のみ認められる暗褐色シルトで、旧石器時代の石器群を包含する。第V層は遺跡の地山となるにぶい黄褐色シルトで、4区では第I層直下で第V層が露出する。なお、2区の旧石器時代の石器群を調査した地点では、火山灰分析のための土壌を採取するため、さらに第I層をI a・bに2細分、第V層を第V～VIII層に4細分した（第2・4節参照）。



第46図 1区 遺構分布図

第2節 高尾A遺跡

1 概観

高尾A遺跡では、旧石器時代のブロック1か所と、縄文時代前期前葉の竪穴建物跡1軒、時期不明の溝跡1条を検出した。

旧石器時代のブロックは、標高731～734 mを測る2区東端部付近の中央拡張区において、沢状の窪地の縁に沿うような状態で検出した。器種組成は台形石器、搔器状石器、貝殻状刃器、削器、厚刃搔器、石核、剥片、碎片である。

縄文時代の竪穴建物跡は、標高748～749 mを測る1区ⅢD 05 - 11 グリッド付近で検出した。ほかに遺構は存在せず、竪穴建物跡単独の検出である。埋土から出土した土器により、前期前葉の二ツ木式・中越式期に所属する。

時期不明の溝跡は、標高747～750 mの1区ⅢD 14 グリッド付近に位置する。等高線に対して直行し、北西—南東方向へ延びる直線的な溝だが、関連する遺構もなく性格は不明である。

このほか、平安時代の土師器・須恵器破片が出土しているが、その時期の遺構は存在しない。

2 旧石器時代の遺構と遺物

(1) ブロック (第48～50図、PL 11)

2区の中央拡張区で、ブロック1か所を検出した。沢状の窪地の縁に沿うように長さ17 m、幅7 m前後の広さを持つ。器種組成は台形石器が4点、搔器状石器が2点、貝殻状刃器が40点、削器が4点、厚刃搔器が1点、石核が4点、剥片が237点で、石材は全て黒曜石である。

(2) 石器と出土層位

石器は基本層序第Ⅰ層から17点、第Ⅱ層から4点、第Ⅲa層から47点、Ⅲb層から1点、Ⅳ層から299点、Ⅵ層から8点が出土し、その中でピークとなるのは第Ⅳ層である。第Ⅳ層は、スコリアや小礫が洗われたような状態で含まれていることから2次堆積層と推測する。石器についても、原位置を保たない可能性は高いが、石器表面に磨滅がほとんどない点、限定された範囲に集中する点から、2次移動の範囲は数メートル程度に収まると考える。なお、第Ⅳ層では堆積年代を探るため、火山灰分析を実施した。約15,800年前の立川ローム層ガラス質火山灰(UG)および、約25,000年前の始良丹沢火山灰(AT)を検出したが、両火山灰ともⅣ層を含めて上下の層にまたがって分布することが判明した。そのため、層序的には本石器群のATとの上下関係は判断できない。

(3) 遺物 (第51～56図、第17表)

台形石器 (第51図1～4、PL 12)

鋭い素材縁辺による刃部と、刃潰し加工による側縁がある石器を台形石器とした。1は貝殻状剥片を素材とする。打面を右側縁に置き、全体に急角度の剝離を施して側縁を整形している。素材末端側となる左側縁は折れ面となっており、腹面に平坦な剝離を施し左側縁および覆面を整形している。形態は、若干右下りに傾斜する平たい刃部があり、刃部側が広く、基部側が狭い整った撥形の台形を呈する。AT降灰以前の典型的な台形石器と評価できる。2は薄い貝殻状剥片を素材とする。打面側を左側縁下部に置き、打面背面および末端背面に急角度の剝離を施して側縁を整形している。刃部は、右側に偏った鈍い先端を持つ。この先端を評価すると、ナイフ形石器と位置付けることもできるが、ここでは先端左部の斜めの側縁

を評価して台形石器とした。側縁は凸凹があり、不整形な台形を呈する。3は薄目の貝殻状剥片を素材とする。打面側は折れ面となり、右側縁に置かれている。素材末端側となる左側縁は、腹面にやや急角度な剥離が施され、側縁が整形されている。刃部は平たく、左側縁は弧状、右側縁は直線的な形状となっている。4は貝殻状剥片を素材とする。折れ面となる打面側を左側縁に置き、左側縁背面上半部にやや急な剥離を施している。明らかな整形部は左側縁上半部のみとなるため、貝殻状刃器との中間的な器種と考えたが、整った撥形台形の形状から台形石器とした。

搔器状石器 (第51図5・6、P L 12)

連続する加工により、比較的急角度の刃部が作り出されている石器を搔器状石器とした。5は縦長の剥片を素材としている。素材打面を上置き、打面および末端の背面に急角度の剥離を施している。左側縁腹面には、使用痕の可能性のある連続する微細な剥離が認められ、これに注目すると台形石器と見こともできるが、下側縁は搔器のような滑らかな弧状を呈することから、搔器状石器とした。6は貝殻状剥片を素材とする。打面を上置き、末端背面に急角度の剥離を施して、刃部を作り出している。打面は残され、左側縁背面には連続する微細な剥離があることから、貝殻状刃器としての利用も考えられる。刃部はやや乱れるが、直線的で左下りに傾く。

貝殻状刃器 (第51～54図7～43、P L 12)

鋭い素材縁辺と切り立った側縁を持つ石器を貝殻状刃器とした。当遺跡の剥片剥離には、規格性を持つ縦長剥片生産技術は認められない。遺跡に残された製品の素材および剥片類は、非規則的に剥離された剥片であり、大部分は縦にも横にも長さが偏らない貝殻状剥片となる。これらの剥片の鋭い縁辺を、刃部として利用したことが想定される石器である。切り立った側縁は、打面や折れ面、ヒンジフラクチャーの素材末端や、端部に施される急角度の剥離となる。多くの貝殻状刃器の刃部には、使用痕の可能性のある微細な剥離痕が観察できる。非規格的な形態をなすことから、柄への装着は考え難いため、切り立った側縁に指を当てて使用したのであろう。

削器 (第55図44～47、P L 12)

連続した加工により、薄い刃部が作り出されている石器を削器とした。44は貝殻状剥片を素材とする。左側縁および上側縁の腹面に、やや粗くやや急角度の剥離を施して刃部を整形している。素材末端側は切り立った折れ面となっているが、背面に連続する微細剥離痕がある。45は貝殻状刃器を素材としている。打面を上置き、上側縁腹面に連続するやや平坦な剥離を施している。また、左側縁は背面側に反り返った縁辺を打面とする、腹面側への連続する細かい剥離が施されている。これらの剥離の様相が、台形石器や搔器状石器の剥離とは異なることから削器と位置付けた。46は、やや縦に長い剥片を素材としている。左側縁腹面に、やや粗くやや急角度の剥離を連続的に施して刃部を整形している。47は分厚い横長剥片を素材としている。素材打面を上置き、上縁辺にやや平坦な粗くて大きな剥離を施し、刃部を整形している。石核の可能性も考えたが、剥離された剥片が小さく、刃部に微細な剥離があることから、削器として位置付けた。

厚刃搔器 (第56図48、P L 12)

打面や折れ面などの切り立った縁辺に加工施し、急角度の刃部が作り出されている石器を厚刃搔器とした。48の素材は、全面が広い面的な剥離に覆われているため、石核の可能性が高い。切り立った上縁辺を打面として、背面側に連続する平坦な剥離を施し、刃部を作り出している。

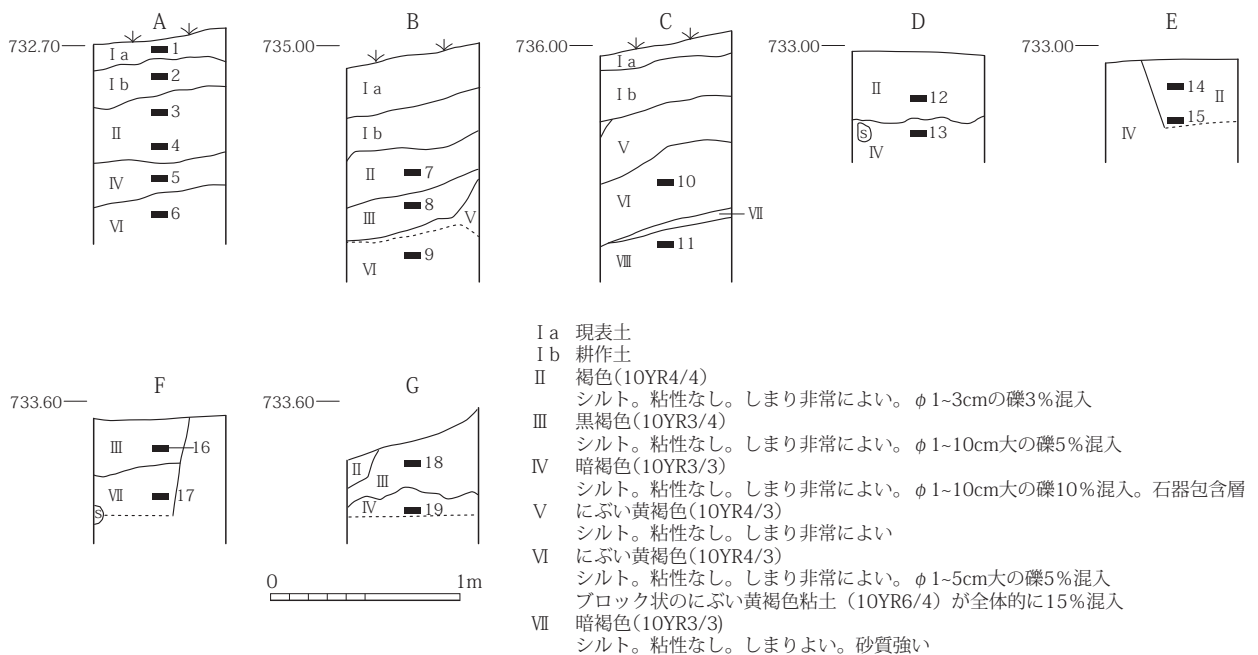
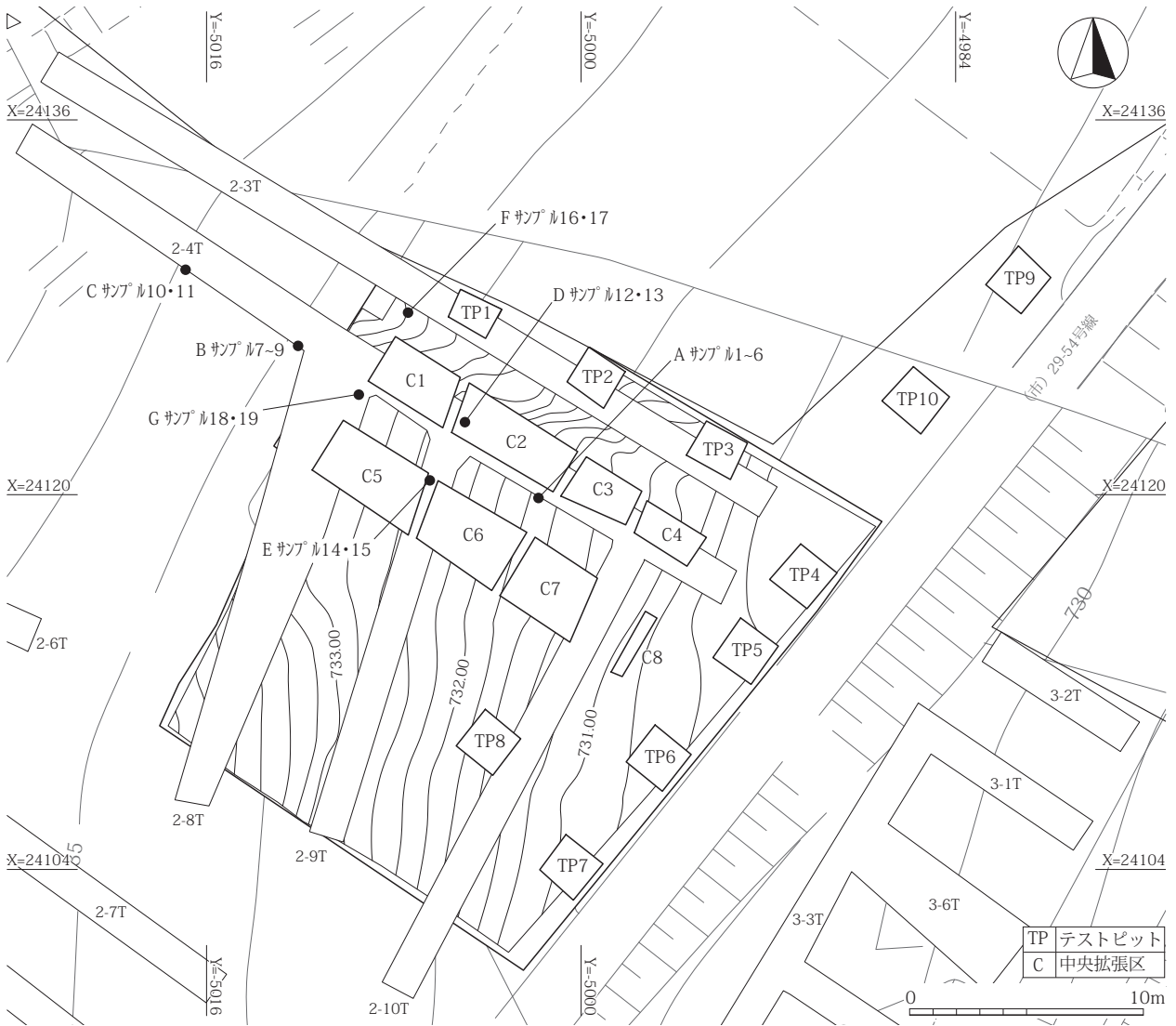
石核 (第56図49・50、P L 12)

剥片を剥ぐための母体、もしくは剥片を剥いだ後の残塊を石核とした。49・50は剥片に覆われているため、その母体は不明である。打面調整や頭部調整などの石核調整は認められず、90度の打面転移が繰

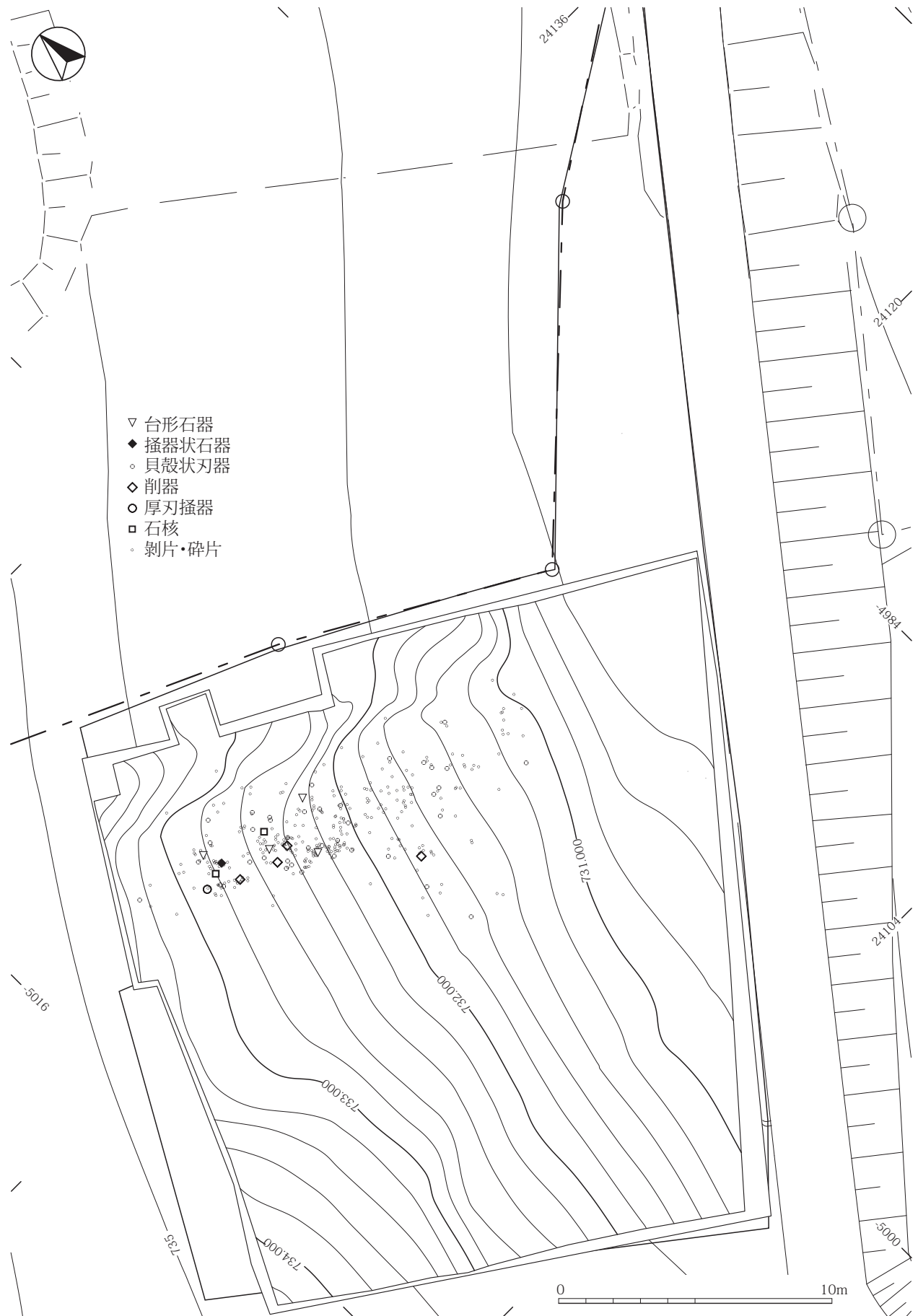
り返され、サイコロのような形態を呈している。

第17表 石器観察表

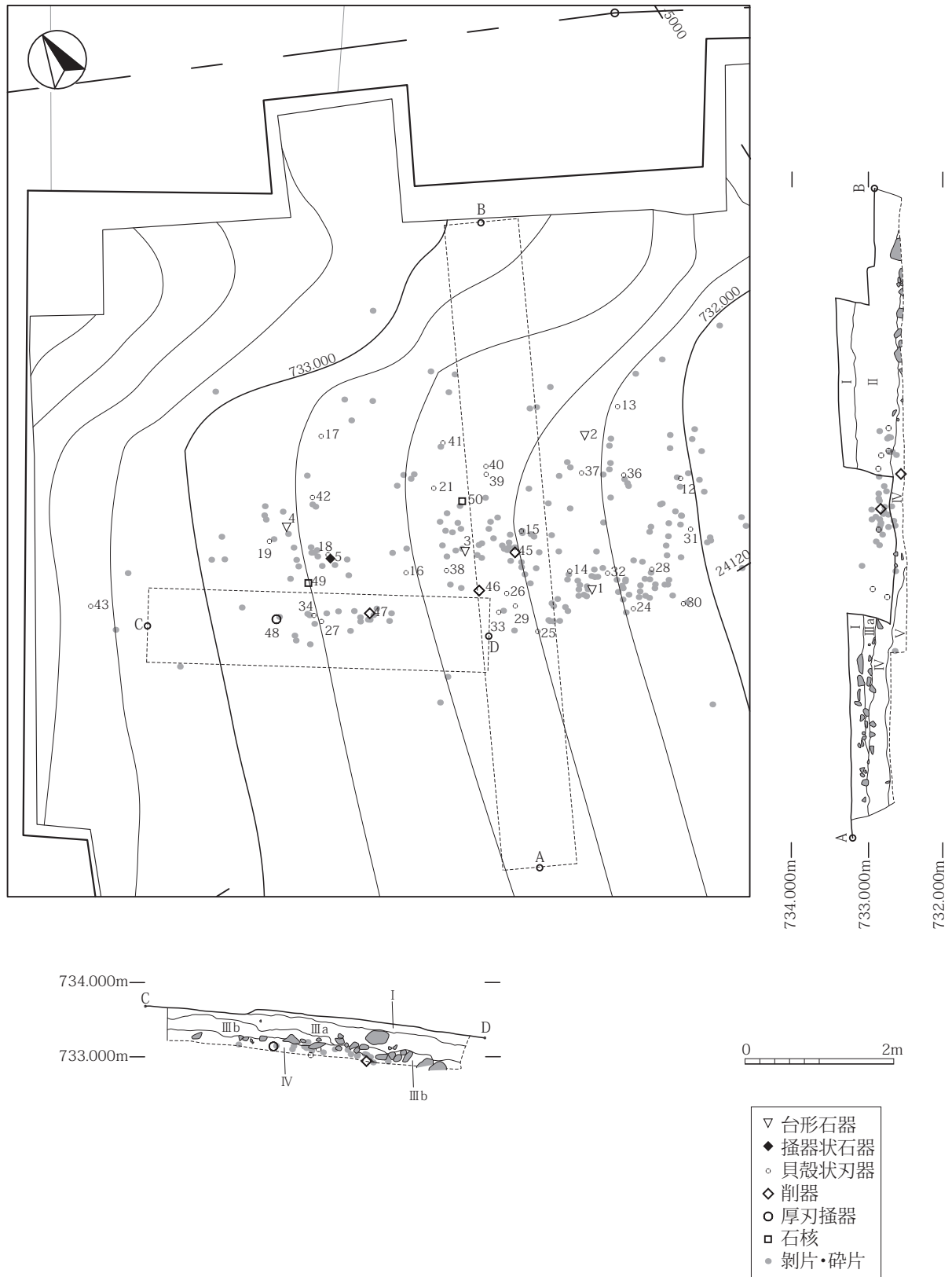
図版 番号	整理 番号	注記内容	出土 層位	器 種	材 質	法 量				個体 番号	接合 番号	判 別 群
						長さmm	幅mm	厚さmm	重量g			
51-1	450	DTA 450	Ⅳ	台形石器	黒曜石	23.6	15.7	5.8	1.81	1		冷山 (TSTY)
2	876	DTA 876	Ⅳ	台形石器	黒曜石	26.2	14.4	4	0.97	1		冷山 (TSTY)
3	898	DTA 898	Ⅳ	台形石器	黒曜石	26.6	13.6	5.1	1.56	7		冷山 (TSTY)
4	917	DTA 917	Ⅳ	台形石器	黒曜石	30.1	20.5	6.4	2.74	6		冷山 (TSTY)
5	457	DTA 457	Ⅳ	搔器状石器	黒曜石	31.3	20.6	7.9	4.12	7	20	冷山 (TSTY)
6	783	DTA 783	Ⅲ a	搔器状石器	黒曜石	20.6	21.1	7.9	2.69	1		冷山 (TSTY)
7	253	DTA 253	Ⅳ	貝殻状刃器	黒曜石	24.7	22.2	5.9	2.59	7		冷山 (TSTY)
8	255	DTA 255	Ⅳ	貝殻状刃器	黒曜石	25.3	21.3	6.5	2	6		冷山 (TSTY)
9	256	DTA 256	Ⅳ	貝殻状刃器	黒曜石	32.4	21.9	6	3.12	1		冷山 (TSTY)
10	257	DTA 257	Ⅳ	貝殻状刃器	黒曜石	25.7	20.1	6.3	2.55	6		冷山 (TSTY)
11	259	DTA 259	Ⅳ	貝殻状刃器	黒曜石	28.4	41.3	9.6	9.38	7		冷山 (TSTY)
52-12	268	DTA 268	Ⅰ	貝殻状刃器	黒曜石	30.7	34.2	8.7	9.19	1		冷山 (TSTY)
13	275	DTA 275	Ⅲ a	貝殻状刃器	黒曜石	39.5	40.1	8.4	8.1	3		冷山 (TSTY)
14	294	DTA 294	Ⅳ	貝殻状刃器	黒曜石	19.4	17.7	5.4	1.11	6		冷山 (TSTY)
15	308	DTA 308	Ⅳ	貝殻状刃器	黒曜石	29	32.1	10.1	5.26	1		冷山 (TSTY)
16	312	DTA 312	Ⅳ	貝殻状刃器	黒曜石	24.3	27.6	7	3.83	1	19	冷山 (TSTY)
17	315	DTA 315	Ⅵ	貝殻状刃器	黒曜石	17.1	25.2	7.4	2.27	7		冷山 (TSTY)
18	318	DTA 318	Ⅳ	貝殻状刃器	黒曜石	16.5	26.7	7.6	3.28	6		冷山 (TSTY)
19	324	DTA 324	Ⅵ	貝殻状刃器	黒曜石	24.6	41.3	9	5.64	3		冷山 (TSTY)
20	341	DTA 341	Ⅲ a	貝殻状刃器	黒曜石	20.3	29	5.7	2.39	7		冷山 (TSTY)
21	353	DTA 353	Ⅳ	貝殻状刃器	黒曜石	29.3	33.3	11	9.38	7	22	冷山 (TSTY)
22	391	DTA 391	Ⅳ	貝殻状刃器	黒曜石	29	37.6	7.9	6.21	7	20	冷山 (TSTY)
53-23	392	DTA 392	Ⅳ	貝殻状刃器	黒曜石	21.8	19.8	6	2.14	1		冷山 (TSTY)
24	403	DTA 403	Ⅳ	貝殻状刃器	黒曜石	45	51.8	22.1	25.47	3		冷山 (TSTY)
25	406	DTA 406	Ⅳ	貝殻状刃器	黒曜石	29.1	31.9	7.2	5.55	7		冷山 (TSTY)
26	408	DTA 408	Ⅳ	貝殻状刃器	黒曜石	31	31.8	8.1	6.47	7	16	冷山 (TSTY)
27	426	DTA 426	Ⅳ	貝殻状刃器	黒曜石	21.2	32.1	8.3	5.07	1		冷山 (TSTY)
28	454	DTA 454	Ⅳ	貝殻状刃器	黒曜石	27.5	27.1	8	4.52	7		冷山 (TSTY)
29	455	DTA 455	Ⅳ	貝殻状刃器	黒曜石	18.5	17.4	6.9	1.83	1		冷山 (TSTY)
30	633	DTA 633	Ⅳ	貝殻状刃器	黒曜石	30.2	22.9	7.6	3.97	6		冷山 (TSTY)
31	643	DTA 643	Ⅳ	貝殻状刃器	黒曜石	18.2	23.2	7.2	1.95	1		冷山 (TSTY)
32	645	DTA 645	Ⅳ	貝殻状刃器	黒曜石	27.1	22	8.8	3.94	3		冷山 (TSTY)
54-33	676	DTA 676	Ⅳ	貝殻状刃器	黒曜石	25.9	19.2	9.8	3.73	2		冷山 (TSTY)
34	681	DTA 681	Ⅳ	貝殻状刃器	黒曜石	18	21.1	5.1	1.36	1	5	冷山 (TSTY)
35	862	DTA 862	Ⅳ	貝殻状刃器	黒曜石	26.7	35.9	9	6.23	3	9	冷山 (TSTY)
36	881	DTA 881	Ⅳ	貝殻状刃器	黒曜石	14.2	25.5	5	1.17	1	5	冷山 (TSTY)
37	886	DTA 886	Ⅳ	貝殻状刃器	黒曜石	29.7	30.5	8.3	5.16	1		冷山 (TSTY)
38	899	DTA 899	Ⅳ	貝殻状刃器	黒曜石	26.6	34.6	6.2	4.69	7		冷山 (TSTY)
39	902	DTA 902	Ⅳ	貝殻状刃器	黒曜石	21.4	25.3	5.7	2.32	6		冷山 (TSTY)
40	903	DTA 903	Ⅳ	貝殻状刃器	黒曜石	25.3	15.2	6	1.97	7		冷山 (TSTY)
41	904	DTA 904	Ⅳ	貝殻状刃器	黒曜石	25.3	18.9	5.3	1.91	1	17	冷山 (TSTY)
42	910	DTA 910	Ⅳ	貝殻状刃器	黒曜石	20.8	23.9	6.6	2.99	6		冷山 (TSTY)
43	931	DTA 931	Ⅳ	貝殻状刃器	黒曜石	17.7	32	7.2	3.44	2	4	冷山 (TSTY)
55-44	334	DTA 334	Ⅳ	削器	黒曜石	18.5	26.6	9.9	2.94	2		冷山 (TSTY)
45	656	DTA 656	Ⅳ	削器	黒曜石	23.9	28.1	9.4	3.88	3		冷山 (TSTY)
46	895	DTA 895	Ⅳ	削器	黒曜石	38.2	29.3	9.3	6.32	7	15	冷山 (TSTY)
47	926	DTA 926	Ⅳ	削器	黒曜石	33	60.8	13.8	14.49	7		冷山 (TSTY)
56-48	430	DTA 430	Ⅳ	厚刃搔器	黒曜石	35.4	34.5	27.7	21.89	7		冷山 (TSTY)
49	321	DTA 321	Ⅳ	石核	黒曜石	38.3	43.8	31.1	37.21	1	5	冷山 (TSTY)
50	411	DTA 411	Ⅳ	石核	黒曜石	22	42.9	26.1	16.66	2	2	冷山 (TSTY)



第47図 中央拡張区・テストピット配置図および土壌サンプル採取地点



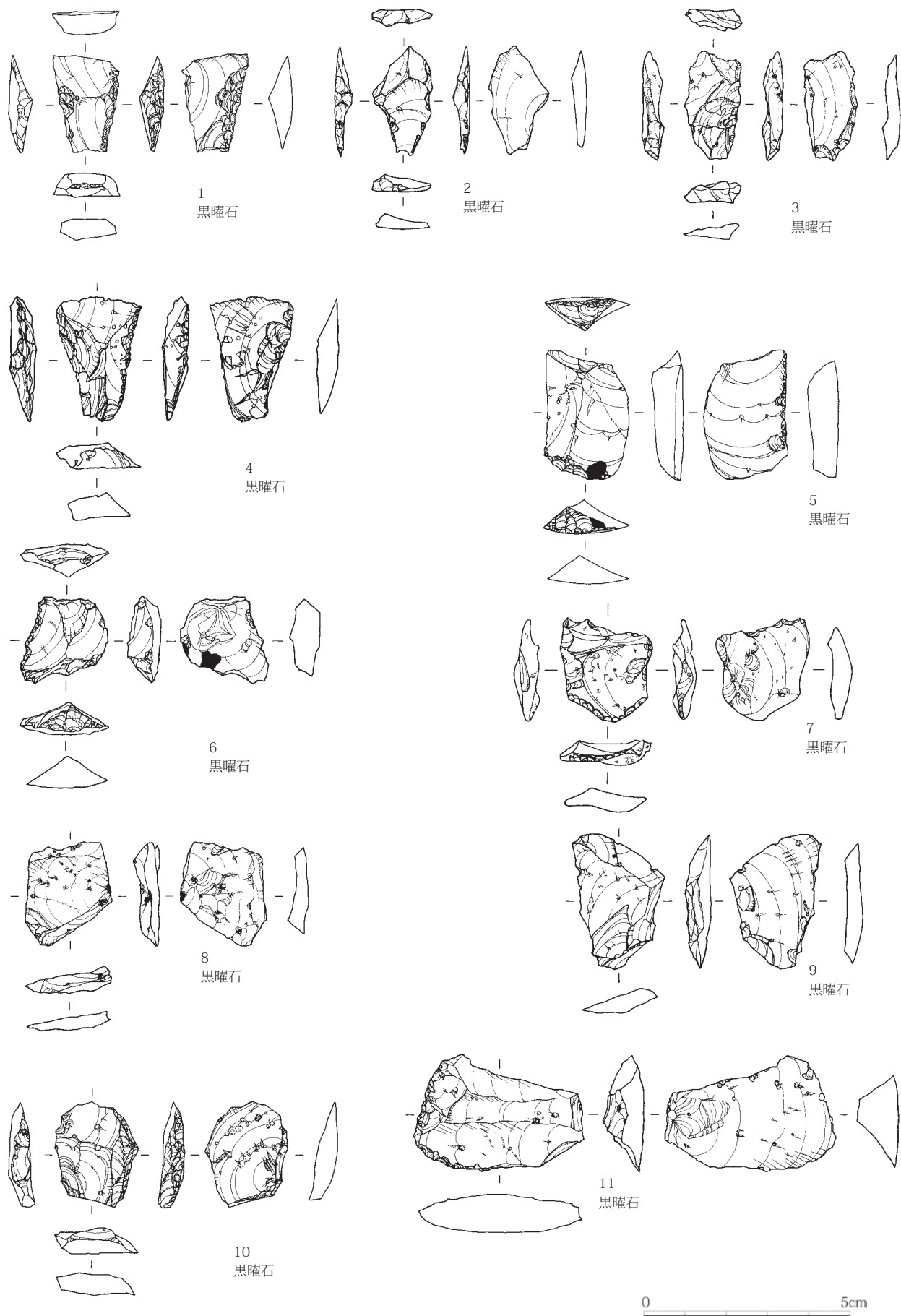
第48図 旧石器時代遺物分布図(1)



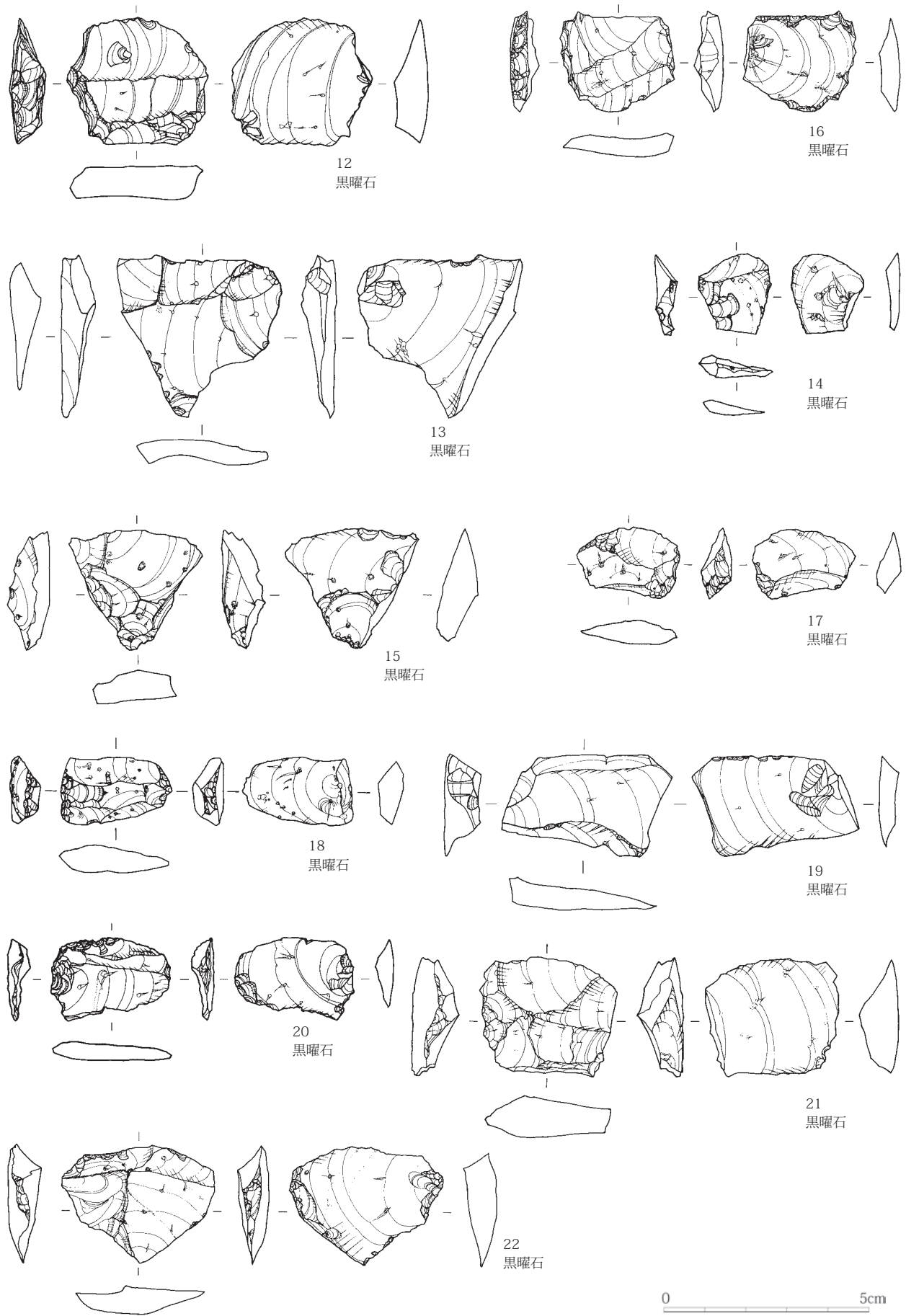
第 49 図 旧石器時代遺物分布図 (2)



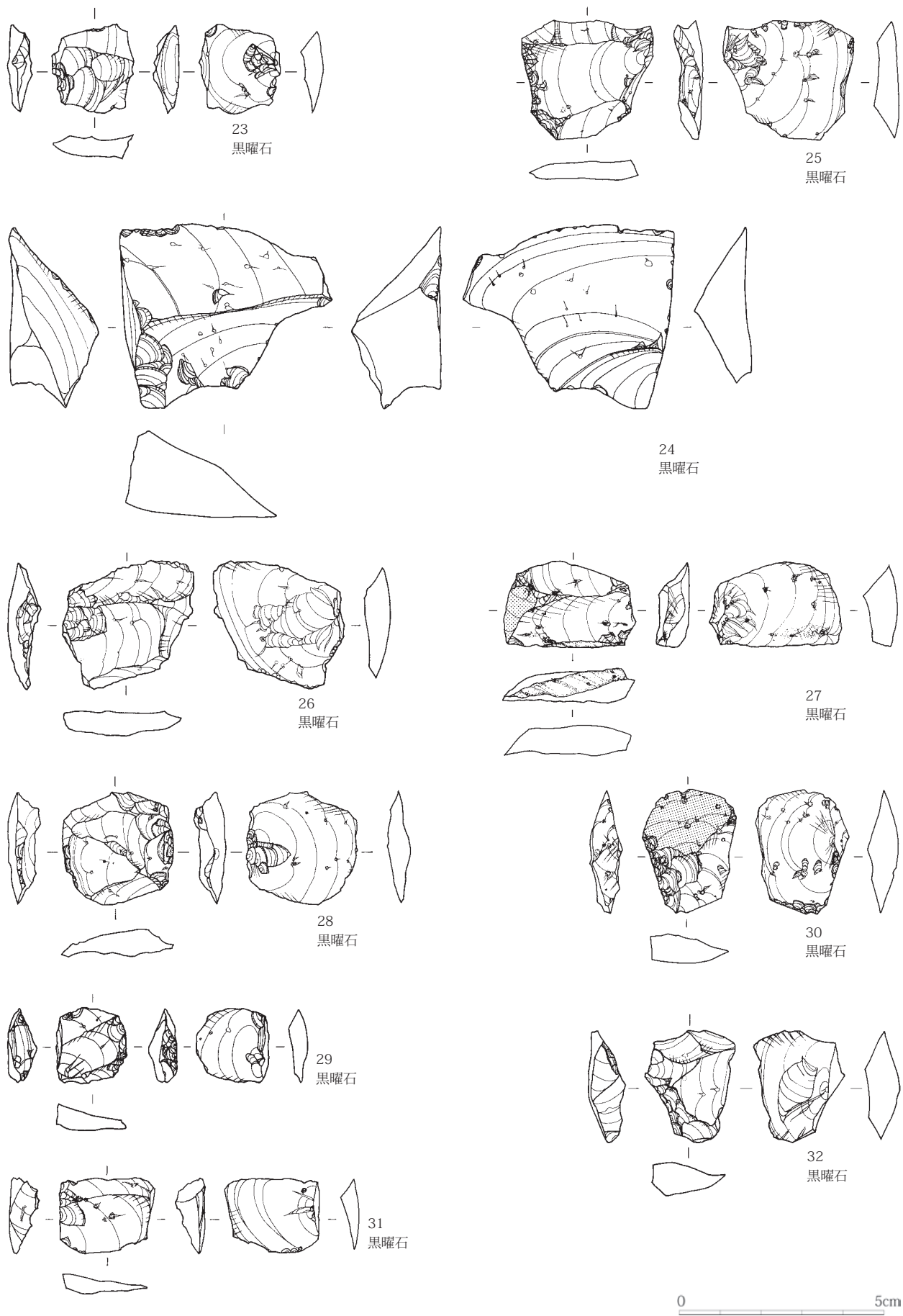
第50図 旧石器時代遺物分布図(3)



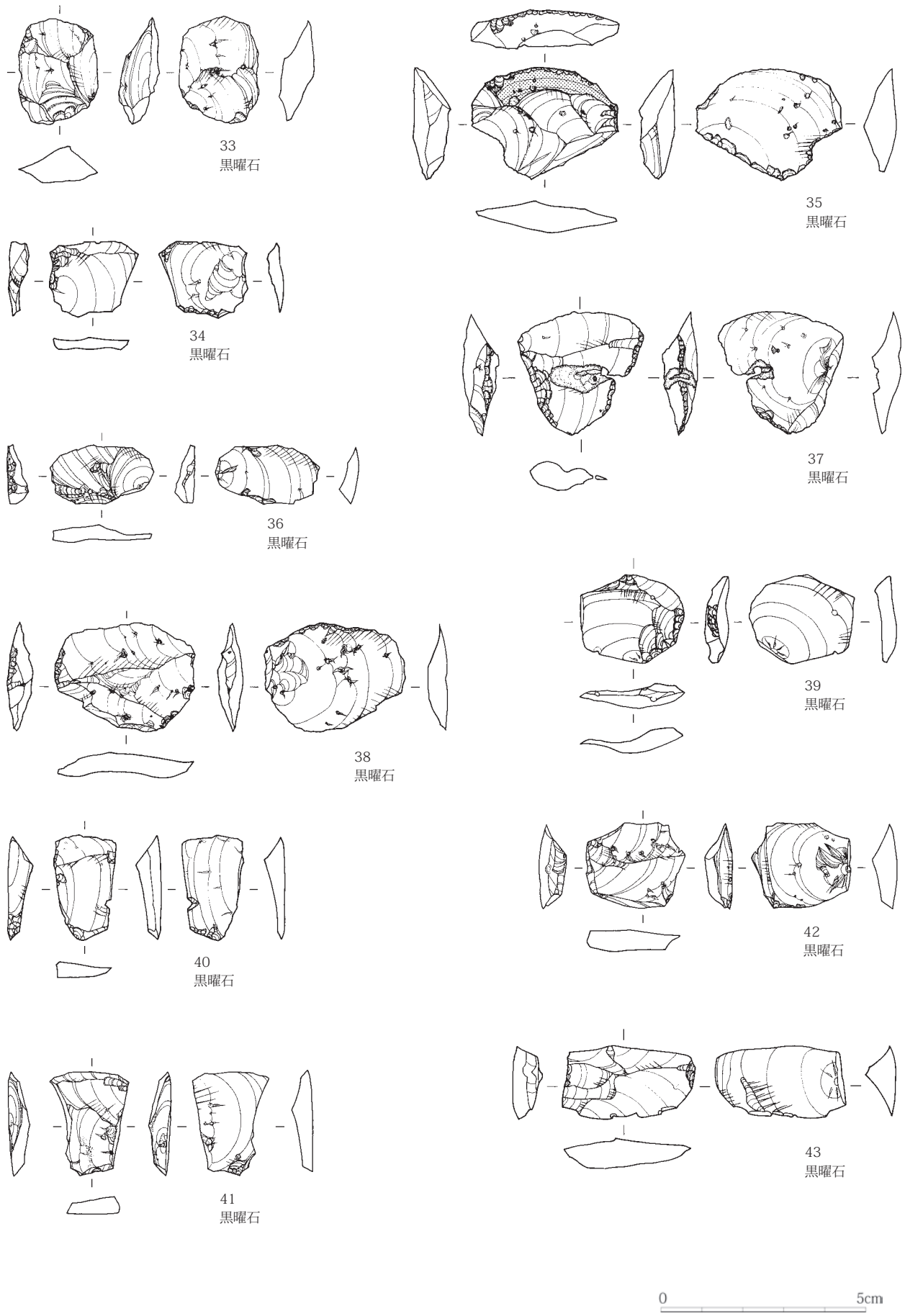
第51図 旧石器時代の石器(1)



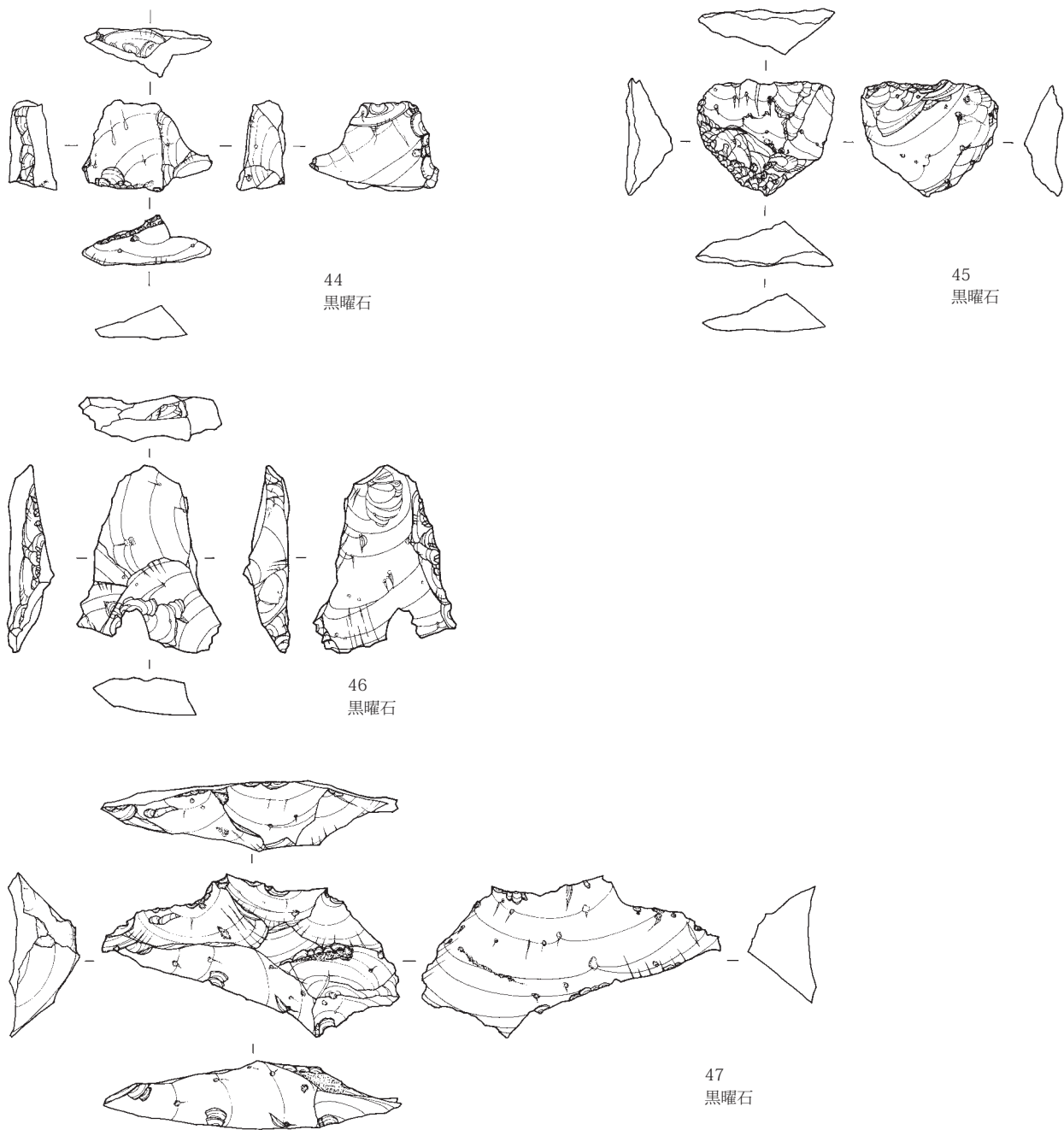
第 52 図 旧石器時代の石器 (2)



第53図 旧石器時代の石器(3)

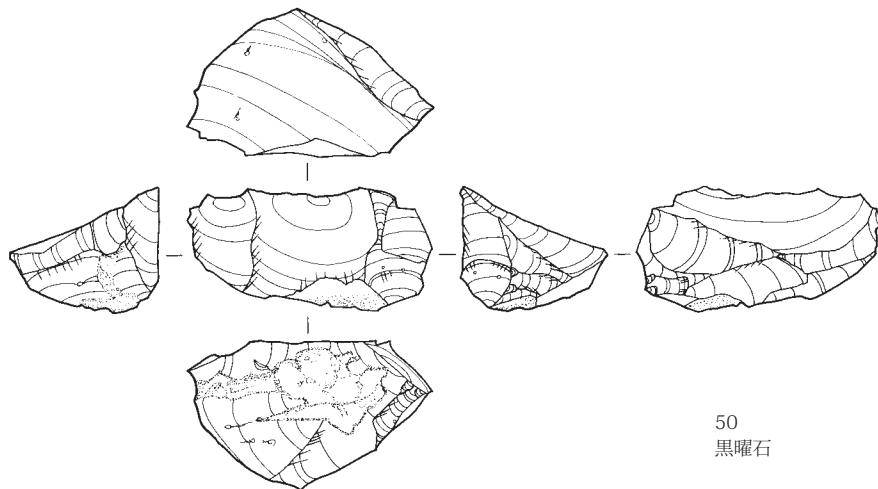
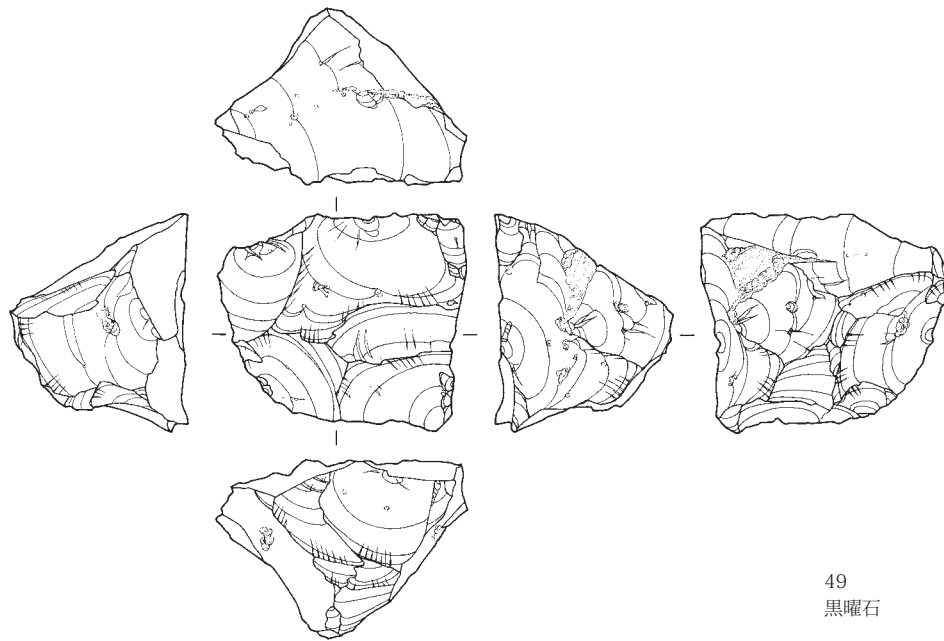
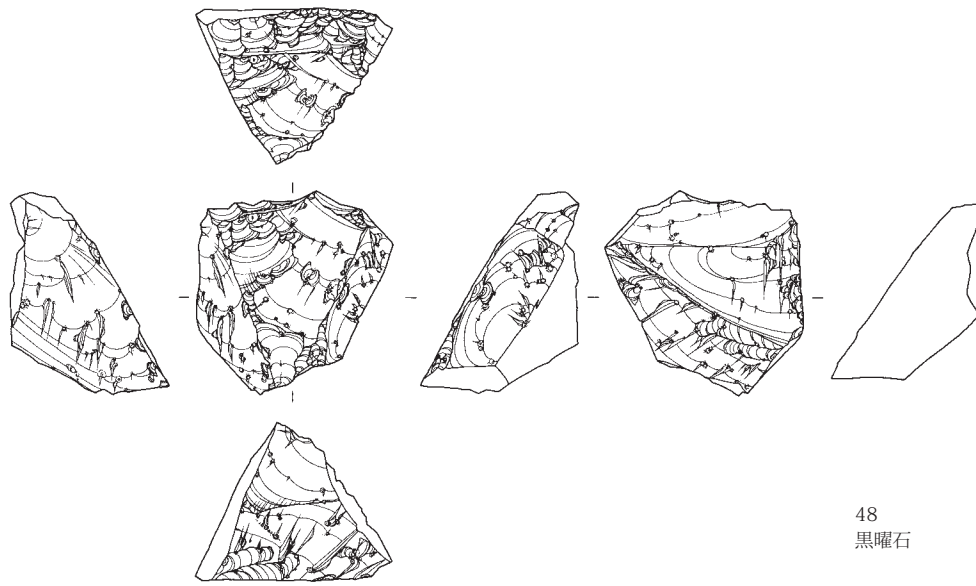


第54図 旧石器時代の石器(4)



0 5cm

第55図 旧石器時代の石器（5）



0 5cm

第56図 旧石器時代の石器(6)

3 縄文～弥生時代の遺構と遺物

(1) 遺構

当該期の遺構は、縄文時代前期前葉の竪穴建物跡1軒である。

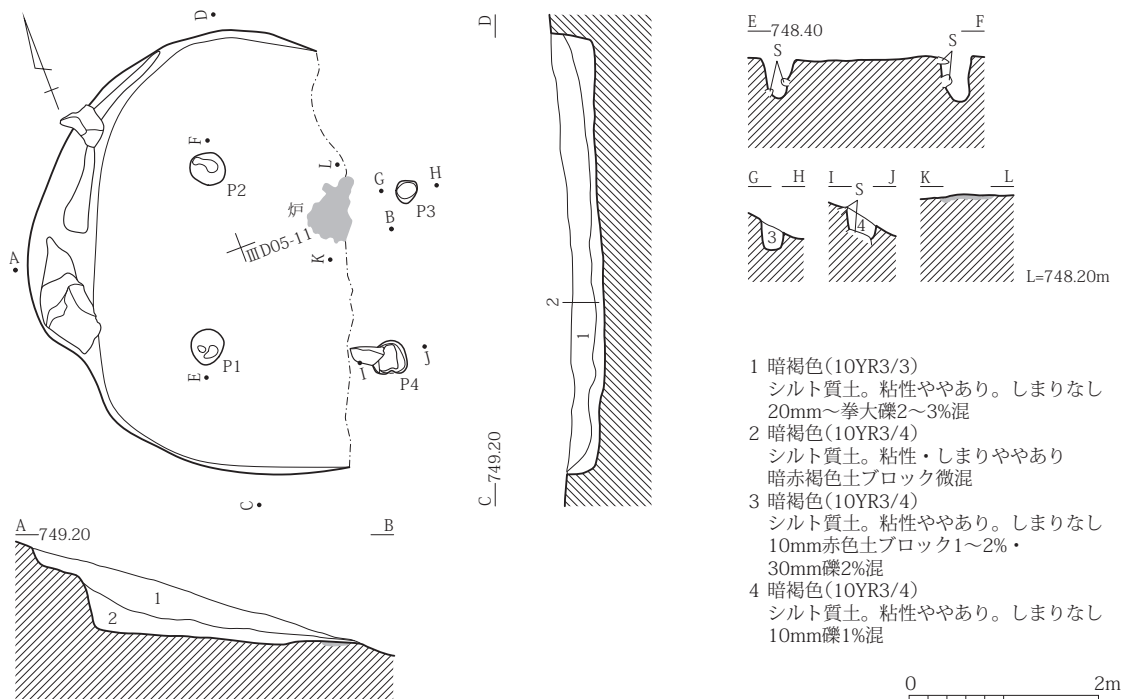
S B 01 (第57図、P L 11)

位置：1 a区、ⅢD 05 - 11 グリッド。検出：基本層序第V層上面で検出した。重複関係：なし。埋土：2層が堆積する。壁際において、断面三角状に堆積する2層全体を1層が埋積する。1・2層は基本的に暗褐色シルト質土だが、礫や暗赤褐色シルトブロックの有無や量に違いがある。また、1層よりも2層の方がしまる。形状・規模：平面形は南東部の壁が削平され不明確だが、残存する壁や柱穴配置からみて、隅丸方形もしくは隅丸長方形と考える。北西部の壁がテラス状に張り出す。規模は北東・南西方向で4.6 m、北西・南東方向は北西部の張出しから柱穴P 3・4までの間で4 mを測る。床・壁：竪穴の掘方を平坦に整え床面とする。硬化面や貼床は確認されていない。残存部の壁高は35～45cmで、垂直に立ち上がる。最も残存している北西部の張出し付近は、張出し上端から床面までで80cmを測り、北東・南東方向へ移るに従い削平される。また、張出し付近には地山の巨礫があり、壁はその内側を回る。柱穴：方形に並ぶP 1～4を支柱穴と考える。形状は不正円形で直径30～40cm、深さ40～46cmを測る。P 3は直径22cm、深さ30cmとほかの柱穴よりも小形だが、削平の影響を受けている可能性が高い。周溝：なし。炉：柱穴P 2～3の間で検出された長軸70cm、短軸30cmの被熱部を地床炉と考える。明確な掘込みはない。遺物：埋土1～2層より、縄文時代前期前葉の土器および石器・石製品（石鏃、石鏃未製品、石錐、二次加工がある剥片、微細な剝離がある剥片、両極石器、凹石、石核、原石、剥片、玦状耳飾）が出土した。土器は全て小破片で、器形復元が可能なものは存在しない。時期：不明確だが、埋土1～2層で出土した土器の時期をもって、縄文時代前期前葉と推測する。

(2) 遺物

① 土器 (第58・59図、第18・19表)

竪穴建物跡S B 01 から、縄文時代前期前葉の土器が出土した。遺構外では、2・3区の基本層序第I～Ⅲ層で縄文時代前期前葉・後期初頭、弥生時代前～中期前半の土器が出土した。本稿では、竪穴建物跡



第57図 S B 01 遺構図

S B 01 出土土器から、縄文時代前期前葉の特徴を良好に備える 21 点と、遺構外出土で遺構の時期としては存在しない縄文時代後期初頭、弥生時代前～中期前半の土器を報告する。

S B 01 出土土器 (第 58 図 1～21、第 18 表、P L 13)

1～12 は羽状縄文土器群の二ツ木式およびそれに伴う縄文施文の土器である。1・3・4 は口縁部で、1 は平縁を呈し無節原体による横位斜構成の縄文を施文する。2 は 1 と同一個体の胴部である。3 は平縁の口唇部に突起を貼付し、単節の可能性が高い原体で横位斜構成の縄文を施文する。4 は波状口縁で、単節原体による横位羽状構成の縄文を施文する。不鮮明だが、口唇部には刺突を施すものと推測する。5～12 は胴部で、5 は無節原体による斜位～横位斜構成の縄文、6 は多段ループ文、7・8 は単節原体による横位斜構成の縄文で、7 にはループ文を、8 には結節を施す。9～11 は緩い結節回転の縄文を施文する。9・10 は同一個体の胴部である。12 は上端に刻みをもつ 2 条の細隆帯を貼付し、細隆帯間には円形刺突を施す。細隆帯以下は、緩い結節回転の縄文と単節原体による横位羽状構成の縄文を施文する。

13～21 は無文土器群の中越式で、内面には指頭圧痕の可能性が高い凹凸が残る。13 は口縁部で、ヘラ状工具による細く浅い単沈線で斜格子目文を描く。14 は緩やかな波状口縁、15 は頸部付近、16・17 は胴下部で、同一個体の可能性が高い。14・15 に斜格子目文を描いていない点から、無文の土器と考える。18～20 は無文の胴部、21 は無文の底部である。中越式は基本的に無繊維だが、14～17・19・21 は胎土に繊維を含む。

遺構外出土土器 (第 59 図 22～25、第 19 表)

22～24 は 2 区、25 は 3 区から出土した。22・23 は縄文時代後期初頭の土器である。22 は口縁部で、波状口縁の上端が屈曲し、波頂部から曲線状の隆帯を貼付する。称名寺式の茂沢類型であろう。23 は胴部で沈線により J 字文を描く。称名寺式であろう。24・25 は弥生時代前～中期前半の甕形土器と考える。24 は口縁部で、斜位方向の条痕を施す。25 は胴部で、斜位方向の櫛描文を描き、内面は横位方向のハケ調整を施す。

第 18 表 S B 01 土器観察表

図版 番号	P L 番号	管理 番号	出土位置	時 期	器種	部位	文 様 等	色 調		備 考
								外面	内面	
58-1	13	006	SB01 南西、 北西 2 層	縄文前期前葉	深鉢	口縁	無節縄文 (横位斜構成)	10YR 4/3	10YR 7/4	含繊維 2 と同一
-2	13	007	SB01 No.7・28、 北西、南西 2 層	縄文前期前葉	深鉢	胴	無節縄文 (横位斜構成)	10YR 4/3	10YR 6/4	含繊維 1 と同一
-3	13	001	SB01 南西 2 層	縄文前期前葉	深鉢	口縁	突起、単節縄文 (横位斜構成)	7.5YR 6/6	10YR 7/6	含繊維
-4	13	019	SB01 南西 1 層	縄文前期前葉	深鉢	口縁	波状口縁、口唇部刺 突、単節縄文 (横位羽状構成)	10YR 5/4	10YR 5/2	含繊維
-5	13	004	SB01 北東 1 層、 北東、南西	縄文前期前葉	深鉢	胴	無節縄文 (斜位・横位斜構成)	2.5YR 3/1	10YR 6/4	含繊維
-6	13	002	SB01 南西 2 層	縄文前期前葉	深鉢	胴	多段ループ文	7.5YR 6/8	7.5YR 6/8	含繊維
-7	13	003	SB01 北西 2 層	縄文前期前葉	深鉢	胴	単節縄文 (横位斜構 成)、ループ文	5YR 5/8	7.5YR 6/8	含繊維
-8	13	008	SB01 南西 1・ 2 層北西 2 層	縄文前期前葉	深鉢	胴	単節縄文 (横位斜構 成)、結節	7.5YR 5/6	10YR 4/6	含繊維
-9	13	010	SB01 南西 1 層	縄文前期前葉	深鉢	胴	緩い結節回転の縄文	10YR 5/6	2.5YR 3/1	含繊維 二ツ木式 10 と同一
-10	13	010	SB01 北東、南西	縄文前期前葉	深鉢	胴	緩い結節回転の縄文	2.5YR 4/2	2.5YR 3/1	含繊維 二ツ木式 9 と同一
-11	13	014	SB01 北西 2 層、北西	縄文前期前葉	深鉢	胴	緩い結節回転の縄文	5YR 5/6	10YR 5/4	含繊維 二ツ木式

図版番号	P L 番号	管理番号	出土位置	時 期	器種	部位	文 様 等	色 調		備 考
								外面	内面	
58-12	13	015	SB01 南西1層・2層	縄文前期前葉	深鉢	胴	細隆帯、円形刺突、緩い結節回転の縄文、単節縄文（横位羽状構成）	10YR 5/6	10YR 4/3	含繊維 二ツ木式
-13	13	017	SB01 南西2層	縄文前期前葉	深鉢	口縁	単沈線による斜格子目文、内面指頭圧痕	10YR 4/2	10YR 3/2	中越式
-14	13	012	SB01 北西1層	縄文前期前葉	深鉢	口縁	波状口縁、無文、内面指頭圧痕	10YR 2/1	10YR 2/1	含繊維 中越式 15~17と同一
-15	13	012	SB01 北西2層	縄文前期前葉	深鉢	頸	無文、内面指頭圧痕	10YR 2/1	10YR 2/1	含繊維 中越式、14・ 17・18と同一
-16	13	012	SB01 北西2層	縄文前期前葉	深鉢	胴	無文、内面指頭圧痕	10YR 2/1	10YR 2/1	含繊維 中越式、14・ 15・17と同一
-17	13	012	SB01 No.24	縄文前期前葉	深鉢	胴	無文、内面指頭圧痕	10YR 2/1	10YR 2/1	含繊維 中越式 14~16と同一
-18	13	005	SB01 北西	縄文前期前葉	深鉢	胴	無文、内面指頭圧痕	10YR 6/6	10YR 5/3	中越式
-19	13	018	SB01 北東1層	縄文前期前葉	深鉢	胴	無文、内面指頭圧痕	25YR 3/2	10YR 5/4	含繊維、中越式
-20	13	020	SB01 南西1層	縄文前期前葉	深鉢	胴	無文、内面指頭圧痕	10YR 6/6	10YR 4/4	中越式
-21	13	013	SB01 No.26、北東北東 1・2層	縄文前期前葉	深鉢	底部	無文、内面指頭圧痕	10YR 6/6	19YR 7/3	含繊維 中越式

第19表 遺構外出土土器観察表

図版番号	P L 番号	管理番号	出土位置	時 期	器種	部位	文 様 等	色 調		備 考
								外面	内面	
59-22	—	033	2区	縄文後期初頭	深鉢	口縁	隆帯	5YR 4/6	5YR 5/8	関沢類型
-23	—	034	2区	縄文後期初頭	深鉢	胴	J字文（沈線）、単節縄文	7.5YR 5/8	5YR 5/6	称名寺式
-24	—	028	2区	弥生前~中期	甕	口縁	条痕	5YR 4/6	5YR 4/8	
-25	—	022	3区	弥生前~中期	甕	胴	条痕	10YR 6/4	7.5YR 5/4	

② 石器・石製品（第59~61図、第20表）

遺構から800点、遺構外から364点、合計1164点が出土した。遺構出土の石器・石製品は竪穴建物跡SB01から出土した縄文時代前期前葉の石器である。遺構外出土の石器は、1~3区の基本層序第I~III層において出土し、前期前葉のほか、縄文時代後期初頭と弥生時代前~中期前半の土器が出土しているので、そうした時期の石器を含む。

本稿では石器・石製品を器種単位で報告し、実測図の掲載については、各器種の完形品もしくは特徴を備えるものを選出した。各器種の出土点数と石材は第19・20表に示した。器種分類は、『川路大明神原遺跡』（鶴田ほか2010）を参考に行った。

石鏃・石鏃未製品（第59図1~24、P L 13）

石鏃はSB01から19点出土したほか、遺構外から28点が出土し、18点を掲載した。1~15は無茎、16~18は有茎の石鏃で、無茎は基部を挟り込む深度と側縁部の形状に違いがある。全体的な無茎と有茎の数は、無茎が44点、有茎が3点を数える。石材は黒曜石が圧倒的に多く、チャートは遺構外出土の無茎2点に限られる。竪穴建物跡SB01出土のものは、全て無茎で黒曜石を素材とする。有茎の3点は遺構外からの出土であり、縄文時代後期以降の可能性が高い。

石鏃未製品は15点中6点を掲載した。19~24は石鏃未製品と考えるもので、製品よりも加工剥離が粗く厚手で、先端部や基部の作出しが完全ではない。20~23は粗い加工剥離を施し、形状を整え始めた段階の未製品と推測でき、19・24はさらに先端部の作出しや基部の挟込みが行われたものである。石材は全て黒曜石である。

磨製石鏃（第59図25、P L 13）

掲載した1点が遺構外から出土した。25は基部付近に穿孔があり、両側縁部には刃部を作出している。弥生時代前～中期前半の土器が出土しているため、その時期のものであろう。石材は泥岩である。

有茎尖頭器 (第59図26、P L 13)

掲載した1点が、遺構外から出土した。26は平坦剥離により形状を整えるが、先端部と先端部に近い一側縁部および有茎部に二次的な加工剥離を施すことから二次利用の可能性が高い。石材は黒曜石である。

石錐 (第59図27・28、P L 13)

4点中、S B 01から出土した2点を掲載した。27・28はつまみ部がなく、一端に錐部を有する。石材は黒曜石である。

スクレイパー (第60図29)

遺構外から出土した2点中、1点を掲載した。29は細かな加工剥離で搔器的な刃部を作り出す。石材は黒曜石である。実測図を掲載していないもう1点は、削器的な刃部を作り出すもので、石材は無斑晶質安山岩である。

二次加工がある剥片 (第60図30・31)

S B 01から9点、遺構外から3点出土し2点を掲載した。特定の形状を作らず、様々な部位に様々な形態の二次加工を施すものを二次加工がある剥片とした。30・31は横長剥片が素材で31は片面に自然面を残す。石材は全て黒曜石である。

微細な剥離がある剥片 (第60図32)

S B 01から5点、遺構外から4点出土し1点を掲載した。鋭利な縁辺に、使用痕の可能性が高い微細な剥離が連続するものを、微細な剥離がある剥片に分類した。32は剥片下部に、連続する微細な剥離が連続する。石材は32が無斑晶質安山岩、実測図を掲載していない8点は黒曜石である。

両極石器 (第60図33～36)

S B 01から4点、遺構外から19点出土し4点を掲載した。両極打法による剥離が両端部に残るもので、両極打法を短辺に対して行う33と長辺に対して行う34～36が存在する。石材は33～35が黒曜石、36が無斑晶質安山岩で、実測図を掲載していない19点は18点が黒曜石、1点がチャートである。

摩耗痕がある剥片 (第60図37・38、P L 13)

遺構外から掲載した2点が出土した。使用痕の可能性が高い摩耗痕(実測図のトーン部分)が、残る剥片である。37は一側面部の表裏面に、側面部から入る剥離の稜を潰す摩耗痕が残る。38は上端部のほか、右側面部の一部に平坦面を形成するような摩耗痕と、側面部から入る剥離の稜を潰す摩耗痕が残る。また、左側面部は自然面だが、その一部にも摩耗痕が残る。石材は37が砂岩、38が泥岩である。

打製石斧 (第61図39～41)

遺構外から出土した8点中3点を掲載した。39は側縁部が並行していることから、短冊形の打製石斧であろう。40・41は欠損範囲が広く形状は不明である。石材は39～41が黒色安山岩で、実測図を掲載していない5点は4点が黒色安山岩、1点が泥岩である。

石核 (第61図34～38)

S B 01から34点、遺構外から18点が出土し5点を掲載した。自然面を打面とするものと、調整剥離により打面を作り出すものがある。42～44・46は自然面を打面とし42・43は1面、44は2面、46は3面に剥片の剥離が残る。45は調整剥離で平坦な打面を作り出し、2面に剥片の剥離が残る。石材は黒曜石だが、実測図を掲載していない石核1点にチャートが存在する。

凹石 (第61図47)

遺構外から掲載した1点が出土した。礫素材に、使用痕と推測される凹痕が残るものである。全体の

1/2以上を欠損するが、楕円形の偏平礫を素材とし、両平面に凹痕を残すほか、側面部や上端部に著しい敲打痕がある。また、平面の片面には磨痕が残る。石材は安山岩である。

原石

図示していないが、竪穴建物跡SB01の埋土から黒曜石原石2点と、遺構外から黒曜石とチャートの原石各1点が出土した。竪穴建物跡SB01から出土した2点のうち1点は塊状の原石で、長さ4.1cm、幅3.2cm、厚さ1.4cm、重さ15.8gを測る。もう1点は板状の原石で、長さ3.7cm、幅2.0cm、厚さ1.0cm、重さ10.5gを測る。遺構外出土のうち、黒曜石の原石は板状で長さ3.4cm、幅2.6cm、厚さ1.3cm、重さ14.2gを測る。チャートの原石は塊状で長さ4.8cm、幅2.9cm、厚さ2.8cm、重さ40.3gを測る。

塊状耳飾 (第61図48、PL13)

第20表 石器観察表 ()は残存値を示す

図版番号	PL番号	管理番号	出土位置	器種	石材	判別群	法量 (cm, g)			
							長さ	幅	厚さ	重さ
59-1	13	1131	2区 III a層	石鏃	黒曜石	諏訪星ヶ台 (SWHD)	(14.0)	(16.0)	3.0	(0.4)
-2	13	1145	2区 III a層	石鏃	黒曜石	諏訪星ヶ台 (SWHD)	15.0	12.0	3.0	0.4
-3	13	1127	2区 I層	石鏃	黒曜石	諏訪星ヶ台 (SWHD)	(13.0)	(12.0)	4.0	(0.5)
-4	13	1147	2区 I層	石鏃	黒曜石	土屋橋西 (WDTN)	(17.0)	(10.0)	3.0	(0.3)
-5	13	1066	SB01 南西1層	石鏃	黒曜石		(17.7)	(10.2)	3.0	(0.4)
-6	13	1025	SB01 南西1層	石鏃	黒曜石		18.7	13.4	4.3	0.7
-7	13	1088	SB01 No.20	石鏃	黒曜石		18.4	(13.6)	3.3	(0.4)
-8	13	1031	SB01 北東2層	石鏃	黒曜石		17.5	13.8	3.2	0.6
-9	13	1132	2区 III a層	石鏃	黒曜石	小深沢 (WDKB)	(22.0)	17.0	3.0	(0.6)
-10	13	1030	SB01 北東2層	石鏃	黒曜石		22.5	15.6	2.6	0.6
-11	13	1020	SB01 南東1層	石鏃	黒曜石		22.4	13.9	3.8	0.6
-12	13	1138	2区 I層	石鏃	黒曜石		(25.0)	15.0	4.0	(1.1)
-13	13	1123	2区 III a層	石鏃	チャート		(26.0)	(16.0)	5.0	(1.6)
-14	13	1129	2区 II層	石鏃	黒曜石	黒岩橋 (HNKI)	(20.0)	(16.0)	3.0	(0.8)
-15	13	1130	2区 III a層	石鏃	黒曜石	諏訪星ヶ台 (SWHD)	(19.0)	(17.0)	3.0	(1.1)
-16	—	1126	2区 I層	石鏃	黒曜石	諏訪星ヶ台 (SWHD)	(12.0)	8.0	2.0	(0.2)
-17	—	1139	2区 III a層	石鏃	黒曜石	諏訪星ヶ台 (SWHD)	21.0	12.0	3.0	0.6
-18	—	1122	2区 I層	石鏃	黒曜石	土屋橋西 (WDTN)	(15.0)	17.0	4.0	(0.6)
-19	13	1015	SB01 南西	石鏃未製品	黒曜石		18.1	12.9	5.8	1.0
-20	13	1039	SB01 南西2層	石鏃未製品	黒曜石		21.3	15.1	5.1	1.4
-21	13	1028	SB01 南西1層	石鏃未製品	黒曜石		23.7	15.0	4.3	1.4
-22	13	1078	SB01 北西2層	石鏃未製品	黒曜石		22.8	16.2	5.9	2.0
-23	—	1038	SB01 南西2層	石鏃未製品	黒曜石		25.4	18.5	6.7	2.8
-24	13	1099	1 a区 表土	石鏃未製品	黒曜石		21.1	18.7	5.7	1.3
-25	13	1148	2区	磨製石鏃	泥岩		(18.8)	(18.2)	2.3	(1.2)
-26	13	1097	1 a区 表土	有茎尖頭器	黒曜石		43.2	19.2	5.3	4.5
-27	13	1022	SB01 南西1層	石鏃	黒曜石		18.5	6.8	5.3	0.6
-28	13	1002	SB01 北東	石鏃	黒曜石		18.6	8.4	5.1	0.5
60-29	—	1093	1区 6トレンチ	スクレイパー	黒曜石		22.0	17.0	7.5	2.7
-30	—	1041	SB01 南西2層	二次加工剥片	黒曜石		18.4	(27.2)	3.7	(1.8)
-31	—	1013	SB01 南東	二次加工剥片	黒曜石		18.8	35.8	6.7	4.1
-32	—	1034	SB01 南西2層	微細剝離剥片	無斑晶質安山岩		35.0	37.4	7.8	7.3
-33	—	1102	2区	両極石器	黒曜石		19.5	24.5	7.8	3.4
-34	—	1011	SB01 南東	両極石器	黒曜石		26.3	16.1	7.7	3.1
-35	—	1065	SB01 南西1層	両極石器	黒曜石		27.0	17.2	7.8	4.3
-36	—	1114	1 a区	両極石器	無斑晶質安山岩		43.8	34.3	13.6	21.6
-37	13	1108	1 a区	摩耗痕がある剥片	砂岩		22.0	70.1	6.8	16.5
-38	13	1107	2区 III a層	摩耗痕がある剥片	砂岩		127.0	56.0	13.0	125.1
61-39	—	1118	2区 III a層	打製石斧	黒色安山岩		92.0	(41.0)	14.0	(75.7)
-40	—	1119	2区 I層	打製石斧	黒色安山岩		(77.0)	52.0	11.0	(73.6)
-41	—	1115	2区 I層	打製石斧	黒色安山岩		(57.0)	42.0	11.0	(36.3)
-42	—	1046	SB01 南西2層	石核	黒曜石		27.5	53.6	12.0	14.0
-43	—	1003	SB01 北東	石核	黒曜石		25.6	38.9	16.5	17.1
-44	—	1069	SB01 北西2層	石核	黒曜石		29.4	24.7	23.5	15.4
-45	—	1049	SB01 南西2層	石核	黒曜石		26.0	42.8	22.4	20.1
-46	—	1063	SB01 南西1層	石核	黒曜石		37.6	52.9	27.3	56.5
-47	—	1068	SB01 南西1層	凹石	安山岩		(76.0)	73.8	44.3	(251.9)
-48	13	1084	SB01 No.1	塊状耳飾	メノウ		29.4	(17.6)	7.4	(5.2)

S B 01 から掲載した1点が出土した。全体の約1/2を欠損するが、平面形は隅丸長方形と推測でき、断面形は長方形を呈する。孔が中央より上部にあり切目が長い。上部に1か所の穿孔がある。石材はメノウである。

器種組成と石材

第21表は器種と出土点数を示す。竪穴建物跡S B 01 出土の石器・石製品は合計800点で、711点が剥片類である。剥片類以外の89点は、石鏃・石鏃未製品が31点で全体の35%、石核が34点で全体の38%を占める。それ以外は、二次加工がある剥片が9点で10%となるほかは全て5%以下であった。

遺構外出土石器は合計364点で、271点が剥片類である。剥片類以外の93点は、石鏃・石鏃未製品が31点で最も多く33%を占め、以下、両極石器が19点で20%、石核が18点で19%、打製石斧が8点で8%と続き、そのほかは全て5%以下であった。

第22表は、出土した全ての石器の器種と石材の関係を示す。確認された石材は黒曜石、安山岩、無斑晶質安山岩、チャート、砂岩、泥岩、黒色安山岩、メノウの8種類である。黒色安山岩は、欠損面が黒色を呈するものを一括したが、風化が著しいものについては泥岩との区別が困難であった。最も多い石材は黒曜石で、1164点中1112点を数え、全体の96%を占める。黒曜石以外の石材は、小形剥片石器では石鏃、微細な剥離がある剥片、スクレイパー、両極石器にチャートと無斑晶質安山岩が存在するが、その量は数点に止まる。剥片も同様の傾向を示す。石核、原石は黒曜石が多く、そのほかチャートが各1点存在する。一方、打製石斧は黒色安山岩に集中し、磨製石鏃は泥岩、摩耗痕がある剥片は砂岩と泥岩、凹石・磨石は安山岩が使われている。

第23表は、竪穴建物跡S B 01 出土石器に限定して、器種と石材の関係を示したものである。小形剥片石器の石材は、無斑晶質安山岩の微細な剥離がある剥片1点を除き、全て黒曜石である。こうした状況から、当該地域における縄文時代前期前葉（二ツ木式・中越式期）の石材利用の1例として、小形剥片石器に黒曜石を多用する点が指摘できよう。竪穴建物跡S B 01 の石器には、スクレイパー類が欠落しているが、削器的なものは、例えば微細な剥離がある剥片に含まれているものと推測する。また、多量の黒曜石剥片には長さ0.5cm以下の微細なものをはじめとして、様々な形態や大きさのものが存在する。今回は剥片の

第21表 石器の器種と出土点数

	石鏃	石鏃未製品	磨製石鏃	石錐	二次加工剥片	微細剥離剥片	スクレイパー	両極石器	打製石斧	凹石・磨石	有茎尖頭器	摩耗痕剥片	石核	原石	剥片類	玦状耳飾	合計
S B 01	19	12	0	2	9	5	0	4	0	1	0	0	34	2	711	1	800
遺構外	28	3	1	2	3	4	2	19	8	0	1	2	18	2	271	0	364
合計	47	15	1	4	12	9	2	23	8	1	1	2	52	4	982	1	1164

第22表 石器の器種別の石材（全体）

	石鏃	石鏃未製品	磨製石鏃	石錐	二次加工剥片	微細剥離剥片	スクレイパー	両極石器	打製石斧	凹石・磨石	有茎尖頭器	摩耗痕剥片	石核	原石	剥片類	玦状耳飾	合計
黒曜石	45	15		4	12	8	1	21			1		51	3	951		1112
安山岩										1							1
無斑晶質安山岩						1	1	1							8		11
チャート	2							1					1	1	19		24

	石鏃	石鏃未製品	磨製石鏃	石錐	二次加工剥片	微細剝離剥片	スクレイパー	両極石器	打製石斧	凹石・磨石	有茎尖頭器	摩耗痕剥片	石核	原石	剥片類	玦状耳飾	合計
砂岩												1					1
泥岩			1						1			1			4		7
黒色安山岩									7								7
メノウ																1	1
合計	47	15	1	4	12	9	2	23	8	1	1	2	52	4	982	1	1164

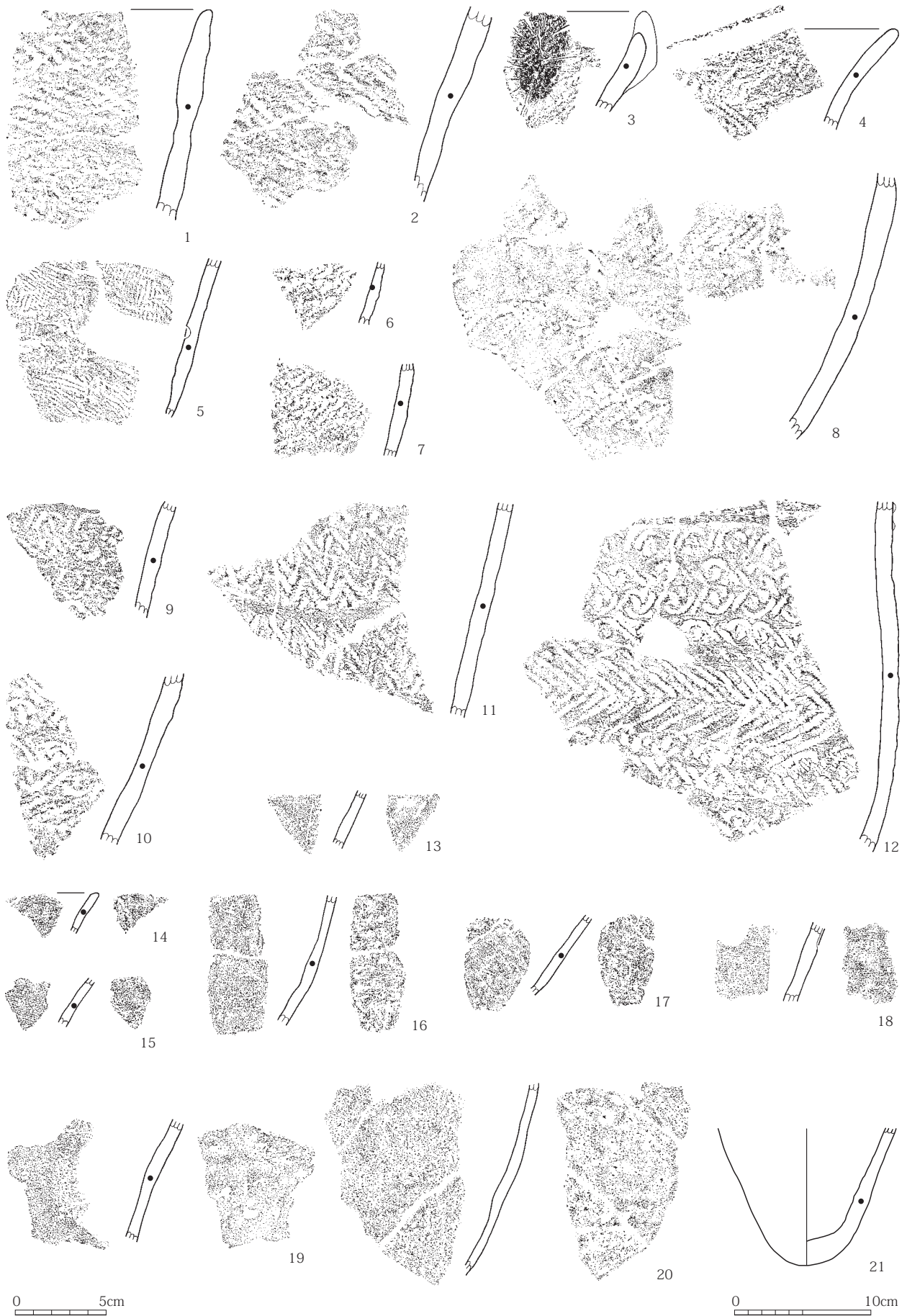
第23表 石器の器種別の石材（S B 01）

	石鏃	石鏃未製品	磨製石鏃	石錐	二次加工剥片	微細剝離剥片	スクレイパー	両極石器	打製石斧	凹石・磨石	有茎尖頭器	摩耗痕剥片	石核	原石	剥片類	玦状耳飾	合計
黒曜石	19	12		2	9	4		4					34	2	706		792
安山岩										1							1
無斑晶質安山岩						1									4		5
チャート																	0
砂岩																	0
泥岩															1		1
黒色安山岩																	0
メノウ																1	1
合計	19	12	0	2	9	5	0	4	0	1	0	0	34	2	711	1	800

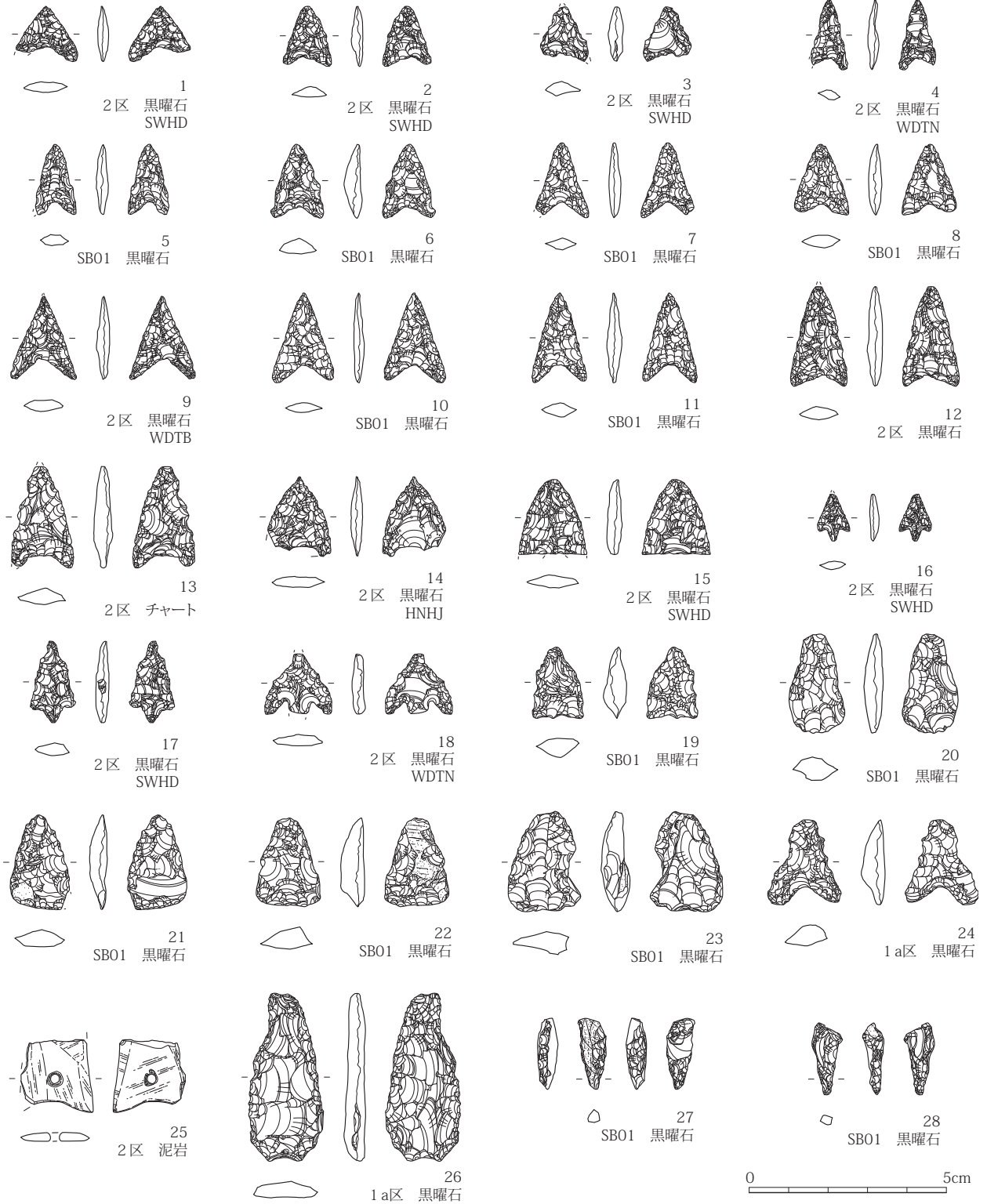
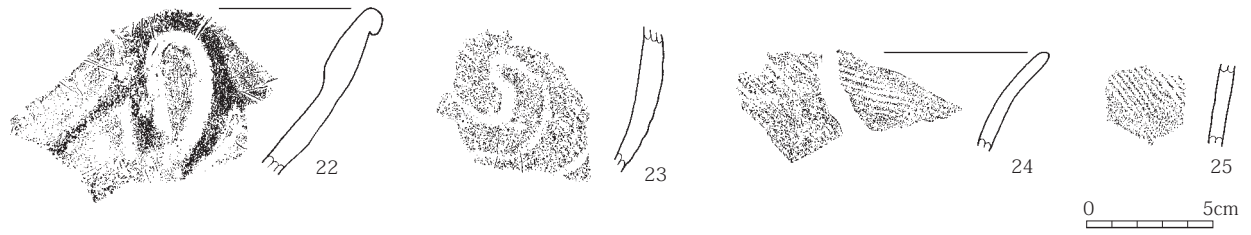
分析を実施していないが、原石や石核、石鏃およびその未製品、そのほかの小形剥片石器が黒曜石である点を考慮すれば、多様な剥片類には石鏃をはじめとする小形剥片石器の製作を示す資料が存在し、大きさや形態の違いは素材となるものや、加工剝離など製作途上で生じたものなどを含むと推測する。

引用・参考文献

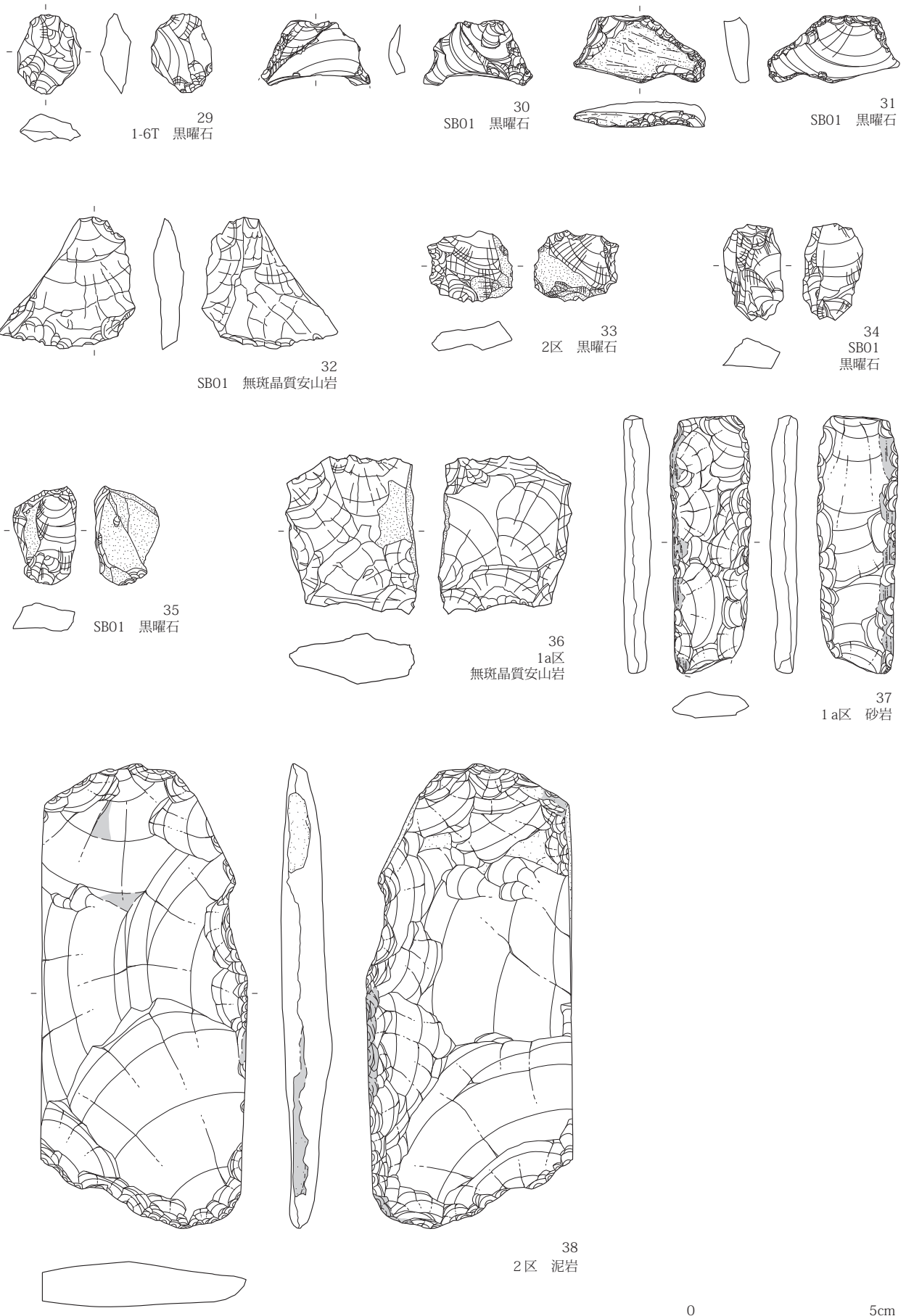
鶴田典昭ほか 2010 『川路大明神原遺跡』 長野県埋蔵文化財センター



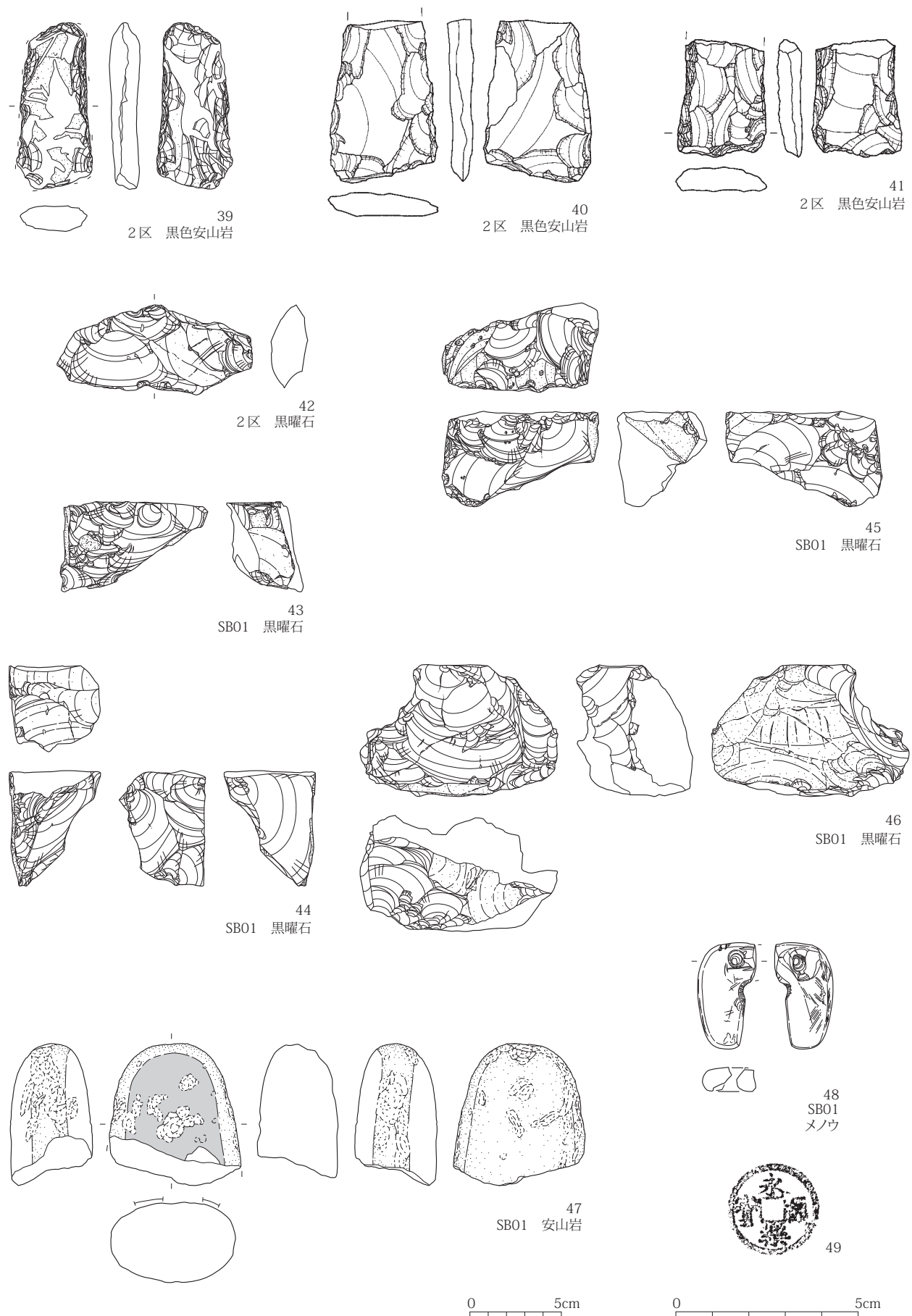
第58図 SB 01 出土土器



第59図 遺構外出土土器および縄文時代の石器（1）



第60図 縄文時代の石器(2)



第61図 縄文時代の石器(3)・金属製品

4 その他の時代および時期不明の遺構と遺物

(1) 遺構

1区で、溝跡1条を検出した。

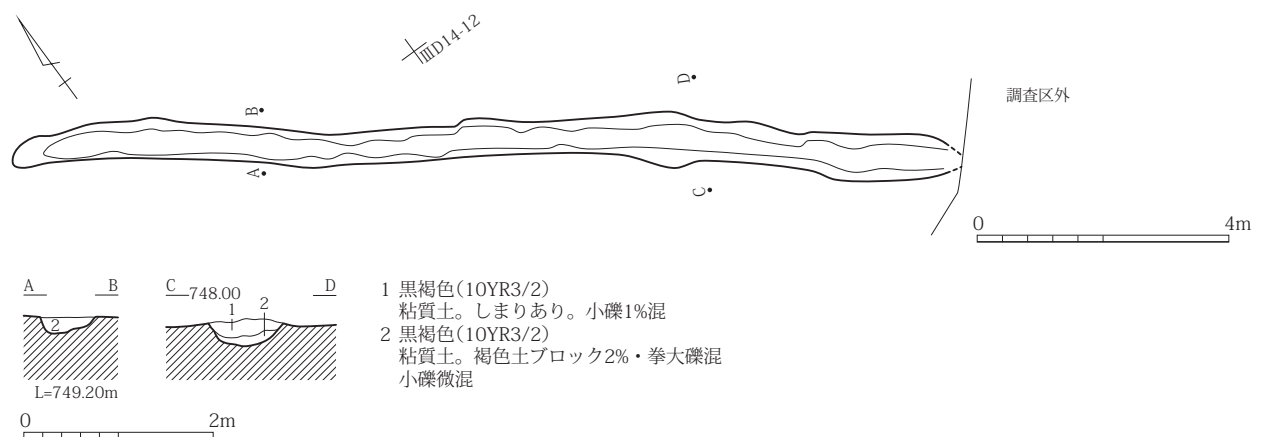
SD 01 (第62図、P L 11)

位置：1 a区、ⅢD 14 - 12グリッド。検出：基本層序第V層上面で検出した。重複関係：なし。埋土：黒褐色粘質土が堆積する。褐色土ブロックの有無などから2層に分かれる部分がある。形状・規模：等高線に直行し北西—南東方向へ延びる。断面形はU字状を呈する。規模は長さ15 m、最大幅1 m、深さは30cmを測る。南東方向は調査区へ延びる可能性もある。遺物：奈良～平安時代の須恵器坏と器種不明の土師器が出土したが、小破片で流れ込みの可能性が高い。時期：時期決定の根拠がなく、不明である。

(2) 遺物 (第61図)

2区から銭貨3点が出土し、49の「永楽通宝」1点を掲載した。ほか2点是小破片、もしくは錆が酷く文字が判読できない。

そのほか、非掲載だが、遺構外の1～3区より奈良～平安時代の須恵器・土師器・黒色土器の破片、中世の炆器や内耳土器と推測する破片、幕末以降と推測する陶磁器類の破片などが出土している。



第62図 SD 01 遺構図

第3節 高尾古墳群5号墳

1 概観（第43図）

高尾古墳5号墳は千曲川左岸地域、佐久市前山字高尾に所在する。2013（平成25）年度に、埋文センターが実施した中部横断道建設に伴う高尾A遺跡の発掘調査で新たに発見された古墳である。近隣には、周知の高尾古墳群1～4号墳が存在しており、本古墳については、発掘終了後、市教委が高尾古墳群5号墳として登録した。

本古墳は、南に開口する横穴式石室を内部主体とする終末期の円墳である。八ヶ岳連峰から北東に伸びる丘陵末端付近の南東斜面中腹に立地し、標高748.5m前後、丘陵裾との比高20～30mを測る。

本古墳の南西に高尾古墳群1～4号墳がある。いずれも本古墳と同じ丘陵の尾根頂部に立地する。1・2号墳は本古墳から南西130～160m、3号墳は2号墳から300mほど、4号墳はさらに300mほど離れており、全体として群集する状況にはない。北隣の丘陵には鱗溪古墳が、南方650mの丘陵には尾垂古墳が存在する。尾垂古墳は本書第6章で報告するが、横穴式石室をもつ7世紀後葉の古墳である。高尾古墳群1～4号墳、鱗溪古墳は、いずれも内容は明らかでない。集落遺跡については、市道遺跡、辻遺跡、儘田遺跡などの発掘調査により、東方平地部の千曲川沿いの微高地上に7世紀から8世紀にかけての集落が展開する状況が明らかになっている（市教委2008）。一方、本古墳が立地する丘陵地部では、本古墳足下の高尾A遺跡をはじめとして、丘陵裾部から末端部に古墳時代から古代の散布地が分布するものの、該期の様相は不明確である。

2 発掘の方法と経過

（1）検出（第43～45図）

本古墳周囲の地形は、耕作地の造成等の切盛りによる段状地形を呈する。各段の上面は緩やかな傾斜面を成し、段間は崖状となっている。地表面観察では本古墳の存在をうかがい知ることはできなかったが、遺構確認のために掘削したトレンチ（1-41T）の東端部で、地山の黄褐色土（基本層序第V層）に落ち込む黒褐色土のレンズ状堆積を確認した。遺構の可能性があると判断し、掘削範囲を面的に広げて精査を行った。その結果、横穴式石室残存部とその外側に円形にめぐる列石があらわれ、未周知の古墳の存在が明らかになった。トレンチで検出した落込みは周溝であることが判明した。古墳は、段造成により墳丘上部および墳丘・周溝南東部は切り取られて消失、石室についても上部および羨道南東部が失われていた。

（2）調査グリッドの設定（第63図）

発掘を開始するにあたり、壁体残存部の形状と方向に合わせた、およそ南北方向の石室長軸（主軸）と、それに直交する短軸を設定した。さらに石室長軸・短軸を基準として2mメッシュの調査グリッドを設定した。長軸に平行するグリッドラインは計6本設定し、西からA～Fと呼称した。短軸に平行するラインも計6本設定し、北から1～6の呼称を与えた。Dラインが石室長軸延長、4ラインが短軸延長にあたる。グリッド杭はラインの交点に打設し、B-4、C-3のように呼称した。石室内埋土の発掘過程で、東側壁最上部の壁体石が東側に動いており、その分、設定したDラインが本来の石室中軸より東に偏ることが判明した。グリッド自体の再設定は行わなかったが、石室～周溝の長軸・短軸断面図および石室立面図は、新たに設定した石室長軸・短軸ラインに沿って作成することとした（第63・65図A-B、C-D）。

(3) 発掘の方法と経過(第63・68図)

古墳から下断面へは高低差3m以上の急崖となっていた。面的表土剥ぎと併行して、崖面の表土を剥ぎ取って墳丘基底面および周溝下底面のおよそを把握した。そのレベル付近まで、掘削した表土を用いて下段を埋めた後、本格的な調査に取りかかった。

石室内の調査は、Dラインと4ラインにより石室内を4分割し、奥壁に向かって左奥から時計回りに1・2・3・4区と呼称し、それぞれの区画を石室調査の単位とした。掘下げは、断面観察用ベルトを残して区画ごとに進め、1区画で埋土の性状に変化が認められた場合には、他区画においても、その面の検出を試みた。断面観察用ベルトは観察と記録を済ませた時点で崩し、再度ベルトを残して各区を掘り下げるといふ工程を数回繰り返して床面まで掘り下げた。床面上10cmから床面までの玄室埋土2層(床礫間隙土を含む)については篩別・水洗し、微細遺物の抽出を試みた。

石室内の調査と並行して石室外の調査を進めた。石室外についても、Dラインおよび4ラインにより4分割し、北西から時計回りに1・2・3・4区と呼称して、墳丘・周溝調査の単位とした。ただし、現実には、墳丘4区は盛土のごく一部が該当するのみで、周溝4区は存在しない。

周溝の調査は、長軸および短軸ライン沿いのほか、西側2か所、東南側崖面沿い1か所の合計5か所に設定した断面観察用ベルト際に、サブトレンチを掘削して土層の堆積状況を把握した。ベルトを残し、列石とその崩落石、遺物を検出・精査しつつ、各区画で周溝埋土を層位ごと段階的に底面まで掘下げた。

墳丘の調査は、長軸および短軸ラインに沿ってサブトレンチを掘削し、盛土層の築成状況を確認した。さらに列石、掘方・裏込めを含めた石室との関係を把握して、各区画で盛土の掘削と石室裏込めの取外しを行った。盛土掘削後に石室掘方のプラン検出を行い、掘方内の掘削を実施した。掘方掘削後、石室壁体の解体へと進んだ。

発掘状況を記録するにあたって、側壁などの左・右および奥・前の表現は、開口部から奥壁に向かっての左右、奥前とした。なお、本古墳の呼称については、登録前は高尾A遺跡SM01の呼称を用いた。

3 墳丘と周溝

(1) 墳丘の築成と列石(第63・64図、PL14・15)

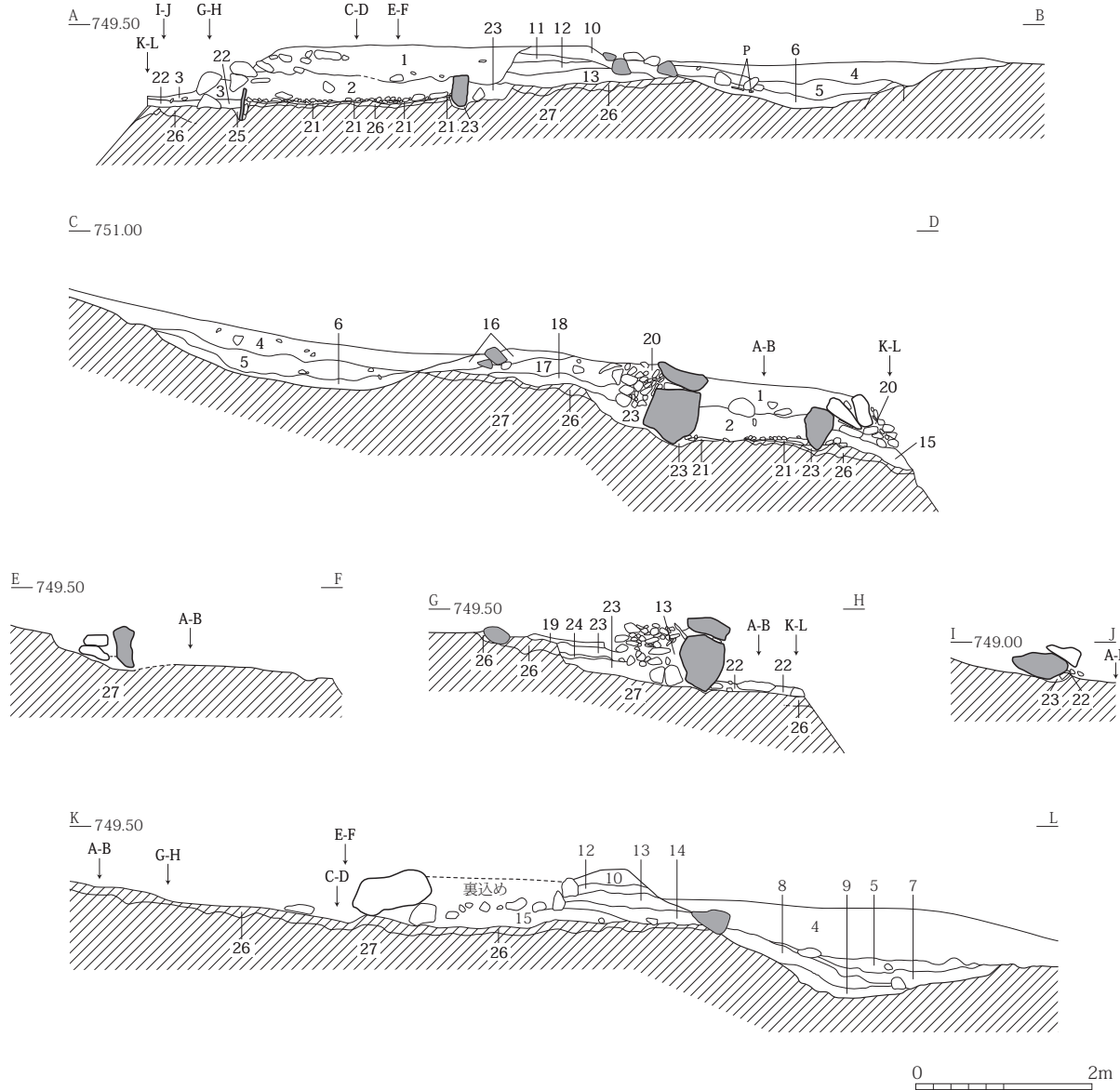
墳丘に列石を巡らす円墳である。残存状況不良のため、明確な墳丘規模を示すことが難しい。南北残存長6.7mだが、西側残存盛土端と石室中軸との距離から推定して、墳丘直径8mとしておく。高さは、これも残存盛土端から測った残存高は斜面上方の西側で25cm、斜面下方の北東側で60cmである。周溝底からだと、各々45cm、145cmとなる。

墳丘の築成は、石室掘方を埋めた後に、マウンドを形づくる盛土層を掘方埋土および旧表土の直上から積み上げている(10~19層)。盛土は黄褐色・黒色ブロック混交土と、にぶい黄褐色~暗褐色土を用いており、両者を交互に積む傾向がうかがえる。黄褐色・黒色ブロック混交土についても、微細にみると、黒色ブロックが多い部分と少ない部分が互層状をなす様相を看取できる。各層の上面レベルと石室壁体との関係をみると、13層上面と奥壁第1段上面のレベル、12層・18層上面と左側壁第1段上面そして復元した右側壁第2段上面のレベルがほぼ一致する。石室の構築と墳丘の築成が一連の工程で行われたことを示していよう。10層・16層は列石基底石の外側にも及び、墳裾部を形成する。

石室裏込め外縁から1.0~1.3m外側に列石が設置されている。およそ円形に巡るが、基底石の並びは、北部と南部で直線的となる箇所がある。用材は20~40cm大の垂円礫・垂角礫である。多くは基底石のみ、ないしは2段が残るだけだが、局部的に3・4段残存し、そこでの立ち上がり角度は50度ほどである。基底石は南部では内外2列に並べており、遺存状況はよくないものの西部から北部でもその状況をうかが



第 63 図 墳丘平面図



- 1 黒褐色(10YR3/2)シルト。粘性なし。しまりややあり。粒子極細1mm以下礫2%。150～300mm垂円礫・円礫混。玄室埋土
- 2 黒褐色(10YR3/2)シルト。粘性なし。しまりやや弱。粒子極細。150～300mm垂円礫・円礫少混。上面で土師器坏出土。玄室埋土
- 3 灰黄褐色～にぶい黄褐色(10YR4/2～4/3)砂質シルト。粘性・しまり弱。羨道埋土。2層との層界不明瞭
- 4 暗褐色(10YR3/4)シルト。粘性・しまりややあり。30～50mm礫微混
- 5 黒色(10YR2/1)シルト。粘性あり。しまり普通。20～50mm礫微混。周溝埋土
- 6 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト。粘性・しまりあり。粒子細。他の周溝埋土より礫少ない。周溝埋土
- 7 黒褐色(10YR3/2～2/2)シルト。粘性・しまりややあり。7層土ブロック混。30mm以下礫微混。周溝埋土
- 8 暗褐色(10YR3/3～3/4)シルト。粘性・しまりやや弱。周溝埋土
- 9 黒褐色(10YR2/2～2/3)シルト。粘性・しまりややあり。30mm以下礫微混。周溝埋土
- 10 暗褐色(10YR3/3～3/4)砂質シルト。粘性弱。しまりあり。盛土
- 11 にぶい黄褐色シルトブロック・黒色シルトブロック・黒褐色シルトブロック混在。粘性弱。しまりあり。盛土
- 12 にぶい黄褐色～褐色(10YR4/3～4/4)砂質シルト。粘性ややあり。しまり強。黄褐色～明褐色シルトブロック混。盛土
- 13 にぶい黄褐色シルトブロック50%・黒色シルトブロック30%・黒褐色シルトブロック20%混在。粘性あり。しまり強。盛土
- 14 にぶい黄褐色シルトブロック45%・黒色シルトブロック40%・黒褐色シルトブロック15%混在。粘性あり。しまり強。盛土
- 15 褐色(10YR4/6)シルト。褐色シルトブロック主体。黒色シルトブロック20%混。粘性あり。しまり強。盛土
- 16 にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト。粘性あり。しまり強。粒子極小10～20mm礫1%・白色土粒混。盛土
- 17 褐色(10YR4/6)シルト。粘性あり。しまり強。粒子極小。10YR2/2～2/3黒褐色シルトブロックが互層状に入る。10～20mm礫1%混。盛土
- 18 褐色(10YR4/6)シルト。粘性あり。しまり強。粒子極小。上部は10YR2/2～2/3黒褐色シルトブロックが互層状に入る。10～20mm礫1%混。盛土
- 19 暗褐色(10YR3/3)粘性弱。しまりあり。盛土
- 20 暗褐色(10YR3/3)シルト。しまりなし。空隙多。側壁裏込め隙間の土
- 21 暗褐色(10YR3/3～3/4)砂質シルト。粘性弱。しまりあり。玄室敷土
- 22 暗褐色(10YR3.5/3)シルト。しまりあり。黄褐色土細ブロック混羨道敷土
- 23 黄褐色・黒褐色・黒色シルトブロック混在。割合は黄褐色30%・黒褐色30%・黒色30%前後。しまりあり。掘方埋土
- 24 にぶい黄褐色(10YR5/5)シルト。やや粘性あり。しまりあり掘方埋土
- 25 暗褐色(10YR3/3)シルト。粘性ややあり。しまりあり。柵石掘方埋土
- 26 黒色～黒褐色(10YR2/1～2/2)シルト。粘性あり。しまりややあり。基盤との層界不明瞭。旧表土
- 27 黄褐色(10YR5/6)シルト。粘性あり。しまり強。粒子極小。基盤

第64図 墳丘断面図

うことができる。基底石に明確な掘方は認められない。北部の状況からすると、列石外側の盛土端にも別の列石が存在し、二重列石を成していた可能性がある。その場合、残存する列石すなわち内回り列石が墳丘内に埋め込まれていた可能性が浮上する。しかし、その点は明確にはならなかった。

(2) 周溝 (第63・64図)

墳丘の南西から北東にかけて周溝が残存する。現状、外縁ラインはゆがんで、端整な円弧を描いていない。規模は、残存盛土端から測って、西側で幅3.0 m、深さ20cm、北東側で幅幅3.0 m、深さ70cmである。西部から南部に向かって溝外側の立上りが低くなってゆき、現状、標高749.1 m付近で消失する。本来、もう少し東に延びていた周溝立上りが、流出や削平により消失した可能性は高い。周溝埋土は5層に分層できる(5~9層)。人為的な埋戻しや掘直しの状況は認められない。北部の墳丘斜面側の6層から須恵器高台坏・坏蓋が出土した。また、5層出土の炭化物の放射性炭素年代を測定したところ、14 C年代で 960 ± 20 yrBP、暦年較正年代(1 σ)では1025~1147cal ADの間に3つの範囲で示される測定結果を得た。古代末の段階では、周溝が埋没し切っていなかったと考えてよいだろう。

4 石室

(1) 残存状況と埋没状況 (第64・65図、P L 14)

本古墳の内部主体は南に開口する横穴式石室である。天井石は失われ、遺存状況が良い左側壁でも壁体は最大2段が残存するにすぎない。右側壁はとくに破壊が著しく、玄門部から羨道の壁体はすべて失われている。奥壁は第2段以上が抜き取られている。奥壁抜き取り痕は墳丘盛土および石室掘方充填土を掘り込んでおり、その規模を考慮すると、少なくとも最奥の天井石は同時に抜き取られたと推測できる。

玄室内の埋土は2層に分かれ、1層は裏込めに由来すると思われる15~30cmの垂円礫や円礫を多く含むが、2層には礫が少ない。2層上面はほぼ水平で、そのレベルは奥壁最下段の上端とほぼ同じである。奥壁外には及ばないため、2層が堆積した時点では奥壁第2段以上および天井石が存在していた可能性は高い。平安時代の土師器坏が上面で出土したことから、2層の堆積は平安時代以前と考える。1層は奥壁第1段を覆っており、奥壁の抜き取り後に、裏込めの崩落礫とともに石室内に流入したものであろう。

(2) 石室構造 (第64~66図、P L 14・15)

石室の残存長は3.7 mを測る。長軸はN6°Eを指し、丘陵斜面の走向に対してやや斜交する。

玄室 玄室は胴張りプランをなす。幅は奥壁部90cm、中央部1.3 m、玄門部80cm、長さは左側壁2.2 m、右側壁2.3 mを測る。床面からの残存高は最大80cmである。

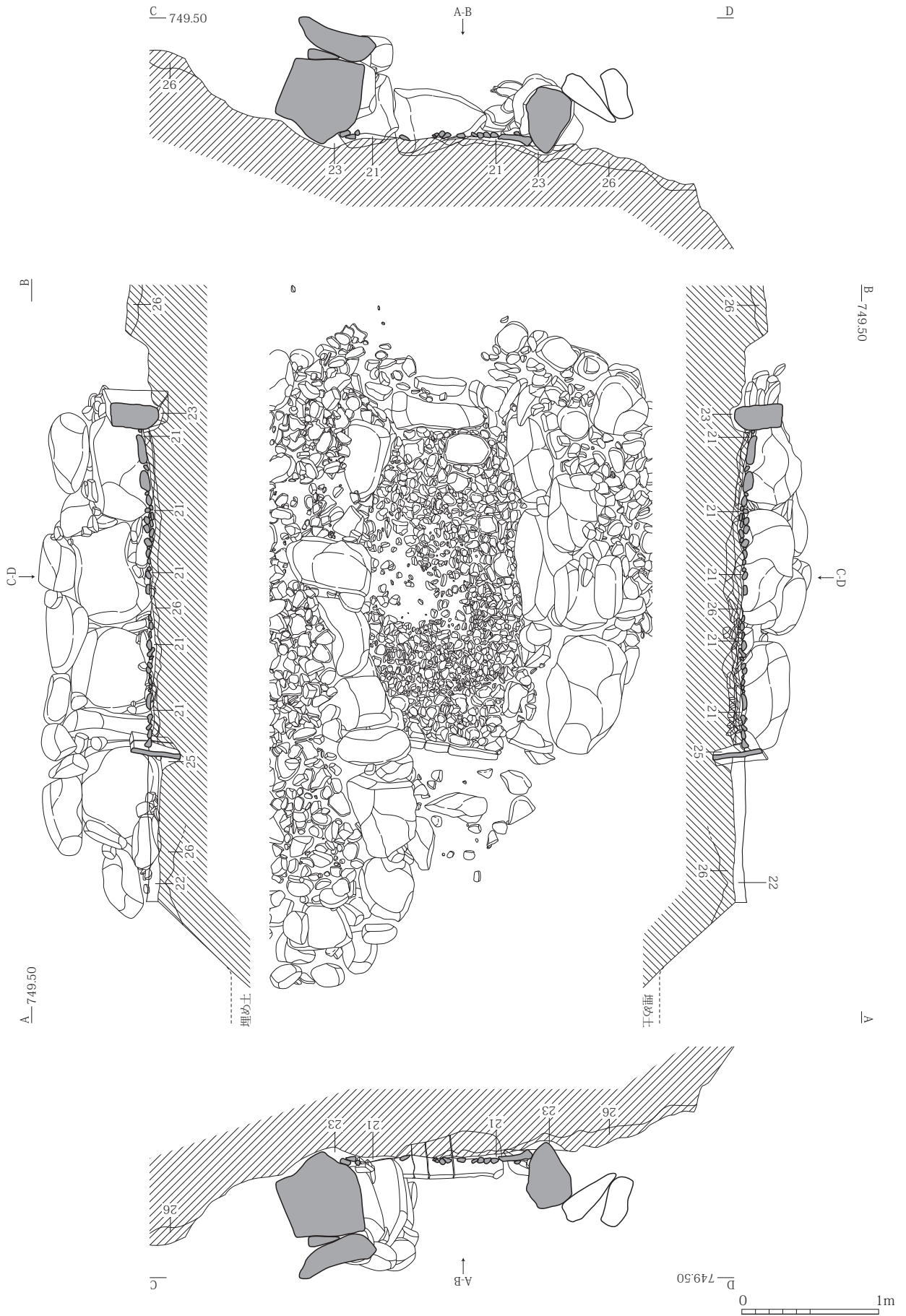
奥壁は壁体石が1段残存するのみである。高さ最大50cm、幅65cm、厚さ20cmの扁平な石材の、広い面を内側に向けて設置している。上面の石室床面からの高さは約20cmである。奥壁石と右側壁最奥石との間にできる隙間には小形の石材を詰めている。

左側壁は壁体石が2段残存する。第1段は、長さ60~80cm、高さ50~60cm前後の石材3石で構成される。いずれも広い面を内側に向け、長手を石室長軸に揃えて設置されている。第2段は、長さ50cm前後、高さ30cm程度の、第1段より小振りやや扁平な石材を主体に、広い面を上下に向けて横積みないし小口積みになっている。第1段最奥の壁体石がやや低いが、第2段にやや大振りの石材を用いており、第2段の壁体石上面のレベルはほぼ一定である。壁体外側に30~40cmの礫を用いた控積みが部分的にみられ、特に扁平な石材を立てた最奥石部分に顕著である。

右側壁の壁体石は最大3段分残存するが、2・3段目の壁体石は外側にずれ落ちており、1段目最前石は外側に倒れた状況であろう。第1段は長さ70~80cm、高さ50cm程度の石材3石で構成され、左側壁と同じく広い面を内側に、長手を石室長軸に揃えている。第2段の壁体石は2石、第3段の壁体石は1石が



第65図 石室平面図



第66图 石室立面图·断面图

残るのみで、ずれ落ちているが、長さ50cm前後、高さ15～20cmの小振りでやや偏平な石材を、広い面を上下に向けて平積みになっていた状況を看取できる。上面レベルを復元すると、第2段が左側壁第1段と、第3段が左側壁第2段とほぼ等しい。なお、右・左側壁とも、壁体石第1段の下に小形で扁平な石材を、掘方底面との間に詰めている部分がある。

床は、薄く敷き土(21層)を施した上に円礫・亜円礫を敷き詰めている。礫の大きさは、20～30cmのものもわずかにあるが、ほとんどは5～10cmである。なお、玄室中央左に礫敷きが存在しない部分があり、後世のかく乱を受けた可能性がある。

羨道床との境には栴石が設置されている。縦35cm、横80cm、厚さ5cmの板状石を用い、幅20cm程度の溝状の掘方に埋設している。栴石は、上端が床面から10～13cm突出し、左端は立柱石に接する。

羨道 羨道は左側壁のみ残存する。立柱石と前奥2列の壁体石が、玄室前端より20cmほど内側に張出す分、羨道は幅狭となる。立柱石は幅約15cm、高さ約70cmを測る。立柱石から前は内面がほぼ揃うため、立柱石は羨道に含めた。奥側の壁体石は2段残存し、玄室と同様な形状・大きさの石材、用い方により構成されている。上面レベルも玄室第2段と揃う。前側の壁体石は2段分残存するが、第2段は内側にずれ込んでいる。第1・第2段とも小振りの石材を平積みにする。前側の壁体石は奥側とは用材方が違い、また墳丘回り列石に接続している。前側壁体石の前端を羨道の前端と仮定するならば、羨道長は1.5mとなる。なお、右立柱石の掘方ないし抜痕は確認できなかったが、玄室右側壁最前石と栴石右端の位置関係から、両袖型の石室を想定しておく。

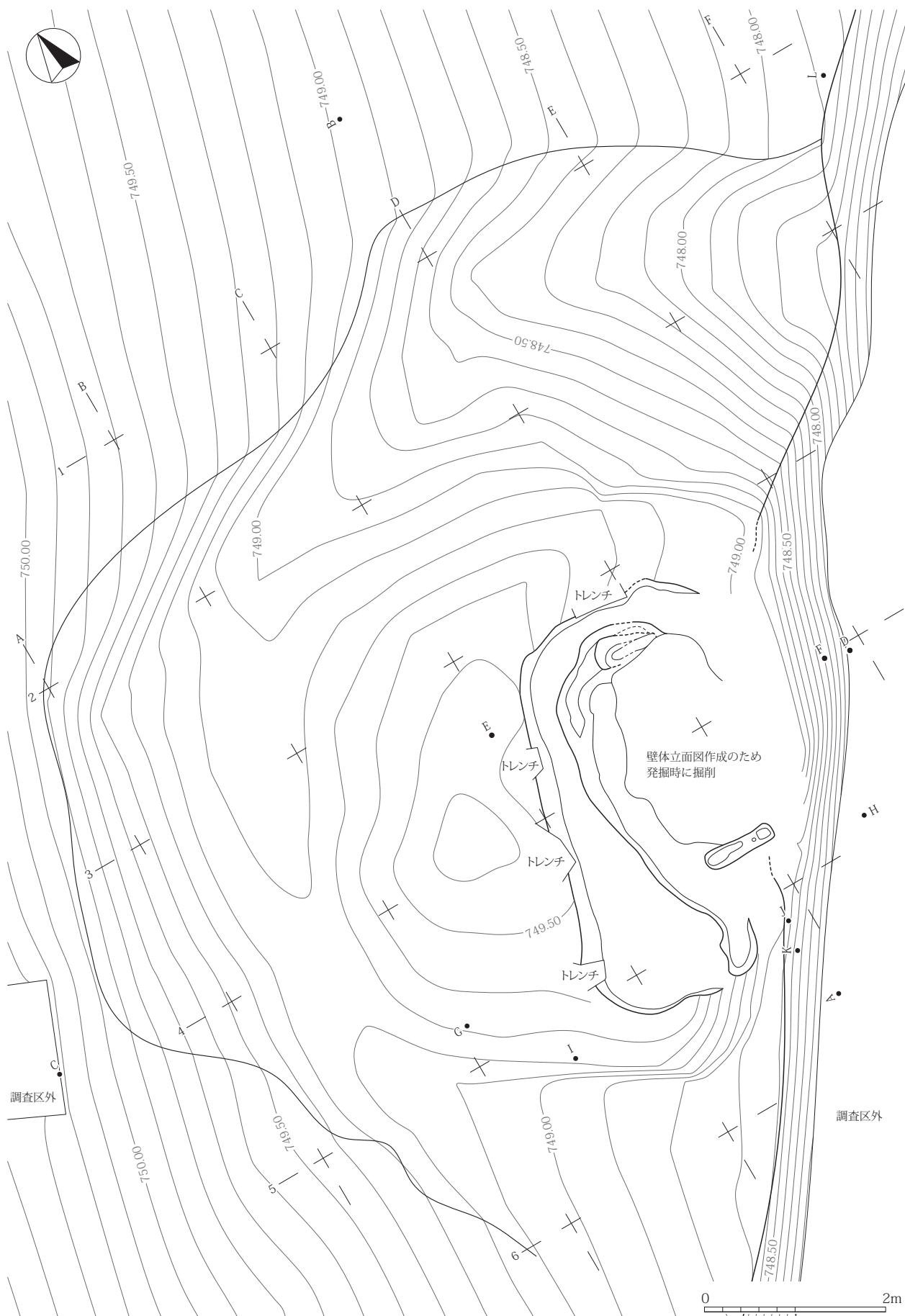
羨道床は、玄室よりやや厚く敷き土(22層)を施している。敷き土上には5～10cm大の円礫・亜円礫が若干存在しており。本来、玄室同様の礫床が形成されていた可能性は高い。しかし、右側壁が失われたことにより流失したと考える。

栴石の前面に、25～45cmの礫が乱雑に2段ほど重なった状況が認められ、発掘段階では閉塞施設の残存である可能性を考えた。しかし、礫間の隙間は大きく、隙間の土は特に堅固でも特異な土質でもないため、石室壁体や裏込めの崩落である可能性を否定しきれない。

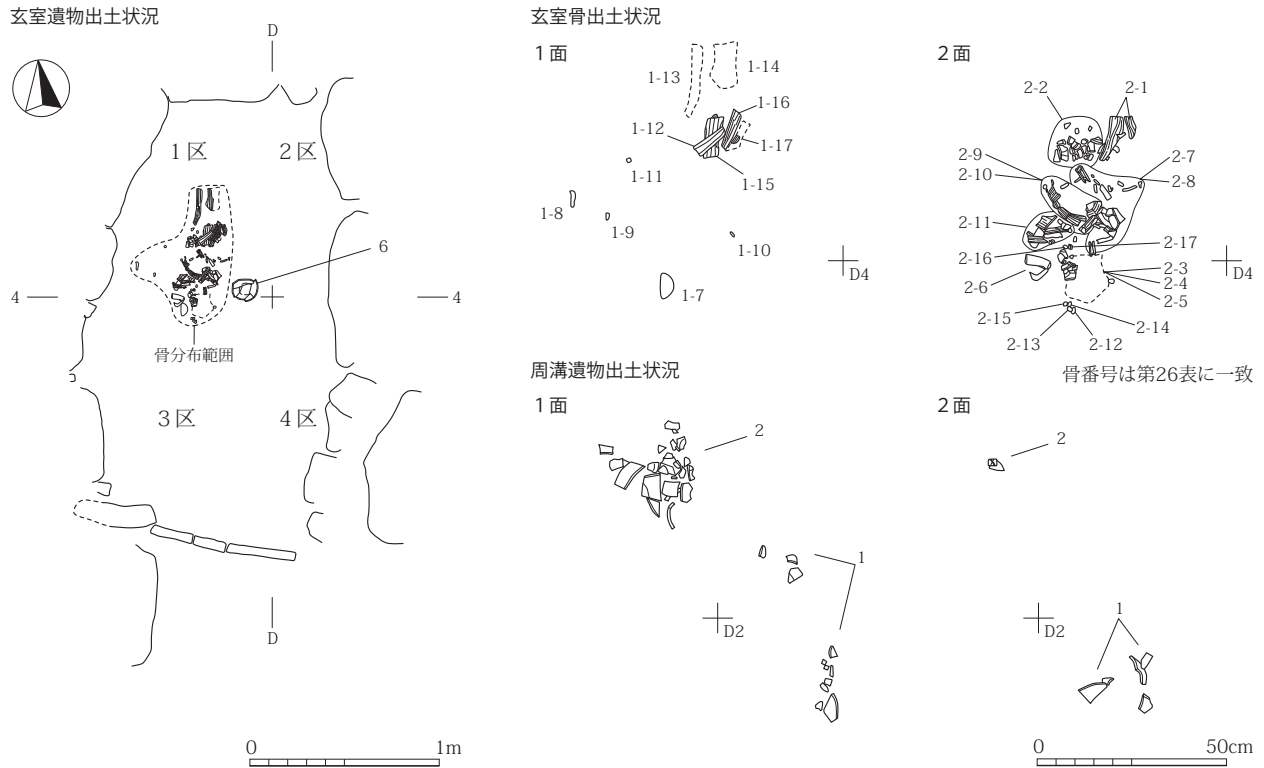
(3) 掘方と裏込め(第64～67図、P L 14・15)

掘方 本古墳は斜面を切り開いて平坦面を造成した掘方内に石室を構築している。掘方は2段に掘り込まれている。1段目は平面コ字状を呈し、山側の西辺は長さ約4m、北辺・南辺の長さは約2m・1.5mを測る。掘方の掘削は旧表土上面から行われている。深さは西辺中央部で最大33cmを測り、そこから谷側に向かって徐々に浅くなり、右側壁下で消失する。壁体を設置する部分には2段目を掘り込んでいる。奥壁から左側壁にかけては溝状に掘り込まれ、深さは最大で15cmを測る。一方、右側壁部分はあまり明瞭ではなく、個々の壁体石ごとに若干掘り窪めた程度である。1段目西辺の延長方向はN17°Eで、石室長軸に対して斜行する。掘方は斜面の走向に合わせて掘削し、石室は南北を指向して構築したと理解する。

裏込め 壁体石の外側には円礫・亜円礫を用いた裏込めがなされ、裏込めと掘方壁の間に土を充填している。掘方底から高さ20cmほど、奥壁上端付近までは、ほぼ土のみ充填している。それより上位では、壁体石の外側40～80cmの範囲で円礫・亜円礫を用いた裏込めが壁体を囲み、その外側は、掘方充填土ないし墳丘盛土となる。裏込めの礫は10～15cm大前後のものを主体とするが、外縁部には20～35cm程度のやや大振りの礫が用いられている。小礫部分を押しさえ、充填土および盛土との混交を防ぐことを企図した用材法であろう。



第67図 石室掘方平面図



第68図 遺物出土状況図

5 遺物

(1) 出土状況 (第63・68図、P L 15)

玄室 玄室内から人骨、土器、金属製品が出土した。

人骨は玄室左奥寄りの1・3区にまとまっている。玄室床面から7cm前後浮いた位置にあるため、初葬時のものとは考え難い。人骨については、茂原信生氏・櫻井秀雄氏・本郷一美氏に鑑定を依頼し、結果を第5節に掲載した。それによれば、焼骨と生骨が混在しており、圧倒的に焼骨が多い。焼骨・生骨ともに遺存状態が不良のため、被葬者の個体数や性別・年齢について得られた知見は少ないが、焼骨と生骨があることから2体以上の個体が存在し、さらに、焼けていない個体は20歳前後の若い個体を含むという。なお、生骨と焼骨に層位的な違いはなかった。

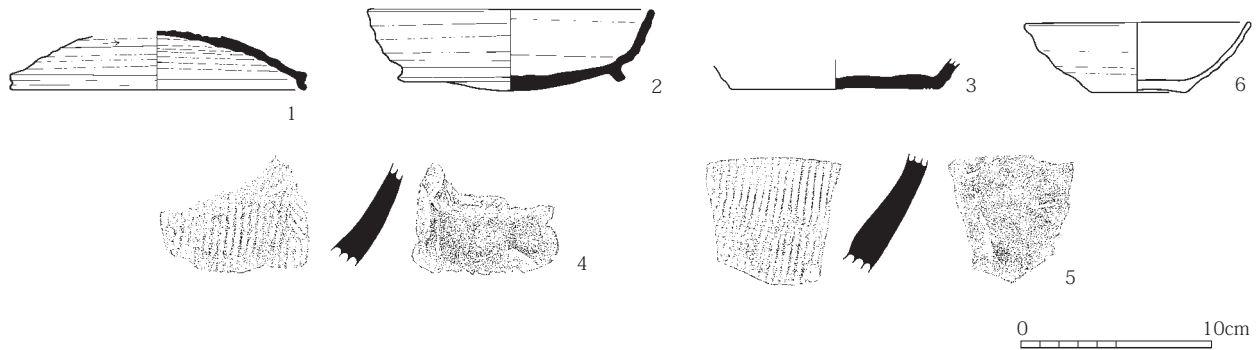
埋土2層下部の篩別・水洗により須恵器、金銅製品(写真P L 15①)を検出した。全て小細片で、形態の特徴や帰属時期に言及することは困難である。須恵器片は4区、金銅製品は2区検出となる。

埋土中からは、土師器坏、須恵器坏片が出土している。6の土師器坏は、玄室中央やや右寄りの床面から20cmほど高い2層上面で、正位の状態で出土した。器体はほぼ完存する。平安時代の石室再利用の1例とみておきたい。3の須恵器坏は玄室3区の1層から出土した。

石室外 石室外の出土遺物は須恵器で、1の須恵器坏蓋、2の高台坏、4・5の甕がある。坏蓋と高台坏は北側墳裾付近の周溝内6層から各1個体が近接して出土した。割れて破片となっていたが、個体ごとにまとめ、周溝底面からの高さもほぼ同じである。同一面上に近接する状況といえる。平安時代までは天井石が存在したと推定されるため、石室内から掻き出されたものとは考え難い。甕は、石室開口部の南西2m、周溝底と推測する位置で胴部片が2点出土した。

(2) 遺物 (第69図、P L 15)

1は須恵器の坏蓋である。口径15.5cmを測る。端部は屈折してやや外に開く。屈折部外面に沈線1条を



第69図 出土遺物

巡らせる。天井頂部外面が剥落していて、つまみ部の形状は不明である。2は高台付坏で、口径15.0cmを測る。坏底部が高台下端より突出する。1・2は胎土の性状や灰白色を呈する色調、焼成状態が酷似し、口径も合致するため、セットを成していた可能性が高い。出土状況からもそのことがうかがえよう。3の坏は体部の立ち上がりが急角度で、底面が広く、底面外縁付近に3条の条線が巡る。高台の剥落痕は認められないが、上記の特徴から、高台坏として器体を製作したものの、高台を貼付しないまま焼成に至ったものとする。4・5は須恵器甕の胴部である。外面は擬格子タタキ、内面は丁寧なナデ調整を施しているが、4には円形当て具痕がわずかに残る。

6の土師器坏は口径11.9cm、ロクロ整形、底部切り離しは回転糸切りである。明らかに平安時代に属するものである。詳細な時期は決め難いが、10世紀代であろう。

写真P L 15 ①の金銅製品は薄い銅板の両面に金装を施している。形態、器種ともに不明である。

6 年代と火葬骨について

本古墳は出土遺物が僅少で、特に床面遺物がほぼ皆無であるため、築造年代を特定することが難しい。そのなかで、年代を考える材料のひとつとなるのが周溝から出土した須恵器高台坏である。この土器は、初葬時あるいは追葬時において、墳丘上での祭祀行為に用いられたものと推測するが、高台下端より坏底部が突出する形態は7世紀末～8世紀前葉に特徴的な形態である。この年代は、追葬を含めた古墳としての機能存続期間に重なることは確かである。

次に横穴式石室の形態である。富沢一明氏の論考(富沢2000)によれば、当地域の横穴式石室は、6世紀後半に無袖型石室が導入され、6世紀末以降両袖型石室が加わるが、7世紀中葉を境に立柱石と腰石的積み方の側壁をもつ両袖型石室にほぼ統一され、以後、このタイプの石室が規模を縮小しながら8世紀に継続してゆく。加えて、このタイプの石室のなかでも、大型の石室は7世紀中葉を中心とした時期に築造が集中し、小型の石室は7世紀末から8世紀前半の築造と推定されるものが主体を成す。本古墳の横穴式石室は、両袖型である確証は得ていないが、腰石積みの側壁をもち、玄室と羨道の境に立柱石を立てている。石室の規模は当地域の古墳のなかでも最小の部類に属する。こうした形態的特徴を有する本古墳の横穴式石室は7世紀末以降に属するものとする。

材料は少ないながら、石室形態と周溝出土の須恵器高台坏から、さらに、高台坏が追葬に伴う可能性を考慮し、本古墳の築造年代として7世紀末から8世紀初頭を想定しておく。そして、8世紀のある時点、おそらく8世紀前半までは石室への追葬が継続していたのであろう。

本古墳の石室内からは生の人骨とともに焼けた人骨が出土した。どちらも追葬に伴う可能性が高い。長野県内で、横穴式石室内から焼骨が出土した事例は、佐久市(旧白田町)五霊西12号古墳・蛇塚古墳(白

田町教育委員会 1988、白田町誌刊行会 2007)、松本市安塚2～4・7号墳・秋葉原1号墳(松本市教育委員会 1979・1983、直井 1994)、千曲市杉の木古墳(原 1998)などがある。

五霊西12号古墳は8世紀初頭の築造と推測され、築造時の第Ⅰ期床面と、追葬時・平安時代再利用の第Ⅱ期床面がある。焼骨は第Ⅰ期床面と第Ⅱ期床面の間層に含まれていた。秋葉原1号墳は7世紀末～8世紀前半と考えられ、生骨が石室底面にほぼ密着して、焼骨が底面より約10cm浮いて出土した。土葬から火葬への変化を想定し得る事例である。本古墳では生骨と焼骨に層位的な違いが認められず、五霊西12号古墳は、第Ⅰ期・第Ⅱ期床面間層の出土は焼骨のみであるが、火葬骨の埋納を前提に古墳を築くとは考え難いため、やはり、追葬が継続する過程において土葬から火葬への変化があったと理解しておきたい。

火葬は8世紀に入って普及したとされる。遺体を火葬にする新たな習俗は古墳を造営する地域の有力層に取り入れられたが、その導入期において、火葬骨は旧来の埋葬の場である横穴式石室に納められた。岡谷市大久保B遺跡1・2号墳墓(埋文センター 1987)などの「古代の火葬墓」の出現に先行する火葬骨埋納形態を示す事例といえよう。

なお、玄室埋土2層上面で出土した土師器坏は、人骨が検出されなかったため、埋葬かどうかは定かでないが、平安時代における石室再利用を示す可能性があろう。

引用・参考文献

白田町教育委員会 1988『五霊西12号古墳』

白田町誌刊行会 2007『白田町誌』第3巻 考古 古代・中世編

市教委 2008『市道遺跡Ⅲ 辻遺跡 儘田遺跡Ⅱ 西裏遺跡』

富沢一明 2000「信濃、千曲川流域における横穴式石室の導入と展開—東信地域を中心として—」『専修考古学』第8号

直井雅尚 1994「松本市安塚・秋葉原古墳群の再検討」『中部高地の考古学』Ⅳ

原 明芳・鳥羽英継 1979「麻績村武士塚古墳発掘調査報告」『長野県考古学会誌』33

原 明芳 1998「信濃の古代墳墓」『長野県考古学会誌』86

松本市教育委員会 1979『松本市新村安塚古墳群』

松本市教育委員会 1983『松本市新村秋葉原遺跡』

埋文センター 1987『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書1—岡谷市内—』

第4節 自然科学分析

高尾A遺跡、高尾古墳群5号墳では自然科学分析として、放射性炭素年代測定と黒曜石産地推定分析、火山灰分析を委託で実施しており、以下にその概要を報告する。なお、各分析の詳細については分析報告書をDVDに収録した。

1 放射性炭素年代測定

(1) 分析の内容

高尾A遺跡の竪穴建物跡と、高尾古墳群5号墳の周溝から採取した炭化物を対象として、株式会社加速器分析研究所に委託し、放射性炭素年代測定を実施した。

(2) 分析試料と目的

分析試料は竪穴建物跡SB01のP1・2から採取した3点、高尾古墳群5号墳の周溝埋土5層(2-2層)から採取した1点の合計4点で、目的は両遺構の年代を推定するための資料を得ることにある。

(3) 分析結果

測定結果を第24表に示した。1 σ 暦年代範囲の最小値と最大値をみながら、竪穴建物跡SB01と高尾古墳群5号墳の年代測定値を整理しておく。

竪穴建物跡SB01では、P1埋土から採取した炭化物のNo.1が4771calBC-4711calBC、P1埋土最下部から採取した炭化物のNo.2が4777calBC-4708calBC、P2埋土から採取した炭化物のNo.3が4727calBC-4618calBCの範囲で、3点全てが縄文時代前期前葉頃に相当する年代値である。竪穴建物跡SB01は、出土土器の様相から縄文時代前期前葉と推測されるため、年代測定結果は整合する。

高尾古墳群5号墳の周溝埋土5層から採取した炭化物のNo.4は、1025calAD-1147calADの範囲となり、7世紀末の築造と推定される5号墳の年代値としては新しいものであった。しかし、No.4を採取した地点が周溝である点を考慮すれば、この年代値は古墳の築造に関わるものではなく、周溝の埋没過程において堆積した炭化物を測定した結果とすることができよう。

第24表 分析試料と測定年代

No.	試料名	種類	採取位置	暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
1	No.1 (1-1)	炭化物	SB01 Pit 1埋土	5,865 \pm 27	4771calBC-4711calBC (68.2%)	4799calBC-4686calBC (95.4%)
2	No.2 (1-2)	炭化物	SB01 Pit 1埋土最下部	5,861 \pm 28	4777calBC-4708calBC (68.2%)	4799calBC-4682calBC (94.2%) 4633calBC-4621calBC (1.2%)
3	No.3 (1-3)	炭化物	SB01 Pit 2埋土	5,830 \pm 27	4727calBC-4670calBC (57.6%) 4637calBC-4618calBC (10.6%)	4780calBC-4610calBC (95.4%)
4	No.4 (1-1)	炭化物	5号墳周溝埋土5層(2-2層)	963 \pm 21	1025calAD-1046calAD (29.1%) 1094calAD-1120calAD (32.7%) 1141calAD-1147calAD (6.4%)	1020calAD-1055calAD (34.3%) 1076calAD-1154calAD (61.1%)

2 黒曜石産地同定分析

(1) 分析の内容

高尾A遺跡から出土した旧石器時代の石器群について、沼津工業高等専門学校物質工学科の望月明彦氏に委託し、エネルギー分散蛍光X線分析法による黒曜石産地推定分析を実施した。

(2) 分析試料と目的

分析試料は旧石器時代の石器群 256 点、縄文時代の石器群 109 点、時期不明 1 点で、目的は石器石材として利用された黒曜石の産地を推定することにある。

(3) 分析結果

石器個別に関わる詳細な分析データは、本書収録の DVD に分析報告を掲載した。ここでは、全体の分析結果のみ整理しておく。第 25 表に、時代別の黒曜石産地組成を示した。産地同定した旧石器時代の石器群は 256 点で、その内訳は厚刃搔器が 1 点、搔器・搔器状石器が 2 点、貝殻状刃器が 40 点、削器が 4 点、台形石器が 4 点、石核が 3 点、剥片が 202 点である。分析不可とされた貝殻状刃器 3 点、剥片 10 点の合計 13 点を除き、243 点の黒曜石産地推定分析を実施した結果、243 点全てが蓼科エリア冷山群の範囲にプロットされた。

産地同定した縄文時代の石器群は 109 点で、その内訳は石鏃が 24 点、石核が 5 点、石錐が 2 点、剥片が 60 点、両極石器が 16 点、二次加工がある剥片 1 点、原石が 1 点である。この中で、分析不可とされた石鏃 1 点、剥片 1 点、合計 2 点を除き、107 点の黒曜石産地推定分析を実施した。その結果、諏訪エリア星ヶ台群の範囲にプロットされたものが最も多く 78 点を数え、縄文時代の石器群全体の 72.9% を占める。星ヶ台群に続くのは、和田エリア (WD) 鷹山群の範囲にプロットされた 10 点で全体の 9.35%、土屋橋北群の範囲にプロットされた 9 点で全体の 8.41% となる。以下、和田エリア (WO・WD) の各判別群の範囲にプロットされたものが続くが、全体に占める比率は極めて少ない。注目されるのは、箱根エリア黒岩橋群の範囲にプロットされたものが 1 点存在することである。この石器は、2 区から出土した無茎の石鏃で (第 59 図 14)、遺構外出土のため時期不明だが、遺構外から縄文時代前期前葉、後期初頭、弥生時代前～中期の土器が出土しているのでそうした時期に該当する可能性はある。

時期不明の 1 点は、二次加工がある剥片で、諏訪エリア星ヶ台群の範囲にプロットされた点からすれば縄文時代の可能性もあろう。

高尾 A 遺跡では、全ての黒曜石を分析したわけではないが、推定結果を見ると旧石器時代と縄文時代とは大きな違いが認められる。旧石器時代では、分析した全ての黒曜石が遺跡近隣の蓼科エリア冷山群の範囲にプロットされたが、縄文時代では諏訪エリア星ヶ台が主体となって全体の 70% を超え、和田エリアがそれに続くなど、遺跡と黒曜石産地の関係が一変する。縄文時代の石器群は、遺構外からの出土であり時期は不明だが、諏訪エリア星ヶ台群が優位となり和田エリアが続く状況は、八ヶ岳西南麓の前期以降に類似する。

3 火山灰分析

(1) 分析の内容

高尾 A 遺跡の 2 区で採取した土壌をサンプルとして、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、テフラ分析と重軽鉍物分析を実施した。また、テフラの同定精度を高めるため、火山灰ガラスまたは重鉍物の屈折率測定を併用した。

第 25 表 時代別黒曜石産地組成

時代	試料数	エリア	判別群	記号	石器数	比率 (%)
旧石器	256	蓼科	冷山	TSTY	243	100.0
		分析不可				13
縄文	109	和田 (WO)	高松沢	WOTM	2	1.87
			鷹山	WDTY	10	9.35
		和田 (WD)	小深沢	WDKB	1	0.93
			土屋橋北	WDTK	9	8.41
			土屋橋西	WDTN	5	0.05
			土屋橋南	WDTM	1	0.93
		諏訪	星ヶ台	SWHD	78	72.90
箱根	黒岩橋	HNKI	1	0.93		
分析不可				2	—	
不明	1	諏訪	星ヶ台	SWHD	1	100.0
合 計					366	

(分析報告をもとに作成)

(2) 分析試料と目的

分析試料は、第47図に示した2区4トレンチ西壁のA～C地点で採取した土壌11点と、4トレンチ西壁に直行する方向のC2NWシタ壁D・E地点およびC1NWシタ壁F・G地点で4点ずつ採取した土壌8点の、合計19点である。分析の目的は、テフラの産状から旧石器時代の石器群を包含する第IV層および石器群に係わる年代資料を得ることにある。

(3) 分析結果

分析は2回に分けて実施した。1回目は4トレンチ西壁A～C地点で採取した土壌11点、2回目はC2NWシタ壁D・E地点とC1NWシタ壁F・G地点で採取した土壌の合計8点を分析した。

1回目の分析では、立川ローム層上部ガラス質火山灰(UG)と共通する中間型および軽石型火山灰ガラスが第V～Ⅲa層にかけて検出された。この火山灰ガラスは、浅間山15,800年前の噴火によるカラフル火山灰に相当するとされる。この結果、第Ⅲa層より上部は古くとも15,800年前以降、第V層より下部は新しくとも15,800年以前に形成された土層となる。また、第IV層ではAT由来のバブル型火山灰を検出したが降灰層準を推定できず、第IV層の形成年代とAT降灰年代の関係は不明であった。

2回目の分析では、中間型および軽石型火山灰ガラスは、浅間火山の15,800年前の火山灰のみに由来するものだけではなく、20,000～25,000年前に噴出した浅間板鼻褐色テフラ(As-BP)などに由来する火山灰ガラスも混在する可能性が指摘された。

以上の結果、今回の火山灰分析では旧石器時代の石器群を包含する第IV層の年代資料を得ることはできなかった。同時に、高尾A遺跡の立地が斜面地で、場所により欠落もしくは局所的にしか認められない土層が存在することなどから、土層形成は不安定な環境下で進行し、石器群も再堆積を経ている可能性が高い。

第5節 高尾古墳群5号墳出土の人骨

茂原信生・櫻井秀雄・本郷一美

はじめに

高尾古墳群5号墳は長野県佐久市にある古墳で、中部横断自動車道の建設に伴い、長野県埋蔵文化財センターによって2013（平成25）年に発掘調査された。その際、横穴式石室の玄室から骨が出土した。出土した骨はすべてヒトの骨と思われる。焼骨と生骨が混在しているが、圧倒的に焼骨が多い。

（1）焼骨

出土した焼骨は、いずれも細片で、同定が困難なものが多い。青黒く焼けたものも混在するので高熱で焼かれたものだけではない。

頭蓋冠の骨が少ない。左側頭骨錐体片がある。四肢骨片は大きいものではなく、大きくても数cmの細片である。橈骨の骨幹部が残っているが、焼けているにしても細い。大腿骨後面の粗線部があるが粗線は細い。焼骨は、1体分かどうかは不明であるが、量的には多くない。多くても数百グラムであろう。1体分の焼骨重量（平均約2kg：茂原ほか1996）よりはるかに少ない。

（2）生骨

焼けていないものの四肢骨はほとんど残っていない。焼けていない歯は、ほとんどが上顎歯で、下顎歯は1本のみである。

上顎歯で左右の第1小白歯から第3大臼歯まで、下顎左第1大臼歯と思われる歯がある。上顎歯の咬耗は軽度であるので20歳前後の若い個体であろう。咬耗度には左右差があり、左の咬耗が右より強い。なぜか不明だが、別個体か、あるいは咬合する下顎第1大臼歯が何らかの理由で脱落していた場合などが考えられる。M3の咬耗はほとんどなく、M2とM3の間に隣接面磨耗がないので、M3が萌出直後の年齢であろう。

隣接面磨耗がうまく合わない歯もあるので1体分とは断定できない。小白歯は左右の形がかなり異なっているため、別個体の可能性もある。

（3）まとめ

生骨と焼骨が混在しているので1体ではない。焼けていない個体は、歯だけが残り、20歳前後の若い個体である。性別は不明である。

引用・参考文献

茂原信生・松島和己（1996）「中村中平遺跡（長野県飯田市）から出土した縄文時代晩期の焼かれた骨片」『飯田市美術博物館研究紀要』6 137-151. 飯田市美術館

第26表 高尾古墳群5号墳出土の人骨同定リスト

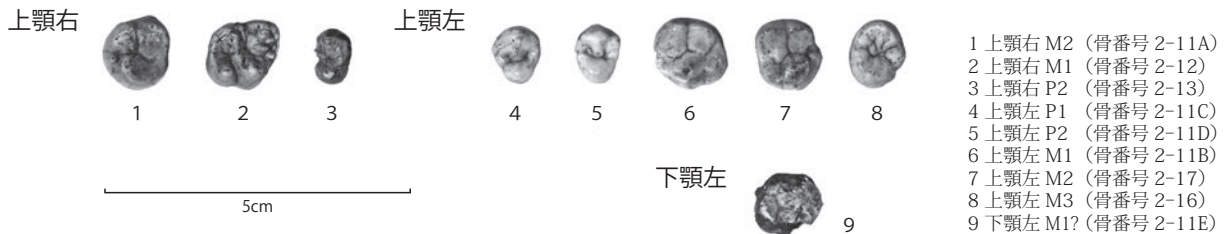
骨番号	種類	出土位置	取上番号ほか	重量 g	生骨／焼骨	部位など	
骨 1-1	骨	石室3区		1.54	焼骨	不明	1点（2×2cmほどのもの）
骨 1-2	骨	石室3区		0.00	不明	不明	ごく細片
骨 1-3	骨	石室3区		4.99	焼骨	大腿骨後面粗線部片	
骨 1-4	骨	石室3区		0.42	焼骨・生骨	歯の歯片は生骨か。他に焼骨細片	

骨番号	種類	出土位置	取上番号ほか	重量 g	生骨/焼骨	部位など	
骨 1-5	骨	石室1区		1.21	生骨?	不明	細片のみ
骨 1-6	骨	石室1区		2.93	焼骨	不明	
骨 1-7	骨	石室3区	No.1	0.17	不明	不明	ごく細片
骨 1-8	骨	石室1区	No.2	0.00	なし		
骨 1-9	骨	石室1区	No.3	0.12	焼骨	不明	ごくごく細片
骨 1-10	骨	石室1区	No.4	0.43	焼骨	不明	細片
骨 1-11	骨	石室1区	No.5	0.00	なし		
骨 1-12	骨	石室1区	No.6	0.29	不明	不明	細片
骨 1-13	骨	石室1区	No.7	17.69	焼骨・生骨	骨頭片、桡骨?、上顎歯槽骨片	
骨 1-14	骨	石室1区	No.8	10.21	焼骨・生骨	不明	不明
骨 1-15	骨	石室1区	No.9	1.55	焼骨	不明	
骨 1-16	骨	石室1区	No.10	32.06	生骨・焼骨	脛骨片	焼けていない。左右は不明。焼骨細片が混在
骨 1-17	骨	石室1区	No.11	0.08	不明	不明	ごく細片
骨 2-1	骨	石室1区	No.12	19.68	焼骨	焼けた上顎大白歯の歯根、四肢骨片	
骨 2-2	骨	石室1区	No.13 全体	37.77	焼骨	頭蓋骨片(頭蓋冠)が数点ある	
	骨	石室1区	No.13 中	1.12	焼骨	下顎左関節頭	
骨 2-3	骨	石室1・3区	No.14	24.75	焼骨	四肢骨片	
骨 2-4	骨	石室1・3区	No.14 直上	25.10	生骨・焼骨	不明	焼骨は細片のみ
骨 2-5	骨	石室1・3区	No.14 直下	11.27	焼骨	不明	
骨 2-6	骨	石室1・3区	No.15	0.29	焼骨	不明	
骨 2-7	骨	石室1区	No.16	49.92	焼骨	下顎骨左切歯部(I1、I2、Cの歯槽)、他に細片	
骨 2-8	骨	石室1区	No.16 直上	3.87	焼骨	細片	
骨 2-9	骨	石室1区	No.17	71.24	焼骨	鱗状の亀裂がある。頭蓋骨片と思われるものがある	
骨 2-10	骨	石室1区	No.17 直下	8.16	焼骨	四肢骨片	不明
骨 2-11	骨	石室1区	No.18	31.87	焼骨	細い焼骨片、左側頭骨錐体片	やや大きめの歯片もあるが部位は不明である。
骨 2-11	骨	石室1区	No.18 中	19.13	焼骨	焼骨	きゃしゃである。焼けている(温度は高くない。亀裂あり⇒生で焼けている)左右は不明
骨 2-11	歯	石室1区	No.18 中 A	0.55	生骨	上顎右第2大白歯	補強材を含む重量
骨 2-11	歯	石室1区	No.18 中 B	0.55	生骨	上顎左第1大白歯	補強材を含む重量
骨 2-11	歯	石室1区	No.18 中 C	0.30	生骨	上顎左第1小白歯	補強材を含む重量
骨 2-11	歯	石室1区	No.18 中 D	0.32	生骨	上顎左第2小白歯	補強材を含む重量
骨 2-11	歯	石室1区	No.18 中 E	0.76	生骨	下顎左第1大白歯?	補強材・土を含む重量
骨 2-12	歯	石室3区	T1	0.60	生骨	上顎右第1大白歯	補強材を含む重量
骨 2-13	歯	石室3区	T2	0.17	生骨	上顎右第2小白歯	補強材を含む重量
骨 2-14	歯	石室3区	T3	1.17	生骨	上顎右第1小白歯	全く咬耗がない補強材を含む重量
骨 2-15	歯	石室3区	T4	0.11	生骨	破片	
骨 2-16	歯	石室1区	T5	0.47	生骨	上顎左第3大白歯	全く咬耗がない。形が通常と異なる。現実に萌出していたかは不明補強材を含む重量

骨番号	種類	出土位置	取上番号ほか	重量 g	生骨/焼骨	部位など	
骨 2-17	歯	石室 1 区	T6	0.67	生骨	上顎左第 2 大臼歯	※通常、12 歳くらいに生える歯である 補強材を含む重量
骨 2-18	骨	石室 1 区	床礫間土水洗	3.30	焼骨	不明	細片
骨 2-19	骨	石室 2 区	床礫間土水洗	0.04	不明	不明	細片が 1 点のみ
骨 2-20	骨	石室 3 区	床礫間土水洗	0.60	焼骨	不明	細片のみ
骨 2-21	骨	石室 4 区	床礫間土水洗	0.10	焼骨	不明	細片のみ
骨 2-22	骨	石室	床礫間土水洗	0.10	焼骨	不明	細片のみ
骨 2-23	骨	石室 1 区	2 層土 (床付近) 水洗	0.40	焼骨	不明	細片のみ
骨 2-24	骨	石室 1 区	2 層土 (床付近) 水洗	0.40	焼骨	不明	細片のみ
骨 2-25	骨	石室 1 区	2 層土 (床付近) 水洗	6.70	焼骨	不明	細片のみ
骨 2-26	骨	石室 1 区	2 層土 (床付近) 水洗	1.10	焼骨	不明	細片のみ
骨 2-27	骨	石室 1 区	2 層土 (床付近) 水洗	6.10	焼骨	2 cm ほどの脛骨骨幹片を含む	細片のみ
骨 2-28	骨	石室 1 区	2 層土 (床付近) 水洗	1.30	焼骨	不明	細片のみ
骨 2-29	骨	石室 1 区	2 層土 (床付近) 水洗	10.90	焼骨	不明	細片のみ
骨 2-30	骨	石室 2 区	2 層土 (床付近) 水洗	0.05	焼骨	不明	細片のみ
骨 2-31	骨	石室 3 区	2 層土 (床付近) 水洗	0.40	焼骨	不明	細片のみ

第 27 表 高尾古墳群 5 号墳出土人骨の歯の大きさ (単位:mm)

左上顎	歯種			M1	M2	M3
	近遠心径	—	—	11.2	10.3	10.9
	頬舌径	—	—	11.5	11.6	9.1
上顎右	歯種	P1	P2	M1	M2	
	近遠心径	4.3	8.7	—	10.3	—
	頬舌径	9.5	—	—	11.5	—



第 70 図 高尾古墳群 5 号墳出土人骨の歯

第6節 小結

高尾A遺跡では、2区で旧石器時代の石器群を検出し、1区では縄文時代前期前葉の竪穴建物跡1軒を調査した。また、未周知の古墳が1基発見され、高尾古墳群5号墳として登録された。

旧石器時代の石器群は、台形石器、搔器状石器、貝殻状刃器の組成は上水内郡信濃町にある野尻湖第I期の台形石器群に対比できる（谷 2007）。野尻湖遺跡群と比較すると、台形石器はやや小型だが、石器製作技術の共通性は高い。小型の台形石器は、群馬県鐮川流域等の北関東地域の台形石器と似ている（群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994）。高尾A遺跡は、黒曜石原産地から北関東方面へ向かう経路上にある。佐久平南部を一望できる高尾A遺跡は、北関東と黒曜石原産地間の経由地として適した場所だったと推測する。

縄文時代では、前期前葉の竪穴建物跡S B 01から関東・北関東地域を主体に分布する二ツ木式と、長野県南信地域を主体に分布する中越式が出土した。中越式は小破片のため不明確だが、口縁部に単沈線で斜格子目文を描くものが存在する点、頸部に括れが認められる点から、中越Ⅱ式（渋谷 1991）に該当する可能性が高い。他時期の土器を混入せず、二ツ木式と中越Ⅱ式の時間的な併行関係が把握できる資料といえよう。また、中越式の胎土は基本的に無繊維だが、高尾A遺跡の中越式には繊維を含むものが存在する。繊維を含む中越式は、長野市お供平遺跡（信州新町教委 1989）、長和町明神原遺跡（長門町教委 2001）、富士見町坂平遺跡（富士見町教委 2004）など、中越式の主体となる分布地域から離れた遺跡で出土しており、本例もそうした例に含まれる。佐久地域周辺は、二ツ木式と中越式の主体となる分布地域からすれば縁辺部だが、両型式の分布が重複する地域でもある。今回、竪穴建物跡S B 01で出土した土器は、そうした地域における縄文時代前期前葉の様相を示す良好な資料と評価できる。石器では、竪穴建物跡S B 01出土の小形剥片石器のほぼ全てが、黒曜石である点が注目される。これらは黒曜石産地推定分析を実施しておらず、黒曜石産地との関係は不明だが、将来的に実施されれば同時期の茅野市駒形遺跡（埋文センター 2007）など、八ヶ岳西南麓との比較が可能になろう。

高尾古墳群5号墳は出土須恵器や横穴式石室の形態から7世紀末～8世紀初頭の築造と推定され、8世紀前半までは追葬が続いていたと推測する。玄室内で出土した人骨は生骨と焼骨があり、追葬が継続する過程で土葬から火葬へと変化したことが窺える。火葬導入期において、火葬骨がどのように埋葬されたかを示す事例のひとつといえる。高尾古墳群1・2号墳は丘陵頂部の稜線上に位置しており、墳丘が低平で大形石材の露出もみられないため、横穴式石室をもつとは考えにくい。斜面に築かれた「山寄せ」古墳である5号墳とは時期・性格が異なる可能性がある。近隣の丘陵斜面に横穴式石室墳が他に存在するのかどうかは、今後の発見に待つほかないが、5号墳の調査成果は、古墳の発掘例が少ない千曲川左岸地域にあって、古代的社会関係の形成過程における地域動向を考える資料となろう。

引用・参考文献

群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994『白倉下原・天引向原遺跡I』旧石器時代編

渋谷昌彦 1991「中越式土器の研究」『縄文時代』2 縄文時代文化研究会

信州新町教育委員会 1989『お供平遺跡』

谷和隆 2007「野尻湖遺跡群における先石器時代石器群の変遷」『長野県立歴史館研究紀要』13

長門町教育委員会 2001『明神原遺跡』

長野県埋蔵文化財センター 2007『駒形遺跡』

富士見町教育委員会 2004『坂平—八ヶ岳南麓における前期初頭から前葉の集落址』

第6章 尾垂遺跡 尾垂古墳

第1節 遺跡の概観と調査の概要

1 遺跡の概観

尾垂遺跡は、八ヶ岳北麓から北東に延びる丘陵上に立地する（第71図）。中部横断道用地は、遺跡北端付近を北西から南東に横断し、地形は丘陵頂部付近の傾斜地とその南側（下方）の段丘面状平坦地とに分かれ、その間は高さ約5mの急崖となる。2000（平成12）年、段丘面状平坦地を主体に中部横断道用地と一部重なる範囲で、市教委により宅地造成に伴う試掘調査が行われた。その結果、調査範囲の北東部から、弥生時代後期の竪穴建物跡4軒以上と溝跡3条が検出された。また、中央部では地表下30cm付近で焼土・炭化物を多量に含む土層が広範囲に認められ、中世から江戸期のカワラケと陶器が出土し、焼土層の東側では礎石とも考えられる石が点在していた。この地には、かつて龍覚寺と称する寺院が存在し、焼失後、他所に移転したとする言い伝えが残り、伝承と検出遺構との関連性が指摘された（市教委2002）。

遺跡近隣の状況は、本遺跡から北西に約600m離れて高尾A遺跡が存在する。高尾A遺跡では、2009・11年度に旧石器時代の石器群、2013年度に縄文時代前期前葉の竪穴建物跡や横穴式石室を内部主体とする古墳（高尾5号墳）を埋文センターが調査した。また、南東約250mの貞祥寺川を挟んだ南側の丘陵に位置する洞源遺跡では、2013・14年度の調査で製鉄炉跡・土坑などを検出したほか、縄文時代と平安時代の遺物が出土した。また、東側約300mに1521（大永元）年開創の洞源山貞祥寺が存在する。

2 調査の概要と経過

（1）2013年度調査の概要

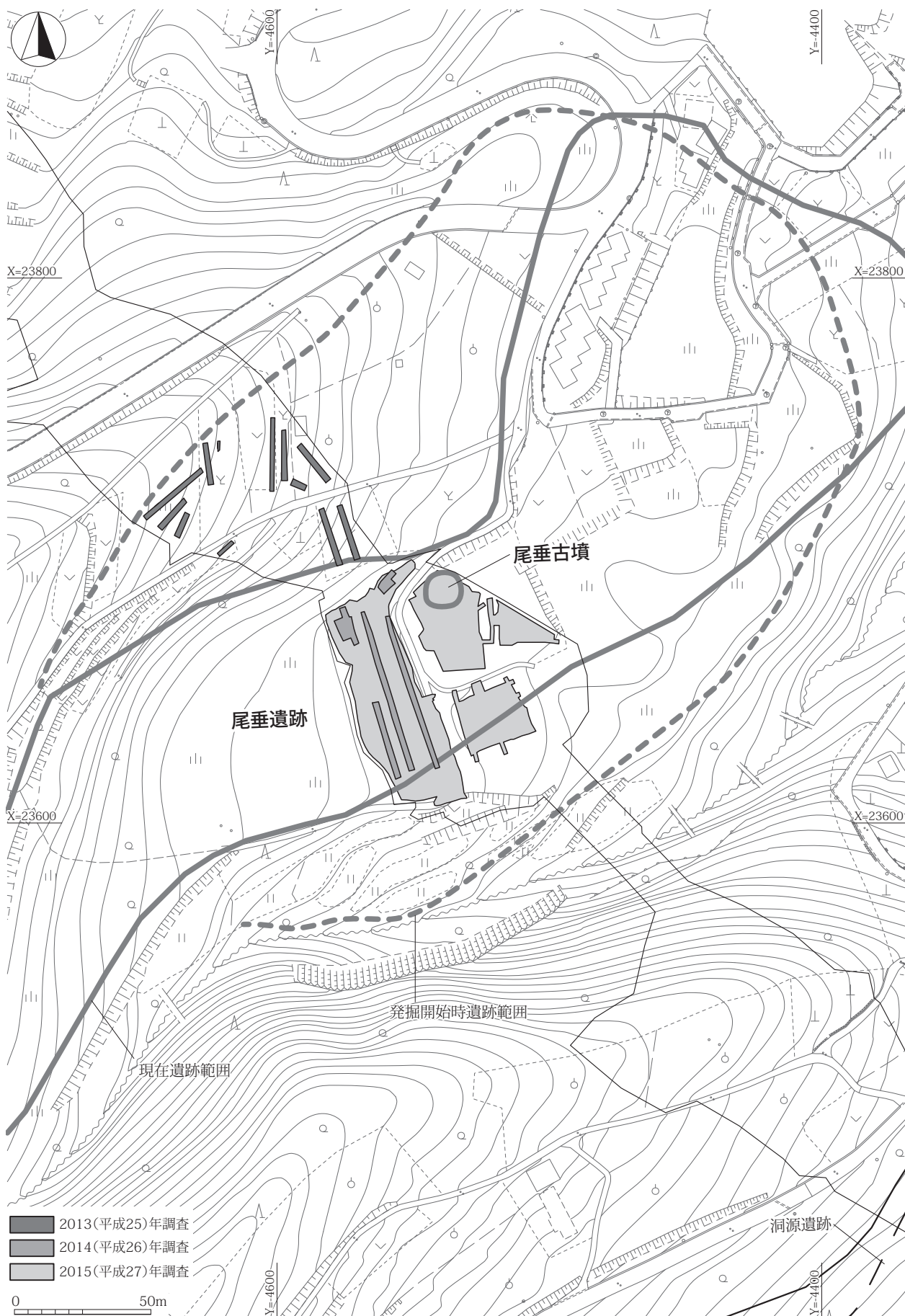
2013（平成25）年度は、丘陵頂部付近の傾斜地で確認調査を行い、必要に応じて面的調査に移行する計画を進めた。対象地内には土取りや墓地造成により大きく削平された箇所があり、基本的にこの削平地を除いた部分に12本のトレンチ（1～12T）を掘削した（第72図）。その結果、表土直下が黄褐色土の地山となり、遺構・遺物は検出されなかったことから面的調査は不要と判断して当該地の調査を終えた。

（2）2014年度調査の概要

2014年度は、前年度調査区の南側にある段丘面状平坦地で確認調査を実施した。丘陵裾部南側の平坦面に6本のトレンチ（13～18T）を掘削した結果（第72図）、平坦面の南側と丘陵南斜面直下で竪穴建物跡3軒、土坑数基を確認した。また、市道を隔てた東側の一段低い地区では、焼土跡を伴う硬化面や礎石と推測される平石を検出したほか、中世の遺物が出土した。これにより、本調査は次年度に実施することとなり養生のうえ埋め戻した。

（3）2015年度調査の概要

前年度に確認調査を実施した南側下方平坦地において、本調査を実施した（第72図）。その結果、古墳1基、平安時代の竪穴住居跡18軒、土坑153基、溝跡3条、中世以降の礎石建物跡1棟などを検出した。



第71図 遺跡範囲・位置図



第72図 トレンチ・調査区配置図

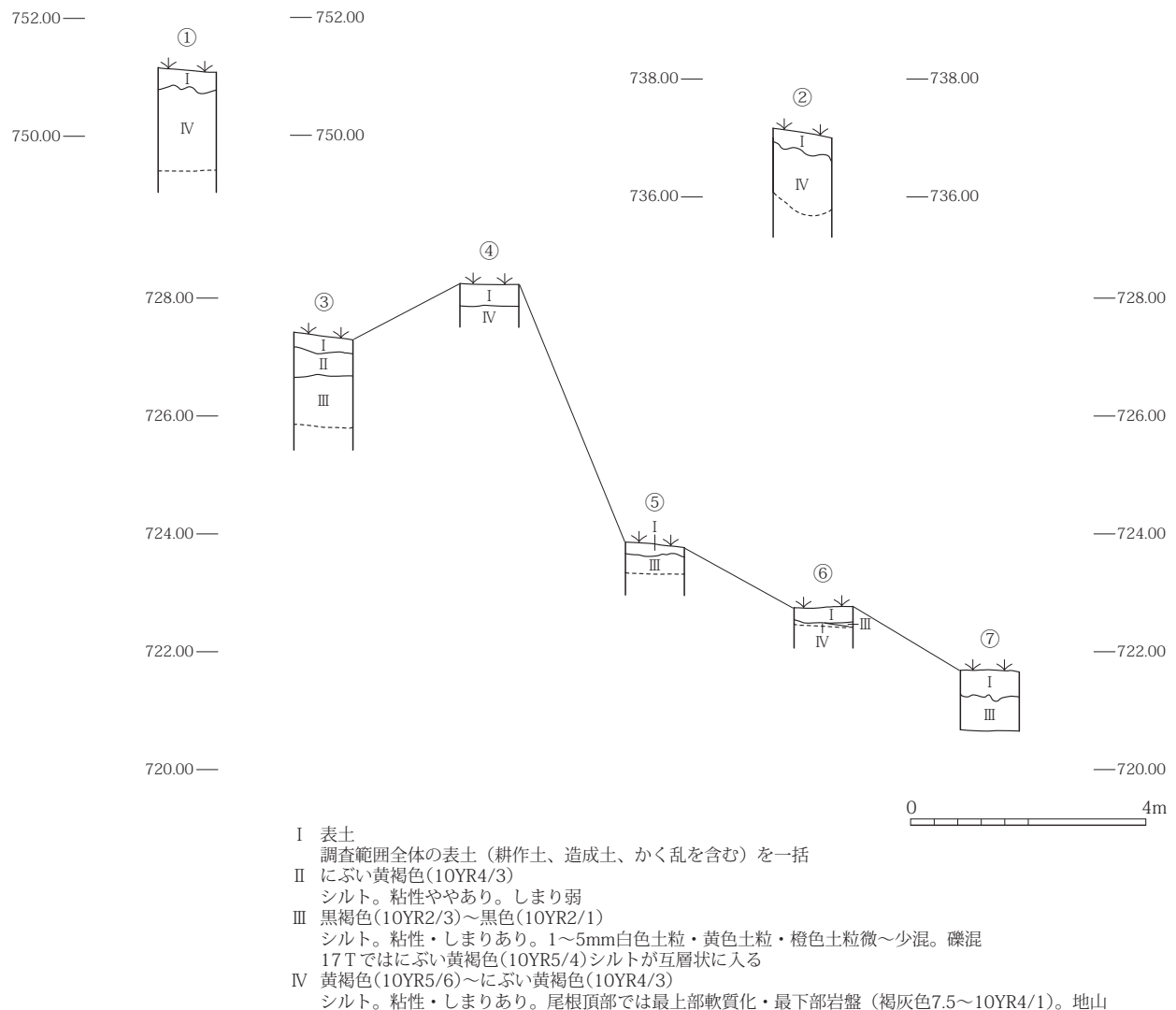
調査区北部の傾斜地で検出した古墳は未周知で、後世の造成で破壊されているが、墳丘裾に巡らされた石列（列石）と周溝の一部が残存する直径約11mの円墳で、石室の構造や規模から7世紀後半頃に築かれたものとする。佐久市内では、千曲川右岸山裾に多くの後期古墳が確認されているが、左岸では少なく貴重な成果となった。また、古墳の南側平坦地では、時期不明だが2間×3間程度の礎石建物跡を1棟確認し、古墳や礎石建物跡より一段上の小高い平坦地では平安時代後半の集落跡を検出した。

3 基本層序

基本層序は第Ⅰ～Ⅳ層に大別した（第73図）。第Ⅰ層は調査区全体の表土を一括する。第Ⅱ層は1区北側のみに存在する。第Ⅲ層は1～2区の谷部を埋積し、細分されるが対比は不明確である。③地点では本層から灰釉陶器と土師器の破片が出土し、⑤地点では本層上面で中世以降の礎石建物跡ほかを検出した。第Ⅳ層は遺跡全体の基盤を成し、1・2区北側の1～9・11・12トレンチでは、第Ⅰ層直下で露出する。1・2区の南側は谷部の埋積土が薄く第Ⅳ層に到達し、その上面で平安時代の遺構を検出した。

引用・参考文献

佐久市教育委員会 2002『市内遺跡発掘調査報告書』



第73図 土層柱状図

第2節 尾垂遺跡

1 概観

尾垂遺跡では、1・2区において竪穴建物跡16軒、掘立柱建物跡1棟、溝跡3条、焼土跡17か所、土坑177基を検出した(第78～80図)。竪穴建物跡2軒、掘立柱建物跡、溝跡1条、焼土跡6か所、土坑10基が、尾垂古墳が立地する北側の2区に散在し、これ以外の遺構は南側の2区に密集して分布する。遺構分布範囲の標高は、1区では723～728m、2区では721～730mの間にあり、2区の比高が大きい。遺構の時期は、竪穴建物跡は出土した土器から平安時代と考えられ、そのほかの多くの遺構は不明である。しかし、土坑と被熱部は竪穴建物跡と同じ範囲に分布し、溝跡と土坑には平安時代の遺物が出土したものが存在することなどを考慮すると、竪穴建物跡と同じ平安時代に該当するものが多いと推測する。また、出土した遺物から中世以降と推測する礎石建物跡1棟と、近世と推測する土坑1基が存在する。

そのほか、遺構外では縄文時代、弥生時代、中世の遺物が出土しており、時期不明の遺構にはこうした時期のものが含まれている可能性がある。

2 縄文～弥生時代の遺物

(1) 縄文土器(第74図1～22、第28表、P L 18)

1～9は早期の土器である。1は押型土器で、磨滅のため観察しにくいだが、縦位の山形文に刺突文が沿うらしい。細久保式であろう。2～8は早期末葉の条痕文系土器で、胎土に繊維を含む。いずれも磨滅が著しい。2・3は同一個体で器厚が薄く、外反気味の口縁部と推定でき、横位の絡条体圧痕文を施す。4・5は内面に縦位条痕文があり、外面は不明である。6は器厚がやや薄く、内外面に横位条痕文を施す。7の外面は横位の捺糸文であろう。8は底部付近で、外面に単節原体を斜位方向に施文し縦位の縄文となる。9は無繊維で、器厚が薄く、口縁部に従位の貝殻条痕文を施文する。東海系の木島Ⅰ・Ⅱ式である。

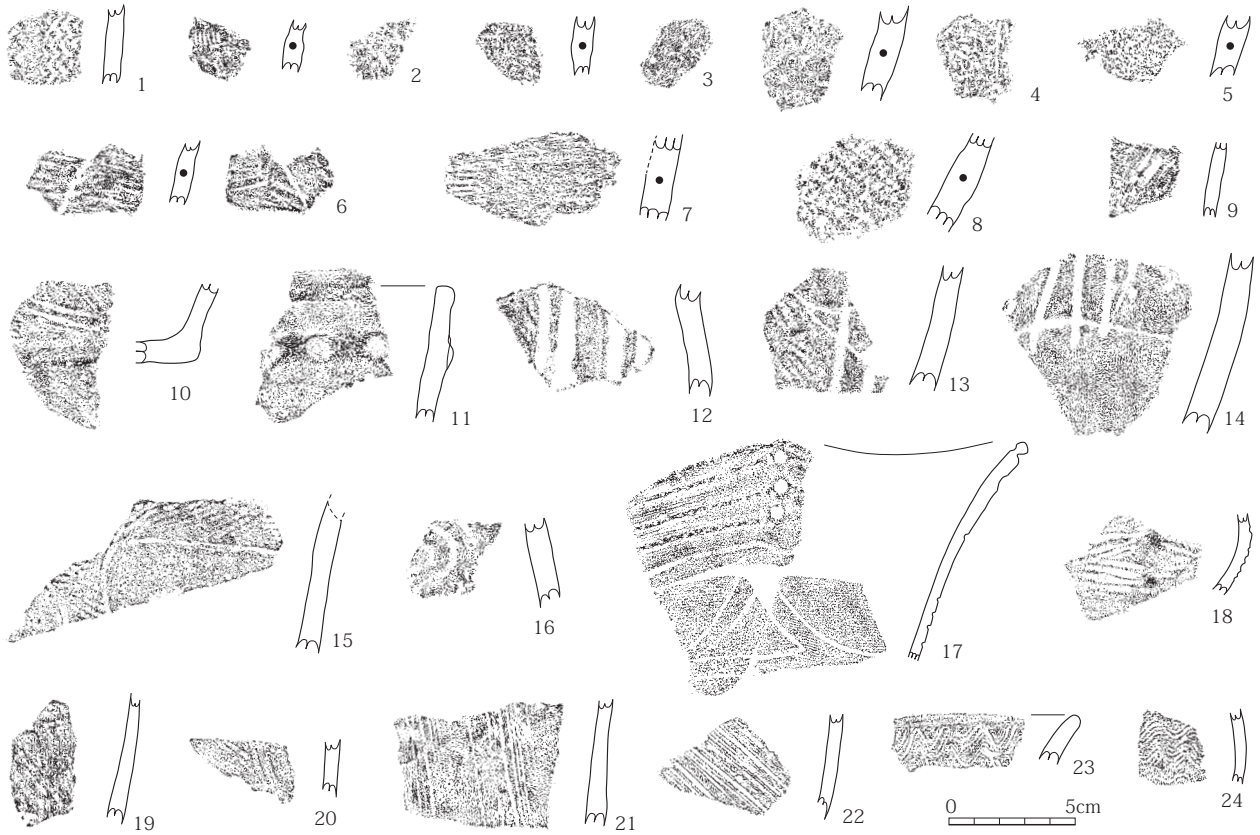
10は前期後葉の土器で、底部に半截竹管状工具による平行沈線を斜位に施文する。諸磯c式である。

11～17は後期の土器である。11は口縁部に押圧痕を施す隆帯が巡る。称名寺式後半に伴う土器である。12は胴部に太く深い数条の沈線を、斜位あるいは蛇行状に描く。13・14は複数条の沈線を、縦位に描く。12・13は沈線意匠外に単節縄文を充填する。これらは堀之内1式である。15は縦・横の沈線区画に、単節縄文を充填する。堀之内2式であろう。16は渦巻文を描く。17はSK109から出土したもので、堀之内2式の朝顔形深鉢である。口縁部に3条の刻み隆線が巡り、波頂下に円形刺突文を加える。隆線下には、やや弧線化した沈線で三角文を描き、きわめて細かい単節縄文を充填する。

18～22は晩期末葉～弥生前期の土器である。18は浅鉢の肩部から胴部である。上下2個一対の瘤状小隆起を起点にして、沈線で変形工字文を描く。氷Ⅰ式直後段階である。19～22は条痕文の甕で、19は縦位、20～22は斜位の条痕を施す。

(2) 弥生土器(第74図23・24、第28表、P L 18)

23・24は櫛描波状文を施す甕の口縁部・胴部破片である。弥生後期に帰属する。



第74図 縄文土器・弥生土器

第28表 縄文土器・弥生土器観察表

図版 番号	P L 番号	管理 番号	出土位置	時 期	器種	部位	文 様 等	色 調		備 考
								外 面	内 面	
74-1	18	0191	1区北谷部	縄文早期前半	深鉢	胴	山形文、刺突	5YR4/6	5YR6/6	細久保式
-2	18	0192	表土	縄文早期末葉	深鉢	口縁	絡条体圧痕文	10YR4/6	10YR6/4	含繊維、3と同一個体
-3	18	0192	表土	縄文早期末葉	深鉢	口縁	絡条体圧痕文	10YR4/6	10YR6/4	含繊維、2と同一個体
-4	18	0193	II P14 No.2	縄文早期末葉	深鉢	胴	外面不明、内面条痕	5YR4/6	5YR1.7/1	含繊維
-5	18	0194	T	縄文早期末葉	深鉢	胴	外面不明、内面条痕	7.5YR5/6	7.5YR2/1	含繊維
-6	18	0195	18 T 上	縄文早期末葉	深鉢	胴	内外面条痕	7.5YR6/8	10YR5/3	含繊維
-7	18	0196	II R06・07	縄文早期末葉	深鉢	胴	撚糸文	7.5YR5/8	10YR4/3	含繊維
-8	18	0197	1区 SB10	縄文早期末葉	深鉢	底	単節縄文	10YR7/4	10YR7/6	含繊維
-9	18	0199	II V12、13、17、18	縄文早期末葉	深鉢	胴	外面貝殻条痕	7.5YR5/6	7.5YR4/4	東海系、木島I・II式
-10	18	0200	II V07、08	縄文前期後葉	深鉢	底	平行沈線	10YR7/6	10YR7/6	諸磯c式
-11	18	0203	SM01	縄文後期初頭	深鉢	口縁	押圧痕を施す隆帯	7.5YR6/8	10YR6/6	称名寺式後半
-12	18	0201	II Q03	縄文後期前葉	深鉢	胴	沈線、単節縄文	7.5YR6/8	7.5YR4/3	堀之内1式
-13	18	0202	18T 上	縄文後期前葉	深鉢	胴	沈線、単節縄文	10YR6/6	10YR6/6	堀之内1式
-14	18	0206	18T 上	縄文後期前葉	深鉢	胴	沈線	10YR4/4	10YR5/6	堀之内1式
-15	18	0204	II L18	縄文後期前葉	深鉢	胴	沈線区画、単節縄文	7.5YR6/8	10YR6/6	堀之内2式か？
-16	18	0205	Z	縄文後期前葉	深鉢	胴	沈線による渦巻き文	10YR7/6	10YR7/6	
-17	18	0078	SK109	縄文後期前葉	深鉢	口縁	刻み隆線、円形刺突、三角文、単節縄文	10YR4/3	10YR3/1	朝顔形
-18	18	0207	II V07、08	縄文晩期末葉～弥生前期	浅鉢	胴	瘤状小隆起、沈線による変形工字文	7.5YR5/6	10YR6/6	氷I式直後段階
-19	18	0208	SB16	縄文晩期末葉～弥生前期	甕	胴	条痕	10YR6/4	10YR4/2	
-20	18	0209	SB16	縄文晩期末葉～弥生前期	甕	胴	条痕	10YR6/4	10YR5/1	
-21	18	0210	II Q08	縄文晩期末葉～弥生前期	甕	胴	条痕	10YR6/6	10YR6/6	
-22	18	0211	SK25	縄文晩期末葉～弥生前期	甕	胴	条痕	10YR7/6	10YR7/6	
-23	18	0212	II P14、15	弥生後期	甕	口縁	櫛描波状文	7.5YR6/6	10YR7/6	
-24	18	0213	SB09	弥生後期	甕	胴	櫛描波状文	10YR6/4	10YR5/4	

(3) 石器 (第75～77図、第29表)

尾垂遺跡では合計534点の石器が出土した。全て遺構外からの出土で、時期は不明確だが、遺構外から縄文時代早期前半・末葉、前期後葉、後期初頭～前葉、縄文時代晩期末葉～弥生時代前期の土器が出土しているため、そうした時期の石器と推測する。

出土した石器の器種は石鏃・石鏃未製品、石錐、石匙、スクレイパー、微細な剥離がある剥片、二次加工がある剥片、打製石斧、石鋏、両極石器、研磨円礫、石核、原石、剥片である。

本稿では両極石器、研磨円礫、剥片を除く各器種から、完形品もしくは特徴を良好に備えているものを抽出し、器種単位で説明する。

石鏃・石鏃未製品 (第75図1～17)

1～12は石鏃製品で、11が円基鏃、12が凹基有茎鏃となるほかは全て凹基無茎鏃である。4・7・9・12は一部に素材面が残り、そのほかは全面に二次加工が及ぶ。凹基無茎鏃のうち、1～4は長さ・幅が近い正三角形状、そのほかはより長身である。比較的抉りが浅いものが多いが、8はいわゆる鋏形鏃である。石材は7・9・10がチャート、4が無斑晶質安山岩、そのほかは黒曜石である。

13～17は石鏃未製品と考えられ、左右の対称性に欠け、13・14は先端の加工、15・16は基部の加工が不十分である。14・17は基部加工に失敗したものであろう。石材は17のチャート以外は黒曜石である。

石錐 (第75図18～20)

18は方形の横長剥片の尖頭部分2か所を錐部とする。19は周縁全体を両面加工して楕円形に仕上げ、薄い下端を錐部とする。20は厚みがある縦長剥片が素材で、両側縁に両面加工を施し打面側に錐部を作る。石材はいずれも黒曜石である。

石匙 (第75図21・22)

21は縦長剥片を素材とする。大きなつまみ部が斜位に付く、横型の石匙である。上下の側縁に粗い加工を施し、直線状の刃部を作る。石材は無斑晶質安山岩である。22は縦長剥片の両側縁を剥離し、刃部を作る。つまみ部の幅がわずかに狭い、縦型石匙である。石材は黒曜石である。

スクレイパー (第75・76図23～28)

搔器的な刃部を作るものと、削器的な刃部を作るものが存在する。23は搔器的な刃部を作る。裏全面に自然面を残す剥片を素材とし、下端に片面加工による急角度の刃部を作る。石材は黒曜石である。24～28は削器的な刃部を作る。24・25は縦長剥片を素材とする。24は裏面の右側縁と下端を細かく剥離し刃部としており、左側縁にはノッチ状の刃部もある。25は正面の左側縁と裏面の右側縁に、片面調整により刃部を作る。26～28は横長剥片を素材とする。26は全面に自然面を残すが、薄い正面左側縁に刃部を作る。27・28は直線状の下端に、27は裏面のみ加工、28は両面加工で刃部を作る。石材は全て黒曜石である。

微細な剥離がある剥片 (第76図29・30)

使用痕と推測される細かな剥片が、連続して観察されるものである。29は縦長剥片の側縁に大まかな剥離、下端に細かい剥離が集中する。30は薄い縦長剥片の両側縁に、まばらな剥離痕がある。石材は29がチャート、30が黒曜石である。

二次加工がある剥片 (第76図31～33)

31には折取り面がある。下縁の両面に剥離を施す。32は上端の打点付近に剥離が集中し、尖頭状となる。33は正面の左側縁に大まかな剥離を施す。裏面は両極剥離であろう。石材は全て黒曜石である。

打製石斧 (第76図34～37)

いずれも刃部側の幅が広く、撥形の形態である。34は上端に自然面を残し、刃部を欠損する。平坦な

素材面を残し、側縁のみ細かく刃潰しする。35は両側縁から大きく剥離し、刃部は斜刃となる。36は欠損した刃部側を再生した基部破片と推定する。37は礫素材と推定できる、厚みのある大形品である。基部を欠損し、側縁を入念に刃潰す。石材は、34の頁岩以外は全て泥岩である。

石鋤 (第76図38)

板状礫を素材とし、大まかな剥離によって基部側の幅を減じ、刃部側の側縁には自然面を残す。刃部を一部欠損する。石材は安山岩である。

石核 (第77図39~43)

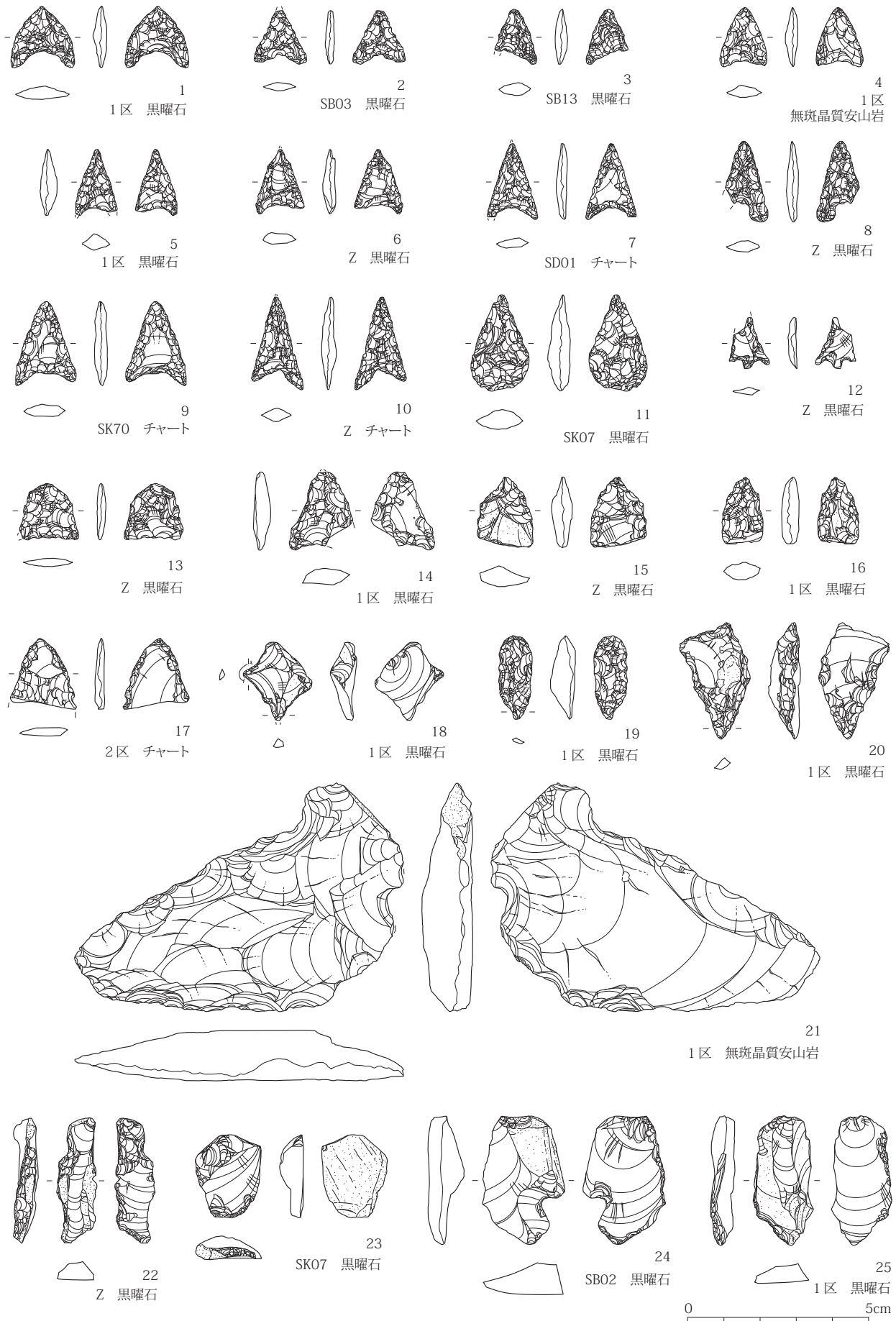
39は上面と下面を打面とし、横長剥片を剥離する。40・41は剥離が少ないが、小型で細長い横長剥片を素材にしたものようである。42は角張った転石の1面を周縁から剥離する。43は上端から正面・裏面を剥離し、断面形は楔形となる。石材は、39のチャート以外は黒曜石である。

原石 (第77図44・45)

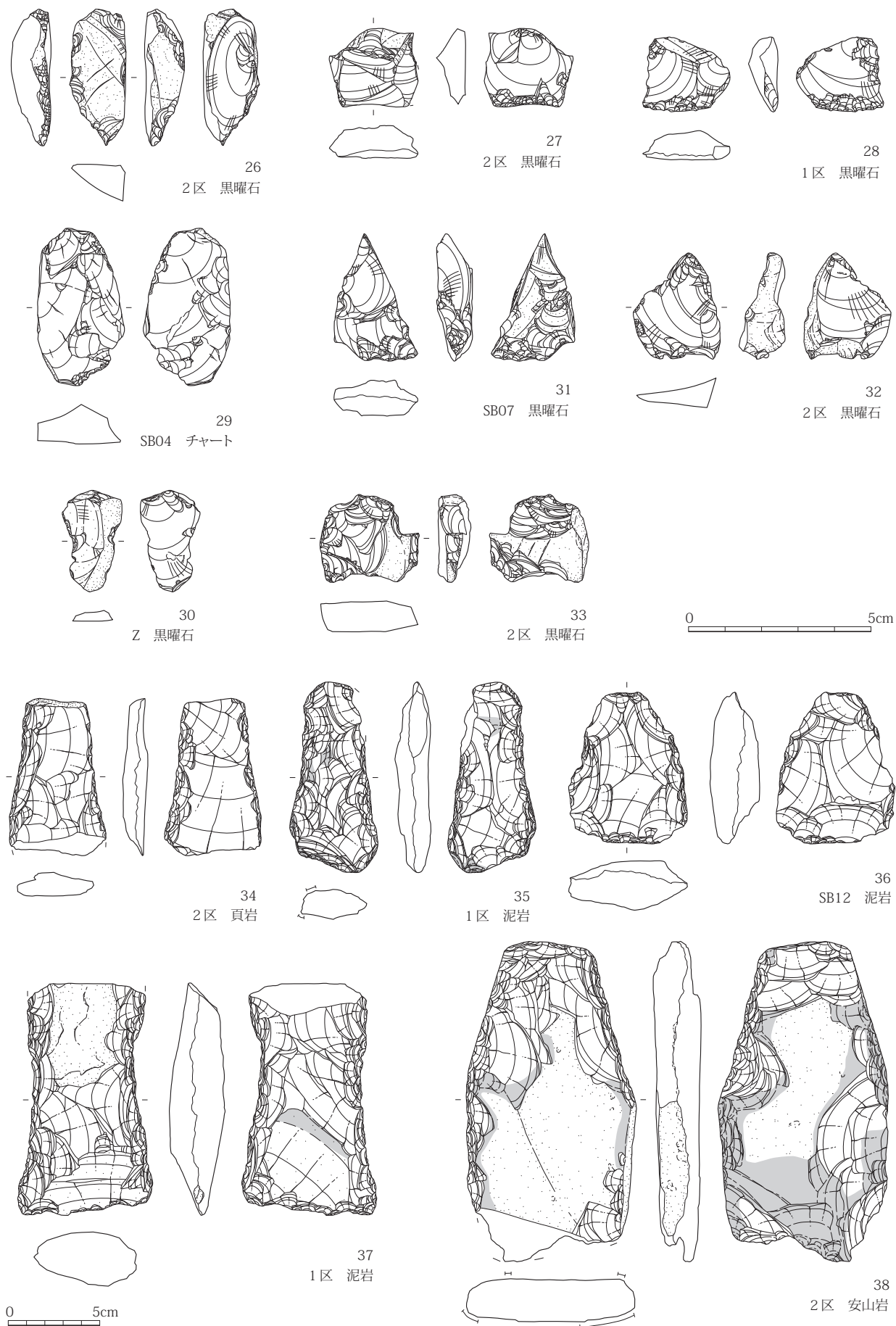
44は小形の転石状、45は剥片状でわずかに剥離痕がある。石材は黒曜石である。

第29表 石器観察表

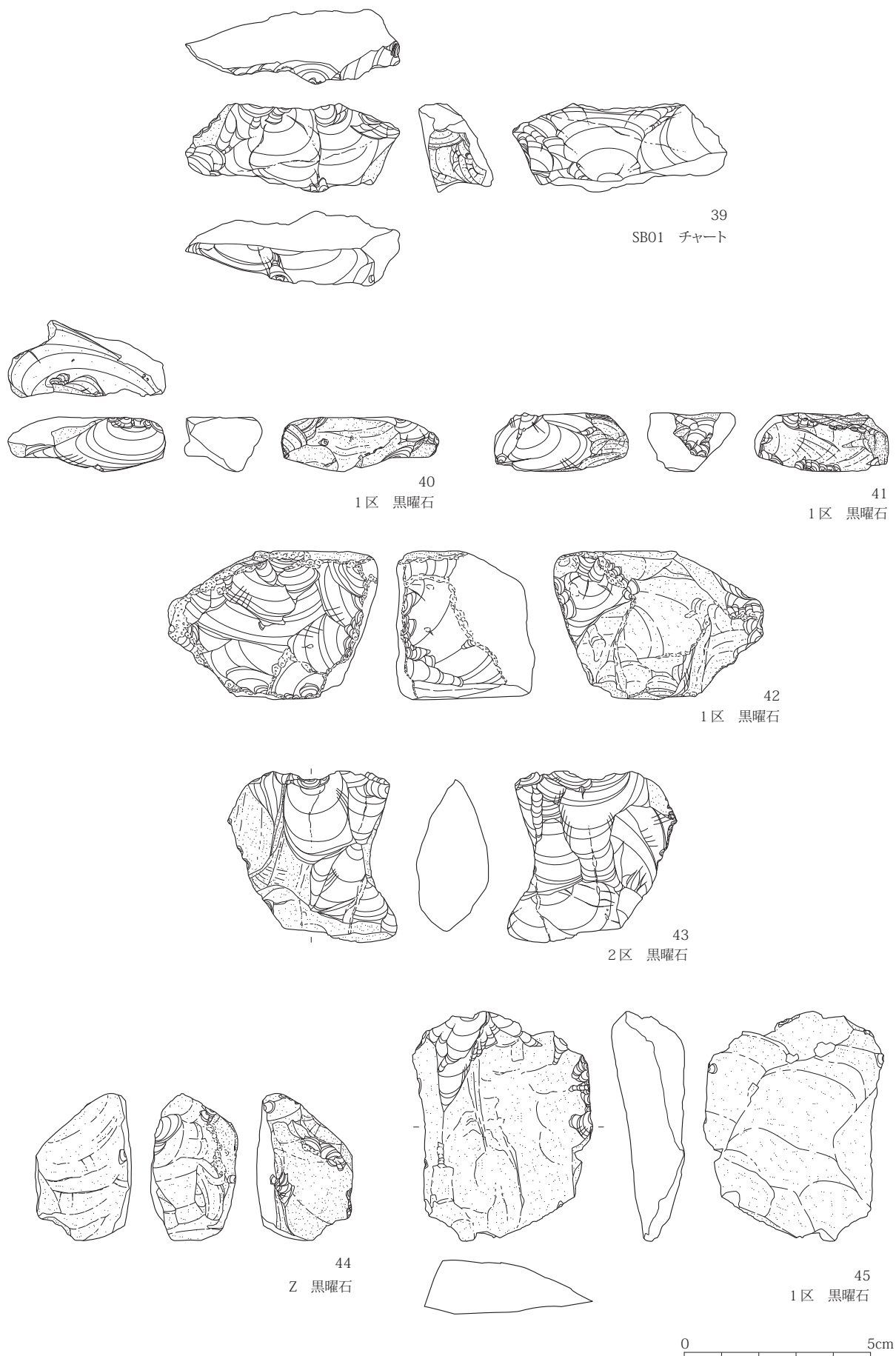
図版 番号	P L 番号	管理 番号	出土位置	器 種	石 材	法 量 (cm、g)				備 考
						長さ	幅	厚さ	重さ	
1		1127	II V06 検出面	石鋤	黒曜石	17.1	17.6	3.7	0.75	無茎
2		1007	SB03 南東部	石鋤	黒曜石	(15.1)	14.7	2.2	(0.37)	無茎
3		1024	SB13	石鋤	黒曜石	(15.3)	12.0	3.3	(0.41)	無茎
4		1063	II P09 表土	石鋤	無斑晶質安山岩	16.8	13.2	3.4	0.61	無茎
5		1110	II V13 検出面	石鋤	黒曜石	(18.4)	(11.5)	4.7	(0.65)	無茎
6		1134	2区 Z	石鋤	黒曜石	18.0	13.3	3.3	0.60	無茎
7		1034	SD01	石鋤	チャート	21.3	(14.1)	2.7	(0.69)	無茎
8		1073	T	石鋤	黒曜石	22.7	(12.0)	3.2	(0.59)	無茎
9		1041	SK70	石鋤	チャート	(23.9)	17.0	3.4	(1.29)	無茎
10		1057	表土	石鋤	チャート	26.2	14.3	4.3	0.87	無茎
11		1032	SD01	石鋤	黒曜石	26.9	16.3	5.9	2.02	円基
12		1124	1区 表土	石鋤	黒曜石	(14.1)	(11.1)	2.3	(0.22)	有茎
13		1076	T	石鋤未製品	黒曜石	15.8	(16.5)	2.6	(0.57)	
14		1089	II Q22 検出面	石鋤未製品	黒曜石	(21.3)	(17.0)	4.5	(1.32)	
15		1062	表土	石鋤未製品	黒曜石	(19.2)	(15.7)	5.7	(1.36)	
16		1095	II V01 検出面	石鋤未製品	黒曜石	(18.6)	(11.4)	4.9	(1.11)	
17		1081	ST01	石鋤未製品	チャート	(20.5)	(18.3)	2.5	(0.99)	
18		1109	II V13 検出面	石錐	黒曜石	14.5	19.3	7.3	1.43	
19		1112	II V08・13・18 検出面	石錐	黒曜石	(23.0)	9.1	6.9	(1.30)	
20		1129	II V11・12 (佐久市トレンチ)	石錐	黒曜石	29.5	16.6	8.6	3.59	
21		1105	II V07・08 検出面	石匙	無斑晶質安山岩	64.5	89.6	13.4	68.58	
22		1077	T	石匙	黒曜石	(11.1)	(34.3)	5.3	(2.16)	
23		1035	SK07	スクレイパー	黒曜石	23.1	18.6	6.4	2.37	搔器
24		1004	SB02	スクレイパー	黒曜石	35.6	22.9	9.5	6.36	削器
25		1023	II V08	スクレイパー	黒曜石	35.8	17.1	6.2	3.62	削器
26		1085	II Q02	スクレイパー	黒曜石	37.6	16.7	10.4	5.81	削器
27		1043	SM01 墳丘上	スクレイパー	黒曜石	21.7	24.3	9.4	3.85	削器
28		1096	II V02	スクレイパー	黒曜石	(23.2)	20.5	6.7	(2.94)	削器
29		1008	SB04	微細剥離剥片	チャート	43.1	24.0	11.3	11.19	
30		1070	T	微細剥離剥片	黒曜石	27.5	16.4	5.8	1.68	
31		1010	SB07	二次加工剥片	黒曜石	33.6	24.7	9.9	5.34	
32		1092	II R01・02 検出面	二次加工剥片	黒曜石	29.6	25.6	11.7	5.34	
33		1093	II R02 検出面	二次加工剥片	黒曜石	24.1	27.3	9.0	6.12	
34		1052	SM01 墳丘上	打製石斧	頁岩	(87.1)	(53.1)	13.3	(69.03)	
35		1131	15T	打製石斧	泥岩	105.1	(48.7)	18.2	(99.83)	
36		1021	SB12	打製石斧	泥岩	83.8	64.7	26.3	137.50	
37		1132	15T	打製石斧	泥岩	(126.3)	(73.9)	30.0	(295.84)	
38		1044	SM01 周溝	石鋤	安山岩	(174.7)	93.0	23.9	(574.67)	
39		1002	SB01	石核	チャート	24.8	56.3	16.3	23.15	
40		1113	II V18	石核	黒曜石	15.2	35.8	23.4	13.49	
41		1050	SM01 墳丘東トレンチ	石核	黒曜石	20.0	40.8	20.4	9.62	
42		1128	II V07・12 検出面	石核	黒曜石	46.2	46.6	20.3	36.33	
43		1084	II L24 検出面	石核	黒曜石	39.7	55.3	36.6	90.03	稜に潰れ有
44		1116	Z	原石	黒曜石	22.3	39.3	26.5	24.23	稜に潰れ有
45		1130	15T	原石	黒曜石	61.2	47.5	17.1	45.68	



第75図 石器(1)



第76図 石器(2)



第77図 石器(3)

3 平安時代以降および時期不明の遺構と遺物

(1) 遺構

竪穴建物跡

S B 01・03 (第81図)

位置：1区、ⅡV 11・12・16・17グリッド。**検出：**基本層序第Ⅳ層上面で検出した。検出時点では1軒の竪穴建物跡を想定してS B 01としたが、埋土の状況を把握するため設けたサブトレンチで、東側に一段深い落込みを確認した。そこで2軒の重複を想定して、深く落ち込む方をS B 03とした。**重複関係：**S B 01がS B 03を貼る。両者の新旧関係について、当初はS B 03が新しいと考えた。しかし、発掘過程で逆であることが判明した。土坑との関係はS K 165を切り、S K 26・31・164・166～176に切られる。**埋土：**S B 01の埋土は黒褐色土の単層(1層)、S B 03の埋土も黒褐色土の単層(5層)である。S B 03埋土の方がわずかに黒味が強くしまりが無いものの、その差はわずかである。**形状・規模：**S B 01・03とも平面形は方形である。S B 01は北および東へ拡張しており、拡張前の規模は南北方向で5mを測る。拡張後は南北方向で6.6m、カマド位置からみて東西方向もほぼ同様であると推測する。S B 03の規模は南北方向5.3mを測る。東西方向は不明である。**床・壁：**S B 01・03とも掘方を平坦に整え床面とする。S B 01はごく一部分であるが、にぶい黄褐色土の貼床(2層)が認められる。床面は、最も高い北東隅から南東へかなり傾斜し、南東部ではS B 03の床面を削り込み、その壁が消失している。S B 01の壁は残存部で最大12cmを測り、斜めに立ち上がる。S B 03残存部には貼床は認められない。壁は残存部で最大11cmを測り、斜めに立ち上がる。**柱穴：**床面で多くの掘込みを検出し、暫定的にピット番号を付した。しかし、整理段階で検討を加え、長径40cm程度以下の円形の11基(P 2～12)と、壁沿いの3基(P 1・13・14)をS B 01・03のピットとし、ほかをS Kに振り替えた。新ピット番号はS B 01・03通しの連番を付した。P 1～5、P 12～14はS B 01に帰属するものと考え。ほかは帰属の判別が困難だが、P 6・10はS B 03の支柱穴の可能性が高い。**周溝：**S B 01の南壁から西壁際に幅13～20cm、深さ3～10cmの周溝を検出した。周溝は西壁沿いを北に延びた後、内側にほぼ90度屈曲して延び、かく乱により消失する。かく乱の東隣にある被熱部F 1はカマド痕跡と考えており、周溝はこの辺りで収束していた可能性が高い。周溝は竪穴壁に沿い、周溝北辺部の北と南では床面のレベル差がない。また、埋土の切合いもないため、周溝に囲まれた部分は、拡張前のS B 01床面と判断した。**カマド：**東端部にある被熱部F 3はS B 01拡張後のカマド跡と考える。S B 01西壁から6.3m、推定東壁のほぼ中央に位置する。中央が若干窪むが、袖・煙道は残存せず、袖石・支脚石の抜き取り痕もない。また、周溝北辺部南側のS B 01床面に形成されたF 1・F 2の新旧は不明であるが、拡張前のS B 01のカマド痕跡と推測する。S B 03のカマドは確認できなかった。なお、F 3の南東隣に不整形な凹部があり、中に焼土が散乱し5～7cm程度の垂角礫が集中していた。礫は袖石とは考え難いため、カマド痕跡とは断定できない。**その他の施設：**S B 03西辺北寄りに棚状部が付設されている。平面台形状を呈し最大幅150cm、奥行80cm、高さ5～8cmを測る。**遺物：**埋土1層(S B 01)・5層(S B 03)から土師器坏・埴・皿、黒色土器埴、灰釉陶器埴、羽釜が出土した。出土は散在的だが、1層の南東部ではやや集中する。図示した土器は1層南東部(S B 01)から出土したものである。5層(S B 03)出土土器は、細片のため図示していないが、様相はほぼ同様である。このほか、S B 01中央北寄りの床面で鉄鎌1点、S B 03北西部の床面で鉄鎌1点出土した。**時期：**出土した土器の様相から、S B 01は10世紀後半、S B 03もほぼ同時期と推測する。

S B 02 (第82図)

位置：1区、ⅡU 10グリッド。**検出：**基本層序第Ⅳ層上面で検出した。南北に直線的な暗褐色土の落込みを確認し、西壁と推定した。壁線の北側では緩やかに屈曲する北西隅と北壁の一部を検出し、ピットと

焼土散布部分を確認した。東壁・南壁は平面では見えず、サブトレンチで壁と床の検出を試みたが、確認できなかった。重複関係：本跡は検出できた掘込みが浅いため、プラン内の小規模な掘込みが本跡のピットか、別の土坑か、検出の時点で判別できなかった。埋土：単層で、白色・黄色土粒を多量に含む暗褐色粘質土が堆積する。形状・規模：削平が著しいため形状は不明確だが、西壁と北西隅および周溝から、隅丸方形、あるいは南壁が多角形となる六角形と推定する。規模はピットの配列から、東西・南北方向ともに6m内外と推測する。床・壁：掘方・貼床は見られず、地山を床面とする。西壁から東方向に、約1mの範囲で安定した平坦面が残る。壁はほとんど残存しない。柱穴：周溝がある西壁とその延長線上にあるP14・15・16、東壁側のP25・26・27、北壁側のP9・11・13、南壁側のP2・5・7・8は長径・深さとも40cm以上あり、ほぼ等間隔の整然とした配列から壁柱穴と考える。柱痕を認めたピットは、P3・6・7・18・25で、P3は判然としない。平安時代に壁柱穴で構築する竪穴建物跡は例が少なく、ほかの竪穴建物跡とは性格が異なる施設であった可能性がある。周溝：西壁北半部と推定する部分で、長さ約3.2mの周溝を検出した。カマド：北壁中央付近の床面上で、焼土粒子を多量に含む土壌を検出したが、土壌の下部や周辺に被熱痕はなく、構築材の粘土や火床、灰もなかった。その他の施設：床面で検出したP20・21は掘込みが浅く、掘方の一部と考える。P24は床面精査時に検出したが、規模・形状から本跡に伴うものとは考えにくく、切合い関係にある土坑であろう。埋土はほかの土坑より軟質で、炭化物が多く混入し多量の大礫を含む。遺物：出土量は少なく全て小破片である。土師器・黒色土器の坏・埴が多く、甕・小型甕も少量含まれる。須恵器・灰釉陶器はごく少量である。時期：出土した土器の時期から、9世紀後半と推測する。

S B 04 (第83図)

位置：1区、II V 6・11グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：S B 09を切る。S B 04とS B 09を通るサブトレンチで、S B 09の埋土中にS B 04の床面を確認した。また、S K 67～70と重複するが新旧関係は不明である。埋土：単層で、礫を含む黒褐色土が堆積する。形状・規模：残存部からみて、形状は方形と推測する。規模は残存部で東西方向4.9m、南北方向4.6mを測る。床・壁：掘り抜いた地山を床面とするが、礫が露出し凹凸がある。壁高は西壁で最大17cmを測り外傾する。周溝・カマド：なし。中央西寄りに通る南北トレンチ部分か、削平された東側にあった可能性がある。その他の施設：なし。遺物：床面、埋土から土師器坏、灰釉陶器碗が少量出土した。時期：出土した土器の時期をもって、10世紀後半と推測する。

S B 05 (第84図、P L 16)

位置：1区、II K 20・25、II L 16・21グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：S K 02・03に切られる。S B 06を切る。S B 06埋土上部に、S B 05の貼床を確認した。埋土：単層で、暗褐色土が堆積する。形状・規模：残存部からみて、形状は方形もしくは長方形と推定する。規模は東西方向3.5m、南北方向の残存部で1.6mを測る。床・壁：S B 06埋土上部の途中まで貼床を確認したが、途中で不明確となった。壁は大半を失うが、東壁の残存部で50cmを測り、少し傾斜して立ち上がる。周溝・カマド：なし。付属施設：性格不明だが、東側床面で被熱部を検出した。遺物：床面付近から土師器杯と砥石などが出土した。時期：出土した土器の時期をもって、11世紀前半と推測する。

S B 06 (第84図、P L 16)

位置：1区、II K 20・25、II L 16・21グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：S B 05、S K 01に切られる。S B 06埋土上部でS B 05の貼床を確認した。埋土：2層が堆積する。ややしまりが弱い暗褐色土(4層)が最下層で、上部に褐色土ブロックが混入した暗褐色土(3層)が堆積する。2層はS B 05の貼床である。形状・規模：南側が削平されているが、形状は方形もしくは長方形

と推測する。規模は東西方向4.0 m、南北方向は残存部で2.7 mを測る。床・壁：S B 05床面より20cm前後深い位置に床面がある。貼床はない。壁は北壁の残存部で最大30cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。柱穴：なし。周溝：北壁東半から東壁際で周溝を確認した。周溝はP 1からつながる溝と北壁で連結する。カマド：北壁西寄りに2か所あり、煙道がわずかに残る。煙道付近に礫が立つ西側のカマドが新しい。西側のカマドを中心に焼けた礫や割れた礫が散乱する。東側の古いカマドは強く被熱し、焼土が厚い。その他の施設：性格不明だが、壁際に楕円形を呈する3基の土坑がある。P 1は深さ40cmで、周溝ほか2条の溝とつながる。P 2は深さ20cmで、棚状の高まり付近に位置する。P 3は深さ18cmで、北壁中央に位置する。西側のカマド左側から北西壁コーナー付近にかけて、棚状に高まる。東半部床面に周溝以外の溝が2条あり、P 1と連結する。遺物：西側のカマド周辺から棚状の高まりにかけて、黒色土器坏、土師器坏・壙・甕・羽釜などが出土した。P 2からは略完形の土師器壙、割れた円礫が入った黒色土器坏の破片が各1個体出土した。時期：出土した土器の時期をもって、10世紀前半と推測する。

S B 07 (第83図)

位置：1区、II V 13グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：なし。埋土：壁際に断面三角形の2層暗褐色土が堆積した後、その上部を1層の黒褐色土が埋積する。形状・規模：平面形は隅丸方形であるが、北東・南東コーナー部分と東壁を欠く。規模は南北方向3.6 m、東西方向は残存部で2.9 mを測る。床・壁：貼床はなく、地山を床面とする。床面は礫が露出した状態である。柱穴：位置からみて、柱P 1～3を柱穴と考える。北東部にはなかった。周溝・カマド・その他の施設：南壁中央付近で検出したP 4・5を、出入口に関わる施設と推測する。遺物：南壁付近で、床面より若干浮いた状態で、完形・半完形の黒色土器・土師器の坏が集中して出土した。またP 2・3の間で鉄滓が出土した。時期：出土した土器の時期をもって、10世紀前半と推測する。

S B 08 (第83図)

位置：1区、II V 13・18グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。西壁と北西壁コーナー付近のみ残存していた。重複関係：S K 14・17・18などと重複していた可能性があるが、削平のため詳細は不明である。埋土：単層で、暗褐色土が堆積する。形状・規模：形状は不明だが、残存部からみて方形もしくは長方形と推測する。規模はいずれも残存部で南北方向3.2 m、東西方向2.0 mを測る。床・壁：地山を床面とし、径2～19cm程度の礫が多量に露出し凹凸がある。貼床はない。壁は北西壁コーナー付近の最深部で12cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。柱穴・周溝・カマド・その他の施設：なし。遺物：埋土から甕の破片が少量出土した。時期：平安時代だが、土器が小破片で詳細は不明である。

S B 09 (第85図、P L 16)

位置：1区、II V 06・07・11・12グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：S B 04に切られる。S B 09埋土中に、S B 04の床面を確認した。埋土：単層で、礫混じりの黒褐色土が堆積する。形状・規模：残存部からみて、形状は方形と推測するが多角形を呈する可能性もあり、全体的にゆがむ。規模は残存部で東西方向3.3 m、南北方向4.0 mを測る。床・壁：地山を床面とするが、礫が露出し凹凸がある。壁は最大で13cmを測り外傾する。柱穴：位置からみて、P 2・4を主柱穴と推測する。周溝：カマド右側から東壁際北半にかけて幅10～32cm、深さ10cmの周溝が巡る。カマド：北壁中央部にある。火床は幅34cm、長さ42cmの楕円形で、北壁から長さ40cmの煙道下部が延びる。火床の東西には袖構築土の黄褐色粘質土4層と、袖心材の抜取り痕がある。カマドからは伏せた土師器壙と、カマドを構築する礫が多数出土した。その他の施設：土坑2基を検出した。カマド付近のP 1は、カマド芯材の抜取り痕と考える。南側にある円形のP 3は、性格不明である。遺物：カマド右側を中心に黒色土器坏、土師器坏・壙・甕などが出土した。また、カマド内部では土師器壙が伏せられ、P 2では正位の状態黒色土器壺が

出土し、口縁部を土師器坏底部で塞いでいた。**時期**：出土した土器の時期をもって、10世紀前半と考える。

S B 10 (第85図、P L 16)

位置：1区、II V 02・07グリッド。**検出**：基本層序第IV層上面で検出した。**重複関係**：S B 12、S K 163に切られる。**埋土**：基本的には単層だが、南壁付近では壁際に断面三角形状の2層褐色土が堆積し、その上部を1層暗褐色土が埋積する。**形状・規模**：形状は隅丸方形で、規模は東西方向5.4 m、南北方向5.3 mを測る。**床・壁**：中央付近は、粘性やしまりがある暗褐色土で掘方を埋戻し、やや硬度のある床面を構築する。**柱穴**：位置からみてP 1・2を支柱穴と考える。**周溝**：なし。**カマド**：東壁中央よりやや南側に位置する。煙道の立上り、右側の袖石と左側の袖石の抜取り痕、火床の痕跡である焼土が残存する。**その他の施設**：性格不明の土坑6基(P 3～8)を検出した。また、南壁の西半部には、地山を削り残して作る長さ265cm、幅55～64cm、高さ7～16cmのテラス状施設がある。**遺物**：黒色土器、土師器、灰釉陶器などが出土した。**時期**：出土した土器の時期をもって、10世紀前半と推測する。

S B 12 (第86図、P L 17)

位置：1区、II V 07グリッド。**検出**：基本層序第IV層上面で検出した。**重複関係**：S B 10を切る。**埋土**：2層が堆積する。壁際から床面直上にかけて2層暗褐色土が堆積し、その上部を1層黒褐色土が埋積する。**形状・規模**：形状は隅丸方形で、規模は東西方向2.4 m、南北方向2.8 mを測る。**床・壁**：貼床はなく地山面を床とする。床の状態は礫が少ない平坦面である。壁は残存部で高さ48cmを測り、直立気味に立ち上がる。**柱穴・周溝・カマド**：なし。**その他の施設**：性格不明だが、中央付近で楕円形を呈する土坑P 1を検出した。**遺物**：黒色土器坏・碗、土師器坏・甕、灰釉陶器、鉄鏝などが出土した。**時期**：出土した土器の時期をもって、10世紀前半と推測する。

S B 13 (第86図)

位置：1区、II V 01・02グリッド。**検出**：基本層序第IV層上面で検出した。**重複関係**：S D 01に切られる。**埋土**：単層で、暗褐色土が堆積する。**形状・規模**：形状は、南壁から西壁にかけての残存部から不整形あるいは不整形長方形と推測する。規模は東西方向の残存部で1.7 m、南北方向の残存部で2.9 mを測る。**床・壁**：地山を平坦に整え床面とする。壁は残存部で30cmを測り、斜めに立ち上がる。**柱穴・周溝・カマド・その他の施設**：なし。**遺物**：土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器の破片ほか、羽口と鉄滓が出土した。**時期**：不明確だが、出土した土器の時期をもって、10～11世紀と推定する。

S B 14 (第86図)

位置：1区、II U 05、II V 01・06グリッド。**検出**：基本層序第IV層上面で検出した。検出面がほぼ床面で不明な点も多いが、西・南壁際の一部に残る周溝の存在を根拠に竪穴建物跡と考えた。**重複関係**：残存状態が悪く不明。周辺に土坑が多いため、S B 14に所属する土坑としたもの(P 1～8)の中に、そうではないものを含む可能性がある。**埋土**：部分的に1層暗褐色土が残存した。**形状・規模**：形状は、南西壁コーナー付近からみて方形あるいは長方形と推測する。**床・壁**：床面の状態は残存部が少なく不明である。壁も残存しない。**柱穴**：土坑8基(P 1～8)の中に存在する可能性はあるが、配置が不規則など不明確である。**周溝**：西・南壁際に巡る。途中で途切れる。**カマド**：なし。**その他の施設**：上述の土坑8基のほか、性格不明の被熱部2か所を、S B 14の範囲内と推測する位置で検出した。**遺物**：少量の土師器破片などが出土した。**時期**：不明確だが、出土した土器の時期をもって、10～11世紀と推測する。

S B 15 (第87図)

位置：1区、II V 01グリッド。**検出**：基本層序第IV層上面で検出した。**重複関係**：S F 03・04に切られる。S F 03・04はS B 15の埋土中で検出しており、S B 15の埋没過程にある被熱部と推測する。また、S B 14のP 2・8がS B 15の壁を切る。しかし、P 2・8はS B 14に所属するものなのか不明確

であることから、S B 14 との重複関係も不明である。埋土：2層が堆積する。褐色土粒を含む2層暗褐色土が壁際から床面にかけて厚く堆積し、その上部全体を1層暗褐色土が埋積する。1・2層ともに炭化物粒・焼土粒・礫を含む。形状・規模：形状は長方形を呈する。規模は東西方向2.8 m、南北方向2.2 mを測る。居住用としては小規模すぎるので、別の機能をもつ施設の可能性がある。床・壁：地山まで掘下げて床面とする。貼床の痕跡はない。壁は50cmを測り、斜めに立ち上がる。柱穴：なし。周溝：南壁際から南西壁付近にかけて、途中で途切れる周溝を検出した。カマド・その他の施設：北壁にかかる土坑P 1・2を検出したが、性格は不明である。遺物：黒色土器坏と土師器坏の破片が出土した。時期：出土した土器の時期をもって、10世紀前半と推測する。

S B 16 (第87図)

位置：1区、II W 1 グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：なし。埋土：単層で、黒色土が堆積する。形状・規模：形状は長方形で、規模は東西方向2.5 m、南北方向3.5 mを測る。床・壁：掘り抜いた地山を床面とする。壁は残存部の最大で10cmを測り外傾する。周溝・カマド：なし。その他の施設：土坑5基(P 1～5)を北西・北東・南東コーナー付近で検出したが、性格は不明である。遺物：黒色土器、土師器、灰釉陶器などの小破片と鉄鎌の小破片が出土した。時期：出土した土器が小破片で不明確だが、10世紀代と推測する。

S B 17 (第87図)

位置：2区、II Q 25、II V 05 グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：S K 148 と重複するが、新旧関係は不明である。埋土：壁際に断面三角形の2層黒褐色土が堆積し、その上部を1層黒褐色土が埋積する。形状・規模：形状は隅丸長方形で、南西壁コーナー部分が突出する。規模は南北方向2.5 m、東西方向1.9 mを測る。床・壁：地山面を整え床面とする。壁は13～16cmで、斜めに立ち上がる。柱穴・周溝・カマド・その他の施設：なし。カマドや付属施設が確認できなかったので、別の機能をもつ施設の可能性がある。遺物：黒色土器、土師器、須恵器、灰釉陶器の小破片が少量出土した。時期：不明確だが出土した土器の時期をもって、10世紀代と推測する。

礎石建物跡

S T 01 (第93図、P L 17)

位置：2区、II Q07・08 グリッド。検出：本跡は2000年に市教委が実施した試掘調査において確認されたもので(市教委2002)、今回の調査により、東西・南北方向に直線的かつ等間隔に平石が並ぶ状況を確認し、礎石建物跡であることが明確になった。礎石上面は表土直下で検出した。重複関係：S K 158 は礎石掘方を切る。埋没：礎石掘方(4層)および礎石側面は焼土粒・炭化物を含有する2層が埋めており、2層の上位に、やや性状が異なる1層土が一部残存していた。構築：基本層序第III層上面から切り込む掘方内に礎石を据えている。構築面となる第III層上面は平坦に整っており、構築に先立ち整地が行われたことを推測し得る。1・2層は本建物の廃絶後の形成層と判断する。形状・規模：7か所の礎石残存(S 1・3・4・7・8・9・11)、4か所の礎石抜痕(3層)ないし掘方残存(4層)(P 1・3・4・5)から、東西3間×南北2間、東西方向5.4 m、南北方向3.6 mの総柱建物が復元できる。ただし、東側のS 5・6・10は柱筋にほぼ揃うため、さらに東に延びるか、付属部をもつ可能性がある。礎石の大きさは、最大長40～60cm、厚さ18～22cmである。遺物：礎石掘方から平安時代の土師器・黒色土器小細片が、建物プラン内の2層中および上面で瓦塔、青磁碗、青白磁梅瓶、常滑甕が出土した。建物プランからやや離れるが、2層上面で永楽通寶が出土している。時期：礎石掘方出土の遺物から、平安時代以降であることは確かといえる。これ以上の限定は困難だが、周辺から出土した遺物の時期をもって、15世紀前半以降と推測する。

溝跡

SD 01 (第88図)

位置：1区、II Q 22、II V 02 グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：SB 13を切る。埋土：検出部分の比高約1.5mを測り、地点により埋土の性状が異なる。上部(A-B)では暗褐色土の単層、中部(C-D)では粒径が異なる黒褐色土、下部(E-F)では黒色土と黒褐色土が堆積する。形状・規模：標高約724.4m～726.0mの等高線に直交し、南西から北東へ流下する。延長15.1m、幅2.0～2.6m、深さは0.2～0.3mを測る。遺物：平安時代の黒色土器、土師器、須恵器、灰釉陶器の破片と、鉄滓類、羽口、炉壁が出土した。時期：切合いと出土遺物から、10～11世紀以降と推測する。自然流路の可能性もある。

SD 02 (第88図)

位置：2区、II Q 24・25 グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：なし。埋土：単層で、暗褐色土が堆積する。形状・規模：平面形はL字形を呈する。等高線と直交する東西方向の延長4.6m、南北方向の延長1.6m、深さ20cmを測る。遺物：なし。時期：時期決定の根拠がなく不明である。

SD 03 (第88図)

位置：2区、II M 21、II R 01 グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：SF 09～11に切られる。SD 03埋土上部に、被熱部SF 09～11がある。埋土：3層が堆積する。1層黒褐色土と3層黒色土の間に、2層の薄い炭化物層が入る。形状・規模：等高線に平行し、ほぼ南北方向に延びる。南はかく乱で消失、北は調査区外に及ぶ。確認できた長さは5.8mで、幅48～72cm、深さ30cmを測る。断面形はU字状を呈する。遺物：平安時代の土師器壺・高台付皿、須恵器多嘴壺、灰釉陶器皿、鉄滓が出土した。時期：埋土から出土した土器の時期をもって、11世紀前半と推測する。

土坑

土坑は1区で113基、2区で69基、合計182基検出した。1・2区とも、平安時代の竪穴建物跡が群在する南半部に密集して分布する。時期の特定が困難な土坑も多いが、上記の分布状況や、中世の遺物を出土した土坑が近世以降のSK 153のみであることを考慮すると、土坑の大部分は平安時代集落の存続期間に掘られたものと考えられる。

本項では、形態・構造や遺物出土状況に特徴的な様相がある土坑について、簡潔に記述する。個々の属性は、添付DVD収録の「尾垂遺跡土坑一覧表」に掲載した。

SK 01 (第90図)

位置：1区、II K 25 グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：SB 06を切る。埋土：3層黒褐色土の上部に焼土混じりの1・2層暗褐色土が堆積する。形状・規模：長径76cm、短径66cmのやや楕円気味の円形で、底部は鍋底状である。深さは25cmを測る。遺物：埋土中位から小型の土師器坏が割れた状態で出土した。時期：出土した土器の時期をもって、11世紀前半と推測する。

SK 03 (第90図、PL 17)

位置：1区、II K 20・L 16 グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：SB 05を切る。埋土：壁際の3層暗褐色土と中央の2層暗褐色土を、1層褐色土が埋積する。形状・規模：長軸180cm、短軸60cmで、等高線と平行する東西方向に長い長方形を呈する。底面は平坦で深さ30cmを測る。西端部に地山の礫が露出する。壁はほぼ直立する。遺物：土坑底面中央部で鉄製品、灰釉陶器壺、土師器壺が出土した。鉄製品は北壁際に鎌、刀子、棒状鉄製品等がひとまとまりに鏽着した状態、灰釉陶器壺は逆位の状態、土師器壺は正位で潰れた状態である。人骨の遺存や木棺の痕跡はなかったが、上記の副葬品を伴う墓と判断する。時期：出土した土器の時期をもって、11世紀前半と推測する。

S K 14 (第90図、P L 17)

位置：1区、ⅡV 18グリッド。検出：基本層序第Ⅳ層上面で検出した。重複関係：なし。埋土：単層で、にぶい黄褐色土が堆積する。形状・規模：長軸209cm、短軸84cmで、等高線と平行する南北方向に長い隅丸長方形を呈する。底面はほぼ平坦で深さ最大16cmを測る。壁は底部付近がわずかに残存する。遺物：内部に、頭位を北にとり、下肢を伸ばした状態の人骨1体が納まっており、本土坑が墓であることは確実である。木棺の痕跡はなかった。茂原信生氏・櫻井秀雄氏・本郷一美氏に人骨の鑑定を依頼し、結果を第4節に掲載した。鑑定によると、被葬者は身長およそ150cmで、成人だが性別不明である。なお、第90図中の骨番号は222・223頁の第30表に一致する。人骨の右下肢骨付近から、刀子1点が出土した。時期：不明確だが、平安時代集落の外縁部に位置することから、集落存続期間に重なる一時期と推測する。

S K 15 (第90図、P L 17)

位置：1区、ⅡV 06グリッド。検出：基本層序第Ⅳ層上面で検出した。重複関係：S B 09に切られる。埋土：単層で、黒色土が堆積する。形状・規模：残存部の平面形は不整な方形で、北西—南東40cm、北東—南西31cm、深さ12cmを測る。断面形はU字状を呈する。遺物：ほぼ同形同大の土師器小型甕5個体が、正位の状態で並んでいた。時期：出土した土器の時期と、10世紀前半と推測するS B 09に切られることをもって、10世紀前半と推測する。

S K 23・30 (第90図)

位置：1区、ⅡV V07・08グリッド。検出：基本層序第Ⅳ層上面で検出した。重複関係：S B 07とS B 12の間にあり、S K 23がS K 30を切る。形状・規模：S K 23は長軸222cm、短軸174cm、最大深さ50cm、S K 30は長軸193cm、短軸129cm、最大深さ50cmを測る。両者ともテラス状の浅い部分があり、同一層が連続するため重複ではないと判断する。埋土：どちらも埋土は暗褐色土で、含有物の差により3分層した。S K 30の4層を除き、地山の黄褐色土ブロックを多量に含み、人為的に埋戻した可能性がある。遺物：S K 23から略完形の黒色土器碗が出土した。時期：出土した土器の時期をもって、9世紀後半と推測する。

S K 99 (第91図、P L 17)

位置：2区、ⅡQ 25グリッド。検出：基本層序第Ⅳ層上面で検出した。黒褐色土の落込み内側に円礫が巡る。重複関係：なし。形状・規模：長径143cm、短径112cmの楕円形で、深さ22cmを測る。掘込みの縁に沿って長径15~30cmの円礫と割れた円礫を並べる。本遺跡でこのような形態の土坑は、本例のみである。埋土：単層で、黒褐色土が堆積する。遺物：土師器破片がごく少量出土した。時期：不明確だが、土師器片が出土していることから、平安時代以降と推測する。

S K 127 (第91図)

位置：2区、ⅡQ 25・R 21。検出：基本層序第Ⅳ層上面で検出した。重複関係：なし。形状・規模：長径209cm、短径115cmの不整形で、深さ17cmを測る。埋土：単層で、黒褐色土が堆積する。遺物：土師器、黒色土器、灰釉陶器が出土した。時期：出土した土器の時期をもって、10世紀代と推測する。

S K 152 (第91図)

位置：2区、ⅡR 16・21グリッド。検出：基本層序第Ⅳ層上面で検出した。重複関係：2基以上の土坑の切合いを想定して平面精査を行ったが、差異を確認できなかった。サブトレンチを掘削して観察した結果、南側の楕円形部分が北側部分を切ることが分かった。南側の楕円形部分をS K 152 a、北側の不整形部分をS K 152 bとする。S K 152 aがS K 152 bを切る。ほかの遺構との切合いはない。埋土：S K 152 aは2分層、S K 152 bは4分層した。2基とも黒褐色土主体で、類似した性状である。形状・規模：S K 152 aは東西方向の長さ222cm、南北方向の長さ160cm、最大深さ50cmを測る。断面逆台形を呈し、底面はおよそ平坦で、南~東壁の立上がりは急角度だが西壁は緩やかである。S K 152 bは東西方向の長さ150

cm、南北方向の残存長130cm、最大深さ約35cmを測る。なお、北端の直径20cmほどの窪みは別遺構の可能性もあるが、区分できなかつた。**遺物**：出土した遺物は比較的多く須恵器、黒色土器、土師器、灰釉陶器がある。**時期**：出土した土器の時期をもって、9世紀後半と推測する。一方、埋土2層から採取した炭化材の放射性炭素年代測定では、8世紀末～9世紀中頃を示す年代値となり、出土土器の年代より若干古い。試料である炭化材が建物の構築材である可能性があり、測定値はその伐採年代を示すものと理解する。

S K 153 (第92図、P L 17)

位置：2区、II Q 07グリッド。**検出**：基本層序第Ⅲ層上面で検出した。S T 01の検出時に、焼土と炭化物を含む暗褐色土の楕円～隅丸長方形の広がりとして検出した。**重複関係**：なし。**埋土**：上層（1層）・下層（2～9層）・最下層（10～12層）の3層に大別できる。下層の上部は焼土塊が多く、下部は炭化物と直径20cmほどの礫が多い。礫は焼けていない。人為的埋没と考えるが、最下層は自然堆積の可能性もある。**形状・規模**：長軸208cm、短軸158cmの台形に近い隅丸長方形を呈し、深さは約44cmを測る。基本層序第Ⅲ層を掘り抜き、第Ⅳ層を掘り込んで底面とする。断面は逆台形を呈し、底面はおおよそ平坦で、壁は急角度で立ち上がる。西側がテラス状に若干高く、その部分に東西方向の短い溝状の窪みがある。**遺物**：上層から青白磁梅瓶、下層から大型かわらけ、炉壁が出土した。また、底面南辺に鉄製品の鉈、刀子、鉈、釘がまとまって錆着していた。**時期**：出土したかわらけの時期をもって、17世紀後半以降と考える。一方、下層上部（4層）で採取した炭化材の放射性炭素年代測定では、14世紀初頭～15世紀初頭を示す年代値となり、かわらけが示す年代とは整合しない。試料である炭化材が建物の構築材である可能性があり、測定値はその伐採年代を示すものと理解する。

S F 18 (第91図)

位置：2区、II Q 07グリッド。**検出**：基本層序第Ⅲ層上面で検出した。西側は市道法面下に延びるが、保安上の理由から、遺構全体の調査は行わなかつた。**重複関係**：なし。**形状・規模**：確認部分は直径130cmの円形を呈し、深さ28cmを測る。平坦な底面から丸みを帯びて壁が立上がる。**埋土**：4層に分層したが、成層する状況というより、焼土粒・礫・炭化物・暗褐色土が混在する状況である。**遺物**：なし。**時期**：4層から採取した炭化物の放射性炭素年代測定では、14世紀前半～15世紀前半を示す年代値を得た。しかし、本土坑はS K 153にごく近い位置にあり、礫・炭化物・多量の焼土を含む埋土の性状も類似するため、S K 153と同様に17世紀後半以降と推測する。

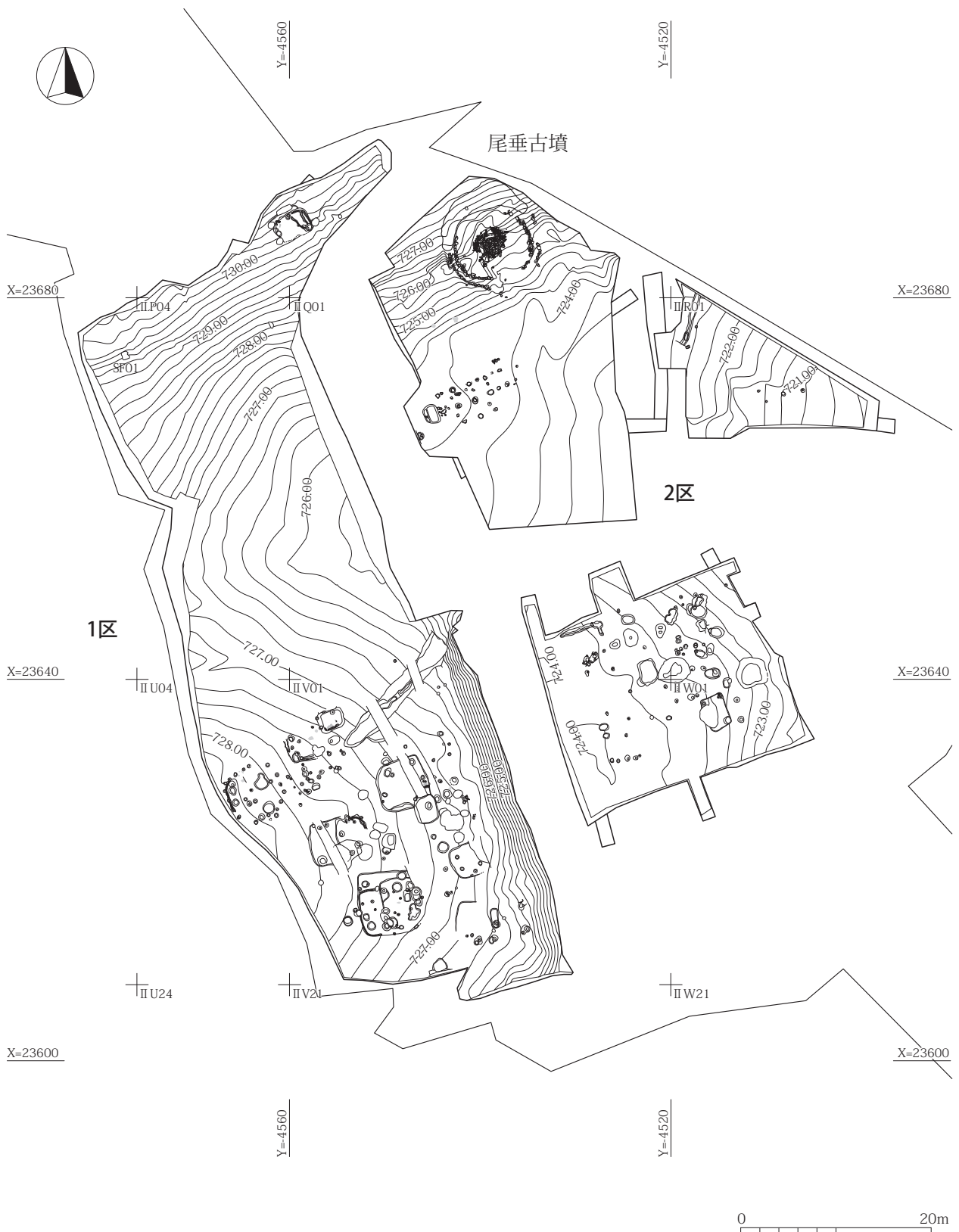
被熱部 (第89図)

単独の被熱部は、1区で5基、2区で10基、合計15基検出した。個々の属性は添付DVD収録の「尾垂遺跡被熱部一覧表」に掲載し、本項では概括的な記述にとどめる。

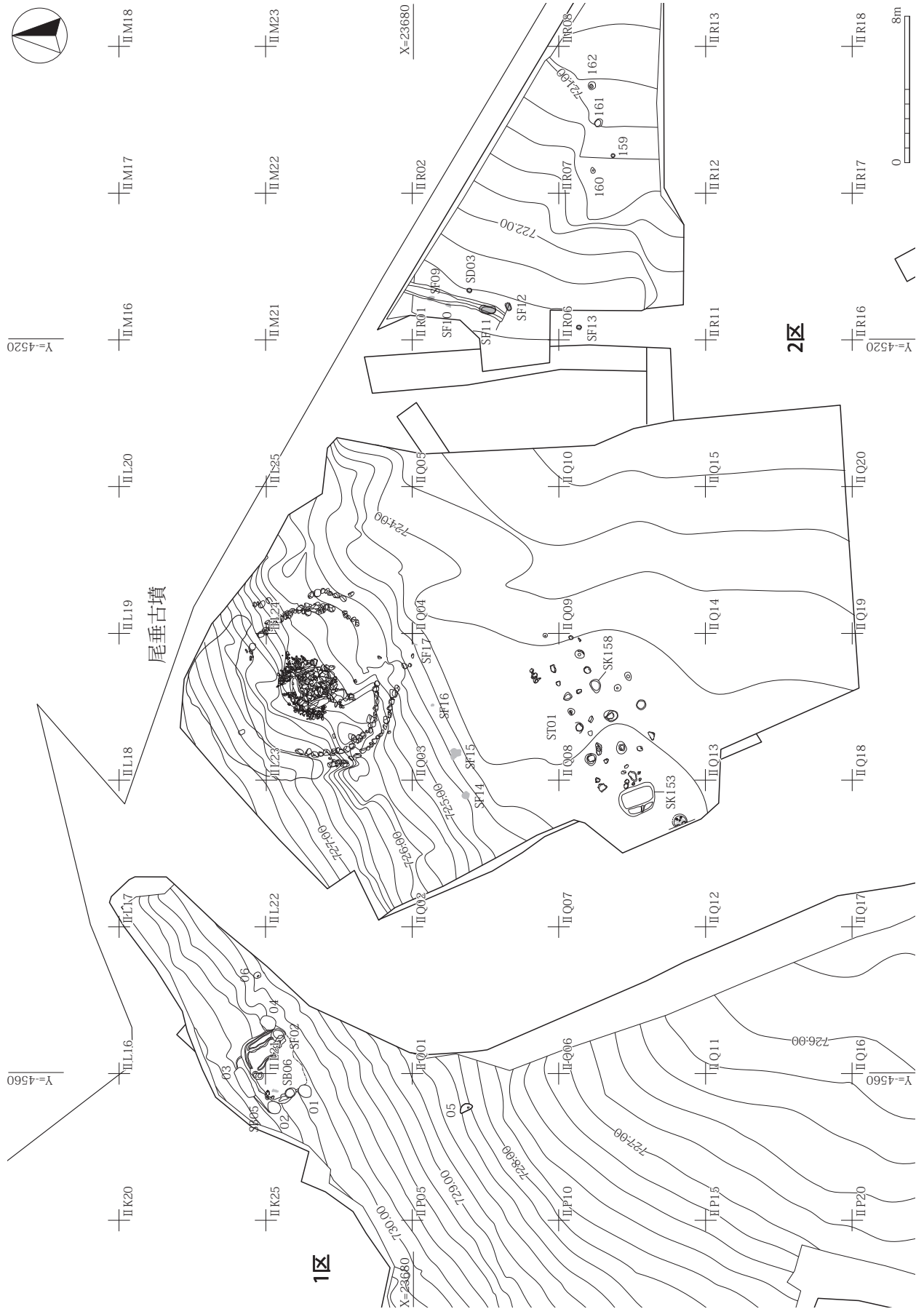
被熱部は、掘込みを伴うものとなないものがある。前者は焼土坑と称すべき形態だが、被熱部に含めた。掘込みを伴う被熱部はS F 04・06・08で、底面から壁下部にかけて被熱赤変する。平面形は円形ないし不整形で、断面形は浅いU字状を呈する。掘込みがない被熱部はS F 03・05・07・09～17で、S F 13・14は円形、S F 09～12は楕円形、S F 03・05・07・15・17は不整形を呈する。被熱部は概してよく焼け、赤変部の厚さは3～10cm程ある。S F 05・06では隣接して礫が出土したが、被熱部との構造的な関連性は明らかにし得なかつた。

分布状況は、1基単独で存在する場合と2～5基が群在する場合がある。単独分布はS F 01（II P 03）、S F 02（II L 21）、S F 08（II R 21）である。群在分布は2基群在がS F 03・04（II V 01）、3基群在がS F 05～07（II V 07・08）、4基群在がS F 14～17（II Q 02・03）、5基群在がS F 09～13（II R 01・02）である。

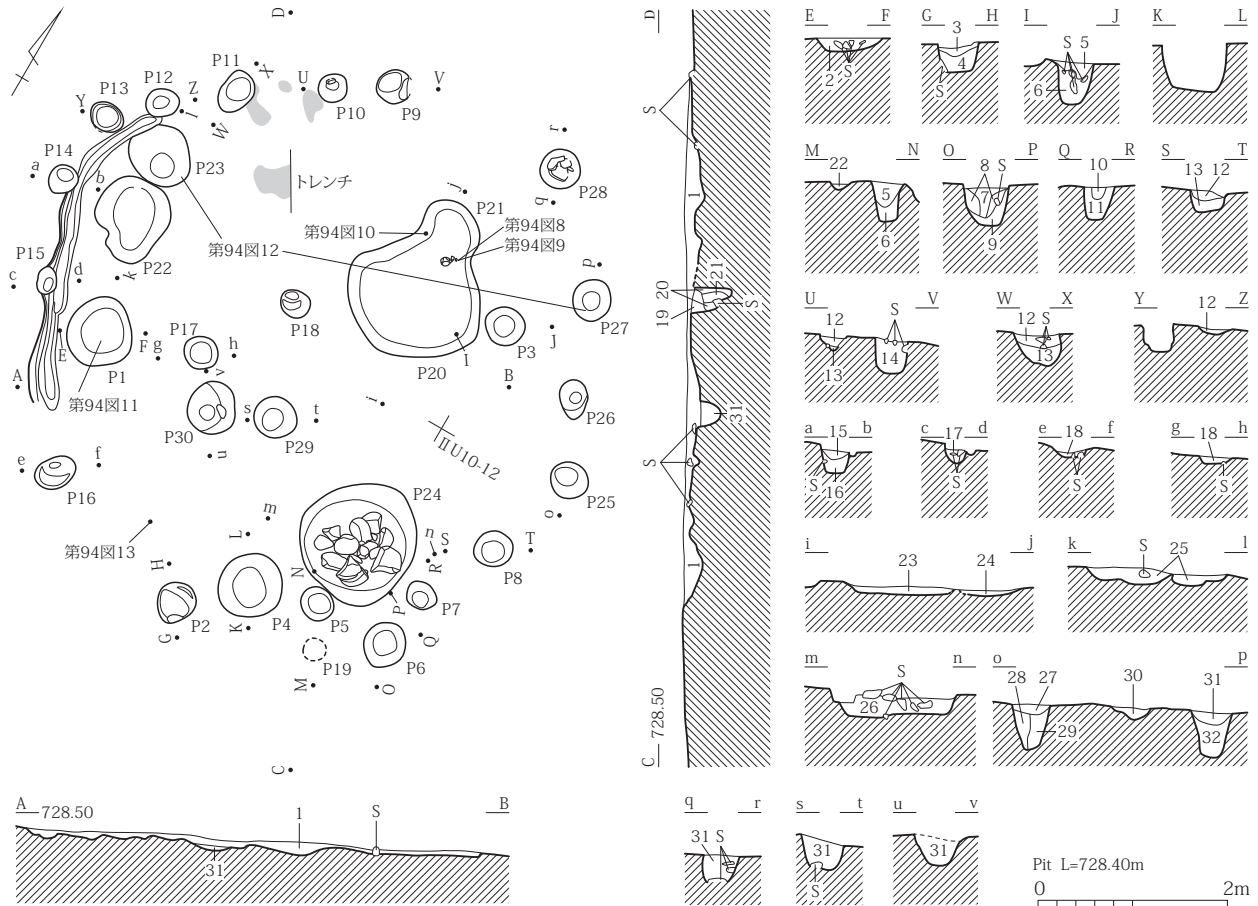
時期の特定は困難だが、S F 03・04はS B 15の埋没途中に形成されている点から10世紀前半以降、S F 09～11はS D 03埋土上部に形成されている点から11世紀前半以降と推測する。



第78図 遺構全体図



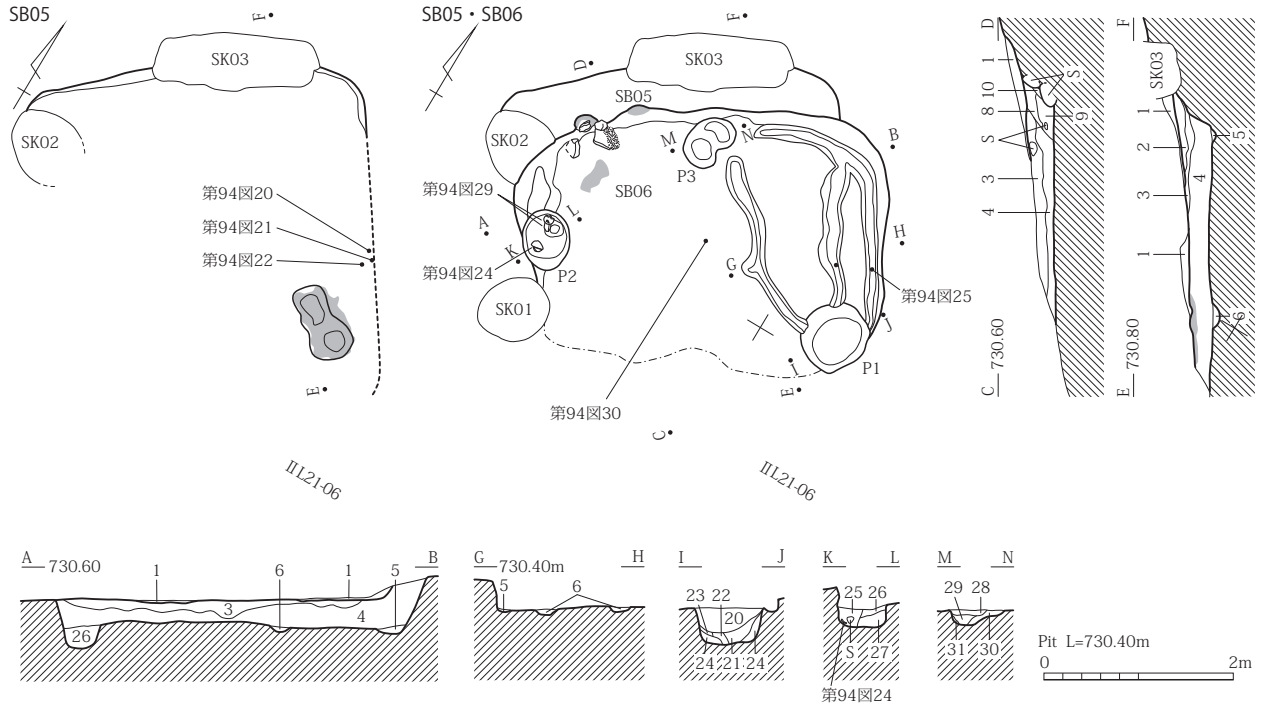
第79図 遺構分布図(1)



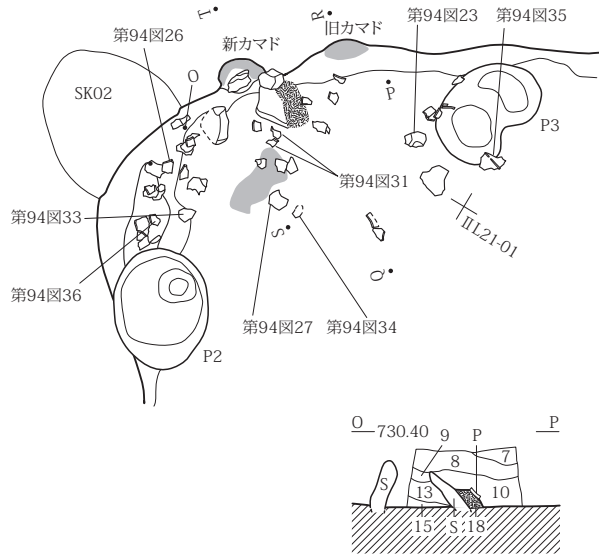
- | | |
|---|--|
| <p>1 暗褐色(10YR3/3) 粘性ややあり。しまりあり。1~5mm白色土粒・黄色土粒多混。30~50mm礫少混</p> <p>2 黒褐色(10YR2/3) 粘性弱。しまりあり。1~5mm黄褐色土粒混 30~100mm礫少混</p> <p>3 褐色(10YR4/4) 粘性なし。しまりあり 1~3mm黄色土粒・白色土粒少混</p> <p>4 褐色(10YR4/4) 粘性・しまりなし。3~5mm黄色土粒・白色土粒微混</p> <p>5 暗褐色(10YR3/4) 粘性なし。しまりあり 1~2mm白色土粒・黄色土粒少混</p> <p>6 暗褐色(10YR3/3) 粘性あり。しまり弱 3~5mm白色土粒・黄色土粒微混</p> <p>7 暗褐色(10YR3/3) 粘性あり。しまり弱。5mm礫少混</p> <p>8 暗褐色(10YR3/4) 粘性あり。しまり弱。3~10mm白色土粒・黄色土粒多混。30mm礫少混</p> <p>9 暗褐色(10YR3/4) 粘性弱。しまりあり。3~10mm白色土粒・黄色土粒混。30mm礫微混</p> <p>10 暗褐色(10YR3/3) 粘性弱。しまりあり 2~5mm白色土粒・黄色土粒少混</p> <p>11 暗褐色(10YR3/3) 粘性・しまり弱。2~5mm白色土粒・黄色土粒混</p> <p>12 暗褐色(10YR3/3) 粘性弱。しまりあり。1~2mm白色土粒・黄色土粒・2~5mm礫少混</p> <p>13 褐色(10YR4/4) 粘性弱。しまりあり。1~2mm白色土粒・黄色土粒・2~5mm礫微混</p> <p>14 暗褐色(10YR3/4) 粘性ややあり。しまり弱 1~2mm白色土粒・黄色土粒・2~5mm礫少混</p> <p>15 暗褐色(10YR3/4) 粘性弱。しまりややあり 1~3mm白色土粒・黄色土粒混</p> | <p>16 暗褐色(10YR3/4) 粘性弱。しまりややあり 1~3mm白色土粒・黄色土粒微混</p> <p>17 暗褐色(10YR3/4) 粘性あり。しまり弱。粒子細。1mm黄色土粒微混</p> <p>18 褐色(10YR4/4) 粘性弱。しまりあり。1~5mm黄色土粒多混</p> <p>19 暗褐色(10YR3/4) 粘性弱。しまりあり 1~5mm白色土粒・黄色土粒少混</p> <p>20 暗褐色(10YR3/4) 粘性弱。しまりあり 1~5mm白色土粒・黄色土粒微混</p> <p>21 暗褐色(10YR3/4) 粘性あり。しまりなし。20層に類似</p> <p>22 暗褐色(10YR3/4) 粘性弱。しまりあり。3mm黄褐色土粒少混</p> <p>23 暗褐色(10YR3/4) 粘性・しまりややあり 1~2mm白色土粒・20~50mm礫混</p> <p>24 暗褐色(10YR3/4) 粘性・しまりややあり。1~2mm白色土粒混</p> <p>25 暗褐色(10YR3/4) 粘性弱。しまりあり。1~2mm白色土粒混 30mm~こぶし大礫少混</p> <p>26 暗褐色(10YR3/4) 粘性やや弱。しまりややあり 2~5mm黄褐色土粒多混。5~20mm炭化物混</p> <p>27 暗褐色(10YR3/4) 粘性弱。しまりあり 1~3mm黄色土粒・白色土粒多混</p> <p>28 暗褐色(10YR3/4) 粘性弱。しまりあり 1~3mm黄色土粒・白色土粒少混</p> <p>29 黒褐色(10YR3/2) 粘性ややあり。しまり弱 1~3mm黄色土粒・白色土粒微混</p> <p>30 暗褐色(10YR3/4) 粘性弱。しまりあり。1~3mm白色土粒混 5~20mm礫少混</p> <p>31 暗褐色(10YR3/4) 粘性弱。しまりあり 1~3mm黄色土粒・白色土粒混。小礫少混</p> <p>32 暗褐色(10YR3/4) 粘性ややあり。しまり弱 1~3mm黄色土粒・白色土粒混。小礫少混</p> |
|---|--|

第 82 図 S B 02 遺構図

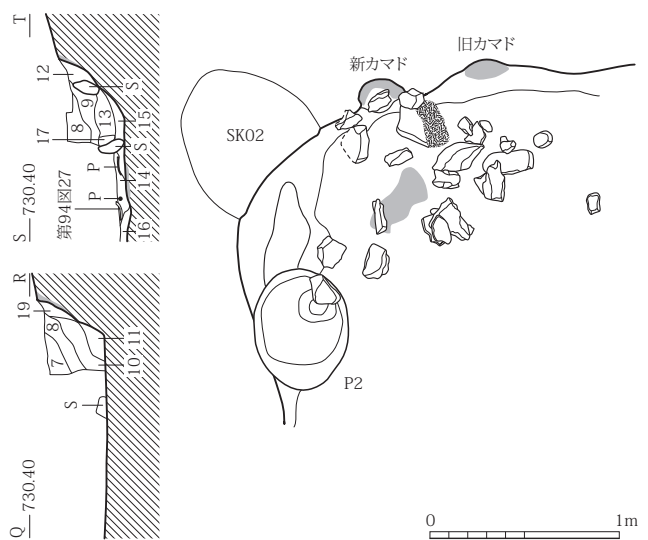
SB05・06



SB06カマド

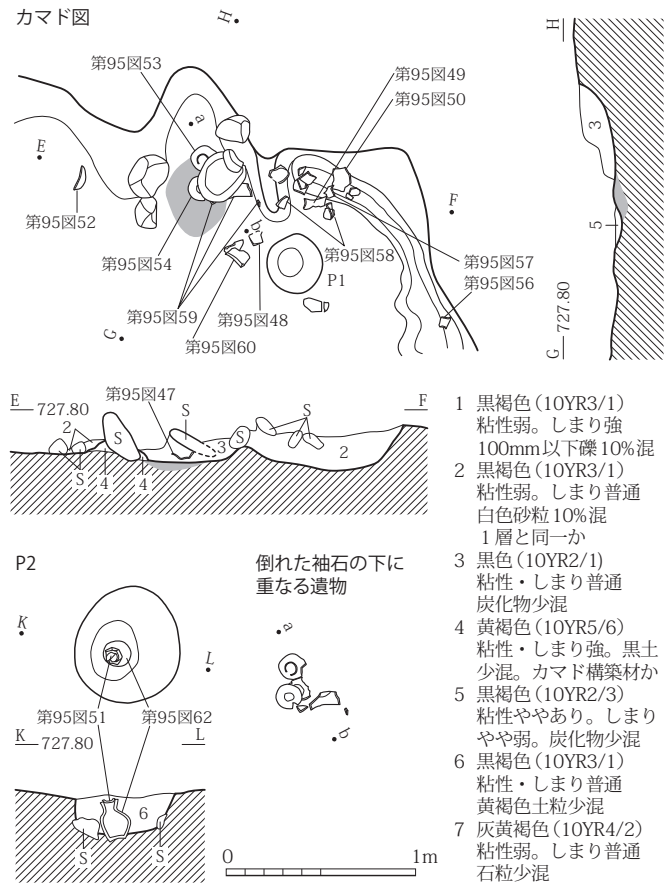
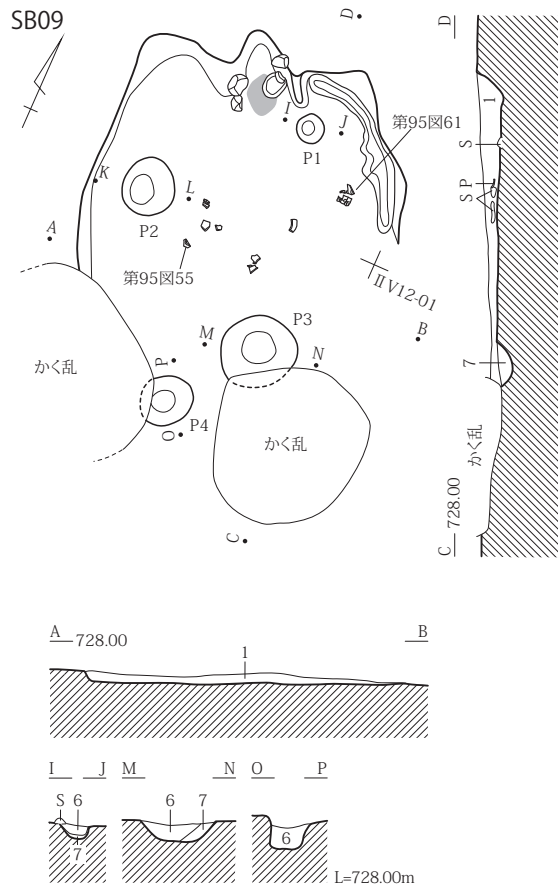


SB06カマド礫出土状況

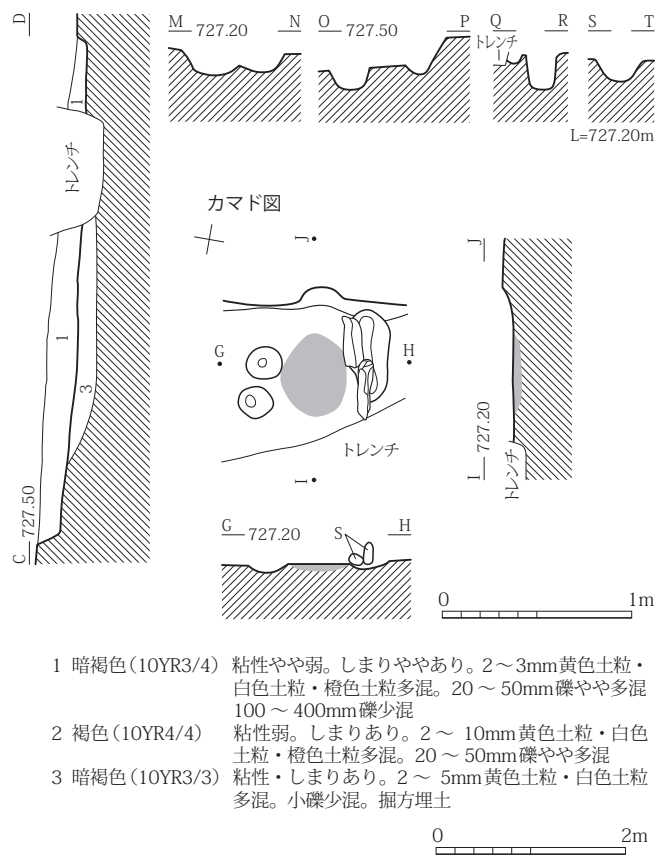
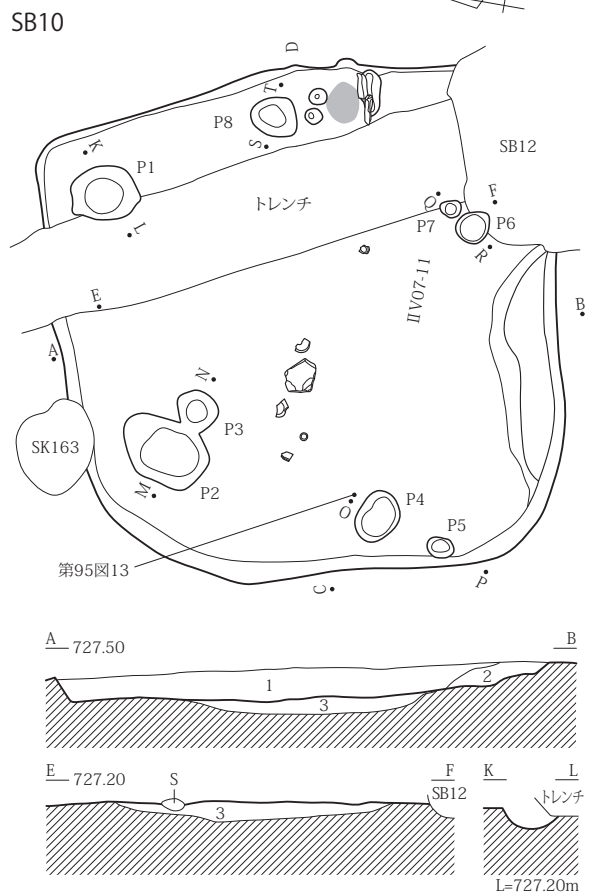


- | | |
|--|--|
| <p>1 暗褐色(10YR3/3) しまりあり。細砂・褐色土10%混。SB05埋土</p> <p>2 褐色(10YR4/6) 粘性ややあり。しまり強。暗褐色土10%混。SB05貼床</p> <p>3 暗褐色(10YR3/3) しまりあり。褐色土ブロック7%・細砂混。SB06埋土</p> <p>4 暗褐色(10YR3/3) しまりやや弱。細砂・褐色土ブロック混。SB06埋土</p> <p>5 暗褐色(10YR3/3) しまりあり。1~2mm褐色土粒3%混</p> <p>6 暗褐色(10YR3/3) しまりあり。褐色土混</p> <p>7 褐色(10YR4/6) 粘性ややあり。しまりあり。焼土ブロック3%混
層状に暗褐色土混</p> <p>8 褐色(10YR4/6) 粘性ややあり。しまりあり
細砂・褐色土・焼土ブロック混</p> <p>9 暗褐色(10YR3/3) しまりやや弱。細砂混。焼土粒多混。8層に類似</p> <p>10 暗褐色(10YR3/3) 粘性ややあり。しまりやや弱。褐色土粒ブロック2%・
焼土ブロック5%混</p> <p>11 暗褐色(10YR3/3) しまりあり。褐色土ブロック20~30%混</p> <p>12 暗褐色(10YR3/3) 粘性ややあり。しまりあり。褐色土混</p> <p>13 暗褐色(10YR3/3) しまりやや弱。褐色土ブロック3%・焼土ブロック・
炭化物粒5%混</p> <p>14 暗褐色(10YR3/3) しまりやや弱。焼土・炭化物粒20~30%混</p> <p>15 暗褐色(10YR3/3) しまりやや弱。褐色土・焼土粒・小礫混</p> <p>16 暗褐色(10YR3/3) しまりあり。焼土・炭化物5%混</p> | <p>17 褐色(10YR4/6) しまりあり。暗褐色土混
カマド構築材崩落土</p> <p>18 カマド構築材</p> <p>19 暗褐色(10YR3/3) しまりあり
褐色土ブロック5%・焼土ブロック1%混
旧カマド廃絶後の埋土か</p> <p>20 暗褐色(10YR3/3) しまりあり。褐色土混</p> <p>21 暗褐色(10YR3/3) しまりやや弱。褐色土混</p> <p>22 褐色(10YR4/6) 粘性ややあり。しまりあり</p> <p>23 暗褐色(10YR3/3) しまりやや弱。褐色土混。2層と類似</p> <p>24 暗褐色(10YR3/3) しまりなし。褐色土混</p> <p>25 暗褐色(10YR3/3) しまりあり。2mm褐色土粒・炭化物3%混</p> <p>26 暗褐色(10YR3/3) しまりあり。褐色土混</p> <p>27 暗褐色(10YR3/3) しまりあり。10mm褐色土粒1%混</p> <p>28 暗褐色(10YR3/3) しまりあり
20~30mm褐色土ブロック10%混</p> <p>29 暗褐色(10YR3/3) しまりあり。褐色土20%混</p> <p>30 暗褐色(10YR3/3) しまりあり。褐色土5%・小礫1%混</p> <p>31 暗褐色(10YR3/3) しまりあり</p> |
|--|--|

第84図 S B 05・06 遺構図

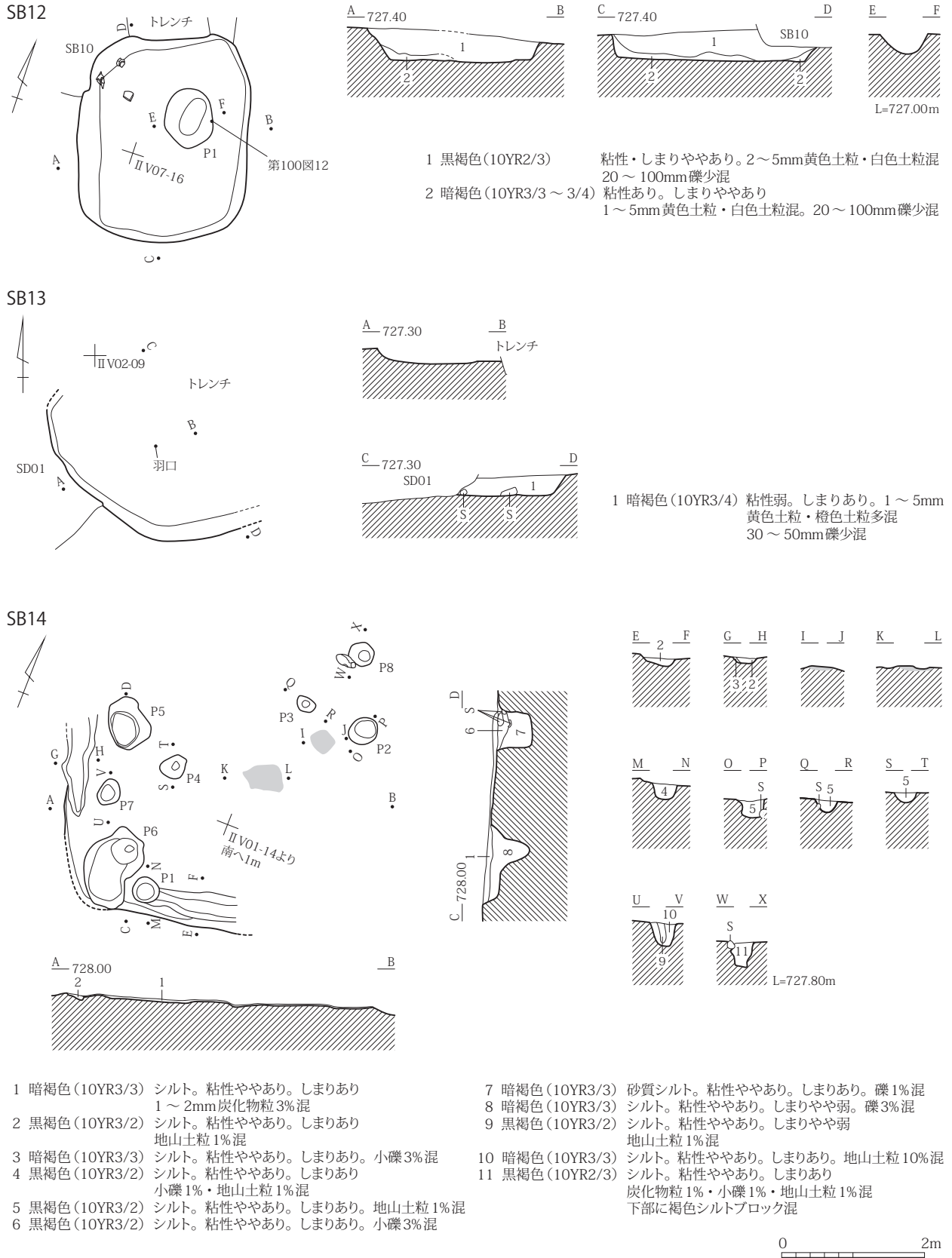


- 1 黒褐色 (10YR3/1) 粘性弱。しまり強 100mm以下礫10%混
- 2 黒褐色 (10YR3/1) 粘性弱。しまり普通 白色砂粒10%混 1層と同一か
- 3 黒色 (10YR2/1) 粘性・しまり普通 炭化物少混
- 4 黄褐色 (10YR5/6) 粘性・しまり強。黒土少混。カマド構築材か
- 5 黒褐色 (10YR2/3) 粘性ややあり。しまりやや弱。炭化物少混
- 6 黒褐色 (10YR3/1) 粘性・しまり普通 黄褐色土粒少混
- 7 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性弱。しまり普通 石粒少混

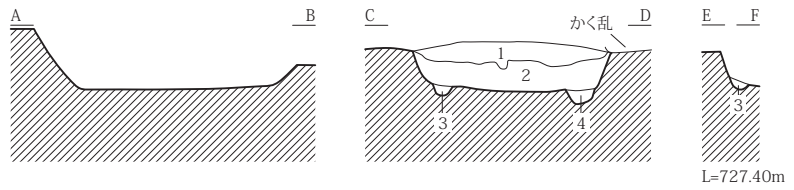
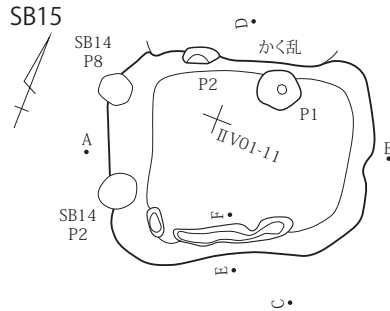


- 1 暗褐色 (10YR3/4) 粘性やや弱。しまりややあり。2~3mm黄色土粒・白色土粒・橙色土粒多混。20~50mm礫やや多混
- 2 褐色 (10YR4/4) 粘性弱。しまりあり。2~10mm黄色土粒・白色土粒・橙色土粒多混。20~50mm礫やや多混
- 3 暗褐色 (10YR3/3) 粘性・しまりあり。2~5mm黄色土粒・白色土粒多混。小礫少混。掘方埋土

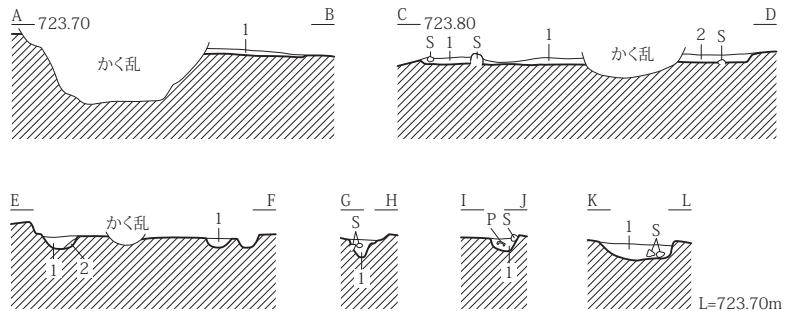
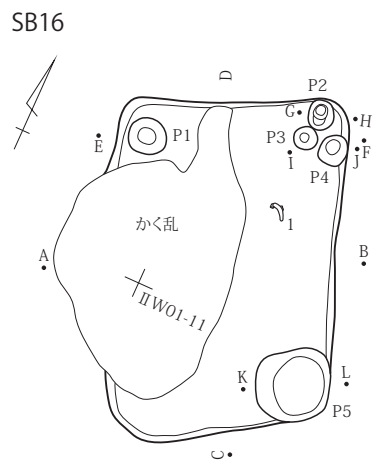
第85図 SB09・10 遺構図



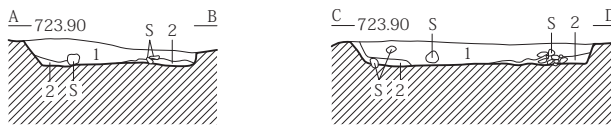
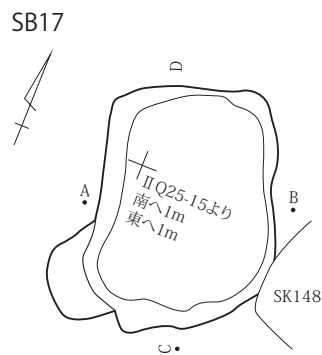
第86図 SB12・13・14 遺構図



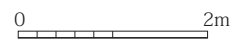
- 1 暗褐色(10YR3/4) シルト。粘性ややあり。しまりあり。10mm以下焼土・炭化物粒3%・100mm以下礫2%混
- 2 暗褐色(10YR3/4) シルト。粘性ややあり。しまりあり。5mm以下褐色土粒15%・10mm以下焼土・炭化物粒3%・200mm以下礫5%混
- 3 暗褐色(10YR3/4) シルト。粘性ややあり。しまりあり。2mm以下炭化物粒1%・2mm以下褐色土粒・小礫1%混。2層に類似
- 4 暗褐色(10YR3/4) シルト。粘性ややあり。しまりあり。5mm以下褐色土粒3%・3mm以下炭化物粒1%混



- 1 黒色(10YR2/1) 粘性・しまり普通。褐色土粒少混
- 2 にぶい黄褐色(10YR5/4) 粘性・しまり普通。白色石粒少混

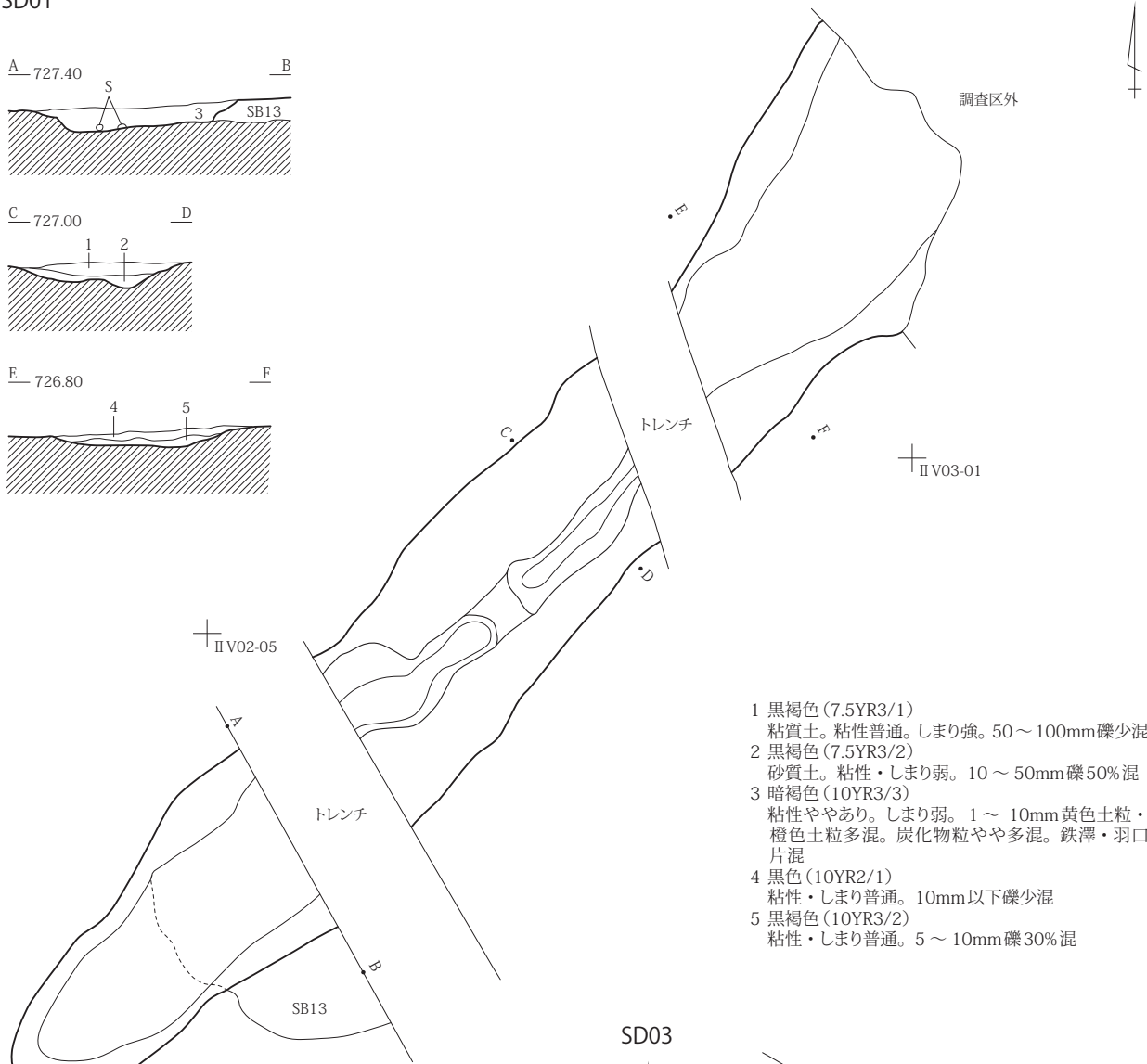
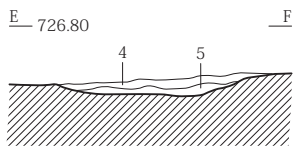
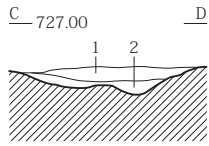
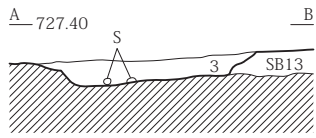


- 1 黒褐色(10YR2/3) シルト。粘性ややあり。しまりあり。10mm以下地山ブロック7%・人頭大以下礫5%混
- 2 黒褐色(10YR2/3) シルト。粘性ややあり。しまりあり。5mm以下地山土粒15%混



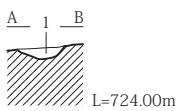
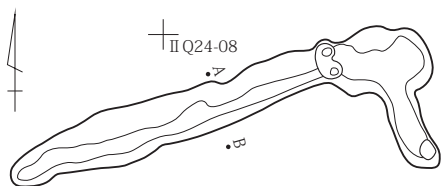
第 87 図 S B 15・16・17 遺構図

SD01



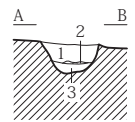
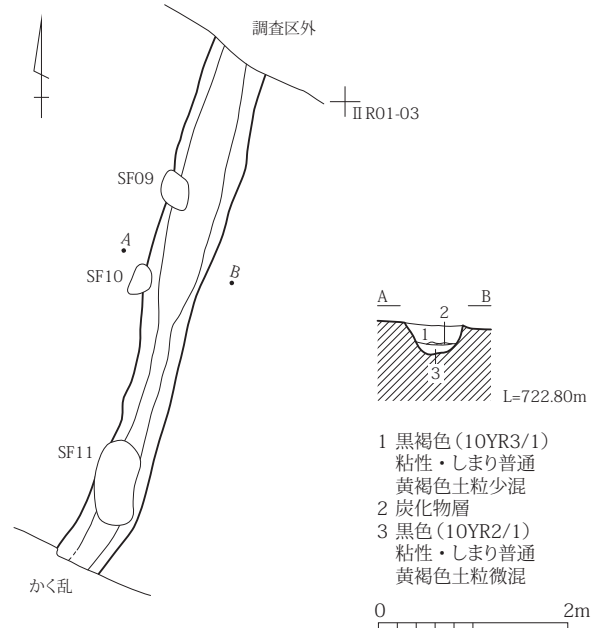
- 1 黒褐色 (7.5YR3/1)
粘質土。粘性普通。しまり強。50～100mm礫少混
- 2 黒褐色 (7.5YR3/2)
砂質土。粘性・しまり弱。10～50mm礫50%混
- 3 暗褐色 (10YR3/3)
粘性ややあり。しまり弱。1～10mm黄色土粒・
橙色土粒多混。炭化物粒やや多混。鉄澤・羽口
片混
- 4 黒色 (10YR2/1)
粘性・しまり普通。10mm以下礫少混
- 5 黒褐色 (10YR3/2)
粘性・しまり普通。5～10mm礫30%混

SD02



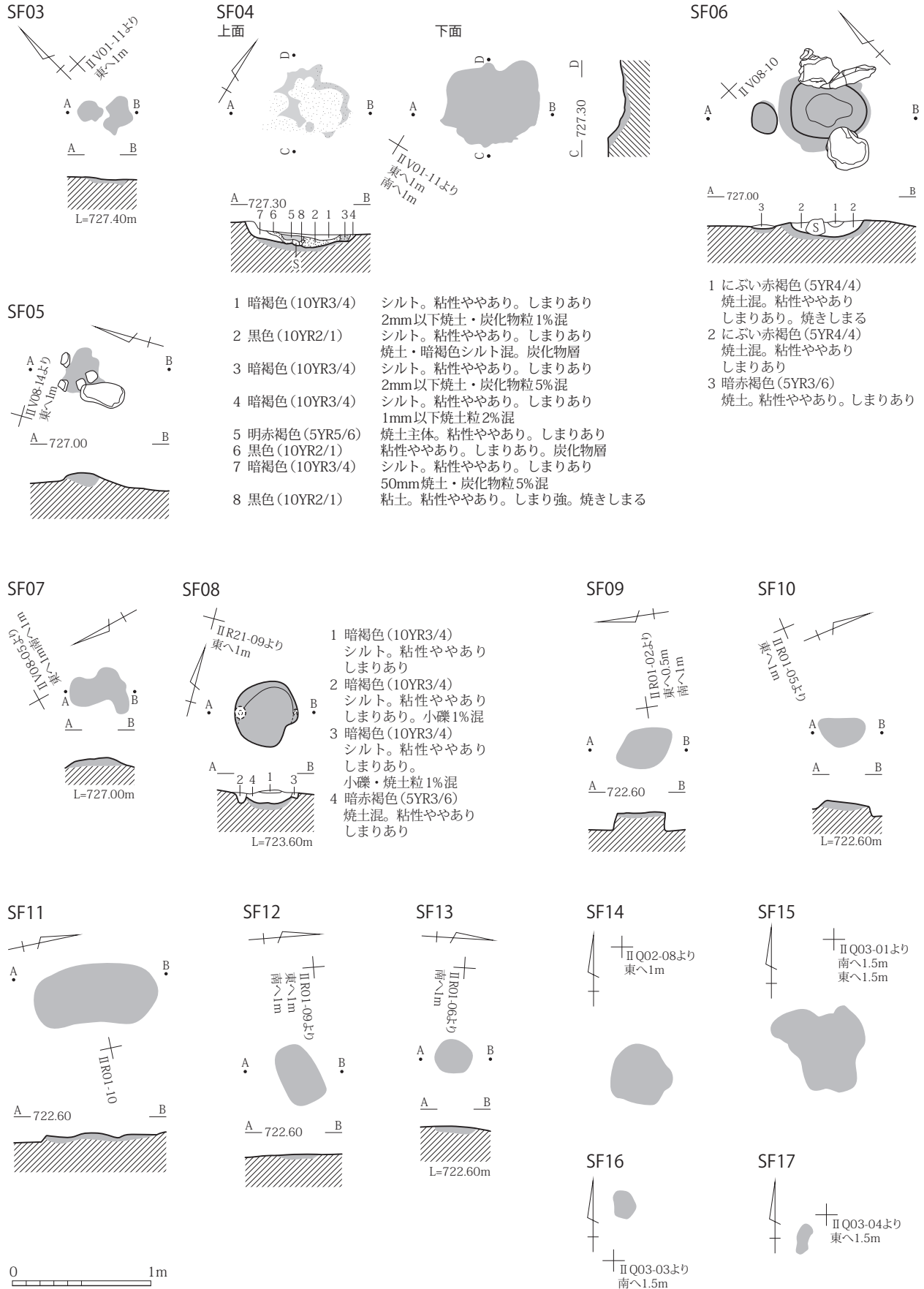
- 1 暗褐色 (10YR3/4)
シルト。粘性ややあり。しまりあり
5mm以下地山土ブロック2%・礫3%混

SD03

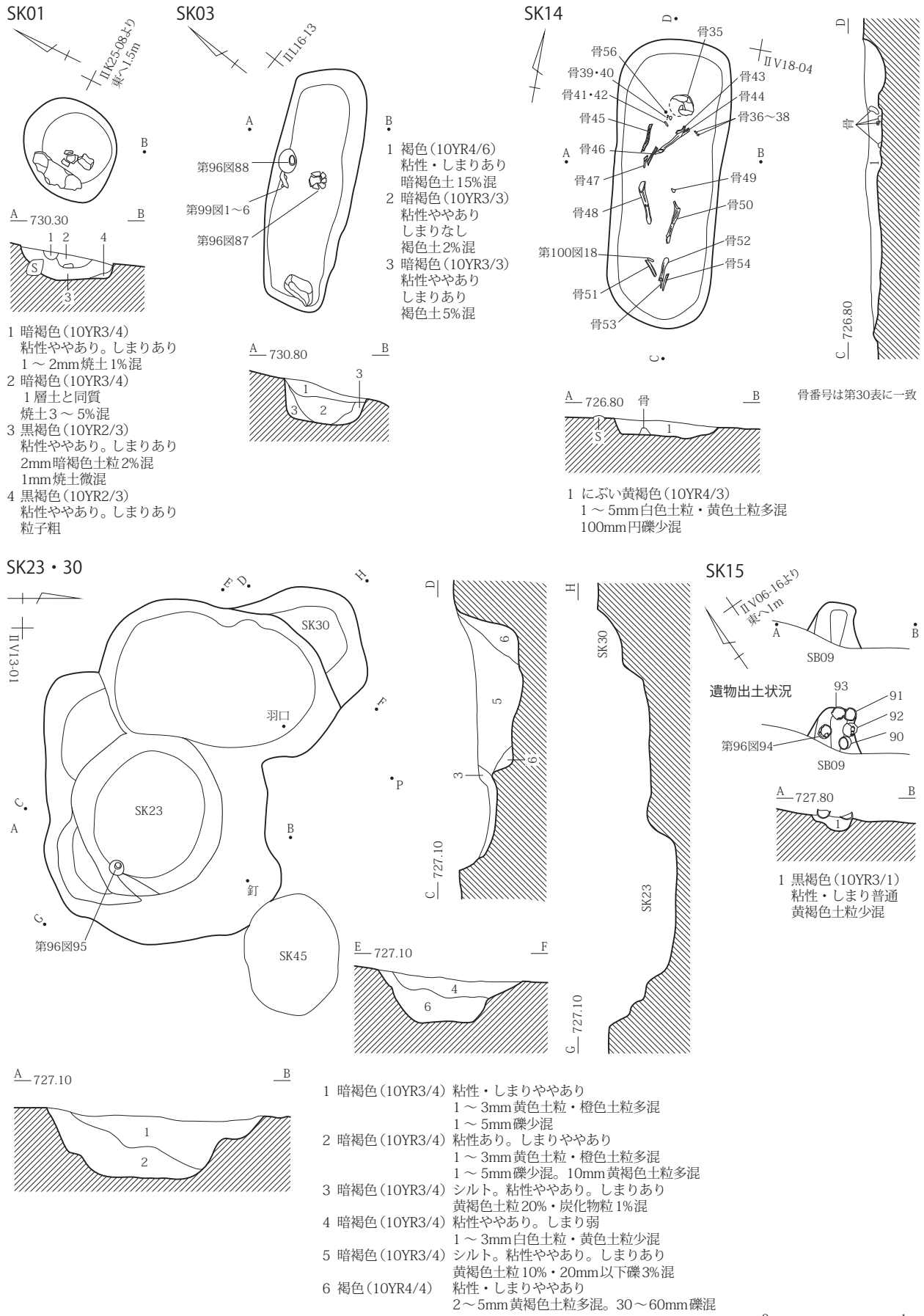


- 1 黒褐色 (10YR3/1)
粘性・しまり普通
黄褐色土粒少混
- 2 炭化物層
- 3 黒色 (10YR2/1)
粘性・しまり普通
黄褐色土粒微混

第88図 SD01・02・03 遺構図

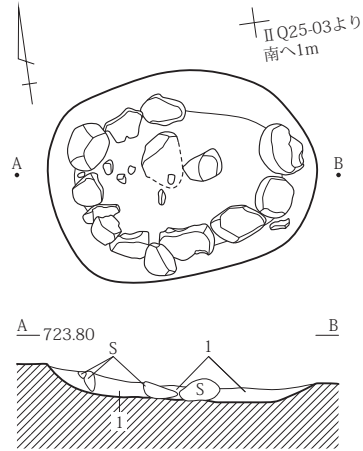


第89図 SF 03~17 遺構図



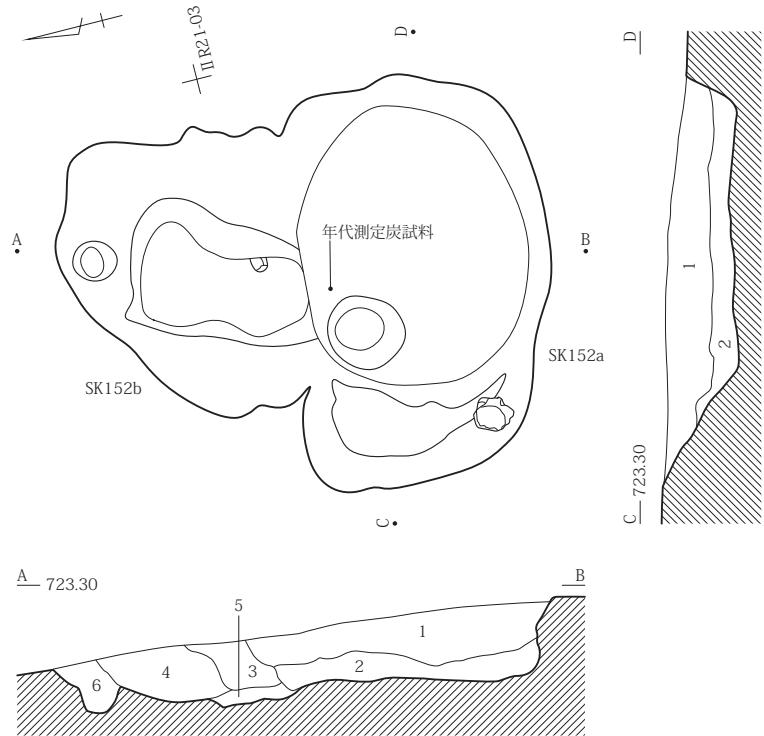
第90図 SK 01・03・14・15・23・30 遺構図

SK99



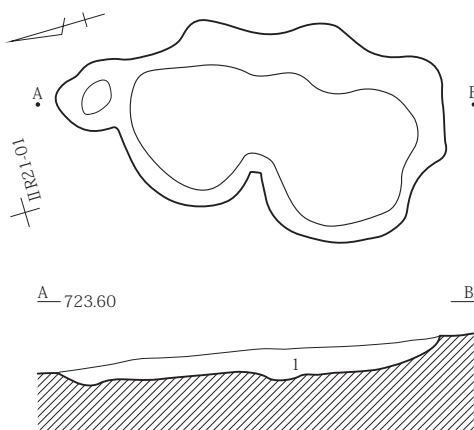
- 1 黒褐色 (10YR2/3) シルト。粘性ややあり。しまりあり
2mm以下炭化物・焼土粒1%混
内縁辺に300mm礫が並ぶ

SK152



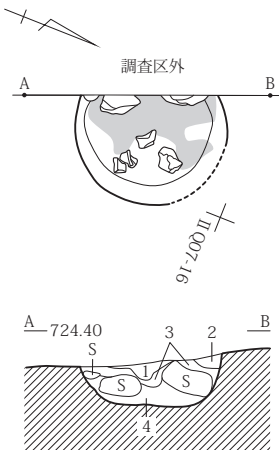
- 1 黒褐色 (10YR2/3) シルト。粘性ややあり。しまりあり
地山土粒7%・炭化物3%・200mm以下礫3%混
2 黒褐色 (10YR2/3) シルト。粘性ややあり。しまりあり
地山土粒3%・炭化物3%・礫2%混
3 黒褐色 (10YR2/3) シルト。粘性ややあり。しまりあり
3mm以下地山土ブロック1%・礫1%混
4 黒褐色 (10YR2/3) シルト。粘性ややあり。しまりあり
5mm以下地山土ブロック3%・礫1%混
5 暗褐色 (10YR3/4) シルト。粘性ややあり。しまりあり。地山土粒1%・礫1%混
6 黒褐色 (10YR2/3) シルト。粘性ややあり。しまりあり。地山土粒1%混

SK127



- 1 黒褐色 (10YR2/3) シルト。粘性ややあり。しまりあり
5mm以下地山土ブロック2%・礫2%・焼土・炭化物粒1%混

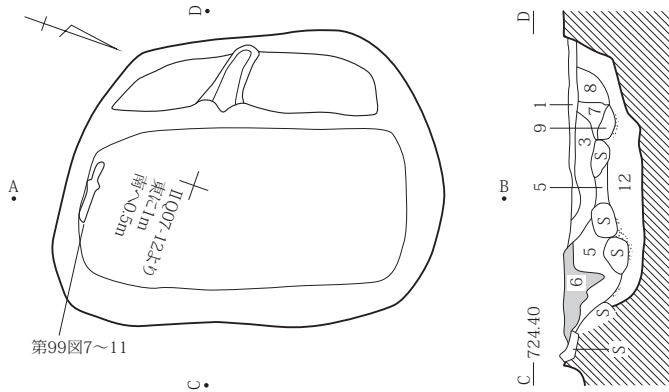
SF18



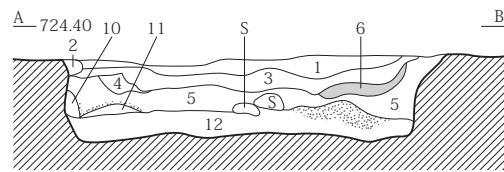
- 1 暗褐色 (7.5YR3/4) シルト。粘性ややあり。しまりあり
粒子細。焼土10%混
2 暗褐色 (7.5YR3/4) シルト。粘性ややあり。しまりあり
粒子細。3mm以下焼土粒5%混
3 赤褐色 (5YR4/8) 焼土主体。粘性ややあり。しまりあり
粒子細
4 暗褐色 (7.5YR3/4) シルト。粘性ややあり。しまりあり
粒子細。層状に炭化物混



第91図 SK 99・127・152、SF 18 遺構図

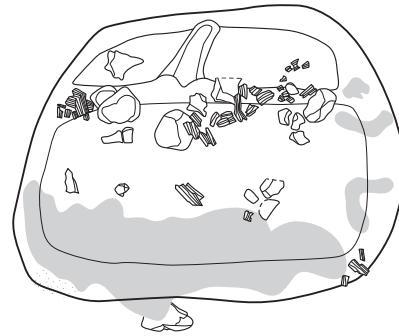


第99図7～11

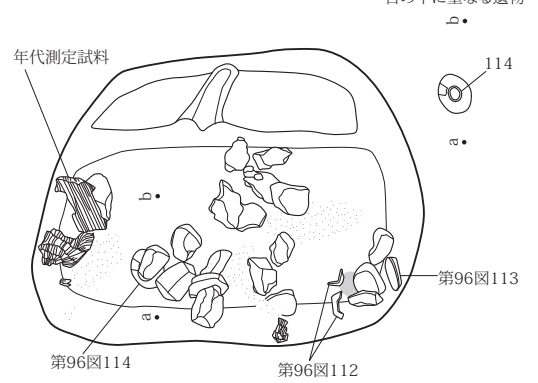


- 1 暗褐色(10YR3/4)シルト。粘性・しまりあり。粒子細。2～3mm焼土・炭化物2～5%混
- 2 暗褐色(10YR3/4)シルト。粘性・しまりあり。粒子細。2～10mm焼土・炭化物10%混
- 3 暗褐色(10YR3/4)粘性弱。しまりあり。粒子粗。3～5mm焼土ブロック10%・5mm炭化物粒3%混
- 4 暗褐色(10YR3/4)シルト。粘性・しまりあり。粒子細。1mm焼土1%・炭化材混
- 5 暗褐色(10YR3/4)3層と類似。焼土ブロック20%混
- 6 暗褐色(10YR3/4)5層と類似。焼土ブロック30～40%混
- 7 暗褐色(10YR3/4)シルト。粘性・しまりあり。粒子細。褐色土ブロック5%混
- 8 暗褐色(10YR3/4)7層と類似。褐色土ブロック10%混
- 9 暗褐色(10YR3/4)シルト。粘性・しまりあり。粒子やや粗。炭化物粒3%・焼土1%混
- 10 暗褐色(10YR3/4)シルト。粘性・しまりあり。粒子やや粗。3mm以下褐色シルトブロック1～2%混
- 11 暗褐色(10YR3/4)シルト。粘性。しまりあり。粒子細。10mm以下褐色シルトブロック7%混
- 12 暗褐色(10YR3/4)シルト。粘性強。しまりあり。粒子細。10mm以下褐色シルトブロック10～20%混

焼土塊集中範囲(上～中層)

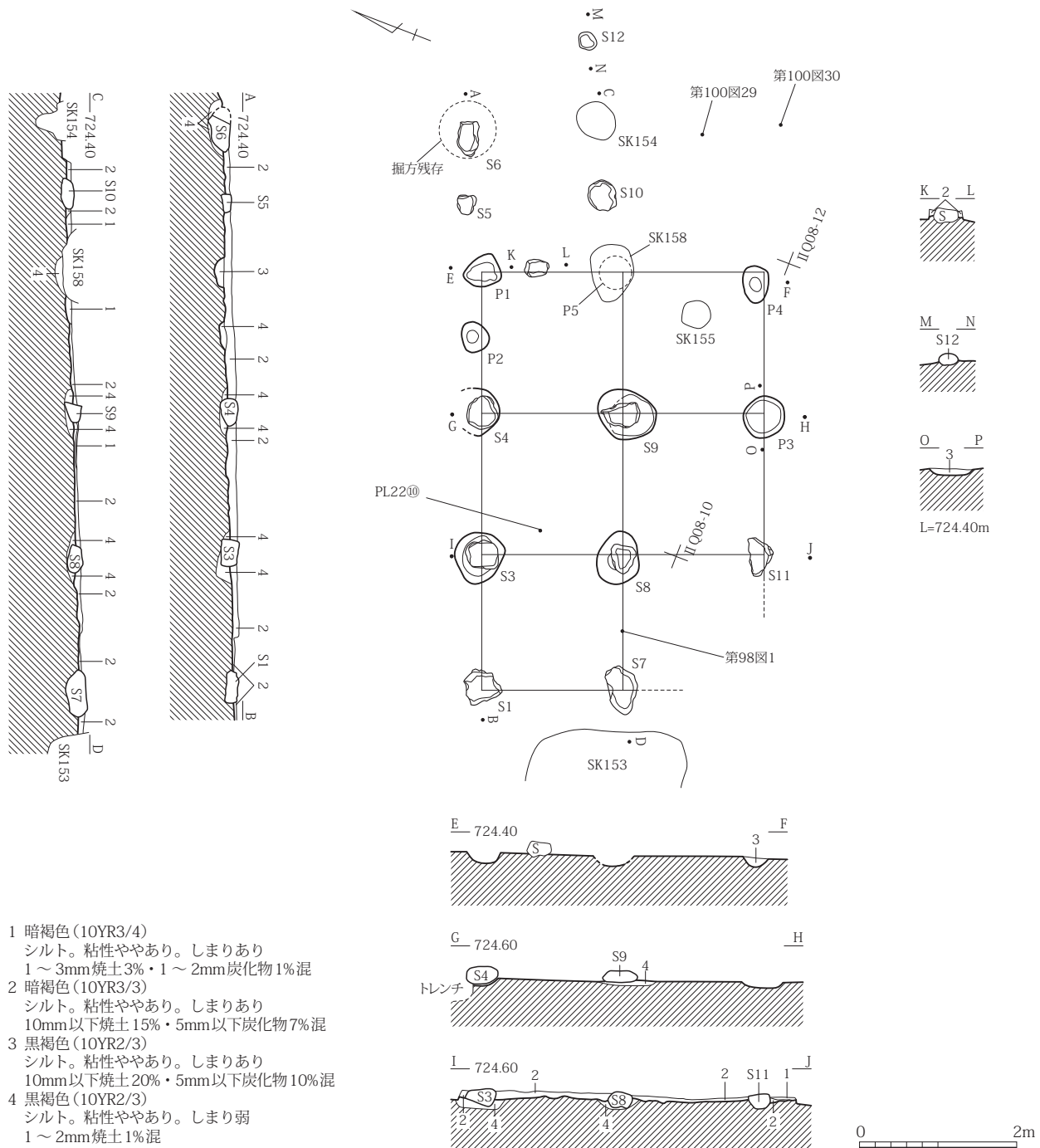


礫集中範囲(中～下層)



0 1m

第92図 S K 153 遺構図



第93図 ST 01 遺構図

(2) 平安時代の土器、土製品

土器

S B 01 (第94図1~7、P L 18)

供膳形態が土師器と灰釉陶器、煮炊形態が羽釜となる。1の土師器皿は、底面が回転糸切り後、手持ちヘラ削りされる。底部、体部とも厚手の2の土師器坏は底面が静止糸切りで、底部内面中央と口縁内外面に厚く煤が付着する。口縁部が大きく外反する4の土師器坏は、内外面に薄く煤が付着する。5の灰釉陶器小碗は、口縁部のみに灰釉が薄く施釉される。6・7の土師器羽釜は、6が体部ヘラ削り、7が体部ハケ調整である。時期は10世紀後半と推測する。

S B 02 (第94図8~13、P L 18)

供膳形態の主体は黒色土器である。8・9の黒色土器坏は、口縁部内面にミガキが施され、8は6方向の放射状暗文、9は8方向の放射状暗文の先端が蕨手状に丸くなる。11の土師器高台付碗は、底面に焼成時の亀裂が見られるが貫通はしていない。13の須恵器突帯付四耳壺は、突帯が巡る肩部の小片である。時期は9世紀後半と推測する。

S B 04 (第94図14~19)

14・15の土師器坏は小型化している。17・18の灰釉陶器碗は灰釉漬け掛けで、18は回転ナデ後体部外面下半と高台外面下端を回転ヘラ削りする。煮炊形態は、19の土師器羽釜の小片が出土している。時期は10世紀後半と推測する。

S B 05 (第94図20~22、P L 18)

出土遺物は少ない。小型化した20~22の土師器坏は、回転ナデ後20は下半をヘラ削り、21は下半を指頭押さえる。時期は11世紀前半と推測する。

S B 06 (第94図23~36、P L 18)

供膳形態は黒色土器中心だが、土師器も混じり、煮炊形態は土師器甕と羽釜が共存する。23の黒色土器坏は、放射状の暗文の先端が蕨手状に丸くなる。27の土師器坏は、黒色処理は見られないが、放射状のミガキが残っており、黒色土器の内面が磨滅したものと推測する。30の緑釉陶器耳皿は小片だが、本遺跡では希少な緑釉陶器の一つである。31~33・36の土師器甕は、体部外面をヘラ削りするもので、31は口縁端部も平らにヘラ削りする。時期は10世紀前半と推測する。

S B 07 (第95図37~46、P L 19)

供膳形態は、黒色土器と土師器が共存する。42の黒色土器坏は、底部に直径1mmの焼成前の貫通孔がある。成形時に刺さった枝などが燃え尽きたものと考え。41の黒色土器高台付碗は、口縁の一部と底部内面に煤痕があることから灯明碗に、また、44の土師器坏は底部内面に擦痕と朱墨跡があることから硯に、それぞれ転用されたものである。底面の下半を手持ちヘラ削りする45の土師器坏は、体部外面の一部に巻上げ痕があり、体部の1か所がゆがむなど製作時の稚拙さが目立つ。時期は10世紀前半と推測する。

S B 09 (第95図47~62、P L 19)

供膳形態は黒色土器を主体とする。土師器とした50・51の坏、53・55の高台付碗も、黒色土器の内面が磨滅したものと考え。50の土師器坏は、内面が放射状にミガキが施され、底部内面が黒色土器のように黒色化している。煮炊形態は土師器甕で、外面を回転ナデ調整し、外面の下部をヘラ削り調整するものである。62の黒色土器長頸壺は、外面を底面回転糸切り後、手持ちヘラ削り、体部回転ナデ後、体部下半と頸部接合部付近を縦方向にヘラ削りする。時期は10世紀前半と推測する。

S B 10 (第95図63~75、P L 19)

供膳形態は63・65の黒色土器と64・66の土師器であるが、67の灰釉陶器皿、68の段皿、69・70の碗

など、灰釉陶器の比率が高く、貯蔵形態でも74・75の灰釉陶器長頸瓶が出土している。内面に陰刻花文を模した十字と花卉状の暗文が施されている63の黒色土器高台付壺や、ベタ高台の緑釉陶器酒杯を模したような66の土師器壺もあり、瓷器志向が強い。34の灰釉陶器壺は流し掛けで、底部内面に釉が掛かる。74・75の長頸壺は釉調や胎土が類似し、同一個体の可能性もある。時期は10世紀前半と推測する。

S B 12 (第95図76~81、P L 19)

76・77の黒色土器が残るものの、78・79の土師器が主体である。底面は回転糸切りだが、76の黒色土器杯は上げ底の外周を、79の土師器杯は糸切りの段差の凸部を手持ちヘラ削りして、平底に近づける。81の球胴状の土師器甕は口縁部のナデが少なく、巻上げ痕が残る。時期は10世紀前半と推測する。

S B 15 (第96図82~84、P L 19)

82の黒色土器杯と83・84の土師器杯があり、82の黒色土器杯は内面に十字の暗文が見られる。84の土師器杯は扁平すぎ、小破片の推定復元のため口径が大きめになっている可能性が高い。時期は10世紀前半と推測する。

S B 17 (第96図85)

遺物が少なく、図示できたのは85の漬け掛けの灰釉陶器壺のみである。時期は10世紀と推測する。

S K 01・03・08・15・23~26・58・62・72・127・141・152・153・171・174~176 (第96図86~122、第97図123~125、P L 19・20)

S K出土土器は、特徴的なものを抽出して述べる。そのほかの土器は、本書所収のDVDに観察表を掲載した。S K 03出土の88は灰釉陶器壺の深壺で、灰釉は漬け掛けで非常に薄く無釉の部分も多い。口縁部内面に意図的な沈線が巡る。S K 08出土の89は土師器羽釜で、鏝が剥落する。体部はヘラで削る。S K 15出土の90~94は土師器小型甕で、底面回転糸切り、胴部回転ナデ、胴部外面下半をヘラ削りするが、ヘラ削りの部分はいびつである。S K 23出土の95は黒色土器高台付壺で、5~6条並ぶ幅広の十字と間の花弁状の暗文がある。S K 26出土の100は土師器羽釜の底部で、粘土板を2枚重ねる。S K 58出土の101は土師器高台付壺で、器厚が厚く残存率50%程度ながら215gと重い。S K 127出土の104の灰釉陶器壺は、灰釉を口縁部のみ薄く施す。体部内面は、工具によると考える沈線が約1cm間隔で2~3周らせん状に巡る。S K 152出土の土器は106~111で、供膳形態は106~108の黒色土器と109・110の灰釉陶器である。106は放射線状暗文を8本施すが、割付けが稚拙で均等にならない。107は全面に黒色処理を施す黒色土器B類である。109・110の灰釉陶器壺は、灰釉が体部上半のみ薄く漬け掛けされる。111の灰釉陶器瓶は、胴部の灰釉が楕円形を右側から左側に向かってずらしたように掛かり、横位での漬け掛けと考える。10世紀前半と推測する。S K 153から出土した112~115の土師器皿は、口径と底径が少しずつ違う重ね皿で、113と114は重なるが、112と113、114と115を重ねるとやや隙間がある。いずれも左回転糸切りで、時期は江戸時代遺跡の調査例から17世紀後半以降の近世と推測する。S K 171から出土した116・118の黒色土器壺と高台付壺は、内外面を黒色処理するB類だが、116が内外同様の黒さであるのに対して、118はミガキを施す外面の炭素の吸着が極薄い。S K 175から出土した122の土師器鉢は、底面が磨滅するが、上げ底で回転糸切りされたものと考え。体部は回転ナデ後、外面の一部をヘラ削り、内面の一部をヘラナデする。体部外面は一面煤が付着し、煮炊きに使われたと考える。S K 176から出土した123の土師器壺は、厚手で内面に煤が付着し灯明壺と考える。

S D 03 (第97図127~131、P L 21)

S D 03出土の128は土師器高杯で、坏形の身部に段をもつ脚部を接合する見慣れない器形である。131は須恵器多嘴壺で、全形は不明だが同一個体の頸部と胴部が複数ある。130はその底部と考える。相伴する129の灰釉陶器皿から、11世紀前半と推測する。

遺構外（第97図132～162、P L 21）

遺構外出土土器は、特徴的なものを抽出して述べる。そのほかは、本書所収のDVDに観察表を掲載した。遺構外だが、ⅡL 25グリッドではほかのグリッドよりも土器がまとまって出土した。132～135は黒色土器、136・137は小型化した土師器杯、143は灰釉陶器碗の深碗形である。煮炊形態は、145の土師器羽釜となる。132の黒色土器坏と133の高台付碗は、花卉状の暗文を施す。時期は10世紀後半と推測する。

154の灰釉陶器輪花皿や159の小壺、160・161の土師器注口付瓶、164・165の須恵器甕など、遺構出土のものにはない器種も出土している。154の灰釉陶器輪花皿と159の皿は、擦痕や墨痕が見られる点から、転用碗である。160・161の土師器注口付瓶は、注口部の小破片で全体の形状は不明である。

土製品（第98図1～4、P L 21）

1はS T 01出土の瓦塔である。7×3cmほどの小破片で、先端がわずかに残るが、後端部と両側面は欠損する。葺降ろしの丸瓦2列3段分で、平瓦は表現されていない。丸瓦の段は、実際の丸瓦の重なりを表現したもので、上方の瓦が下方の瓦に重なる。丸瓦1枚分は、重なり部分除いて長さ23mm、直径10mmの半円筒形である。裏面は、丸瓦に平行な20×8mmの断面長方形の凸部が丸瓦の先端より9mm手前まで延び、垂木を表現する。表面の瓦部分はやや凹凸があるが、裏面の垂木および屋根裏部分は平滑に削る。胎土は細砂粒をやや多く含み、色調は淡い灰褐色であるが、表面瓦の大部分は黒斑で灰黒色を呈する。2は小破片のため不明確だが、三足土器の脚部と推測する。3・4の土製円板は、須恵器甕の胴部を打ち欠いたものである。2点とも表面は平行叩きで自然釉が掛かり、裏面はナデ消す。断面に磨かれた痕跡はないが、巻上げやナデに沿ってみられる直線的な断面がなく、不自然な多角形状の平面形を呈することから、意図的に打ち欠いたものと判断した。

(3) 中世土器・陶磁器・瓦（第98図、P L 22）

中世の焼物類は、破片数にして121点が出土した。そのうち、25点を図示・写真掲載し（1～25）、28点を写真掲載した（①～⑳）。輸入品は白磁・青磁・青白磁が、国産品は古瀬戸製品・常滑製品・瓦質土器、かわらけ、内耳土器・瓦がある。添付DVDに観察表を収録し、出土位置は第98図にも示した。

1区

1・2・①・②は白磁碗である。1・①は口縁が玉縁をなす。2の高台は幅広で、削り出しは浅く、底部の器肉は厚い。体部外面下半と底部は施釉されていない。大宰府Ⅳ類（横田・森田1978）に該当する。3～5は龍泉窯系の青磁である。3は蓮弁文碗で、高台内の底面は露胎である。4は鉢で、釉全体に貫入がみられる。5は盤である。口縁部が屈折して水平に延び、体部および口縁端部に花卉状の装飾が施される。見込み周囲には沈線1条が巡り、内部に草花文を刻出する。底部外面に輪状の露胎部があり、それを除く全面を施釉している。6・7・8は古瀬戸製品である。鉄釉の6・7は祖母懷茶壺と推測する。8は合子で、釉漬け掛け、体部上半に沈線3条が巡る。藤澤良祐氏の古瀬戸編年（藤澤2008）に対比すると、6・7は後Ⅲ期、8は中Ⅰ～Ⅱ期に属するものと考えられる。9は瓦質土器で、香炉と推測する。10は播鉢、11・12はロクロ整形のかわらけである。③は内耳土器の胴部片である。

2区

13・④・⑤は白磁碗である。13は口縁が玉縁をなす。14・⑦～⑪は青磁碗である。14・⑧は龍泉窯系の蓮弁文碗、15は内面口縁直下に横走る沈線2条の下に沈線文が刻まれる。⑦は体部外面に片彫り風の沈線が入り、同安窯系の可能性があろう。⑥は盤あるいは大形の皿と推測する。16～18・⑫～⑮は青白磁梅瓶である。16・17・⑫～⑭は胴部で、沈線文を施す。18・⑮は底部で、18は外面から高台中位まで施釉している。⑮の外面は施釉されていない。19～22・⑯～㉒は古瀬戸製品である。⑯は壺ないし瓶、19・⑰・⑱は平碗、⑲は折縁深皿あるいは卸目付大皿、20は尊式花瓶、21は卸皿、22・⑳～㉒は天目茶

碗である。21の外面は露胎であるが、灰釉が一筋垂下している。22・⑳～㉑は体部下部を回転ヘラケズりする。22の高台は削り出し輪高台で、高台内の削り込みは浅く、高台幅は広いが高台脇は狭い。高台周辺は露胎である。㉒は、体部は直線的で、口縁部はくびれ端部は尖る。高台脇はやや広く削り込まれる。高台周辺は露胎である。藤澤編年に対比すると、19・21は中期、20は後期、22は後Ⅰ～Ⅱ期、㉒は後Ⅳ期(古)に相当するものと判断する。23・㉓・㉔は常滑製品の甕である。23は口縁の縁帯が長く垂下して幅広になっているが、頸部に接するまでには至っていない点からすると、中野晴久氏の編年の8型式に該当する(中野2012)。24は瓦質土器で、平面方形の火鉢と推測する。口縁部に三角柱を連ねたスノコ状の文様を作出する。㉕は内耳土器の胴部片である。㉖～㉘はロクロ整形のかわらけである。25は酸化炎焼成の瓦で、凸面に細かい斜格子叩きがある。凹面の布目はナデ消している。

年代については、2の白磁は11世紀後半と古いが、龍泉窯系青磁、青白磁は13世紀、古瀬戸製品は13世紀末～15世紀中頃、常滑製品の甕23は14世紀後半と考える。年代の特定が困難なものもあるが、出土した中世土器・陶磁器類は、およそ13世紀～15世紀に保有・使用されていたものと推測する。

(4) 金属製品(第99・100図、P L 23・24)

一括埋納が確実なS K 03およびS K 153出土の鉄製品は遺構ごと、その他の遺構および遺構外出土の金属製品は器種ごとに記述する。添付DVDに観察表を収録し、出土位置は第99・100図にも示した。

S K 03 出土鉄製品

1は刀子で、棟関は直角、刃関は緩い撫角をなす。2は短く幅広の身部をもつ刃物である。身部は薄く、現状、棟部も鋭い側縁をなしている。刃関は直角に切れ込む。茎は棟側の側縁に反りをもつ。工具の一種と考える。3・4は鎌で、着柄部と刃部の区別がない。3は基部から刃部に向けて直線的に立ち上がり、徐々に増幅するがその差は小さい。刃部の湾曲は棟側に比べて刃側が小さい。折り返し部は端部上端から棟側にかけて折り返すものと考えてよいだろう。4もほぼ同様な形状であるが、基部下端が完存し、下端隅は角丸を呈する。3・4とも吉田川西遺跡での鎌形態分類のV類(埋文センター1989)に対応しよう。5は棒状の鉄製品で、直角関をもつ。頸部断面形はやや偏平な方形を呈する。鉄鏃あるいは鈍か。6は片方の端部に環状部が付き、もう片方の端部を鋭く尖らせた棒状の鉄製品である。現状、尖鋭な端部は銹化膨張により二股に裂けている。環状部寄りに、四面に段が付く関を有する。鋭い端部を木質の対象に打ち込み、環状部に綱を通して使用したことが推測される。

S K 153 出土鉄製品

7は鈍である。刀身最大幅が切先寄りにあり、切先はふくらを有する。茎は柄の木質が残るため直接観察できないが、棟側にやや反る形状であろう。柄の関寄りに鉄製の目釘を1本通している。8・9は刀子である。8は、切先に向けて徐々に細くなる長い身部をもち、銅製の柄を装着している。柄の関寄りに鉄製の目釘を1本通している。9は短い身部に木製の柄が付く。刃部は全体的に湾曲する。10は、身部の先端部が三角形を留め、薄くなって反りをもつことから、小形の鈍と推定する。木製の柄を装着している。11は釘で、胴部上端を叩いて作出した頭部がわずかに残る。胴部周囲には木質が遺存する。

その他の遺構および遺構外出土の金属製品

12～28は鉄製品である。12～14は鉄鏃で、いずれも関は四面に段をもつ形状である。12は短頸の腸挟長三角形鏃、13は短頸の長三角形鏃、14は雁股鏃である。14の二股部の扱いは浅く、頸部はごく短い。15～19は刀子である。15は茎、16・17は身部の破片で、15は一部木質が付着する。18は棟側が無関で、刃関は撫角である。茎は直線的に細まって尻に向かう。19は刃関がなく、棟関は直角に切れ込む。20は短刀で、刀身片面に樋を有する。棟関は直角、刃関は撫角である。21は紡錘車で、輪部は上下両面とも外側に膨らみ凸レンズ状をなす。22は釘で、上端をやや幅広に叩き延ばし、折り曲げて頭部を形成する。

23・24は鎌で、刃部と着柄部の区分が生じている。23は基部幅が狭く、刃部の増幅も急である。折り返し部は基部端全体を折り返す。24は基部から刃部に向けてほぼ直線的に立ち上がり徐々に増幅するが、その差は小さい。折り返し部は端部上端から棟側にかけて折り返す。下端は水平である。23は吉田川西遺跡Ⅶ類、24は同Ⅵ類に該当しよう。25は、一方の端部を鉤状に折り曲げ、反対側の端部に平面楕円形の環状部を作出している。連結具の一種であろう。26は、湾曲する端部の鋭い先端を機能部とする工具の可能性を推測する。27・28は磬で、鳥が翼を広げたような形状を呈する。片面の外周が断面方形に盛り上って幅3～4mmの縁部を形成する。両面とも装飾や撞座はない。鈕は上辺部中央に1か所あり、吊手孔径は5mm前後である。2点は類似した形態・大きさだが、下辺部の形状がやや異なる。27は中央両側の内湾部から緩やかな外湾となり、変換点に角を形成しない。28は左右非対称で、中央両側の内湾部から角をなして屈折し、直線的に左右端部に至る。29は初鋳1411年の永樂通寶、30は用途不明の筒状銅製品である。

(5) 製鉄関連遺物 (第101・102図)

羽口、羽口、鉄塊系遺物、鉄滓、銅滓、炉壁が出土した。全て割れた状態で出土し、小破片なので図化に耐え得る23点を抽出して報告する。各遺物の詳細は、本書所収のDVDに観察表を掲載した。

1～3は羽口で円筒状を呈する。1は先端部付近の破片で吸気部を欠損する。2は右側が吸気部、3は左側が吸気部で、先端部までの一部が残る。残存部の長さは1が11.3cm、2が12.2cm、3が8.4cmで、3は吸気部から先端部までがかなり短い。

4～6は炉壁でスサ状の痕跡が残る。5・6は小破片のため不明だが、4は壁の形状が直線的である。

7～11は鉄塊系遺物である。鉄滓を金属探知機(KDS社製DS-100)で測定し、金属反応を示したものを鉄塊系遺物とした。全体的に塊状を呈し、断面形は下面が蒲鉾型に湾曲するものが多い。7・9・10は銹により土砂が固結し、11は内部の鉄の銹化膨張に伴う割れがある。

12～22は鉄滓で、上面は多孔質もしくは流動・発泡したような部分がある。断面形は12・14～17・20・21が蒲鉾型に湾曲し、13・22が不整形、18・19が板状を呈する。18は下面に噛み込む砂が顕著である。

23は銅滓で、部分的に青銅色を呈する。断面形は上面が比較的平坦であり、下面は丸味を帯びる。上・下面に炭化物が残るが、量は上面が多い。

(6) 石器・石製品 (第103図)

1～5は砥石で、多面に使用痕が残る。1は上端に穿孔する。6は磨き石の可能性があり、表裏面が光沢を帯びる。7は1穴の凹石で、表面中央に深い凹痕が残る。8は印鑑である。上端の文字は不明だが、下端は「全」の文字が読める。

引用・参考文献

市教委 2002『市内遺跡発掘調査報告書』

中世土器研究会 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

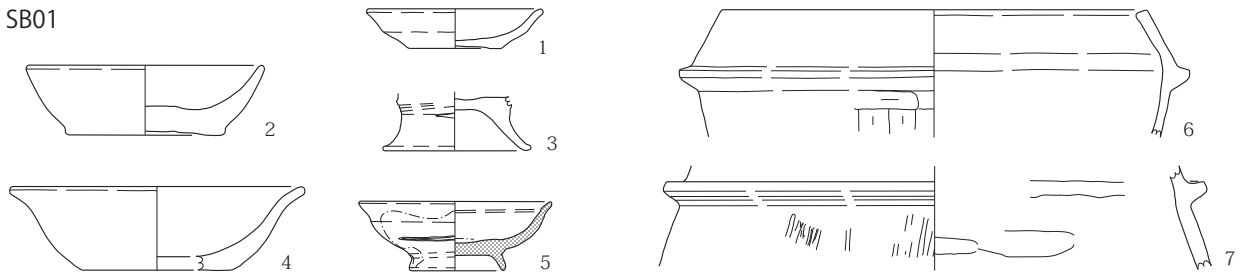
中野晴久ほか 2012『愛知県史』別編 窯業3 中世・近世 常滑系

藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院

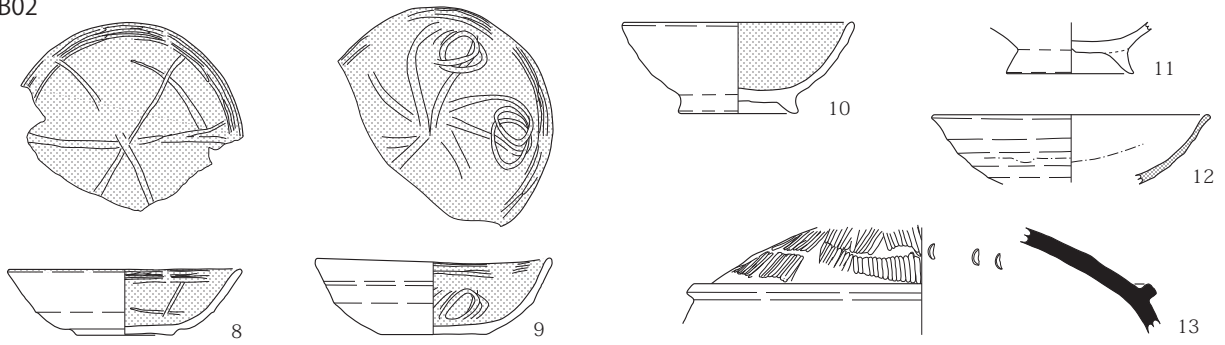
埋文センター 1989『吉田川西遺跡』

横田賢次郎・森田勉 1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4

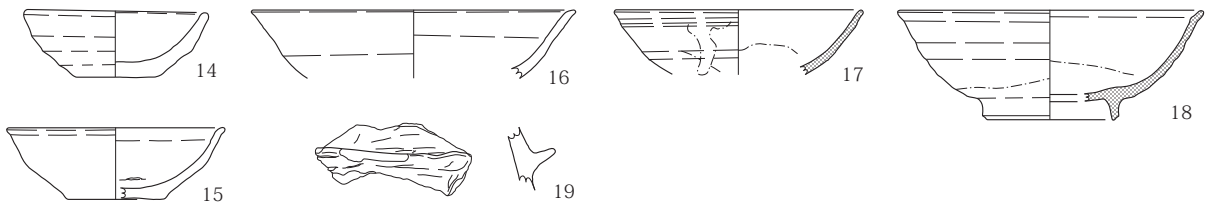
SB01



SB02



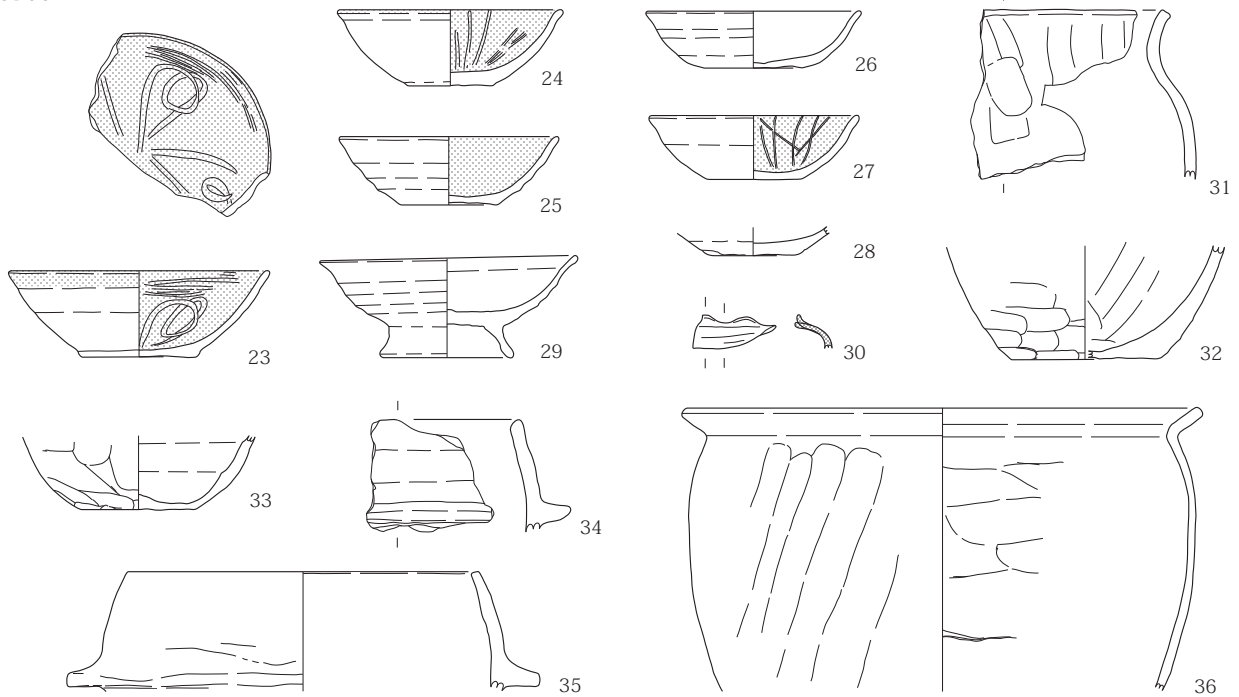
SB04



SB05

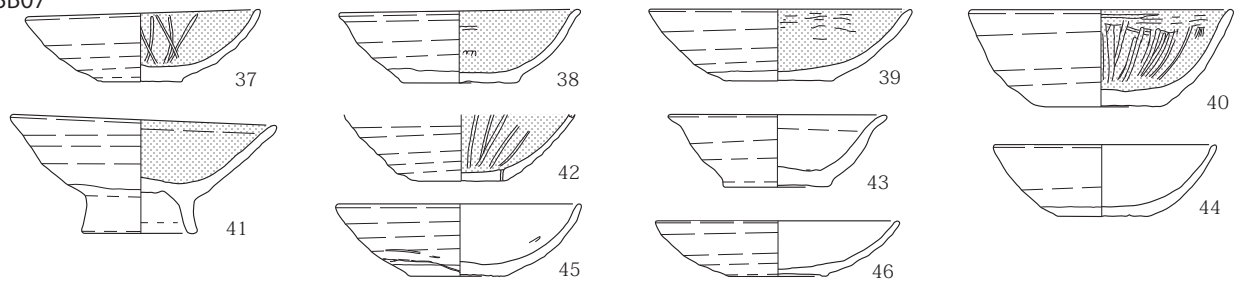


SB06

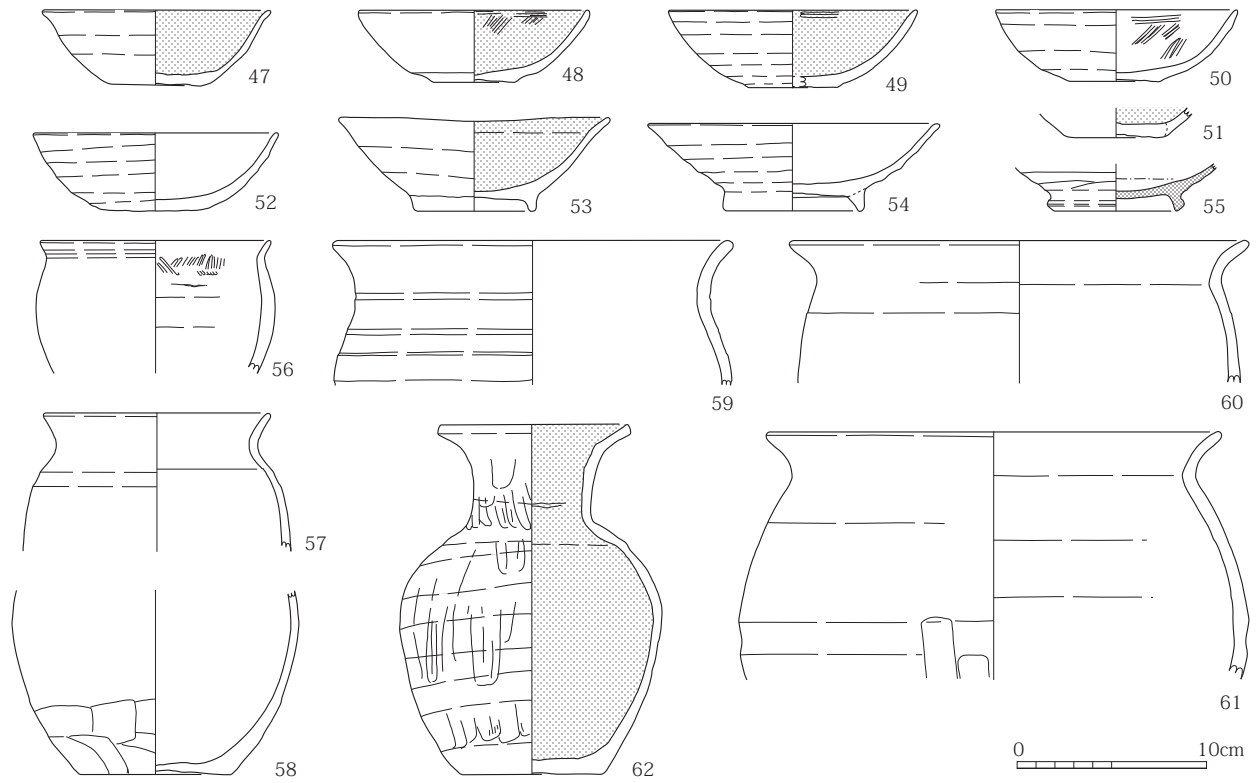


第94図 古代土器(1)

SB07

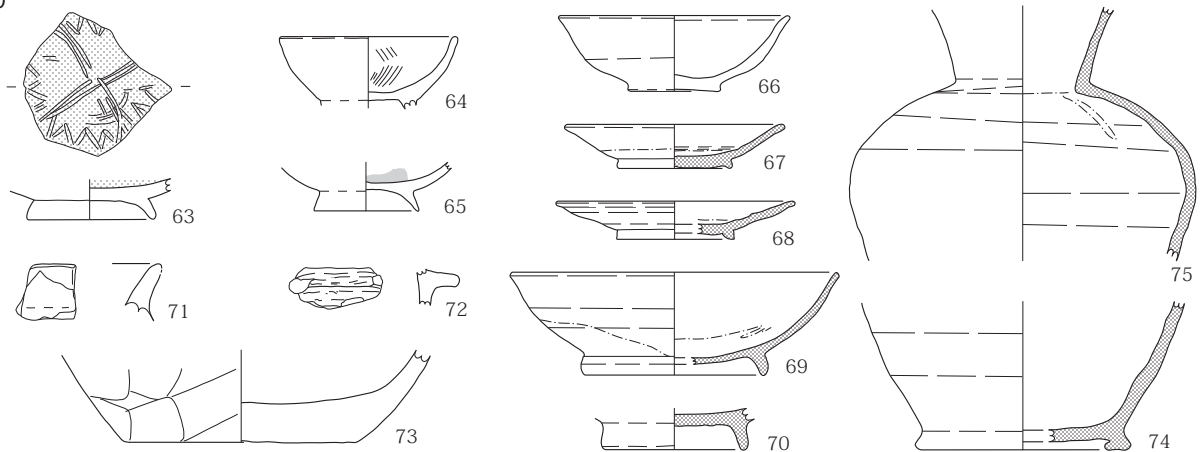


SB09

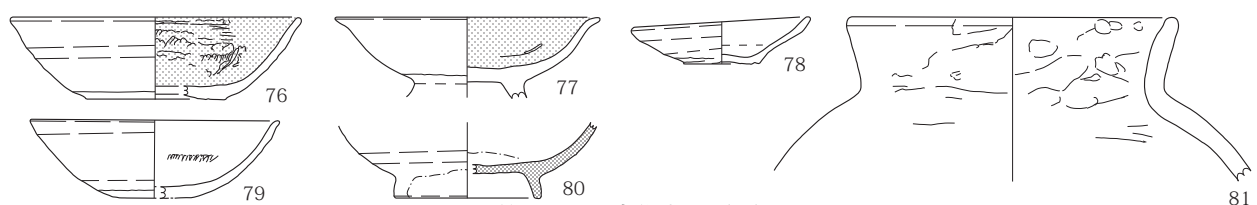


0 10cm

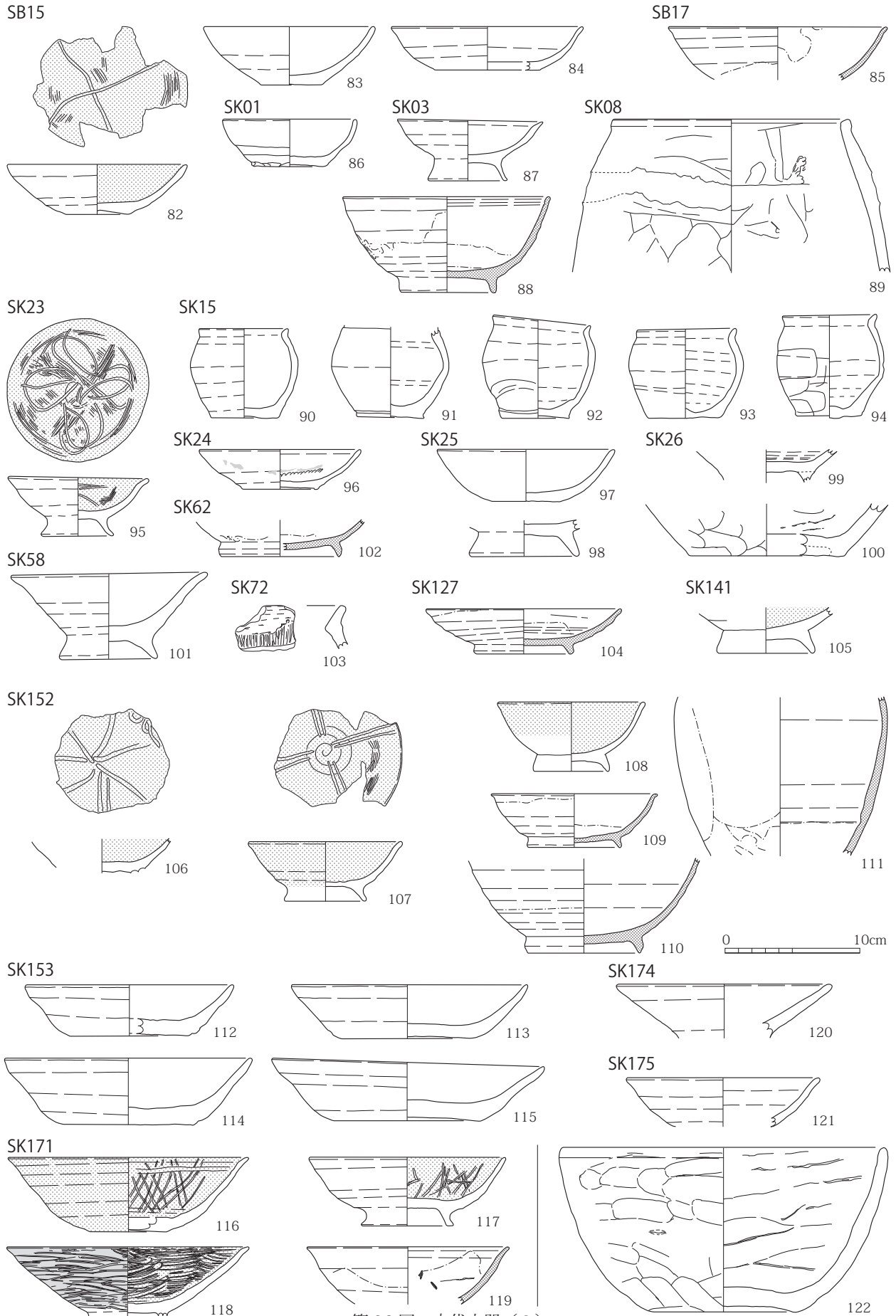
SB10



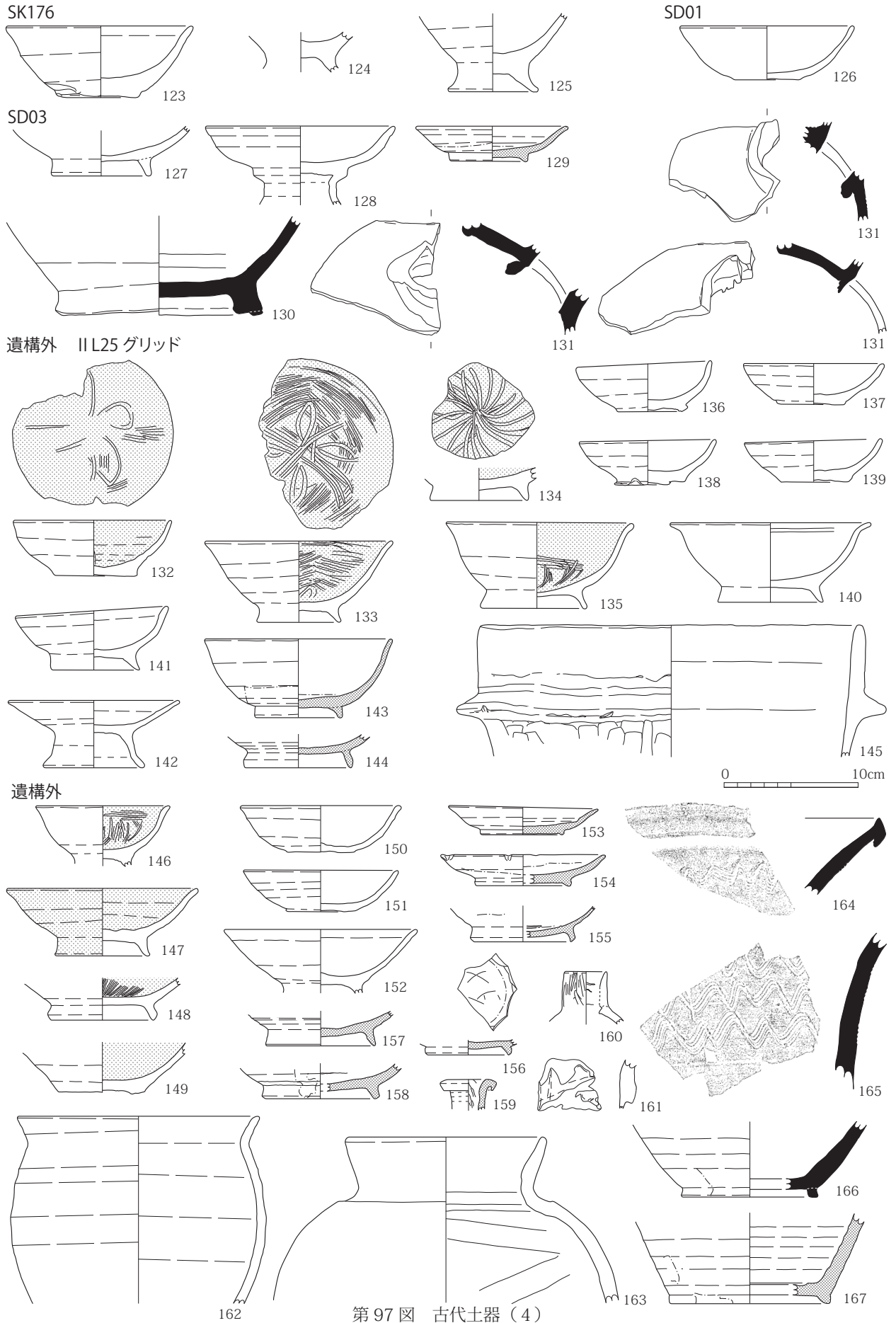
SB12



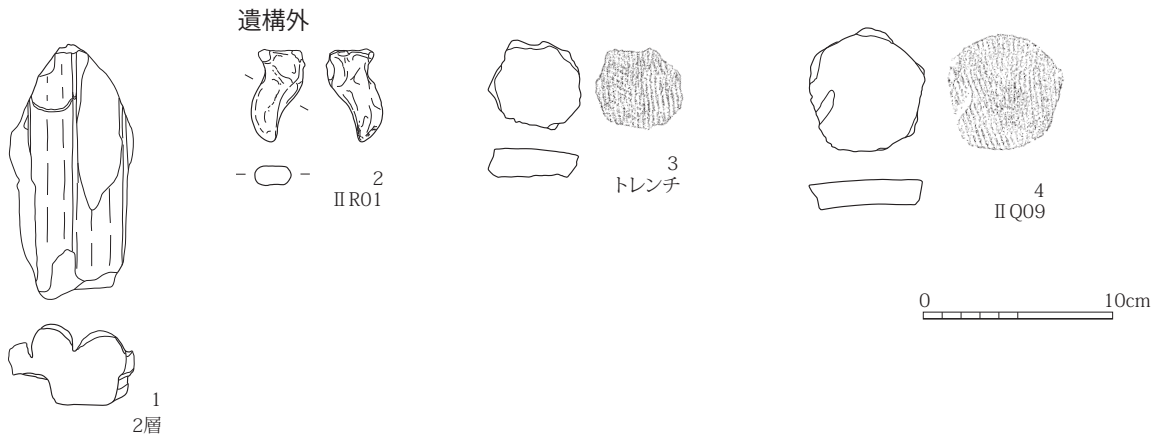
第95図 古代土器(2)



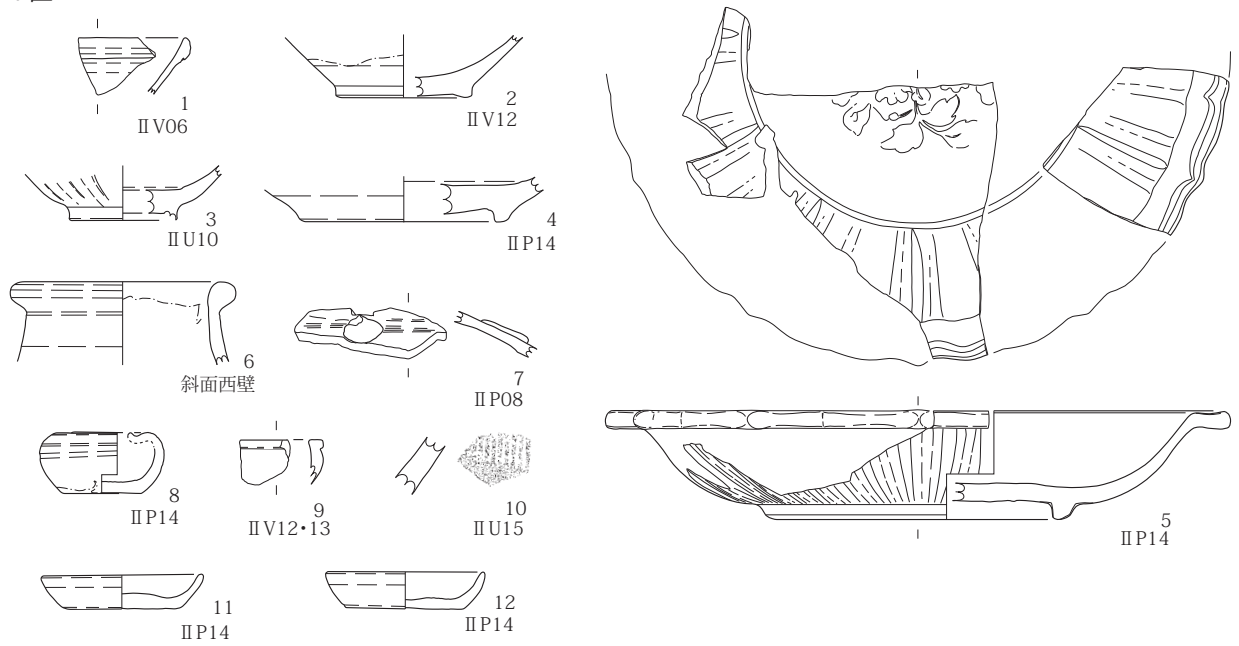
第96図 古代土器(3)



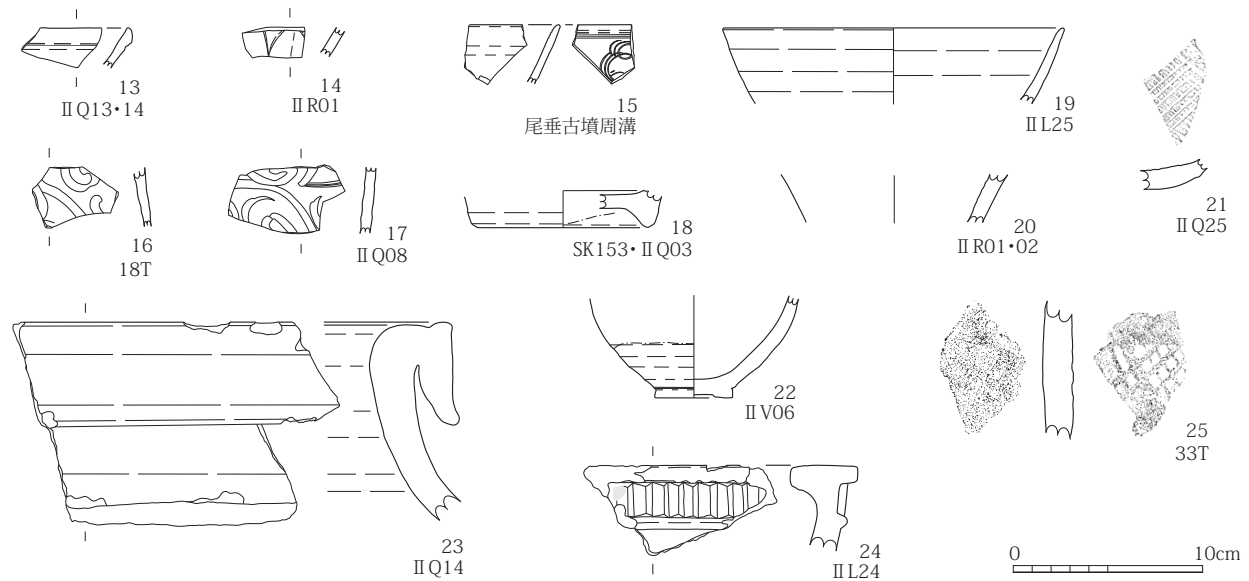
土製品
ST01



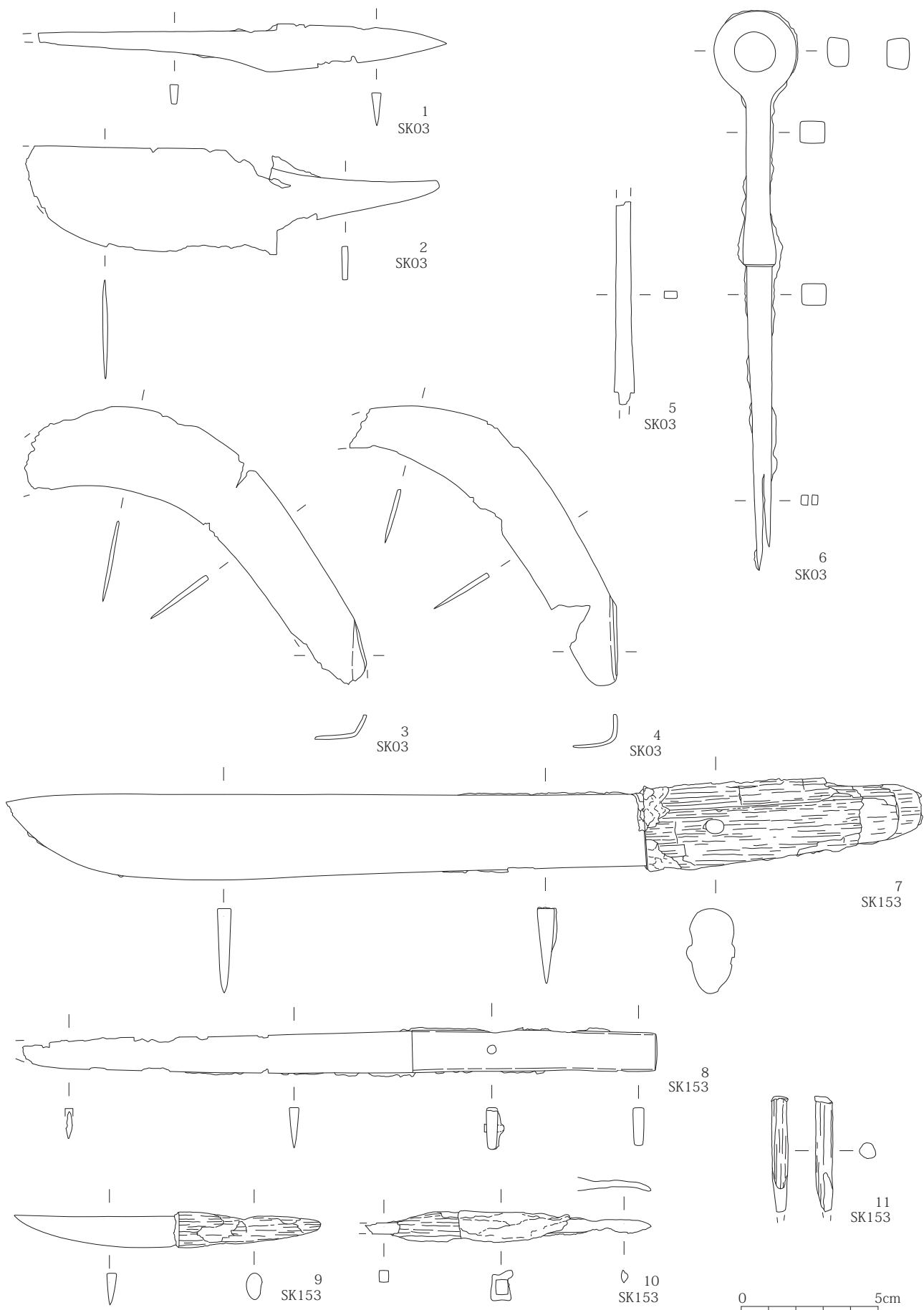
中世土器・陶磁器・土製品
1区



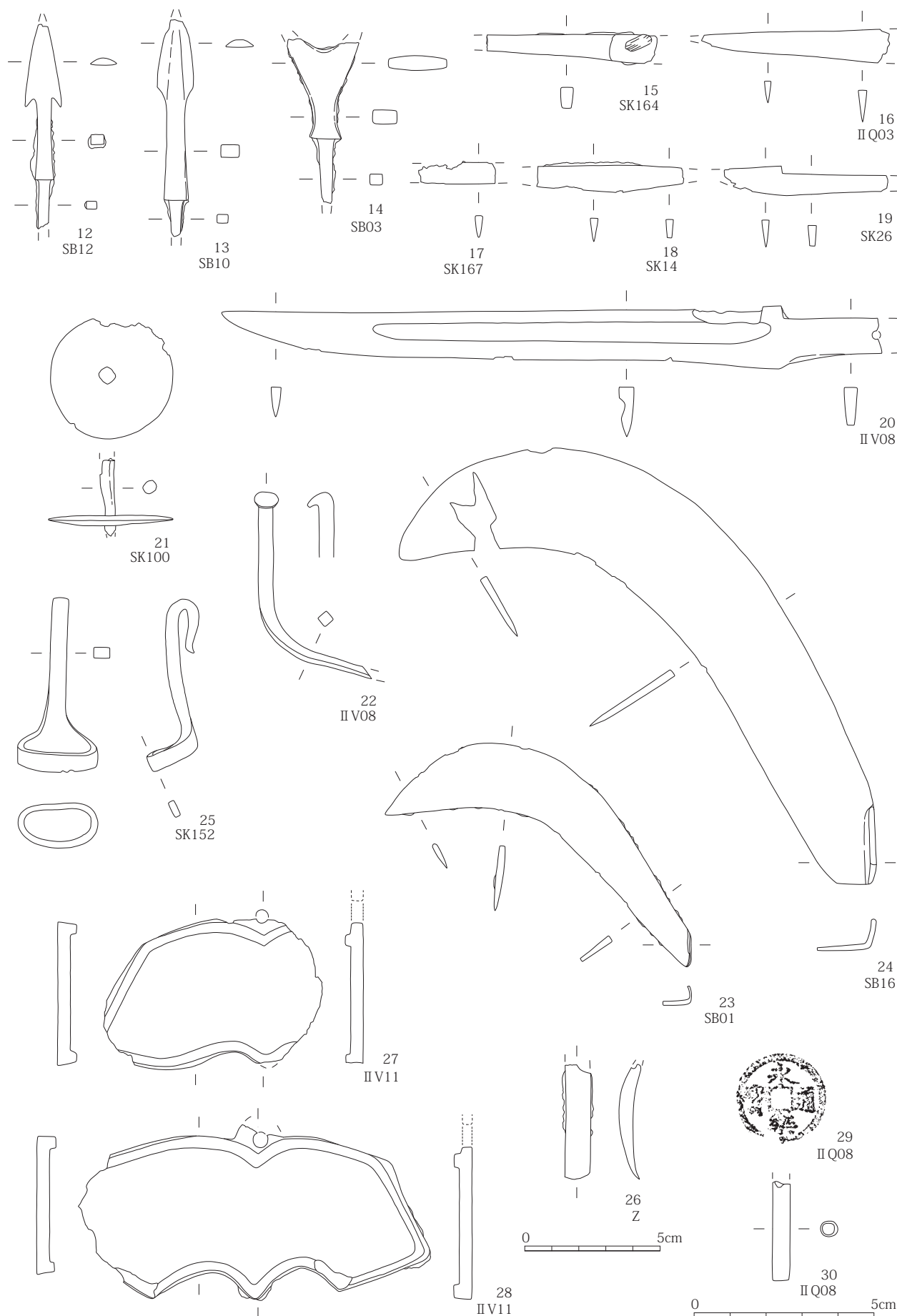
2区



第98図 土製品、中世土器・陶磁器

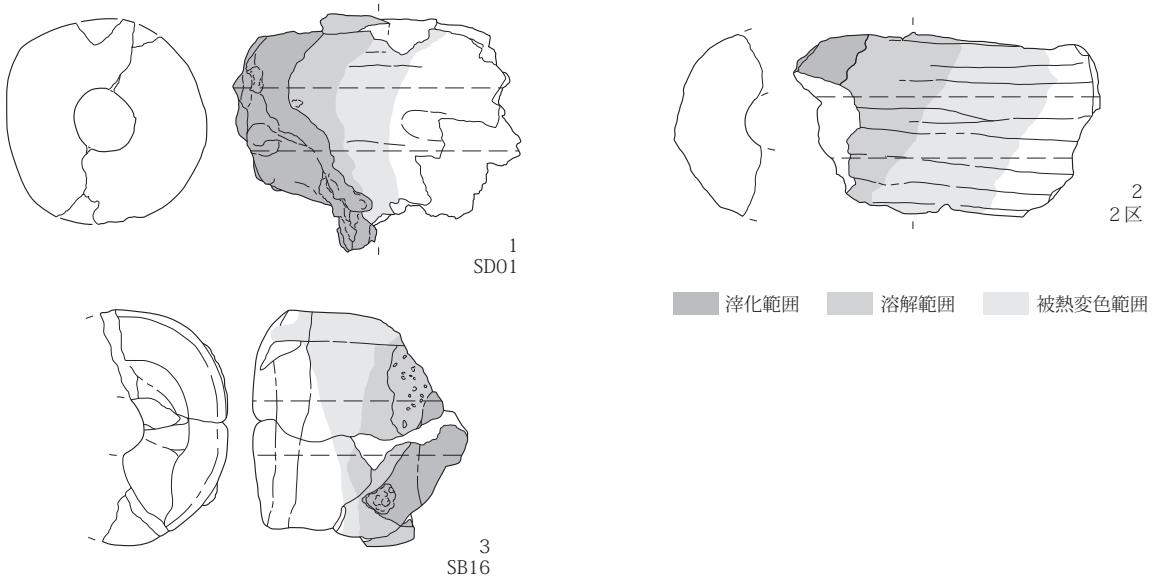


第99図 金属製品(1)

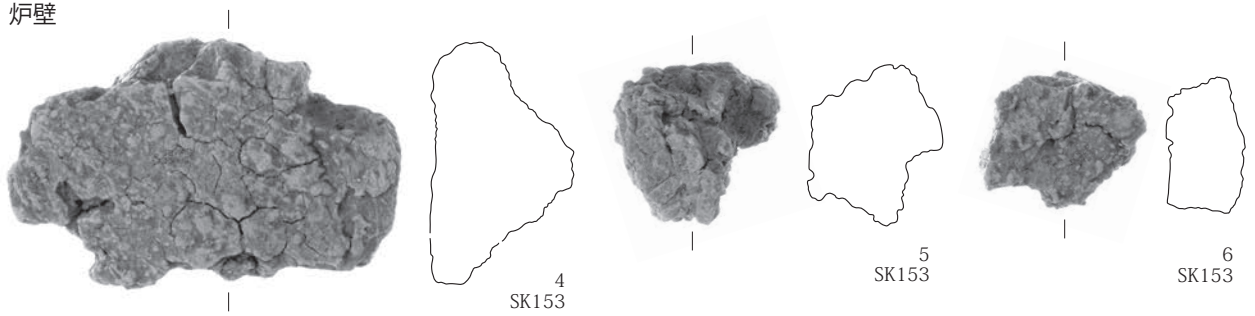


第100図 金属製品(2)

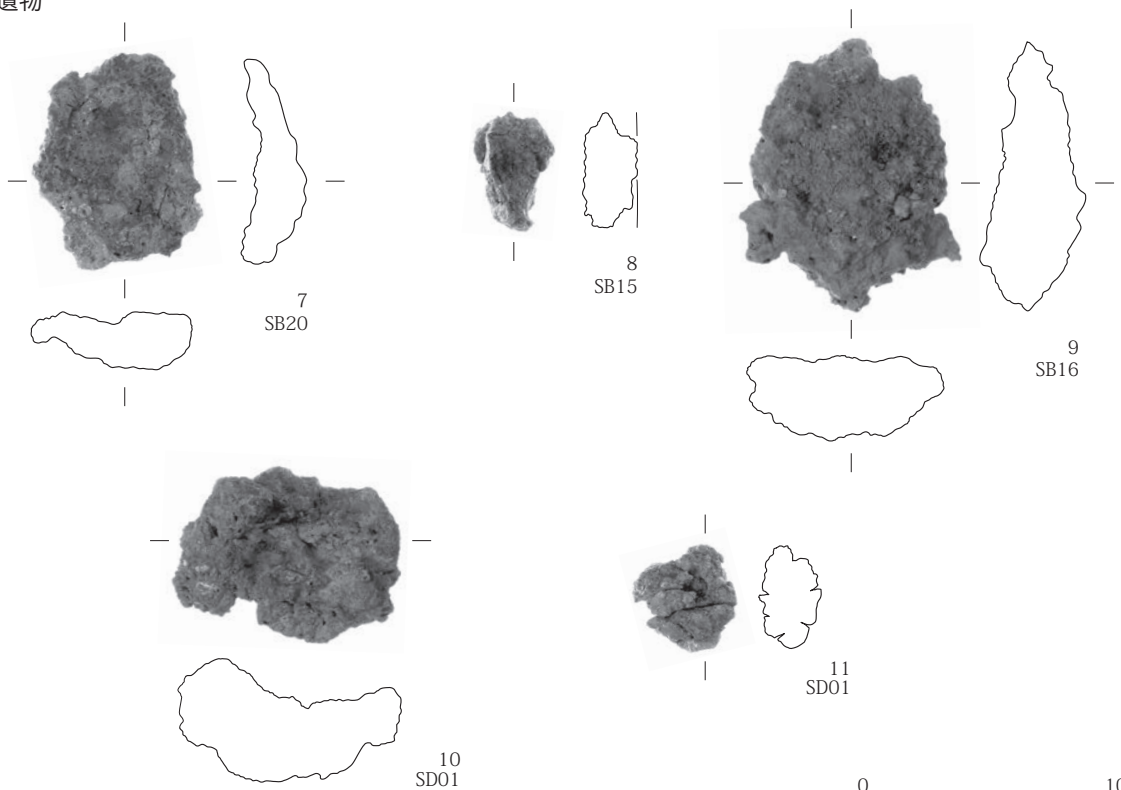
羽口



炉壁



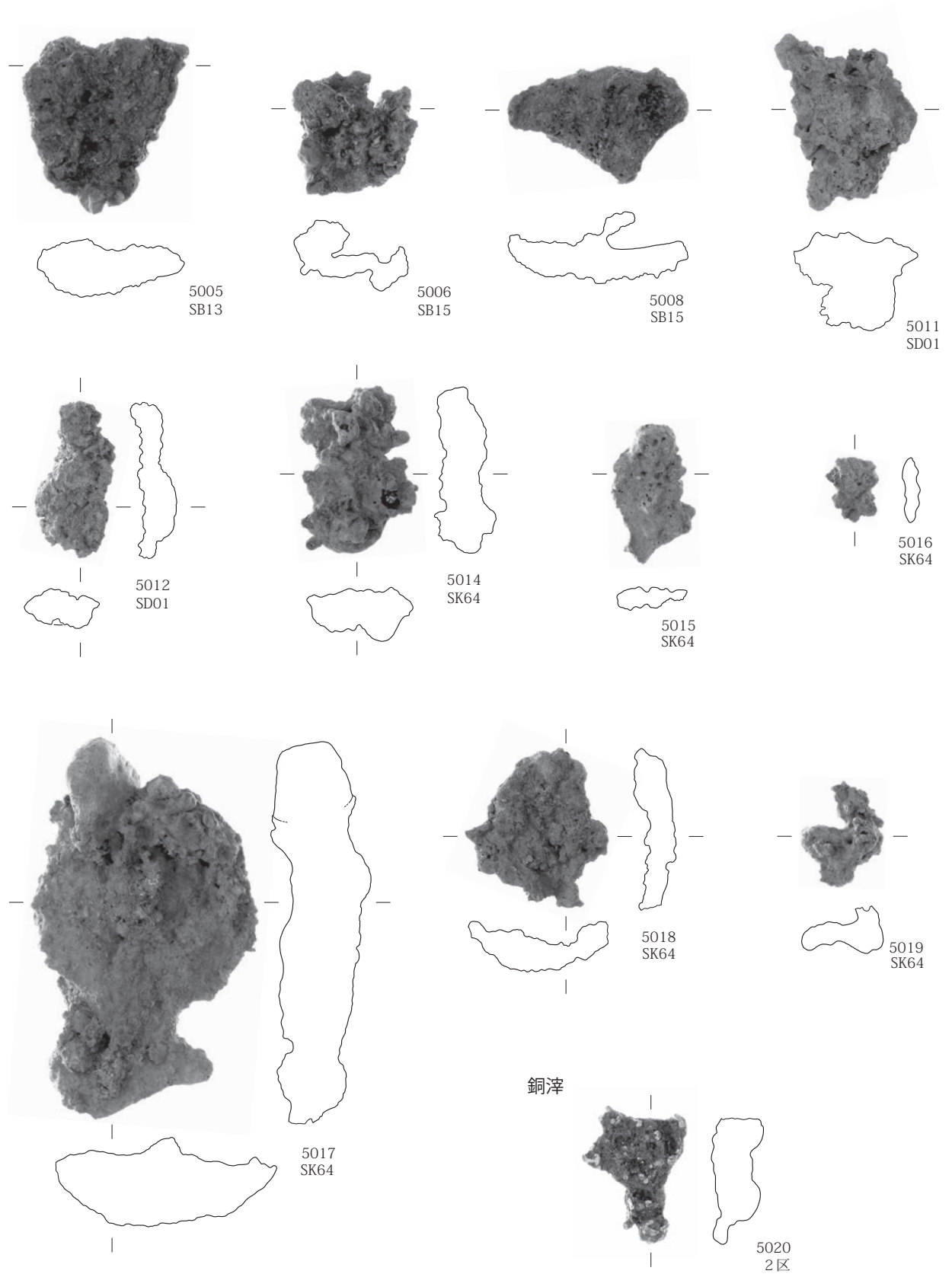
鉄塊系遺物



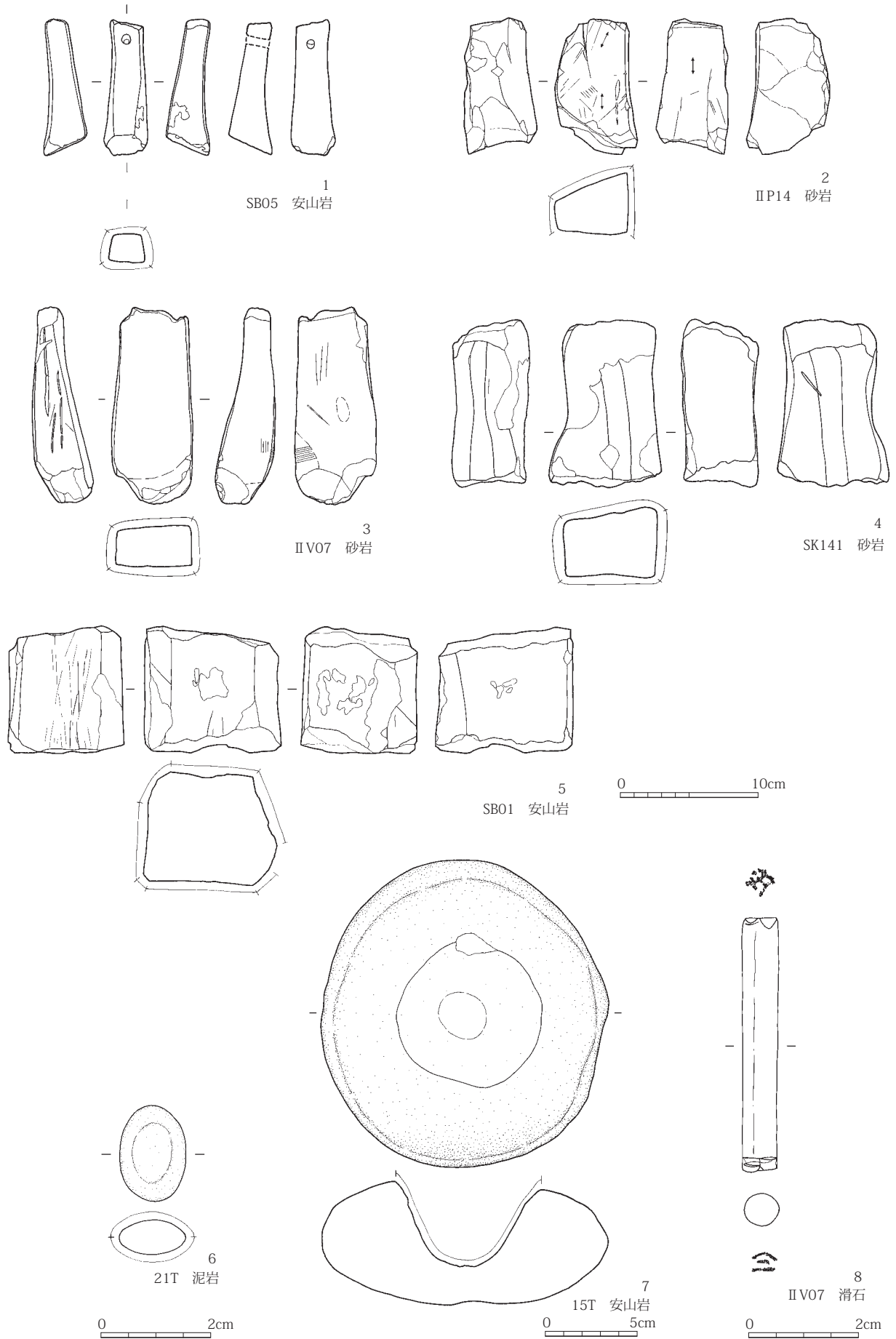
0 10cm

第101図 製鉄関連遺物(1)

鉄滓



第102図 製鉄関連遺物(2)



第103図 石器・石製品

第3節 尾垂古墳

1 概観

本古墳は千曲川左岸地域、佐久市前山字尾垂に所在する。2015（平成27）年度に、埋文センターが実施した中部横断道建設に伴う尾垂遺跡の発掘調査で、新たに発見された古墳である。発掘終了後、市教委が尾垂古墳として登録した。

尾垂古墳は、南南東に開口する横穴式石室を内部主体とする終末期の円墳である。八ヶ岳連峰から北東に伸びる丘陵末端付近の南東斜面裾部に立地し、標高は726 m前後を測る。

中部横断道建設に先立つ調査では、佐久市前山地区から大沢地区にかけて、本古墳のほか2基の古墳を新たに発見し、埋文センターが発掘調査を実施した。1基は本古墳の北方700 mの丘陵にある高尾古墳群5号墳、もう1基は南方約1 kmを東流する居川左岸の丘陵上に位置する兜山古墳で、どちらも横穴式石室をもつ終末期の古墳である。高尾5号墳は本書第5章で報告し、兜山古墳は別冊で報告する。本古墳周辺の7世紀から8世紀にかけての集落遺跡については、市道遺跡、辻遺跡、儘田遺跡などの発掘調査により、東方平地部の千曲川沿いの微高地上に該期の集落が展開する状況が明らかになっている（市教委2008）。一方、本古墳が立地する丘陵地では、本古墳足下の尾垂遺跡をはじめ、丘陵裾部から末端部に古墳時代から古代の散布地が分布するが、該期の様相は不明確である。

2 発掘の方法と経過

（1）検出（第71・72図）

発掘前の地形は耕作地の造成等による段状地形を呈し、段の上部（北側）は緩やかな傾斜面となっていた。地表面の観察では本古墳の存在をうかがい知ることはできなかったが、遺構確認のために掘削したトレンチ（23 T）において、拳大～人頭大の礫の集中と大形石を検出した。未周知の古墳が存在する可能性を考え、掘削範囲を面的に広げて精査した。その結果、横穴式石室残存部とその外側に円形に巡る列石および周溝を検出し、古墳であることが明らかになった。墳丘上部および南端部は消失しており、石室についても玄室奥側の下部が残るのみであった。

（2）発掘の方法と経過（第104・107図）

発掘を開始するにあたり、石室壁体残存部の形状と方向に合わせた石室長軸（主軸）と、それに直交する短軸を設定した。短軸は断面図の作成を考慮して側壁最奥石の中央を通る位置に設定した。さらに石室長軸・短軸を基準として4 mメッシュの調査グリッドを設定した。長軸に平行するグリッドラインは、合計5本設定し、西からA～Eと呼称した。短軸に平行するラインは合計4本設定し、北から1～4と呼称を与えた。Cラインが石室長軸延長、3ラインが短軸延長にあたる。グリッド杭はラインの交点に打設し、B-3、D-4のように呼称した。

石室内の調査は、当初、Cラインと3ラインにより石室内を4分割、奥壁に向かって右奥から時計回りに1・2・3・4区と呼称し、それぞれの区画を石室調査の単位とした。後に、3ラインより前方に設定したセクションライン（E-F）により、3・4区を2分して5・6区を加えた。掘下げは、断面観察用ベルトを残して区画ごとに進め、断面観察用ベルトは観察と記録を済ませた時点で崩し、再度ベルトを残して各区を掘り下げるという工程を数回繰り返して床面まで精査した。石室内埋土最下のD層（床礫間隙土を含む）については篩別・水洗し、微細遺物の抽出を試みた。

石室内の調査と並行して石室外の調査を進めた。周溝の調査は、Cラインおよび3ライン沿いに設定した断面観察用ベルト際に、サブトレンチを掘削して土層の堆積状況を把握した。ベルトを残し、列石およびその崩落石、遺物を検出・精査しつつ、周溝埋土を層位ごと段階的に底面まで掘り下げた。墳丘の調査は、長軸および短軸ラインに沿って截割りトレンチを掘削して、盛土層の築成状況を確認した。さらに列石、掘方や裏込めを含めた石室との関係を把握して、盛土の掘下げと石室裏込めの取外しを進めた。盛土掘下げ後、石室壁体の解体調査および掘方底面の調査を行った。

発掘状況を記録するにあたって、側壁などの左・右および奥・前の表現は、開口部から奥壁に向かっての左右、奥前とした。なお、本古墳の呼称については、登録前は尾垂遺跡SM01の呼称を用いた。

3 墳丘と周溝

(1) 墳丘の築成 (第104~106図、P L 25・26)

墳丘に二重の列石を巡らす円墳である。西側外回り列石外縁と東側盛土端との距離10.7mを墳丘直径とする。高さは不明であるが、墳丘残存部最高所と外回り列石前端の比高約2mを測る。墳丘の築成は、石室掘方底に10~15cmの厚さで敷土を施して(20層)石室構築の基底面を形成した後に、石室掘方充填土と一体となった盛土層を積み上げている。盛土層は、基本的に東西方向がほぼ水平になるように積み重ねてゆく(16・13・11・10・6・4層)が、外周部の5・19層は土堤状に盛り上げている。この土堤状盛土は墳端を形成し、盛土施工範囲を確定する意味をもつものであろう。奥壁外側の18層、14・12層、8・7層は、土質がやや異なるものの、工程段階としては、それぞれ16層、13層、6層に対応し、石室の構築と墳丘の築成が一連の工程で行われたことを示すと考える。南東~東部では、盛土(16・19層)が外回り列石の外側に延びて墳裾部を形成している。

(2) 列石と周溝 (第104~106図、P L 25・26)

墳丘を取り巻いて二重の列石が巡る。南側の石室開口部には残存せず、外回り列石の東側は部分的に残るのみである。用材は20~40cm大の亜円礫・亜角礫である。内回り列石は東西直径8.4m、東部では最大4段が残存し、そこでの立ち上がり角度は60度ほどである。周溝内に用材と同大の礫が落ち込んでおり、現状残っていない北部にも列石が存在したとみてよい。残存部の形勢からすると、周溝内縁に沿う形で巡っていたのであろう。外回り列石は東西直径9.8m、ほぼ基底石のみの残存で、北側は、現状、周溝末端部で途切れている。残存部の円弧をそのまま延長すると周溝内に入り込んでしまう。本来的にこうした形態か、あるいは内回り列石に連結するように収束する形態を推測しておきたい。内回りも外回りも基底石は、西部では地山(基盤)土上に、東部では16層上に設置されている。内外の列石間には内回り列石の崩落石材と推測される礫が認められるが、2列石間に本来的に盛土がなかったのか、存在したのか、すなわち、内回り列石が墳丘内に埋め込まれる形になっていたのかは、明らかにし得なかった。

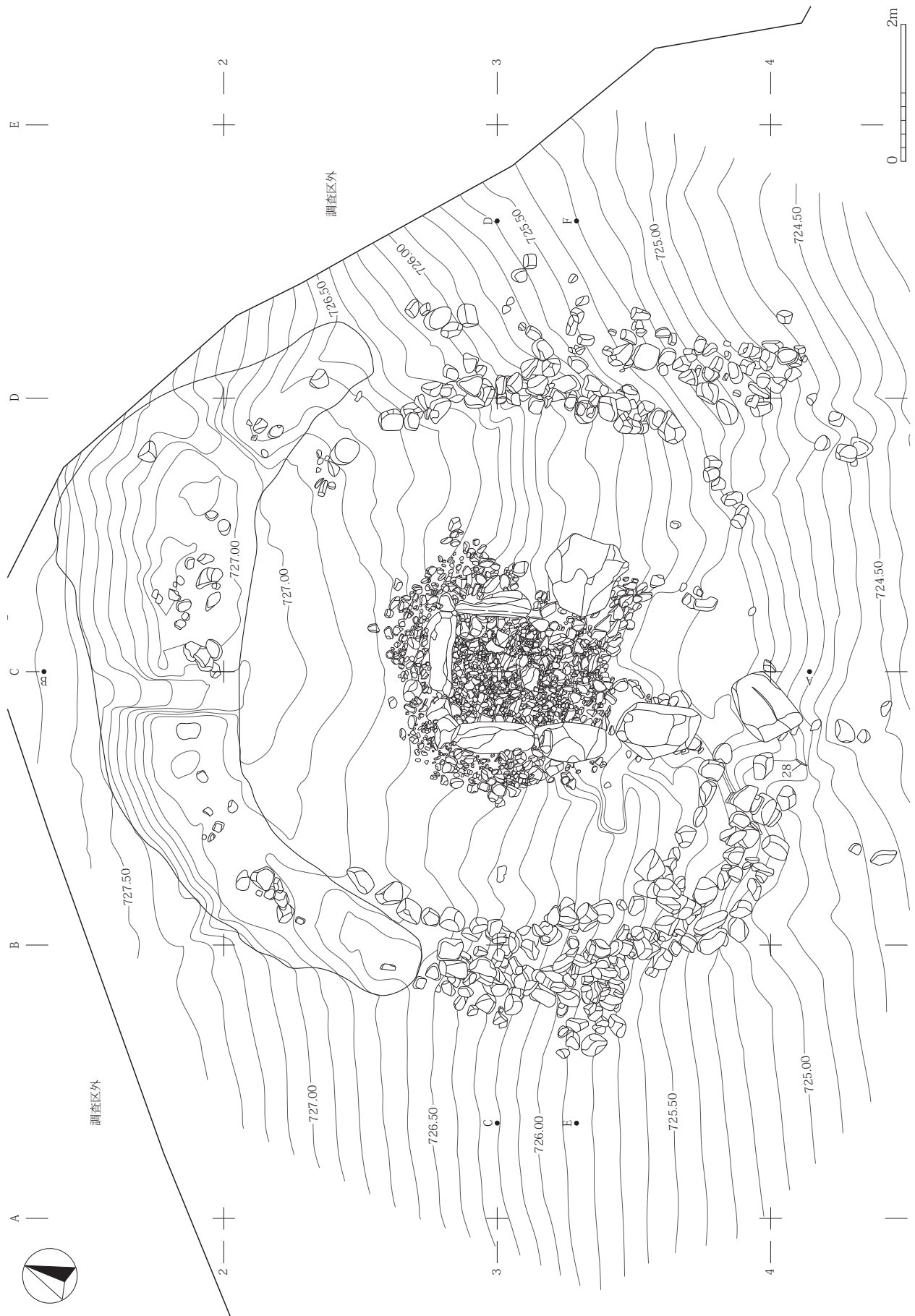
墳丘の北西から北東にかけて周溝が巡る。最大幅3.0m、内縁からの深さ20cm、外縁からの深さ60cmを測る。周溝外側の立ち上がりは、最も高い北部から南に向かって低くなり、標高726.5m付近で消失する。山側にのみ弧状に巡る周溝形態を想定しておきたい。

4 石室

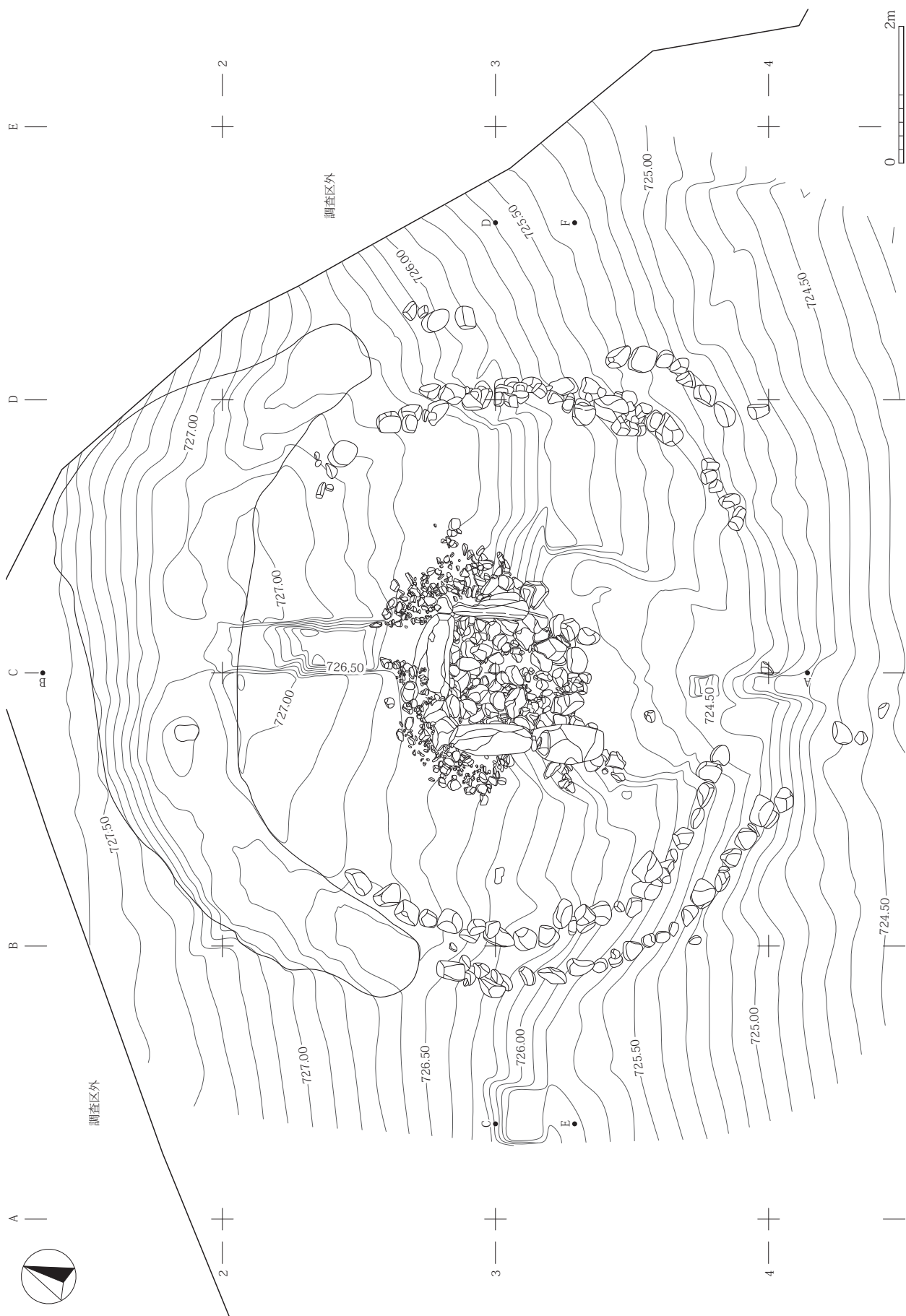
(1) 残存状況と埋没状況 (第106~108図、P L 25)

本古墳の内部主体は南南東に開口する横穴式石室である。前述したように、石室上部および玄室前部から開口部が失われ、玄室奥壁と左右側壁第1段の一部が残存するにすぎない。

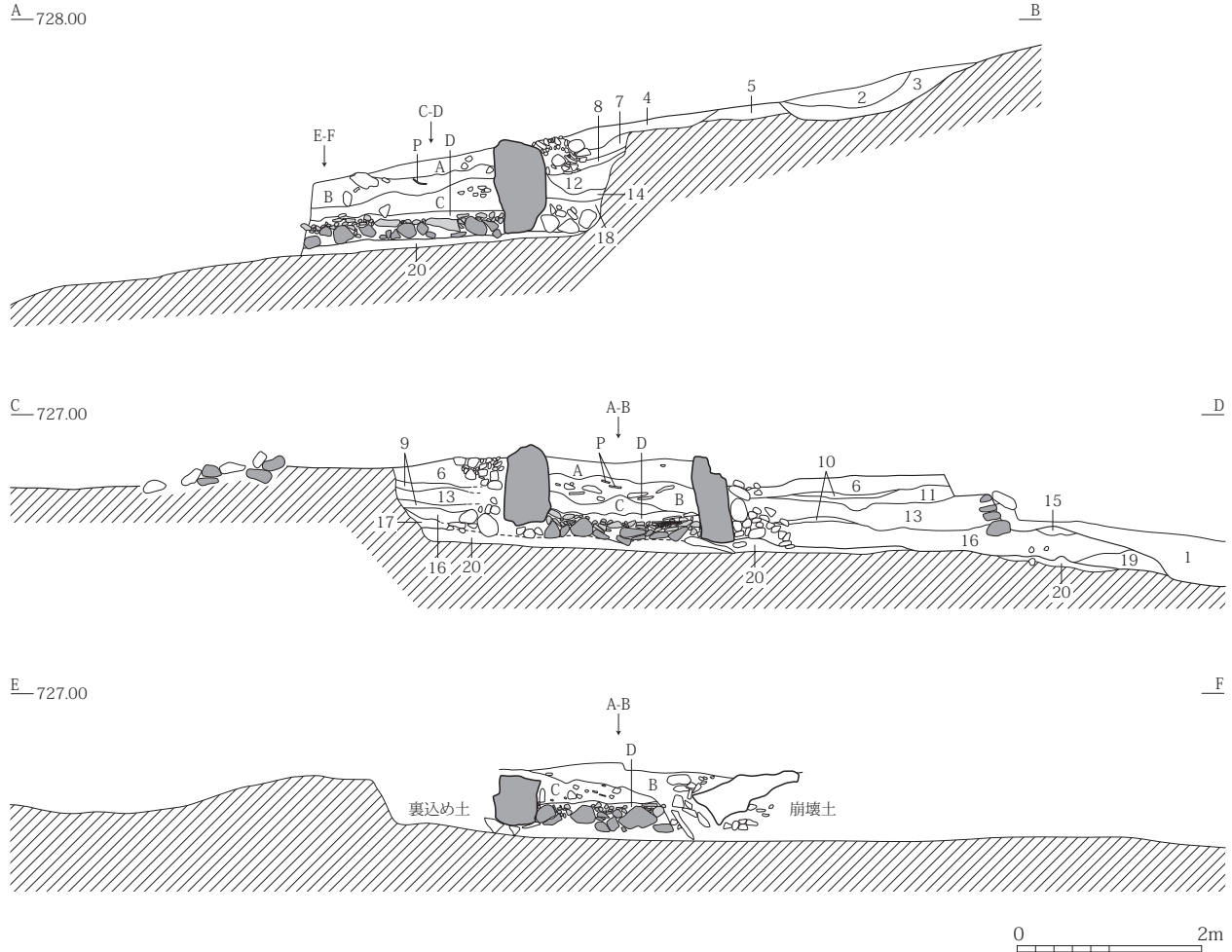
石室およびその崩壊部分を土石層が覆っている。B・C層には裏込めに由来すると思われる礫が多く混



第104図 平面図(第1面)



第105図 平面図(第2面)

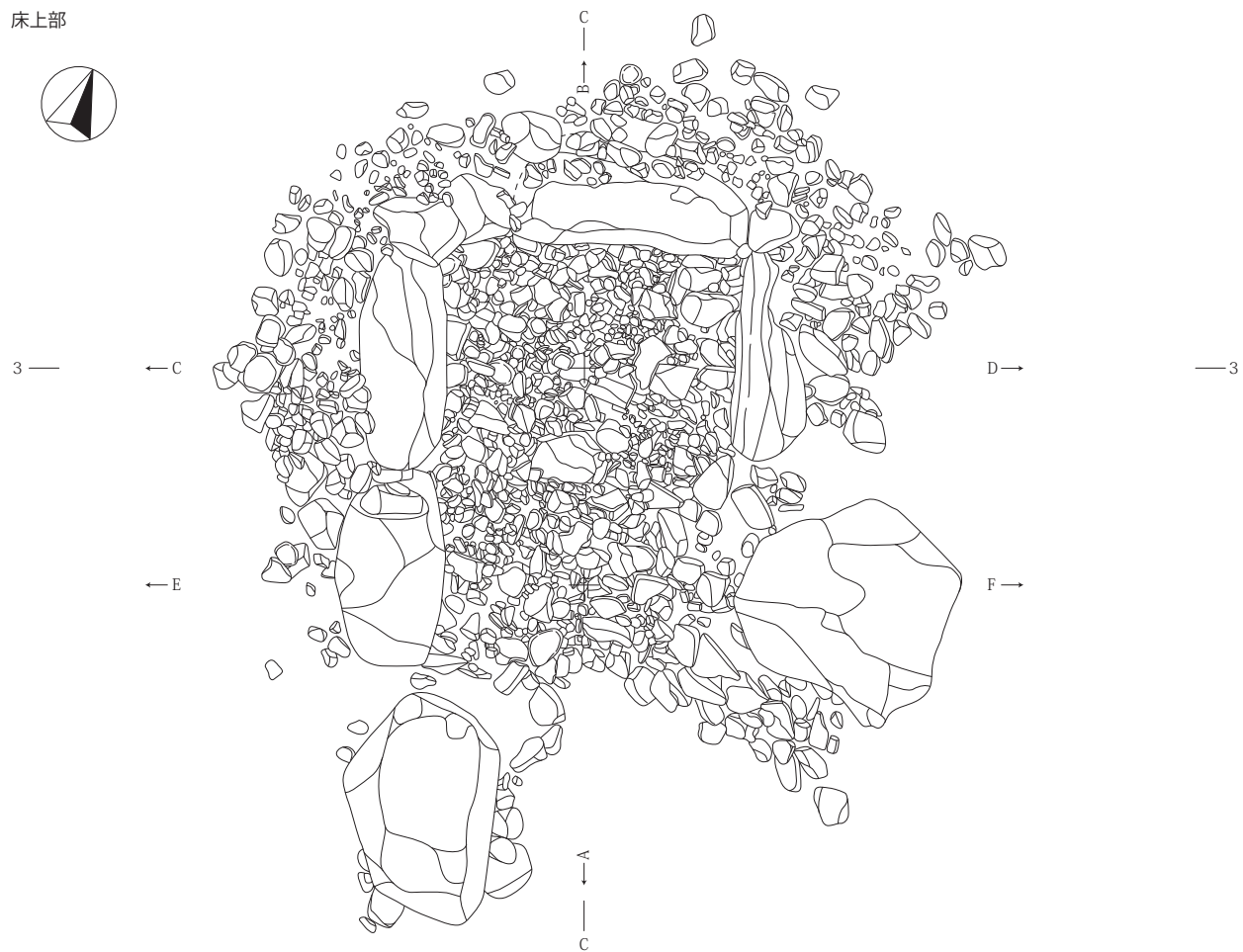


- A 暗褐色 (10YR3/4) 粘性ややあり。しまりあり。0.5～1mm白色土粒微混。部分的に20～50mm礫混
- B 暗褐色 (10YR3/4) 粘性・しまりややあり。1～5mm黄色土粒・100～300mm礫多混。0.5～1mm白色土粒微混
- C 暗褐色 (10YR3/4) 粘性・しまりややあり。1～5mm黄色土粒・50～100mm礫多混。0.5～1mm白色土粒微混
- D 暗褐色 (10YR3/4) 粘性あり。しまり弱。0.5～1mm黄色土粒・白色土粒・0.5～20mm礫少混
- 1 暗褐色 (10YR3/4) 粘性ややあり。しまりあり。0.5～5mm白色土粒・黄色土粒5%混。古墳覆土
- 2 暗褐色 (10YR3/4) 粘性・しまりややあり。0.5～1mm白色土粒・黄色土粒3%混。周溝埋土
- 3 褐色 (10YR4/6) 粘性弱。しまりあり。1～5mm白色土粒・黄色土粒10%混。周溝埋土
- 4 褐色 (10YR4/4) 粘性・しまりややあり。黄褐色土・暗褐色土混在。1～10mm白色土粒20%混
- 5 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性強。しまりややあり。1～10mm黄色土粒・橙色土粒30%混
- 6 暗褐色 (10YR3/4) 粘性弱。しまりあり。0.5～10mm白色土粒・黄色土粒25%混。部分的に10～20mm暗褐色土小ブロック30%混
- 7 暗褐色 (10YR3/3) 粘性ややあり。しまりあり。0.5～2mm白色土粒・黄色土粒3%混。6層に類似
- 8 黒褐色 (10YR3/2) 粘性ややあり。しまりあり。12層土主体。斑に6層土ブロック混。1～10mm白色土粒・黄色土粒・橙色土粒15%混
- 9 暗褐色 (10YR3/4) 粘性ややあり。しまりあり。0.5～1mm白色土粒・黄色土粒・橙色土粒3～7%混
- 10 黒褐色 (10YR3/1) 粘性ややあり。しまりやや弱。0.5mm白色土粒混
- 11 暗褐色 (10YR3/4) 粘性弱。しまりあり。0.5～1mm白色土粒・黄色土粒混
- 12 黒褐色 (10YR3/1) 粘性ややあり。しまりあり。0.5～8mm白色粗粒・黄色土粒微混
- 13 黒褐色 (10YR3/2) 粘性弱。しまりあり。0.5～10mm白色土粒・黄色土粒7%混
- 14 黒褐色 (10YR2/3) 粘性弱。しまりあり。0.5～1mm白色土粒・黄色土粒3%混。13層に類似
- 15 褐色 (10YR4/4) 粘性ややあり。しまりあり。0.5～5mm白色土粒・黄色土粒25%混
- 16 黒褐色 (10YR3/2) 粘性弱。しまりあり。0.5～10mm白色土粒・黄色土粒混。20～30mm礫3%混
- 17 暗褐色 (10YR3/4) 粘性弱。しまりあり。0.5～5mm白色土粒・黄色土粒10%混
- 18 暗褐色 (10YR3/3) 粘性弱。しまりあり。0.5～1mm白色土粒・黄色土粒3%混。17層に類似
- 19 褐色 (10YR4/4) 粘性なし。しまり強。1～10mm黄色土粒・橙色土粒・白色土粒・10～30mm軽石30%混
- 20 褐色 (10YR4/4) 粘性ややあり。しまり強。0.5～2mm白色土粒・1～3mm黄色土粒・1～2mm青灰色土粒%混。20～50mm礫微混

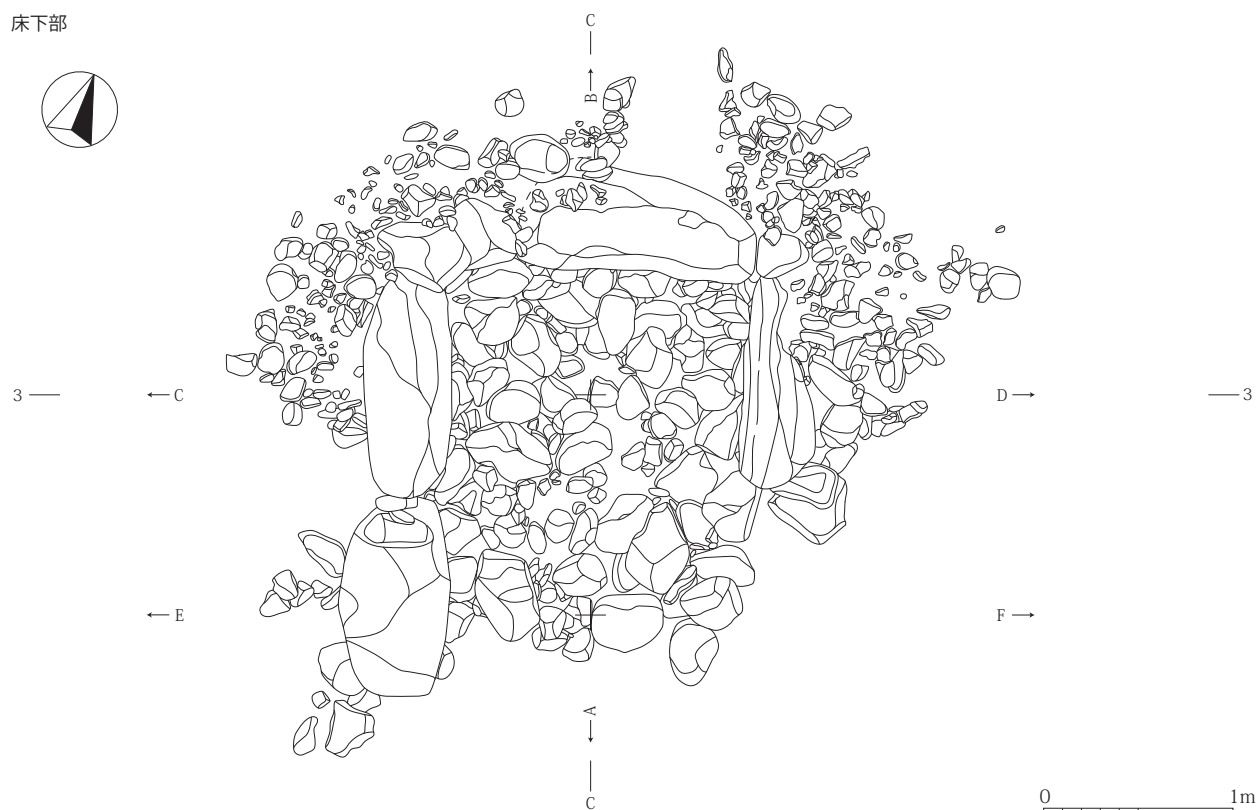
第106図 墳丘断面図

入し、特にB層には人頭大の大形礫も多い。B層は右側壁の倒壊部分では外側に流れ出している。最下のD層は人骨や副葬品を直接覆い、礫の混入が少なく層厚も薄い。D層は天井石が存在していた期間の形成であり、C層以上は天井部破壊後の堆積とみてよいだろう。

床上部

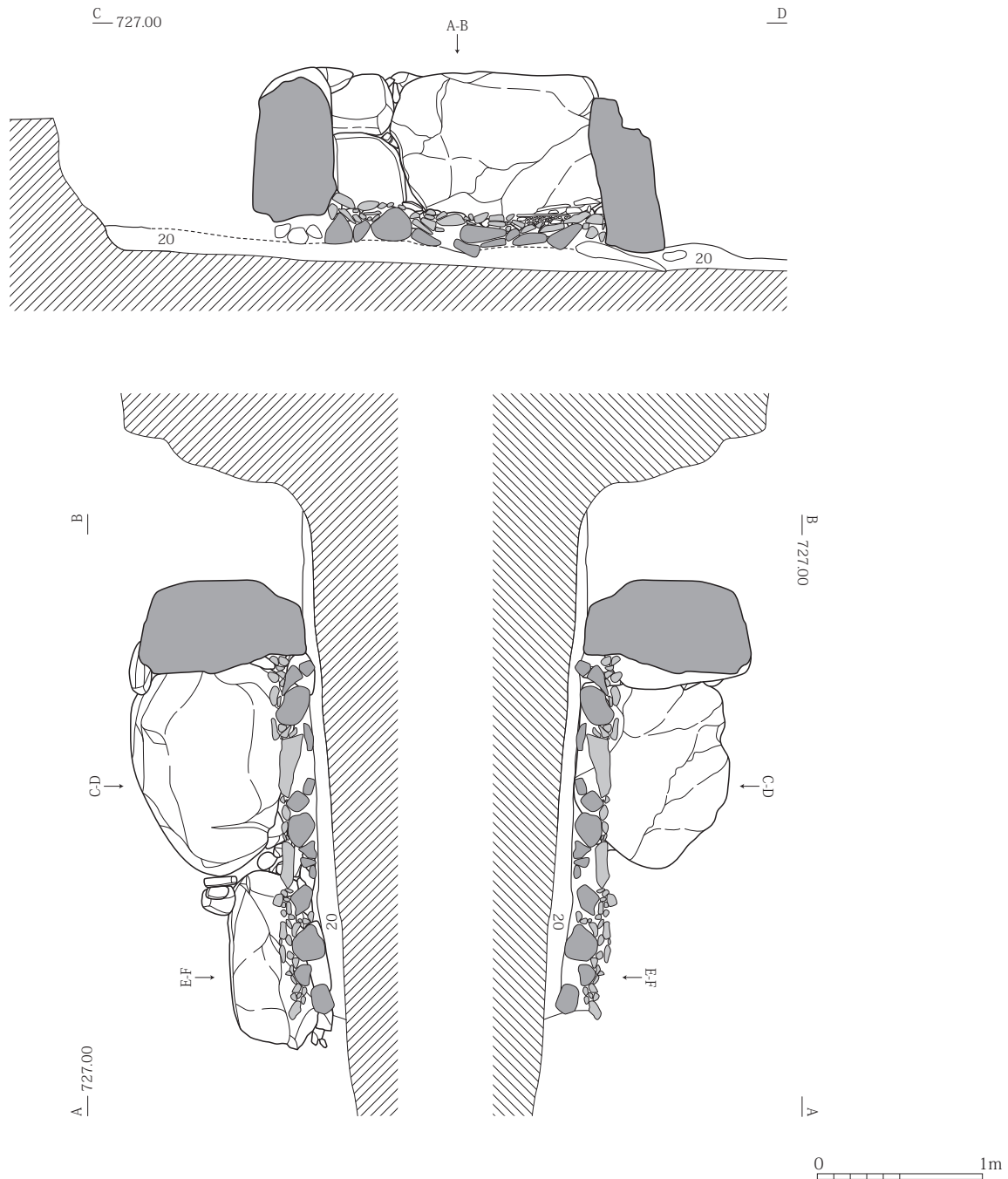


床下部



0 1m

第107图 石室平面图



第108図 石室立面図

(2) 石室構造 (第104・106～108図、P L 25・26)

玄室の残存長は2.4 m、奥壁部分での幅1.6 mを測る。床面からの高さは最大90cmである。長軸はN15°Eを指し、丘陵斜面の走向に対してほぼ直交する。

奥壁は幅1.3 m、高さ1.0 m、最大厚60cmの石材を立て、その左側に小振りな石材を二段に積んでいる。左側壁は最奥石とその手前の2石が残る。最奥石は長さ1.3 m、高さ85cm、最大厚50cm、その手前の石は長さ1.1 m、高さ50cm、最大厚60cmの石材を用いている。右側壁は長さ1.2 m、高さ90cm、最大厚40cmの扁平な石材を用いた最奥石のみが残る。奥壁・側壁とも、壁体石は石材の広い面を内側に向けて設置している。前面の崩壊土中に側壁最奥石とほぼ同大の石が3石検出された。いずれも側壁壁体を構成する石材と考えられる。玄室前部から羨道部は残存しないが、内回り列石まで側壁が延びていたとすれば、石室長は約4 m、外回り列石まで延びていたとすれば約4.8 mとなる。

床は、20～50cmの角礫・亜角礫を敷き並べた直上に、小円礫・亜円礫を敷き詰めた二重構造をもつものである。上部床の礫の大きさは、20～30cmのものもあるが、大部分は5～10cmである。

(3) 掘方と裏込め (第106・108・109図、P L 26)

石室は、斜面を断面L字状に切り開いて平坦面を造成した掘方内に構築されている。掘方は南と東が開放する形状で、規模は、北辺長5.6 m、西辺長5.1 m、短い東辺長90cm、深さは北辺中央部で最大1.2 mを測る。掘方底には10～15cmの厚さで敷き土が施され(20層)、石室構築の基底面となる。石室は、掘方の中央ではなく北西寄りに、長軸を北辺に直交、西辺に平行させて構築している。

奥壁および左側壁の外側には、掘方壁との間に土石が充填される。下部には人頭大を主体とした礫と土を混交させ(16～18層)、中部はほぼ土のみ(9・12～14層)、上部は壁体石の外側50～60cmの範囲で、10～15cmを主体とした亜円礫・亜角礫を用いた裏込めが壁体を囲み、その外側に土を充填している(6～8層)。右側壁の外側は約60cmの範囲で裏込めが壁体を囲み、その外側は墳丘盛土となる。奥壁・左側壁ほどではないが、下部に大振りの礫を配する傾向がうかがえる。

5 遺物

(1) 出土状況 (第110図、P L 26)

玄室 玄室内からは人骨、金属製品、土器、ガラス小玉が出土した。

人骨については、茂原信生氏・櫻井秀雄氏・本郷一美氏に鑑定を依頼し、結果を第4節に掲載した。鑑定によると、人骨は、玄室床面の右奥寄り1・2区にまとまっていて、長軸が揃う四肢骨の集積があり、その奥と前に頭蓋骨が位置する。少なくとも3体の、頑丈さが異なる個体を確認できた。この状況は、追葬時あるいは廃絶時の片付け行為を示唆すると考える。

床面出土の金属製品は、直刀・刀装具、鉄鏃の武器類のほか、刀子や銅製金具等がある。直刀は3・6区の左側壁に沿って1振が出土した。鉄鏃は1区奥壁際と4区左側壁際に二つのまとまりがある。細根両刃式は前者に、細根片刃式Bは後者に集中する。4区の鉄鏃集中のなかには鉄鏃とは異なる棒状鉄製品および刀子が含まれる。少数ながら、1・2区の人骨集中の周囲から刀装具・銅製金具が出土した。

石室埋土D層土の篩別・水洗により、須恵器壺片、鉄鏃片、刀装具片、耳環、ガラス小玉を検出した。ガラス小玉はすべて床礫の間隙に落ち込んでいた。

石室埋土A～C層中位からは須恵器壺・甕・大甕片(第112図18の一部)が出土した。大甕片が多く、B層出土片を主体にA・C層中位出土の破片が接合した。墳丘上で用いられた大甕が、天井石の破壊以後に流れ込んだと考える。

石室外 墳丘と周溝のほか、墳丘南部から東部の崩落土・造成土から土器が出土した。古墳所属土器が周辺に流出、拡散した可能性があるため、周辺遺構・グリッド等出土土器との接合を確認し、古墳に伴う可能性のある土器を抽出した。抽出した土器は、土師器坏、須恵器坏・坏蓋・高台坏・高坏・壺・甕・大甕・横瓶・脚付土器がある。土器のほか、墳丘前面の外回り列石の南側で刀子が出土している。

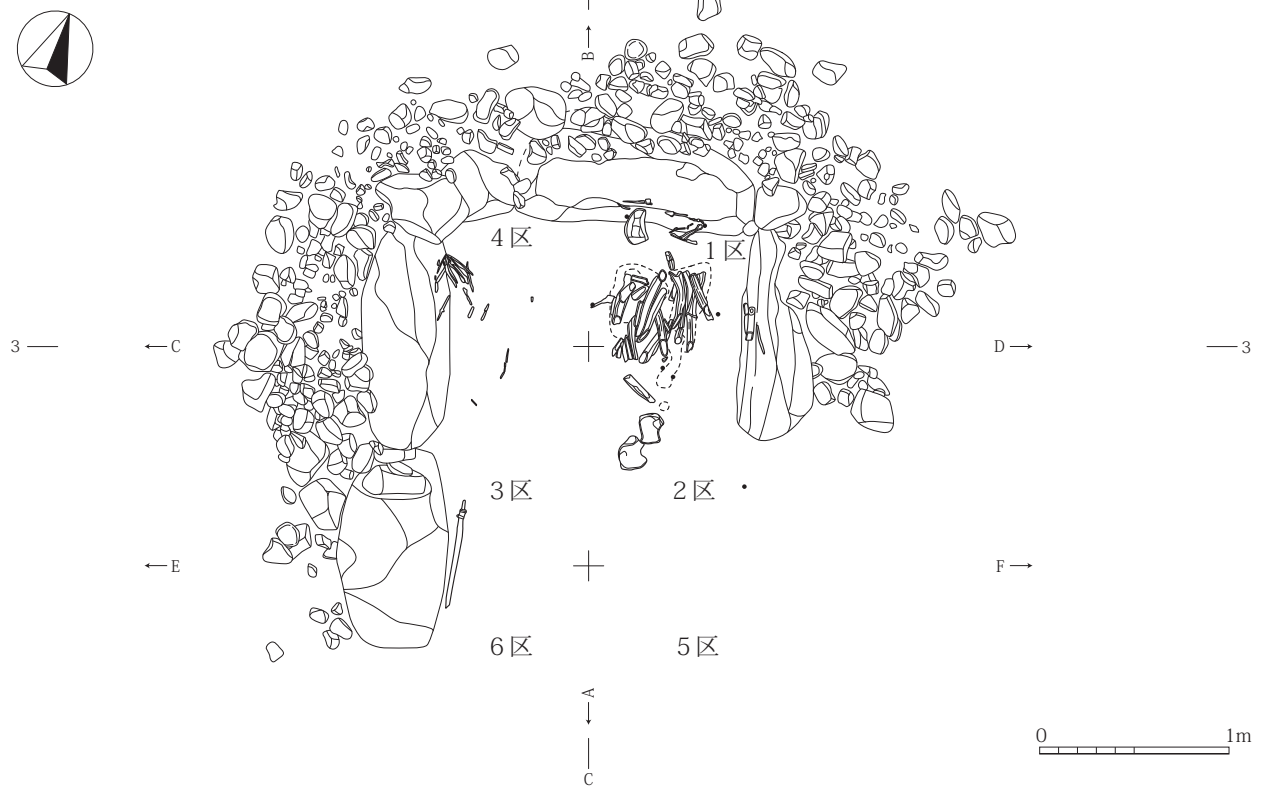
(2) 遺物

土器 (第111・112図、P L 27)

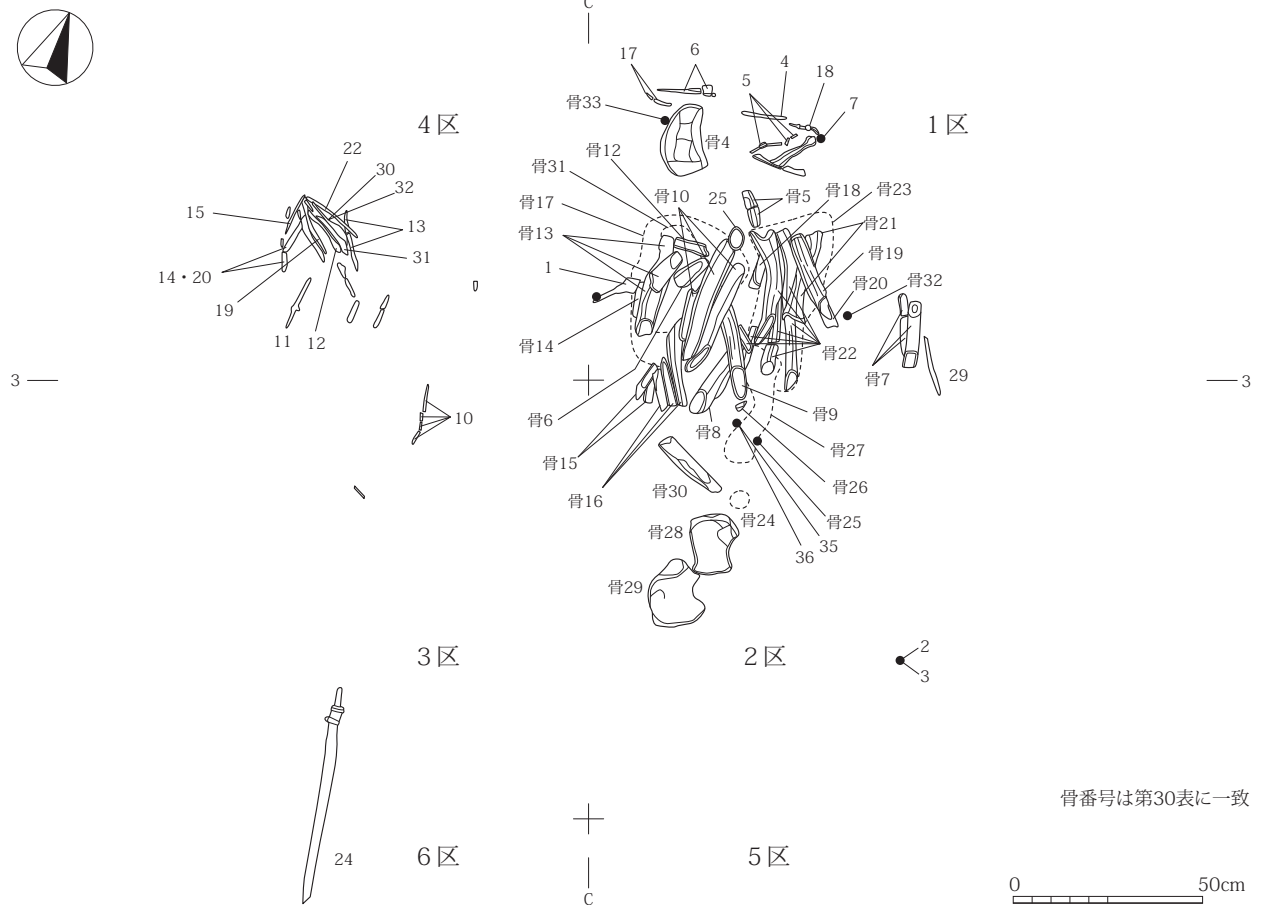
1は、墳丘南側の造成土内から出土した、浅い半球状体部の土師器坏で、体下部から底部ヘラケズリ後ナデを施す。

2～18は須恵器である。2～4は内面に返りの付く坏蓋である。2・3は返り端部が口縁端部よりわずかに突出する。5・6は坏である。5は体部が丸みを帯び、口端部内面にかすかな沈線状の段が巡る。6の底部は切り離し後回転ヘラケズリ調整を施す。2～6は周溝および墳丘部分から出土した。8は高台

玄室骨・金属製品出土状況



骨・金属製品出土状況拡大図



第110図 玄室内遺物出土状況図

坏で、底部回転ヘラケズリ調整を施す。墳丘出土の破片と東方に約 20 m離れた S D 03 出土の破片が接合した 7 も、体部の形状から高台坏と判断する。9 は坏部塊形の高坏である。10 は口縁部が直立し、端部に沈線を巡らす。高坏坏部であろう。8～10 は周溝および墳丘部分から出土した。11 は埋土 D 層土の篩別・水洗で検出した細い頸部で、長頸の壺や瓶、甕などの器種が想定される。12 は石室埋土から出土した。壺あるいは甕の胴部と考える。肩部と胴部の境に凹線状に細く強い横ナデを施している。13 は周溝から出土した広口の壺で、口縁端面に沈線状の凹部が巡る。14 は II R 01・02 検出面の出土だが、脚付土器の脚台部という特異な器種のため、古墳に伴う可能性があると考えた。15 は墳丘および周囲から出土した横瓶で、胴部の端部寄りに微突線 2 条を巡らせる。不明瞭ながら端部側にもう 1 条あるかもしれない。外面を擬格子タタキ、内面はナデ調整を残す。16・17 は甕で、16 は外面擬格子タタキ、内面は同心円タタキ目を残す。石室埋土と石室外の破片が接合した。18 は大甕である。石室の埋土、石室外、II Q03～09 グリッド出土の破片を組み合わせて器形を復元した。強く外反する口縁部を沈線で上下 2 段に区画し、それぞれ櫛歯状工具による刺突文を施す。下段の刺突文は縦位であるが、上段は縦位の後に斜位にも施文しており、X 字ないし N 字文を連ねたように見える。下段刺突文帯の下は強い断続ヨコナデを施している。外面擬格子タタキ、内面には同心円タタキ目が残るが、底部を除きほとんどナデ消している。

金属製品 (第 113・114 図、P L 28・29)

鉄鎌 (1～23) 鉄鎌は平根有頸式、細根式がある。23 点を図示した。図示したもののほか、細根式の鎌身部で形態が不明瞭なもの 2 点、細根式で鎌身部を欠くが茎関が残る破片 3 点がある。以下、鎌身部の形態によって分類し記述する。部位名称と分類の大枠は平林大樹氏の方法 (平林 2013) を規範とした。

平根有頸式 (1～3)

腸挟五角形式 A (1) : 腸挟が短い。推定腸挟長 0.3cm

腸挟五角形式 B (2) : 腸挟が長い。残存腸挟長 1.8cm

五角形式 (3) : 腸挟がない

細根式 (4～23)

両刃式 (4～7) : 寸詰りの柳葉形で、刃部は先端部のみに付き、ふくらをもつ。関は緩い撫角

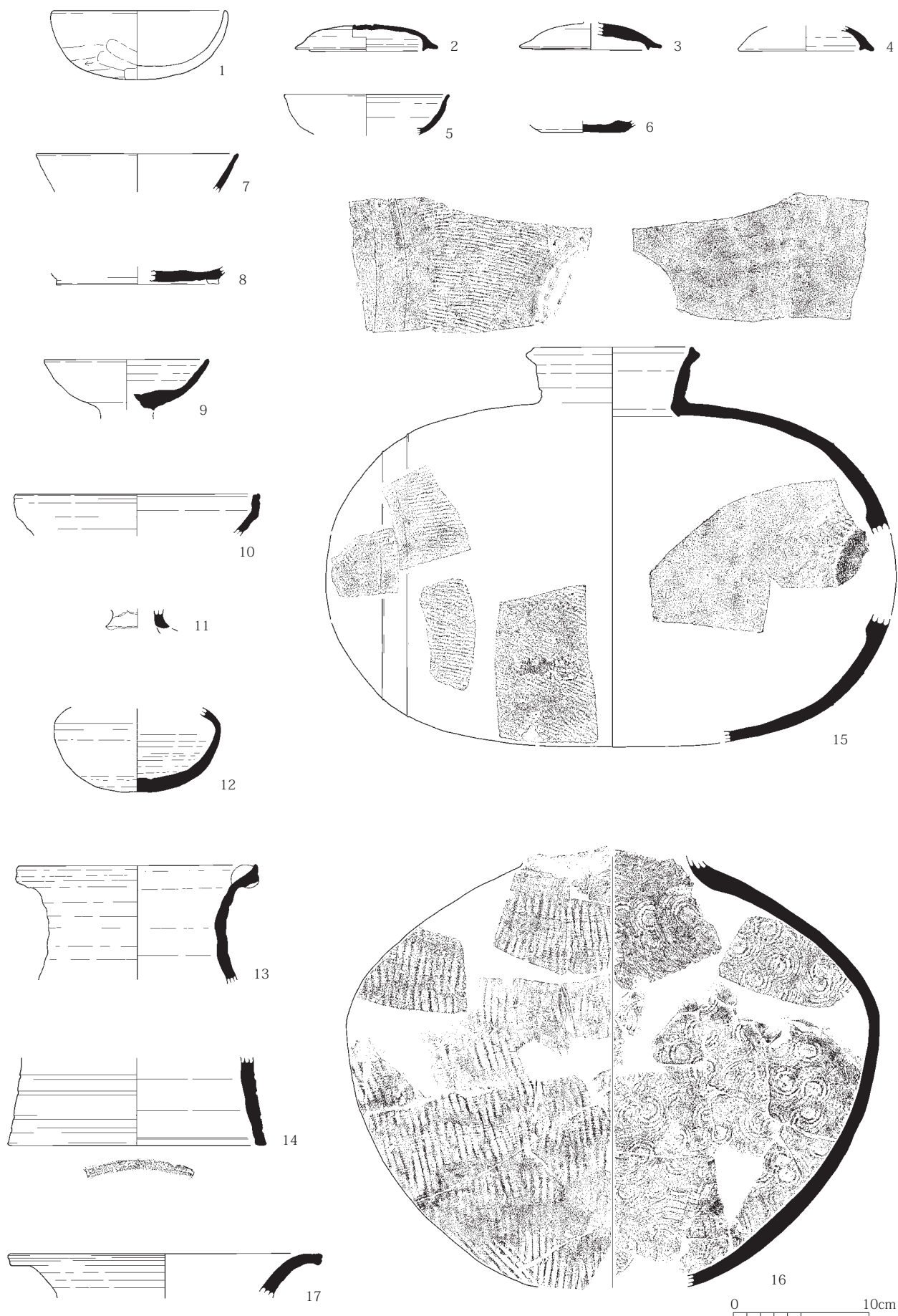
片刃式 A (8～10) : 背と平行する直線的な刃部をもつ。関は直角

片刃式 B (11～15) : やや外彎する刃部をもつ。関は緩い撫角あるいは明瞭な変化点がない

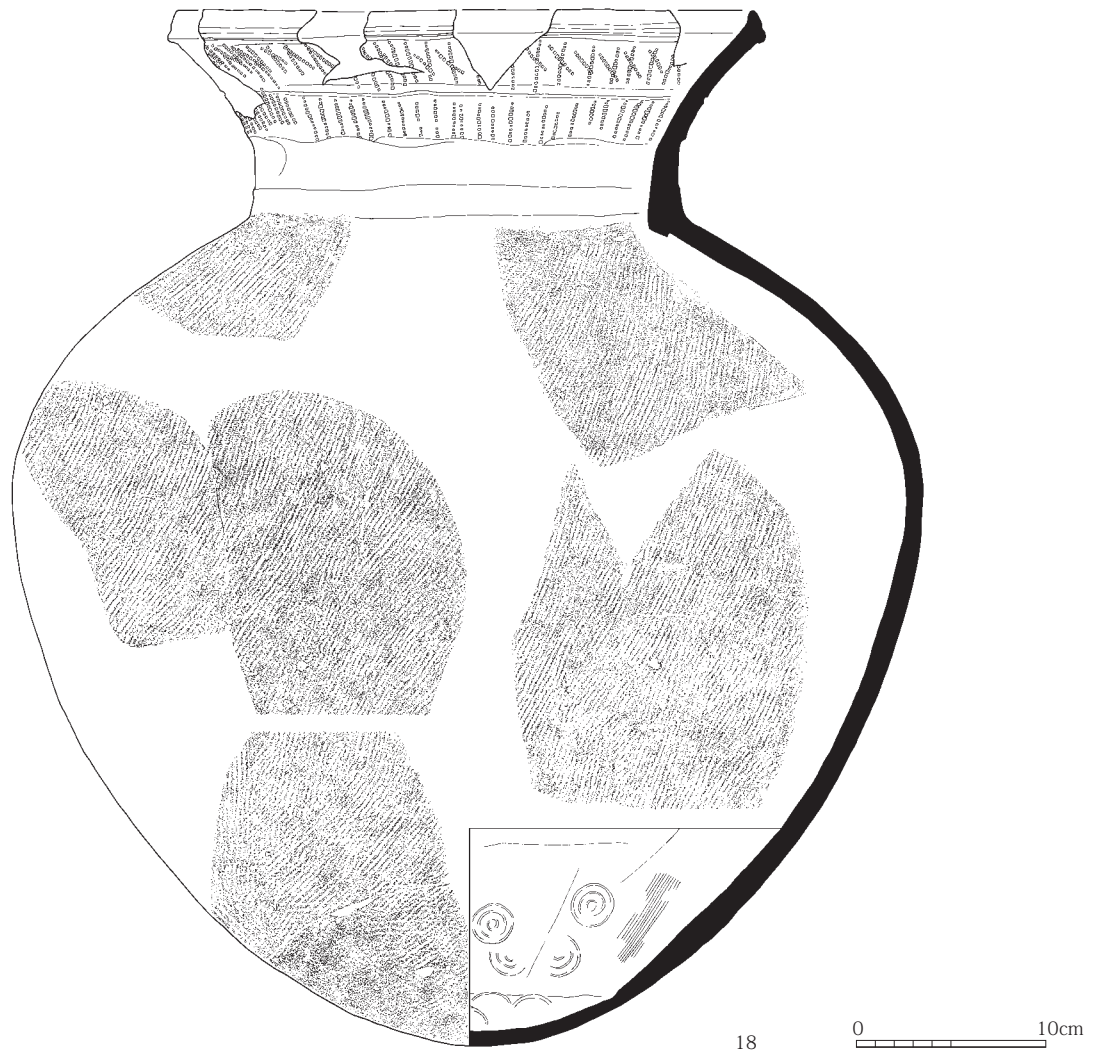
片刃式 C (16) : 切出し形の短い刃部をもつ

茎関の形状は、平根有頸式の 1・3 は直角関である。細根式は、茎関が残存する 18 点のうち 14 点が棘関であるが、他の 4 点 (11・12・22・23) は四方向に鏢状に突出し、切先方向から見た形状が隅丸方形を呈する。側面の突出に比べて前後面の突出は弱い。スカート状に広がる台形関とは異なる形状といえる。輪状関の一種であろうか。細根式の頸部長は、両刃式の 4～6 と片刃式 B の 11～13 は 11～9 cm であるが、片刃式 A の 10 は 7.4cm とやや短い。また、細根式の頸部幅は、0.34～0.40mm で、0.36～0.38mm に集中する。なお、腸挟五角形式 B の 2 の腸挟は二重挟りの可能性もある。

直刀 (24) 全長 56.6cm。刀身は平棟平造りで、推定刀身長 48cm、関付近の身幅 2.4cm・棟幅 0.7cm、切先はふくらをもつ。関は両関であるが、形状は明らかでない。茎は関から細まって丸い茎尻に至る。茎厚は 0.4cm である。茎尻付近に目釘穴が 1 穴穿たれ、鉄製の目釘が残る。金銅の装具は、吊手孔付足金物一対、鞘口金具、喰出鐔、柄縁金具が残る。いずれも文様は認められない。装具の平面形は縦長で、倒卵形というより、隅丸三角形に近い形状を呈する。鐔の断面形は、柄側が丸みを帯びて鞘側が直角に落ちる台形状を呈する。足金物は吊手孔部分と責金具部分が一体造りで、両部分の幅が等しく、間の割り込みも顕著ではない。吊手孔は責金具の真上に位置する。X 線透過撮影によると、鞘口金具の内側に鉤が存在するよう



第111図 土器(1)



第112図 土器(2)

である。装具部分には鞘および柄材の木質が残存している。

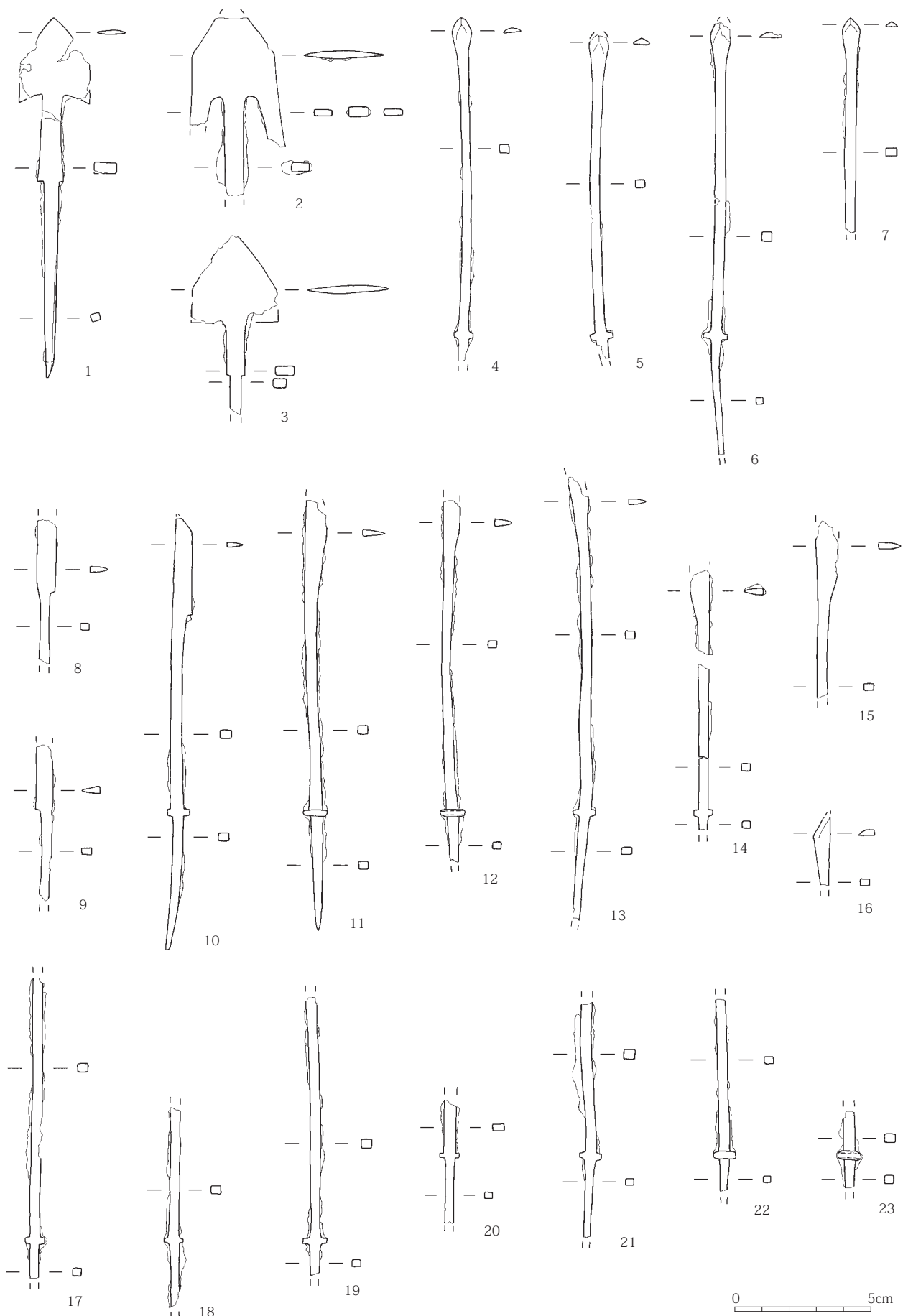
刀装具(25~27) 25~27は平面形が倒卵形を呈し、鉄製の刀装具と判断する。25は喰出鐔あるいは柄縁金具と思われる。24の鐔より径が大きいので、より長大な大刀に伴うものといえる。26・27は薄い鉄板を曲げて成形しており、責金具状の形態を呈する。幅広の26は鐮の可能性もあろう。

刀子・その他の鉄製品(28~32) 28~30は刀子でいずれも両関である。28・29の関はほぼ直角と思われる。30は棟関形状が欠損のため不明だが、刃関は撫角に切れ込む。29は鉄製の鞘口金具が残る。31・32は棒状の鉄製品である。31は鉄鎌の頸部にしては長すぎ、32は実測図の右端から6.5cm辺りから左に向かって徐々に薄くなってゆくため、これも鉄鎌頸部とは考え難い。28は外回り列石の南側から出土した。

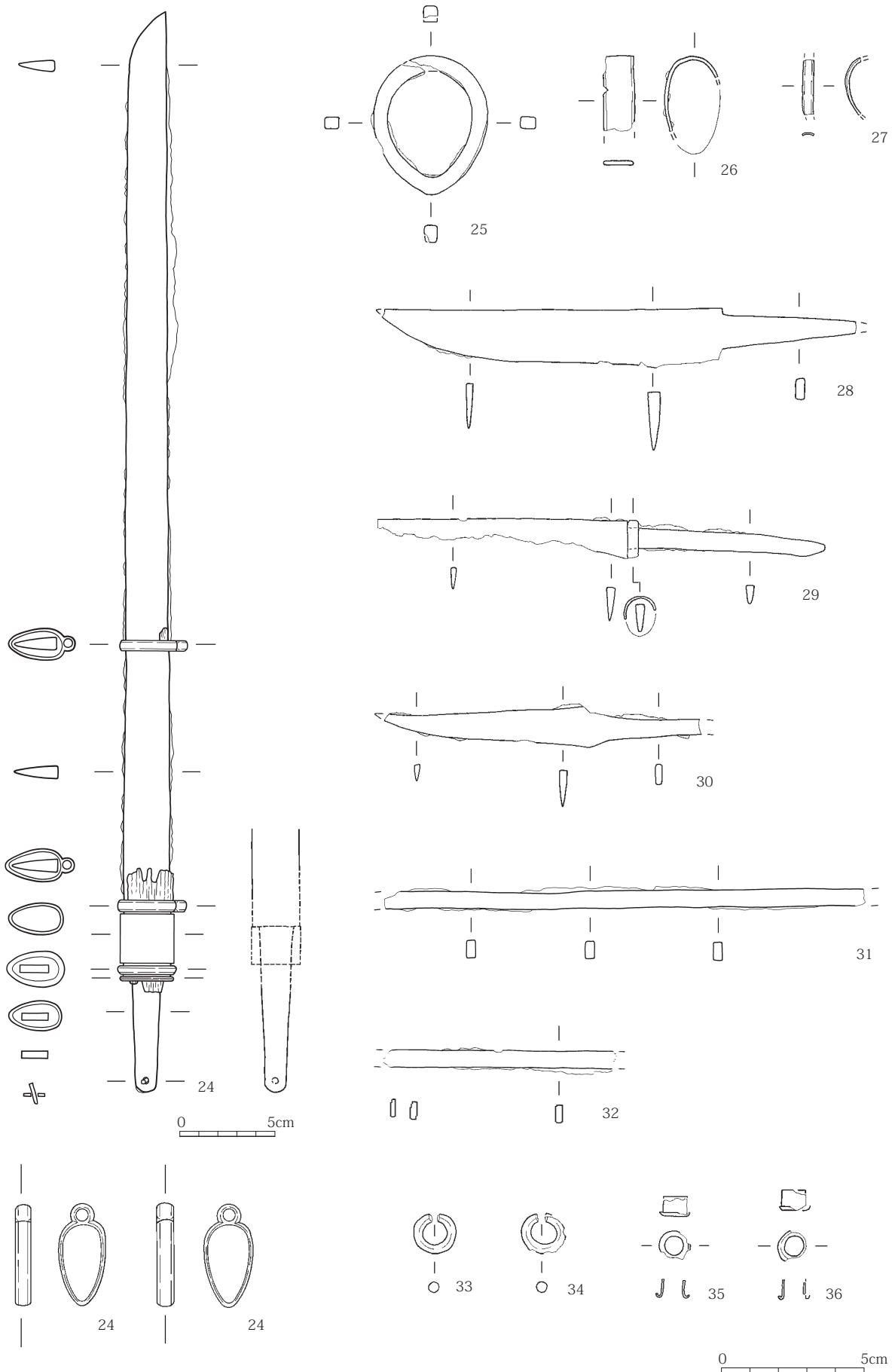
耳環・金具(28~32) 33・34は銅芯金張りの小型の耳環である。同形同大のため一対だった可能性がある。35・36は小型銅製金具である。薄い銅板を筒状に巻き、片方の端部を折り曲げて鏢状部を形成している。これも同形同大のためセットであろう。

ガラス小玉(第115図、P L 29)

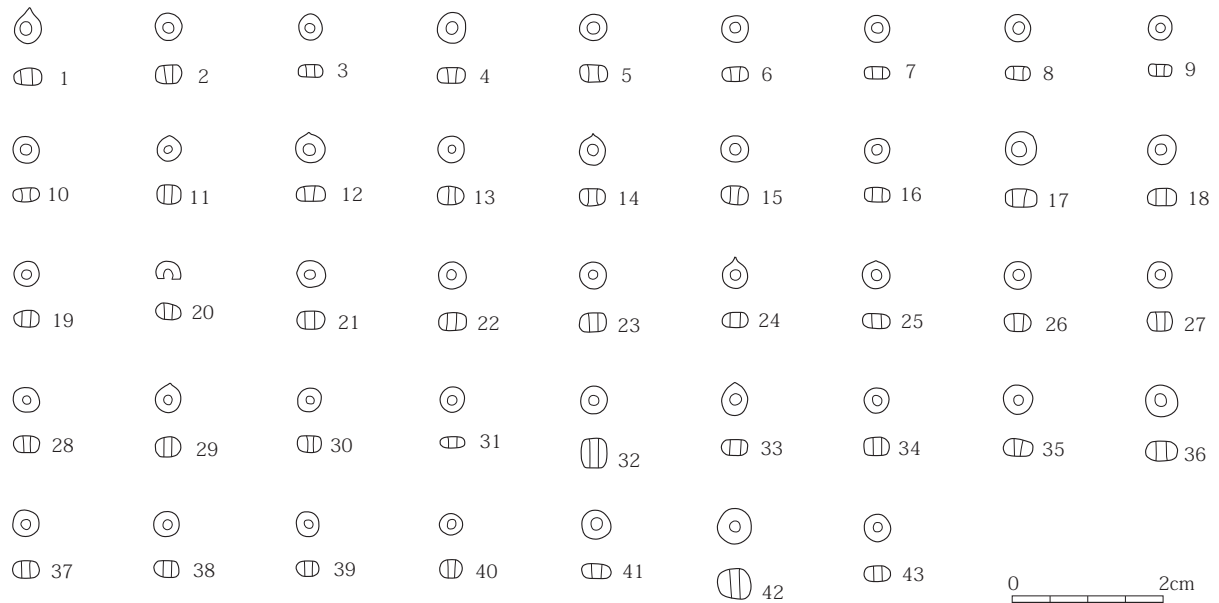
ガラス小玉は44点を検出し、小片の1点を除く43点を図示した。大きさは、短径では3.2mmの30・40が最小、4.7mmの42が最大で、ほかは3.4~4.3mmの範囲にある。厚さは、3.9mmの32と4.3mmの42を除き、1.6~3.0mmの範囲に収まる。色彩は、日本工業規格の慣用色を用い、若竹色(1点)、紺色(7点)、群青色(34点)、青緑(2点)に分類した。若竹色の3は最も薄い個体である。青緑の32・42は他とかけ離



第113図 金属製品(1)



第114図 金属製品(2)



第 115 図 ガラス小玉

れた厚さで、42は短径も最大である。色彩は鮮やかで、大きさ・色ともに際立っている。紺色および群青色の一群のなかには、側面の一部が突起するもの（1・12・14・24・25・29・33）があり、図示困難だが、かすかな突出をもつもの（4・8・11・17・19・21）もある。この形態は、心棒に溶ガラスを巻き付けた後、工具が離れる際に生じたものであろう。また、内部に、孔方向と平行に並ぶ気泡が観察できるものはない。こうした特徴から、巻付け技法による製作を推測する。

なお、添付DVDに尾垂古墳出土遺物の観察表を収録した。

6 尾垂古墳の年代

出土遺物の様相から本古墳の年代を考えてみる。

玄室床面から出土した直刀は、鞘口金具、喰出鐔、柄縁金具、吊手孔付足金物を伴う。これら装具の平面形は縦長となり、倒卵形が崩れ始めて、端整ではあるが縦長の隅丸三角形に近くなっている。こうした特徴を、菊池芳朗氏が示した刀装具の形態変遷（菊池 1993）に対比すると、7世紀中葉～後葉の年代を示すと考える。

同じく玄室床面出土の鉄鏃は、平根有頸式と細根式に大別できる。前項で平根有頸式を3分類し、細根式を4分類した。これは、信濃における後期・終末期の古墳副葬鏃の変遷を明らかにした平林大樹氏の論考（平林 2013）の分類を規範としたものである。本古墳の腸袂五角形式A、同B、五角形式は、それぞれ平林分類の腸袂五角I式、腸袂五角II式、五角II式に該当する。また、細根式で棘関のものについて、両刃式、片刃式A、片刃式B、片刃式Cは、それぞれ両刃IV式、片刃IV式、片刃II式、片刃III式に対応しよう。平林氏は該期の古墳副葬鏃をI～III期に編年している。腸袂五角II式と五角II式はIII期に、腸袂五角I式はI期～II期に属する。両刃IV式と片刃III式はII～III期に、片刃II式と片刃IV式はそれぞれII期、III期に属する。本古墳出土の鉄鏃を平林編年に位置付けると、II～III期に相当する。平林氏はおおよそI期をTK 43～TK 209型式期、II期を飛鳥II～III期、III期を飛鳥IV～平城I期に比定している。したがって、本古墳出土の鉄鏃は、総体として、7世紀中葉から8世紀初頭の年代を示すと考える。

土器については、全体形が推測でき、変化を追いやすい土師器坏と須恵器坏蓋を取り上げる。土師器坏1は、体部が浅い半球状を呈し、体部下部から底部にヘラケズリを施す。西山克己氏による佐久地域の6・7世紀土器編年（花岡・西山 1995）の佐久平6期ないし7期に相当し、7世紀後葉頃～8世紀初頭に

位置付けられる。内面に返りを有する須恵器坏蓋は、図示した2～4のほかにも小破片が数点あるが、2～4を含めて返りのつまみ出しは長くなく、また、輪状つまみを推定し得るものはみられない。佐久市石附窯址群（市教委 1991）の1 Z 7号窯期の様相に近いと思われ、7世紀後葉～末と推測する。

以上を総合して、本古墳の築造年代を7世紀後葉と考えておく。そして、8世紀前半までは追葬が行われていたことを推測する。また、本古墳の横穴式石室は、残存状況不良ながら、形態的特徴として、側壁および奥壁に偏平な大形石材を立てていること、奥壁が多段構成ではないと推測されること、小形であること、といった点を指摘することができる。こうした特徴は、上記の年代観と整合する。

最後に、須恵器大甕 18 について触れておきたい。18 は口縁部文様として、櫛描波状文や沈線文ではなく、櫛歯状工具による刺突文を施している。こうした文様手法は佐久地域ではあまり類例をみないが、石附窯址群の7世紀後半と推定される第1号不明遺構から、櫛歯刺突文を施した大甕が出土している。第1号不明遺構は性格不明ではあるものの、構築途中で放棄された須恵器窯の可能性が指摘されている（市教委 1991）。そのほか、佐久市真光寺第1号古墳（望月町教育委員会 1983）、佐久市五里田遺跡第1号周湟（市教委 1999）、さらに長野市松原1号墳（埋文センター 2000）などの類例がある。真光寺1号墳と松原1号墳は7世紀後半の年代が考えられる古墳である。群馬県では旧榛名町奥原古墳群 30号墳（群馬県教育委員会ほか 1983）など2古墳、山梨県では笛吹市武井古墳群1号墳（笛吹市教育委員会 2016）など11古墳の出土例がある。ここで、こうした文様手法をもつ須恵器甕の時間的・地域的消長を検討する余裕はないが、ざっと調べただけでも、上記の類例が見つかり、7世紀の佐久地域および隣接地域において、一定の広がりをもって分布することは確かであろう。

引用・参考文献

- 笛吹市教育委員会 2016『竹居古墳群』
- 菊池芳朗 1993「東北地方における横穴の出現年代」『福島県立博物館研究紀要』第7号
- 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983『奥原古墳群』
- 市教委 1991『石附窯址群Ⅲ』
- 市教委 1999『鳴沢遺跡群 五里田遺跡』
- 市教委 2008『市道遺跡Ⅲ 辻遺跡 儘田遺跡Ⅱ 西裏遺跡』
- 富沢一明 2000「信濃、千曲川流域における横穴式石室の導入と展開—東信地域を中心として—」『専修考古学』第8号
- 埋文センター 1999『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 26—更埴市内その5—』
- 埋文センター 2000『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 6—長野市内その4—』
- 新納泉 1987「戊辰年銘大刀と装飾付大刀の編年」『考古学研究』第34巻第3号
- 花岡弘・西山克己 1995「信州の6世紀・7世紀の土器様相—現時点での概略として—」『東国土器研究』第4号
- 平林大樹 2013「信濃における後期・終末期古墳副葬の変遷」『物質文化』93
- 望月町教育委員会 1983『真光寺第1号古墳』

第4節 尾垂遺跡・尾垂古墳出土の人骨

茂原信生・櫻井秀雄・本郷一美

はじめに

尾垂遺跡・尾垂古墳は長野県佐久市にある遺跡で、中部横断自動車道の建設に伴い、長野県埋蔵文化財センターによって2015（平成27）年に発掘調査された。本報告はその際に出土した人骨に関するものである。

出土した人骨は、量的にはさほど多くなく、それぞれの保存状態も良くないので形態学的な調査は難しい面がある。本報告は、出土した人骨についての考察をそれぞれについて行い、記載することとする。

（1）尾垂古墳出土の人骨

横穴式石室の玄室床面から人骨が出土した。いずれも生骨である。その多くは細片化して保存状態は悪く、取り上げることができなかつたものも多い。出土状況から、個々の骨が人体本来の位置関係を保っていないことが明らかのため、記載は取上げ単位別に行うこととし、保存の特に良いものについて簡潔に記載する。その他の骨については、第30表に簡単に記載している。

骨番号 1

上左M1かM2である。咬耗は軽度である。大腿骨の後面の粗線の一部が出ている。左右は不明である。

骨番号 22

大腿骨が2本と腓骨らしい骨もある。右の大腿骨の近位部は扁平であり、粗線はやや発達している。遠位の関節も残っている。これに対して、左大腿骨は太く頑丈で、骨幹のかなりの部分が残っている。遠位部骨幹はつぶれている。近位部は扁平ではない。両者は別個体の可能性が高い。ほかに、太い右脛骨骨幹や、右肩甲骨肩峰基部がある。

骨番号 29

頭蓋骨である。頭蓋骨のかなりの部分が残るが、もろく細片化しており、取り上げることができない部分も多く、形態を観察できる場所はごく限られている。そのなかでは、外後頭隆起はよく発達している。骨の厚さは普通である。

骨番号 28

後頭骨の外後頭隆起部がある。やや発達している。No.54と同一部位がある。

ほかに、床面直上の土を洗った中から歯片が2点出土している。いずれも大白歯歯片である。上顎右大白歯の近心舌側部と同じ上顎右の大白歯遠心頬側部らしい歯片である。どちらも咬耗は少ない。ただし形態がかなり異なるので同一個体ではなからう。

尾垂古墳出土人骨のまとめ

左大腿骨骨幹では重複している部分が3本あり、少なくとも3体が埋葬されていたことが確認できる。頭蓋骨では後頭骨の外後頭隆起部が2個体分確認でき、両者の厚さや発達の状態の違いはかなり大きい。大腿骨には太い大腿骨や細い大腿骨もあり、頑丈さが異なる複数個体が埋葬されていたことがわかる。性別は不明である。

（2）SK 14 出土の人骨

土坑墓SK 14から人骨が出土した。1体分であろう。保存状態は悪いがほぼ全身にわたって出土している。取り上げることができないものが多かった。伸展葬で下肢は伸ばしている。

頭蓋骨では、右側の保存はよい。最大長の推定値は180mmほどである。ただし、つぶれているのでやや大きめの数値になっているかと思われる。顔が横を向いている関係で、左右方向に土圧を受けており頭蓋はややつぶれている。外後頭隆起は非常によく発達し、その部分の骨は厚い。外耳道骨腫はない。乳様突起は破損しているが基部は大きく、厚いので本体も大きかったであろう。男性的な頭蓋骨である。

左右の上腕骨が認められるが保存が悪い。右の上腕骨はあまり太くなく、骨質はあまり厚くない。尺骨の遠位骨幹と思われるものがあるが細い。外後頭隆起の発達と比べると違和感がある。左大腿骨の粗線はさほど発達しているようには思えない。あまり太くない。どちらかと言えば細い大腿骨である。外側部の殿筋隆起はややふくらんでいる。

SK 14 出土人骨のまとめ

頭蓋骨の作りはしっかりしているが顔面は残っていない。頭蓋骨の後頭骨は非常に厚く、外後頭隆起はよく発達している。それに対し、上腕骨や大腿骨、あるいは尺骨はさほど太くなく、むしろ細い。歯は残っていない。性別は不明である。成人であろうが詳細は不明である。埋葬位置から身長はおよそ150cm程度である。埋葬姿勢は伸展であるが、中手骨片が頭蓋のやや下にあるので、腕は曲げて手を顎の下辺りに置いていた可能性が高い。

(3) それ以外から出土した人骨

II V 07・12 グリッドからは、焼骨で大きさ4cmほどのヒトの大腿骨が出土している。骨質は厚いが詳細は不明である。

II V 08 グリッドからは、焼骨が数点出土しているが、ヒトかどうか不明のものである。その中には、小さなヒトの頭蓋骨片があり、癒合していない縫合が見られる。

II V 11 グリッドからは、焼けていない歯片が出土している。下顎大臼歯の近心半と思われる（上顎大臼歯の可能性もある）。やや咬耗している。

S F 06 周辺からは、生骨で部位不明の四肢骨片が6点ほど出土している。SK 08 からは、焼骨の細片が出ているが、ヒトかどうかは不明である。

(4) まとめ

尾垂古墳の人骨は、大腿骨から考えて、少なくとも成人3体以上が埋葬されていたと思われる。性別は不明である。土坑墓SK 14からは1体分の人骨が出土している。伸展葬で埋葬されていた。成人であるが性別は不明である。

第30表 尾垂遺跡・尾垂古墳出土の人骨同定リスト

骨番号	出土遺構・地点	取上番号	生骨／焼骨	部位など
1	尾垂古墳玄室1区		生骨	四肢骨片。大腿骨後面粗線が明瞭である。上左 M1 か M2 で小さい歯。
2	尾垂古墳玄室1区		生骨	不明細片
3	尾垂古墳玄室1区		生骨	不明細片
4	尾垂古墳玄室1区	3	生骨	不明細片
5	尾垂古墳玄室1区	4	生骨	頭蓋の側頭骨を含む後頭部。発達した後頭骨の外後頭隆起部がある。
6	尾垂古墳玄室1区	22	生骨	不明四肢骨片
7	尾垂古墳玄室1区	24	生骨	左大腿骨骨幹。殿筋隆起はやや発達。細い大腿骨である。
8	尾垂古墳玄室1区	25	生骨	不明細片
9	尾垂古墳玄室1区	27	生骨	左大腿骨がある。後面の粗線がよく発達している。骨は厚い。
10	尾垂古墳玄室1区	28	生骨	太い左大腿骨がある。同じ個体の可能性があるが粗線がよく発達した大腿骨もある。他にも四肢骨片が多数ある。
11	欠番			
12	尾垂古墳玄室1区	29	生骨	不明
13	尾垂古墳玄室1区	30	生骨	胫骨の骨幹を含めて複数の四肢骨骨幹がある。形態は不明である。胫骨はさほど太くない。
14	尾垂古墳玄室1区	31	生骨	不明。頭蓋骨ではない。
15	尾垂古墳玄室1区	32	生骨	四肢骨片であるが不明。大腿骨ほどは太くない。
16	尾垂古墳玄室1区	33	生骨	四肢骨片が数本分。部位は不明。
17	尾垂古墳玄室1区	34	生骨	大腿骨後面粗線部あり。多くは細片化。粗線はあまり発達していない。
18	尾垂古墳玄室1区	35	生骨	細片であり。不明。頭蓋骨ではない。
19	尾垂古墳玄室1区	37	生骨	四肢骨片
20	尾垂古墳玄室1区	38	生骨	四肢骨片
21	尾垂古墳玄室1区	39	生骨	四肢骨片だが部位不明。やや太いものと細いものがある。
22	尾垂古墳玄室1区	40	生骨	大きな塊として取り上げられている。大腿骨骨幹が2本ある。かなりの長さなので骨幹が2つに割れていることはない。右胫骨骨幹。左大腿骨骨幹。右肩甲骨肩峰基部などがある。
23	尾垂古墳玄室1区	41	生骨	四肢骨である。右上腕骨骨幹(18cmほど)がある。三角筋粗面はあまり発達しておらず骨幹は直線的。右大腿骨上部がある。骨質は厚いが細い。殿筋隆起はやや発達する。
24	尾垂古墳玄室2区	43	生骨	歯種不明の歯片
25	尾垂古墳玄室2区	48	生骨	歯種不明の歯片
26	尾垂古墳玄室2区	51	生骨	上顎左大白歯片である。遠心舌側咬頭の発達状態から考えて。M1と思われるが小さい歯である。咬耗は軽度である。
27	尾垂古墳玄室2区	52	生骨	不明四肢骨片
28	尾垂古墳玄室2区	53	生骨	頭蓋骨片である。後頭骨の外後頭隆起部がある。やや発達している。他は細片で頭蓋冠の一部としか分からない。骨はさほど厚くない。
29	尾垂古墳玄室2区	54	生骨	頭蓋骨である。後頭骨の外後頭隆起部が残る。外後頭隆起はよく発達している。頭蓋冠の骨と思われるものが多数あるが詳細な部位は不明である。左側頭骨を含む頭蓋底部が残っていたが取り上げは出来なかった。
30	尾垂古墳玄室2区	55	生骨	四肢骨片
31	尾垂古墳玄室1区	56	生骨	骨と思われる形骸があるだけである。
32	尾垂古墳玄室2区	64	生骨	歯冠片。小白歯か？
33	尾垂古墳玄室1区	65	生骨	上顎左犬歯頰側エナメル質。エナメル質減形成がある。やや咬耗している。

骨番号	出土遺構・地点	取上番号	生骨／焼骨	部位など
34	尾垂古墳玄室2区		生骨	頭蓋冠片が数点である。詳細は不明。
—	尾垂古墳玄室埋土篩別・水洗		生骨	歯の歯片2点。上顎右の大白歯片を含む。
35	SK14	1	生骨	頭蓋骨
36	SK14	2	生骨	不明
37	SK14	2	生骨	不明
38	SK14	2	生骨	不明
39	SK14	3	生骨	不明
40	SK14	3	生骨	不明
41	SK14	4	生骨	不明
42	SK14	4	生骨	不明
43	SK14	5	生骨	不明
44	SK14	6	生骨	左上腕骨骨幹
45	SK14	7	生骨	右上腕骨骨幹
46	SK14	8	生骨	左橈骨?の位置にある。2本並んでいるので尺骨とのペアであろう。まだ部位の特定は出来ない。
47	SK14	9	生骨	尺骨の遠位骨幹と思われる。細い。
48	SK14	10	生骨	右大腿骨骨幹。上部は扁平である。
49	SK14	11	生骨	不明
50	SK14	12	生骨	左大腿骨骨幹。あまり太くない。殿筋隆起の発達はよくない。上部は扁平である。
51	SK14	13	生骨	不明。位置としては右下腿の部分にある。腓骨よりは太いので脛骨かもしれない。
52	SK14	14	生骨	不明。位置としては左下腿の部分にある。
53	SK14	15	生骨	不明。位置としては左の下腿の位置にある。
54	SK14	16	生骨	不明
55	欠番			
56	SK14	2	生骨	歯種不明の歯片(小白歯か?)
57	SK08		焼骨	焼骨の細片。ヒトかどうかは不明。(1.8 g)
58	SF06 周辺		焼骨	部位不明の四肢骨片が6点ほど。焼骨(8.3 g)
59	ⅡV11 検出面	3	焼けていない	下顎大白歯片。近心半と思われるが。やや咬耗している。(0.2 g)
60	ⅡV08 東壁きわサブトレ		焼骨	部位不明の四肢骨片。鱗状の亀裂がある。ヒトであろう。(6.2 g)
61	ⅡV08 直径1m程の範囲に5片が散布。No.60もこの周辺	1	焼骨	部位不明の四肢骨片(5cmほど)。小さな頭蓋骨片で。癒合していない縫合が見られる。部位は不明。ヒトであろう。(3.9 g)
62		2	焼骨	亀裂の入った四肢骨片。部位不明。ヒトかどうか不明。(3.5 g)
63		3	焼骨	四肢骨片。所属不明。1~2cmの破片が4点ほど。ヒトかどうか不明(1.2 g)
64		4	焼骨	所属不明の四肢骨片。ヒトかどうか判断は出来ない。焼骨(2.1 g)
65		5	焼骨	不明。鱗状の亀裂がある。(1.4 g)
66	ⅡV07・12 検出面、佐久市試掘トレンチ	5	焼骨	ヒトの大腿骨片? 4cmほど。骨質は厚い(6 g)



1 SK14 左大腿骨後面 (骨番号50)	6 尾垂古墳玄室 右大腿骨内側面 (骨番号10)
2 尾垂古墳玄室 右上腕骨外側面 (骨番号23)	7 尾垂古墳玄室 左大腿骨後面 (骨番号10)
3 尾垂古墳玄室 右大腿骨内側面 (骨番号23)	8 尾垂古墳玄室 左大腿骨内側面 (骨番号10)
4 尾垂古墳玄室 左大腿骨内側面 (骨番号7)	9 尾垂古墳玄室 右胫骨外側面 (骨番号10)
5 尾垂古墳玄室 左大腿骨後面 (骨番号9)	

第116図 尾垂遺跡・尾垂古墳出土人骨

第5節 自然科学分析

尾垂遺跡では自然科学分析として、放射性炭素年代測定を委託で実施しており、以下にその概要を報告する。分析の詳細についてはDVDに収録した。

(1) 分析の内容

遺構から出土した炭化物(クルミ)と炭化材について、株式会社加速器分析研究所に委託し、放射性炭素年代測定(AMS測定)を実施した。

(2) 分析試料と目的

分析試料は竪穴建物跡(SB06・15)と土坑(SK152・153、SF08)から出土した、炭化物と炭化材の合計5点である(第31表)。分析の目的は、平安時代以降の遺構から出土した炭化物の年代と土器の年代を比較するとともに、遺物による時期推定が困難な遺構について、年代の手掛かりを得ることにある。

(3) 分析結果

分析結果は、第31表に示したとおりである。これをもとに、試料1～5の分析結果を整理してみる。

試料No.1は、出土した土器の時期から10世紀前半と推測するSB06のカマド火床から採取した試料であり、年代値は土器の時期と整合する。

試料No.2は、出土した土器の時期から10世紀前半と推測するSB15の埋土下層から採取した試料であり、年代値は土器の時期と整合する。

試料No.3は、出土した土器の時期から9世紀後半と推測するSK152埋土2層から採取した試料であり、年代値は土器の時期と整合する。

資料No.4は、出土したかわらけの時期から17世紀後半以降と推測するSK153埋土4層から採取した試料である。年代値は14世紀前半から15世紀前半であり、かわらけの時期とは整合しない。

資料No.5は、時期不明のSF18埋土4層から採取した試料であり、14～15世紀の年代値を得た。

第31表 放射性炭素年代測定結果

No.	試料名	種類	採取位置	暦年較正用 (yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
1	1	炭化物 (クルミ)	SB06 カマド火床	1,171 ± 24	777calAD-792calAD (12.6%) 803calAD-844calAD (28.1%) 858calAD-892calAD (27.5%)	771calAD-900calAD (86.2%) 921calAD-950calAD (9.2%)
2	2	炭化物	SB15 埋土下層	1,096 ± 23	900calAD-922calAD (26.4%) 949calAD-985calAD (41.8%)	891calAD-995calAD (95.4%)
3	3	炭化物	SK152 埋土2層	1,184 ± 24	778calAD-793calAD (12.3%) 802calAD-845calAD (33.1%) 855calAD-884calAD (22.8%)	770calAD-895calAD (93.0%) 928calAD-941calAD (2.4%)
4	4	炭化物	SK153 埋土4層	562 ± 23	1325calAD-1345calAD (33.2%) 1394calAD-1413calAD (35.0%)	1315calAD-1356calAD (49.6%) 1388calAD-1421calAD (45.8%)
5	5	炭化物	SF18 埋土4層	524 ± 24	1406calAD-1431calAD (68.2%)	1327calAD-1343calAD (7.0%) 1395calAD-1493calAD (88.4%)

第6節 小結

尾垂古墳は、出土遺物の様相から7世紀後葉に築造され、8世紀前半までは追葬が行われていたと推測した。本古墳からは、馬具こそないものの、金銅装の直刀をはじめ、鉄鏃、刀子、耳環、ガラス小玉など比較的豊富な副葬品や須恵器大甕が出土した。小型の横穴式石室は、残存状況不良ながら、下段に大形の板状石を用いた奥壁、腰石積み的な石材用方がうかがえる側壁など、佐久地域のこの時期の石室に通有の要素を認め得る。佐久盆地の千曲川左岸地域は、坪の内古墳・榛名平1号墳（市教委 2001）などの発掘例があるものの、総じて古墳の内容や時期は明確でなかった。中部横断道建設に先立つ今回の発掘調査では、本古墳のほか高尾古墳群5号墳・兜山古墳の発掘例を加えることができた。上記5基のうち、坪の内古墳は6世紀末～7世紀初頭、ほかの4基は7世紀後半以降の築造である。佐久盆地の7～8世紀の古墳は、群集する傾向が顕著で、千曲川右岸地域に圧倒的に多いことが指摘されている（羽毛田 1995）。しかし、左岸地域の上記5基は、単独かあるいは現状隣接古墳が確認できない。群集せず、単独ないし単独に近い在り方をとることが、単純に左岸地域の古墳築造数の少なさ故なのか、別の要因があるのか、その追究は左岸地域の古墳文化の特質や社会動向を探るうえでの課題のひとつとなろう。

古代の集落は早くても9世紀末、おそらく10世紀代に始まる。これは、佐久郡衙周辺に所在したと推測する集落がこの時期衰退するのとは逆の動きである。また、耕作には適さない丘陵上の傾斜地に立地することも特徴的であるが、同様の開始年代、立地の遺跡は、本書収録の小山の神B遺跡や洞源遺跡など、丘陵地を通過する中部横断道の佐久南IC以南の調査でいくつか見つかっている。このうち、洞源遺跡では製鉄炉が検出され、製鉄を行ったことは確実だが、尾垂遺跡でも少数であるが炉壁や鉄滓が出土し、近隣で製鉄を行っていた可能性がある。また、瓦塔や一定量の灰釉陶器が出土することも特徴的で、炭焼きや木工、狩猟を行ったとされる山棲み集落のイメージ（能登ほか 1985）とは異なる。このような集落は、佐久郡衙周辺遺跡の衰退を考えれば、課役を免れようとした逃亡公民のものであろうが、それが耕作に不適な丘陵地に成立するためには、製鉄など農耕以外の産業に力を入れた有力者の存在が不可欠である。こうした有力者なればこそ、灰釉陶器などの入手も可能で、不輸不入権を得るために集落を寺域とする村落内寺院を建てた可能性は十分ある。さらに、中央の権門勢家に寄進したとすれば、『吾妻鏡』ほかに見られる「佐久伴野荘」に繋がった可能性はあるが、これについては推測の域を出ず、今後の課題である。

中世では一定量の陶磁器・土器類が出土した。その中には青磁盤、青白磁梅瓶、古瀬戸合子といった一般集落における日常的な使用を想定し難いものがあり、この地で通常の集落とは性格が異なる営みが行われていたことを推測させる。それに関連して注目すべき遺物が磬である。磬は梵音具の一種で、読経の節目に撥で叩いて音を鳴らす。年代特定は困難ながら、この地で仏事が執り行われたことを示すものであり、仏教関連施設が存在したことを示唆する。礎石建物跡S T 01が寺院の仏堂跡である確証は得られなかったが、伝承にいう龍覚寺がこの地に実在した可能性はさらに高まったと考える。そして、今回発掘範囲の西方一帯には注意が必要であろう。青磁盤は1区の西壁付近で出土しており、地形的に高い西方から流れてきたことも充分考え得る。寺院関連施設の遺構が西方に広がっている可能性を指摘しておきたい。

引用・参考文献

市教委 2001『榛名平遺跡』第Ⅱ分冊 弥生・古墳編

羽毛田卓也 1995「第4章 第2節 古墳の築造」『佐久市志』歴史編（1）原始古代 佐久市

能登 健ほか 1985「山棲み集落の出現とその背景」『信濃』第37巻第4号

第7章 洞源遺跡

第1節 遺跡の概観と調査の概要

1 遺跡の概観

洞源遺跡は、千曲川左岸地域の八ヶ岳北麓から北東に延びる丘陵の南斜面に立地し、標高は705～730mを測る（第117図）。佐久市遺跡分布図には、縄文時代と古代の遺物散布地と記載されているが、遺跡の詳細は不明であった。2009（平成21）年、市教委が中部横断道用地から北東へ約200mの地点で試掘調査を実施したが、表土から土師器などが出土したのみで遺構は検出されなかった。

近隣遺跡の状況は、月明沢の谷を挟んだ南側の尾根上に中世山城の荒城跡が位置し、さらに南側には縄文時代晩期末葉～弥生前期の土坑、奈良・平安時代の竪穴建物跡、中世の寺院跡・墓地などを調査した地家遺跡が存在する。また、北側には貞祥寺川を挟んだ丘陵上に尾垂遺跡があり、平安時代の竪穴建物跡のほか、中世以降の礎石建物跡と磬を確認し、伝承にいう龍覚寺跡との関連を指摘した。

2 調査の概要と経過

洞源遺跡の発掘調査は2013・2015年に実施し、調査面積は5,400㎡にのぼる。以下、年度ごとに調査の概要と経過を述べる。

（1）2013年度調査の概要

調査対象地のうち、南側部分3,100㎡の範囲に対して重機による確認調査を行った。対象地は南向きの斜面で、現況は畑地が放棄された雑木林となり、切土・盛土による段造成がほぼ全面になされていた。掘削したトレンチは1T～11Tまでの11か所（第118図）で、7T中央部では焼土跡1基、8T中央部では被熱部と炭化物を伴う焼土跡1基を検出し、5T中央部では平安時代の羽釜の大形破片が出土した。このほかのトレンチでは、遺構・遺物ともになかった。確認した遺構は部分的な調査にとどめ、遺構面を養生した後に埋戻した。

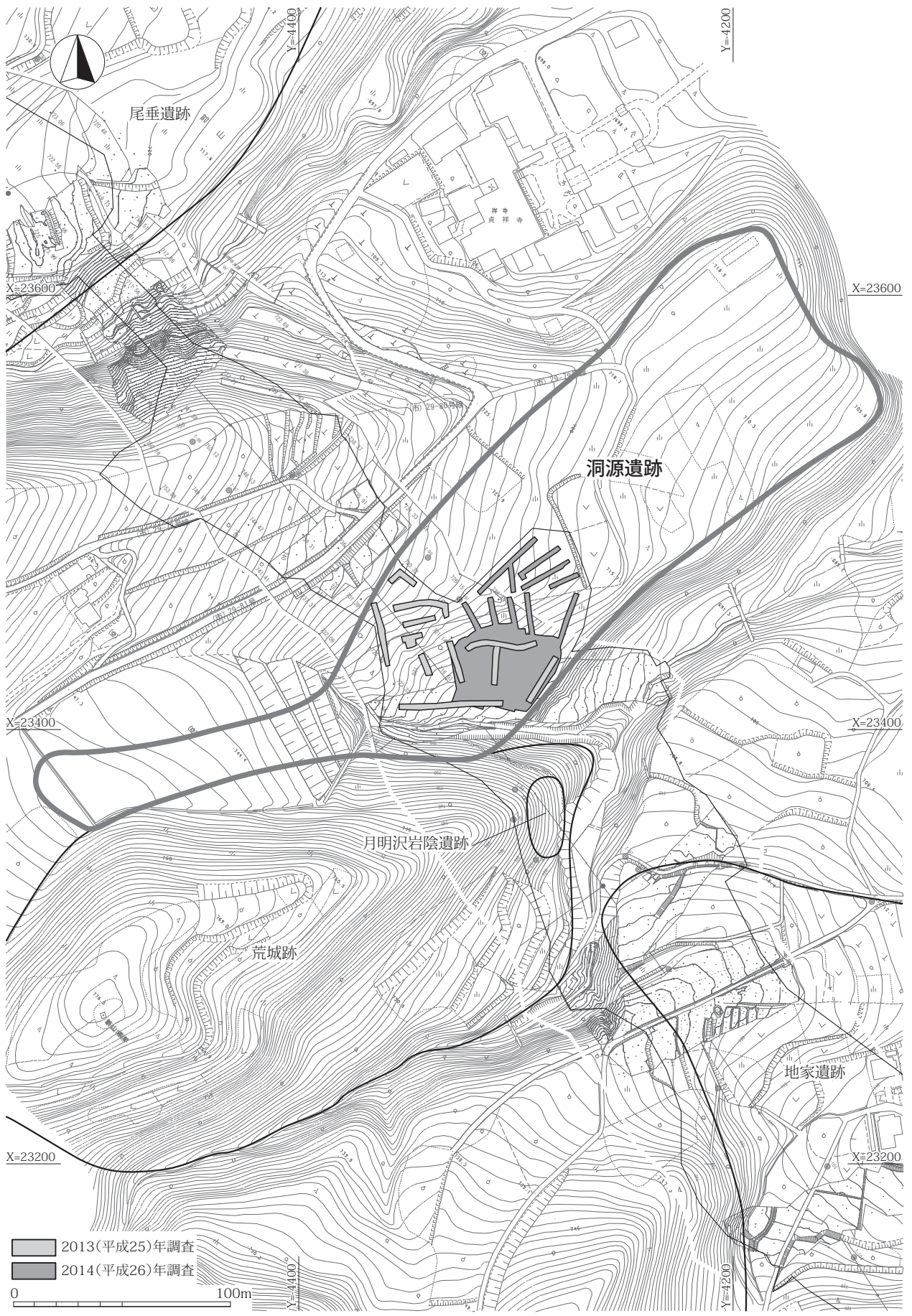
（2）2015年度調査の概要

確認調査と本調査を並行して行った。確認調査は調査対象地の北側部分2,300㎡の範囲で、重機により12T～21Tまでの10本のトレンチ（1～2区、第118図）を掘削した。その結果、南向きの斜面やその裾部で土坑を検出し、それにより、昨年度焼土跡を検出した7T・8T周辺部と合わせた約1,500㎡（2区）については、本調査を実施することになった。

本調査では、昨年度検出した焼土跡1基が製鉄炉であることが判明するとともに、最終的には平安時代の製鉄炉跡3基、被熱部・焼土跡3基、土坑1基、竪穴状遺構3軒を調査するに至った。平安時代の製鉄炉は、佐久地域では初めての調査事例となった。

3 基本層序

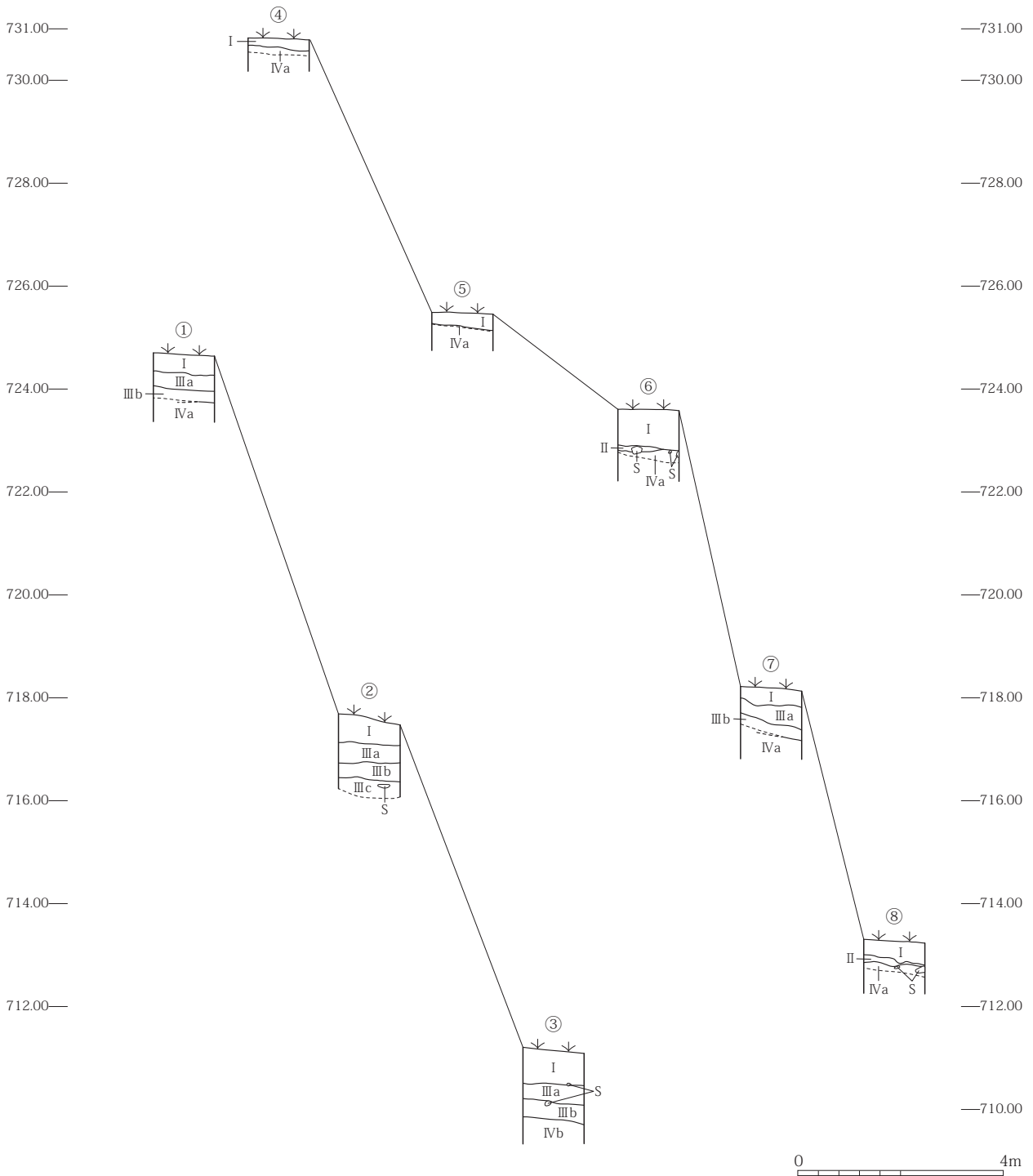
基本層序は第Ⅰ～Ⅳ層に大別できる（第119図）。第Ⅰ層は腐植土、盛土を含む調査区全体の表土を一括する。第Ⅱ層は旧表土で、第Ⅳa層が土壌化したものと考えられる。第Ⅲ層は谷部を埋積する黒褐色土層



第117図 遺跡範囲・位置図



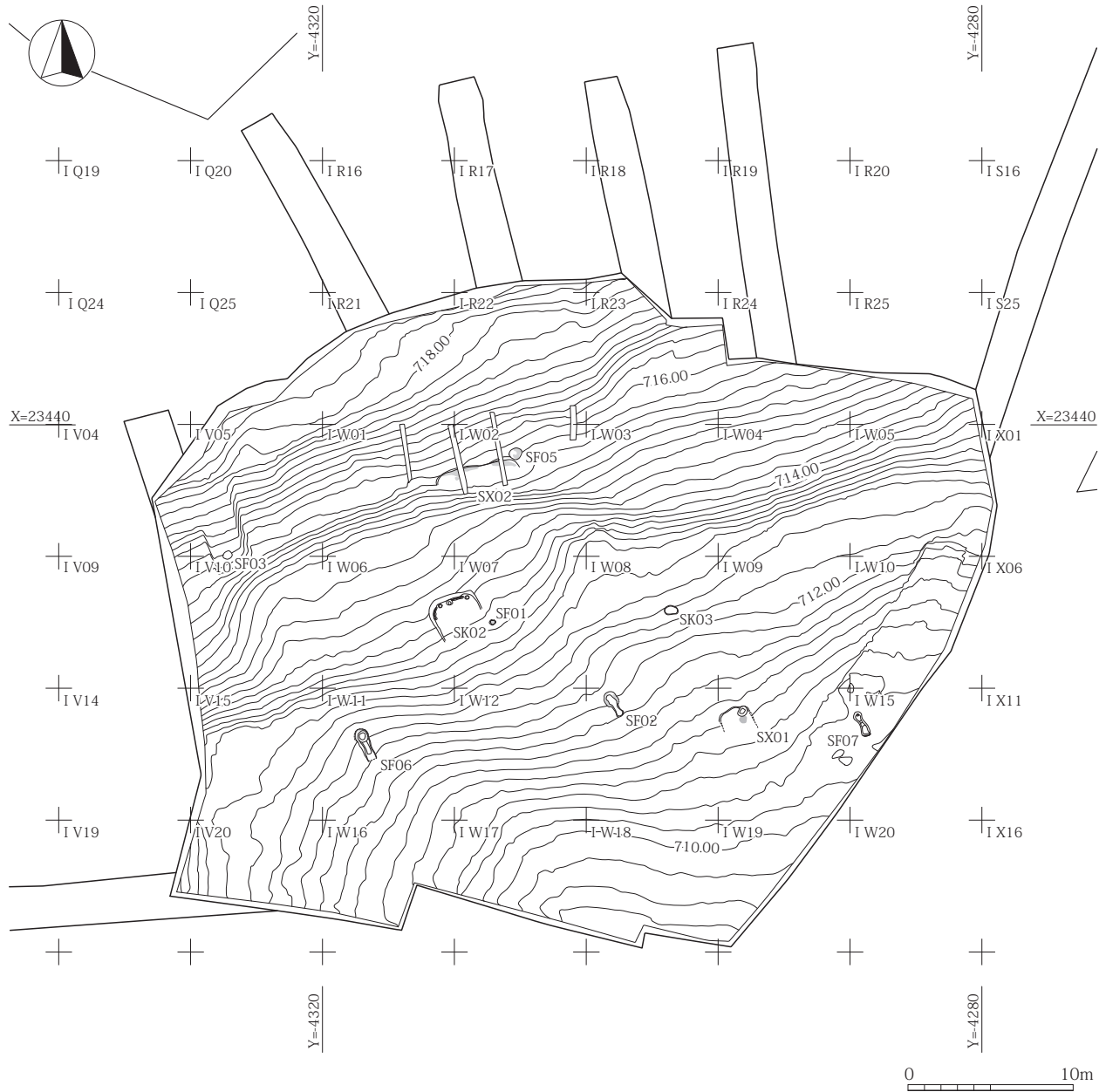
第118図 トレンチ・調査区配置図



I	表土	調査範囲全体の表土（耕作土、造成土、かく乱を含む）を一括
II	黒褐色(10YR2.5/2)	シルト。粘性ややあり。しまりあり。礫混。土壌化したIV-1層土。旧表土
IIIa	黒褐色(10YR2/3)	シルト。粘性弱。しまりあり。地山由来小礫・粗砂混。谷部埋積層
IIIb	黒褐色(10YR2/2)	シルト。粘性弱。しまりあり。20~50mm礫・地山由来小礫・粗砂混。III-1層に類似。谷部埋積層
IIIc	黒褐色(10YR1.5/2)	シルト。粘性弱。しまりあり。50~2000mm礫多混。地山由来小礫・粗砂混。III-2層に類似。谷部埋積層
IVa	褐色(10YR4/4)	シルト。粘性ややあり。しまりあり。20~100mm礫・明黄褐色岩盤片混。基盤。
IVb	明黄褐色 (10YR6.5/6~2.5Y6.5/6)	シルト。薄い層状に黒色土混。砂が硬化した岩盤

第119図 土層柱状図

で、a～cに細分される。第IV a層は遺跡全体の基盤を成す褐色土で、③のみ第III層下部で第IV b層明黄褐色の砂が硬化した岩盤に到達する。遺構検出面は、第IV a層である。



第120図 遺構分布図

第2節 遺構と遺物

1 概観

2区において平安時代の遺構を検出した(第120図)。2区は、北西端部から南東方向へと下る小河川に面した緩やかな斜面で、丘陵の裾部に近く、標高は約708~720mを測る。遺構の分布状況は、2区北側に隣接する1区についてはトレンチ調査(12T~21T)で遺構は存在しないことを確認し、2区南側も小河川に面しているため遺構は調査区の中に取り込まれる可能性が高い。それに対して東西方向は、調査区が丘陵を縦断しているため、遺構の広がり把握できない。

検出した遺構は製鉄炉跡が3基、被熱部・焼土跡が3基、土坑が1基、竪穴状遺構が3軒で、そのほかに製鉄関連遺物(羽口、鉄塊系遺物、鉄滓、炉壁)が出土した遺物集中地点がある。時期は不明確なものも存在するが、概ね平安時代後期と推測する。遺物は遺構の時期と同じ平安時代後期の黒色土器、土師器、灰釉陶器、製鉄関連遺物が出土したほか、遺構としては存在しない縄文時代早期~中期の土器と石器、近世の焙烙・陶磁器類が出土した。

2 遺構

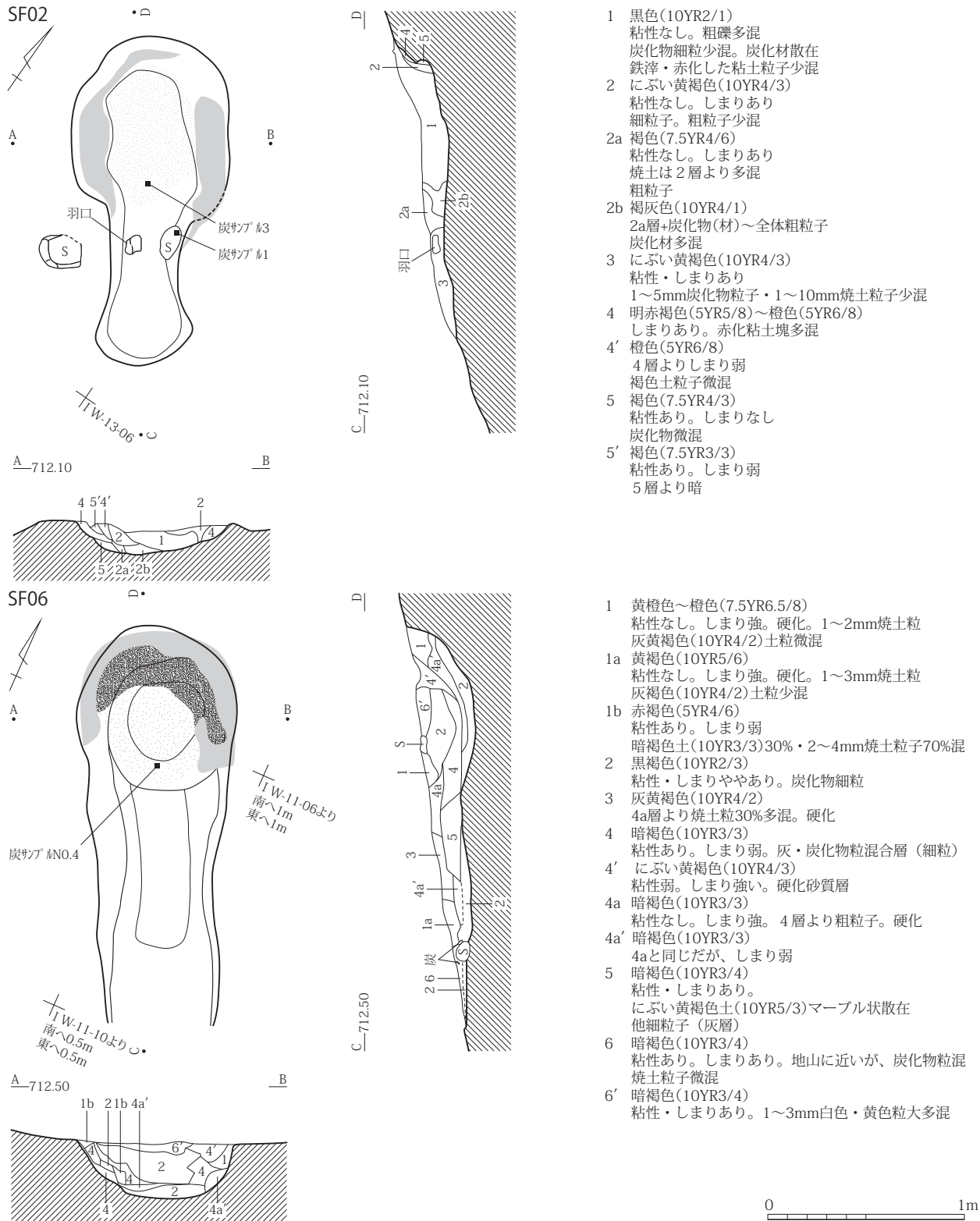
(1) 製鉄炉跡

S F 02 (第121図、P L 30)

位置: 2区、I W 13 グリッド。**検出:** 基本層序第IV a層上面で検出した。**重複関係:** なし。**構造・規模等:** 炉の本体と排滓溝を検出した。炉の本体は円形を呈し、直径80~85cm、深さ18cmを測る。掘方の壁には炉壁の可能性が高い、被熱痕跡が著しく表面が赤色化した4層硬化粘土層が残存していた。炉底は明確な被熱痕跡がなく、焼土粒と炭化材片を多量に含む1・2 b層が堆積していた。排滓溝は長さ82cm、幅50cmを測る。検出面からの深さは10cm程度で、削平の影響を著しく受け、底面がわずかに残るのみであった。炉の本体と排滓溝から採取した炭化材片各1点に対して樹種同定を実施した結果、薪炭材として優良なコナラ属コナラ亜属クヌギ節と同定された(第3節参照)。**遺物:** 炉の本体から10世紀以降の土師器細片(坏、羽釜)と炉壁が、排滓溝から羽口が出土した。**時期:** 炉の本体で採取した炭化材3点の放射性炭素年代測定では、暦年較正で概ね11世紀前葉~12世紀中葉までの年代値を得ている(第3節参照)。

S F 06 (第121図、P L 30)

位置: 2区、I W 11 グリッド。**検出:** 基本層序第IV a層上面で検出した。**重複関係:** なし。**構造・規模等:** 炉の本体と排滓溝を検出した。炉の本体は円形を呈し、直径85~90cm、深さ32cmを測る。壁から底面までの掘方には明確な被熱痕跡がなく、炉底にかけて炭化粒や炭化粒と灰の混合する2・4層が堆積していた。その上部には、しまりが強く硬化が著しい焼土粒と砂質層の1・4'層が認められた。崩落した炉壁と考える。排滓溝は長さ1.2m、幅62cm、深さ17cmを測り、底面には2・5層の炭化粒と灰が堆積していた。炉の本体から採取した炭化材1点の樹種同定では、ヤナギ属と同定された(第3節参照)。**遺物:** 炉の本体から灰釉陶器細片(碗)と羽口が、排滓溝から鉄塊系遺物が出土した。また、S F 06の周辺でも鉄滓が出土した。**時期:** 炉の本体で採取した炭化材3点の放射性炭素年代測定では、暦年較正で概ね10世紀初頭~後葉までの年代値を得ている(第3節参照)。



第121図 SF02・06 遺構図

SF07 (第122図、PL30)

位置：2区、IW15グリッド。検出：基本層序第IV a層上面で検出した。重複関係：なし。構造・規模等：炉の本体と排滓溝、排滓土坑を検出した。炉の本体は円形で、直径52~58cm、深さ17cmを測る。掘方の上部には被熱痕跡が認められ、炉底には炭化物粒が広がっていた。排滓土坑は楕円形で、長軸80cm、

短軸 50cm、深さ 20cmを測る。底面には炭化物粒が広がり、東壁の一部から南東壁にかけては被熱痕跡が認められ、被熱痕跡の前面には炉壁の可能性が高い硬化ブロックが堆積していた。炉の本体と排滓土坑は長さ 35cm、最大幅 45cm、深さ 12cmの短い排滓溝で連結する。炉から排滓土坑までの底面には、炭化物粒を多量に含む同じ 3層黒色土が連続して堆積していた。なお、本製鉄炉では炭化材の樹種同定は実施していない。**遺物**：排滓溝から排滓土坑にかけて、鉄滓と炉壁が出土した。**時期**：排滓土坑の埋土 3層で採取した炭化材 1点の放射性炭素年代測定では、暦年較正で 10世紀末葉～11世紀前葉までの年代値を得ている（第3節参照）。

(2) 被熱部・焼土跡

S F 01 (第 122 図)

位置：2区、I W 07 グリッド。**検出**：基本層序第IV a層上面で検出した。**重複関係**：なし。**構造・規模等**：不正円形を呈し長軸 40cm、短軸 34cmを測る。周辺に、当該遺構に伴うような遺構が存在しない点から、被熱部単独の遺構である可能性が高い。**遺物**：検出時に土師器（坏）が出土した。**時期**：不明確だが、検出時に出土した土師器の時期をもって 10世紀前半と推測する。

S F 03 (第 122 図)

位置：2区、I V 05 グリッド。**検出**：基本層序第IV a層上面で検出した。**重複関係**：なし。**構造・規模等**：不整形で長軸 60cm、短軸 57cm、深さ 6cm程度を測る。底面の南側には一部に 2層焼土が堆積し、その上部には炭化物を多量に含む 1層暗褐色土が堆積していた。ただし、当該遺構は削平の影響を受けているうえ、埋土 1層と基本層序（検出面）の違いが明確ではなかったことから、平面形や規模には不明確な点が残る。削平の影響を受け、2層焼土が南側にしかなかった。**遺物**：1層から、黒色土器・土師器（坏・小形甕）が出土した。**時期**：不明確だが、埋土から出土した土師器の時期をもって、9世紀代と推測する。

S F 05 (第 122 図)

位置：2区、I W 02 グリッド。**検出**：基本層序第IV a層上面で検出した。**重複関係**：なし。**構造・規模等**：80cm×70cmの範囲内 2か所に硬化した不整形の被熱部が広がり、被熱部の間には炭化物が散布する。**遺物**：当該遺構との関係は不明だが、炭化物とともに 10世紀以降の土師器破片（羽釜）と羽口の破片が出土した。**時期**：不明確だが、出土した遺物の時期をもって、10世紀以降と推測する。

(3) 土坑

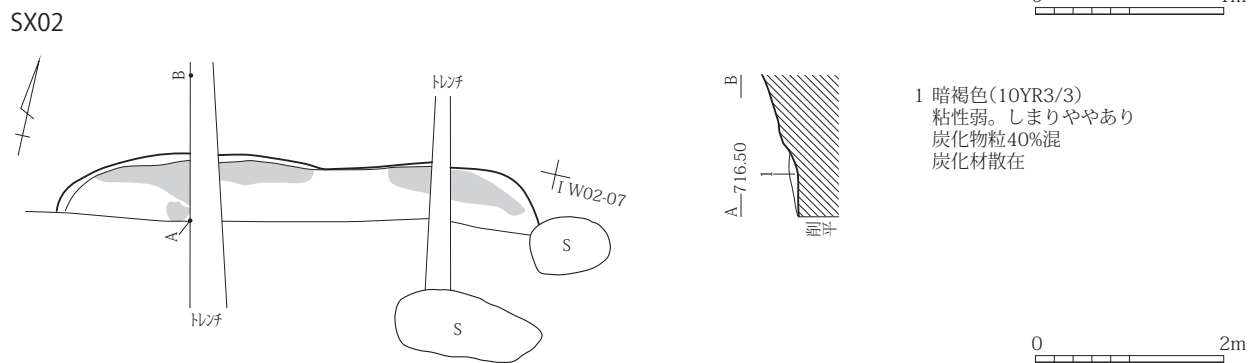
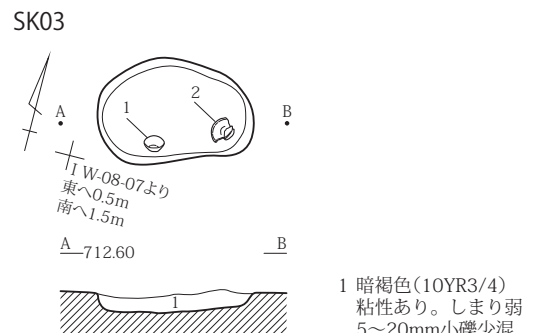
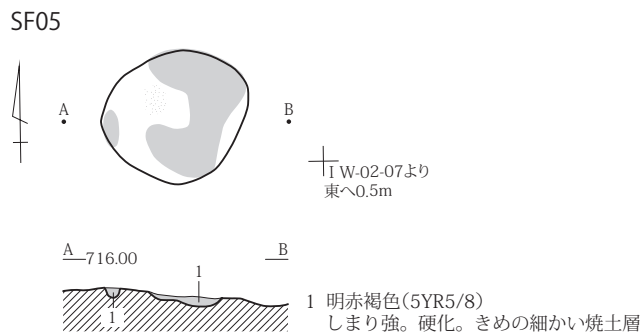
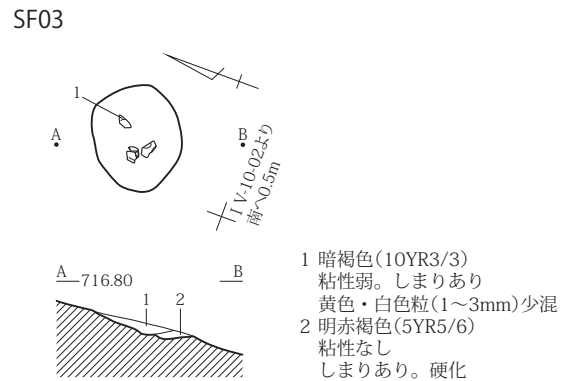
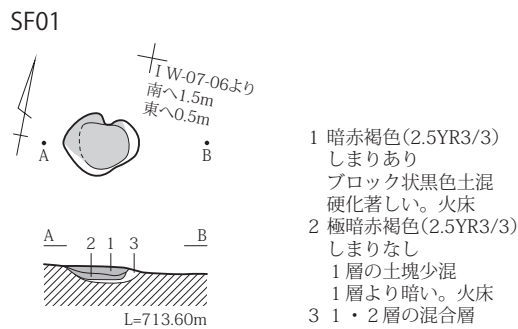
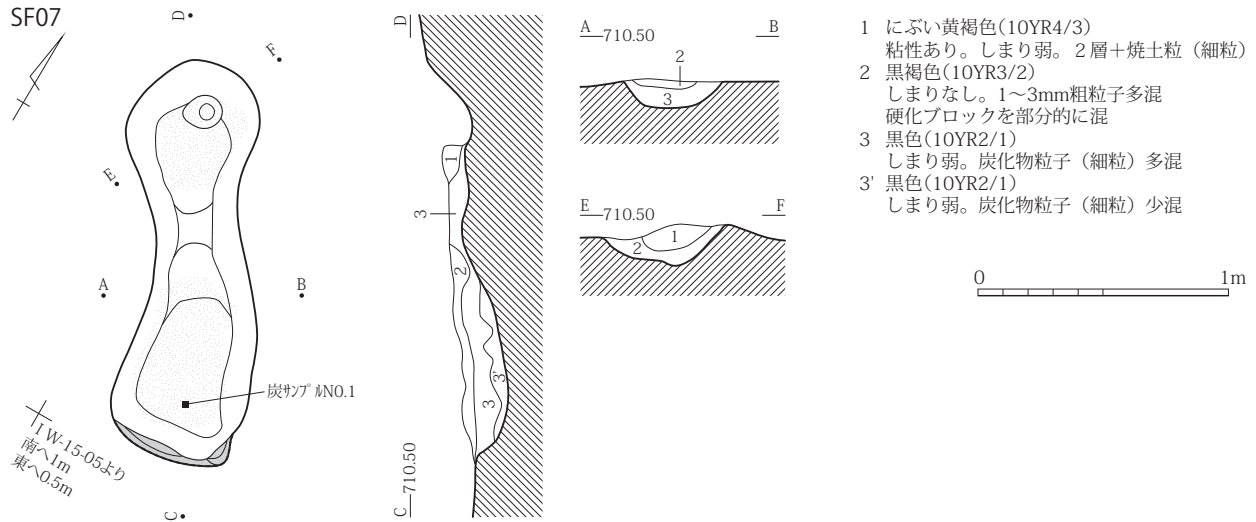
S K 03 (第 122 図、P L 31)

位置：2区、I W 08 グリッド。**検出**：基本層序第IV a層上面で検出した。埋土は検出面と類似しわかりにくかったが、しまりがなく軟弱であった。**重複関係**：なし。**埋土**：単層で、暗褐色土が堆積する。**構造・規模等**：平面形は楕円形、断面形は逆台形状を呈し、長軸 84cm、短軸 58cm、深さ 15cmを測る。**遺物**：底面直上付近から、土師器・黒色土器（坏・高台付埴）が出土した。**時期**：不明確だが、底面直上付近から出土した土師器・黒色土器（埴・高台付埴）の時期をもって、9世紀末～10世紀初頭と推測する。

(4) 竪穴状遺構

S K 02 (第 123 図、P L 31)

位置：2区、I W 06・07 グリッド。**検出**：基本層序第IV a層上面で検出した。埋土と検出面の差があまりなく、わかりにくかった。南側は削平の影響を受け、残存していなかった。**重複関係**：なし。**埋土**：単層で、黒褐色土が堆積する。**形状・規模**：残存部の状況から、隅丸方形もしくは隅丸長方形と推測する。規模は北西・南東方向で 2.6 m以上、南西・北東方向で 3.1 mを測る。床・壁：竪穴の掘方を整え床面とするが、若干の凹凸が残る。硬化面や貼床は確認できなかった。北西壁コーナー付近はほかよりもやや高



第122図 SF01・03・05・07、SK03、SX02 遺構図

い。

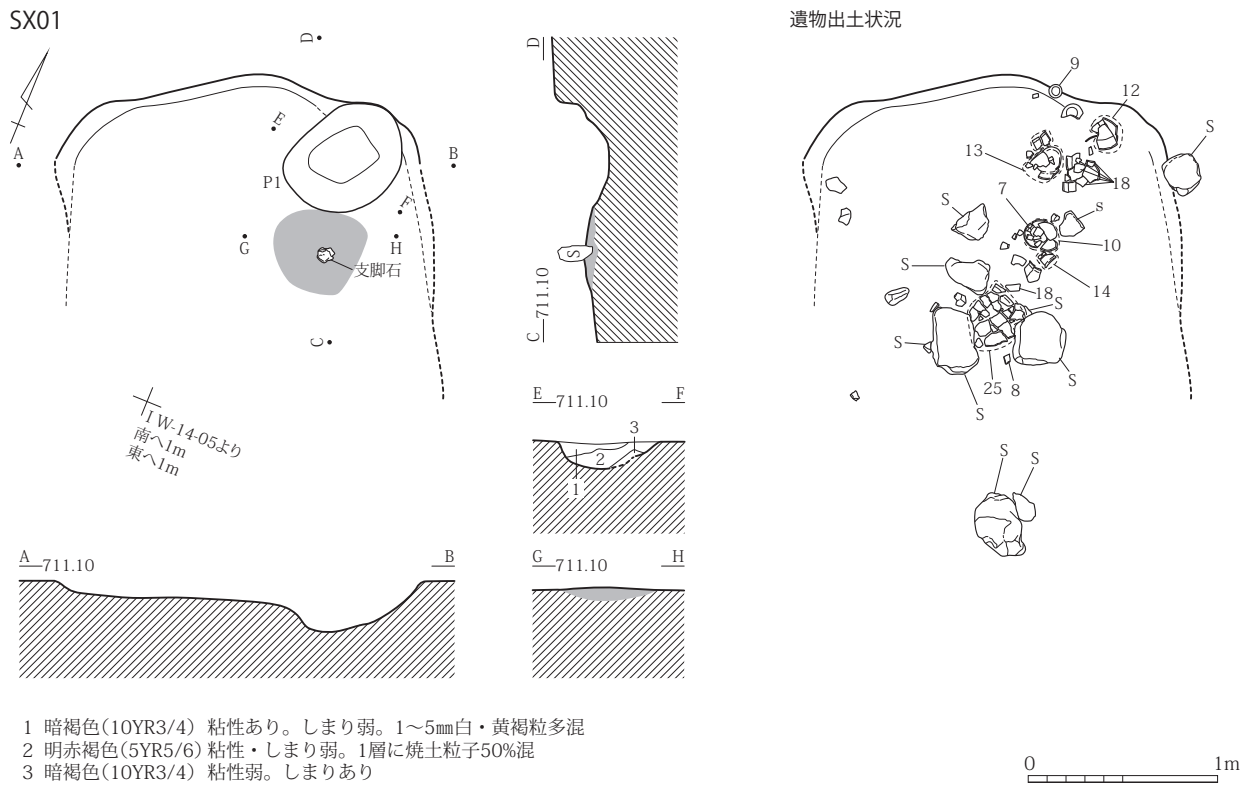
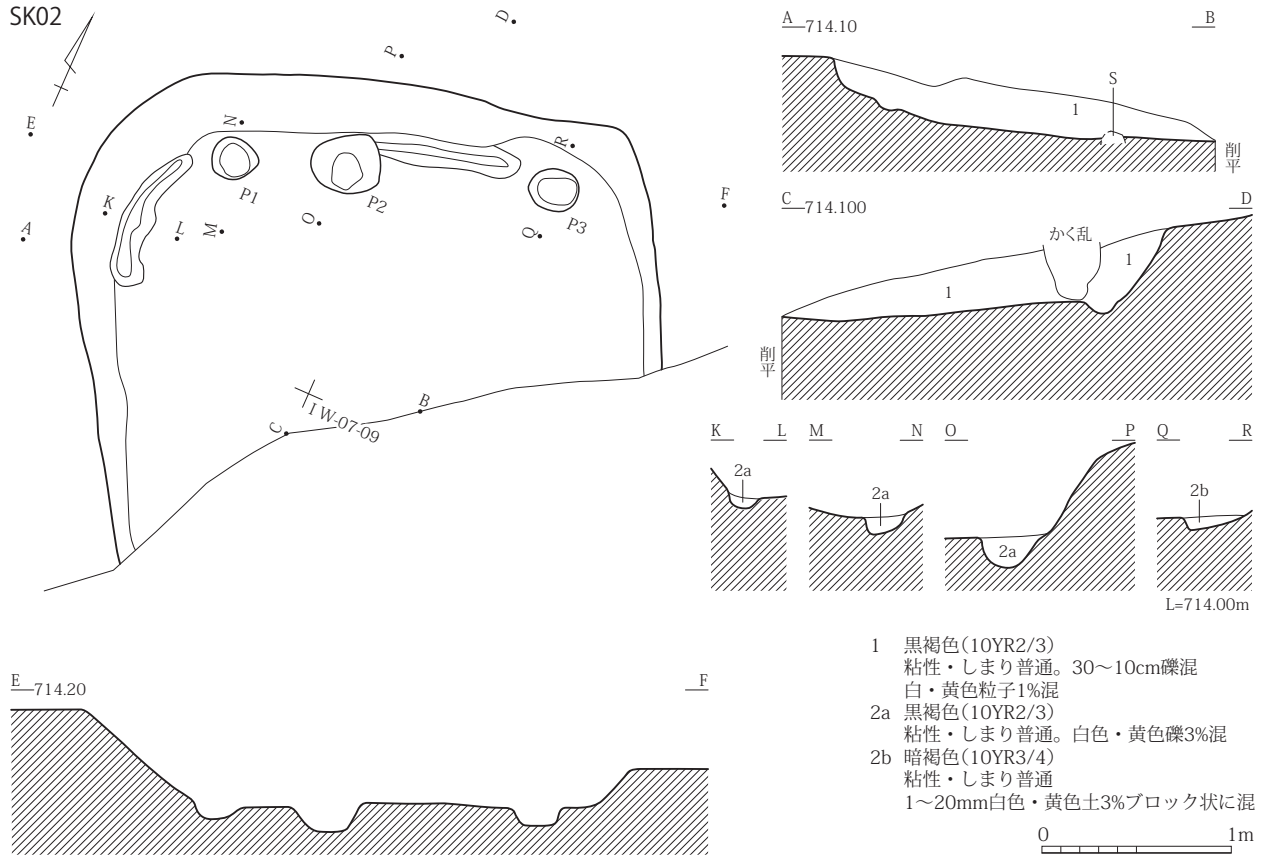
壁は残存部の最大が40cmで、斜めに立ち上がる。柱穴・周溝：北西壁からコーナーに沿う部分的な周溝を2か所で検出した。周溝の幅は10~18cm、深さは10cm程度である。柱穴は北西壁に沿う、周溝の途切れ部でP1~3の3基を検出した。平面形は円形を呈し、直径はP1が22cm、P2が38cm、P3が26cm、深さはP1・3が10cm程度、P2が18cmで、中央に位置するP2が両側にあるP1・3よりも規模がやや大きい。炉・カマド、その他の施設：なし。遺物：埋土から土師器破片（坏・甕・羽釜など）が出土した。時期：不明確だが、埋土から出土した土器の時期をもって、10世紀以降と推測する。

S X 01 (第123図、P L 31)

位置：2区、I W 14グリッド。検出：基本層序第IV a層上面で検出した。埋土と検出面の差がなくわかりにくかった。北壁付近以外は削平の影響を受け、残存していなかった。埋土：単層で、暗褐色土が堆積する。形状・規模：形状は不明だが、北壁が直線的に延びる点から隅丸方形もしくは隅丸長方形の可能性はある。規模は北壁付近（東西方向）で3.8 m以上を測る。南北方向は不明だが、被熱部と遺物・礫の分布状況を考慮すると3.1 m以上、さらに南側にある2個体の礫を含めると5.1 m以上となる。床・壁：床は貼床や硬化面が認められず、地山との違いも不明確でわかりにくかったが、被熱面を検出したレベルと遺物が出土したレベルを考慮し床面を推定した。壁は斜めに立ち上がる。柱穴・周溝：なし。炉・カマド、その他の施設：北壁コーナー付近から北東壁にかけて長軸108cm、短軸94cmを測る被熱部と支脚石、炭化材を検出した。これらはカマド残痕の可能性が高く、当該遺構はカマドを有する竪穴建物跡と推測する。炭化材は樹種同定分析を実施したところ、カエデ属およびコナラ属コナラ亜属コナラ節と同定された。遺物：カマドの可能性が高い被熱部周辺で、礫とともに黒色土器（碗・坏）、土師器（坏・甕・小形甕）が出土した。また、製鉄関連遺物の羽口と鉄滓が出土したが、製鉄関連遺物は当該遺構の北側でやや集中して出土し、その一部が流れ込んだ可能性もある。時期：不明確だが、埋土から出土した土器の時期をもって、9世紀後半と推測する。

S X 02 (第122図、P L 31)

位置：2区、I W 02グリッド。検出：基本層序第IV a層上面で検出した。埋土と検出面が類似し、わかりにくかった。北壁付近以外は削平の影響を受けて残存しておらず、北壁および北壁に沿って帯状に広がる焼土・炭化物の分布範囲以外は不明確である。埋土：単層で、焼土と炭化物粒を多量に含む暗褐色土が堆積する。炭化材が散在する。形状・規模：形状は不明だが、北壁が直線的で、両側にある推定プランの丸味がコーナーになれば隅丸方形・長方形の可能性もある。規模は北壁付近（東西方向）で5.1 m、南北方向は不明だが、削平部分までの範囲で約1.5 mを測る。床・壁：床面は貼床や硬化面は認められず、わかりにくかった。東側へ傾斜し、床面のレベル差が東西方向で最大30cmを測る。北壁に沿って、焼土と炭化物・材が帯状に広がっていた。炭化材は樹種同定を実施したが、試料が樹皮とされ、同定には至らなかった。壁は残存部の最大が10cm程度で、斜めに立ち上がる。柱穴・周溝・炉・カマド・その他の施設：なし。遺物：埋土から土師器破片が出土した。また、抜根時に北西コーナー付近と推測される位置を中心に、9世紀後半の黒色土器（坏）と土師器（坏・甕・羽釜）が出土した。遺物は、位置的には当該遺構に取り込まれる可能性もあるが、調査では当該遺構との関係は検証されていない。当該遺構は、放射性炭素年代測定では11世紀前葉から12世紀中葉とする結果が出ており、遺物の時期とは全く整合しない点から、抜根時の遺物は当該遺構に帰属しないものとする。時期：放射性炭素年代測定の暦年較正では、概ね11世紀前葉から12世紀中葉の年代を得ている。



第123図 SK 02、SX 01 遺構図

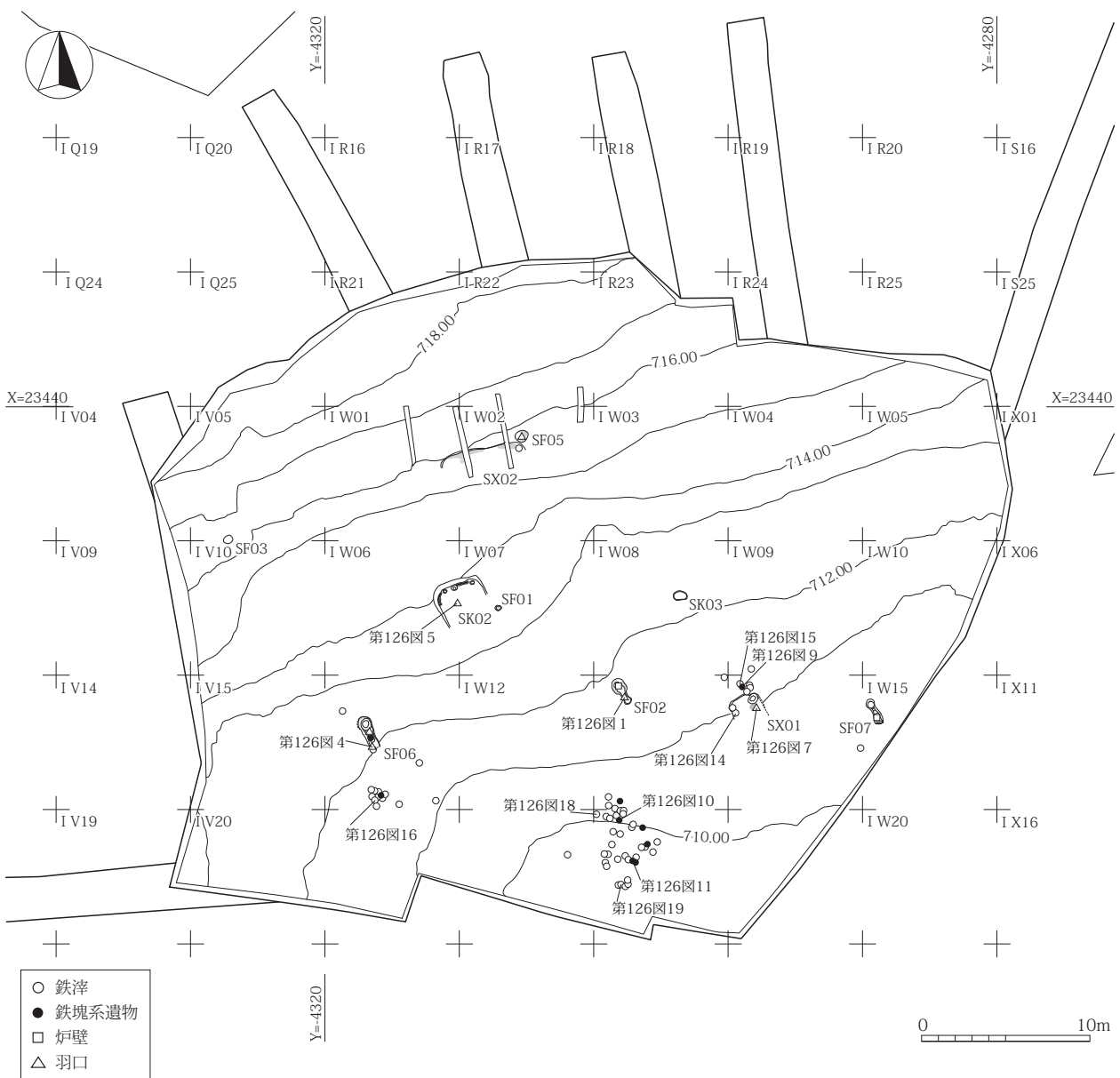
(5) 遺物集中 (第124図)

I W 11 グリッド、I W 14 グリッド、I W 13・17・18 グリッドの3か所で、製鉄関連遺物（鉄滓・鉄塊系遺物・炉壁・羽口）が比較的まとまりをもって出土していることが整理作業で判明した。

I W 11 グリッドでは、約 1.5 × 2.5 m の範囲から鉄滓と鉄塊系遺物が出土した。これらの遺物が出土した範囲の斜面上部には、製鉄炉跡の S F 06 が位置することから、この範囲は S F 06 の廃滓場であったと推測する。

I W 13・14 グリッドでは、S X 01 の北壁に接した範囲で鉄滓と鉄塊系遺物が出土した。また、S X 01 埋土で出土した羽口や鉄滓は、当該範囲から流れ込んだ可能性もある。当該範囲の斜面上部には製鉄炉跡が存在せず、S X 01 にも製鉄に直接関わるような痕跡が認められないことから、当該範囲の遺物と遺構の関係は不明である。

I W 13・17・18 グリッド付近では、約 6.0 × 5.5 m の範囲から鉄滓と鉄塊系遺物が出土した。遺物集中3か所の中では、最も遺物の出土量が多い。この範囲の斜面上部となる I W 13 グリッドには、製鉄炉跡の S F 02 が位置することから、この範囲は S F 02 の廃滓場であったと推測する。



第124図 製鉄関連遺物出土位置図

3 遺物

(1) 平安時代の遺物

S K 03 (第125図1・2、P L 32)

1は土師器の坏で、底部は回転糸切り、体部は回転ナデを施す。口径10.2cm、器高4.1cm、底径4.3cmを測る。2は黒色土器の高台付塚で、底部は回転糸切りを施す。口径12.5cm、器高5.5cm、底径6.7cmを測る。時期は9世紀末～10世紀初頭と推測する。

S F 01 (第125図3、P L 32)

3は土師器の坏で、底部は回転糸切り、体部は回転ナデを施す。口径は推定10.6cm、器高3.3cm、底径は推定5.0cmを測る。時期は10世紀前半と推測する。

S F 03 (第125図4・5、P L 32)

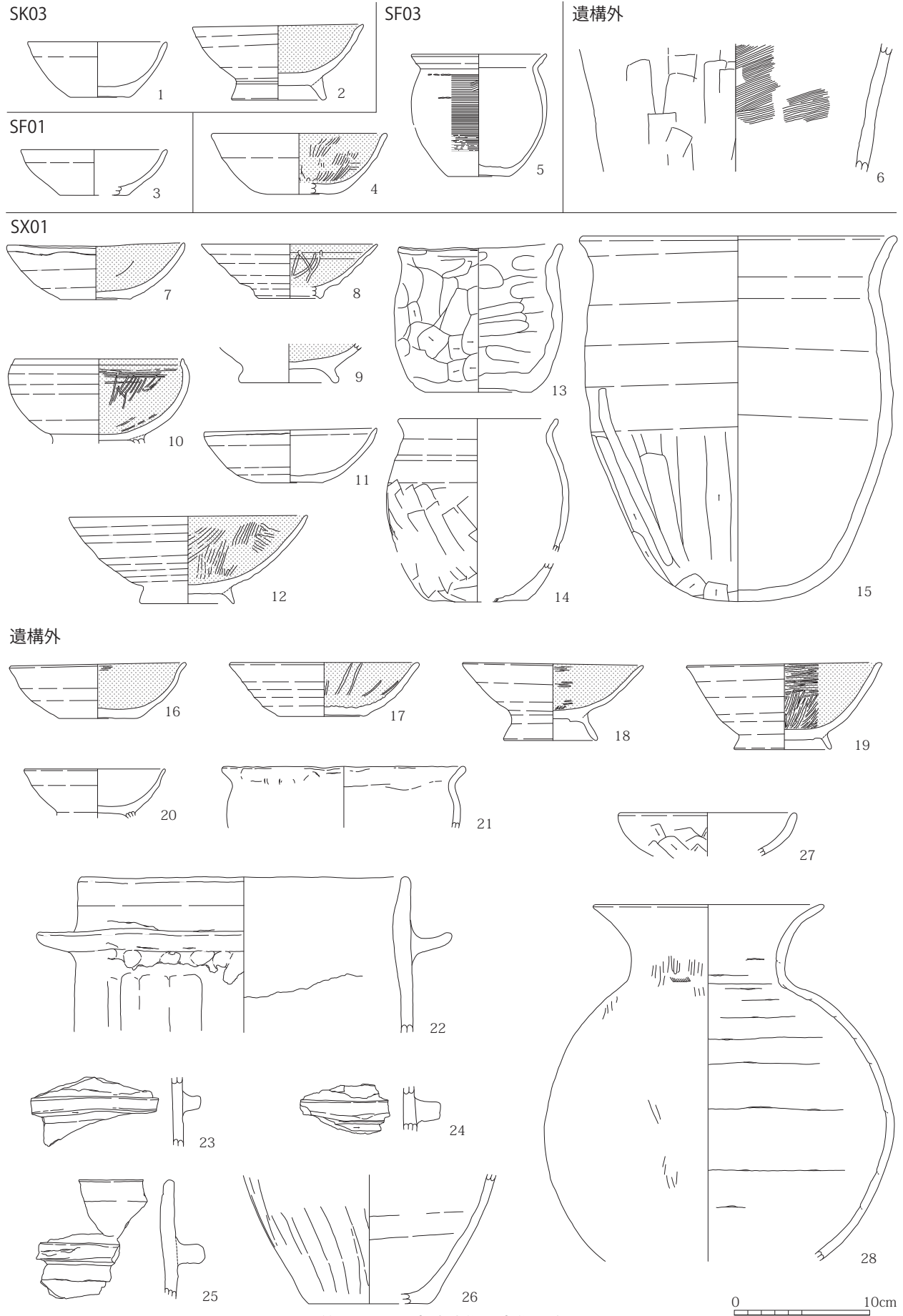
4は黒色土器の坏で、底部は回転糸切り、体部は回転ナデ後内面にミガキを施す。口径は推定12.4cm、器高4.5cm、底径は推定5.0cmを測る。5は土師器の小型甕で、底部は回転糸切り、体部はカキメを施す。口径10cm、器高9.0cm、底径4.6cmを測る。時期は9世紀代と推測する。

S X 01 (第125図7～15、P L 32)

7・8は黒色土器の坏で、底部は回転糸切り、体部は回転ナデ後内面にミガキを施す。7は口径13.0cm、器高3.9cm、底径5.2cm、8は口径が推定12.9cm、器高4.0cm、底径が推定4.6cmを測る。9・10・12は黒色土器の高台付塚で、底部は回転糸切り、体部は回転ナデ後内面にミガキを施す。9は底部のみが残存しており、底径7.0cmを測る。10は器形が大きく内湾し、内面の口唇部直下に稜をもつ。また、底部は回転糸切りの後、ケズリが入る。口径12.3cm、器高は残存部で6.2cmを測り、底部は欠損する。12は口径17.4cm、器高6.9cm、底径6.8cmを測る。11は土師器の坏で、底部は回転糸切りの後ケズリが入り、体部は回転ナデを施す。口径12.6cm、器高3.9cm、底径5.0cmを測る。13・14は土師器の小型甕、15は土師器の甕である。13は外面にケズリを、内面に強い指ナデを施す。全体的に不整な作りである。口径は推定11.4cm、器高10.9cm、底径7.8cmを測る。14は口唇部から体部上半にかけて回転ナデを、体部下半は回転ナデの後、ケズリを施す。内面は、口唇部から底部までが回転ナデである。口径11.6cm、器高13.5cm、底径7.2cm(全て推定)を測る。15は口唇部から体部上半に回転ナデを、体部下半にケズリを施す。内面は回転ナデだが、磨減が著しい。口径22.8cm、器高26.9cmを測る。以上の土器について、時期は9世紀後半と推測する。

遺構外 (第125図6・16～26、P L 32)

16～19は黒色土器である。16・17は坏、18・19は高台付塚で、底部は回転糸切り、体部は回転ナデ後内面にミガキを施す。16は口径12.8cm、器高4.0cm、底径5.2cmを測る。17は口径が推定13.8cm、器高4.0cm、底径6.1cmで、内面の体部下半から底部にはアバタ状の凹みが多く残る。18は口径13.3cm、器高5.6cm、底径6.8cm、19は口径14.2cm、器高6.4cm、底径は推定7.0cmを測る。20は土師器の高台付塚で、底部は回転糸切り、体部は回転ナデを施す。口径は推定10.3cm、器高は残存部で3.7cmを測り、底部は欠損する。21は土師器の甕で、全体にナデを施す。口径は推定17.8cm、器高は残存部で4.5cmを測る。6・22～25は羽釜である。6は羽釜の体部で、外面は縦方向のケズリ、内面は斜め方向のハケを施す。22は鏝状の突帯より上部にナデ、下部にケズリを施す。口径は推定24.0cm、器高は残存部で11.5cmを測る。23～25は、鏝状の突帯付近の破片である。26は土師器の甕、もしくは羽釜の底部で、外面にケズリを施す。器高は残存部で9.5cm、底径は推定9.0cmを測る。



第125図 古墳時代と古代の土器

(2) 製鉄関連遺物

羽口 17 点 (0.61kg)、鉄塊系遺物 12 点 (0.79kg)、鉄滓 155 点 (1.6kg)、炉壁 211 点 (0.52kg) が出土した。全て割れた状態で出土し、小破片なので、図化に耐え得る 20 点を抽出して報告する (第 126 図)。なお、炉壁については掲載していない。各遺物の出土地点など非掲載遺物についての詳細は、観察表 (第 32~34 表) に掲載した。

1~7 は羽口で円筒状を呈する。1~5 は先端部付近、6・7 は吸気部付近の破片であろう。小破片のため不明確だが、6・7 以外は内径が概ね 2.6~3.1cm と推定する。

8~11 は鉄塊系遺物である。鉄滓を金属探知機 (KDS 社製 DS-100) で測定し、金属反応を示したものを鉄塊系遺物とした。全体的に塊状だが、断面形は一定ではない。8 は表面および破断面に、様々な大きさの気泡が多く観察される。9~11 の表面は銹により土砂が固結し、さらに 9 は内部の鉄の銹化膨張に伴う割れが残る。

12~20 は鉄滓で、炉底滓や排出滓、排出溝滓などを含むと考えるが、厳密な分類はできなかった。12・13 は断面形が不整形で、上・下面には流動したような部分と細かな気泡が残る。下面は若干の砂を噛み込み、13 には木質と思われる痕跡が残る。14~17・20 は断面形が蒲鋒型に湾曲し、上面は多孔質もしくは流動・発泡したような部分があり、下面は砂を噛み込む。14 は上面の流動・発泡したような部分が顕著で、14・20 は下面に噛み込む砂の量が多い。15 は上面および破断面に、19 は下面に木質と思われる痕跡が残る。18 は断面形が板状、19 は蒲鋒型に湾曲し、表面は銹により若干の土砂が固結する。

引用・参考文献

福島県教育委員会 2015 『常磐自動車道遺跡調査報告 71 沢入B遺跡 鈴山遺跡 大清水遺跡』

福島県教育委員会 2015 『常磐自動車道遺跡調査報告 72 南狼沢A遺跡 (2・3次調査)』

第 32 表 羽口観察表

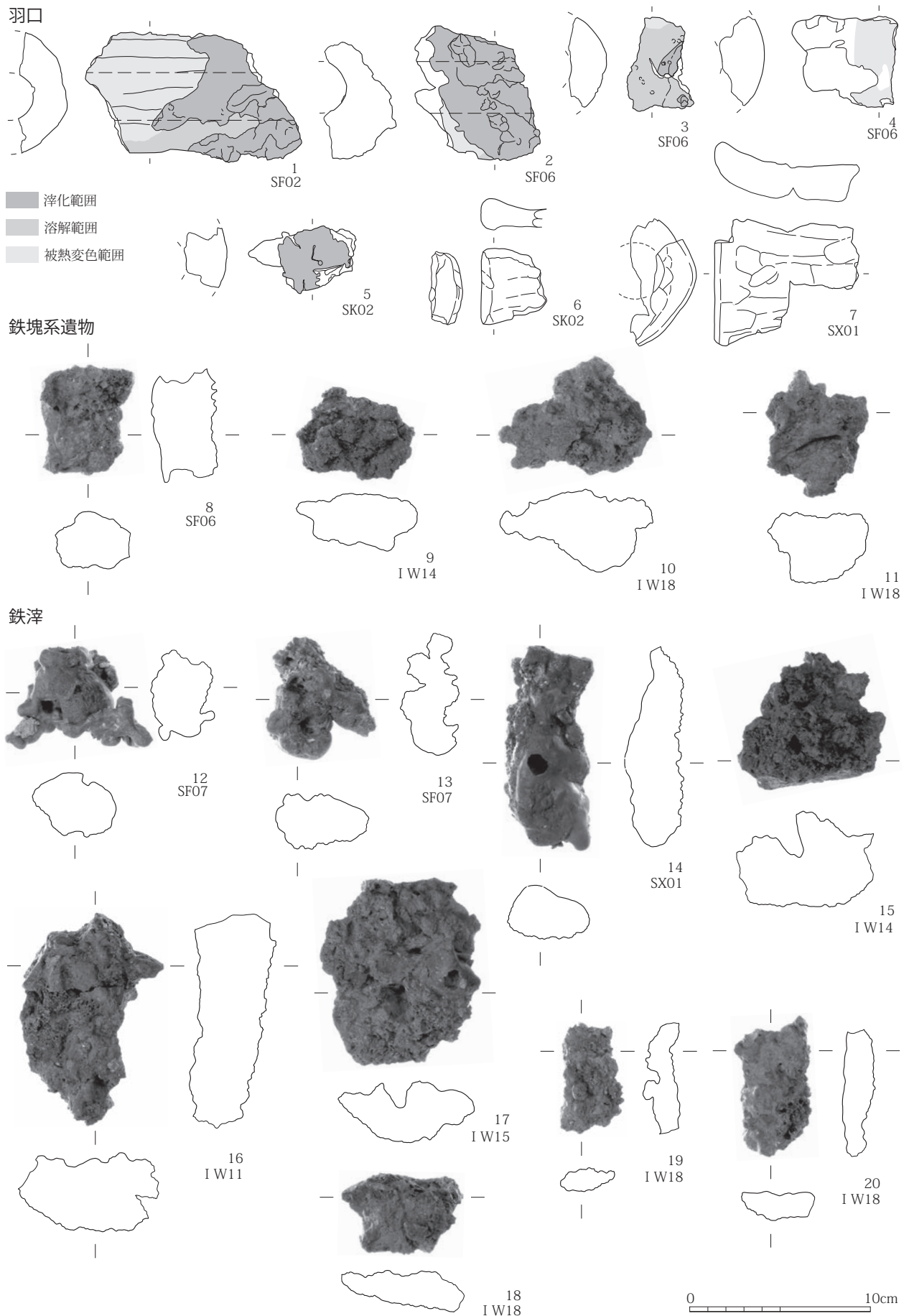
図版 番号	P L 番号	管理 番号	出土位置	種類	残存部位	質量 (cm, g)				備 考
						長さ	幅	厚さ	重さ	
1		506	S F 02 No.4	羽口	先端部付近	(11.9)	(6.7)	1.7	192.6	内径 (2.8)、滓化、スサ混
2		502	S F 06 93	羽口	先端部付近	(3.8)	(5.4)	(2.1)	27.9	内径 (2.6)、滓化、スサ混
3		503	S F 06 96	羽口	先端部付近	(6.9)	(7.4)	(2.9)	124.7	内径 (2.9)、滓化、スサ混
4		501	S F 06 74	羽口	先端部付近	(5.8)	(5.0)	(2.6)	57.7	内径 (3.1)、スサ混、還元
5		504	S K 02 覆土	羽口	先端部付近	(5.9)	(3.7)	(2.2)	34.0	内径 (3.0)、滓化
6		505	S K 02 覆土	羽口	吸気部	(3.6)	(4.2)	(1.8)	21.0	スサ混
7		507	S X 01 No.5	羽口	吸気部	(7.9)	(7.0)	(1.9)	83.4	スサ混

第 33 表 鉄塊系遺物観察表

図版 番号	P L 番号	管理 番号	出土 位置	種 類	重さ g	磁着		金属 反応	備 考
						15mm	22.8mm		
8		508	S F 06 97	鉄塊系遺物	101.9	○	○	○3	気泡多い
9		515	I W 14 182	鉄塊系遺物	131.6	○	○	○9	土砂固結、鉄の銹化膨張に伴う割れ有
10		510	I W 18 129	鉄塊系遺物	180.5	○	○	○7	土砂固結
11		512	I W 18 150	鉄塊系遺物	161.7	○	○	○4	土砂固結

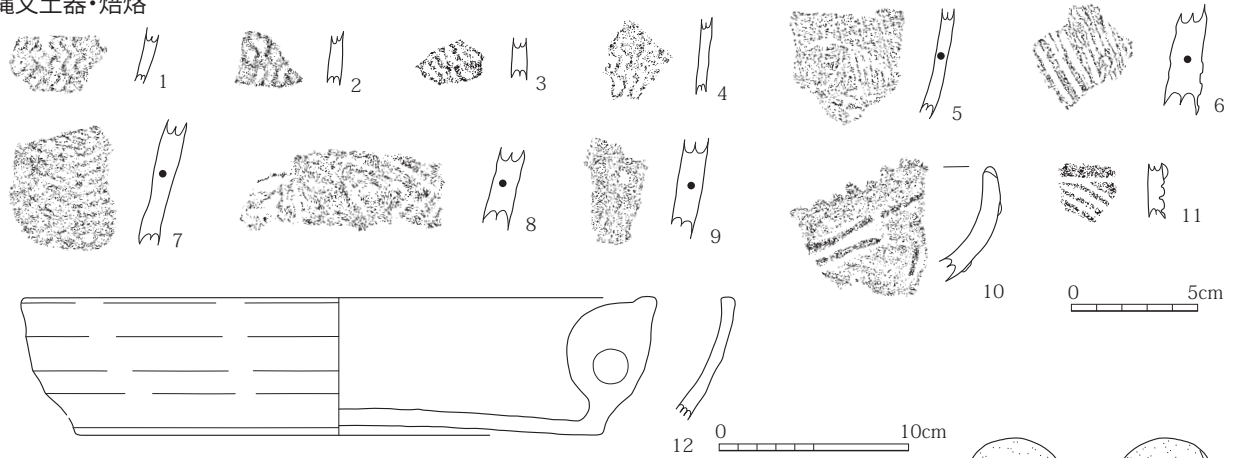
第 34 表 鉄滓観察表

図版 番号	P L 番号	管理 番号	出土位置	種 類	重さ g	磁着		金属 反応	備 考
						15mm	22.8mm		
12		518	S F 07 排滓溝	鉄滓	99.2	○	○	×	
13		519	S F 07 排滓溝	鉄滓	72.1	○	○	×	
14		517	S X 01 192	鉄滓	187.6	○	○	×	
15		514	I W 14 181	鉄滓	320.1	○	○	×	S X 01 周辺
16		509	I W 11 106	鉄滓	360.7	○	○	×	S F 06 周辺
17		516	I W 15 189	鉄滓	313.3	○	○	×	
18		511	I W 18 134	鉄滓	84.5	○	○	×	
19		513	I W 18 160	鉄滓	56.2	○	○	×	
20		520	I W 18	鉄滓	73.4	○	○	×	

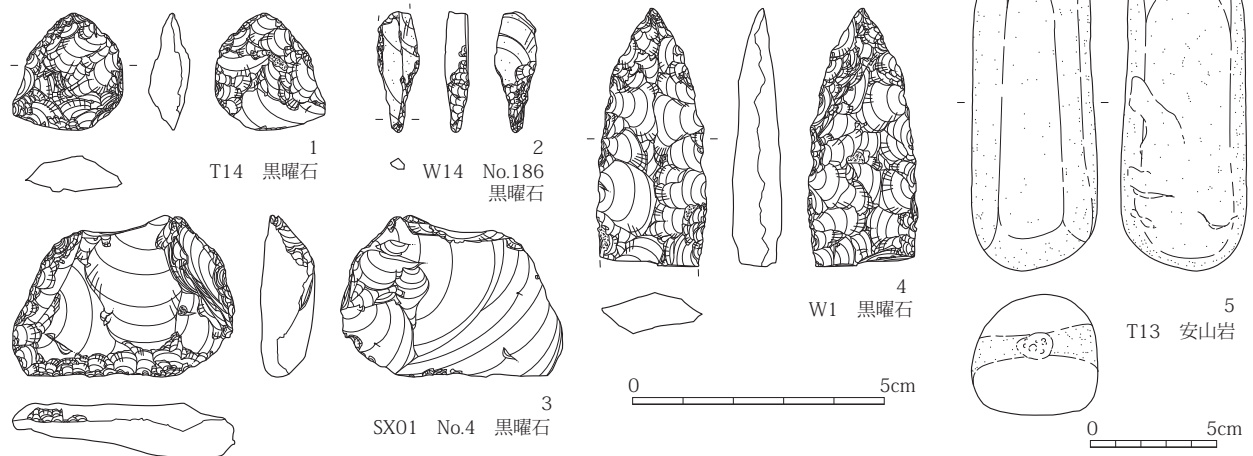


第 126 図 製鉄関連遺物

縄文土器・焙烙



石器



第127図 その他の時代の遺物

(3) その他の時代の遺物 (第125図27・28、第127図、P L 32)

第127図1～11は縄文土器である。1～4は早期の押型文土器で、器厚は薄く、山形文を縦位に密接施文しており細久保式と考える。5～9は早期末～前期初頭で、胎土に繊維を含む。内面に条痕文はない。5は薄手で、密接した細い撚糸文を浅く施す。6は厚手で、縦位密接の撚糸文を深く施す。7は単節縄文を縦位羽状に施文する、8は単節縄文を横位羽状に施文し菱形を構成する。9は磨滅のため不明確だが、縄文の痕跡が残る。10は前期後葉で、内湾する波状口縁の端部を刻み、浮線で釣針状の意匠を描くらしい。縄文地文と推定する。諸磯b式中段階の土器である。11は中期初頭で、横位の隆帯区画に半截竹管状工具で斜位の集合沈線文を施す。第125図27・28は7世紀後半と推測する坏と壺である。27は浅い半球形状を呈する坏で、底部にヘラケズリを施す。口径は推定で12.8cm、器高は残存部で3.2cmを測る。28の壺は全体的に磨滅が著しいが、外面は頸部にハケとミガキ、体部にミガキが、内面にはナデが残る。口径16.6cm、器高は残存部で26.3cmを測り、底部は欠損する。第127図12は近世の焙烙で、内面耳の1か所が欠損する。口径33.6cm、器高7.2cm、底径28.0cmを測る。

石器の1は石鏃未製品で、やや厚みのある剥片を素材とする。表裏ともほぼ全周を剥離し、ほとんど第1次剥離面を残さない。製作の早い段階で廃棄されたものと推測する。2は石錐で、表裏の大部分に自然面を残す。下半部の側縁を急角度に剥離し錐部を作る。3は削器で、やや厚みのある剥片を素材とする。裏面のほぼ全面が第1次剥離面である。表面の周縁に連続的な剥離を行い、下縁を刃部とする。4は石槍で、両側縁から剥離を行い、左右対称形の形態を作る。基部側を欠損する。5は敲石で、棒状円礫の長軸方向側面に微弱な敲打痕がある。下端には明瞭な敲打痕が残る。

第3節 自然科学分析

洞源遺跡では自然科学分析として、樹種同定分析と放射性炭素年代測定を委託で実施しており、以下にその概要を報告する。なお、各分析の詳細については分析報告書をDVDに収録したのでそちらを参照されたい。

1 樹種同定分析

(1) 分析の内容

製鉄炉跡と竪穴状遺構から採取した炭化材を対象として、パリノ・サーベイ株式会社に委託し、樹種同定分析を実施した。

(2) 分析試料と目的

分析試料は製鉄炉跡 S F 02 から採取した2点、製鉄炉跡 S F 06 から採取した1点、竪穴状遺構 S X 01 から採取した2点、竪穴状遺構 S X 02 から採取した1点の合計6点で、目的は製鉄等の木材利用に関わる資料を得ることにある。

(3) 分析結果

試料の同定結果を第35表に示した。S F 02 の2点は重硬で強度が高く、薪炭材としては優良なコナラ属コナラ亜属クヌギ節と同定された点から、製鉄炉で燃料として利用された薪炭材であったことがわかる。S X 01 の炭化材は1点がカエデ属、1点がコナラ属コナラ亜属コナラ節であった。カエデ属は、比較的硬かつ緻密な木材で、燃料としてはクヌギ節やコナラ節に近く、また、コナラ節はクヌギ節と同様に優良な薪炭材とされている。S X 01 はカマドを有する竪穴建物跡と考えられ、これらの樹種はカマドで利用された薪炭材であった可能性がある。S F 06 の1点はヤナギ属と同定された。ヤナギ属は軽軟で、燃料として火付きは良いが火持ちは悪いとされる樹種で、S F 02 や S X 01 で同定された樹種とは違う性格の樹種であった。なお、S X 02 の1点は樹皮であり、同定には至らなかった。

第35表 樹種同定結果

No.	台帳No.	取り上げNo.	採取遺構	層位	形状	
1	サー1	炭サンプル1	S F 02	1層	分割材(桎目板)状	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
2	サー3	炭サンプル3	S F 02	1層	—	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
3	サー8	炭サンプル4	S F 06	2層	分割材(ミカン割)状	ヤナギ属
4	サー11	炭サンプル11	S X 01	1層	—	カエデ属
					—	コナラ属コナラ亜属コナラ節
5	サー12	炭サンプル12	S X 02	1層	—	樹皮

2 放射性炭素年代測定

(1) 分析の内容

製鉄炉跡と竪穴状遺構、および遺構外から採取した炭化材を対象として、株式会社加速器分析研究所に委託し、放射性炭素年代測定(AMS測定)を実施した。

(2) 分析試料と目的

分析試料は炭化材片で、製鉄炉跡 S F 02 から採取した4点、S F 06 から採取した3点、S F 07 から採取した1点、竪穴状遺構 S X 01 から採取した1点、S X 02 から採取した3点の合計12点である。分析の目的は、時期決定が困難な遺構のより明確な年代推定を行うための資料を得ることにある。

(3) 分析結果

測定結果を第36表に示した。1 σ 暦年代範囲の最小値と最大値をみながら、製鉄炉跡と竪穴状遺構の年代測定値を整理しておく。

製鉄炉跡のSF02では、No.1が1080calAD-1147calAD、No.4が1039calAD-1151calAD、No.5が1020calAD-1147calAD、No.6が981calAD-1016calADとなり、No.6は若干古いが無.1・4・5は概ね近く、11世紀前葉から12世紀中葉の年代を得ている。SF06では、No.7が894calAD-968calAD、No.8が901calAD-990calAD、No.9が894calAD-969calADとなり、No.7・9はほぼ同じでNo.8はやや新しいが、3点は10世紀代初頭から後葉までの年代幅では一致する。SF07のNo.12は996calAD-1029calADで、10世紀末葉から11世紀前葉であった。この結果からすれば製鉄炉は、10世紀初頭から後葉のSF06、10世紀末葉から11世紀前葉のSF07、11世紀前葉から12世紀中葉のSF02といった、複数時期の操業があったと推測することもできよう。

竪穴状遺構のSX01では、No.2が1210calAD-1256calADで、13世紀前葉から中葉とする年代を得た。しかし、SX01では9世紀後半の土師器が比較的まとまりをもって出土し、遺物の時期と測定年代は整合しない。また、SX02では、No.3が1040calAD-1152calAD、No.10が1020calAD-1147calAD、No.11が1021calAD-1147calADとなり、概ね11世紀前葉から12世紀中葉とする年代を得た。この結果は製鉄炉のSF02の年代幅と重なる。

年代測定から、製鉄炉跡SF02・06・07は同時期ではなく、複数時期の操業が推測され、さらに製鉄炉跡SF02と竪穴状遺構SX02は同時期に存在した可能性が高いことが判明した。

第36表 分析試料と測定年代

No.	試料名	種類	採取位置	暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
1	1	木炭	SF02 1層	979 ± 24	1080calAD-1045calAD (45.4%) 1095calAD-1120calAD (23.8%) 1142calAD-1147calAD (3.9%)	998calAD-1003calAD (0.7%) 1012calAD-1054calAD (47.5%) 1078calAD-1154calAD (47.5%)
2	2	木炭	SX01 埋土	821 ± 23	1210calAD-1256calAD (68.2%)	1170calAD-1262calAD (95.4%)
3	3	木炭	SX02	935 ± 23	1040calAD-1052calAD (10.1%) 1081calAD-1152calAD (58.1%)	1032calAD-1156calAD (95.4%)
4	12	炭化物	SF02 1層	938 ± 23	1039calAD-1051calAD (10.6%) 1082calAD-1128calAD (41.8%) 1133calAD-1151calAD (16.1%)	1030calAD-1156calAD (95.4%)
5	13	炭化物	SF02 1層	975 ± 23	1020calAD-1045calAD (37.7%) 1095calAD-1120calAD (26.2%) 1142calAD-1147calAD (4.3%)	1015calAD-1055calAD (44.4%) 1076calAD-1154calAD (51.0%)
6	14	炭化物	SF02 1層	1,057 ± 23	981calAD-1016calAD (68.2%)	901calAD-921calAD (7.4%) 953calAD-1024calAD (88.0%)
7	15	炭化物	SF06 2層最下部焼土直上	1,121 ± 22	894calAD-906calAD (14.0%) 915calAD-931calAD (18.1%) 938calAD-968calAD (36.0%)	885calAD-985calAD (95.4%)
8	16	炭化物	SF06 2層最下部	1,088 ± 22	901calAD-921calAD (23.0%) 951calAD-990calAD (45.2%)	894calAD-930calAD (32.2%) 937calAD-1013calAD (63.2%)
9	17	炭化物	SF06 2層	1,119 ± 23	894calAD-930calAD (35.4%) 939calAD-969calAD (32.8%)	885calAD-986calAD (95.4%)
10	18	炭化物	SX02 1層	975 ± 23	1020calAD-1045calAD (37.7%) 1095calAD-1120calAD (26.2%) 1142calAD-1147calAD (4.3%)	1015calAD-1055calAD (44.4%) 1076calAD-1154calAD (51.0%)
11	19	炭化物	SX02 1層	975 ± 22	1021calAD-1045calAD (38.3%) 1095calAD-1120calAD (25.7%) 1142calAD-1147calAD (4.2%)	1016calAD-1053calAD (45.5%) 1080calAD-1153calAD (49.9%)
12	20	炭化物	SF07 3層	1,010 ± 21	996calAD-1029calAD (68.2%)	986calAD-1040calAD (94.6%) 1110calAD-1115calAD (0.8%)

第4節 小結

洞源遺跡の製鉄炉跡は、佐久地域では初めての調査事例となった。遺構は削平の影響を大きく受け、残存状態が悪く、遺物も量的に決して多いとは言えないが、製鉄炉跡と竪穴状遺構を主体に概観することで小結としたい。

検出した遺構は製鉄炉跡が3基（S F 02・06・07）、被熱部・焼土跡が3基（S F 01・03・05）、土坑が1基（S K 03）、竪穴状遺構が3軒（S K 02、S X 01・02）である。しかし、鉄生産には欠かせない木炭供給のための窯が見つからず、そうした遺構が今回の調査区外に存在する可能性は高い。事前に実施したトレンチ調査では、調査区の北側には遺構が存在しないことが判明しており、南側は小河川に面することから、遺構が広がるとすれば今回の調査区の東側もしくは西側となる。

製鉄炉の3基は標高710~713 mの場所に、約15 mの間隔で位置する。炉の本体は円形を呈し、本体下部には排滓溝、もしくは排滓溝と排滓土坑を有する。炉底には明確な被熱痕跡がなく、焼土粒・炭化粒および炭化材片などが堆積していた。S F 02で採取した炭化材片の樹種同定では、燃料の薪炭材として優良なコナラ属コナラ亜属クヌギ節との結果を得た。また、S F 02・06の南側斜面のI W 11グリッド、I W 13・17・18グリッドでは、鉄滓や鉄塊系遺物などが比較的まとまりをもって出土した範囲があり、そこがS F 02・06の廃滓場であった可能性が高い。

製鉄炉の時期は、放射性炭素年代測定による暦年較正でS F 02が11世紀前葉~12世紀中頃、S F 06が10世紀初頭~後葉、S F 07が10世紀末葉~11世紀前葉の範囲とされた。この結果から、3基の製鉄炉は同時操業ではなく、3時期にわたっての操業があったと推測する。

竪穴状遺構の3軒は残存状態が悪く一部の検出に止まり、性格は不明である。S X 01は北東壁コーナー付近にカマドをもつ竪穴建物跡だが、S K 02とS X 02はカマドをもたず、さらにS X 02は北壁に沿って炭化物と焼土が床面に広がるなど、通常の建物とは性格を異にする。遺構の時期は、出土遺物からS X 01が9世紀後半、S K 02が10世紀以降、放射性炭素年代測定による暦年較正でS X 02が11世紀前葉~12世紀中葉とされた。S K 02とS X 02は製鉄炉跡の時期と重なり、さらにS K 02とS F 06、S X 02とS F 02の時期がそれぞれ対応することから、製鉄関連の施設と推測することができる。

それに対して、S X 01は製鉄炉跡の時期よりも古い。同時期と考えられる遺構がS K 03とS F 03で、この3つは製鉄炉の操業以前に営まれた集落の可能性がある。中部横断道建設に伴い調査した佐久市寺久保遺跡では、平安時代後期の竪穴建物跡1軒の検出に止まり、山間部の小規模集落（山棲み集落）と評価したが（埋文センター2019）、洞源遺跡のS X 01も同様に山間部の小規模集落とすることができるかもしれない。しかし、冒頭で触れたように、洞源遺跡の遺構は調査区外に広がる可能性があり、今回調査した製鉄炉のS F 02・06・07よりも古く、S X 01と同時期の製鉄炉が調査区外に存在する可能性は否定できない。製鉄炉が存在すれば、S X 01もほかの竪穴状遺構と同様に、製鉄関連の施設とすることができる。

引用・参考文献

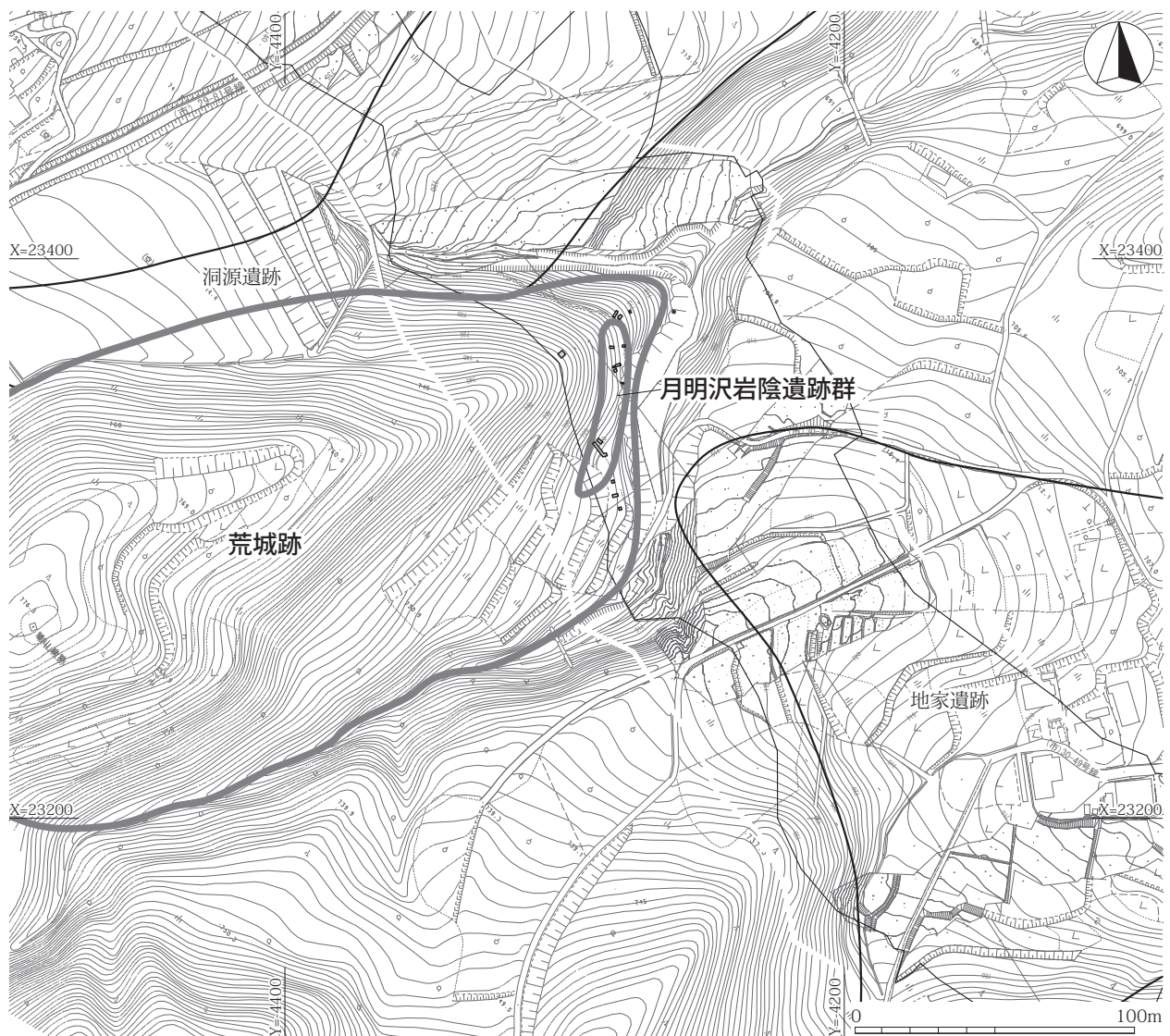
埋文センター2019『滝ノ沢遺跡 寺久保遺跡 庚申塚 台ヶ坂遺跡 上滝・中滝・下滝遺跡 和田遺跡 和田1号塚 滝遺跡 家浦遺跡 田島塚 水堀塚』

第8章 荒城跡 月明沢岩陰遺跡群

第1節 荒城跡

荒城跡は、佐久市大字前山の山頂にある中世城館である（第128図）。今回の中部横断面に係る調査対象地は、主郭があった山頂から北東側に向けた急斜面で、小規模の郭が斜面上に存在する可能性が指摘されていた。

2015（平成27）年、人工的な地形改変の有無を確認するため地表観察を行ったが、郭の可能性をもつ平坦面は確認できなかったため、傾斜が最も緩やかな地点を選択し、2m四方のテストピットの発掘を行った（第129図）。その結果、地表から25～55cmで地山の岩盤に達し、人工的な平坦面や遺構はなく、遺物も出土しなかった。以上により、今回の調査対象地については、本調査は不要と判断した。



第128図 荒城跡と月明沢岩陰遺跡群の位置

第2節 月明沢岩陰遺跡群

月明沢岩陰遺跡群は蓼科山塊から延びる尾根の先端付近に位置する（第128図）。尾根の南北両側は小規模な河川が東流して遺跡東側で合流し、片貝川沖積平坦面の洞源湖に注ぐ。月明沢岩陰は尾根の先端付近の標高718 m前後で東側に開放し、眼下の河床からの比高は20 m程度を測る。尾根先端部に露出する岩盤の弱い部分が浸食され、岩庇状の岩陰を形成したものと考えられる。今回調査した岩陰以外にも、周辺の谷筋にはいくつかの岩庇が確認されている。

従来の調査歴は、1965（昭和40）年に地元有志が10数体分の人骨、土器、石器、鹿角などを発見し、信州大学の鈴木誠教授に鑑定を依頼している。1971年には西沢寿晃氏、小松虔氏により現地踏査と整理作業が行われ、弥生時代前期の土器8点とヒトの上顎第3大臼歯を穿孔した装飾品、人骨が『長野県考古学会誌』に報告された（西沢・小松1978）。その後、月明沢岩陰は遺跡の詳細な位置が不明確となり、佐久市遺跡地図にも未登録の状態が続いた。

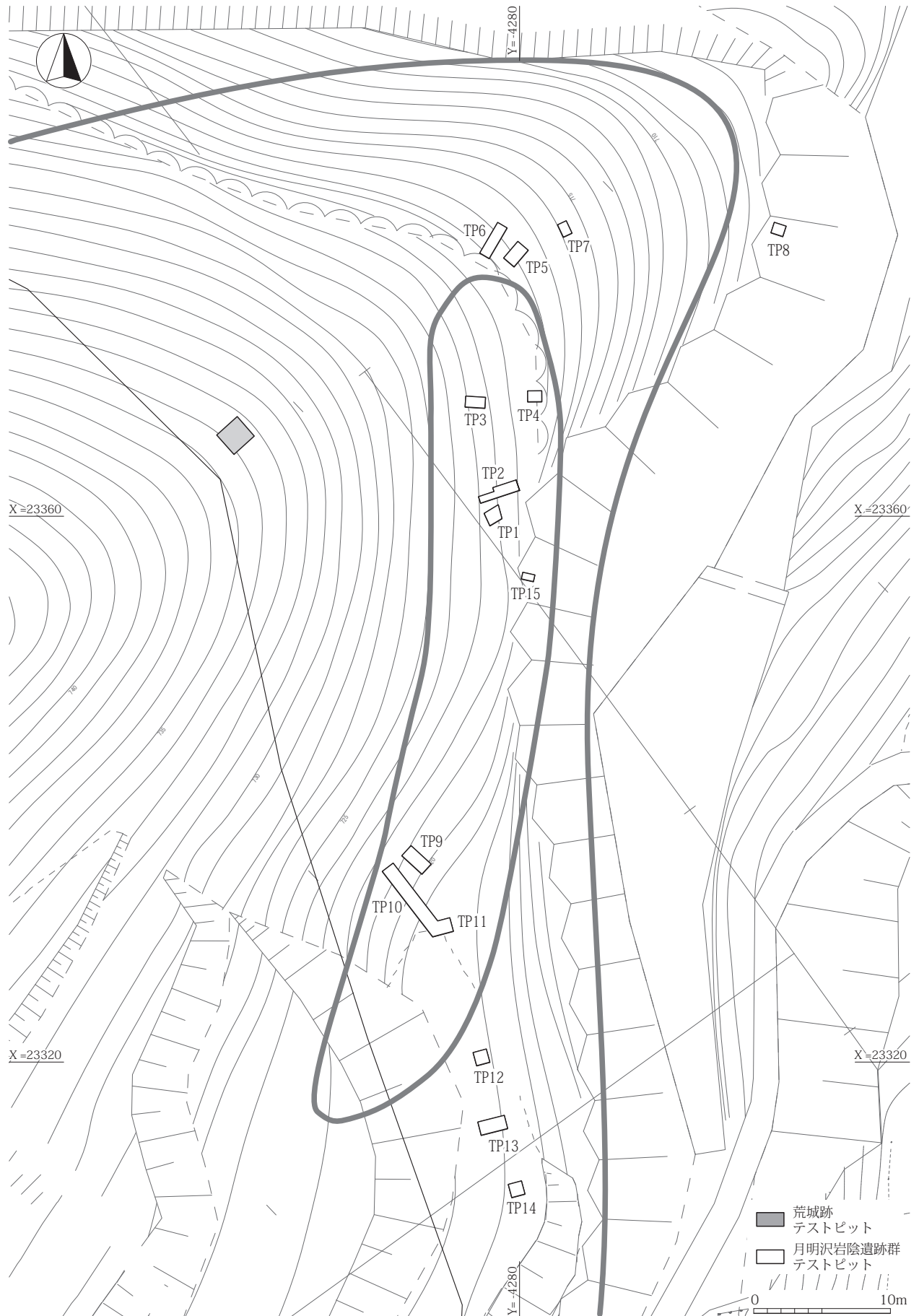
2009年、中部横断道建設に伴う市教委、県教委、埋文センターによる現地踏査で、月明沢岩陰の位置を再確認した。

2010年、遺跡の状況確認を目的とし、約400㎡の範囲において岩陰部やその周辺に15か所のテストピット（TP1～15）を掘削した（第129図）。70年代に調査された月明沢岩陰は、この内のTP2の位置に該当する（PL31）。TP2では幅80cm、長さ2mの範囲を掘削した結果、岩陰奥壁より1.8mまではなだらかな傾斜の岩陰・テラス部となり、そこから東側は急激な傾斜で河床に向かい落ち込む構造が明らかになった。岩陰内部は約20cmの崩落土が堆積しており、遺物などは全く出土しなかった。その後、TP2を含む月明沢岩陰全体を掘り出したが、遺物は皆無で崩落土のみが堆積していた。この状況から、1971年の調査は岩陰内部全体に及んだと判断した。岩陰部は幅（南北）5m程度で、両端はそのまま基盤の露出岩盤につらなり、岩陰内部は南側から北側および東側（開放部側）へ緩やかに傾斜している。また、周辺部に設定したそのほかのテストピット（TP1・3～15）でも遺物包含層は確認できず、岩陰や周辺を利用した状況は確認できなかった。

月明沢岩陰周辺では、ほかにも岩陰状を呈する部分を確認したが、基盤層が浸食されて岩庇前面のテラス部がなく、遺物も出土せず、岩陰遺跡といえるものではなかった。以上から、中部横断道用地内では、岩陰遺跡は残存していないと判断して調査を終えた。

引用・参考文献

西沢寿晃・小松虔1978「長野県佐久市月明沢遺跡発掘資料について」『長野県考古学会誌』31 長野県考古学会



第 129 図 テストピット配置図

第9章 総括

本報告では佐久市内、千曲川左岸の佐久平に面した小宮山・前山地区の範囲にある発掘調査の記録をまとめている。報告した遺跡は旧石器から中近世にわたり、石器ブロック、集落、古墳、生産跡など今まで周知されていなかった内容を含め、多様な成果を得た。ここでは時代順にまとめておきたい。

旧石器時代

高尾A遺跡で台形石器を含む石器群が発見された。火山灰との関係は明確に確認できなかったが、出土石器から旧石器時代でも古い段階と判断した。周辺地域では調査事例の少ない成果で、貴重な例と考える。

縄文時代

小山の神B遺跡で縄文時代前期初頭・後葉・末葉の集落跡を調査した。前期初頭の集落は緩やかな環状を描くように建てられ、少なくとも2段階以上の変遷を想定、浅間山麓の遺跡と立地環境等を比較して、当該期における集落の1つの在り方を示していると指摘した。一方、高尾A遺跡では前期前葉の竪穴建物跡を報告した。いずれもなだらかな斜面地にある点が共通し、地域における前期の集落の立地を考える良好な資料と考える。小山の神B遺跡では多数の種実圧痕を持つ土器を報告し、最新の研究の一助となった。

弥生時代

小山の神B遺跡で石鍬が出土した土坑をこの時期としたほかは、遺構を確認していない。尾垂遺跡では今回調査した範囲より、千曲川寄りの尾根の先端付近で市教委によって集落跡が調査されていることから、人々は、佐久平に面した台地に居住していたと推測している。また、月明沢岩陰遺跡群については、今回の用地内では岩陰遺跡は残存していないと判断した。

古墳時代

高尾古墳群5号墳、尾垂古墳ともに新発見の古墳である。築造年代は両者ともに7世紀から8世紀にかけてと推測した。小型の横穴式石室を内部主体とすること、追葬がなされていることが共通している。古墳を築造した目的やその背景について踏み込むことはできなかったが、山裾に築かれた「山寄せ」古墳として、古墳の発見例の少ない千曲川左岸地域の地域動向を考える新資料として評価した。

古代

小山の神B遺跡、尾垂遺跡で9～10世紀の集落跡を調査した。洞源遺跡の製鉄炉跡は佐久地域では初めての事例である。報告した3基の製鉄炉跡は年代測定の結果から10～12世紀に築かれたと推測した。おそらく砂鉄と推測される原材料、燃料の薪炭材などの供給方法や造られた鉄素材はその後どうなるのかなど解明すべき課題は多い。ただし、古代における生産遺跡として希少な成果と考える。

中世以降

尾垂遺跡では当地に「龍覚寺」という寺があったと伝承されている。今回の調査では、青磁等の中世陶磁器や仏具の「馨」が出土し、時期不明の礎石建物跡を考慮すると「寺」の存在も推測されるが確証までには至らなかった。また、荒城跡では小規模な郭の存在を想定したものの、確認できなかった。

以上、今回の調査によって、地域の歴史解明に新たな資料を提示できたが、その分、残された課題も多く、今後の地域の歴史解明にこの調査成果が活かされることを期待したい。

最後に、発掘調査に御協力いただいた関係者の皆さま、発掘作業から報告書作成までに貴重な御教示をいただいた多くの皆さま、この場を借りて感謝申し上げます。



遺跡遠景（南西から）



1区全景（南から）



SB01 完掘（東から）



SB01 P4 石皿出土状況（北東から）



SB06 遺物出土状況（西から）



SB06 遺物出土状況 2（西から）



SB06 種実圧痕土器出土状況（東から）



SB06 完掘（西から）

PL2 小山の神B 遺跡



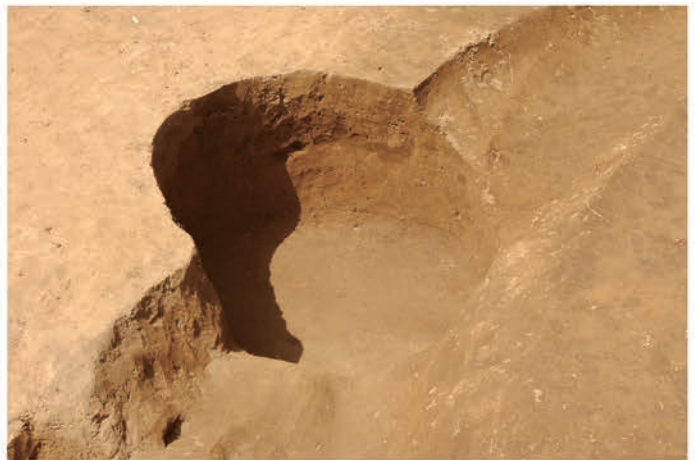
SB08 完掘 (南東から)



SB08 P2 石皿出土状況 (西から)



SK51 断面 (南西から)



SK131 完掘 (南から)



3～4区全景 (東から)



SB16・17 完掘 (南西から)



SB19 完掘 (東から)

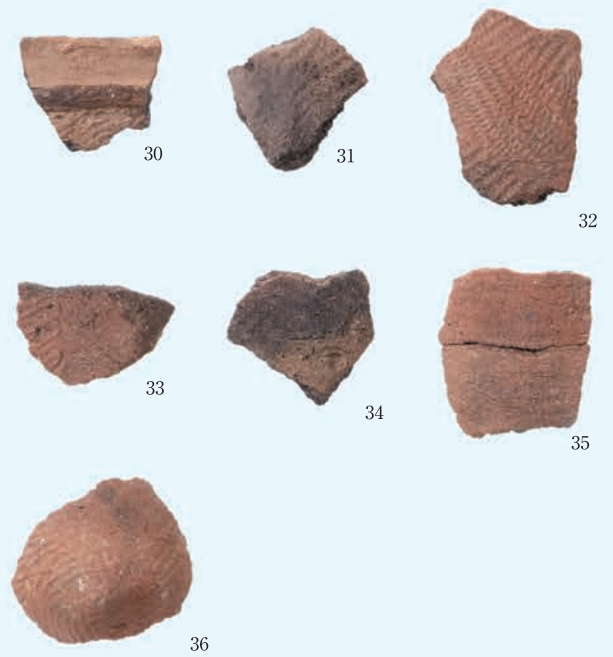


SB19カマド (南東から)

SB01 (1)



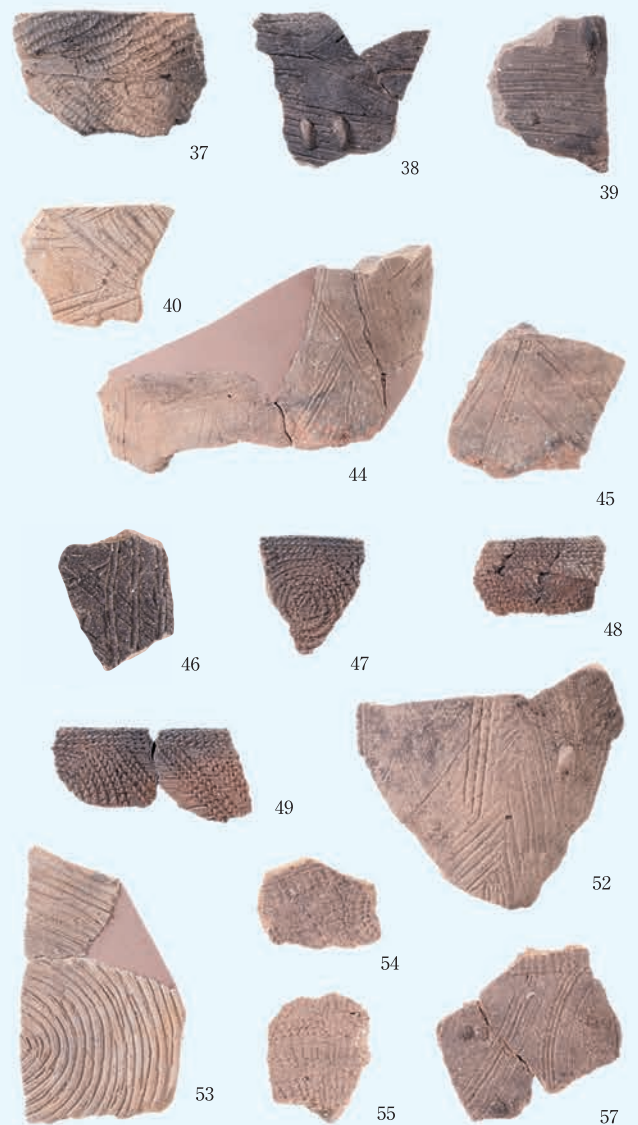
SB05



SB01 (2)



SB06 (1)



SB02



SB03

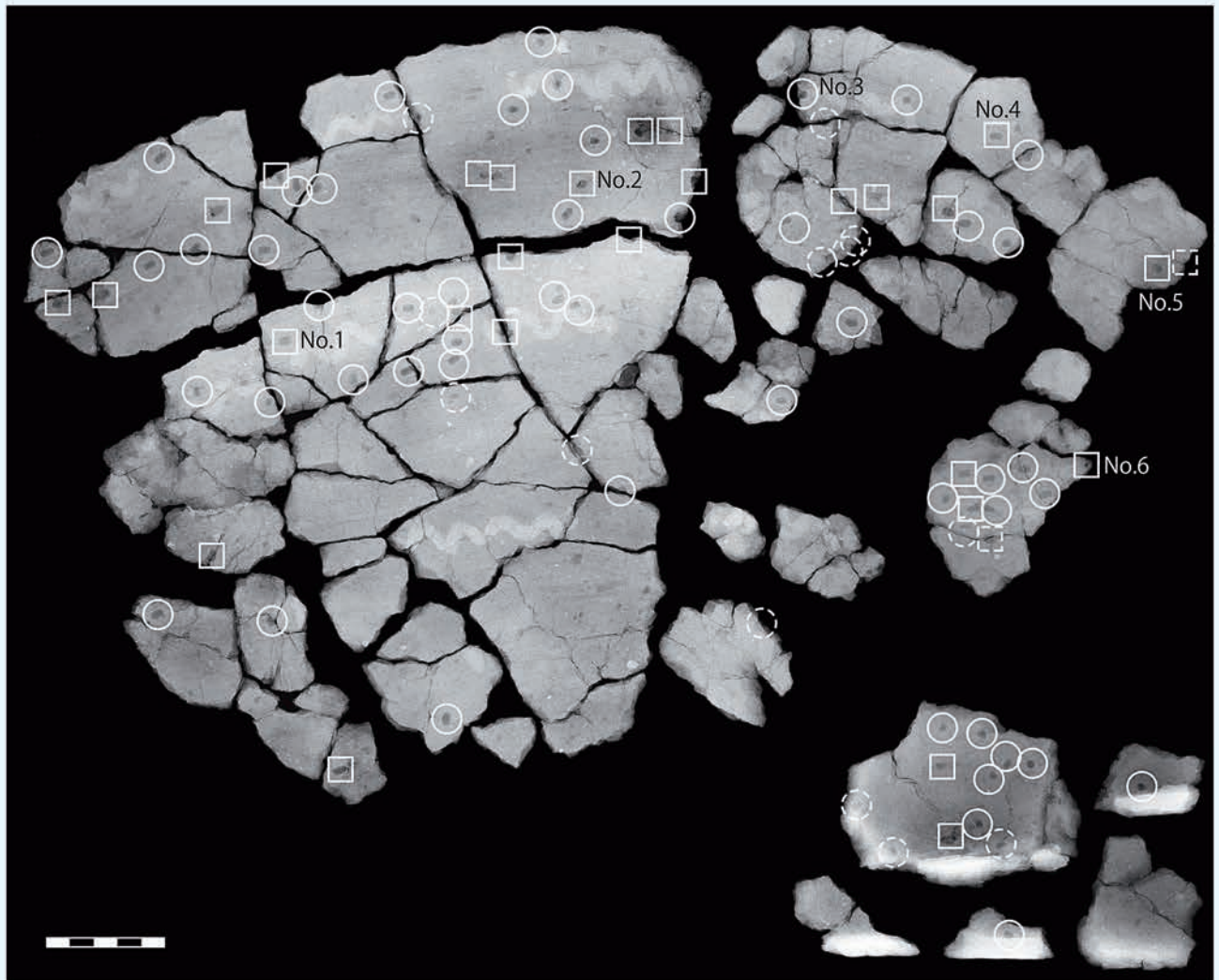


SB04

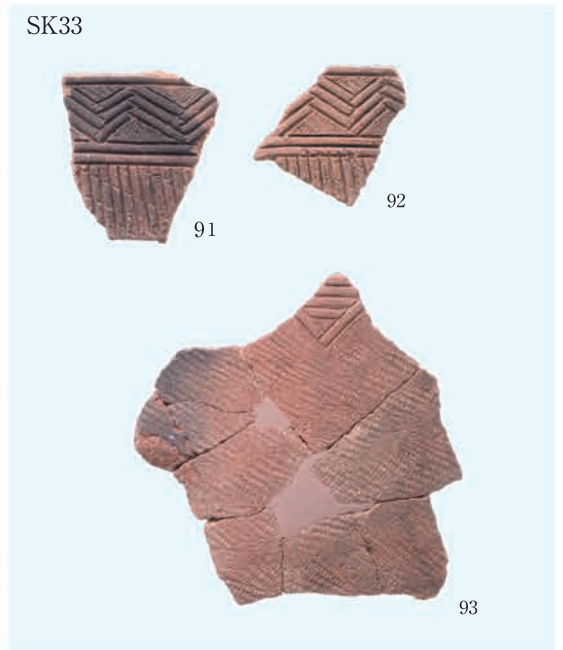
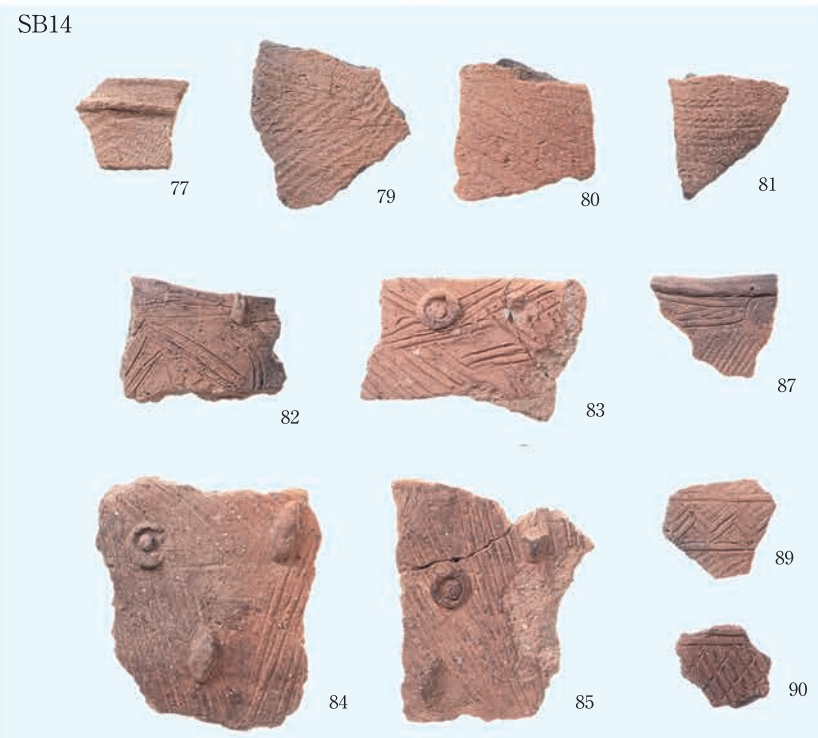
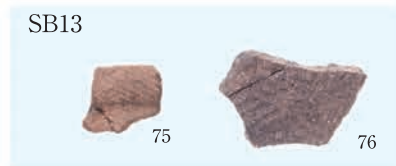
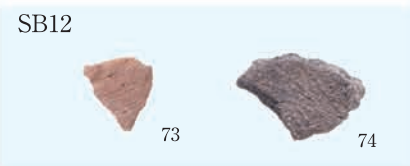
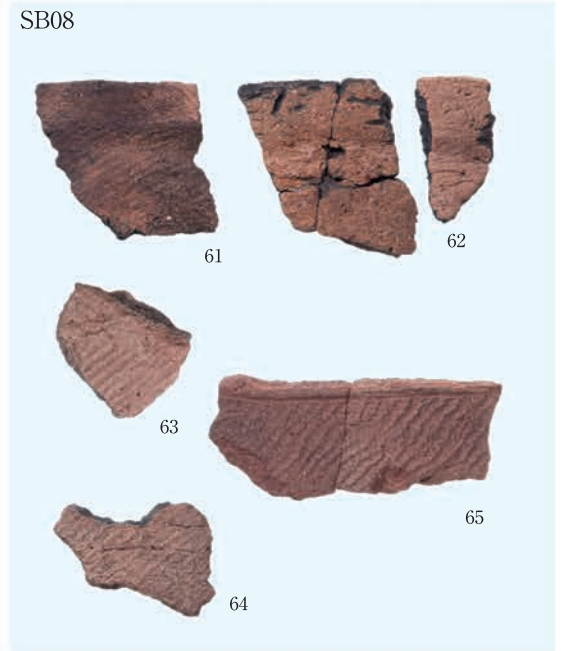


PL4 小山の神B遺跡

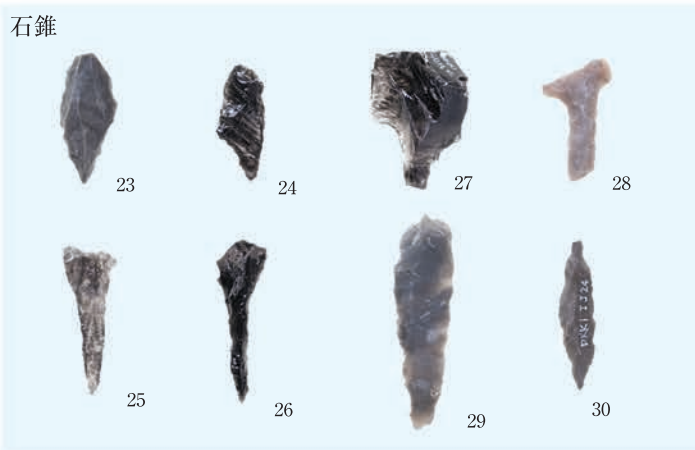
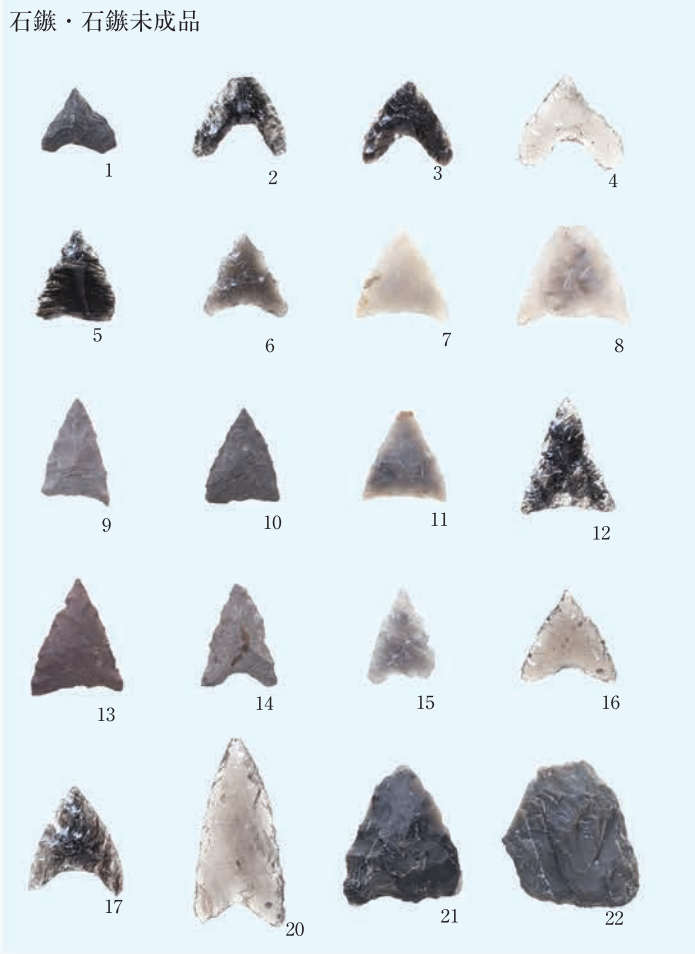
SB06 (2) 種実圧痕土器



縄文土器 (2)



PL6 小山の神B遺跡

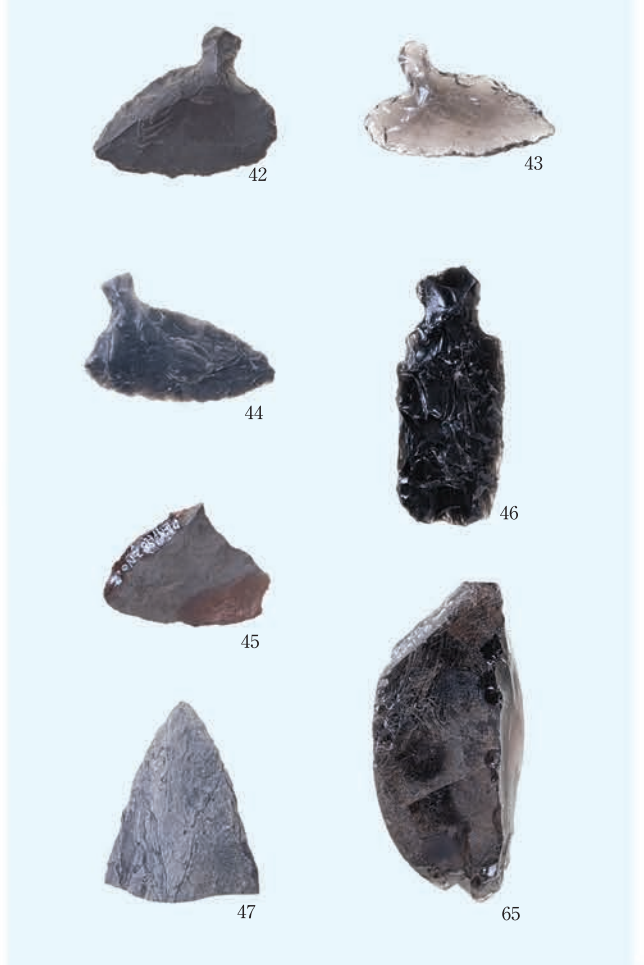


縄文土器（4）、弥生土器、縄文時代の石器（1）

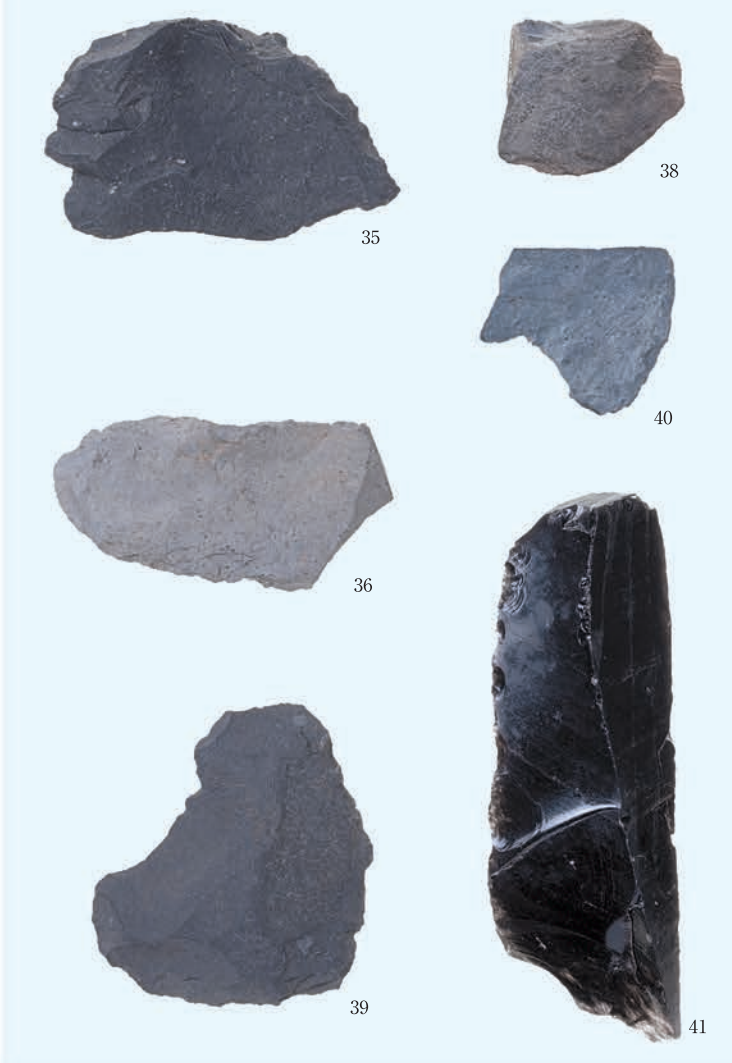
スクレイパー



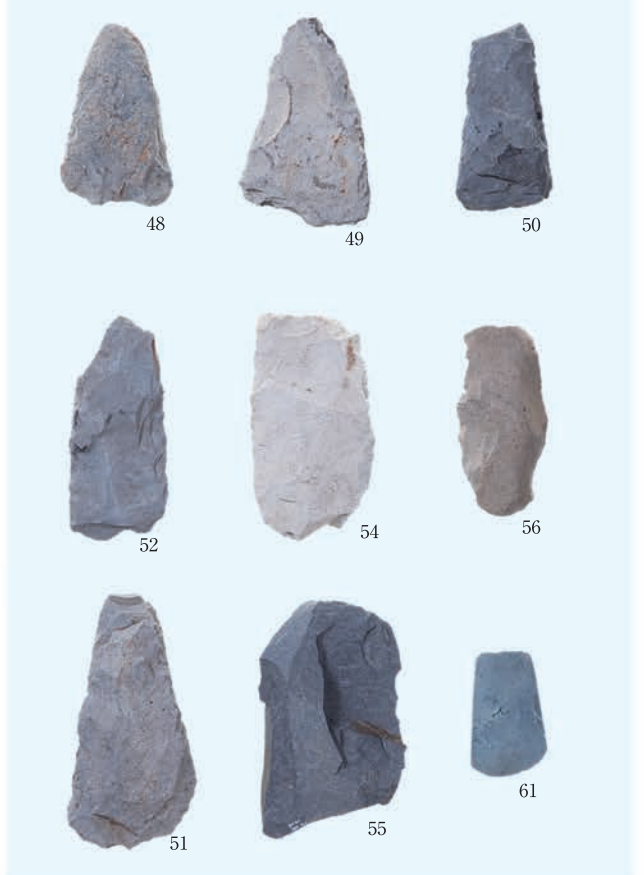
石匙・石槍・原石



スクレイパー・微細な剝離がある剥片



打製石斧・磨製石斧



礫器



PL8 小山の神B遺跡

石鋏



57



58



59



60

用途不明



64



凹石・磨石・敲石（1）



67



68



70

凹石・磨石・敲石（2）



71



72



73



74



75



76



77



78

縄文時代の石器（3）

石皿



SB16・SB17・SB18・SB21



SB16 : 8
SB17 : 10
SB18 : 12 ~ 14
SB21 : 25 ~ 29

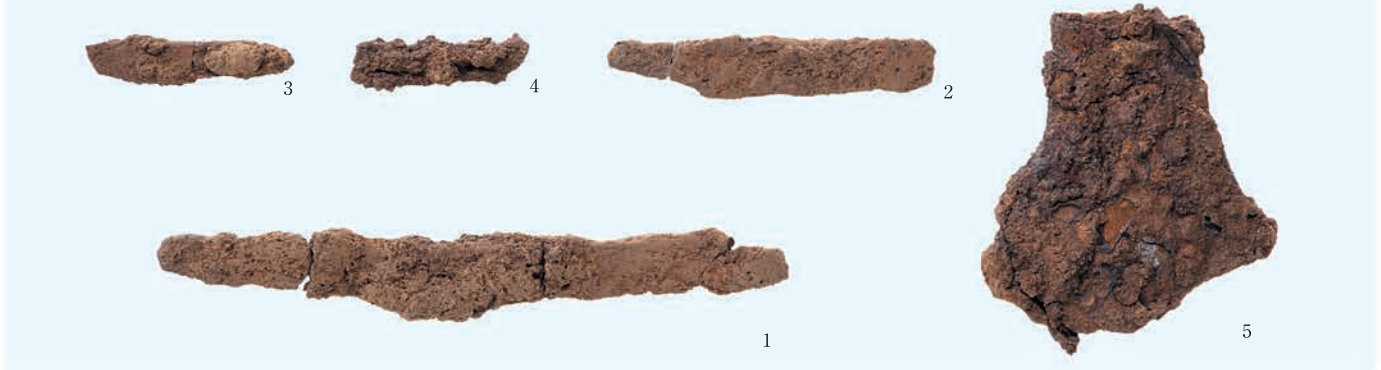
PL10 小山の神B遺跡

SB22・SK133・SF04・遺構外



SB22 : 32 ~ 35, 37 SK133 : 38・39 SF04 : 40 遺構外 : 41~43

金属製品



銭貨



古代土器 (2)、金属製品・銭貨



遠景 (南から)



中央拡張区Ⅲa 下層～Ⅳ層上面 (南東から)



C2・6 Ⅲa層下面～Ⅳ層上面 旧石器等出土状況 (南西から)



C2・6 Ⅲa層下面～Ⅳ層上面 旧石器等出土状況 (南西から)



C4・8 Ⅲa層下面～Ⅳ層上面 旧石器等出土状況 (南西から)



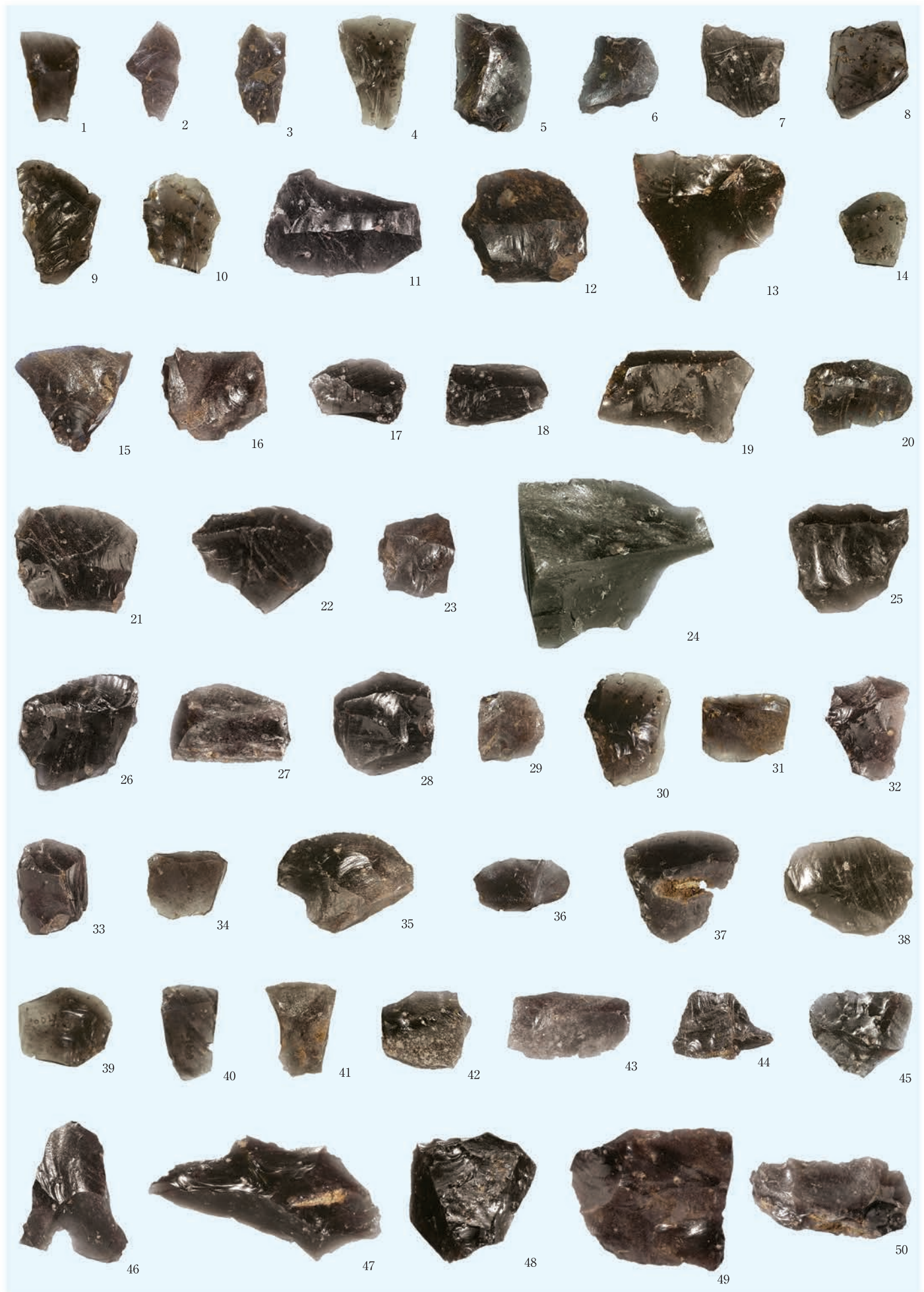
C2 Ⅲa層下面～Ⅳ層上面 旧石器等出土状況 (南西から)



SB01 完掘 (北東から)

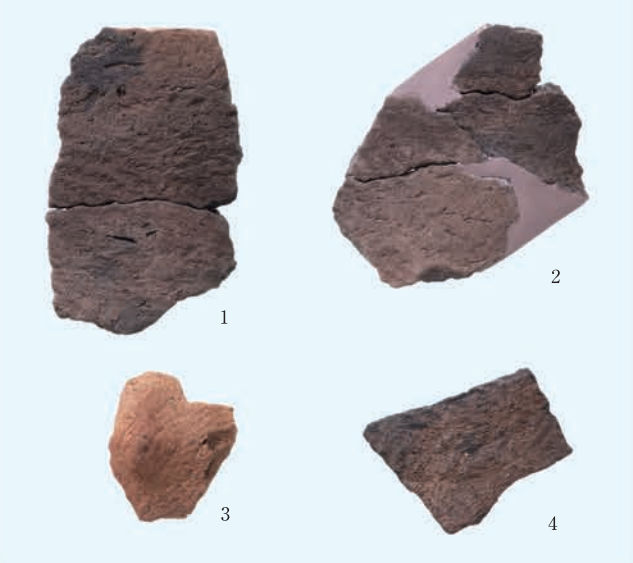


SD01 完掘 (南東から)



旧石器時代の石器

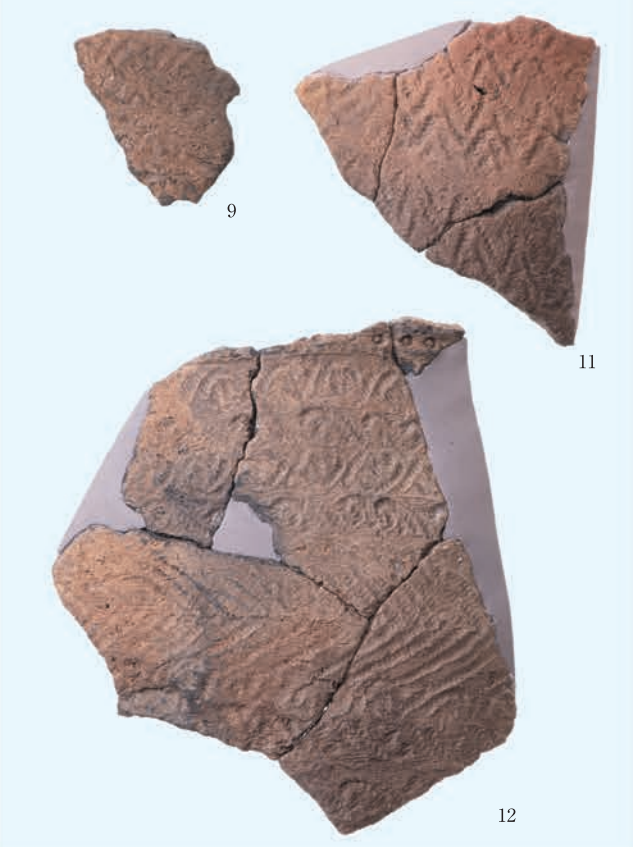
SB01 (1)



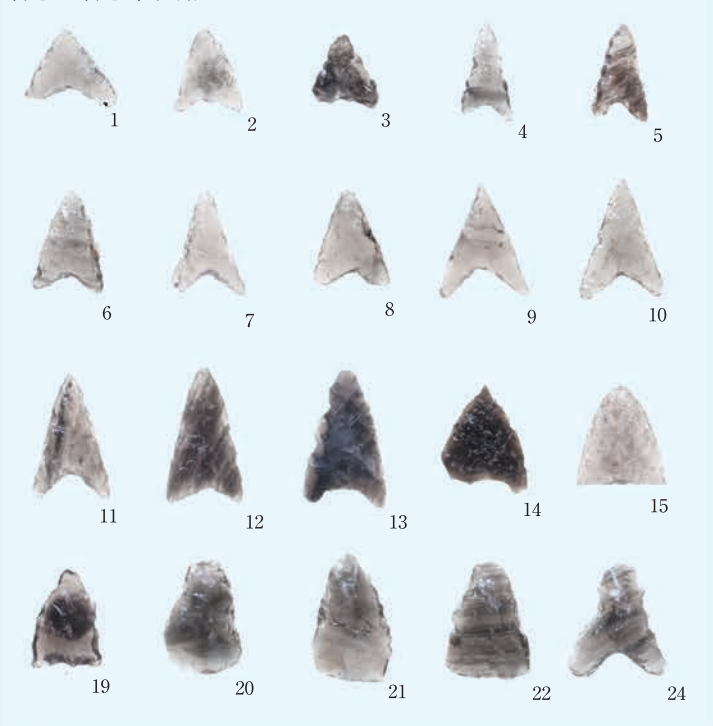
SB01 (3)



SB01 (2)



石鏃・石鏃未製品



磨製石鏃・玦状耳飾・他



摩耗痕のある剝片





高尾古墳群 5号墳 墳丘全景（南から）



石室と列石（北から）



石室左側壁（南東から）



石室全景（南から）



石室左側壁（東から）



玄室右側壁（西から）



玄室奥壁（南から）



墳丘西側断面（南から）



石室左裏込めと控積み（北西から）



石室壁体と列石基底石（南から）



周溝遺物出土状況（北西から）



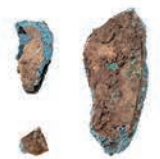
1



2



6



①

出土遺物



尾垂遺跡 全景 (南西から)



SB05・06 完掘 (南から)



SB06カマド (南から)



SB09カマド (南から)



SB10 完掘 (西から)



SB12 完掘 (北から)



SK03 完掘 (南から)



SK14 人骨出土状況 (西から)



SK15 遺物出土状況 (南から)



SK99 完掘 (北から)



SK153 焼土・炭化物出土状況 (東から)



SK153 遺物出土状況 (北から)



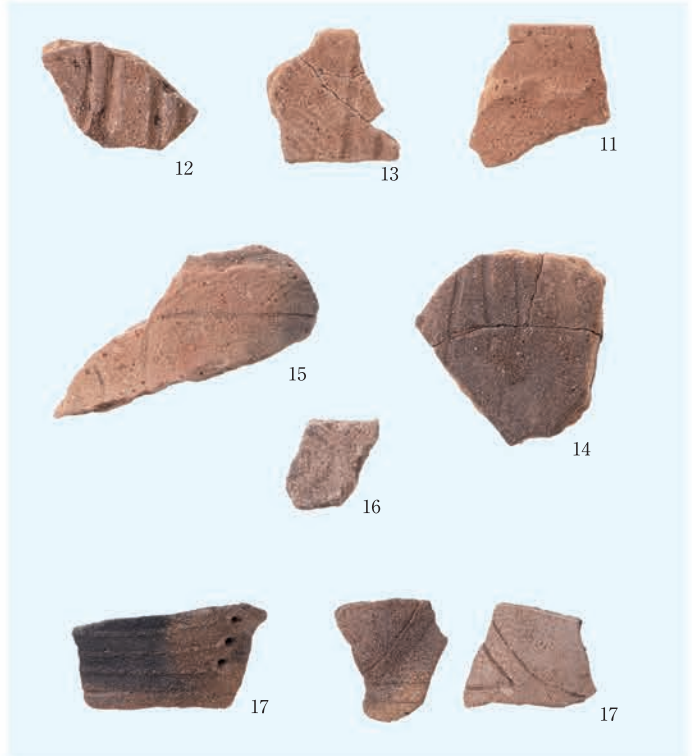
ST01 (北から)

PL18 尾垂遺跡

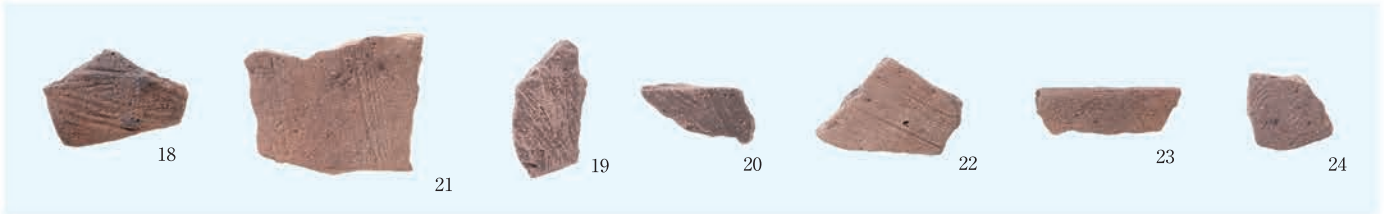
縄文早・前期土器



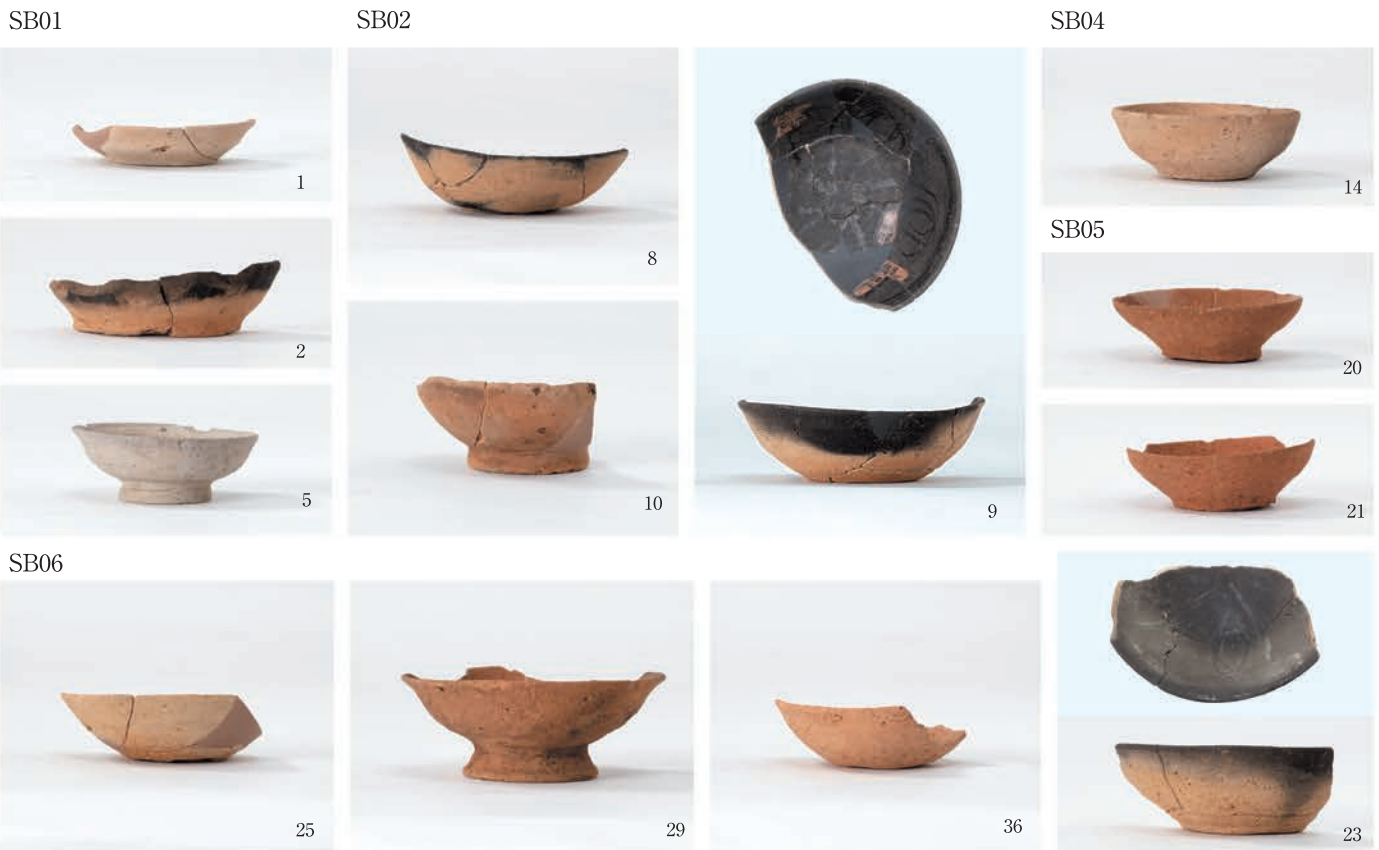
縄文中・後期土器



縄文晩期末葉～弥生前期



古代土器

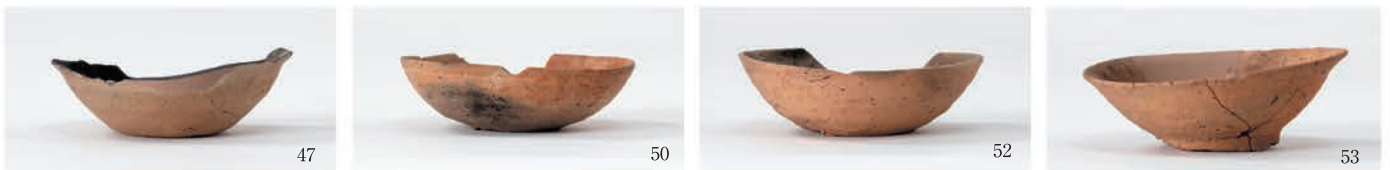


縄文土器、弥生土器、古代土器 (1)

SB07



SB09



SB10



SB12



SB15



SK23



PL20 尾垂遺跡

SK01



SK03



SK25



SK15



SK58



SK153



SK127



SK152



SK171



SK175



SK176



SD01



SD03



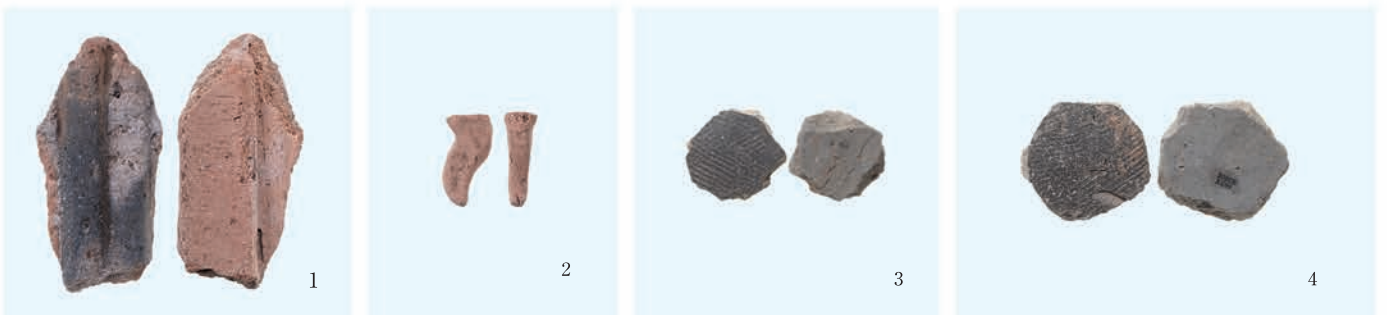
遺構外ⅡL25グリッド



遺構外



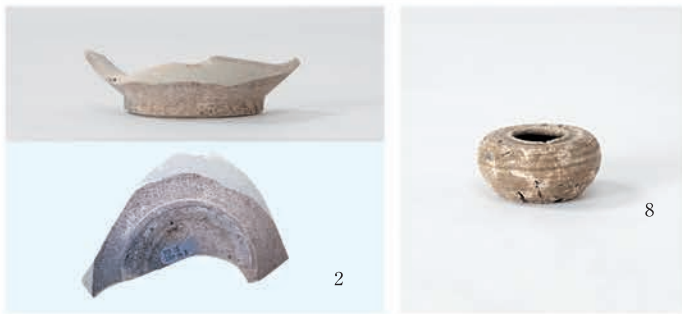
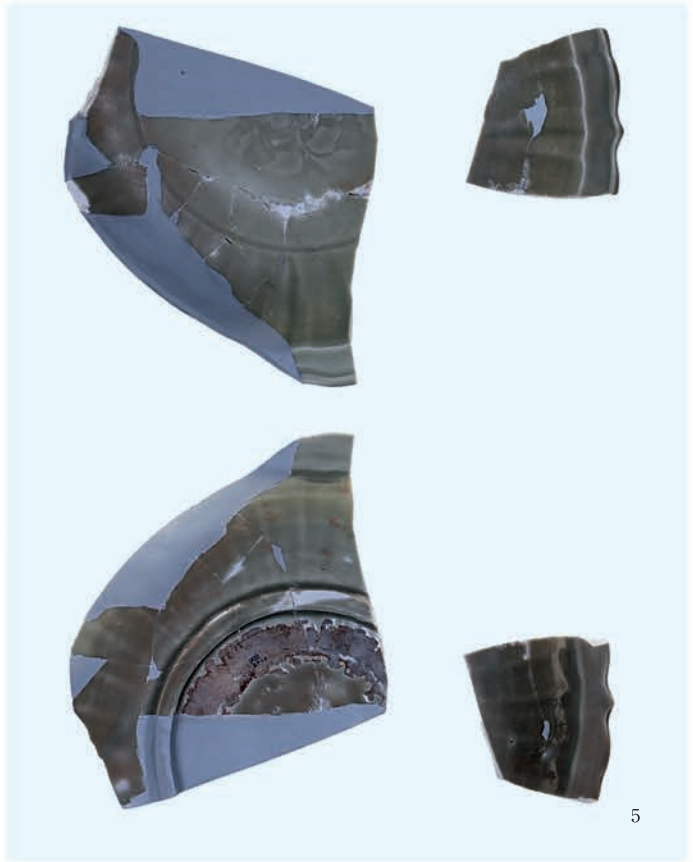
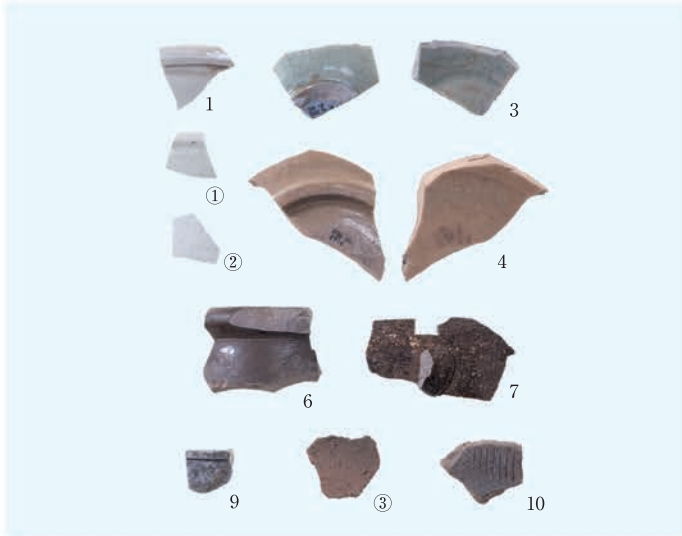
土製品



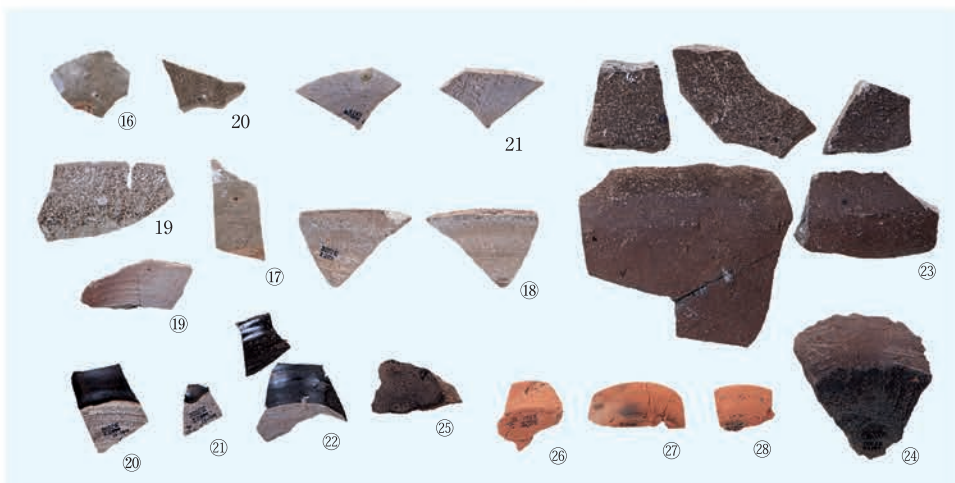
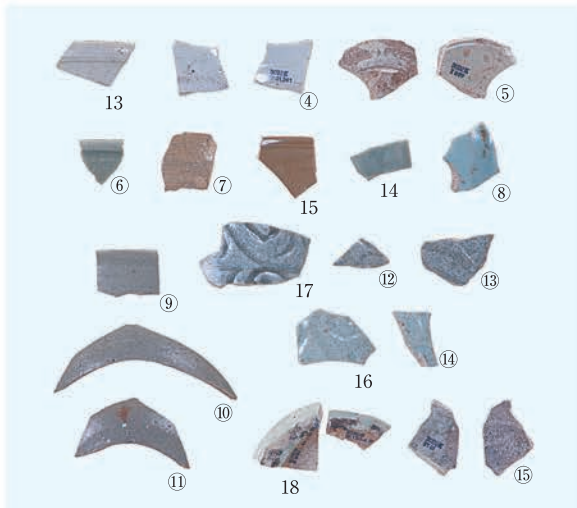
古代土器（4）、土製品

PL22 尾垂遺跡

遺構外1区



遺構外2区



SK03



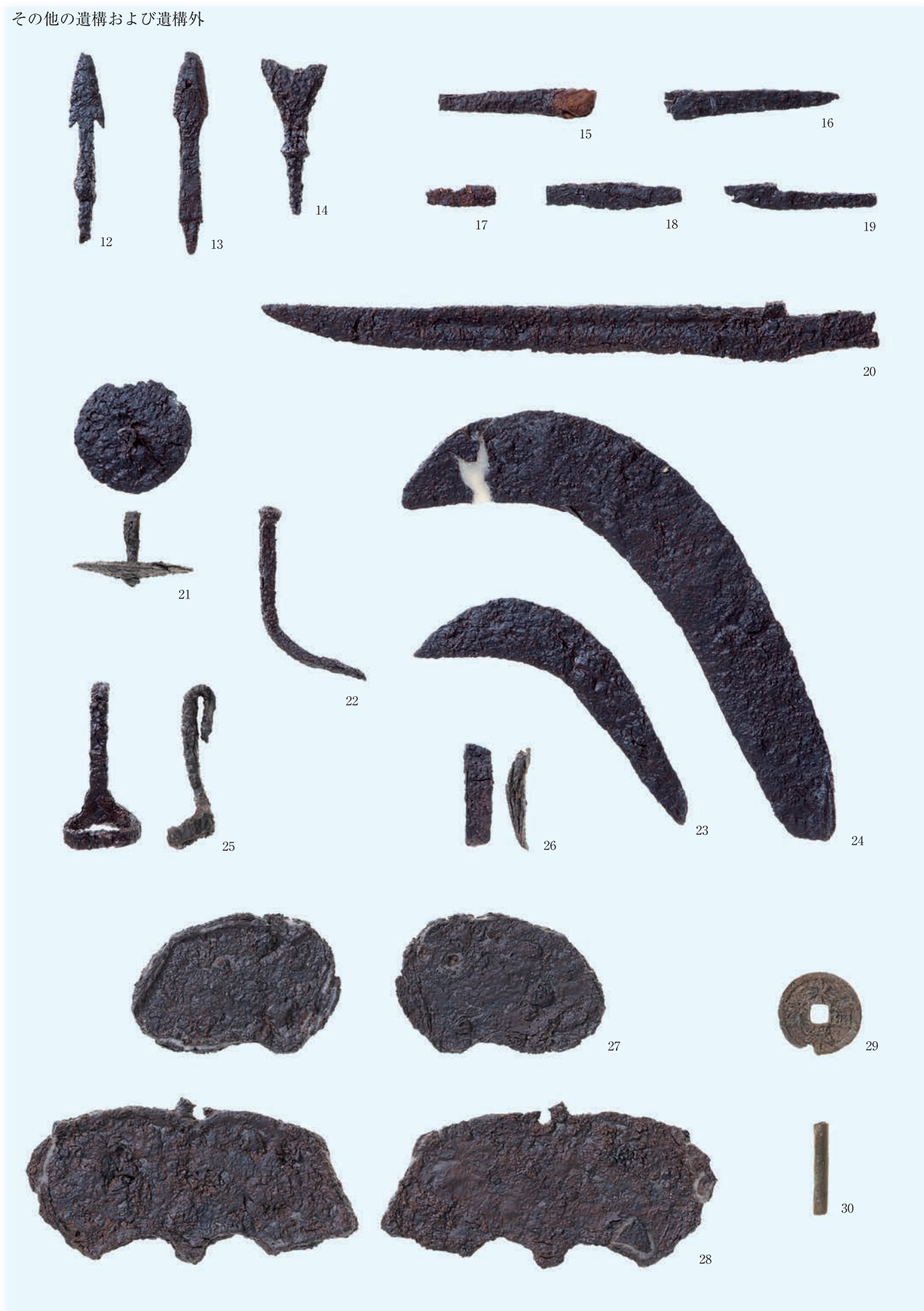
SK153



金属製品 (1)

PL24 尾垂遺跡

その他の遺構および遺構外





尾垂古墳 全景（南から）



玄室床上部(南から)



玄室床下部(南から)



玄室左側壁(南東から)



玄室右側壁(西から)



玄室奥壁 (南から)



奥壁裏込め・掘方断面 (東から)



左側壁裏込め・掘方断面 (南から)



右側壁裏込め (南から)



東側列石 (南東から)



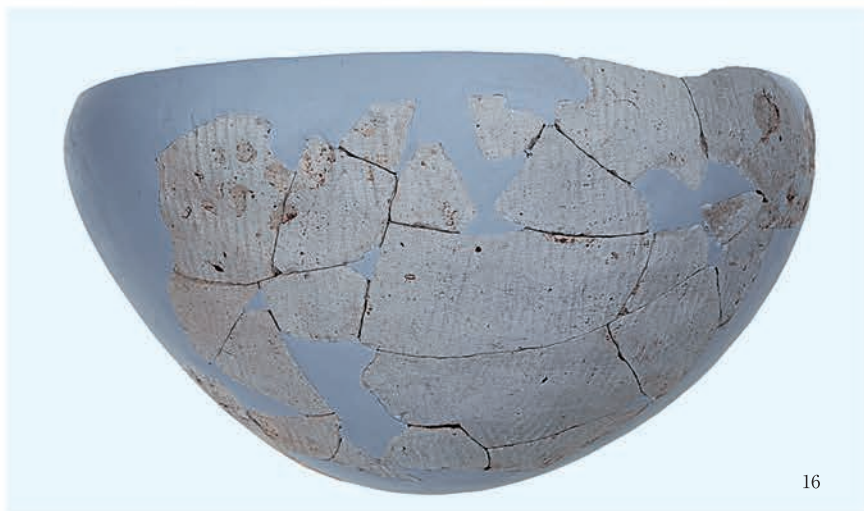
玄室3・6区遺物出土状況 (東から)



玄室4区遺物出土状況 (東から)



玄室1区人骨出土状況 (南から)



鉄鍬



直刀・刀装具・刀子・耳環・ガラス小玉・他



24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34



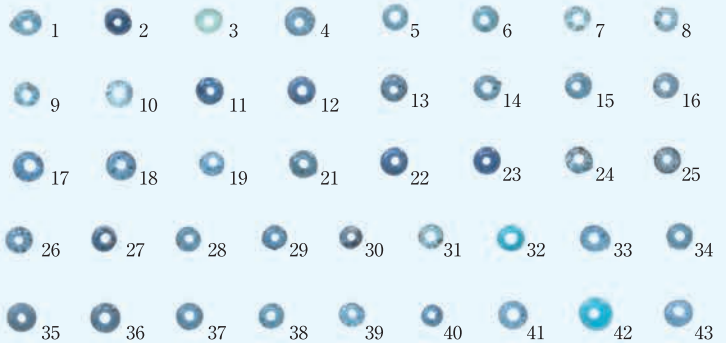
35



36



24





遠景 (南東から)



SF06 調査状況 (東から)



SF02 調査状況 (南東から)



SF06 完掘 (南東から)



SF02 完掘 (南東から)



SF07 完掘 (南東から)



SK03 遺物出土状況 (南から)



SX01 遺物出土状況 (南東から)



SK02 完掘 (東から)



SX01 完掘 (南東から)



SX02 完掘 (東から)



荒城跡・月明沢遺跡群 遠景 (東から)



月明沢遺跡群 TP2 (北から)

PL32 洞源遺跡

SK03



SF01



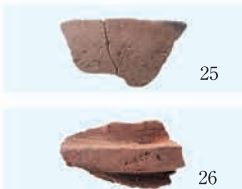
SX01



SF03



遺構外



古代土器

報告書抄録

ふりがな	こやまのかみびーいせき たかおえーいせき たかおこふんぐんごうふん おだれいせき おだれこふん どうげんいせき あらじょうせき げつめいさわいわかげいせきぐん						
書名	小山の神B遺跡 高尾A遺跡 高尾古墳群5号墳 尾垂遺跡 尾垂古墳 洞源遺跡 荒城跡 月明沢岩陰遺跡群						
副書名	中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7 ー佐久市内7ー						
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書						
シリーズ番号	122						
著作者名	平林 彰、岡村秀雄、綿田弘実、上田 真、若林 卓、谷 和隆、贄田 明						
編集機関	一般財団法人 長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター						
所在地	〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田963-4 TEL 026-293-5926						
発行年月日	2019年9月30日						

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 (世界測地系)	東経 (世界測地系)	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
こやまのかみびーいせき 小山の神B遺跡	ながのけんさくしこみやま 長野県佐久市小宮山	20217	402	36°13'34"	138°26'12"	2011.08.02~2011.12.21 2013.08.29~2013.12.16	2,900 6,250	中部横断自動車道建設に伴う記録保存調査
たかおえーいせき 高尾A遺跡	ながのけんさくしまえやま 長野県佐久市前山		410	36°13'16"	138°26'25"	2009.05.01~2009.08.05 (確認調査) 2011.04.05~2011.08.29	7,170 4,550	
たかおこふんぐんごうふん 高尾古墳群5号墳	ながのけんさくしまえやま 長野県佐久市前山		566	36°13'15"	138°26'26"	2013.05.27~2013.09.04 2014.05.28~2014.07.01	6,810 440	
おだれいせき 尾垂遺跡	ながのけんさくしまえやま 長野県佐久市前山		472	36°12'59"	138°26'46"	2013.06.24~2013.08.23 2014.11.21~2014.12.12 (確認調査)	3,640 2,100 5,000	
おだれこふん 尾垂古墳	ながのけんさくしまえやま 長野県佐久市前山		1164	36°12'59"	138°26'47"	2015.04.06~2015.12.16		
どうげんいせき 洞源遺跡	ながのけんさくしまえやま 長野県佐久市前山		473	36°12'53"	138°26'55"	2013.12.06~2013.12.20 2014.08.04~2014.11.06	5,400 3,800	
あらじょうせき 荒城跡	ながのけんさくしまえやま 長野県佐久市前山		478	36°12'49"	138°26'57"	2015.12.04~2015.12.08	1,270	
げつめいさわいわかげいせきぐん 月明沢岩陰遺跡群	ながのけんさくしまえやま 長野県佐久市前山		1162	36°12'49"	138°26'57"	2010.03.08~2010.03.26 (確認調査)	400	

所在遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小山の神B遺跡	集落跡	縄文前期 古代	縄文前期竪穴建物跡14、土坑102、 古代竪穴建物跡9、 古代以降の溝跡4	縄文土器前期初頭・後葉・末葉の 土器と石器、種実圧痕土器、古代 土器、鉄製品	80点以上(推計)のササゲ属アズキ亜属種子と 1点のシン属果実を1個 体を含む諸磯c式土器 が出土
高尾A遺跡	集落跡	旧石器 縄文前期	旧石器集中1、縄文 前期竪穴建物跡1	台形石器、搔器状石器、貝殻状刃 器、縄文前期前葉土器・石器	型式学的特徴から、AT 降灰以前に所属する石 器群を検出
高尾古墳群5号墳	古墳	古墳	小型の横穴式石室を 内部主体とする円墳	須恵器高台付坏・坏蓋	千曲川左岸地域に築造 された7世紀末葉~8 世紀初頭の古墳。玄室 に火葬骨を埋納
尾垂遺跡	集落跡	古代 中世以降	古代竪穴建物跡16、 中世以降の礎石建 物跡1	古代土器、中世土器・陶磁器、鉄 製品、製鉄関連遺物(羽口、鉄塊 系遺物ほか)、磬	仏教関連遺物が出土
尾垂古墳	古墳	古墳	小型の横穴式石室を 内部主体とする円墳	直刀、鉄鏃、刀子、耳環、ガラス 小玉、須恵器大甕	千曲川左岸地域に築造 された7世紀後葉の古墳
洞源遺跡	生産遺跡	古代	製鉄炉跡3、被熱 部・焼土跡3、竪穴 状遺構3	古代土器、製鉄関連遺物(羽口、 鉄塊系遺物、鉄滓、炉壁)	佐久地方では初見となる 古代の製鉄炉を検出
荒城跡	城館跡	中世	なし	なし	
月明沢岩陰遺跡群	岩陰	弥生	なし	なし	1965年の調査地点を再 確認

令和元（2019）年9月30日 発行

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 122

**小山の神B遺跡 高尾A遺跡 高尾古墳群5号墳 尾垂遺跡
尾垂古墳 洞源遺跡 荒城跡 月明沢岩陰遺跡群**

中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7

—佐久市内7—

発行者 国土交通省 関東地方整備局
（一財）長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4
Tel 026-293-5926 Fax 026-293-8157
E-Mail info@naganomaibun.or.jp

印刷者 信毎書籍印刷株式会社
〒381-0037 長野県長野市西和田一丁目30番3号
Tel 026-243-2105 Fax 026-243-3494